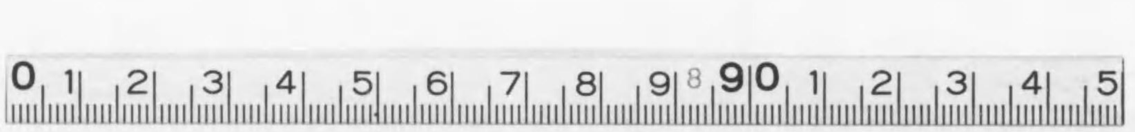
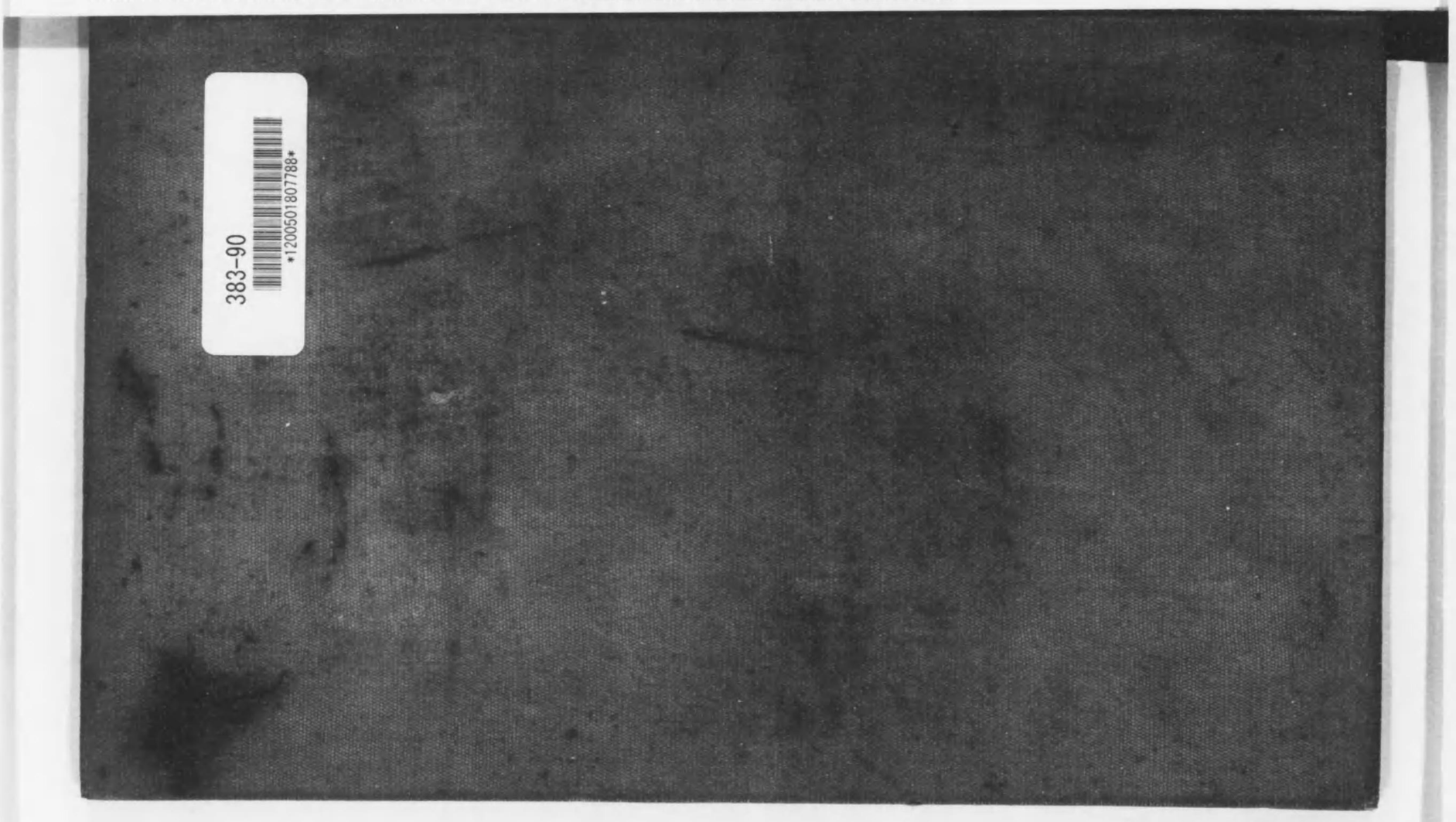

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8 9 0 1 2 3 4 5


383-90
12005018077 88

SANSEIDO
KANDA TOKYO

概觀世界史潮

文學博士　坂口昂著

岩波書店刊行

383
90

自序

かくの如き小著が、敢て世界史潮の概觀として世に問はれることになつたのは、世界の改造期に際會する現下のわが讀書界に取りて、特に缺乏するを或るものを滿たすべき必要が切實に感ぜられたからである。曰く、正確なる知識に基さたる世界史の教養！

世態事變の眞相或は誤解され、談論しば〳〵架空に馳せて事實の正皓を失し易く、文壇社交共に尙ほ未だ大いなる時代に照應する光彩を發揮するに至らないのは、實に如上の缺陷頗る之に與つて居る。かくの如きは、苟も自ら大國民と誇稱する者の決して面目とすべき所でない。さればとて、私は書中猥りに歷史の教訓を垂れんとするものでない、只だ之によりて、普通の知識階級の間に、現代の文化生活に適したる一般の世界史的興味を涵養せしめ得ば、本書の目的は足るのである。

本書の基礎は、私が最近に公務の餘暇、眞宗大谷大學、京都府教育會學術研究所、及び奈良女子高等師範學校の需に應じて、各、文明史、西洋史概要、最近世界史の名の下に、多少の長短期に亘りて、說述した講義又は講演にある。それて、今回各に根本的修正增補を加へて、全體を統一したことは勿論てある。その際、私は大いに事實の詳細を割愛しなければならなかつた。就中、古代に於て尤も斧鉞を加へた、而も尙ほその貴重なる文化の神髓を把むに努めた。而して近時に降るに隨ひ、幾分詳密

I種
W
1200501807788

を加へ、出來るだけ讀者をして現代人の體驗に親炙共鳴せしむるに意らなかつた。この編輯に當り、文學士安藤俁雄君は成文、淨寫、原語表及び索引作成等の煩勞に參せられた、こゝに深謝を表する。

本講義、否な私の世界史觀が如何なる見地に立つて居るかは、第一講、特にその首尾に於て明言されてあるから、こゝでは喋々を要すまい。所詮、私の中心觀照は、一切文化の歷史潮流を通りて之を綜合するに在る。この趣意に於て、多年模範的文化典籍の上梓に從事せらるゝ岩波書店主岩波茂雄君が、ふかく講述者と見る所を同うし、本書の公刊に最善の努力を竭されたのは、出版界快心の事に屬する。

遙莫、本書の一切內容は、その結構と共に、講述者としての私一人の全責任に係る。而して、之を如何に評價し享受し利用するかは、苟も世界史の所產文化を鑑賞し得、若くは鑑賞せんと欲する讀者に存す。卽ち、講述者と讀者とは相關的てある。何となれば世界史の客觀的價値は一定不變てあるからてある。故に、この尊嚴に對し、本書は固より之に正當なる崇敬を拂はんと欲す、而も尙ほ若し之を冒瀆する所ありとせば、そは講述者なるか、將た讀者なるか、たゞしは兩者同罪なるか、只だ夫れ悠久なるものゝみ能く之を判くてあらう。

大正九年五月　　イタリヤ飛行機來訪の日京都に於て

講　述　者

目次

自序……一
第一講　古今の關係　古典と現代……八
第二講　希臘國民的文明……一八
1 希臘の古代……一九
2 希臘の中古……二一
3 ペルシヤ戰役の意義……二二
4 アテーネ對スパルタ……二六
5 希臘最隆盛期の思潮……三一
第三講　希臘世界的文明……三六
6 希臘の風潮の變化……三六
7 アレクザンドル大王の使命……四〇
8 世界文化……四三
9 東西交通の促進、希臘文物の東漸……四三
10 希臘の美術　貨幣……四七

第四講　羅馬共和國の發展……六〇
11 『シーザルのもの』……六〇
12 發展の第一期……六一
13 第二期……六二
14 第三期……六三
第五講　羅馬帝國の文明……七四
15 帝國政治の特相……七四
16 土木工業　法律學……七八
17 社會及び經濟……八二
第六講　基督敎の興起　加特力敎會の成立……九〇
18 ヘレニズムの影響……九〇
19 猶太敎……九四
20 イエーズスとその環境……九六
21 福音の宣傳　神學の發展……九八
22 羅馬帝國との調和……一〇五
第七講　古代より中古へ　原始ゲルマニ文明……一〇九
23 過渡期の意義……一〇九
24 ゲルマニ文明の史料及び研究……一一四
25 ゲルマニの土地及び人民……一一九
26 ゲルマニの思想……一二二
第八講　羅馬風ゲルマニ風社會の成立……一二七
27 帝國の東西分裂……一二九
28 羅馬法皇の起源　ベネディクチン修道院……一三〇
29 フランク王國の勃興……一三八
30 カール大帝の卽位……一四八
第九講　羅馬風ゲルマニ風社會の發展……一四一
31 神聖羅馬帝國の創立……一四一
32 封建制度……一四三
33 神聖羅馬帝國の再興　ドイツ民族の形成……一四九
34 法皇の天下一統政治……一五四
第十講　ビザンツ文明　回敎文明……一六二
35 羅馬帝國の三大分割……一六二
36 ビザンツ文明の特徴……一六四

37 『信仰』の起源……一三〇
38 ヘリフアの國　回教世界……一三四
39 サラセンの學藝　工業……一三八
39 サラセン文明の世界的意義……一四一
第十一講　十字軍……一四六
40 十字軍とは何ぞ……一四六
41 十字軍除の性質、ビザンツとの關係……一四九
42 十字軍經過　第四十字軍……一五一
43 西方に及ぼした影響　蒙古の西侵……一五四
第十二講　十字軍時代及び戰後の西歐社會……一六一
44 法皇及び教會の威信失墜……一六一
45 托鉢巡教團　煩瑣哲學……一六三
46 法皇の『バビロニヤ囚囚』……一六六
47 騎士風の隆盛……一七一
48 都市及び市民の興起……一七四
49 階級の自由、大憲章……一七七
50 ゴシック建築　大學　法律學の復興……一八二

第十三講　近代國家の起源……一九一
51 一般の事情　オスマンリ・トルコの西侵……一九一
52 イタリヤに於ける國家の竝立……一九三
53 英佛の國家確立の始……一九六
54 イスパニヤ王國の創立……一九八
55 ドイツの混亂……二〇一
56 大勢　イタリヤ戰役……二〇四
第十四講　學藝復興……二〇九
57 ルネーサンスの意義、その起源……二〇九
58 イタリヤに於ける學藝復興……二一二
59 伊太利以外に於けるルネーサンス……二一六
60 ルネーサンスの影響……二一九
第十五講　教會改革及びその反動……二二八
61 教會改革の原因……二二八
62 教會改革破裂の事情……二三一
63 ドイツの教會改革……二三六
64 カルヴイン及びその影響……二四二

65 反動改革の起源及び發展……二七八
66 西歐に於ける反動改革戰役……二八四
67 中歐に於ける反動改革戰役……二九三
第十六講 世界の擴大 五大强の成立……二九九
68 地理上發見 通商植民の發展 海上權の推移……三〇二
69 スチュワート王朝 英國の憲法上衝突及び發展……三〇八
70 ルイ十四世 フランス王國の隆盛……三一六
71 オーストリアの擴大 プロシアの勃興……三二三
72 ロシアの勃興、スウェーデンの衰弱、ポーランド分割……三三一
73 結 論……三三九
第十七講 十七八世紀に於ける思潮……三四二
74 專制主義……三四三
75 重商(商國)主義……三四九
76 英國思想……三五六
77 フランスの啓蒙文學……三六一
78 英佛に於ける經濟上新思想……三六八
79 改革か革命か 米國獨立及びその影響……三七三

第十八講 フランス大革命 ナポレオン戰役……三〇五
80 大革命の概觀……三〇五
81 ナポレオンの出現 英伊獨との關係……三〇九
82 文藝史上のナポレオン帝國……三一四
83 對ナポレオン反抗運動、自由戰役……三一八
84 ウィーン會議及びその決議……三二二
第十九講 自由主義及び國民主義の發展……三三五
85 歐洲列强の反動的協調……三三五
86 アメリカ諸國の獨立 モンロー主義……三三九
87 バルカン民族の勃興 希臘の獨立……三四六
88 イギリスの改革……三五九
89 七月革命……三六四
90 一八四八年の革命前の歐洲……三七四
91 二月及び三月革命 その影響……三七七
92 フランス國民の第二帝國 クリミヤ役……三八四
第二十講 十九世紀の思潮 學藝及びその應用……四〇三
93 ローマンヂック……四〇三

94 唯物的學風の基礎……四八四
95 專門技術の進歩　物質文明の發展……四八九
96 唯物的學風の隆盛　知識と信仰との衝突……四九六
第二十一講　國民的國家の建設……五〇五
97 自由主義及び國民主義の收獲期……五〇五
98 アメリカ合衆國の再造　メキシコ遠征……五〇九
99 イタリヤの統一……五一六
100 プロシヤの維新　ビスマルクの入閣……五二一
101 シュレスウィヒ・ホルスタイン問題の解決　普墺戰役……五二三
102 普佛戰役（ドイツ統一役）……五三八
103 國民的國家と加特力敎會……五四四
第二十二講　三國同盟　列强の通商植民……五四三
104 十九世紀下期の近東問題　露土戰役……五四五
105 三國同盟　二國協商……五五〇
106 英露の植民及びその對抗……五五四
107 イギリスのエジプト及びスーダン經營……五六一
108 アフリカ分割……五六一
109 極東の變動……五六六
110 米國の發展……五六九
第二十三講　民主社會・博愛・平和主義的運動……五七四
111 英佛に於ける民主及び社會主義の初期……五七四
112 マルクスの社會主義……五八二
113 ドイツの社會民主黨　ビスマルクの國家社會政策……五八七
114 勞働問題……五九三
115 婦人問題　女子參政權問題……五九七
116 博愛・平和主義的運動……六〇五
117 最近の學藝　新理想主義……六一八
第二十四講　世界政策の衝突……六一二
118 カイゼル・ヴィルヘルム二世……六一二
119 世界の國際關係の一變……六一八
120 日米關係……六二七
121 イギリスの民主的改革　アイルランド問題……六三四
122 最近の近東問題　モロッコ及びトリポリ事件……六四二

目次 終

第二十五講　世界戰役　世界改造……六五三
123 世界戰役の原因及び導火線……六五三
124 戰役の經過……六六〇
125 巴里の講和會議　ヴェルサイユ條約……六七三
126 ロシアの革命　過激派……六八四
127 ドイツの革命……六九四
128 イギリスの改造……六九八
129 戰役の影響　戰後の重要問題……七〇二
原語表……七一四
索引……七四一

概觀世界史潮

第一講　古今の關係　古典と現代

諸君！

西洋を出發點とする世界史の主潮を概觀する、これが私のこの講壇に立つた當面の目的である。然らば私の見地は如何と問はるゝであらう。私は答へる、若し私に出來るならば、私は諸君と共に、さういふ歷史の行方をば、特に文化的潮流の裡で且つ辿りつ且つ眺めてみたいと。

それては文化潮流とは何ぞといふ次の疑問が起るであらう。私は之を歷史哲學的に解釋する代りに、歷史の事實を以て說明するの自由を自分に許して貰ひたい。事實とは他でない、古來五十の、否な寧ろそれ以上の世紀をつぎ〳〵に流れて、時代の進行と共に、廣き地球の上と全き人生の間にひろがつて來た大いなる文化の歷程そのものである。その最初の出發點に於て或る神祕な力によりて、何等かの原則的計畫が確立されてあるのではなからうか、そこに一定の進步があつて、或る終局の目的が、われら文化の兒らに知られないて、夙に豫定されてあるのであるまいか。これらの歷史哲學的論議は吾人の研究以外の別問題としてしばらく問はず、只だ〳〵、如上の世界人生に關

する文化的潮流の存在は、何人も否定し得ない歴史の現實的事實である。それで、かゝる悠久にして廣大なる潮流のいはゞ瀬ぶみとして、諸君の爲めに、豫見的に、特に次の問題の提議及びその解釋を試みてみたい。卽ち、先づ、古代と近代といふ大なる時代の區別は如何なる歴史的根據に立つて居るか、就中、古典と現代といふ重要なる概念の對立は如何にして作られたか、といふことである。若し是等の疑問が大體に於て闡明せられたなれば、諸君に取りては、必ずや私の所謂文化的潮流裡に於ける世界史を把捉する一個の好準備となるであらう。果して然らば、私は之を以て當然本講話全體の總序と見立て得ると思ふ、是れ玆に古今の關係、古典と現代といふ題目を設けて說く所以である。

先づ、私は如上の術語の解釋から始めるを便利と考へる。抑も古典とは申すまでもなく、英語のクラシックの譯語である。このクラシックは希臘のクラーシス、拉典のクラシクス①といふ各古代文化世界の言葉から導かれて來たものである。むかし羅馬人は彼等の所謂「セルヴィアの憲法」と稱する掟て、市民の階級、卽ちクラッシスの區別を立て、その第一階級、卽ち最も富有なる、最上流の人民を指して、單に彼はクラシクスであると呼び、つまりクラッシスの形容詞を用ゐて居る。この場合に於て、クラシクスなる語は第一級若くば最上級のものを意味して居る。されば かくの如き語源から起つた古典、卽ち英語のクラシックは、何ものか苟も高等なるもの、何等か他にすぐれて優秀なるもの、若しくは或る模範的のものを指すのであつて、更に之を文明史に適用すれば、古人が今人に垂れ示し、今人が古人の文化に於て自分らの典範として仰望する所のものといふことになる。隨つて、最後の意味に於ては、古典とは現代のもの、新しいもの、卽ち英語のモーダーン、拉典のモデルヌス②に對照するものであらねばならぬ。而して是等兩者の間に、或る中間なるものが介在して居る、卽ち拉典のメディウムである。そこて、このメディウムに時代、卽ちアェーヴムといふ語が結び付けられ、それから導かれて中間時代のもの、卽ち中古のもの、英語のメディーヴァル③といふ形容詞及びその概念が出て來るのは自然である。

然らば則ち、以上述べた言語上の解釋からして、既に文明史上の時代變遷の順序が豫想せられる。卽ち、最初に古典の時代があつて、その次に中古の時代が從ひ、そのつぎに現代の時代が起つて來たといふことである。

私は轉じて西洋史の歴史事實の上から、如上の發展を幾分か具體的に說かなければならぬ。抑も西洋史は之を大觀すれば、先づ大別して古今の二つに分ちて思惟するがよい。しかし、若し一層進みて親切に考察する時は、吾人は更に古を最古と古代との二つに分ち、これに現代を加へて最古と古代と現代との三大時代史に見立つべきである。私がさきに『世界史の古今觀』(「歴史と地理」創刊號大正六

年）と題する小品に於て、西洋を出發點とする世界史を大觀して、昨今の兩日、若くば一昨、昨、今の三日に見立てるのを便とすると說いたことがあるのは、卽ち是れてある。

これを少しく詳しく說き返せば、吾人の最古史とは東部地中海と紅海とペルシャ灣との間に介在する方面に現はれた民族て、世界最古の開化人民たる者らの作つた歷史てある。卽ち、是等の人民が、かのエジプトや、バビロン、アッシリヤを（一）とし、ヒッヂ（ヘッヂ）や、トローヤ、ミケーネ、クレタ（廿）などに於て、紀元前約三〇〇〇―一〇〇〇年の間に榮え、彼等相互の間に、多かれ少かれ、或る活潑なる國際交涉を行ひ、何等かの文化上產物を交換し、畢竟、一つの共通の世界的文化社會を結びつゝ、作り上げたる歷史てある。

然り、而して古代史の發展なるものは、如上の最古の發展―主として古代東方の隆盛、それにエーゲ海の文明が加はつて居る―の歷史の後に於て、而も或意味に於てはその跡から、始めて起つたものてある。實に古代史の生活は、最古の人民―例へばピラミッドを建て、カルナック（五）大殿堂を築いたエジプト人―から見れば、比較的後世に現はれた新進の人民の營むだものてある。この生活は、大體に於て先づ希臘人、次に起つて同じく重要なる位置を占むる羅馬人、これらの二大文化民族を主體とし、この主體　所謂古典（クラシックス）人民―特有の燦然たる知識的政治的文明を生み出すべき一大勞作てあつたのてあ

る。普通に、西洋て何等の制限なしに、古典（クラシックス）と呼ばれて居るものは、所詮、如上の兩個の人民の天才が作り殘した文化遺產に外ならない。隨つて、この意味に於て、古代史は卽ち古代に於ける希臘羅馬の文化生活の發展の描寫てあつて、學藝的にいへば、古典史を構成するものてある。更に年所を以て之に繫ければ、この歷史は、紀元前約一千年ごろから濫觴して紀元後四五世紀ごろまでを流れて、その間に遂に、いくら狹く見積つても、地中海の全き海岸に瀰漫した偉大なる世界史潮てあつた。

次に、かくの如くにして出來上つた古代文化の世界史潮が、如何にして次の世界史的新時代に入るべきか。基督敎徒は、彼等の救世主の出現を以て正さしくかゝる新時代の開始と答へるてあらう。しかし、苟も歷史家として吾人は、一切人類の民族と彼等の全き人生的文化的職能とに鑑みる時は、とてもこの基督敎徒の主張に同意し得ない。吾人は寧ろゲルマニ民族の侵入を以て新時代史潮の開始とすべきてある。爾來、彼等は古代文化世界が遺した人民の子孫と接觸し、抱合して、近代生活を經營することゝなつた。全き世界史から大觀すれば、如上の新舊兩要素の文化的人民の抱合から生み出されたものが、卽ち今日吾人が共同に棲息しつゝある現代生活の中心主潮てあるべきてあらう。

しかし、この近代生活なるものゝ生み出された道程は決して平易單純な經過てはなかつた。かのゲルマニは當初なほ野蠻にして、よしやいくら進むて居ても、未だ荒々しい未開民族てあつた。是等民

族の移動の連續が、數世紀間の星霜に亘つて、しきりに古代文明社會に流れ込み、これを侵略し、破壞し、蹂躙し、之と同時に、その在來の、古代文明の家督を傳來せる人民をば征服し、羅馬帝國の故地を占領しながら、この新しい環境に適應すべく、自分みづからがおのづから徐々に敎育され、開發されていつた。かゝる苦しい痛ましい荒々しい、しかも人生の新文化生成のために頗る含蓄的なる中間時代の歷史現象が、近代生活の出現期に伴ふて居る、否なこれに先立つて居る。この際、新民族の大侵入に因る新舊兩要素の大衝突があつた、それからこの大混亂を收拾するための必然的便法として、それに相當する秩序の羈絆が時と共に結ばれて、新しきものには敎化、舊きものには安堵が與へられて、渾然たる社會の化成がしづ〳〵と進行發展した。羅馬帝國が殘した加特力敎會と、動搖のまに〳〵に組織された封建制度といふ二大文化機關の働は卽ち是れであつた。かくの如きものが、卽ち古代と現代との間に橋梁を架する中間の時代、卽ち中古史の生活の本質であつたのである。

然らば、この中古史は何時から始つて何年まで續くかと問はれると、固よりさう精確な數字の年代を以て限定的せらるべきものでない。只だ、上述のゲルマニ『民族大移動』に伴ふた羅馬文明の凋落期と、新舊文化の兩要素が結合釀成して一個の複合文化民族となりて十字軍を進めて行つたその足跡から、西歐の歷史舞臺に於て唉き出すべき學藝復興（ルネーサンス）の開花期と、これらの二大要機の間、無慮一千年に亘る羅馬風ゲルマニ風人民の融化作用の歷史が、卽ち中古史であると、答ふるの外はない。

かくいへば、學藝復興（ルネーサンス）といふものゝ眞の性質も略ぼ推想せらるゝであらう。このものは語義からいへば、申すまでもなく、古代學藝の再生（リバース）を意味して居る。しかし、最初から吾人の取り來つた文化史的立脚地からいへば、單に再生ばかりではなかつた。實は同時に或る化成と創造とがあつた。よしや、時代の先覺者が羅馬や希臘の古典を返り見て之を模範と仰ぎ、その復興を慫慂し、一部は之を實現したことは、否定すべからざる事實であるにしても、それ以前から、夙に上述の長い中間時代の文化生活の裡に潛伏徐行して來た當時固有の人生發展の脈絡があつて、この大いなる潮流のうちて化育された人生主義者（ヒューマニスト）が、こゝに現代人（モーダーン）としての我自らの個性を發見し、自覺し、自己の敎養完成に力めたことは、等しく重大なる學藝復興の中心現象であつた。かくの如くして、現代人の生命がやうやく芽ばへて、古代に對する現代の歷史といふ、より廣大に、より複雜なる人生の跡方が、始めて力强く世界史の上に永久に印し殘されることになつたのである。

以上述べ來つた所により、現代人共通の古典が古代の希臘羅馬の文物典章であることは自明である。さりながら民族乃至國民としての現代人の直接の起源はそこに在るのではなく、古代文明衰亡後、中

古の生活そのものに發展に存して居る。換言せば、現代の民族乃至國民の起源は、古代に於ける希臘人及びその祖述者羅馬人（ローマン）そのものゝ文化生活にあるのではなく、古代文物の尊い姿の影がやうやく薄く消えゆきて、粗野なるゲルマニ風の吹きすさみ、而もその新鮮潑溂なる元氣を受けつゝ徐ろに新に發育して行く羅馬風（ローマニック）社會にあつたのである。この新しい社會たるや、既に上に指摘した羅馬加特力敎會と、これに伴隨せる封建制度といふ二大敎養機關に依つて維持扶殖されて居る。これが羅馬風ゲルマニ風社會と名づけられる。この渾然たる世界的一大雰圍のうちから、現代に於けるいろ〳〵相異なる民族乃至國民が始めて分出化成して來た。之を政治的名稱を以て名けば、今日の伊、西、佛、英、獨等の諸國民及び國家の興起は卽ちこれである。之を知識上精神上からいへば、例へば、イタリヤでは『神曲』を謳ふたダンテ、イギリスでは『カンターベリ物語』の著者チョーサの如く、西歐各國に於て各自の國語が發展して、おのがしゝに各自の民族の思想を自由に發表することが始まつたのは正さしくそれである。要するに、現代の民族、國民　及び彼等の國家と、これらと平行共存する他の精神的文化の産物とが、こゝに始めて徐ろに萠芽發生したのである。

それ故に、現代人たる西洋人は世界民（コスモポーリス）としては、かの一般共通の古典たる希臘羅馬の文物を模範とし、之を理想的知識の龜鑑と仰ぎみるのであるが、民族、國民、國家の人としては、この遲れ馳せながら起りつゝある自己固有の文物に依頼し、これに自己の心胸を据え、これを自家の愛慕の對象とすることが出來る。隨つて、西歐各國に於て、各自の鄕國生へぬきの或る尊きもの、卽ち彼等自らの古典なるものが想定され、固持されるやうになるのは當然である。

吾人は之を古典と國粹との對立といつてよろしい。そこて、近時に起つたかの有名な現代的文化現象が思ひ起されてあらう、卽ち十八世紀の主潮たる古典主義（クラシシズム）⑥と、十九世紀の初の流行たるロマンチックとの對抗である。私はこの對照を理解することが、現代を豫見するに極めて必要なることゝ信ずるが故に、少しく之を說いて見なければならぬ。

かの學藝復興（ルネーサンス）の人生的文化的（ヒューマニスチック）潮流は、十六世紀中葉以後及び十七世紀に於ける宗敎上反動の勃興と政治上專制の發生とのために、一しきり堰き止められた趣があつた。けれども、十八世紀に於ける人心の勃興は、再びこゝに、各自の國家及び社會の不完全不滿足なる狀態に、或は憤慨し、或は愛想をつかし、各自の望を進步したる外國に屬し、或は各自の理想を遠き古に馳せ、隨つて、一切の人類、一切の世界、一切の自然界を標準とすると同時に、かの學藝復興に於ける人生派（ヒューマニスト）の先輩の如く、人生の模範を希臘羅馬の古典に求める傾向が再び大いに現はれて來た。卽ち是れ十八世紀の思潮たる革新又は啓蒙時代（アウフクレールング）⑦中に傑出する古典主義（クラシシズム）（尙古主義）であつて、この主義の下に起つた文化運動を、十五·六

世紀のそれに對比して、新人生運動（ニウ、ヒューマニズム）と名けて居る。この當時の運動は自分の國家及び社會に固有なる從來の弊害の一掃を急務とし、因てひたすら純理的古典的理想に向つて狂奔した。これがやがて政治上社會上に現はれて、十八世紀末から十九世紀始までの佛蘭西大革命及びナポレオン政治となつたのである。この驚天動地の事變に於ける文化産物は多々ある。その顯著なるものを擧げると、社會上では『人權の宣言』、基督敎の廢止の決議、理（ラレーソン）の崇拜、政治上では共和政治の樹立、隨つてナポレオンのコンサル政治、次にその皇帝政治の實現、學藝上ではメートル法の設定、古埃及（エジプトロジ）學の萌芽、帝國式の美術などとなつて居る。人若しこれらの一々を仔細に吟味せば、いづれも古典主義竝にその趣味のたけしい匂ひしないものはなからう。所詮、これらは啓蒙時代の純理的傾向と、大革命及びナポレオンの暴力的傾向との結合が生み出したる時代文化の奇兒と見らるべきものである。

こゝに、如上の宛ら烈日赫々、一切を燬き拂はねばやまないやうな、明々察々峻嚴苛酷なる時代に對して、何等かの反動が起らざるを得なかつた。この反動が激成したのが卽ちローマンヂックであつたのである。このものは、從來、思ひを遙かに高遠なる古典、若くば人民の感情から離れて居る外國の古典に馳せて、徒らに純理の流行と暴力の跋扈とに貢獻したることの、愚且つ非であつたことを悟り始めた。彼等は次第に、抑も我自らは何ぞや、また我が民族、わが國民は如何なるものぞと、自ら問

ひ、自ら反省し、以て自己の內界の奥深くを沈思冥想した。彼等はしめやかな、しかし溫かい感情の燃えて居る胸中で、自己の起源を回顧して、これを中古の羅馬（ローマン）風、卽ちローマンヂック社會に求むることゝなつた。この感情のあこがれが實際界に向つて爆發して、ナポレオン統一政治の討滅と之に伴ふ十八世紀の思想の倒壞とに資した。この實際界に於ける成功は翻つて人心の感情を一層激越高潮せしめた。そこで、これまでの純理と暴力との荒れ狂ふたいはゞ廢墟の跡仕末として、萬事が溫き感情と物固い反動とに傾き、王政の復古と敎會の再興と宗敎的敬虔の興隆とが、政治上宗敎上はた社會上一切の政策、施設、行動の標準となり、一切の學問藝術にも、社交風俗に於ても、民族的、國民的風尙大に起り、歷史的研究や、祖先の文物に對する溫古的趣味が盛んに現はれて來た。

この大勢の變轉を比較研究的に明瞭にするために、私はしばらく例をわが日本の近世史に取つてみたい。近時までわが國人の仰慕の的となつて居つた世界的古典は支那の孔孟程朱の學問に外ならなかつた。されども、德川時代の進みゆくに隨ひ、我國人の學問のうちから、國學と稱する精神的知識的運動が崛起して來た。このものも、實は、支那の學問の恩澤を受けて培養される所があつたことは勿論であるけれども、その動機、その生立、その目的に於て、全く日本の國粹的のものであつた。申すまでもなく賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤は卽ちこの運動の先覺者にして、且つその巨頭であつた。

これと前後して勤王論やうやく起り、ついで尊王攘夷といふ熱烈な愛國的運動が破裂した。是等の文化運動は、よしや、前述の如く、思想上系統に於て支那の學問に負ふ所が尠くはなかつたにしても、直接には日本固有の文物、即ち大和民族の古典にあこがるゝものであつて、私はこれらを總稱して日本のローマンヂックと名づけたい。この運動は、實際上、日本の現代文化に非常の貢獻をして居る。何となれば、かの幕末特有の事情と、十九世紀中葉に於ける歐米諸國から迸發した廣大有力なる世界解放運動、隨つてそれから起つた國際上の刺戟と相俟ちて、遂に明治維新、王政復古の革命を導き出したものは、如上の日本のローマンヂック運動に他ならないからである。

吾人は西洋の十八世紀から十九世紀にかけて、これと同やうなる變動がその思想界竝に實際界にも起つたと、考へてよろしい。蓋し古典主義とローマンヂックとは、さながら繩の如く、相對し、而も相倚りて全き人生を完成して居るものではなからうか。即ち、古典主義は理性に據り、ローマンヂックは感情を主とし、一は純理と自然とを標準とし、他は歷史と習慣とを重んじて居る。いづれも俗流を超越する理想的運動たることは同一であるけれども、古典主義者の理想主義は純理的理想主義であり、ローマンヂックの理想主義は之に反して歷史的理想主義である。兩者相反撥し、而も相互に相手を他山の石として自らの目的を助長する所が有る。而して十九世紀の上三分の一に於ては、ロー

マンヂック思潮は、十八世紀の古典主義を壓倒して自ら最隆盛を極め、その餘勢尚ほ斷續して十九世紀を貫流して居る。現代に於ける有力要素たる民族乃至國民主義なるものは、その精神的根底に於ては、實にこのローマンヂック思潮に養はれたといつて差支なからう。

これて、私が最初に提出した古典（クラシック）と現代（モーダーン）との關係如何といふ問題は、その大體に於て、その本質に於て豫測的に解決されたと思ふ。この第一講の目的はこれて略ぼ達せられた。しかし、尙ほ、現代の中心思潮たる如上のローマンヂックがその絕頂點を越えた時、即ち十九世紀中葉以後最近までの大勢を一瞥して置くが適切であらう。

十九世紀中葉以來、かの十八世紀を思ひ起さす純理的傾向再び頭を擡げ、當時に固有なる現實主義と提携して、一種の强烈なる唯物思潮を捲き起し、自然界は勿論人事界に至るまで、一切の事物を支配せずんばやまない勢を呈して居る。自然科學及びその應用の進捗、一切社會現象の自然科學的解釋の試み、物質的文明の充實は卽ちこの新傾向の證徵てある。そこて、かの國民主義なるものは、由來、上述の如く、精神上に於てはその源をローマンヂックの理想主義に發しながら、新にこの現實主義と現實政策といふ動力を受けて始めて活躍して來た。こゝに於て若干の强大なる國民の—獨逸の如き、伊太利の如き、將たアメリカ合衆國の如き—場合に於て、國民主義は國家統一の理想を滿たした。

かくの如くして出來上りたる新らしき國民的國家は、國力充實の餘勢、更に一歩を進めて全き地球上に向つて自己の世界政策を展開することになつた。是れ十九世紀下三分の一以來の世界の大勢であつた。

かくの如き列國の世界政策の展開は、こゝに全地球に擴りて廣大複雜にして神經質的に敏感なる世界文化といふ一大共通生活の現象を喚起し、之と同時にこの共通生活の基礎が依然として國民的國家の上に立つが故に、十九世紀末つ方より、漸次彼等の世界政策の衝突を馴致し、二十世紀に入りて益風雲の急を促進し、遂に曠古未曾古の世界大戰亂の爆發を見、所謂アルマゲドンの戰とはこれかと人をして怖れ慄かしむるに至つた。

この不幸は、由來十九世紀中葉以來の現實政策の開始に發し、而してこの現實政策は當時方さに燦んに燃え上がつて居る唯物の學風と相互的に相煽り合つて氣焰を揚げて居る。それであるから、同世紀の末つ方より、夙にこの偏頗なる傾向に反對して、精神的理想的傾向の反動現はれ、或はローマンチックに還れの叫び聲起り、こゝに文藝上ては新ローマンチック、思想上ては新理想主義なるもの現はれつゝある。この際如上の現實的唯物的風潮の究極として、世界政策の衝突竝びにその破裂を見るに及びては、根本的に社會の改良、人生の進善、世界の改造を戀求するあこがれは愈強大となり、新興の文藝上思想上風尙と相照應するの觀がある。

何はともあれ、現代は古代文化の衰亡の跡にその源を發して居る、卽ち、中古生活の裡から流れ出したる一大潮流である。この大いなる世界史の流れは、その濫觴以來、こゝに私の所謂世界史の第三日の時代を流れつゝあるものである。而してこの潮流が特に十九世紀の中葉以來、更に何等かの新なる發展の階段に向つて躍進しつゝあることは顯著確實である。この大勢は世界大戰亂の危機に於て、その絶頂點に達して居るやうである。然らばこの現代中の最近時の大事變は、上述の世界史の第三日の、果して如何なる時刻に相當する階段を經過しつゝあるものであるか。是れ吾人に取りては興味ふかき、將た利害痛切なる問題たるを失はない。無論、神ならぬ歷史家には、未だこの神祕を開くべき鍵が與へられて居ない。しかし、若し既往を以て現在及び將來を推想するを許されれば、吾人は、今日血肉ともに親しく痛切に經驗しつゝあるこの世界史の危機に於て、或はいつの間にか、吾人が今日まで久しく生活して來たその第三日を去つて、第四日に入りつゝあるのかも知れない。宛もかの高緯度にある地方の夏の一日が、その暮れがてなる夕べを浮かれ歩く者の知らず識らずの間に、明くる日のあしたと成つて居るがやうに。

諸君！　以上は只だ、私の西洋を出發點として、これから二十餘講に亘つて、諸君と共に辿り行か

んとする世界史潮の行方に對して、豫め單なる試みの瀨踏みのみてある。再び簡單に繰り返していはゞ、この豫測の主要標幟たるいはゞ滯標は、古今の關係、殊に古典と現代との關係、それからこの關係より起つた古典主義とローマンチックとの對照、更にローマンチックの壓につゞいた唯物思想及び現實政策の進歩が作り上げた國民的國家及びその世界政策の發動と、その弊に鑑みて起りたる世界改造の企との關係にあつたのてある。

かくて私は、私が本講壇に於て取るべき觀察の、主として西洋世界史の文化的史潮の上に向けらるべきことを、自ら痛切に且つ期し且つ任じて居る。

しかし、文化的史潮といつても、このものが、決して國家の政治上實生活を抜きにしては完全に考へられ得ないものてあることは、勿論てある。この實生活は或る哲學者や、一般の文藝家や、一切の好事家者流から、とかく蔑視されやすい。されども、私の確信によれば、國家竝びにその政治も亦た明かに最高文化現象の一て、或る多くの場合に於ては、殆んど唯一絶大なる文化勢力を揮ふことさへある。管見によれば、この生活を除外しては、如何に哲學的に、文學的に、藝術的に、如何に巧妙詳密に描寫乃至論述されて居ても、かくの如き歷史は、眞の人生の文化の發展を、洽く公平周到に將た深刻痛切に具藏しつくすものとなり得ないてあらう。それてあるから、私の講話は、或は諸君の一部の人々の期待に反して、比較的多量に頻繁に政治上發展を說述するかも知れない。唯だ〳〵、私は成るべきだけ一切のものを世界の全文化の潮流のうちに於て廣汎に且つ因果的に考察することに、努力したいばかりてある。この一事が若し何等かの成功を齎らし、且つ諸君の諒解を得たならば、本講話の幸福これに過ぎぬてあらう。

第二講　希臘國民的文明

諸君！　前講に於て、諸君の注意を惹いた「世界史の第一日」たる最古の時代を形造くれる古代東方諸國の歴史は、實に幾多文化史的要素に富むで居る。私はそれに拘らず、之を割愛し、直ちに「第二日」の朝、希臘文明の興起から始めなければならぬ、是れ吾人の講話の實際上目的のために已むを得ない次第である。

西洋文明の淵源いづくにありやといへば、世人必ず希臘文明を指ざすに違ひない。この際、彼等は古代に於ける文明的政治家ペリクレス及びその時代を稱へ、これを中心として同時及び前後に輩出したる幾多の文化の貢獻者を數へるであらう、曰く哲學はアナクサゴラスにソクラテス、プラトー、曰く歴史はヘロドートスにツキディデス、曰く悲劇はエスキロスにソフォークレス、エウリピデス、曰く美術にはフイディアスにポリグノートスと。然り、いづれも眞に古典中の古典である。然しながら、この古典中の古典時代及びその文化遺産が確立して永久の價値となるには、その前に之を準備し、またその後に之を祖述したる各意義ふかき文化時代があつた。是等の希臘文明の發展の階段、及びその間の異同を考察することは、頗る吾人の文明史觀一般を啓發するに足るものがある。私は不幸にして今一々これらのことを詳しく說く暇がないから、私の考察の範圍と方法とを更に制限する。卽ち私は希臘文明をば、その國民的に發展して國民的に完成したるものと、それが世界的に發展して世界文化となつたものとに分ち、先づこの講に於て希臘の國民的文明、そのうちに於て特に前述の古典中の古典と稱すべき部分に重をおき、次講に於てその世界的文明に說き及ぼして、兩者の差別と價値とを明かにしてみやう。然る時は、不十分ながら希臘文明の古代世界に於ける潮流を知ると同時に、凡そ文明の顯著なる發展の一例を大體髣髴せしめ得ると思ふ。

1　希臘の古代

希臘の國民的文明は如何にして起つたか。これは「希臘の古代」と稱すべき時代に胚胎して居る。初め希臘世界の中心地方であるエーゲア海の沿岸と、その數多の島嶼とに於て、今日考古學及文獻學の所謂エーゲア文明なるものが發展して居つた。此文明はこれらの學問の研究の結果、始めて可なり闡明せられたものである。而してその重なる遺跡遺物の發見地によつて、或はミケーネ文明ともいひ、或はクレタ文明とも稱し、或はトロヤ文明とも呼ばれて居る。加之、其の文明の光被する所は頗る廣く地中海岸に擴つて居つたらしいから、一名地中海文明とも云はれる。しかし此の文明の尤も濃厚に存在して居つたと信ぜらるゝ中心地方は矢張エーゲ海方面にあるが故に、前揭の如くエーゲア文

明といふ名稱を最も適當とするのである。この文明の創造者は如何なる人民であつたかは不明であるが、ともかく希臘語でない他の言語を話し、隨て恐らくば希臘人の祖先でなく、それ以外の他の人民であつたらしい。彼等は小アジヤ・トラキヤに於ける或る民族から出たらしい。ともかく、此の時代が希臘人の歴史に取りては、その古代と名づけらるべき理由があるのである。而してこれ、西洋史上、本講の始に斷つておいた私の所謂世界史三日觀の「第一日」、即ち最古史に屬するもので、實に古代東方の諸文明國と同時に榮えて互に或る關係を作つたものと推定せられるものである。

既にして希臘人の祖先が始めて漸く此の舞臺に入る時期が來た。彼等はその先住人民の文明を破壊しつゝ津々浦々町々村々を占領して、自ら新にエーゲ海上の主人公となつた。この手續は恐らくば凡そ紀元前一千五百年より一千年までの間數百年を要したであらう。彼等は之と同時に次第に先住者の文明上遺産を繼ぎ、傍ら古代東方の優勢なる文明と接觸しながら、自ら教育し自ら努力して自家獨得の文明建設の緒に就いたのであつた。所謂詩聖ホーマーの史詩なるものは即ちこの征服の傳說と當時の文明の發展との產物である。

かくの如くして希臘の古代は過ぎ去つてその中古が進み來りつゝある。所詮、希臘人の祖先がエーゲア文明世界に入りたるは、猶ほゲルマニ民族が羅馬の開化社會に侵入定住したるに似通ふて居る。

2　希臘の中古

是等の原始希臘人の子孫は次第に繁榮し、數世紀の間にエーゲア海方面から溢れ、地中海沿岸の大部分、即ち東はキプロス島、ナイル河のデルタから西はマルセーユに至る間の要所々々に擴りて通商植民上の活動期（七五〇―五〇〇）を形作り、殊にその內、紀元前第六世紀に於ては、古代東方世界文明の最後の花とも見るべき四大强國對立の社會に自らも參加して、その二强國エジプト及びリヂアの同盟となつて通商に軍事にそれ〳〵活動した。他の二强は即ち新バビロニヤとメディヤとである。

此の時代は政治上に於ては都市國家（ポーリス）の集成（シノイキスム）及びその法律の制定、經濟上に於ては生業の發展、貨幣經濟の開始、隨て貧富の懸隔と云ふ社會現象が、希臘人の間に竝び現はれる時代であつて、一言に云へば都市國家の法治的政治及び市民の自由生活の開始期である。此れが知識上に於て現れて、諺にも傳はる希臘の「七賢人」竝にイオニア哲學者となつた。是等の先覺者は或は政治の改革者、人民の立法者たり、或は社會の警醒者、自然現象の觀察者であつた。彼等は或は自知の明を說き、或は中庸の德を勸め、或は法律の最上權威を主張し、或は生活難を警戒して居る。畢竟、是れ時勢の發展、社會の分化に伴ひたる必至の要求、若くは自然の敎訓に外ならぬのである。猶ほ西方亞細亞の一神敎國民へブライ人の豫言者の訓戒、支那では周末の聖賢の垂敎に似たものがある。これらが東西いづれも、偶

然ながら、殆んど恰も同時代に起つた類似の文化現象であるのは面白い。只だ三者の態度の異る所があつて、隨て各自文明の傾向の差が示されてあるばかりである。卽ち前記の猶太人の先輩は宗教的に、支那の學者は道德的に、希臘の哲人は知識的に、各自の社會生活の危機を解決せんとしたのである。この對比は却て一層面白く思はれるではないか。尙ほ今後今日に至るまで世界の東西に擴れるエソップの寓話の最初の編輯も亦た同時代の産物であつて、如上の「七賢人」らと等しく當時の社會生活發展の好記念とこそ觀ぜらるべきなれ。卽ちこの著者は當時希臘のいはゆるルネーサンスの文化の最も榮えて居つた小アジャに現はれた知識の秀でた奴隷であつたのである。

以上之を要するに、紀元前第六世紀に於ては希臘人は地理上經濟上に於て擴大し、智識上に於て理性的內省的となり、政治に於ては都市國家に於ける市民の自由と法治的政治の慾求とを高めて、著々發展成功し、結局、かの古代東方の專制的にして固陋なる文明に對照して、一個の個性的で清新なる文化狀態を作つて居るのであつた。私は之を希臘史の中古末期とし、猶ほ世界史上中世末期にイタリアのルネイサンスがあつたやうに、旣に觸れて置いた如く、希臘のルネイサンスと呼ばうと思ふ。換言すれば、當時の希臘人は其民族生活から一轉して國民的自覺に向ひ、個人としても團體としても、內外共に、眞に多幸多望なる境涯に入りつゝあつたものである。

(3) ペルシヤ戰役の意義　紀元前五〇〇—四四九)

此時に當り、東方に於て、ペルシヤ人が一種の文明國を創建し、それから著々西侵してその廣大なる專制統一組織の羽翼をエーゲア海上に擴げて來た。是れ文明史上東西衝突の發端で、曾に希臘のみならず、實に西洋を出發點とする世界の文明に取つて、極めて痛切なる一大危機であつたこと申すまでもない。何となればペルシヤ人のこのイオニア征服は、希臘人に取つて、死活の大問題で、試みに古代日本の政局に於て三韓及び九州、若くば日露戰役前に於て滿洲や韓國が或る敵國に占領せられたと假定し、その場合、わが國民の苦痛は果して如何　當時の希臘人の境遇は宛も之に似て、而も是れよりも一層重大なる艱難辛苦を課せられたのであつて、實にこれが爲に起るべき約半世紀間のペルシヤ戰役　紀元前五〇〇—四四九)は、希臘に取つて、その內外に於ける幾多の政治上竝に精神上大問題の解釋せらるべき決定戰役であつたからである。

換言すれば、上述の所謂希臘のルネイサンスと云はれる思想飛躍否な動搖の舞臺に於て、旣に敗退の兆を現はして居つた一切の舊思潮は、玆に自己の頽れゆく足場の立て直ほしの機會を發見した。彼等は如上の新に破裂した東西衝突戰に望をかけて、若し出來べくんば、ペルシヤの勝利によつて直接或は間接に自家の悲運を挽回せんとて、一齊に反動の頭を擡げて一切の新思潮と最後の而も有力なる

死活的對抗を試みることとなつた。卽ち玆に現れた對陣は他なし、政治上では專制主義對法治主義、貴族主義對民主主義、精神上では保守主義對進步主義、傳統主義對理性主義の抗爭であつたのである。

例へば、その中、政治上に於けるものは、小アジヤに於ける希臘文明の中心たるイオニア地方に於ては、そのミレトス市の有力なる市民アリスタゴラスといふ人物の下に於ける民主運動となつた、その結果、遂にイオニア人が、大膽にも蹶起して、彼等の統治者にして貴族乃至僭主政治、殊にその保護者たるペルシヤに對する大叛亂（五〇〇）となつたことは、卽ちそれである、また大なる希臘文化の將來を荷へるアテネに於ては、ピシストラトス家の下に於ける僭主政治に對する民主政治の反抗となつて居るのであつて、その跡、クリステネスの下に於ける民主的政治改革となつたことの如きである。諸君、若しこれらの政治的社會的事變を考一考したならば、何人にも、當時の希臘世界の紛爭問題が果して何であつたかといふことに關して、蓋し思半ばに過ぎるであらう。是等の事變につきては、私は安んじて諸君の既得の歷史知識に一任して、之を省略しうると信ずるけれども、その內、精神上に於けるものは少しく說明を要するかも知れない。因て以下少しくその大要を指摘する。

抑も六世紀及び五世紀始に於ける希臘の民主的風潮の勃興は、同時に多數市民が頓みに都市國家生活に參加して、公事に活動することを意味し、隨て、未だ眞に其蒙を啓かれざる無敎育の民衆が國家の樞機に參與することの開始である。既に觸れておいたやうな希臘人の海外貿易の擴大、富力の膨脹、外國文物の流入と共に、諸國に於て神殿の建築、祭禮の制定及びその執行が流行した、その有樣は、今日の無敎育なる成金者流の間にとかく見られがちなるが如くであつたらう。それて六世紀から五世紀にかけての當時、希臘の市民卽國家といふ社會にあつては、迷信背理の傾向は著しく現れ來つた。この風潮はオルフエウスの宗敎及其の崇拜の風習が尤もよく之を代表して居る。この人はトラキア出身の詩人にして神學者である。彼の提唱した宗派はアテネを中心として諸國に流行した。この派の詩人や說敎者や修驗者たちは諸方を遍歷し、彼方の山の上、此方の森蔭に神殿淫祠をしつらへ、暮夜信者を會して、よもすがら密儀を勤修し、之に伴ふて淫樂痛飮を事として居た。かの七賢人の格言やイオニア哲學者の敎訓は、畢竟、一は此の迷信に對する智識階級の抗議警告であつた。是等の先輩が大聲疾呼した純理の語は、到底、多數民衆の匹夫匹婦の俚耳に入らなかつた。それもその筈である、當時比較的敎養あつた哲學者詩人の間にすら、尙ほこの俗流に媚び若くば之に惑溺し、或は咒咀禁厭を事とするものもあつたからである。かの四元と愛憎說とを立てたエムペドークレスすらその一人である。

故にペルシヤ戰役てふ東西衝突期約五十年間の希臘の精神界は、その政治界が專制對自由の死活問

題に係爭して居る如く、大體に於て迷信對理性の抗爭の裡にあつたのである。此危機を最もよく曝露したものはデルフィ(11)の態度であつた。

この有名なる神殿は中央希臘の一地方にあつて、希臘人の神話に於て學藝の女神ミウズたちのホームが、その山頂にありと傳へらるゝパルナッソス(12)の高峰の下、尚ほ高さ數百メートルの山腹に拵へられてある。この莊嚴なる境地は、その祭司たるピヂア人(13)の巫女が神殿の主神アポロ(14)の神靈に感じて發する豫言によつて、曾に希臘精神界の一大靈場となつたのみならず、その稜威夙に遠く海外に聞えて希臘世界の界隈にある外國人までも歸依するに至つて居る。今やペルシャ戰役の大勢がサラミス(15)の一戰で決せられるといよ紀元前四八〇年の危機に於て、ペルシャ大王クセルクセスの陸海軍竝び進みて希臘本國を侵さんとするや、デルフィが當時怖れおのゝく希臘の諸國からの運命の伺に對して、彼等に與へた豫言はすべて悲觀的であつたことは、この戰役の殆んど實歷者にして歷史の祖たるヘロドートスの面白く而も痛切に談り傳ふる所であつて、これらの神の御詞が、よしやそれが全然賣國的でなかつたにしても、頗る絶望的にして非國民的のものであつたことは明かである。例へば本戰役に於ける護國の干城たるべきアテネ人は如何に訓へられたるか、曰く「世界の果まで逃れにのがれよ。只だ木の城のみを依賴せよ」とのピヂアの祭司慣用の謎の語であつて、尚ほ一縷の望を存するが如きところはあれど、大體に於て決して士氣振作的のものではなかつた。程なくテルモピレ(16)の隘路の險早くも敗れて中央希臘はペルシャ大軍の蹂躙する所となるや、デルフィはその世々諸國の奉納によつて蓄積された莫大の神寶を擁して居たのにかゝはらず、毫も何等の掠奪破壞を蒙らなかつた。彼れと云ひ此れと云ひ共に怪むべき稀有の現象である。是等の奇現象の說明は如何にせらるべきか、吾人には他の方法がない。卽ち、由來ペルシャの政治の慣用手段である外國宗敎の利用の風と、デルフィの祭司が之に應じて取つた魚心に水ごゝろ的の態度に求め得らるゝより外はなからう。顧みれば、ペルシャ人がさきにバビロニアを征服するや、その地に流謫中の猶太人を保護し、その一部を故國に還送して、その都と神殿とを復舊し、その宗敎を固定せしめたことは、周知の事實である。卽ち是れ猶太敎(ユダイズム)確立の始てあつた。今、ペルシャ人の希臘に臨むや、彼等が必すデルフィに對しても亦た同樣にその保護政策を適用したてあらうと確かに信じ得られる。その際ピヂャの祭司たちは、故意か否かは扨て置いても、兎に角、大王の勢力に屈し、おのが國民の崇拜するアポローの神を化して外國の統治策の傀儡とせんとしたやうてある。それてあるから、若しこの時ペルシャ戰役の勝敗が實際起つたのと反對に地を易へたならば、希臘の精神界のこの一大中心は東方專制帝國の統治機關の一となつて了つたであらう、卽ち、希臘人の衆愚の間に尙ほ行はれて居る上述の如き迷信を神學化して一個の系體となし、

之を以て天下の人心を束縛したてあらう、この時まで希臘人の間に發育しつゝあつたかの個性的傾向の萌芽を絶ち、その將に開けんとしつゝある知識的文明を澁滯凝結せしめたてあらう、一言にいはゞ、その結果、希臘人をしてかの猶太敎、回敎乃至ローマン・カトリック敎の文明の如き、極めて窮屈固陋な文化狀態に陷らしめたかも知れなかつたてあらう。

故に本戰役の決戰なるサラミス灣頭(177)の大海戰（四八〇）を始とし、之についてその翌年中央希臘の平野にあるプラテア(178)の大會戰、竝にサラミスと同年、シシリヤ島の希臘人がペルシヤの同盟たるカルタゴ人の來襲を擊退したヒメラの戰は、いづれも希臘内部における政治上抗爭のみならず、實に精神上智識上の衝突の決戰てあつて、ひいて西洋、否な或る意味ては世界の文明の決戰てあつたのてある。而してその勝敗の結果は、幸にも、新思潮の側に凱歌が奏せられた。卽ち、世界戰役に世界改造が伴ふこと、古今東西同揆てあるといへる。

4　アテーネ對スパルタ

如上の決戰の結果を收拾すべきは、サラミスの海戰からペロポンネソス戰役破裂までの約半世紀間てある。これは、この内亂的大戰役を書き傳へたツキディデスの史筆が特に「五十年」(179)と名づけて力說して居る極めて多事なる時期てあつて、恰も希臘國民の文明が政治上精神上に於ける一大飛躍を遂げるのに相當し、西洋史上尤も記憶すべき文化時期の一てあつた。

この期間の中心現象は、當時の全希臘を代表する兩大强國、アテーネとスパルタとの對立てあつた。彼等は宛もかのナポレオン征伐におけるプロシアとオーストリアとの如く、ペルシヤ戰役が尙ほ繼續して居るに拘はらず、その中から早くも相軋轢抗爭した。而してその結果がアテーネの優勢に歸したことは、文明の發展向上に與る所極めて大なるものがあつた。是れ何故てあらうか。

凡そ一國が自己に固有なる發展の下に世界的に强大となるや、遂に未だ曾て經驗しなかつた大問題に逢著することは必然てある。卽ち、新に作り出されつゝある世界的係爭の渦中に於て、如何に自ら處すべきかといふこと、卽ち是れてある。之を我國史に就いて見ると、先づ幕末及維新の日本、次に明治時代に於ける海外領土擴大後の日本が、それ〳〵同じ危機にあつたのてある。此際、若しこの自分のために新に開拓せられた境遇から遠かつて、自ら退嬰せんか、自己の固有性は則ち保存せられてあらう、けれども、進みて自己の國威を發揚することが出來なからう。若し自ら進んて係爭の渦中に投じて苟も大いに爲す所あらんか、この大目的に適應すべく自己を破壞、若くば少くとも、或程度まて自己を改造し、或は擴大して他の異分子をも收容包含して、何等かの自他の渾化融合を謀るの必要に迫られるてあらう。

今、ペルシャ戰役時代に於ける希臘諸國、就中そのアテーネとスパルタが逢著した大問題は卽ちこれに外ならない。アテーネは戰役の最初から頗る大膽に自らこの渦中に投じて幾多の困難を排しつゝ著々成功した。之に反して、スパルタはその國家が保守的であるといふ性質上とかく事毎に逡巡躊躇し、サラミスの大捷後に於て全希臘の對外的志氣が旺盛になつて、一方、國民の敵たるペルシャ人に對する抗爭をつゞけなければならなかつたけれども、他方には之よりも自分の競爭者たるアテーネに對抗する必要が次第により多く重大となつて來たから、最も進退に苦み去就に迷ふた。つまり、これらの二國は兩々相對比すれば、甲が標榜したのは民主、開國進取、大國樹立の主義であつて、乙の旗幟とするところは貴族、鎖國保守、小國保護の政策であつたのである。されば、上述の五十年間（ペンテコンテーティア）に於て前者の傾向がその赫々たる軍事上の勝利、經濟上の發展と共に優勢となつたことは、實に希臘國民的文明の完成に取りて意義極めて深長なるものであつたのである。何となれば、このアテーネの指導の下に、ペルシャ擊退と共に希臘人の活動が再び昔日の如く擴大伸張し、之と同時に他の多くの希臘の國々も概してアテーネに倣ひ、相互に民主的傾向を競ひ、政治に通商に學藝に勵み、彼等の所謂バルバリアン、卽ち外夷に對するパンヘレネース[20]、卽ち全希臘、いはゞ中華の文明の向上を期したからである。如上の所謂「五十年」の發展の結果は他でない。次の約一世紀間に於て、よしやその初にスパルタの統ゆるペロポネサス同盟との內亂的戰爭（四三一―四〇四）が破裂し、それにつゞいてアテーネ及び希臘全體の政治上衰弱とこそはなつたれ、思想、哲學、文學、藝術に於て最も充實したる智識的文明が却て大成したのである。卽ち是れがかのホーマーの史詩の編纂以來數百年間に發展しつゝあつた希臘國民的文明の完成である。之を文化史全體より見れば、第一講に注意した古典中の古典を形造り、眞に古典文明の極致と稱すべきものが構成されたのである。

5　希臘最隆盛期の思潮

この文明の永久的生命は、その思想、その哲學、その藝術に現はれた自由、調和、完全と云ふ精神に存する。この點に於て、私は諸君と共に少しくその哲學發展の有樣を垣間見やうと思ふ。

哲學の始はかの「七賢人」の時代に萠芽して居る。現にその一人に列するイオニアのミレトス市出身タレース[21]はイオニア學派の始で、西洋哲學の遠祖と稱せられて居る。彼の思索の中核が萬物は水より成るに在ることは申すまでもない。蓋しタレースを始として、イオニア學派は概して宇宙萬物を外面より觀察して、その元を尋ね、或る原則を立て、以て一切の自然現象を物理的に解釋するにあつた。かくの如き世界觀の內で、最も進步し最も有名なるものゝ例は同地方のエフェソスから出たヘラクリトス[22]である、彼は實に萬物が不斷に流轉して居ると說いて居る。

是等の意見は、かのホーマーの史詩に含まれたる神話的思想に比ぶれば、確かに一大進歩に相違ない。しかし他面より見れば、イオニアの學者等は只だ天地人を自然現象と眺めてこれを機械的に說明せんとしたばかりで、哲學の研究者、否な世界の觀察者そのもの、卽ち人間を精神的に內省するには未だ至らなかつた。この人間の內的研究は「七賢人」時代や、イオニア哲學者の間に始まつて居ない。希臘世界の人心を喚起したペルシヤ戰役の進行中に始めてその端を發して居ることは注目すべき現象である。卽ち同じくイオニア人であるアナクサゴラス（五〇〇―四二八）是れである。彼は當時實に『希臘の學校』と誇り稱せられたアテーネに來て、そのペリクレス（四二九歿）の師友となり、この文明的大政治家の民主政治を輔導した。この哲人は物質と相竝んで始めて精神（ヌース）を立て、之を以て一切現象の根本原理とし、精神研究の端を開いたのである。

同じ意味に於てソフィースト（物識り）[23]が注目される。これはその頃、天下の思想家、就中多くはシチリア島から出身したる學者連中が、このアテーネに雲集して、その方さに勃興しつゝある社會に知識を供給するといふ高尙な職業に從事して、以て形造つた專門的學者階級の總稱である。かの有名な『人間は萬物の標準なり』との格言はこの派の代表者の一人プロターゴラス[24]（四八〇―四一〇）の發言である。この派の所謂人間とは卽ち感覺の人間であつて、つまり、個々の人がその五官を以て感覺するまゝに、萬物が此の物若くば彼の物であるといふことになる、かゝる意義に於ての人間である。故に絕對的に眞の物そのものは、人間には不明である。隨て眞の知識を確立することは出來ない。彼等は、畢竟、唯物的懷疑的見地に立つものであつた。併し彼等がかゝる見地から人間を研究の目的とし、盛んに之に批評を加へたことは、哲學上からいつて、是等のソフイスト一派の文明史上に於る最大功勞であると云へる。就中、人間の作つた社會國家の起源とその性質とを、彼等一流の物質的自然學的見地に立つて構想したのは最も吾人の注意に價する。プラトーの著書にして對話篇の一なるプロターゴラス篇を見よ。その內にプロターゴラスがプロメテウスの神話を假りて人間社會の起源を說いたところは尤も味ふべきである（拙著『希臘文明の潮流』第三節都市國家の危機と其思想界參照）。これ實に社會又は國家に關する學說の始である。その唯物的學說は、之を近代に比せば、正にルソーの民約說、乃至コント[25]の實證論の先驅であると云つてもよい位である。

されば、ペリクレス時代（四六一―四二九）のアテーネの社會は智識上に於て大に賑ふた。かゝる空氣の裡からソクラテス（四七〇―三九九）が出てゝ始めて智識哲學の基を開いた。彼はペリクレスの死後數年を經たばかりの時から、始めて敎を垂れた（四二五）。彼は當時ソフイストの一人と目された。實に彼はソフィストの如く人間を批評すると云ふ學風をついだからである。而も彼はソ

フィストの如く單に破壞的ならず、進んで建設した。彼は理性を根據とし、凡そ知識の可能なることと、且つ人生の不幸は無識て、迷信背理に陷るより來るが故に、智識は卽ち道德なることを確立し、この批評哲學の方法によつて、アテーネの國家及社會を研究し、人間の作つた國法と道德の中より迷信背理を除き去り、理想的智識的國家を實現しやうと欲した。時はペロポンネサス內亂の末期及び戰後に於ける國家不安の秋てある。アテーネは幾多頻繁なる政變を蒙り、戰後の困難に惱み、最後に凡庸なる民主政治に立返つた。此の政治の犧牲となつた最も千古に卓越した悲劇の主人公は、卽ちこの當時の最大思想家ソクラテスてあつたのてある。試に當時彼が人民の裁判所て數へ上げられたるその罪狀を見よ。曰く、彼は民主政治に反對すと、是れソクラテスはアテーネの衆愚が跋扈しつゝありといふ現實を忌憚なく批評したが故てある。曰く、ソクラテスは國家の宗敎を誹謗すと、是れ彼が自由に現在の迷信の事實を指彈したが故てある。曰く、彼は少年子弟を誘惑すと、是れ彼が世人の執つて居る學問の方法の誤謬を非難し、新敎育を主張し、之を自家の聽講者に施したが故てある。

次に出たプラトー（四二七　三四七）の唯心論、竝にアリストテレス（三八四　三二二）の綜合哲學に就ては、私はその說明を省略してもよからう。只だ社會國家觀に於て、いづれも現實の都市國家に反對して理想の都市國家を說き、或る知識の政治を主張した事はソクラテスと同じく、一てあつたといふことを注意しておく。要するに、古典希臘の哲學はソクラテス以下三大哲學に於て完成し、その絕頂點に達した。その時期は大體に於て紀元前四五〇年から三五〇年までにある。

史學、文學、美術に於ても亦た概してさうてある。私は吾人の講演の豫定される結構に於ては、一々これに說き及ぼす遑なきを遺憾とする。只だ美術の一端は次講10節に保留する。

之を要するに希臘國民的文明は國民の歷史的發展の產物てある。數世紀間に培はれた國民の素養がペルシャ戰役てふ一大危機に際して其の光輝を發したものであつた。之を一面から云へば希臘文明は當時特有の都市國家（ポーリス）生活の產物てあるけれども、他面より云へば主として一大戰役の結果てあつたといへる。此の後の點に於て、イオニア哲學者の一人、かの前述の萬法流轉說の唱首ヘラクリトスの所謂『戰爭は萬物の父にして王たり』との有名なる格言は、之を第一義に內的に解釋して、先づ吾人を欺かざるものてあるといへる。

第三講　希臘世界的文明

6　希臘の風潮の變化

私は前回に於て希臘國民的文明がペルシャ戰役の進行と共に完成したのを見て置いた。この文明の最隆盛期は、一面から見れば、都市國家に於て團體理想と個人理想との調和宜しきを得た時期であつた。この點に於ても亦た玆に古典文明の模範が示されたのである。ところが、ペロポネサス內亂の役の進みゆき、殊にその戰後アテーネ民主政治の犧牲となるべきソクラテス（三九九年死す）の晩年のころは、希臘の形勢漸く一變しつゝあつたので、それから四世紀を通じて、大體に於て、アテーネを始め諸國の政治は戰亂の惱みと民主政治の墮落、卽ち衆愚政治（オクロクラシー）①の傾向との爲に衰微した。畢竟、是れ社會の分化のために貧富の懸隔、竝に職業の區別著しくなり、玆に階級の利害衝突起り　この階級鬪爭に於て衆愚の階級がとかく勝利を制したことてある。

少しくその事情を說かんか。かのペロポネサス戰役に勝つたスパルタはこれによりて一時希臘の覇權を收めたけれども、その力量不足のために長く統一を維持し得ず、幾ばくもなく國民の仇敵たるペルシャの勢力を再び呼び入れて自ら援けるの外なかつた、卽ち百年前から不俱戴天の敵である大王の威光と金力とを借つて僅かに希臘諸國の統一をつなぎ平和を恢復した。かの「アンタルキダスの平和」②はかくして成立したのであつて、さてこそ「大王の平和」とも綽名されるのである（三八七年）。その有樣、之を近代の例に取れば、猶ほウェストファリア平和に於て、ドイツ諸國が外國の勢力を借り不名譽なる列國聯立の形勢を維持したのに似て居る。是れ當時の希臘憂國の士の憤る所であつてリシャス等の演說家の文辭に現はれて居る。

以上指摘した內外の理由により、財產家は衆愚政治（暴民政治）の跋扈を嫌ひ、識者は自分の國家の腑甲斐ないのに失望するに至つた。その結果は他なし、極端な個人主義及び世界主義の出現である。卽ち市民は國事に冷淡となり、海外貿易の利と、浮世の快樂とのみを目的とし、若くばその勇敢にして冒險的なるものは劒に仗つて天下を周遊し、希臘世界のみならず、外國に於ける然るべき雇主に仕へ、中には東方に出稼し、或はペルシャの豪族や、大王その人にも使用さるゝに至つた。この五世紀後半と四世紀との社會狀態の變化は當時の喜劇の變遷て推知せられる。かのソクラテスと同時代の喜劇の大家アリストファネス（四五〇―三八五）は國家、宗教、思想、つまり時事問題を捉へて藝題とし、時めく政治家も、流行の思想家も、これを容赦なく諷刺した。ソクラテスもこの喜劇の槍玉にあげられたる一人てある。この大家の喜劇は希臘古典の喜劇の大宗となつて居るもので、次に現はるゝ四世紀後半以後

のものに比して、これを舊喜劇と云ふ。それは次の約一世紀の間に新喜劇と稱するものが現はれて流行して來たからである。これは詩人メナンドロス(3)（三四二　二九〇）の作によりて代表された。卽ちこれは何等の國事を諷刺しないで、專ら市井の情事を題目とし、概ねアテーネ市民階級の華奢な若旦那と、かの海外出稼から黄金を腰に附けて歸つた無作法亂暴な軍人とがアテーネの窈窕たる白柏子を中心に夾みての鞘當を演ずるのが、大體の筋書の型となつて居る。これ百年間に於ける人心の變化を卜すべきもので、之を具體的にいへば、希臘國民的文明の産出者たる都市國家の衰亡を示すに他ならない。

當時四世紀に於ける希臘の國家は最早自存自立し得ず、上述のやうにペルシャの如き外國的勢力に依賴するの外なかつた。ペロポンネソス戰後の統一者たる尙武的名譽あるスパルタの政策すら、それてあつたから、政治の威信地に墜ち、ついてテーベ國には一時人物起り、スパルタに反抗して節制を諸國に與へんと企てたるが、この覇權も十年間以上は長くは續かず、落ちつくところ、遂に希臘は半ば外國的なる强國の干渉保護を受くるの外なきになつた。卽ち四世紀の中葉、希臘の北隣にマケドニア王國が起つたことてある。この國民は希臘人の近親てあるが、當時尙ほ農を業としてかのホーマーの史詩にあるが如き家長政治的社會狀態にあり、一朝事ある時は全國皆兵となり强大なる君主權の下に統率せらるべし、是れ墮落せる都市國家の竝立狀態にある希臘世界に比しては、誠に珍らしき國柄てあつた。この國は當時希臘文明の長所を採つてこの弱點に乘じ俄かに强大となつた。この新進國の古希臘に對する關係は、恰も滿洲朝廷の明國に對するやうなものであつたと思はれる。若し古典文明の極度に達した希臘が、猶ほ窈窕たる大宮人の、齡未だ老いざるに、早くも氣力衰へ容色凋せんとしたやうなものであつたとすれば、マケドニアは剛健素朴な青年であつた。この新興國は、上述の如き內亂狀態にある希臘に干渉して、容易にその覇權を掌握することが出來た。當時の希臘の思想家の中には、既に希臘の人種そのものを重んぜず、只だその文化のみを尊び、苟も希臘風文化をうけて之に敎養せられた者は、よしや希臘人てなくとも、卽ち文明人であると思惟するものがあつた。ソクラテス(4)の別流を受けたるキニック派の人々それてある。又た或る思想家はさほどの世界主義ではないけれども廣大なる規模に於て愛國的社會政策と希臘文明の宣傳とを結びつけて論じて居る。曰く、小亞細亞植民地に於ける希臘人を、ペルシャ人の手から救ひ出し、こゝに內地における失職者や浮浪の徒を移し、且つ希臘文明を東洋人に及ぼし以てその惠に浴せしむべしと、これアテーネて文筆を賣つて居つた學者イソクラテス(5)（三三八年歿）の主張てある。彼はプラトーの友人てあつた。彼は當時如上の大事業を希臘敎化の中心たる自分の故郷アテーネの復興に期して居つたが、その國勢の遂に振はざるに失望して、轉じて質に新興の國家マケドニアの英主フイリップに向つて公開狀を發して、之を勸誘した。

このイソクラテスも、かのキニック派も、その間多少の異同はあれど、之を都市國家隆盛時代の思想に比せば、いづれも進歩した世界的思想である。併し希臘の政治家中には、飽くまでもマケドニアの統一に對して、都市國家の獨立と、その竝立とを從來の如く維持しやうと欲し、この目的の爲めにペルシャとの結託をさへ辭しないものもあつた。この保守主義はアテーネの政治家にして有名なる雄辯家デモステネスこれを代表して居る。彼はマケドニアに反抗しアテーネとテーベとの兩國同盟を作りて之に當つたが、不幸にしてケーロネーア(三三八)の一戰に敗れて、如上の保守主義、即ち希臘國民からいへばその自由主義と共に倒れて復た起つことが出來なくなつた。是れ都市國家即ち國民的傳來と、外國即ち世界的發展との抗爭であつて、後者の勝利に歸したことを意味する。希臘文明の世界的發展の一大回轉期こゝにある。

7　アレクサンドル大王の使命

かくの如くして古代希臘人の國民的自由獨立は永久に封ぜられた。しかし、彼等の征服者たるマケドニアには、やがてアレクサンドル(三三六―三二三)出でゝ彼等を率ゐて東征に上ることになつたところに、尙ほ希臘文明の精神存續の望が繫がつて居る。畢竟、この君主は如上の個人的世界的傾向に向ひつゝある希臘國民及びその文明を統率して東方世界に入り、その古來未曾有の大征服と相俟つて、急激に、大規模に希臘文明の世界化を助成せんとする者であつた。是れ、アレクサンドル大王が、その短き生涯、しかも極めて派手やかなる十三年の治世の間に、自ら知らず識らずに遂行する歷史上の大いなる使命であつたのである。

先づ大王の精神及び事業が如何に時代の傾向を代表且助成したかを見よ。精神上に於ては、彼は夙に古典文明に於て發展したる一切の思潮の綜合者たるアリストテレスの教を受けて居たから、深く希臘精神にいそしんで居た。故に彼の東征の出發點はこの精神を基礎として居る。彼の進軍の初、小亞細亞における擧動は一として、全く希臘愛國者を滿足させないものはなかつた。然し、彼は同時に理想家であつた。懸軍萬里東方に入るに從ひ、彼の理想に馳する傾向は次第に光燄を現はした。就中、シリアの關門イッソス(三三三)の突破戰をその界目とする。即ちこゝに大王の東方精神の採用が始るといふべきである。彼はこれより行く〳〵エジプト及バビロンの宗教を保存し、殊にペルシャ大王の朝廷文武百官の制を參酌し、自らその後繼者を以て自任して來た。彼が希臘人からもマケドニア人からも東洋人のする如き匍匐叩頭(プロスキネーシス)の禮を徵し始めたのは、その標徵である。然し彼は希臘精神を決して全然放棄したのではない、只だこれに東方精神を加味したのみである。その結果、彼の精神は世界的となつてその事業に現はれた。

卽ち、彼の事業は世界精神に基いた世界政策である。私は彼の廣大にして多樣なるこの政策の發現につきて只だ次の大綱を要約して滿足する。

(一) 幾多のアレクサンドリアと稱する都市の創立と希臘風植民。
(二) 東方の文物風俗の採用、東方の知識蒐集。
(三) 全世界探險竝に征服の企。
(四) 東西交通竝に經濟の促進。

之を要するに、アレクサンドルの事業は希臘に殘存せる都市國家の獨立を全然破壞し、宛然蝸牛角上の爭のために作られたかの如き狹隘なる障壁を撤廢し、古き都市と自己が創立した幾多のおのが名のアレクサンドリヤてふ新都市とを併せ統治し、一切の人種、一切の國土を超越した世界的國家建設の試みてあつた。彼の治世が短かつたがために、この大事業の有終の美を見なかつたけれども、その殘した光明が彼のすぐ後、及び永久に及ぼした影響頗る廣大てある。彼の事業の永久的結果は、羅馬人の帝國統治(インペリウム)若くば後世の帝國主義(インピーリアリズム)⑨の先驅たるにある。又これと同時に、君主崇拜の創立、隨て世界的宗教の準備の一を成したことにあるのてある。君主崇拜は後に述べる(第六講18)。

かくの如くして廣大なる舞臺に展開された希臘の文明なるものは從來のものと頗る異つて來る。故に玆に希臘文明の國民的と世界的との二個の歷史上概念が區別せらるべきてある。その回轉期は第四世紀にある。若し强いて一事件を以てこれを劃せば、かの上述のケーロネーア戰(三三八)を取るべきてあらう。かくの如き境界を立てられた同じ文明は、その前をヘレネドムと呼び、その後のものをヘレニズム⑩と命名さるべきてある。これをその語通りに譯すると、希臘文明とすべきてあらう。これを意譯すると、希臘の國民的文明と世界的文明、若くば古典文明と現代文明と呼ぶべきてあらう。猶ほ日本文明に關して、若し次の樣な造語が許されるならば、德川氏までの文明はジャバニズムと呼び、明治、大正の文明はジャパニズムと稱し得らるるやうなものてあらう(第一講參照)。但し、アレクサンドル東征以後の希臘文明の世界化、若くば現代化は、想ふに、明治大正に於けるそれよりも一層驚くべきものがあつたと思はれる。このヘレニズムの期間は、見地の如何によりていろ〳〵に見られるが、私は之を便宜上かの上述のケーロネーアの決戰(三三八)からアクチウム⑪の海戰(三一年)までの三百年間に亘るとして置きたい。これを人物をもてその首尾を代表せしめたならば、政治上統一者てはアレクザンドルからアウグスツスまて、政治學及び修辭學てはデモステネスからシセロ(四三年歿)まて、靑史にも小說にも謳はれた女流を擧げれば、かのアレクザンドル及びその幕僚に關係

のあつた白柏子タイス、ラミアらの美形からエジプトの國知ろしたクレオパトラに至るのである。そしてその最隆盛期は第三世紀にある。その中心はエジプトのプトレマイオス(12)二世及び三世の下にあるアレクサンドリア府であつた。その範圍は、東は中央亞細亞竝にインダス河畔まで、西は最初シシリアまで、後、ローマが擴大してこの世界的風潮を受くるに及んでは、大西洋の浪打つきわ、ジブラルタルまで擴つて居るものである。

8　世界文化

然らばこの文明の特徴如何。曰く希臘文明、卽ちその言語・思想・風俗・文物が東方世界に傳播して、そのひろがる限りの世界を希臘化することを主要現象とし、その副現象として、之と同時に東方各地固有の文明が、希臘文明と接觸融合し、隨て、この文明を變形改造することが伴ふて居り、彼此の正流と反流との輻湊の結果、希臘文明が世界の文明となつたことてある。一言にいへば、希臘文化を基礎とする世界文化の出現てある。この大いなる現象を最もよく説明するものは當時世界的に行はれた希臘語てある。これは希臘文明の國民的時代に用られた代表語、卽ちアテーネ人の話したアヂック語を標準として、これに當時の世界的時代の要求に應じて時代の新術語、流行の地方語、東洋からの輸入語などを採用同化したる世界共通の現代的希臘語てあつて、これを世界語(コイネー)(13)といふ。これは最早ソクラテスがアテーネの市場(アゴーラ)で談論し、プラトーが彼の對話篇を書いたるものと同じ希臘語ではない、ナイル河の上流でも、メソポミア地方でも、中央亞細亞でも印度でも、苟も希臘風の都市が建ち、希臘風の植民が住むところ、ヘレニズム世界共通の知識階級の交通に用ゐられて居る。若し强ゐて近代人及び近代語について類例を求めるならば、アングロサクソン人の英語が地球上にひろく流行して居るが如きてあらう。かくの如き言語の流行が標徴する希臘文化の世界的卓越といふことが、ヘレニズムの根本特相てある。今、更らに少しくこれを分析すると次の如くなる。

(一)　君主權竝に大國の樹立及び君主崇拜の流行。この時代の都市も亦た古典希臘時代よりも一層盛大に、且つ多くなつて居る、而して是等新舊都市は最早各自に獨立國家を形作つて居ない、いづれも皆な從來の希臘世界に見るべからざりしエジプト王國やシリア王國の如き大國の支配の中に網羅された。隨て世界の中心は東漸した。アテーネは成程尙ほ思想や流行の中心たるを失はないけれども、既に天下の政治の中樞でも、世界の貿易の集散地でも、將た學藝の淵叢でもない。かくの如きものとしては幾多の大都市のうちでも、エジプトのアレクサンドリアとシリアのアンチオキアが最も傑出して居る。是等の二つはいづれも恐らくば人口百萬を算したるべき世界都市てあつて、大國をしろしめす神の如き專制君主プトレミ家やセレウコス家の皇居として、上述の如き種々の點に於て天下の中心と

なつて來た。

(二) 世界主義竝に個人主義、享樂主義の流行。これ等が藝術及哲學に現はれてゐる。喜劇については既に之を瞥見した。その外、彫像に於ても、タナグラ人形と稱する素燒土偶(タナグラ)に於ても、一々例證することが出來る。哲學につきては尤も然り、實に當時流行したストア學派竝にエピキュリア學派ほど、他に如上の世界的個人的思想主義をよく代表するものがあらうか。

(三) 科學的知識慾の强大。この點ではアレクサンドリアの學藝がこれを代表して居る。當時形而上的思想竝に實踐道德說には、さすがにアテーネが尙その本場たるを失はなかつた、上に指摘した二學派は實にこゝを根據として居る。又た美術では小亞細亞のペルガモンが尤も推稱されて居る。しかし、哲學と美術とを除きその他の學藝に至つては、悉くアレクサンドリアに集中すと云ふても實際差支へない。こゝにはプトレミ家がヘレニズム諸大國中にも尤も冠絶する富强を以て、世界の學才を保護し、天下の典籍材料を蒐集して有名なるミュゼイオン及びビブリオテクを形作つて居る。是れ古代に於ける博物館圖書館、否な大學、研究所の最も完成したるものである。古代に於ける學藝はこゝに綜合されて一種の學風を作り、比較的近代までの模範となるのである。

然らばアレクサンドリアの學風とは何か。第一には希臘語及び希臘思想を大本とし、苟も希臘文明が古來作つて來た一切の文獻を蒐集し、註解を加へ、且つこれを整頓した。第二にはこれを整頓して、その物質的方面形式的方面を祖述大成した。即ち天文・數學・曆・歷史・地理・博物・言語・文法・詩歌是れである。このことは當時の一流の學者を竝べると、おのづから了解される。幾何學の祖ユウクリヅトはプトレミ一世の數學の師であつた。アレクサンドリアの博識家エラトステネスは一切の學藝に通達せざるなきを以て古代の學界に冠絶して居る。例へば古代印度に關する報道や、地球の周圍の測定は彼の努力に負ふて居る。彼と同門の友に、アルキメデスの法則を以て、將たまた幾多の逸話を以て有名なるシラクザ人アルキメデスがある、彼も亦たアレクザンドリアの學徒であつた。又た同じ學風をうけて天文曆數に長じ三角術の眞の創始者となつたヒッパルコス(79)が居る。第三には世界の知識を蒐集し、而もこれを希臘語で譯述整頓した。例へば當時既に三千年の歷史を有する埃及につきては、そのヘリオポリスの祭司マネトー(15)が勅を奉じて古記錄に據つて編述したエジプト年代記の如き、又等しく王命によりアレクザンドリア在住の猶太人の學者が彼等の國民の經典(バイブル)を譯述して作りたる所謂七十人(ヅアギンタ)(17)の書を一考せよ、いづれもアレクサンドリアの希臘語を宗とする世界的學風の好產物ではないか。

9　東西交通の促進、希臘文物の東漸

中古の末つかた、十字軍や蒙古の西征が世界の東西交通を促進したやうに、アレクザンドルの東征

及びそれによつて開かれたヘレニズム世界は、歴史あつて以來、始めて尤も廣大なる範圍に於て、即ち東は印度より西は地中海地方に至るまでに於て、世界の交通往來を促進することになつた。この興味ある世界の展開につきて、私は之に關係した重なる人物及び事件の二三のみを指摘しておかう。

先づ劈頭に立つ人物はメガステネス[17]である。彼はかのシリヤ王國の始祖セレウコス一世の印度使節である（紀元前三〇〇頃）。

一體、この君主は亞細亞に於けるアレクザンドル大王の後繼者を以て自任し、遠く內地に深入して印度の境まで征服し、大王の再來と稱せられて居る。然るに、印度では大王の西に凱旋したる跡にて、チャンドラグプタ起りて印度の大部分を併せてマウリヤ朝を創立して居る。そこでセレウコスは自然この印度君主と衝突した、そして勝利をうること出來なかつたらしい、因て兩君主の間に平和が成立し、その固めとして姻戚の好が結ばれ、且つセレウコスは數百匹の印度象を貰ふて凱旋した。因みに、この象から作られた隊が、西方亞細亞の大勢を決定すべきイップソス（三〇一）に於ける合戰の勝利に貢獻したのである。

さて如上のシリヤと印度との修好の目的のためにはるゝ〳〵印度に派遣されたのがメガステネスであつた。彼はチャンドラグプタの都パトナに至りこゝに滯在五年間に目擊せる材料によつて「印度事情」を著はした。この書は一切古代に於ける印度記事の源泉となつた。かの博識家エラトステネスが持つて居つたといふ印度の知識も之に據つたに違ひない。その他その後羅馬時代に出たストラボやアリアヌス[76]等の印度に關する報道も亦たメガステネスを宗とする。この貴重なる書籍もその原本散佚して失はれて居るけれども、十九世紀以來の學者らは如上の古人の引用して居る所を研究して、略ぼ原書を還元し、その大要を窺ふことが出來るやうになつた。

次にかのチャンドラグプタの孫有名なる阿育王[19]が西方諸國に向つて佛敎宣傳の使節を發したことである（紀元前二六〇頃）。これは臾那（イオニヤ）即ち希臘人の間に發せられたと傳へられて居る。而して當時の希臘人は廣大なる世界の希臘人であつて即ちヘレニズムの世界人（コスモポリタス）である。王が使節を向はしめたといふ國々及び君主の名は明かにエジプトのブトレミ二世、シリヤのアンヂオーコス一世、キレーネのマーガス、エピルスのアレクザンドルと同一視することが出來る。これ非常なる文化事件である。唯だその效果が具體的に分明しないのは遺憾である。

更らに文獻となつて殘り、種々の文化史上の構想史料を與ふるものは「エリトレア海渡航案內」[20]（紀元後六〇年頃の著）である。この珍本の著者は不明である、しかし、ローマ帝國時代初期、恐らく兼航海者が、エリトレア海（紅の海の義、實際上印度洋

と考へてよろしい）に於ける自己の印度渡航の實驗によつて書き下したものであらうと推定される。

最後に例示すべきは、支那史上注目される後漢の時に修好した大秦の安敦なるものである。アントニウスとは羅馬人に多い名前である。安敦は果して恰も同時代に君臨したる羅馬皇帝マルクス・アウレリウス・アントニウス[21]（紀元後一六一―一八〇）であつたか、たゞしは當時羅馬の治下にあつて自らも羅馬人と稱して外夷から區別して居つたシリヤ地方の有力者であつたか、などの推測につきては、西洋の文獻上確證はないけれども、普通は前者を以て最も蓋然として居る、ともかく東西交通史を照らす見のがすべからざる閃きであるといへる。

この他に、遺物に於ては極めて有力なる材料がある。それは印度及び中央亞細亞に於て多く發見せらるゝ所謂「印度希臘」の貨幣、又た主として多く犍陀羅（ガンダラ）地方に發見せらる佛像及びその美術である。前者は當時それら地方に君臨した希臘風有力者の鑄造にかゝり、彼等の名及び肖像、彼等に關係ある神を現はし、後者がその結構手法に於て希臘風の影響を示して居ることは、申すまでもない。

尙宗教上に於て世界的合同多神教が流行し、將さに現はれんとする世界的博愛的一神教卽ちキリスト教の準備となつたこともヘレニズムの特徴である。これは君主崇拜と共に第六講で述べる。

之を要するに、希臘世界的文明は、希臘國民的文明が、紀元前四世紀に於て、兢中ケーロネーア（三

三八）の戰後、アレクザンドルの東征によつて廣く東方世界に傳播し、かねてその影響をもうけて世界化現代化した文明であつて、三世紀にアレクサンドリアに於て最隆盛を極め、次いで羅馬が起るや、其の領土内にも流行して、世界的文明殊にキリスト教文明の準備をなし、且古典文明を近代に傳へてその勢力を發揮せしむる媒介をなしたのである。

10　希臘の美術　貨幣

ヘレニズムの餘響として、印度に於ける希臘の美術上工藝上の文化の跡方までも指示した後で、私は、千古に亘り世界にひろがりて最もよく希臘精神を體現して傳へて居るその美術の精華をば、前以て說いておくが順序であつたらうと、自ら反省しなければならない。因つて、多少重複する所があるかも知れぬが、附錄又は參考の意味で特にこの一節を設ける。吾々は希臘の古代竝に中古のものは省く、中にも、中古末期からの古拙期美術は天眞爛熳にしてさすがに棄てがたきものがあるけれども、之を割愛して、直ちに古典期から始める。

古典希臘の美術は、紀元前第五世紀雅典に輩出した天才、フィディアスやポリクレトス[22]を始めとし、建築家イクチノス、畫家ポリグノートス等の人々之を代表し、就中フィディアスの彫作せる諸々の神像、その督成せるパルテノン等の神殿及びこれらに伴へる彫刻が、千古の久しきに亘りて美の極

致と稱しても詞尚ほ足らざるの感あることは今更ら喋々するまでもない。抑も古典美術の最大特徴は主としてその獨得の神像と神殿とに在る。而して是等のものが多くは雪白の大理石を材料とし、少くとも今日に殘存して居るものが左樣であつて、以て一層靜かなる清らかなる美の感を惹くことになつて居ることも、これ亦た何人も否み得ぬ特徴である。つら〳〵是等の作品を通覽するに、神の彫像は概して古雅沈靜にして純正莊嚴の風格を具へ、全體の調和と統一よろしきを得て、眞に美術の完全に達して居ると謂ふべきである。又た神の殿堂は簡勁なるドリヤ式若くば典雅なるイオニヤ式圓柱をあしらつた長方形の建築であつて、これをバシリカと稱し、その建築の各部の配合の宜しき、各線の手法の巧みなる、彫琢の麗はしく垢ぬけしたる、これ亦た上述の神像と相竝びて、希臘の古典美術の精華を形造つて居る。固より當時の立像や浮彫は神ばかりを現はして居ないて人間をも題目として居るが、それが神であつても將た人間であつても、その容貌・骨格・態度・風姿いづれも沈著にして言ふべからざる威儀に滿ち、靜平なる形相の中にさながら神そのものゝ如くに尊くして氣高く、一種の縹渺たる風韻の橫溢するを見るのである。

然るに紀元前四世紀のうちに、古典希臘がヘレニズムの希臘となるに隨ひ、美術の上に次第に或る重大なる變化が起つて、終に顯著なる新時代の特徴を構成することになつた。卽ち建築には前記のドリヤ式やイオニヤ式よりも、より多くコリント式の圓柱が用ゐられた、コリント式圓柱は言ふまでもなく纖巧細麗優美を以て鳴るものである。しかし、この建築の變化よりも、一層著しき變化は圖像の現はし方に見えて居る。といふのは、古典時代よりも、より明確に個性の特徴を描き、個々の容貌個々の態度動作、個々の性質感情を發表するに力め、而も上述の如き古典希臘の高潔靜平なる氣品を保持して之を失はないのを上乘として居る。

この新しい時代の巨擘は先づ指をマグナ・グレシヤの人ブラキシテレスと、シキヨン市出身のリュシッポス(23)とに屈すべきである。彼等はいづれも紀元前四世紀の中葉からその末つ方にかけ、卽ちアレクザンドル大王と同時代に榮えた名工である。リュシッポスは特に大王に鍾愛され、大王の肖像を一手に引受くるの光榮を荷ふたと傳へられて居る。ブラキシテレスも亦た同樣に有名であつて、彼の作品で殘つて居るものでは先年オリンピヤの遺跡から發見されて、現今寂しき同地の博物館に珍藏されて居るヘルメス像が有名である。この任俠なる交通の神(メルキュリ)が父ゼウスの神の隱し子幼なきディオニソスをあやかし育てつゝあるところ、その氣高き風貌　波立つ頭髮、恰好よき雪白の五體の趣、蓋し世界に於ける男子美の最上乘かと思はれる。尙ほエゲヤ海中のメロス島發見のもので、現今巴里のルーヴル博物館に於て歐米の觀客の賞鑑を集めて居る美の神アフロディテ、所謂ミローのヴェ

イヌスが有名であることは勿論である。これも亦たヘレニズム美術の極致の一で、その作者詳かでないが、ともかく紀元前二世紀乃至一世紀に於てプラキシテレス若くばリュシッポスの傳統をうけた或る名工の手に成つたものらしく、吾輩はこれを前記のオリンピヤのヘルメスに配して、ヘレニズム時代の古彫像に現はれたる男子美と女子美とを代表する稀代の雙璧と唱へたい氣持がする。

近年フェニキヤのシドン市に於ける古陵から、大小三個の大理石の寢棺（サルコファーグ）が發見されたが、各側面には浮彫が刻んであつて、いづれもヘレニズム美術の傑作と見るべきである。その大なるものは浮彫中に認められるヽ大王らしい肖像に因みて、俗にアレクザンドルの寢棺と稱され、他の二者と共に君府の土耳其帝室博物館に珍藏されて居る。三者恐らくば大王の東征に從軍したシドンの王及びその家族の記念のために、大王の死後遠からざる時代に作られたらしい。大棺の四面にある所謂アレクザンドルの群像の拂へ方は勿論のこと、他の小なる王女のものらしき棺側の浮彫に、多數の哀める婦人の姿がとり〳〵憂愁悲歎のさまを示めせるに注視せよ、何人も直ちに是等の浮彫のすべてがパルテノン神殿のそれに比して遜色なきまで優に勝ぐれて居るに氣付くてあらう。若し上記の群像中に明かに大王らしき人物に加ふるに、希臘人マケドニヤ人ペルシヤ人が現はされて居なかつたならば、是等三棺の浮彫は全然古典美術に屬すと思惟されたかも知れない。シドンの地に希臘美術の榮えたることは聞えないから、是等のものは希臘本國の美術の本場に於て製せられたか、但しはヘレニズムの本場の名工を招聘して作られたかであらう。

希臘本國では、フィディアスの故郷雅典とリュシッポスを出したシキヨンとは尙ほ美術の淵叢と稱されて居る。シキヨンはコリント灣頭に位する有名なる一市で、屢有力なる僭主の政治を受け、猶ほ學藝復興（ルネサンス）時代に於てメディチ家の下にあつたフロレンスの如く、藝術の搖籃と謳はれた。本國以外に於てはヘレニズム世界に於ける二個の最大都市アレクザンドリヤとアンヂオキヤとは、各その富强と文化とを以てして、美術の創作や模倣が澤山出來て居つたに違ひないと思はれるが、而も世人の知れる如くにいろ〳〵の事情から、遺物を殘して居ないヽアンヂオキヤの如きは殆ど隱滅に終つて居るから實物を以て證徵する由がないのである。しかし、亞細亞の地がヘレニズムの藝術に貢獻して居ることはペルガモンの一市の活動がよく之を代表して居る。この市を中心とした新興王國は、既述の如く、當時の開化世界への侵入者たるガリヤの蕃民に對する勝利を基礎として國家を固めたのであるから、この恩寵を神に謝するために、幾多の建築や彫刻を作り、これらによつてペルガモン美術を優にヘレニズム美術の上乘に位せしむることになつた。この王家は當時一方には本國にある雅典の女神に向つて幾多の造營物や作品を奉獻し、他方では自己のアク

ロポリス山上にゼウスのために一大拜殿をしつらへた。その結果幾多の浮彫の群像や獨立の彫像に於て當代有數の美を發揮し、是等の一部分は今日獨逸や伊太利の博物館に殘存して居る。凡そ是等の內に珍藏されて居るガリヤ蠻民を主題とする彫像は、如上のペルガモンの美術の直接若くは間接の產物と考へてよろしい。昔は古典時代に於てペルシヤ人を擊退した雅典は古典藝術の崇美を發揮し、今はヘレニズム時代に於てガリヤ人を征服したるペルガモンはヘレニズム美術の偉觀を形作つた。而してかくの如き外國人の現はし方は、昔は服裝をつけたまゝのものであつたが、ペルガモンは之を裸體となし、その頭·髮·容貌·骨格·肉附、殊には悲壯なる臨終の瞬間に於る身體の苦鬪、感情の悶絕の有樣を巧みに描いて居る。かく現はし方に著しい相違はあるが、ヘレニズムのペルガモンが古典時代の雅典と等しく蠻夷に對する勝利の誇りの上にその文明の精華を發揮して居ることは同一である。その點に於て、ペルガモンは小亞細亞に於ける雅典、第二の雅典と稱しても差支ない。ペルガモンと相雙びて優秀なるは恐らくはロードスであつたであらう。この港市は、既記の如く自分の海口の玄關に日神の巨像（コロス）を据えて有名であるが、その外にかのレッシングの論文以來藝術界の注視をひいて居るラオコーン群像等の傑作を殘して居る。この群像に於て、今も尙ほ死の苦みを現はしたるロードス美術家の手腕と個性とが十分に窺はれるのである。

以上は大理石の彫刻美術につきて述べたのである。然るに同じヘレニズム時代は繪畫の勃興流行の時代である。古典時代に於ては、宗教を主題とした演劇が人心を支配したやうに、彫刻術が美術界の支配者であつて、繪畫は未だ十分に榮えて居らなかつたが、今や幾多の畫家が輩出して世人の信用喝采を博し、是等に關する美談逸話夥しく傳はつて居る。就中最も有名なるはアペルレス[25]である。彼はコス人であるともいひ、またエフェソスの畫家ともいひ、ともかくアレクザンドルに信任され、「朕の肖像はアペルレスの外描くべからず」と極められた位である。大王の肖像の一は大王が雷電を手にして立てるもので、エフェソスに於けるアルテミス神殿に安置され、この世界七不思議の一たる殿堂と共に天下に鳴り、羅馬のプリニウスの如きは親しく之を目擊したと傳へて居る。大王はこれが潤筆料二十タレント（四萬八千圓）を拂つたといふことである。アペルレスは實にヘレニズム畫家の祖にしてまたその泰斗である。彼の傑作はアレクザンドル像の外に眠れるアフロヂテと浴みせるアフロヂテであつたさうで、これら三者だけには自分の名を署したとある。蓋しヘレニズムの現代人は古典時代の靜平沈痛なる表現を喜ばず、活動的なるもの、新奇なるもの、或る生活のモーメントを示すもの、猶ほかのラオコーンの如きを求めた。之には大理石の彫刻よりも、板又は壁の上に於ける丹靑の業こそ一層相應はしけれ。偖こそヘレニズムには繪畫の大發展となつた。人生の俗事、民間に於ける浮世生活

の現象が喜んで描き出された、時人はえを浮世畫家（ユベログラフィ㉕）と呼んだ。理髪人や裁縫師や靴工などの店の有樣、市場に於て青物を載せた驢馬などが畫題となつたといふことてある。惜むらくば今日てはポンペイ等の壁畫を除きては、多くは殘らない。しかし今日傳つて居る所て、肖像畫の上乘は近年上埃及の乾いた沙の中から發見されたミイラの筥にそへた板畫に於て見ることが出來る。これらはミイラの主の肖像てある。その輪廓や手法や著色のいづれも鮮やかに一々個人の生前に於ける面影の特徴を巧みに寫し出し、二千年後の今日、尚ほ目のあたり當年のその人を見るが如き感を起さしめ、之を現代の油畫肖像に伍せしめても、殆んど遜色ないやうに思はれる。

繪畫と相竝びて時代の生活を表現するものは、いろいろ著色し、種々の恰好をした泥土の素燒の小人形てある。これらは玩具及び埋葬用のものてあつて、呼んて土燒（テラコッタ）、又は多く發見された地名に因みて、タナグラ人形ともいふ。是等の小品のうちには、服裝といひ態度といひ、全く現實の生活を示し當代の社會の階級や職業や流行に關して多大の暗示を與へるのみならず、美術としても太だ可憐にして賞鑑すべきものもある。

大王は自分の鑄造した貨幣には、神像の代りに自己の似顏を神の形相にて現はし刻し、且つおのれの名を明記した。これ全くこれまてになき新案てあつて、所詮、偉人卽ち神的個性を中心とする君主の神權といふ思想及びその制度の確立を示すものてある。この風大王の後繼者及びその後のヘレニズム世界の諸國の諸君主に傳はり、皆各自の似顏と名とを必ず自己の貨幣に銘せしめ、その後羅馬帝國の諸君主も亦たこの例を逐ひ、今日の西洋諸國多く之にならふた。それ故にヘレニズムの貨幣は、一方に於ては當代の流風たる個人主義と君主主義との發現の標徵として甚だ趣味深き遺物てある。之と同時に他方には歷史上英雄の肖像として、人物研究上缺くべからざる好史料てあるのてある。

第四講　羅馬共和國の發展

11 『シーザルのもの』

諸君！。第二、第三講に於て概略した所によれば、希臘文明の使命は知識、思想、藝術を以て遂に全世界を統一するに在つたやうに見える。然らばこれについて現出し、而もこれと相竝んで稱せらるゝ他の古典文明、卽ち羅馬文明は果して如何なる天職を有するてあらうか。これを大なる輪廓のうちに髣髴せんが爲に、私は有名なキリストの言葉、『シーザルのものはシーザルに與へよ、神のものは神に歸せよ』（馬太傳二二章二一節）を考へて見やう。この所謂神のものとは、吾人の文化史的見地から觀ると、希臘と東方との結合てあるかの希臘世界的文明のものてあつた。然しその詳細は第六講に說かう。然らばシーザルのものとは抑も何か。是れ卽ち羅馬人の天職であつたのてある。羅馬の大人物として劇に物語に人口に膾炙する元帥ジュリアス・シーザルて知られて居るイムペラトール・シーザルなるものは實にローマ文明の最高代表てあるイムペラトール⑦卽ち統治の所有者の義てある。元來は軍司令權のそれてあつたが、一切政治上支配權の總攬者のことになつて居る。シーザルは元來ユリウス・シーザルの個人名てあるが、その個人の勢力偉大てあつた爲に宛然職名となつた。

後世の獨逸てカイザー、及び露西亞てツァール②皆これから出て居る。故に今このイムペラトール・シーザルが如何にして出たか、而してそれが如何なるものなるかを說述したならば、吾人は羅馬文明の大本を窺ひ得るてあらう。私はこの方針を以て私の概觀を進める。

12 發展の第一期

恰も希臘文明がその古典の精華を極めたといふ紀元前五世紀に於て、當時、羅馬は如何なる文化狀態にあつたか。この國は、吾人に提供せらるゝ史料によれば、始めてその傳說時代を脫出して、やうやく歷史ある時代に入りつゝあるばかりてある。傳說によれば、それ以前に於ては王と號する君主の政治てあつたと云ふ。そして今や五世紀に於ては共和政治が行はれて居た。當時、ラテン民族の一たる羅馬人はチベル河畔、バラチヌス近邊に住家を建て、カピトル⑭山上にユピテルを祭り、且つ城寨を築き、その下にある凹地にはフォールムを開きて農產物の市場兼裁判の白沙となし、こゝにラチウム地方の人民を惹きつけて强大となり同地方に於ける有力なる獨立國の一となつた。その大さ五世紀の後半に於ては、面積約七十方里（壕河泉の平野程）、人口は田舍を併せて全國民十五萬許りと推定せられる。この些々たる田舍市が、後にはバラチヌスを中心とする七丘の上に擴りて世界都市となり、同時に地中海沿岸の全世界の主人公となるべく歷史上運命づけられたのてある。所謂『大なる帝國の小

さき始まり」とは卽ち是れてある。この國の市民は羅馬市民（クイス、ロマーヌス）⑤として大なる誇りを有した。その權利は最初上流社會の間に限られて、民衆には未だ完全に及んで居なかつたが、五、四兩世紀に於て、隣國との戰爭、國家の擴大と相俟つて自然、屢々民衆の要求が起つて屢々次第〳〵にこれらの者にも讓與されていつたから、三世紀の始には、民衆は貴族と法律上平等の權利に到達し、これと同時に全國人口の上下の協力一致を獲た結果、羅馬の版圖は次第に膨脹して、半島本土の殆んど全部を蔽ふに至つた。これを羅馬史の第一期とするのてある。

13　第二期

茲に一新時期が開かれた。卽ち羅馬が三世紀に於て、當時の世界に於る國際間に伍し、竝にその文明圈に入ること是れてある。

これは紀元前二八〇年、ヘレニズム世界の代表的君主エピルス國王ピルルス⑥が、さながら西方に對するアレクサンドル大王たらむとするかの如く、アドリヤの海を越えて伊太利に入り込むて來たが爲めてあつた。羅馬は幸にもピルルスを擊退した。けれどもその次には西部地中海上の雄カルタゴ、卽ちボエニ（フエニキア人）⑦と爭はなければならなかつた（二六四―一四六）。この衝突は、羅馬にとつて希臘のペルシヤ戰役と同やうに、極めて重大なものてあつた。第一、將來西方文明の支持者にして傳播者たるべき羅馬が東方文明の代表者たるセミチック文明との競爭てある。兩者の間には種々の相異る點がある。羅馬ては自由農民が全國皆兵となつて居たけれども、カルタゴ人は自ら兵役を厭ひ、アフリカ、ヒスパニアの土人を雇ふて、兵士として使ふて居た。加ふるに羅馬にはイタリア人の間に鞏固な同盟國がある。これも亦た一の強味てあつた。カルタゴは海軍の強にして羅馬は陸軍國てある。羅馬は開戰の始めにはまだ全く海軍を持つて居なかつた。只だ第一ボエニ戰役の進行と共に、始めて、カルタゴに倣ふてこれを建造した、さうして始めてカルタゴに對して勝利を得ることになつた。けれども、この戰役の尤も重大なる意義は、それが單に、カルタゴ一個との戰役たるに止らず、遂にヘレニズム諸國の政治上運命にも係る戰役となるべきものたるに在るのてある。現に第一ボエニ戰役の結果、羅馬共和國は始めて伊太利以外に領土を得た。羅馬人はかくの如きものを屬州（プロヴィンス）と云ふた。卽ちシチリアがその始てある。この島の領有は猶ほ近時、日本が臺灣を領有し、米國がキユーバ及びフイリピンを確有した如く實に羅馬が世界の列強に成り上つて而もその均勢を破壞する端緒てある。次いて第二ボエニ戰役が起つた。說明するまでもなく、これ稀代のカルタゴの國民的英雄ハンニバル⑧の劃策及び努力によるカルタゴの恢復戰てあつて、而も羅馬の地中海沿岸に於ける一切世界征服てふ運命が事實上決定するか否やの危機の絕頂點てあつた。この大いなる恐ろしき運命の分れ目に於て、羅馬共和國の一切

の強點—大スキピオ等の如き偉傑の輩出もその一である—が現はれ相協力綜合してザマ(9)(二〇二)に於ける最後の勝利となつたことは、世界史上尤も刮目すべき大事件の一である。

これによつて古代の世界史が、政治上、はた文化上、如何になり行くべきかと云ふ將來の大勢が定まつたのである。卽ち政治上に於ては羅馬化といふことである、文化上に於てはヘレニズム化といふことである。これを世界史の總體から見れば、こゝにヘレニスチック＝ローマの融合文明の形造られることが決定したのである。

如上は紀元前三世紀に於ける羅馬人の政治的業績の大綱である。而してこの同じ世紀は世界の文化史上から見れば、希臘の世界的文明の最隆盛期である。アレクサンドリアに、プトレマイオス二世フィラデルフォス(10)左愛王(二八五—二四七)及びそのムゼウム(11)が榮えて、希臘文明の現代的發展の光を放つて居る。上述のビルルスの侵入は、この廣大なる背景を負ひ、その文明の勢力を率ゐて來たのである。彼の軍隊中最も具象的偉觀の一例として象隊（三、9）がある、これが始めて見たる西方人の心胸を寒からしめたことを思はゞ、ビルロスが何ものを代表したるかゞ分明しやう。この時、羅馬人始めて、大規模に希臘文明に接し、始めて深刻に自他の差別を感じた。その適例はビルルスの陣中に使した羅馬使節ファブリチウス(12)一行の取つた羅馬的態度が之を明かに示して居るではないか。けれども、この羅馬が當時直示し實證しておいた同じ廉潔剛直な古武士的美風は、到底、長く彼等の子孫の間に維持せらるべくもなかつた。それより百七十年後の羅馬人を見よ。この時、ヌーメディアのユグルタ(13)征討の戰役（一一一—一〇五）に於て、羅馬人、殊にその上流社會の腐敗し貪婪飽くなきことが天下に曝露されたではないか。何が故にかくも變化したか。その譯は次の如くである。カルタゴ戰役竝に東方諸國との關係が進むに隨つて、イタリアの內外ともに、所在に幾多の羅馬の同盟國が出來、その多くは羅馬の屬國同然となり、これと同時に征服地のうちから、イタリア以外に於ける直轄領地卽ちかの屬州（プロヴィンス）が增加し行きつゝある。アハイア(14)（今の希臘本部）、アジア（小亞細亞）の如きこれである。かくて玆に羅馬市民卽ち羅馬共和國の主權者の任務は公私ともに多事となり且つ大規模となつた。彼等は一方に於て將軍若くは政事として地方に赴任し、他方には大地主若くは御用商人（ネゴチアトーレス）や、收稅受負人（プブリカニ）(15)として土地の開發や收稅事務に執掌した。こゝに羅馬の社會は一變した。卽ち、昔は小規模の農業を以て國を立てた羅馬は今や商業及び大農を以て財政經濟を營むこととなつた。その模範は近きにある、卽ちカルタゴ及びヘレニズム諸國の資本主義的經濟狀態が之を示して居る。卽ち羅馬人はこれに倣つて奴隸及び貨幣を使用したのである。彼等の間から代々又は一族の間に最高の公職に登りて、一年の任期を勤め了ると共に、こゝに容易に經濟上投機を行ひ暴富を作るものが現はれる。いはゞ國家の公職を保てる富豪といふ閥族社會が新に起

つて來た。けれども、市民の多數は生活の贅澤と物價の騰貴と、殊に資本家の奴隷經濟に壓倒された。これがために、經濟上失敗してその所有地を失ひ、共和軍國に對する市民の實權を盡すことが出來ず、よつて多くは都に上りて身を豪族に托し、その政治運動(アムビチオ)(16)の手先となるものさへ少くはなかつた。

つまり、ピルルス戰役後約一世紀半の間に於て、羅馬の社會は漸次資本的傾向に壓せられて、いはゞ商化しつゝあつたのである。

東方から幾多の人物及び文物は、各自にその利益と弊害とを竝び齎らして、イタリアに流れ込むだ。人物とは他なし、かの開化したる希臘人乃至希臘化した東方人である。その多くは古代社會に特有なる奴隷であつたことは言ふまでもない。彼等は政治上戰爭上運命若くば經濟上變轉が生むだ必然の產物であつた。されば彼等の多くのものは敎育ある紳士であつて、征服者たり主人たる羅馬人よりも優に開けて居つた。實に希臘亡國の志士ポリビオスは其の一人であつた。彼は羅馬の將軍スキピオの家の知遇を受け、その一族の知識の源泉となつた。東方文物の流入口は羅馬府を流るゝ、チベルの河口港オスチア(17)と南方イタリアのカムパニアに於けるプテオリ(18)港とである。殊にプテオリは當時イタリアの最大良港であつた。アテーネの哲學者、ベルガモンの美術家、アレクサンドリアの科學者や詩人、アンヂオキアの踊子、皆こゝに上陸し、これからその附近の富豪の別莊に頒たれ、若くは陸路アッピ

ア街道をさして都へと志した。かくの如くして、ヘレニズムは滔々として羅馬社會に瀰蔓し、同時に奢侈と弊害とを伴ひ齎した。この際、羅馬に嚴肅なる道德家にして有名なる政治家老カトー(19)（一四九年歿）出でゝ、大聲疾呼、國人を警戒したのは、政治史上はた風俗史上顯著なる痛快事であるが、而も大勢如何ともしがたく見えた。

14　第三期

かくて羅馬の歷史はその共和國の第三期に入つた。その標幟はグラックス(20)の改革運動の破裂である。當時（一三三―一二一）是等兄弟は、上述の豪閥卽ち公職壟斷の資本家の跋扈、軍國衰弱の傾向に憤激して相續いて出て護民職(トリブーン)となるや、熱烈に改革を唱道して、自由農民の保護、土地及び市民權の分配を標榜し、以て民主主義の上に共和國の軍國の美風を恢復再興しやうと欲したが、これら兄弟の運動はおの〳〵豪族の反對のために失敗に終つた。

しかし、兄弟の努力は水泡に歸しなかつた。何となれば、玆に此の運動により、三個の痛切な時事問題を喚起し、これ等の問題はグラックス兄弟の死後約百年間の內亂の惱みと外戰の苦みとを經て始めて解決せられたからである。

然らば當時喚起された時事問題とは何か。（一）イタリアにおける地方の地主はこゝに自覺を起し、各

自に羅馬市民としての參政權の要求を提起した、隨つて羅馬市民權を廣く分配すべきや、否や。(二)ヘレニズムの弊害顯著となり、グラックス兄弟その人らの民主的運動及び熱烈な辯舌は、現にこの弊害の發現の一と目せられ、こゝに故カトーの遺志を繼いでラテン國粹を保存しやうといふ保守的運動を喚起した。ラテン文學の勃興はこの時である。ラテン文學の巨擘シセロ(21)は實にこの風潮發生の裡に生れて、それから敎養せられたのである。○(三)軍國の維持と生活の救濟とは版圖擴張と共に當時羅馬の社會の必要缺くべからざる條件であつた。隨つて改革はさしあたりの焦眉の急務である。しかし、兵力の伴はなかつたグラックスの改革は線香花火の如く消えて了つた。因て苟も經世濟民の大業を成さんと欲せば、兵馬の大權を帶びた者がグラッカス的運動の衝に當らなければならないことが現實に明瞭となつた。而もこの大權は羅馬共和國の憲法が或る一人に限つて與へらるゝことを嚴禁して居る。換言せば、つまり、イムペラトールの現出が實際上必要となつて來たが、しかも理論上これに對して國家の憲法が反對して居るのである。されば、如何にしてこの矛盾を調和すべきかゞグラッカス失敗以後の政治問題となつた。

私はこの第三問題を中心として羅馬史を說くことが、その性質上適切であると思ふ。

抑も羅馬人に向つて始めて國家の憲法に關する理論を提示したのは、上に指摘したヘレニズム世界出身の名士ポリビオスであつた。彼は彼の故國アハイア聯邦の末路、羅馬勃興の潮合に於ける自己の經驗と觀察とに基きて有名なる歷史を書いた。彼はそのうちに於て羅馬の國家組織を解說批評して居る。彼のこの政論の根據は勿論アリストテレスの政治學にある。けれども、ポリビオスの著書は希臘語で書いてあつたが故に、未だ十分ひろく羅馬人に影響を與へるまでには至らなかつた。その跡を受けてかのシセロは羅馬人の間、而も羅馬の政治界から現れ出でた。彼はアリストテレスの學說により拉典語を以て、始めて有力に羅馬共和國の憲法問題を書いて國人を警醒した。それがプラトーの著作の如く對話の形式で面白く話されて居る。抑も共和國の憲法によれば、すべての公職は悉く任期一ヶ年て且つ必ず同僚があつて相制し合ふて居る。最高行政の任に當るコンサルも亦たさやうてあつて、その定員は二名てある。民衆の利益を代表するために設けられた護民職(トリブーン)も定員最初四名、後に二名てあつた。そして凡そコンスル、その他の最高公職を完全に勤め了つた者の中から選任して元老院(セナートス)(22)が組織された。この會議は憲法上一個の諮問府たるべきものてあつたが、議員の任期が終身て、定員が三百名てあつて、自然に重要なる政治機關となり、事實上共和國の財政外交を司る中央政府の觀をなしたのである。兵馬統卒權は上に注意したやうにイムペリウムと稱へられて居る。この權力は極めて重大なるものてあつて、平素は如何なる最高公職にあるものと雖もこれを掌握し得なかつた。コンスルと

雖も亦た平生はさうてある。コンスルは羅馬府の一定の城壁の內に於ては絶對にこれを行使することを許されない、そしてこの城壁外においてこれを行使するのは、イタリア本部に於て內亂、又は外寇のために戒嚴令の布かれた場合に限られて居る。固よりコンスルが屬州（プロヴィンス）に赴任する際、その地方が危急に陷り又は不穩の狀況にある場合には、その在任中、この大權を委任せられることがある。然し、彼が任滿ち、その地方から歸國して、一歩たりともイタリアの土を踏まんとするときは、必ず先づこの權力を辭した後であらねばならぬ。故にシーザルがガリヤ總督の任滿ちて政敵ポンペイウスに向よや兵を率ゐてイタリヤ北境のルビコンを渡つたのは卽ち違憲てある。彼が其際『投られたり骰子（ヤクタ・エスト・アレア）』と言つたと談り傳へらるゝのは如上の憲法上傳來に楯突く豪語てある。イムペラトルなる稱號は何てあるか。これは憲法によれば元來羅馬の公職てはない。只だ有力なコンスルがイムペリウムを委任されて、よくその任務をつくした場合に、これに率られた部下の軍人が私的にその人を尊んでかく呼んだ稱號のみ。例へば、ポエニ戰役に於ける大小スキピオ[23]の如きこれてある。

今やグラックス兄弟の騷動から、アクッチウムの決戰ころまての約百年間（一三三―三一）に於ける內外に於ける危機は正さしくかくの如き者を要求喚起した。スルラとマリウス、ポンペイウスとジユリアス・シーザル[24]が出たのはそれてある。彼等はいづれも國家の內外共に非常なる危機に際して現はれ、內亂を鎭め外征を張つて羅馬の大國家の建設者となつて勳功多きに居るが、その際、屢々共和國の憲法に違反して連年コンスルとなつて兵を統帥し、その兵は貧民より募つたもので、是等は時と共に職業的軍人となり、各自の將軍と特別の親密な關係を作ることゝなるや、將軍はその部下から、イムペラトル と歡呼せられて、さながら一個の憲法上規定の公職の如くになつた。これ等のものは或はディクタートル[25]となり、或は相互に結托して政權を壟斷し、事實上君主同然の權力を掌握した。只だ國王（レックス）の稱號は羅馬の憲法史上の傳說が許さない所てある。隨て、王號は絶對に避ける必要があるが、それと同時に何か從來憲法上にない新名稱が必要となつた。これにはイムペラトルこそ最もよく機宜に適合するものてあるのてある。

グラックスの後に現はれた羅馬國粹保存運動の代表者は前記のシセロと少カトーとてあつた。シセロはヘレニズムの敎育を受けて而もその弊害を除き、共和國の國法及び道德を維持しやうと欲したものてあつた。カヂリナ[26]の陰謀調伏はその一例てある。少カトーはジユリウス・シーザル暗殺者の一人てあつた。けれども當時ヘレニズムは社會の大勢てあつたから、いづれのイムペラトルと雖も能くこれを度外視し得なかつた。ジユリウス・シーザルも亦たヘレニズム派の一人てあつてその文物、例へばアレクサンドリアの曆法（ジュリアン曆）を輸入し、ヘレニズムと羅馬國粹との調和を計り、市民權を廣く天

下に分配するの端緒を開き、晩年アレクサンデル大王の如く、ユーフラテス河以東の國、卽ち當時のパルヂアを征服しやうと企て、その際東方の人民に臨むには、かの大王の如く帝王の尊號[27]を必要としたやうてある。然るに羅馬てはこの稱號を許さない。これが前記のカトーやブルーッス等の共和主義者に國憲擁護の口實を與へ、ためにシーザルの暗殺となつた。

このジユリウス・シーザルの死後彼が遺した天下維持に缺くべからざる職權を紹いだのは、彼の養嗣子オクタヴィアヌス・シーザルと故人の友人でその公職コンスルを繼いだアントニウス[28]との兩人てあつた。彼等は最初相結托して各自の反對者を除いた。それてかのシーザルの下手人は勿論のこと、シセロさへ非命に死し、共和國の舊道德の維持者は多く滅亡し、天下の形勢ます〳〵インペラトルの統一獨裁政治を招致した。そこて必然的に如上の兩雄の抗爭となつた。今、兩者の立場を見ると、オクタヴィアヌスの出發點は私的てある。革命的てある。彼は因て自己を憲法的ならしめるために、都羅馬に據つて、力めて元老院と結托して自らを擁護し、アントニウスは之に反して東方に赴いて、その古くから開けた文明と豐富なる資力に依賴し、殊にアレクサンドリアに於てかの妖艶なるエジプト女王クレオパトラと結び、故シーザルの遺兒シーザリオンを擁してオクタヴィアヌスに對抗した。故にオクタヴィアヌス對アントニウスの抗爭は、文明史上ローマンドムと、ヘレニズムとの爭てある。この

東西對抗の決戰は恰も東西の境上にあるアクチウム[29]てあつた（紀元前三一）。この結果、西方の勝利となつた、卽ち羅馬國粹の勝利てある。けれども、この西方の勝利は只だ政治上のみに止つて、文明に於てはオクタヴィアヌスの幾多の國粹的努力を以てしても、尙ほ終にヘレニズムの潮流を防止し切れなかつたのてある。當時の詩人ホラチウス[30]の所謂『勝利者たる羅馬は敗れたる者に征服せらる』とは、卽ち正さしく政治上勝利者が實は文明上敗北者たりといふ如上の逆語的現象を尤もよく形式化して居る。

第五講　羅馬帝國の文明

オクタヴィアヌス①が、前講に見たるが如く、アクチウムの一戰で、天下を一統したる以後の羅馬の支配は、特に羅馬帝國と稱せらるるが常てある。この帝國が紀元後三九五年、永久に東西に分立するまての約四百年間の歷史は、その性質上、帝國の發展よりもその狀態に、寧ろ重をおくべき歷史時代の一てある。因て私はこの時代全體の發展よりも、政治及法律、社會、宗教の三狀態に分つてこの帝國を說くのを適當と思ふ。

15　帝國政治の特相

羅馬がピルルス戰役以來、カルタゴ戰役を中心として、アクチウム役まて約三世紀間に作り上げた政治團體は最早羅馬固有の民族乃至國民的性質を失ひて、幾多の民族國民を包括した世界的統一國家となつて居る。此の意味の國家は主としてヘレニズム世界の思想に基いて居る。しかしながら、羅馬固有の社會には、ローマ傳來の共和主義が生へぬいて居つて、これが古希臘の自由思想と結合して尙ほ深く人心を支配して居る。よしや、スルラやマリウスからオクタヴィアヌスに至る幾多のイムペラトルの勃興のために、如上の羅馬固有の共和思潮は屢々打擊を蒙り、殊に大シーザー暗殺後の政變に

於て、かのカートー、ブルータス、シセロの如き有力なる共和主義の人物凋落し、跡に殘存せる人物は宛がら去勢されて無氣力に消沈して仕舞つたとは云へ、同じ思潮は猶ほ流れ、依然として『元老院竝に羅馬人民』(S. P. Q. R. = Senatus Populusque Romanus)といふ羅馬固有の國家の形式を維持せんと欲した。アクチウムの勝利者オクタヴィアヌスは人となり明敏にして愼重、『急げ靜かに』を一生の標語とする用意周到な政治家であつた。されば彼は如上の國體保存の思潮の暗流に鑑みて、內亂平定の後、幾ばくもなく元老院に向つて一切の權力——これを彼は公物(レス・プブリカ)と名づけて居る②——の還附を申出た。然るに元老院は、一旦これを受納した後、改めて、オクタヴィアヌスにアウグスツス(尊嚴)といふ尊號を上り、且つ天下平和のために尙ほ屬州(プロウインキエ)及び軍隊(エクセルキトゥス)を保持せんことを乞ふた。是れ廣大なる地中海沿岸の世界の支配を維持するには、この第二のシーザーの個人的勢力が實際缺くべからざるものてあつたからてある。その結果、一個の妥協が成立した。卽ち屬州は二種に分類されて、元老院のものと、アウグスツスのものとに分たれた。後者のものは邊境に在るか、又は內亂の狀態にあるかてあつて、つまり尙ほ兵力を要する屬州てある。

されば世上の所謂羅馬帝國なるものが、尙ほ共和制を保持して居るものてあることは明かてある。卽ちその單一支配者アウグスツスの外に、元老院が尙ほ共和國の形式に從つて舊に依つて支配して居

る。換言せば、羅馬帝國なるものは、その成立の當初、未だ單一政治（卽ち君主政治）ではなく、兩頭政治であつたのである。けれども、その後の實際の趨勢を見るとアウグスッス及びその後繼者ヂベリウスの政治は益々勢力を振ひ、之に反し元老院政治は有名無實となりつゝあつた。つら〳〵、單一支配者の性質を按ずるに、彼は元來國家の一市民で權利卽自由に於ては、他の市民と同等である。只その格式品位に於て上位に在るものである。アウグスッスはこのプリンッェップスの語を好んで稱號として愛用した。これはつまり『元老院及び人民』の長者の義である。けれどもこの語が終に君主と云ふ意義を有つやうになることは、羅馬及びその後の西洋政治上文化史發展の運命に外ならぬ。又たアウグスッスは常に軍隊を統率したから、自らイムペラトルとも稱す、卽ち統治權の所有主である。この名稱から英語の皇帝が起るのは申すまでもない。又た彼の政治は地方及び人民の安寧幸福を目的としたるが故に、この點に於て、彼は古羅馬の護民職の權力を使用するものである。

これを要するに、彼は一人て共和國の一切重要なる職務を兼攝することゝなつたのである。猶ほこの單一支配者は、事實上かの偉大なるジュリウス・シーザーに始つたのであるから、歷代のアウグスッスはその後繼者として、自らシーザーの稱號をもとつた。

さて、この職務の引繼は如何にして行はれたか。事實上ては一家父子相傳が尤も多く、若くば養子の相續が屢々行はれたこともあるが、法理上ては無條件の世襲相續は許されてない。卽ち就職の際、元老院の承認、軍隊の贊成、人民の歡呼を受けることを要した。故に何等かの薄弱なる人物の就職の場合には革命又は紛爭が起りやすかつた。帝國の極盛も過ぎて「羅馬」の稜威の衰へかける紀元後三世紀、こゝに軍人皇帝時代といふ時代が現はれたのは、卽ちそれて、軍隊統率の將軍が部下の兵力を擁し、若くば部下に奉せられて爭ふて九五の位に登り、その間地方割據の場合もあり、君主の改易、統治の傳統頗る亂れて居たのである。

然らば最初かくの如く共和的性質を帶びた羅馬帝國が如何にして專制化したか。これが次の問題である。曰く、軍人皇帝時代の內亂の弊極つて、三世紀末つ方から現はれた皇帝デオクレチアヌス、及び四世紀の上三分の一を治めたコンスタンチヌス大帝の統一政治が、チベル河畔の舊都を見すてゝ歐亞の接近するところ、ボスフォロス海峽方面に向つて遷都を斷行し、兩々相俟ちて帝國の專制化を完成したのである。この東遷の政治上の理由は外てもない。(一)苟も皇帝權の獨立鞏固を實現するには、古羅馬の共和的傳統、就中元老院及び近衞兵から受くる肘制を避くるを要した。(二)又たボスフォロス海峽地方は帝國の國防上竝に經濟上極めて重要なる位置を占めて居る。東はエウフラテス、北はダニューブの境を守る兵略上の要地にして、歐亞水陸の交通經濟を制する咽喉はこの地方に若くものはなかつ

た。(三)更らに東方人民はヘレニズム時代以來專制政治に慣れ、君主に對して匍伏叩頭(プロスキーンス)の禮を取る風がある。」是等の人民を朝廷に保ち羣衆のに下に繫いてこそ皇帝の威嚴眞に發揚するなれ　實にこの東遷以後皇帝は始めて臣下から「主(ドミヌス)」と呼ばれた。是れ正さしく神に對する尊稱である。

之を要するに羅馬の歷史をその最初から通覽するに、このものは、元來紀元前四世紀に於て、羅馬固有民族の貴族的共和主義を基礎とする一個の小やかな國民的國家であつたが、次の三世紀間にイムペラトル、シーザル、プリンツェップスが支配する大いなる世界的統一國家となり、而もこの所謂帝國は更らに次の三世紀間に共和的傳來をも失つて專制化したのである。

16　土木事業　法律學

次にこの帝國の文化上性質を察するに、私は支那帝國に比すべきものがあると思ふ。支那が自ら世界の中華を以て誇稱するが如く、羅馬は殆んど一切の古代開化世界を包容し、その諸文明を利用し得て、自ら全世界の主人公を以て居ることになつたのであつた。然らば羅馬人の知識生活に於て何等かの新機軸を出したものがあるか。曰く、大いにある。それは彼等の驚くべき政治上伎倆に相應する土木建築と法律學とである。

羅馬人の土木建築は、之を希臘人のそれに比して、顏る相違が認められる。彫像壁畫等の美術に於ては、哲學文學等に於けると同やうに、羅馬人は顏る多く希臘の先蹤を逐ふた。彼等はこの點に於て幕倣的折衷的たるを免れなかつた。しかし、土木建築に於ては彼等固有の特徵を發揮した點がある。即ちアーチを利用した。彼等の遺したる排水竝に上水道、橋梁、凱旋門などを見よ。カンパニヤの野に斷續して殘れる水道、南伊に向つて走れるアッピア街道、羅馬市に殘れる萬神殿(パンテオン)、コリセウム、幾多の浴場(テルメ)の如き今日尙ほ全世界の旅客と歷史の鑑賞家とを驚嘆せしむる。かくの如き遺跡は啻に中央に止らない、苟も羅馬の支配の及びたるところ、東はシリヤの沙漠中から西はイスパニヤに至り、北はブリタニヤの島、ライン・ダニューブのほとりから、南はナイルの上流、アフリカの內地に及んで居る。希臘の建築は美と纖麗との二語之をつくして居るとすれば、羅馬のは雄大と堅牢とを以て勝つて居る、換言せば羅馬人の實用的實際的傾向がこゝにも現はれて居るのである。

しかし、土木建築につきて私はこれ以上に細說するの餘裕を有たない。之よりも他の特徵に向つて、より多く注目しなければならない、即ち羅馬の法律學これである。

そも〳〵羅馬法は市民權の發展と版圖の擴張と相竝つて竝行進步した。私はこれにつきて唯だ重なる發展の階段のみを指摘する。(一)市民權は共和國に於て極めて重大なるものであつた。何んとなれば各市民はその家庭に在つては强大な家長權を振ひ、且つ羅馬固有の祭祀を司り、フォールムに於ては

國家の裁判に立合ひ、集會（コミチア）に於ては立法者の一人たり、國外に出ては國家の干城たるものであつたからてある。彼はかくの如く重大な責任を有したから、それだけ名譽を重じた。苟も不名譽あるときは市民權を失ふた。不名譽の最大なるものは負債であつて、これがために自由を失つて奴隷となつたものもある。この樣な市民の身上に關する羅馬固有の習慣法を名けて民法（ユスキヴィレ）⑤と云つた。この習慣法は、かの貴族と民衆との抗爭の進みゆくや、民衆の要求によつて始て成文となつた、（二）ポエニ戰役以後共和國の擴大と共に、外國出身の臣、民就中希臘人が增加した。是等には羅馬固有の民法は直ちに適用し得ない。因て、羅馬人と外國出身者との別なく、一切臣民に共通する民法の必要が起つた。これには羅馬の公職の中にプレートルといふ行政兼司法の高等の役人が與つて力がある。この職は毎年改選され、當選した者は各自に立法上の功名を競ふて法令（エディクツス）を發し、時勢の要求に應じた。そこて自然彼等の內に特に外國出身者を支配する者、卽ち外國人判官（プレートル・ペレグリヌス）ともいふべきものが出來て、これに對し調和的法令を發布することになつた。かくの如き立法に立法が重なりて羅馬法中に萬民法（ユスゲンチウム）⑥と名けらるゝ法律が發展したのてある。（三）アウグスッス以後更に新らしい法律の源泉が始つた。それは皇帝權てある。皇帝は勅令（コンスチトゥーチオネス）を發布した。これは法律と同等の效力を有する。尙ほ皇帝は有名な法律學者の學說を法律と同等の效力ありと命令決定した。當時帝國の政治の擴大と共に有名な法學者輩出した。法律綱領（インスチトゥチオーネス）を著はして有名なるかのガイウス⑦（紀元後百五十年頃）は其の最も傑出した一人て、後、ユスチニアヌス大帝が勅令を以て法律と同等の功力を有するものと定めた五大法律家の隨一てある。これらの勅令竝に學說が常に參照したのは、希臘人の法律の外に、希臘の哲學思想てあつた。この哲學思想は申すまでもなく世界主義及び博愛主義に秀てて居たストア派の如きは、その尤なるものてある。その結果、羅馬法は帝國時代に入りて數世紀間の立法の外に種々の研究現はれて益々發展して廣大なる文學となつた。この發展の一面は卽ち自然法（ユスナツラーレ）⑧てある。これは希臘哲學の自然尊重、人道推奬の說に基くものてある。かの萬民法（ユスゲンチウム）は明かに奴隷を認めて居る、しかるに自然法に至りては全然之を非認して居る。この一事、羅馬法の發展が如何に人道的になりつゝあつたかを推知せしむるのてある。

之を要するに、羅馬法なるものは羅馬の擴大と共に羅馬固有の民法から出發し、國家の擴大と共に、萬民法に發展し、以て世界的となりつゝある國家の要求に適應し、之と同時に、理想として現實社會を離れた自然法をも立てるに至つたものてあつて、隨て、時と共に國民的性質地方的色彩を超脫して、最も學術的となり、現今世界の三大民法（回敎法、英國法、羅馬法）中、最も廣く諸國に流布して參照せられる一大權威となつたのてある。

但しこの法律學が羅馬帝國の末路に於て專制化した統一君主の獨裁的權力に負ふ所が多いのは、前

述した所によつて自明であるが、尙ほ一層よくこれを證明する一大事件がある。それは羅馬法の典籍が餘りに浩瀚であるがため、司法行政の實用にも、はたまた法律の學習にも、かた〳〵不便が多いから既に上に述べた東羅馬皇帝ユスチニアヌス大帝(五二七―五六五)が六世紀に出て、彼の天下一統の權威に據り、これを取捨編纂せしめて此の不便を救ふたこと是れである。此の集成事業の産物はいふまでもなく次の三者である。(一)ユスチニアヌスの現行法典(コーデックス・ユスチニアヌス)(二)法律綱領(インスチツチオネス)、即ち法律學習用の教科書(三)法律類纂(パンデクテ)及び追加(ノヴェレ)。而して後世はこれらを總稱して民法全集(コルプス・ユリス・シヴイリス)と名づけることになつた。こゝに民法と云ふのは、必ずしも今日の法學上の所謂民法に相當するものばかりではないが、只だかくの如きものがその大部分を占めて居るからである。ともかくこの大編集に賴りて、羅馬法が、その生産者たる羅馬人の天才と、その編纂者ユスチニアヌス大帝の名と共に、永久に傳はりて、世界の法律學界の至寶となつたのである。

17 社會及び經濟

ラヂウム地方の農民のフォールムは今や全世界の支配者のフォールムとなつた。このものは經濟上に於ては全帝國の株式取引所の一として活潑な投機場となつて居る。この世界的資本化の傾向と世界的國家に向ふべき政變とは相俟ちて羅馬の社會關係を一變せしめた。即ち古い貴族は零落して新らしき官僚的富豪起つて來た。その中に所謂新人(ホーモー・ノーヴス)⑩なるものすら頭を擡げた。新人とは祖先一族の間に何等誇るべき公職に就きたる者もなく、自分が新に立身出世して是等の公職掩有を一家の誇とする閥族に伍することになつた成上り者てある、かのシセロの如きはその一人てあつた。是等の富豪の子弟子孫は時と共に墮落し、彼等の社會の腐敗は所謂帝政の初期、即ちアウグスツスからネロ(六八年歿)⑪に至る間、是等のジュリア家の治世中に極つた。ネロ以後、やゝ剛健質素の方へ一時反動があつた。これから間もなく『五明君』が出た。その最後最大の皇帝が即ちかのストア派哲學者て『靜思錄』(メディターシヨン)を著はした有德賢明なるアウレリウス・アントニウス(一六一―一八〇)てある。しかし、當時、奢侈淫逸が羅馬上流社會の大勢てあつて、知らず〳〵の間に帝國の活力消耗し、如上の明君の治世を境界として羅馬の隆盛はその峠を過ぎたと推定せられる。

この間、羅馬府の發展如何を窺ふことは、社會狀態を觀察する上から必要てあらう。シーザー以下⑫の初期皇帝列傳を書いて有名なるスエトニウスに據ると、アウグスツスは自分の生涯中に羅馬の都が盛大となつたのを誇つて『余は瓦石の羅馬を見出し、而て、これを大理石として遺したり』といはしめて居る。これ羅馬がヘレニズム化して世界市となつたことを意味するに外ならない。この間、ヂベル河畔の都には東はシリアから西はヒスパニア、北ブリタニアから南エジプトに至る間の王侯貴人から

學者商人冒險家など、滿天下の各種の人物集散去來し、その人口帝國の盛時に少くとも百萬以上に及んだと思はれる。マルカルト氏の推算によると、當時人口百六十萬に上り、其の内九十萬は奴隷であつたと云ふことである。

然らば羅馬府は古代が見たる最も人口衆多なる世界市となつて居る。何故にこの七丘上の市はかく多數の人口を惹きつけたか。その源因として私は次の三點を指摘する。(一)種々の見世物の娯樂が提供せられる、これは凱旋、祝祭、慶事、葬式などの晴れの場合に、有力者又は富豪が爭ふて自ら施主となつて營ましめたのである。(二)穀物法によつて穀物の賑恤が行はれる。(三)豪族に依附して職業に有り附き、或はその家庭教師（パダゴーグ）、若くはその家の放被民（リベルタ）（元來奴隷たりし者）がとなつて御用人を勤める、その他あはよくば遺産を饒倖せんとする多數の冒險者流や、浮浪民が滔々相率ゐて流れ込む。

此の外に西方地方が東方地方に比して經濟上劣勢にして衰弱に傾きつゝありといふ消極的理由も亦た吾人の考量中に入れて置かねばならぬ。

抑も羅馬帝國の建設は地中海沿岸世界のいはゞ自由貿易時代を作り出したといつてよろしい。苟も皇帝統治權の及ぶ所、何等の障壁も關所もない、人間の交通も商品の運輸も全く自由である。羅馬の貴族が小亞細亞の山水を弄び、シリアの市場に出入し、ナイル河畔の古跡を探る、すべて勝手氣儘である。地方人士も羅馬帝國の臣民として自らローマイ人と稱して、自らを帝國外の人民から區別し、帝國内到るところ自由に交通して居る。彼等は次第に羅馬の市民權を獲得した。帝國の政治の治く行きわたり、民族國民の政治上區別のうすらぎゆくや、紀元後二一二年、皇帝カラカラの時、遂に滿天下の自由民に羅馬市民權を賜ふに至つた。かくの如くして天下の生靈は、苟も羅馬帝國の臣民にして、これに忠實なる限りは、すべて羅馬の政治と法律との保護を受け、各自の生業に安んじ得た。『羅馬の平和』（パックス・ローマーナ）⑬とは卽ち是れてある。

しかし、羅馬帝國は文化上社會上からいへば東西二大世界から成つて居る。而して是等の世界相互間に於て如何なる經濟上の關係が成立して居つたかが興味ある世界史的問題である。東方、卽ちヘレニズム世界はアンチオキア、アレクサンドリア等の世界市を始めとし、幾多の新舊の繁昌せる都會を含み、その中、小亞細亞とシリアとエジプトとは當時古代世界に於ける三大工業地方であつた。是等は極東、卽ち印度、支那、及び南洋と交通し、その珍貴なる物產を輸入し、これを自己の市場を通過し、或は自己の工場にて原料から加工又は製作し、之を西方に輸出するを常とした。西方では、カルタゴ滅亡後、大都會と云へば、只新たに膨脹して出來た羅馬あるのみ。これとても只だ政治と投機の中心であるばかりて、何等の工業市てなかつた。西方は概して農業地から成つて居つた。されば西方

は主として農業を以て東方の商工業に對抗したものであつて、この對抗は自然西方の不利益とならざるを得なかつた。殊にこの結果を當じさした特殊事情がある。それは東方にも有力なる農業地方があることである。卽ち第一にエジプトの穀倉がある。この地はフェルラー[79]と稱する農民が廉い勞働を以てナイル河畔の匹ひなき天惠を利用するのであるから、その穀物は非常に多量廉價で產出された。羅馬の博物學者プリニウスの記述によれば、このエジプトから羅馬府民の食物の實に三分の一輸入供給されることになつて居る。それであるから單に農業としても西方の農業經濟は到底東方の敵ではなかつた。況んや、工業上の產物に於ては、西方は頗る貧弱にして、多くを東方に仰がねばならぬ情況にあつた。例へば支那から輸入される粗製の絹糸は一旦シリヤのギルス市に於て加工精製せられ、機織著色の上、羅馬上流社會に賞翫けられた、その價極めて高く、黃金と同重量で交換せられたと稱せられて居る。又た、かの紅の海（エリスレア）、卽ち印度洋上から渡つて來る香料藥品、玉石類はアレクサンドリヤ港に到り、こゝにて加工精製せられてから羅馬に輸入された（三、9）。プリニウスはこれがために毎年アラビヤ及び印度に向つて流出する正貨一億セステルチウス（八百萬圓）に上ると指摘し、『我等には快樂と婦人とがかくも高くつく』と言つて居る。當時印度人が羅馬皇帝の肖像を刻した羅馬の金貨を喜び之を信用使用したのは有名である。今日印度から多くの羅馬貨幣の發見されるのは卽ち當時の東西經濟關係を物語るものである。されば當時の世界貿易の中心地はアレクサンドリヤ乃至アンチオキヤを首とする今日の所謂近東（ニヤア）であつた。それて羅馬帝國に於ける東西貿易の不平均が次第に顯著となり、羅馬人の經濟に痛切なる影響を及ぼさゞるを得なかつた。羅馬上流社會は彼等の屬州（プロヴインチア）に對する政治、收稅、貸金等から取得した收入を、東方から輸入する贅澤品のために再び吐き出さねばならなかつたのである。西方の中等社會である農民は、上述の如く、農業者としてエジプト農業に抗敵し得ない、生活費は高まり、加ふるに爲政者階級の誅求がある、彼等は多く破產して羅馬に入り込みて浮浪者の群に入るか、さもなければ國境外に脫走して身を野蠻人の間に投ずるか、いづれか一を選ばなければならなかつた。その結果、肥沃の田野の荒廢に歸するもの年を追ふて增加した。上流社會は奢侈のために經濟上疲弊し、且つ墮落して身神柔弱となつた。それて帝國は時と共に塞外の野蠻民を招き雇傭使役しなければならぬ破目に陷つた。

之を要するに、羅馬及び羅馬化せられた社會は道德上經濟上墮落しつゝあつた。こゝに新に有力なる大政治家が出てこれを統率するか、若しくば知識又は經濟生活に於て大革命が起つて生產の發展を計らなければ、羅馬帝國の衰亡は避け難い事情にあつた。古代の知識生活の中その技術的（テクニツク）文明は道路、水道、車軸、その他の工藝上進步に於て、吾人の普通に推想する以上の高度に達したるに拘はらず、そ

こに於て全く行き詰りとなつて、近代文明の特徴てあるルネイサンス以後に現はれたるが如き自然科學及びその技術的(テクニック)應用を見るに至らなかつた。これが數千年來發展に發展を重ねて遂に羅馬帝國の社會に於て綜合されたる古代世界の文明が、最早や行き詰りとなつた所以の重なる一つてある。

最後に、羅馬帝國の中古及び近代に對する意義如何を一考して本講を纏めてみやう。抑もこの帝國は、その帝都東遷後、幾ばくもなく次第に土崩瓦解の慘狀に陷らんとして居る。卽ち既に五世紀に於て北方の野蠻民族の大侵入があつて、主として西方がその衝に當り、こゝては四七六年を以て皇帝廢せられてその位空しくなつた。世にこれを『西羅馬の滅亡』と云ふて居る。然らば時の人果してこれを以て眞に羅馬の滅亡てあると思つたてあらうか。否な！この時東の都コンスタンチノープルては尙ほ羅馬皇帝は儼然存在して天下に君臨し、少くとも理論上尙ほ西方をも兼攝して居る。羅馬は世界を支配し、世界は羅馬のものなり。羅馬によりて世界人民の平和が維持せらる、これが『羅馬の平和(パックス・ロマーナ)』てある、而してこの羅馬は永久不滅てある、故に羅馬は世界人民のために缺くべからず、と云ふ感情的理想は絶えず西方の知識階級の胸に深く刻まれて消滅しなかつた。この思潮たるや、ゲルマニ民族の諸國のうちから、ひとりフランク王國が西方て强大となつた時、その國王カールが羅馬の帝位に卽いたことによつて再び實現し(八〇〇)、所謂神聖羅馬帝國の創立を助成した。そして、この帝國の思想は中古及び近代をも支配すべき精神的威力を有つて居る。

この思想を理解するには、同時に帝國の宗教の狀態をも考察する必要がある。が、これは次講に於て獨立に說く方が便利てある。

第六講　基督教の興起　加特力教會の成立

従來基督教の起原を說く者は各自の立場によつて其の說を異にして居る。聖書の信者はこれを猶太人の唯一の眞神エホーバ⑦の信仰に歸する。或る歷史家は羅馬の天下統一に重きを置き、シーザーが世界に與へた『羅馬の平和（パックス・ローマーナ）』は卽ち基督教の準備をなしたと云ふ、ギボンやモムゼン②の如きこれである。孰れも一理はあるが決して完全な說明とは言へない。近時第三の新しい立場が現はれた　卽ちヘレニズムの研究に基きたる見地である。之によれば、基督教の一般的準備は少くともこの世界文化を度外しては解釋し切れないやうになつて來た。故に基督教の起原を完全に知らうと欲するならば、以上述べた三點のいづれをも見逃してはならぬのである。その中で、羅馬の政治上一統は既に述べ了つたから、私はこれからヘレニズムの影響と猶太教の勢力とを說くこととする。

18　ヘレニズムの影響（三、8）

昔は希臘の都市國家の隆盛時代には、市民卽ち國民であつたが故に、國家の宗教は卽ち市民の宗教であつた。かのゼウスを始とするオリンポス③山上の神々の宗教は卽ちこれであつた。然るに知識の進歩と社會の分化と戰亂とのために、都市國家の生活は、最早市民に從來の如き福利を齎らさずなつたので、茲に人心の危機が起つた。市民は都市國家に愛想をつかすと同時に、その保護神であるオリンポスの神々に對する信仰を減じて來た。彼等の或る者は理智に傾き、思を哲理に潛めて精神の慰安を求めた。これと同時に或る最も多數の者は生活の急迫のために現實の福利を滿たすべき宗教をひたすら求めにもとめたのである。彼等は偉大な個人、若くば新なる神明が現はれて彼等の心の惱みを救ひ、現世の安寧幸福を進めることを熱望した。

これ等の傾向は、アレクサンデルの東征、世界の擴大、東西思潮の交會と相俟つて、こゝに新に三個の宗教上の潮流を醸成した。

(1)智識階級の間に行はれた哲學てふ宗教。

此れには幾多の派があつたが。尤も注目すべきは、かの希臘から起つたキニック派と、ストア派④との流派である、キニック派は孤立的獨行的で、而も浪々世間を行脚すること、猶ほ中古の托鉢巡敎僧たるフランシスカンやドミニカン派の如きものがあつた。ストア派はキニック派の後に現れたもので、その學風をつぎこれを完成し、世界的に有名となつた。この派の敎は天下を一家とし、世界の秩序そのものを神とし、この自然を崇め、自然の理に從つて生活せよと說き、自制、克己、嚴肅、剛毅なる道德を奬勵して居る。彼等はキニック派よりも一層知識的であつて、上品なる態度を保ち、自然羅馬の上

流社會の歸依を惹いて、之と相竸ちてその鷹揚なる學風を完成した。その敎は頗る基督敎に似た所がある。而も尙ほ大いなる相違があつた、卽ち、基督敎は唯一の眞神があつて、然る後に世界が創造せられたと云ひ、ストア派は、世界の秩序あり、是れ神なり、これを崇むべしと云ふ、卽ち萬有敎に傾いて居る。又た基督敎は平民的で謙虛忍辱で而もその信仰は熱烈であつて一般社會に入つて奮鬪した。ストア派は之に反して貴族的で、且つ一般社會から孤立して獨自の道德を立てゝ自ら高しとして居る。羅馬に於けるこの派の代表者は皇帝ネーロの大臣セネカ⑤を始とし、エピクテーツス、かの靜思錄の著者皇帝マルクス・アウレリウス・アントーニウス等であつた。

尙ほ羅馬帝國時代には、ネオ・プラトニズム⑥といふ哲學が起つて神靈說を唱へたことは本講に關係する所が大であるが、此れについては後に述べることとする。

(2) 偉大なる個人の崇拜

これは卽ち君主崇拜である。この風はもと東方に於てアレクザンドル大王の崇拜に始つたもので、それがヘレニズム諸國を通じて君主崇拜となり、後には羅馬が天下を一統するや、その支配者に移された。近時小亞細亞で發見された金石文によると、その地方の官民はアウグスッスの天下一統を感謝し、彼を神と崇めて、その誕生日を祝ふて『彼はあらゆる戰爭をやめ萬物を整へたり。彼はあらゆる古來の善行者に優りたり。將た後世の何人にも勝り得べし。この神の降誕の日は彼が齎し來りたる福音（エヴァンゼリオン）があらゆる世界に始る日なり。』と謳歌して居る、この文中『福音』と云ふ語及び其の使ひ方はアウグスッスの御代に生れた、かの基督の事蹟を傳ふる經典の一、卽ち新約全書の路加傳（ルカ）第二章第八節から第十一節に於て、基督の降誕を傳へたる思想と極めてよく似て居る。この吻合はあまりに顯著てある、兩者等しくヘレニズムてふ共通の思想の源から發したと考へるより外に說明の仕やうがない。このアウグスッス崇拜は、やがて西方に輸入され、羅馬帝政時代を通じて各々現在治世の皇帝は神として崇拜された。この崇拜の中心は各州駐在の軍隊（レヂオ）にあつた。こゝにて、時の皇帝卽ちシーザーはかの羅馬の主神である戰勝の神ユピターと同一視されシーザー＝ユピター崇拜となつて、全帝國を通じて國家的官僚宗敎となつたのである。因みに茲に西洋の天長節の濫觴が認められるべきである。

(3) 一般人民の宗敎卽ち合同多神敎

これは、社會が分化して國家と個人、君主と臣民の對立となつた如く、國家又は君主の宗敎に對立して現はれたる必然の現象である。このものは國家や國民や民族を超越した個人的兼世界的宗敎であつた。當時人民はオリンポスの神々よりも世界殊に東方の異つた神々を採つて自己の信仰の對象とした。キュベーレ（大母神（マーテル・マグナ））、セラーピスとイシス、ミトラ⑦などは卽ちこれてある。これ等は各自獨得

の神話とこれに伴ふ密儀とを有し、能く信者の感覺を喜ばしめ、その心を慰めたから、深く一般民衆の歸依を博した。

加之、これ等東洋の神々も希臘風の世界に入つてはおのづから希臘風に考へられて希臘風の形相をとり、遂に希臘の神々と同一視され、その風羅馬に傳はり、當時流行のストア哲學の萬有卽ち一神てふ思想と、天下一統の君主崇拜と合し、すべての多神は是れ何物か或る同一神の發現であると、朧氣ながら抽象的の神なるものが思惟せらるゝに至つた。換言せば多神の合同信仰（シンクレチズム）が起つた。羅馬にはパンテオンてふ殿堂今も猶ほ存して居る。これ天下一統が成就したとき、アウグスッスの名將アグリッパ[8]が建立せしめたもので、萬神殿の義である。これ、何よりの合同信仰の好記念でないか。

以上三個の潮流はアレクサンドルの東征以後、新に作られた宗教上の傾向で、これ等が相會流して作つた社會の空氣は、卽ち基督敎興起の準備の一となつたのである。

19　猶太敎

最古史のさ中、古代東方諸國時代の昔、聖書物語に傳へられて有名なるかの勇武なるダヴィデや、榮耀榮華を極めたるソロモンの治世の下に、ヘブライ[9]國民は一時覇をパレスチナ及びシリヤ地方に稱したが、覇權永くは續かず、ソロモンの死後、國はイスラエル[10]と猶太との二國に分れて國民衰弱に傾いた。この際、彼等の祖先以來信じたる自己固有の唯一にして不可見の眞神エホーヴァなるものゝ信仰、竝びに自己はこの神の選民なりとの確信は、彼等子孫の受けたる國民的不幸の重なるごとに却て試練されて、遂に一個の頑強熱烈なる國民的一神敎となるべきであつた、卽ちこれが猶太敎（ユダイズム）である。何となれば、紀元前七二二年イスラエルはアッシリヤに、五八六年猶太はバビロニヤに各滅ぼされ、重要なる國民は囚へられてバビロニヤ地方に移し置かれたが、これら國民的不幸は彼等を悔悟反省せしめ、恰も幸にもペルシヤ起りてバビロニヤを亡ぼし、猶太人の或者を放ち還らしたから、彼等はこゝに古き猶太の都エルサレム及び古き神殿の恢復に從事し、爾來自己固有の戒律と敎理を定め、更らにヘレニスチック＝ローマンの時代となるや、この大いなる世界的文化の風潮反びこれに伴へる外國人（ゲンチレス）に反抗してます〳〵自己の信仰と習慣とを固めて自ら結束したからである。

元來ヘブライ人の據りたるパレスチナは叢爾たる小國で、その人民は、古くから打ちつゞく亡國の不幸のために次第〳〵に世界に散居し、所謂離散（ディアスポーラ）[11]の人民である。彼等は世界の都會といふ都會に洽く住居し、殊に東方には大都會多ければ尤も廣く且つ濃厚に擴り、而も思をたゞ故國の神殿につなぎ、一個の特別なる國民的民族としての團結固く、且つ傳道に熱心であつたから、本國の狹小、全人口の比較的に少數にかゝはらず、社會の有力要素となつた。これには彼等の間に信ぜられた豫言が尤も與つ

て力がある。曰く、ダヴィデの子孫の中から救世主(メシア)(72)(基督)が現はれて猶太の宗教政治を恢復し、天下を一統すべしと。

この猶太教といふ國民的一神教の懐の内から出でて、當時流行の世界的文化を採用し、これに適應して起つたのが卽ち基督教である。これは實に世界的一神教であつた。

この所謂唯一の神がその信者と作つた約束を拉典語でテスタメントと云ふ。其の猶太人に關するもの、卽ち舊きものを舊約、その次に起つた基督及び其の使徒に關するものを新約と云ひ、この二つを總稱して書物(バイブル)と云ふ。この聖書はその舊き部の一部分はヘブライ語で書かれたが、希臘語に譯され、それ以後は勿論この世界的言語を以て書き續けられた。それが拉典語に譯されたのは後世羅馬風人民敎化の必要から起つたことである。要するに、基督教の根本經典たるべき聖書が、新舊約ともに、原と希臘語で書かれたと云ふことは、種々の意味に於て重大なることであつて、文化史上特に記臆に止めて置いて貰ひたい。

20　イエーズス(73)とその環境

猶太王國は、ポムペイウス東征以來、羅馬の保護(74)の下に立たなければならなかつた、これが世界的運命である。イエーズスの生るゝ頃にはヘロデと云ふ王がこれを治めて居た(紀元前三七―四)。この君主は自然親羅馬策を執り希臘羅馬の文物を輸入し、神殿(テンプル)を改築し、劇場(テアトル)を設け、宮室(パレース)を修め、以て王國の外觀を張り、全世界の猶太人をエルサレムに惹き付けた點に於て尤も成功し、因て大王と稱せられた。けれども、彼は宗教家、殊にその保守派なる分離派(ファリサイ)(75)から祖先の信仰を毀傷し、國民を賣るものとして排斥せられた。彼の死後、その子孫は薄弱で、自ら能く治め得ず、羅馬は因てその王國を合併してシリヤ總督の管下に置いた、時正にアウグスツス治世の晩年、紀元後六年であつた。そこで猶太人は羅馬の代官(プロクラトル)の下に置かれ、羅馬法に從つて戸口財産調査を受けて課稅され、且つ國の港ケーザレア(76)市には軍隊(レヂオ)が駐屯して國人を監視した。かくて當時羅馬帝國に流行した官僚的宗教の發現ともいふべき皇帝崇拜が自然ここにも行はれることになつた。猶太人の保守派は起つて極力これに反抗した。

イエーズスの生れたのは、卽ち上述のヘロデ大王の晩年、アウグスツス治世の中葉すぎてある。而して彼が說敎したのは次の皇帝チベリウス(77)の時で、年齒二十九才から三十三才の間であつたらしい。彼は終身パレスチナ地方以外に出たことはないらしい。彼は前記の說敎期間、最初、ガリレーア(78)湖畔の田舍町に於て、最後にいよ〳〵都に上つて宗教上の革新を唱道した。

この短期の地方的說敎である彼の運動は何故に猶太人の宗教界の革新、否な革命であつたか。

(一)彼は、猶太人と外國人(ゲンテレス)との區別なく、パレスチナに住居し、又はこれを往來する諸國の人と洽く

自由に交通したこと。

(二)自らかの豫言中の救世主(メシア)を以て任じて居たが、而もこの豫言の中から、猶太國民の政治上野心家が重をおいて居たその政治上の意味を除き、これを純然たる宗教上のものとして說教したこと。

これらの二點は確かに新しい態度であつた。加ふるに彼の說教がよく巧妙なる比喩を用ひたることは新約を讀むもの丶深き感動を受くる所であつて、當時如何に聽者を魅したかは想像に餘りある。エルザレム[19]の國民的保守派は、上述のいづれの點もすべて猶太教の法に背くものとして擯斥した。かの分離(ファリサイ)派の徒が、羅馬皇帝に貢を上るは適法なるやとのディレンマ的の難問を設けてイエーズスを陷穽せんとしたのはこの時のことであつた。この時、彼はかの第四講の始、羅馬文明の使命を論じたところに引用した『シーザーのものはシーザーに與へよ、神のものは神に歸せよ』との語を以て、巧妙に此の難問を捌いたのである。保守派はイエーズスの辯論に避易するの外なかつた、彼等は因て彼が政治上野心ありと羅馬の代官に讒し、遂にこれを磔刑に處せしめた。

21　福音の宣傳　神學の發展

かくて福音の種子は蒔かれた。これを傳播したものはイエーズスの使徒(アポストル)、就中聖パウロ[20]であつた。傳道の中心はエルザレムではない。世界的希臘風文化の中心の一つ、シリアの都、アンチオキア[21]であつた。傳道の對象はシリア及び小亞細亞であつた、換言せば、羅馬の政治の下にあつて、ヘレニズムの盛んな土地と其の人民であつた。このことは重大なる事情である。何となれば羅馬帝國の政治上の恩澤と希臘哲學的考方の利用とは、聖パウロ[22]を主とし、其の他の使徒の傳道に缺くべからざる必要條件であつたからである。パウロはタルソス生れの猶太人、タルソスはシリヤと小亞細亞の境界地方キリキヤの一希臘風都市で、パウロはこゝでヘレニズム教育をうけた紳士で、羅馬市民權を與へられて居た。[23]されば彼が如上地方に於ける傳道の際、屢々反對派から危害を加へられたが、例へばエフェソスの市に於て、そのディアナ神殿を中心とする神像の銀細工師等から撲殺されんとし、又たコリント市に於て、在住猶太人から異端邪說を傳ふる者として强訴されたが如き椿事があつたけれども、彼が法律上羅馬市民である、又羅馬官吏は法律の執行に忠實にして直接社會の公安に關係なき論議に冷淡だから、毎に保護されて一身安全に巡錫し得た。而してパウロの傳道が有力であつたのは、彼が猶太人でありながら、彼のヘレニズム風教育と希臘的思索の方法を以て、ヘレニズム風の人民の間を行敎したからである。就中、イエーズスが元來ナザレの一工人の肉の子であるにかゝはらず、聖パウロの傳道によれば、『神なる人』、卽ち肉となつてこの世に現れた神と說かれて、始めて希臘風世界の人心を滿足し得たのである。

抑も歴史上人物としてのイエーズスと、信仰上神學上のイエーズスとは相異るものである。この相違の重なる點は、一は猶太教の思想に基く。歴史上ナザレ[24]の賤しき一工人の子であるものが信仰上てダヴィデ[25]の子孫となり、隨てダヴィデの故郷ベツレヘムに於て生れたことになつて居るが如きはこれである。他の一は今述べた『神なる人』といふことてある、凡そ人間が神となる、神が人間となると云ふのはヘレニズムの思想て、猶太人の屬するセミチックの思想てない。凡そセミチック思想ては、神と人間とは天地の隔あり。高き尊き神の下に低き賤しき人間があつて、そしてすべての人間が平等なりとして居る。然るにヘレニズム思想によると、人間が神靈に感じて胚んだと云ふ傳說は、偉大なる人物、例へばプラトーンやアレクサンデルの各母について云はれて居る。而して更らに進みて、かのアレクザンデル大王以來の君主崇拜の習慣によりて、偉大なる人間即ち神てふ思想が發展した。この思想によると苟も神の詞を傳へる偉人イエーズスなるものは、同時に普通の人間よりも寧ろ神なれかしと、衷心からあこがれ望まれやすい。この人心の機徴に投じて、イエーズスは神と同一なりと說かれ、隨つてその生母マリアの清淨無垢にして、唯だ神靈によりて懷胎することが、絶對に必要となつたのてある。それ故に新約中に、かくの如き神話が織り込まれて居る。尚ほ又たパウロの說敎によると、基督は猶太國民のものてはない、神と一切人生との間に現はれた媒介者てあると說かれた。換言

せばこの基督は世界民人を一視同仁に救濟する神の使てあると、以上の如き世界的人民に對する世界的解釋が宣傳せられて、パレスチナに於けるイエーズスの宗敎革新運動は始めて世界的博愛敎に化せられんとす。

然れども是等千百の說敎も打消す能はざる一個の困難なる事實が尚ほ儼存して居つた。この場合に於ける困難なる障碍はエルサレムそのものてあつた。卽ち、此の國民的一神敎の中心に於て、猶太人が尚ほ頑强に羅馬の世界的政治に反抗して居ることこれてある。この一事は、とかく基督敎が猶太國民と密接の關係を保ち、政治上羅馬に反抗するものてはないかとの嫌疑を惹き起さゞるを得なかつた。實際、基督敎徒の內には全く保守的な分子、卽ち猶太的基督敎徒があつて基督敎の妨害をなして居た。然るに紀元後七〇年に至つて羅馬皇帝ティッス[26]の軍隊は遂にエルザレム攻陷の目的を達し、これを文字通りに破壞し、その人民は玆に散亂し、かの離散（ディアスポーラ）てふ大運命を完成した。その結果、基督敎が使徒時代に於てエルザレムの存立のために蒙つた嫌疑と妨害は全く除かれた。實にこれ基督敎が事實上世界的となる發展の一階段てあつたのてある。

かくエルザレムてふ厄介物の掃除せられたる後ては、基督敎が更に當面に逢著すべき問題は何かといふに、(1)自分の敎理の矛盾、(2)自分と政治との衝突とおの〳〵如何に調和すべきかといふことてあ

る。これは紀元二世紀から五世紀に至る約四百年間に於ける基督敎會の死活問題であつたが、その大體は第四世紀に於て解決せられんとする。

抑も敎理の矛盾は上述の『基督は人なり』との思想と『基督は神なり』との思想との衝突、卽ち基督格論に集中した。この議論の上下竝びにその解釋の決行には、常にヘレニズムの哲學が有力に關與した。この頃流行した哲學は卽ちかの新プラトーン派で、その代表者はプロチノス(紀元後二六九歿)であつた。この人はエジプトに生れ、アレクサンドリアで敎育され、羅馬人の社會に入り、イタリヤのカムパニアで死んだ。この略歷が、既にその人の歷史上位置の如何に世界的なるかを標徵して居る。彼及びその一派の觀照によると、全世界は精神と肉身、若くば物質とに分れ、人生の究竟の目的は肉身を解脫して精神に就くに在る。この考は頗る東洋的である。而して世界の最低層には最も劣等な精神が最多數に存在して居る、この層から一段高く上ると、そこには稍高尙な精神が若干多數存在して居る、かくて一段一段高く昇るに隨ひ、より少數に、より高尙な精神が存在し、世界の最高點に到れば、唯一最高最大精神があつて、宇宙の大精神と合一する。その狀は、さながらピラミッドの如きものである。人間は各層の精神を賴みとして、彌高き層へと迴り進み、終に最高の精神に近づくを理想とすべきである。

この哲學は、畢竟、羅馬時代の東西社會に行はれた合同多神敎、及びこれより生じた多數の鬼神の存在と云ふ迷信を哲學化したものである。換言せば、時代の迷信に理窟を附け、これに迎合し、これを認可したものである。今や基督敎の神學者はこの精神と云ふ說を借つて、これを利用した。卽ち鬼神の中から善良なるものを取つて、これを基督敎會のものとし、聖者と合一せしめて、民間の迷信を慰めた。殊に、かの所謂大精神なるものを換骨脫胎して、これを神聖な精靈と名づけ、この者をして神なる父と神の子基督との兩者間を結び付けしめた。此說によると、神父の本體は神の働である聖靈の力によつて、自ら流露して神の子基督となつて現はれた。流露とは創造ではない。隨て、神父も聖靈も神の子も三者共に一體である。因て神の三位一體と稱する敎理の形式が出來た。この解釋は、つまり、イエズス・クリストをば、神そのものが肉の人間となつたものと見るのである。卽ち神とクリストとは全然同一なりとするものである。然し、これに對して異論もあつた。その有力なる說は、基督は神そのものでなく、唯だ神に近いものである、神に似た人格であると云ふのであつて、頗る理知的の主張である。

この神學上の爭は基督敎會に取つて極めて重大であつた。殊に、敎會が時と共に羅馬帝國の社會に於て重きをなすに隨つて、一層さうである。之がために信仰動搖し宗派爭ひを釀し延いて社會の安寧を

破壞するかも知れない、これが、古代の宗教的傾向に伴ふたる人心の危徴であつた。それであるから、この神學上爭が何とかして全然統一を要することは明白となつた。而して、この統一は單に教會の神學上議論ばかりて捏ね上げて了ふことは出來なかつた、實に羅馬帝國の專制權力に依賴する所頗る多かつたことは世界史上看過すべからざる事實である。それであるから、これ以上の說明は帝國と基督教の調和と云ふ問題から入つて行くのが便利にして適當と思ふ。

22　羅馬帝國との調和

基督教はイエルサレム陷落の後、始めて國民的嫌疑を脫し、その信仰の深さと、實行の力とによつて次第に社會、殊に先づ下層人民の間の歸依を惹き、早くも最初の三紀間に隱然たる社會の實勢力となつて行つた。かくの如くなつては、その傳道者も亦た敎祖の所謂シーザー云々の語を引用して、次第に政治と調和した(四、11)。

無論、歷代の皇帝の多くは尙ほこれを迫害した。ディオクレチアーヌスもその一人である。基督敎[28]は依然として日蔭ものであつた。しかし、四世紀に入つて一大變化が來た。この時コンスタンチヌス大帝が東西の天下を一統するといふその手續の進行中、彼が古き羅馬の都を征服する際、彼はその基督敎徒の勢力の强大なるに鑑み。之と提携する必要を感じた。この征服の決勝であるヂベル河畔、サクサ・ルブラの戰[29]は、當時の傳記者の所謂「天の軍隊」の入援によつて獲られて居る。卽ち大帝の羅馬征服は實に基督敎徒の助力に負ふ所少くはなかつたらしい。さればこの勝利の翌年、三一三年、彼はミラノ勅令[30]を發し以て基督敎徒の功勞に酬ゐ、且つ將來の提携をも固めた。何となれば、この勅令は一切の宗敎崇拜の自由を命じたもので、實はこれによつて自然、基督敎は迫害を免れて他の從來の宗敎と同樣に、公の宗敎となり、公の禮拜を行ひ得るものとして認許せらるることになつたからである。換言せば、從來暗黑なる地下墓室(カタコム)の中て、暮夜、公の目を忍びて祕密に行はれた禮拜はこゝに白晝公々然と希臘羅馬の神殿建築たる宮殿(パラツオ)に於て營み得る宗敎の一となつたのである。是れ非常の變化である。且つそれ基督格論が社會の平和を亂だる廉があるによつて、大帝は幾ばくもなく天下一統の勢に乘じ、東西世界の宗敎家をニケーア[31]に會して自由討議せしめ(三二五)、この時、親らこの大會議に臨みて、かの前節に述べておいた兩派の主張の內で、かの三位一體(トリニチイ)の結論に達すべき信條を採つてこれに一決せしめた。これ、今後、基督敎理の根本基礎となるべきものであつたのである。

その後、猶ほ基督敎と古い希臘羅馬の異敎との爭、及び基督敎會に於ける內部の軋轢が絕えたのではないけれども、大體の歸趨は、三九五年、テオドーシウス[32]大帝の天下一統の際に決定した、卽ちこの君主は滿天下に令して基督敎以外の一切の宗敎祭禮を嚴禁し、而して基督敎につきては、かのニケ

ア信條によるもののみを正しとし、其の他の宗派を排斥放逐した。

かくの如くして、基督教會が統一（カトーロス）、又は公一と云ふ法制上の性質を獲得して、自ら確立し得たのは、コンスタンチン大帝に成つたことは、明かである。これより以後　羅馬の支配は政治上こそ帝國であれ、宗教上に於ては加特力教會となつた。換言すれば希臘羅馬といふ世界文化で渾一せられて居る同じ一個の世界的統一團體が、政治上側面から見れば、羅馬帝國といふ世界國家であり、宗教上見地に立ちては、加特力教會といふ世界的宗教社會であるといへる。この際、基督教會内に起つて來つた教區は、猶ほ羅馬帝國と行政組織に準じて之と平行して形作られ、屬州に知事が居つて之を統治するが如く、從來信者の世話掛であつた司教（エピスコープス）即ち監督（ビショップ）は一個の宗教上の役人と化してその教區の人民を牧した。その主なるものは羅馬、コンスタンチノープル、アンチオキア、エルザレム、アレクサンドリアの五教區であつて、これらに鎭坐する司教（ビショップ）はその格式司教の上に位して特にパトリアルク（家長の義、管長）と呼ばれて居る。これ、いはゞ原始加特力教會の五大本山である。

この統一（カトーロス）ある宗教を内面から確立したのは、前節から觸れて來た神學の確立と社會敎化の力とである。前者には敎父（ファザー）と稱せられる學者僉說敎者があつて、その說敎と著書とによつて神學を樹て、信仰と倫理との標準を示した。彼等は東西に從ふて、希臘敎父と典拉敎父と區別されて居る。その最も偉大な感化力を有するものは、拉典敎父の一人、聖アウグスチヌス（四三〇歿）であつて、その有名なる著、『天國（シヴイタス・デイ）』[33]は中古思想の標準となつた。（次講23）

加特力敎會の社會の敎化とは、何ぞや、他なし、かのホーマーの傳ふるオリンポスの神々から新ラプトン派に至るまで、古代の一千年間に發展した異敎及び之に伴ふた祭禮を廢止し、之と相俟つて、古代の人情に適せざる不自然なる社會を博愛化し人生化したことてあつた。基督敎の信仰は愛を中心とする。これまで社會に行はれて居た一切の人情てないもの、就中、姦淫、邪淫、離婚、猛獸格鬪、奴隸を排斥し、神の前には一切人民の平等なることを說き、結婚の神聖を說き、女子の社會的位置を進めた。羅馬には拉典敎父の一人、聖ジェローム[34]（四二〇歿）の下に、コンスタンチノープルには希臘敎父の新人聖ヨハンネス・クリソストム[35]（四〇七歿）の下に、各々婦人の結社が出來て會員相互の信仰を磨いた。これ西洋史に現はれた一個の婦人運動の始てあるといへる。

これを要するに、基督敎及びその敎會は、元來、パレスチナに於ける猶太敎とヘレニスチック＝ローマン文化との相融合した大いなる雰圍氣の中て、猶太人の祖先以來固執せる一神信仰を基礎とし、その傳道敎化の熱心を受けついて起つたものてあるが、これと同時に猶太敎に固有なる民族的、國民的

偏狭を除き去り、羅馬帝國の世界政治の恩澤とヘレニズムの世界文化の思想の影響とによつて、始めて世界的博愛的統一宗教及びその教會となつたものである。更らにこれを簡單に云ふと、(1)猶太教、(2)ヘレニズム、(3)羅馬帝國の三者の綜合である。この外に、偉大な當時神若くば神の如く崇められた人物そのものに固有なる働きと感化とをも、吾人の考察に入れねばならぬことは、いふまでもない。

以上は唯だ基督教の起原と加特力教會の成立とを說いたばかりである。若し夫れその發展に至つては、その成立當時、既に羅馬帝國に入り來つてこれを改造しつゝある他の異分子、即ちゲルマニ人といふ新らしい未開粗野なる異教徒（バルバーム）との關係、竝に將さに起らんとしつゝある回教との關係に於て、始めて說明せらるべきものである。是等は即ち吾人の前途に橫はつて居る大問題である。

第七講　古代より中古へ　原始ゲルマニ文明

23　過渡期の意義

私はさきに開講の始、世界史三日觀を立て諸君の注意を惹いて置いた。そして前回までに、その第二日に相當する希臘羅馬史、即ち古代史を述べ終つた。所詮、この一日は希臘人の民族移動に始り、羅馬帝國の隆盛を以て終るものであつた。今や、吾人はこの帝國の末路、紀元後四世紀から八世紀まで——コンスタンチヌス乃至テオドシウス大帝から、カール大帝に至る——期間に向はんとす。これ前述の古代史の大いなる一日のいはゞ黄昏とも、次の一日の始らんとする前夜ともいへる。つまりこの期間は、これを回顧的に云ふと、尚ほ古代であつたが、豫見的に云ふと、古代の後、現代の前に先きだつ中古であつて、實に近代生活の播種期であるべきである。この間に、古代生活は次第に中古の暗みにかくれゆき、中古生活はこれと入り代りに現はれ來り、不知不識の中に世界史の第三日、即ち近代史の曙を開くべく準備した。しかしながら、この夕暮は決して靜かなものではなかつた。さながら暴風雨の吹きすさんで氷雪を飛ばすが如く、ゲルマニ①民族の侵入とその移住が開始して古代文明世界を荒らしまわつた。

吾人はこの過渡期の基礎を明かにするため、先づ三個の重要事項を注意して置かう。

(1)羅馬帝國の衰亡の原因

私は第一には、前々講中「羅馬の社會狀態」の一節に於て豫示しておいたやうに、帝國の經濟上道德上の頽敗、第二には、帝國東西に分裂して相軋轢し、有力なる統一君主の缺乏したことを擧げたい。而して野蠻人の侵入は補助原因であつて主要原因ではない。更らに、古來或る多數の人は基督敎の輸入と流行とを、帝國衰亡の原因の中に數へるけれども、これまた直ちに首肯すべきでない。固より、この一神敎會の世界的態度、非國民的感情は、如上の原因が招致しつゝある帝國衰亡を積極的に防止し得べくもなかつたことは、否定すべからざる事實であるが、さりとて主要動力としてこれを促進したと云ふ上述の非難は、過酷失當である。思ふに、基督敎は帝國の衰亡について直接の責任がない、むしろ中立の位置にあつたといふが穩當であらう。吾人は基督敎を非難するよりも、却つて帝國の衰亡と野蠻人の侵入とに伴ふて起つた種々名狀すべからざる社會の不幸を和げた功勞を之に認める方が、少しく別問題だが、より公平穩健なる歷史家の態度であるまいか。

(2)帝國は永久不滅なりとの思想

この事は、既に羅馬帝國文明の終りに於て政治上から觸れて置いた(五、17)。しかし、尙ほこの思想を助成して一層鞏固にしたものがある、それは、恰も帝國の末路に於てその舞臺に現はれて、之に新しき生命を吹き込むだ加特力敎會の精神上の力である。このものは、既に瞥見したやうに、帝國統治權力の保護によつて始めて成立し、帝國と類似平行する、之とさながら血肉相離るべからざるが如き親しい組織を受けて、以て古代の異敎を嚴禁し時と共に殄滅に歸せしめた。この禁令は、正しく古代の異敎文明世界の衰亡を告ぐる夕ぐれの鐘の音とも聽かるべきである。而してこの滅びゆく舊い世界觀及び人生觀に代ふるに、今は如何なる新らしいものが立てられたか。これには加特力敎會が最も深刻に與つて力があつた。就中、この夕暮の嵐の吹き荒んで居る瞬間に於て、敎會學者の有名なる一人、かの聖アウグスチヌスは敎會を代表して、その著『天國』(シヴイタス・デイ)に於て新しい觀照を發表し、範を後世に垂れた。時は五世紀の始めである、野蠻人は既に西方世界を橫行しつゝあつた。就中、西ゴート部の大群は、ハンニバル以來六百年間、如何なる外敵にも見舞はれなかつた永久の都羅馬の面前へと押寄せた。而も彼等はこれを攻陷し掠奪し破壞した(四一〇)。天下の人心大いた震駭した。彼等は尙も南下して南伊に入り、或は轉じてアフリカにも渡らむずる勢を示した。然し事情あつて、これはこの時實現せられなかつたが、その後他のゲルマニ部民、ヴアンダル人はイスパニアを回はりてアフリカに侵入し、これを占領するに至つた。時の人はこれ等の世界の不幸、平和の破壞に對して頻りに基督敎を非難攻

擊した、曰く、羅馬帝國は古き神々に背き、その禮拜を停止し、無禮なる基督敎を國敎とした、これがために神々の怒を買ひ、この責罰を蒙るのであると。聖アウグスチヌスは當時アフリカのヒッポ・レギウス②の監督（ビシオップ）であつた（六講22）。彼は如上の非難を辯解しなければならなかつた。この目的のために彼は執筆し順次に二十二卷の大著を出した、卽ちこれ『天國』（シヴイタス・デイ）である。これに於て、彼は古代の異敎が作つた罪惡を數へた。最初、最古史に榮えたトロヤの國が遂に滅亡したのはこれによる。羅馬帝國はその次に現はれて、また同じ罪惡を犯した、それ故に今や現に懲罰せられつゝある。けれどもこのものは幸に最近に加特力敎會に歸依した。この敎會の媒介によりて一すじに眞の神の惠に依賴せよ。然らば、この信仰によつてのみ、羅馬帝國は救はれて遂に世界を征服し、自ら天國に化し得べきてある。と說いて居る。これ古來現はれた最初の歷史哲學である。又た之を倫理學として見るに、ストア哲學等の道德學者が推奬する實際的行爲を超越して、精神的信仰の功德を力說するものである。この聖アウグスチヌスの世界觀と倫理觀とは實に今後中世に於ける加特力敎社會の基準となるものである。これあるが爲め、かの羅馬帝國が永久不滅の生命をうけ得べしと云ふ帝國傳來の思想は、一層鞏固に確められて、今後一千年の社會に對する拔くべからざる根本理想となつた。

(3)ゲルマニと羅馬帝國との關係。

ゲルマニの羅馬との關係は、既に共和時代に始つて居るが、その著しく密接となつたのは皇帝ネロの死（紀元後六八年）後の內亂から發して居る。これ以來彼等は軍人又は勞働者として頗みに多く帝國に入り、その社會生活に最も必要缺くべからずとする需要を充しつゝあつた。この關係は次の三種の資格のいづれかに於て作られて居た。一、地面付農奴（コローニ）、二、定住農兵（レーダイ）、三、同盟國（或ひは同盟部落）（フエデラテイ）③、これである。故にゲルマニは帝國の政治及び經濟界に於て彼等固有の肉體の力を以て早くから働きつゝあつたのであつて、四世紀に於てゲルマニ大擧侵入の頃には、帝國の社會は既に幾分かゲルマニ的となつて居た。現に時の羅馬の軍隊（レヨオ）竝に其の隊長には、多くゲルマニ人が參加して居たのである。

以上三個の基礎的事情のうち、第三の關係は今後果して如何に進展してゆくべきか、豫めその大勢を測定しおくが便利であらう。卽ち次の如くである。上述の四世紀までのゲルマニ人口はそれが比較的に少數に徐々に入り込むだから、概して羅馬に同化されたけれど、四世紀末葉以後に、ゲルマニの續々大擧侵入し來るや、帝國は最早やこれを同化することが出來なかつた。卽ちこれが所謂「民族大移動」の始てある。この運動が、大體に於て次の三大時期をなして進み行つたことは、世界史上周知の事實にして、而も諸君の記臆を再び喚起するに價ひする大發展てある。

第一期は三七五年に始る。最初の衝動を與へたのは、有名なる亞細亞のフン（匈奴）民族である。こ

れがために、既記の西ゴート部を始め、幾多のゲルマニ部が南下又は西進した。この時期の重なるゲルマニ侵入者は、東西のゴート、フランク、ヴァンダル、ブルグンド、シュワーベン（アレマンニ）、アングロ＝サキソン等の諸部であつた。但し、フンは四五一年ガリアのカタラウヌムの野（今の佛蘭西のシャーロン附近）で撃退され、跡は再びゲルマニ民族と羅馬帝國との關係に歸した。

第二期、五六八年以後である。この時期はロムバルド部のイタリヤ侵入に始り、その他サクソン等のゲルマニ民族の活動があつた。この期に再びアヴァールと名くる亞細亞民族が吾人の局面の一隅に割り込んだけれども、これも亦た長くは維持されなかつた。

第三期。八〇〇年頃以後十字軍時代、約一一〇〇年までである。この侵入者はスカンヂナヴィヤから出發し、北方人（ノースメン）と總稱せらるゝ最後のゲルマニであつた。彼等は到るところで、その出身と情況とによつて名目を異にして居る。佛蘭西ではノルマン、獨逸、英國ではデーン、露西亞及びビザンツではワリアーグである。この時期にはスラーヴ民族が頗る局面に關係して來た。又た亞細亞民族ではマジヤール（ハンガリヤ）人は宛らかのフンやアヴァールの跡を慕うて來たが如くに、ダニューブ河畔に現はれた。しかし、大勢は前述の最後最新のゲルマニ民族の移動で決したのである。

而してこれ等各期の部族は大小一樣でなく、且つ又た時期を一にして居らぬけれども、いづれも最初は未開なる異教徒であるか、若くば善くともキリスト教中の異端者かであつた。かゝる野蠻民が各々羅馬風文明と如何なる關係を作るべきか、これ更らに重大なる世界史的問題である。

24　ゲルマニ文明の史料及び研究

ゲルマニ文明を今日に於てよく代表するものは獨逸人である。この意味にて、ゲルマニとは獨逸人の古き名稱であるといつてもよろしい。しかし、嚴密にいへば、今日のドイツ文明は純粹のゲルマニ文明でない、尙ほまたゲルマニ文明の流れは單に今日の獨逸文明にのみ入り傳はつたのでもない。然らば原始ゲルマニ固有の純粹なる文明は何物であるか、はた如何なる關係を作らんとするか、これ今後の講話の主要目的である。

先づこの新來者の文明の研究は、歴史上はた史學上、最も興味あり最も利益あるものの一てあること、吾人の注目に價する。これ何故であるか。

(1)　ゲルマニは、西洋文明社會に入り來つた未開民族中、最も新らしい民族の團體であるが故に、その原始生活の有樣は、當時の羅馬人乃至希臘人によつて直接又は殆んど直接の經驗に基いて書き傳へられた。例へば、ジュリアス・シーザーの『ガリア戰記』紀元前四八年頃にかゝれた）、タキツスの『ゲルマニア風土記』（紀元後九八年頃にかゝれた）の如きが遺されて居る。かくの如く、一個の將來

の文化國民の尙ほ未開にして發展の途にある時代の狀態につきて、恰も同時代に於ける隣接地の優秀なる文化世界から、幾多の堪能な實地見聞者を出して、信賴若くば參照すべき史料的報道が可なり豐富に作り殘されて居ることとは、他の今日の同樣なる文化國民の場合には殆んど見ることの出來ない大いなる學問上祝福に屬して居る。

(2) ゲルマニアは時と共に羅馬文明を受けて、これと融合し、ラテン・チュウトニック⑩即ち羅馬風ゲルマニ風文明を形作り、その際幾多の貴重な文物、典章、風俗、習慣、制度を殘した。即ちサリカ法典(八、27)、エッダ(スカンディナヴィア古傳說集)、物語(ロマンス)、戀歌(ミンネ)、封建制度、羅馬敎會等皆これである。

(3) ゲルマニの血族は北歐に於て濃厚に殘り、その中、今日のドイツ國民及びその國家に於て最も有力に代表され、十九世紀の始に於けるローマンチックの學風の勃興以來、この國に於て原始ゲルマニ固有、少くとも中古ゲルマニ固有文化の歷史的研究が大いに進んだ。かの童話(メールヘン)を以て世界に知られたゲルマニ文獻學者グリム兄弟⑪、ナポレオン戰役後ドイツ國民の歷史意識の勃興と共に開始された『ゲルマニヤの歷史記念』(モニメンタ・ゲルマニエ・ヒストリカ)の編集事業(一八一九以後)、世界史的見地より『ローマノ＝ゲルマニック民族史』⑫その他を著はして有名となつた歷史家ランケ(一八八六年歿)、及びその多士濟々たる門下、最近

においては、經濟史的美術史的心理學的見地に立ちて獨逸史を研究するを以て有名なるラムプレヒト⑬(一九一六年歿)の如き、これである。

以上三個の理由によつて、ゲルマニ固有の文明及びその羅馬文明から受けた變化發達は、他の民族に比べて、比較的に、より明瞭に認識されて、それに相當する幾多の興味と敎訓とを吾人に與ふるものである。隨つて、かくの如き背景を負ふた獨逸史が、苟も民族及び國民の發展に留意するものに取つて、如何に興味深きものであるかと云ふことも、容易に推察せられるであらう。

25 ゲルマニの土地及び人民

ゲルマニ最古の原住地は未だ詳かでない。今日確かに知られて居る所は、只だその羅馬時代に於けるもののみである。即ち彼等が最初羅馬時代に於て北歐に住んで居たこと、就中、その共和時代の末から南下して羅馬の版圖に近づき、更らに帝國時代にはライン及びダニューブ河畔まで前進し、大體そこで喰ひ止められたことである。彼等の背後はどこまで擴つて居たかは不明であるが、ゲルマニア⑭風土記の著者タキツスの時に於ては、恐らくウィスチュラ⑮河畔に於て、スラヴ民族と境を接して居たであらうと思はれる。幾多の研究の結果、彼等の住地及び人口は大約次の如く推察されて居る。即ちラインとウィスチュラとの間、その面積約四十萬平方基米突、これに住んで居た人口がタキツスの時

代に、百萬乃至百五十萬であつたらう。これを近い所に比較を求めると、面積は日清戰役後の擴大を含むだ日本帝國に相當し、人口はタキツス時代のゲルマニが前述のやうな僅かな人烟を立てゝ居た同じ土地の面上に、最近二十世紀の始に於て、五千萬の開化した活動する獨逸帝國臣民が住んで居る。卽ち、當時森林沼澤多い地方に、極めて疎らに原始的未開人の部落が散在し、滿目の人烟極めて稀少であつたに違ひない。

これ等の住民は、タキツスの報道によれば、身體偉大、皮膚白く、頭髮の色うす赤く、眼は灰青であつた。性質慓悍で、不羈卓犖、尤も戰を好み、信義を重んじ、夫婦君臣の間節操を尙び、殊に男子は主從の義を固守し主君郎等の關係を結んで居た。平素飮食惰眠を貪り正しい規律と忍耐とを要する勞働には耐ふる能はず。彼等の喜ぶ仕事は冒險的のもので、何よりも戰鬪の事を第一とするが、之に次いでは漁獵が男子のすさびとして尤も面白く感ぜられ、農業牧畜の如き地味なものはその次であつて、ところ〴〵に於て行はれて居た。かくの如き雜役勞働は多く婦女子及び奴婢に委せられた。彼等の間には未だ市邑の設なく、羅馬人に接したものの外は、未だ貨幣を知らなかつた。土地は幼稚な耕作法て利用せられ、一體の經濟は簡單な自然物交換の狀態にあつた。彼等の部落は血族の關係で親密に結ばれ、その政治には酋長が之に當つて居た。酋長等は苟も部落中の戰鬪に耐へ得る丁年以上の男子卽

ち良民を率ゐ、鬱然たる原始林の間に於て、その切り開かれたる野はらで、部落の會議を開きて公共の事を相談した。

各個人にウェアゲルド⑮と稱するものがある。卽ち人間の殺傷があつた場合、被害者又はその遺族はその個人の身分とその損害に應じて加害者に對して報復するのが原則となつて居る。例へば指を切られたものは指を切り、目を刳られたものは目をくぢり、更らに殺したものはこれを殺すといふが如きである。けれども又た損害賠償の代價を定め、人殺と雖も牛羊を以て賠はれる。この損害賠償は、後、貨幣を知るに及んで金錢を以て評價された。これ亦た個人の身分と損害とに應じて差等あること勿論であるが、個人一人の總價額何程と定まつて居る、卽ちこれがウェアゲルドと云ふものである。蓋しこの語は人相當の價と云ふ意義であらう。この思想の考方は個人相對の賠償、卽ち賠償は人民が私的に行ふものであると云ふのである。羅馬法に於けるが如く國家が立法し、國家が行ひ、國家が賠償を取る所の刑罰ではない。その個人主義はゲルマニ法律觀念の特徵である。

彼等の曆は夜を以て始まり、日を數ふるに何日と云はず、夜を以てする。凡そ御祭その他の公事を行ふのにも、その前日の夜に重きを置いた。前述の會議も亦たさうである。新月若くば滿月を吉日として會合し相談し、酋長又は古老の提議にして若し彼等の氣に入るとき、彼等は武器を敲きて贊成の

意を表はした、何んとなればゲルマニ人は公事を行ふに必ず劍を帶び、これを以て一人前の良民の表彰とし、且武器の音を尊んだ故である。彼等は友情に厚く、よく賓客を遇し、やゝもすれば夜もすがら酒を酌みかはして痛飮する。

彼等の宗教は頗る幼稚であつた。何等の祠もなく何等の偶像もなく、只だ森林の間に於て、又は自然現象に於て神なるものを認めてこれを畏敬し、殊に柏の大木を尊び、その神なるがからの森嚴なる風姿、その暴風雨と戰へる壯烈ぶりを仰いで、そこに漫然何等かの神聖なるものを認めた。又た馬の嘶聲や、鳥の飛方、鳴方、又は木の小枝に印を切りつけて作つた御籤によつて吉凶禍福をトつたと云ふことてある。彼等の間には、基督敎會に見らるゝやうな儼然たる祭司（プリースト）の階級は未だ存在しなかつた。しかし、特に神事に通曉し、神と交通し得る個人があつて、さながら祭司の如き位地に居るものがあつた。この種の人物は必ずしも男子に限らなかつた。屢々婦人であることもあつたのてある。この種の婦人はよく豫言に長ずとて尊敬せられて居た。

羅馬人はゲルマニ婦女子の貞操を讃美し、不義に對する制裁の嚴しいのを述べ、又た男女ともに早婚の弊なく、身體成熟したときに行はれ、母は自ら親しく小供を養ひ、これを乳母に任せず、且子を有つことを幸福として居た。殊に伯叔父は自分の姉妹の腹から生れた甥を愛すること、猶實子に於けるが如くてあつた。人質をとる場合に、實子や他の關係の甥よりも、姉妹關係による甥を取る。卽ち姉妹を通ほしての母の關係を神聖とするものてある。つまり、所謂母權なるものを尊重した形跡が尙ほ殘つて居たと謂ふべきてある。當時の羅馬の有識者又は道德家の階級の見地に據ると、羅馬の開化社會に無い、又は缺けて居る若干の道德的精神的特徵が、特にゲルマニ民族の間に存在して居つた。そこて是等の美風が數へ上げられ或は多少誇張されて羅馬社會警醒の具に供せられやすかつた。例へばタキツスの風土記の如きもその傾向を免れない。

以上は主としてタキツスによつてゲルマニの生活狀態を述べた。然らば、これを羅馬人と比較したならば、兩者如何に差異があつたであらうか。この間に、我々の興味がおのづから惹きつけられるのてある。私は次の如く要約して之に答へたい。

羅馬人は强大なる國家を以て世界統一を行ふたに對し、ゲルマニ人は個人を中心として部落の獨立保持を理想とした。一方は廣大なる世界に於て貨幣卽ち資本經濟を營み、他方は狹隘な範圍に於ける自然物經濟に生きた。一は都市生活を光榮とし、他は森林の間にゲルマニの自由宿れりとして田舍生活を誇とし、未だ都市生活を知らず、又その繁瑣に耐えることが出來なかつた。前者はかの開化した世界的宗敎卽ち加特力敎會に新に歸して居たが、後者は幼稚な自然力崇拜を行ひ、種々大小粗野な神

々を信じた。卽ち後者は、かの早く世界の一神に歸した都市住居の基督敎徒からは、異敎徒の意味で實に村人若くば叢(ヒーゼン)の人(ベーゼン)の名稱を以て區別された。猶ほ古代世界から遺つて居る異敎信者が區別されると同じことてある。

26　ゲルマニの思想

ゲルマニの思想を窺ふには、彼等固有の神話に據らなければならぬ。この神話は幸にも基督敎の最も晩く入つたスカンヂナヴイア、殊にそのアイスランドの島に於て比較的後世まで保存されて居たので、十一世紀頃の基督敎宣敎師によつて蒐集編纂されたのてある。卽ち、かのエッダと稱する北歐神話集はかくして出來たのである。この內に傳へられたゲルマニ神話は、全くかのタキッスの報道する所と、根本に於ては相一致して居る。卽ち天然力崇拜てあつて、只だそれが一層發展したばかりてある。私はこれに就いて少しく述べて見たい。最高の神々は先づオディンと云ふのがあつて、一切萬物の父、戰爭の君主と考へられて居る。次にオディンの妻にフリッグと云ふのが居る。オディンの子の一人にドナール[16]と云ふ風雨雷霆の神があり、かくの如き神々が集つて一家族を成して居る。因みに、是等の神の名に七曜の名の多くが起源して居る。神話によると、彼等の棲家は一個の高く聳ゆる高殿て、黃金の壁、白銀の屋根から出來て居る。これをワルハルラ[17]と名づける。これと人間界との間に橋があつてドナールの神がこれを架けた。卽ちこれ虹霓てある。神々はこれを渡つて人間界に降る。オディンは御殿の裡の黃金の椅子に坐し、その周圍に多數の男女の神が居てこれを取り卷いて居る。その中に神の使を勤める少女神があり、これをワルクーレス[18]と呼ぶ。これ等の使はかの虹霓の橋を渡つて人間界の戰場に來て名譽の戰死者を扶け導いてワルハルラの宮居に拉し去る。これ等の勇士はこの高殿に於てワルクレスの酌で美酒佳肴に醉ひ永久の生活を享ける、實にワルハルラとは戰場て仆れた者の廣間、がある。この國をニーフェルハイム[20]と云ふ。これは冷き霧の里の義て、北方の地の底にある寒い暗黑鄕てある。その妻はホルラ[21]と呼ぶ死神てある。凡そ人間の中て、病死又は老死した不名譽の軍人はこゝに迷ひ來るのてあると。それては上述の善神と惡神との關係如何と云ふにオディンはローキを征服してこれを捕縛した。然るに一日ローキは繩目を脫け、巨漢(ジアイアント)の群を率ゐてワルハルラを襲擊し、世界を支へて居る大木を倒した。これが爲めに世界は沒落し、ワルハルラは燒かれ、善神は征服せられた。これ卽ち物語に所謂『神々の黃昏(ゲッテルデンメルング)』[22]卽ち神の衰亡と謳ひ傳へられるものてある。しかし次の時に至つて、更らに善き土地が太洋中から起つて、諸の善神再び蘇生して起り、さきに失はれた世界を恢復して盛り榮ゆるてあらうと云はれて居る。

以上略述した神話は、今日の獨逸の國民的文化生活を豐かにする志料となつて居る。例へば十九世紀以來、文藝上ではワグネルの歌劇「ニーベルンゲン」[23]となつてあらはれ、その中で「神々の黄昏（ゲッテルデンメルング）」なる一曲もあり、建築では南獨はバヴァリヤ王國で、レーゲンスブルグ[24]の附近に於て、古來のゲルマニ民族の中から輩出した天才偉人のために、國民的記念神殿が建築され、それが實にワルハラと名づけられて居るが如きである。所謂、そこに如上の神話が應用されて居る。

さて以上の神話は如何に解釋せらるべきか。想ふに、これは北歐の天然と未開ゲルマニ人の原始的生活との結合したものであらう。善神は萬物を發育成長せしめる夏の代表である。夏はその日長く、光明るく、善神の支配する季節と考へられる。惡神は萬物を凋落破滅せしめる冬の代表者である。冬は夜長く光薄く、惡神のはびこる悲しい季節と考へられた。これ等の二つのものは相互に交代する。善神は夏季の進行すると共に萬物生成して、御世ゆたかに榮耀榮華を極め、自然に道德上の罪惡を犯したがために衰亡し、これに代つて惡神の支配が始まり、凋落の季節となる。これに據つてこれを見るに、神は善惡ともに皆自然力である。天然物と同樣に考へられたのである。隨つてゲルマニ人の善惡と云ふ概念は未だ自然を超越しない。卽ち未だ精神的のものではない。換言すればゲルマニが未だ羅馬帝國の文明、就中、その基督敎の敎化を受けない間は、彼等の心理狀態は精神的境涯に達しない。卽ち自然に對して精神を立て、暴力の桎梏を脫して靈魂の自由に就くてふ高尙なる慾求を起し、これに相當する努力を致す境遇に、未だ到達して居ないのである。當時、希臘人竝に羅馬人の文明社會に於て、基督敎の輸入以來、既に久しく問題となつて居た、かの精神上の天國を求むることは、未だゲルマニ思想家の感知する所ではなかつた。この粗野なる肉慾的自然的觀照を、かの聖アウグスチヌスの天國の思想と比較すると、その差天地も啻ならざるものがあるのである。

次にこの樣な世界觀を抱いて居るゲルマニ人は、彼等の國家及び社會の經營上、如何なる傾向に向ひ、若くば如何なる考方に入りつゝあつたか。

彼等が始めて羅馬人の版圖の境に入りて之に接した當時、卽ち共和時代の末期、イムペラトール・マリウスによつて彼等の侵入が防禦され擊退された時、羅馬人の證言から推定すると、ゲルマニは戰鬪の際、唯だ小兒の如く個人的衝動により、個人的慾望、個人的武勇を發揮して、死を怖れず、一血族又は一部落における自由民としての個人主義の卓越して居ることを示した。彼等が、後、羅馬帝國に接觸し、その社會に入るに隨つて、始めて彼等の間に、より大なる團體的結合を生じ、幾分か國家的社會的團體の發展を見せた。而も尙ほ久しい間に亙つて彼等固有の個人主義が跋扈し、良民と良民との間の爭鬪、部落と部落との軋轢は止まない、羅馬の社會に於て卓越した樣なかの國家及び社會全體

の統一を形造り得なかつたのである。彼等が羅馬の世界に入つて或る確かなる國家社會の形式を作るに至つたのは、餘程後の時代のことであつて、彼等が羅馬帝國の末路、中古生活の初期、數世紀に亘つて徐々に固有の個人主義を抑制して新に接觸した羅馬風に感化されたからである。この羅馬風とは他なし、羅馬帝國及び加特力敎會の統一主義これである。部落人民の個人獨立をその固有生命とするゲルマニ風と對照するものである。かくの如くして是等新舊兩要素は相對立し相反撥しながら、遂に數世紀の發展の間に次第々々に相接觸し、相抱合して、ここに新に一個の大いなる複合體を化成せんとする。この新らしい渾一社會を名づけてローマノ・ゲルマニック卽ち羅馬風ゲルマニ風民族團體又は世界と云ふ。

然しこの世界的、否な或る場合には國際的共通團體にあつても、尙ほ元來から固有の相異つた二個の傾向が伏在して居つて、時に各自の頭を擡げて、相衝突することがあるのは言を竢たぬ。これ西洋を出發點とする世界史の發展を特徴づける興味の深い文化現象である。卽ち是れ羅馬風主義（ローマニズム）とゲルマニ風主義とである。これらのものは既述の如く卽に相抱合して一新社會を造ることになつて居ながら、同時に兩々相對抗すべきであつて、實に古代から中世への過渡に於て最も著しく現はれ、近時に亘つても屢現實の問題となるべきものである。

第八講　羅馬風ゲルマニ風社會の成立

27　帝國の東西分裂

羅馬帝國は三九五年、テオドシウス大帝の死後、東西に分れた。故に先づこれ等東西の差別を知りおくべき必要がある。抑も東は皇帝存續し、尙ほ天下一統を稱し、その中には時には、ユスチニアヌス①大帝（五二七―五六五）の如き有力な人物が出て、東方固有の專制統一政治と、その優勢な經濟上能力とによつて、自ら維持し、或る程度まで帝國統治（インペリウム）を恢復中興した。この文明は大體に於て希臘風であつた、吾人はこれをその都の古い名稱によつて、ビザンツ②の文明と稱する。この名稱は卽ち中古の希臘文明と見て差支へはない。この帝國に於ては、第一期移動民族の一である東ゴート部がバルカン方面を去つて（四八八）伊太利に向ふた後では、ゲルマニの侵入なるものは十一世紀のノルスメンの一部の現はるゝまで數世紀間絶えた。卽ち、ビザンツ文明社會は民族移動の第二期に於てその直接影響をうけなかつたと見てよい。

これに反して、西方卽ち羅馬風文明の世界は、先づ第一期移動のゲルマニ諸民族の占領に歸し、その結果、所謂『西羅馬滅ぶ』四七六年からカール大帝卽位八〇〇年までの間、皇帝空位となり、眞の政

治上統一者を缺いた。第六世紀に於て、かの東皇帝ユスチニアヌスはイタリヤを始めとして西方世界の重要部分を恢復したけれども、帝の死後、早くも第二期移動開始の先鋒であるロンバルド人のイタリヤ侵入のために、且つ第七世紀八世紀には新興の回敎（イスラム）の熱心が煽り立てたオンマヤ家の西方世界に對する大侵略のために、西方は大體に於て羅馬帝國の支配から失はれた。かくの如くしてゲルマニ民族は伊太利に於てはロンバルド人、ヒスパニア及び南方佛蘭西では西ゴート人（七一一年オンマヤ家の侵略のため亡ぶ）、東佛蘭西及びスウィスに於てはブルグンド人、北佛蘭西ではフランク人、イングランドではアングロ・サキソン人、各々羅馬風の人民の間に於て各自の獨立國を建てた。これ等に於ては羅馬帝國の威令最早行はれず、加ふるに、ライインの後方には、未だ曾て羅馬帝國に支配されなかつた地方に於て、粗野勇敢なる人民が、いはゞ今や片津を呑んで控えて居る。換言せば、これらは大體に於て未だ羅馬風に化せられない純粹のゲルマニ世界である。彼等は何時更らに先進者の跡を追ふて南下するかも知れぬ狀態にあつた。

而して羅馬帝國の故地の內に於けるゲルマニ諸國の支配者は、一旦その國に定住して以來、その國內の羅馬風の人民を支配するには、羅馬風の法律、制度に賴るの外なく、且つ自らもコンスル、パトリチウスなどの羅馬帝國の儼めしい官爵を貰ひ受けてこれに君臨するのを便とした。加ふるに自分等の

ゲルマニ固有の習慣法をば羅馬法典に倣つて明文に書き下すことゝなり、諸部族間に於て相續いて、各自の法典編纂の業が起つた。その最も眞先に出來たのは卽ちかの前講に引用したサリカ③法典これである。これ等のゲルマニ民族法は羅馬帝國の法典から區別して外夷法（レーゲス・バルバロールム）と總稱された。かくの如くにゲルマニは次第に羅馬の文物を習ひつゝあつた。彼等は自然に羅馬の言語・文字・文學を知つた。そして彼等に治められる羅馬風人民は、その反對にゲルマニの影響をうけ、こゝに羅馬社會共通語たる拉典語及びその文章は漸次崩壞し、各地に於て一種の蠻化（バーバラス・ラテイン）せる拉典語と總稱する言語文章起り、上述の法典編纂を始とし、諸官衙、敎會等に用ゐられるに至つた。卽ちこれ時と共にローマンス諸國語の起るべき一般的基礎、卽ち第一階段である。因みに云ふが、こゝにローマンス物てふ、ゲルマニ人に取つて、外來の優秀な文物の起るべきことが自明でもろ〳〵こしものと稱するものを認めたが如くてある。當時これらの輸入諸文物中に傑出して有名となつた物語類が特にローマンスてふ名を獨占するに至つたのは、全くこゝに胚胎するのてある。例へばアーヂスといふ英雄物語の如きてある。

以上述べ來つた羅馬風とゲルマニ風との融合を助長したのは、勿論羅馬の世界統一思想てある。けれども、このものゝ護持者は、最早、古のローマン・イムペリウムそのものてはない、古羅馬皇帝の統

治權ではない。いはゞ古のローマン・インペリウムを中古に於て攝攬するとも稱すべき羅馬の加特力敎の司敎（ピシヨップ）、卽ち法王（パープ）の敎會である。」以下段落を改めて、このものを說かう。

28　羅馬法皇の起原　ペネディクチン修道院

久遠の世界市、羅馬府に於ける基督敎傳道は、基督の直弟子て使徒（アポッスル）たる聖ペテロ（基督の命名によるといふ、卽ち盤石の義）が、その基礎を据えたと、傳へられて居る。一爾來、羅馬の司敎（エピスコープス）の位は今に至るまて聖ペテロの椅子と傳へられて居る。羅馬帝政の末路、皇帝がしば〳〵チベル河畔を見棄てゝ、北方伊太利のラブエンナ㊥港に立て籠り、或は遠くボスフォロス峽頭のコンスタンチノープルに竄居し、遂には上に述べた如く西方に於て皇帝の位全く空しくなるや、聖ペテロの法燈を紹ぐ者が、さながら皇帝に代つたかの如き位置に立つことになつたのは、自然の勢てある。何となれば、この者は、曾に民族移動に伴ふて打ち續いて起つた羅馬風人民の不幸を慰め、野蠻人の亂暴を和げたのみならず、かの新らしく建てられたゲルマニ諸國を敎化し、現に如何なる皇帝の威令だも行はれない西方に對して、天下の平和を宣傳し、而も猶ほ古來羅馬帝國が支配したこともなかつた土地及び人民をさへ、自分の敎會の敎化の繩張の內に網羅することになつたからてある。換言すれば、羅馬は、西方世界と共に、今は羅馬皇帝の羅馬てなくて、羅馬司敎卽ち法皇の羅馬とならんとするのてある。

この點に於て、六世紀の後半期に於ける羅馬及び伊太利の現狀は正しく象徵的、特徵的てある。見よ、東羅馬がかのユスチニアヌス大帝の時、一旦兵力を以て羅馬及び伊太利を恢復したけれども、兵亂の跡は痛しく荒れすさんだ。かゝる際、大帝崩じて未だ幾年ならざるに、パンノニア（ハンガリア）の森から現はれたロムバルド人がユリヤ・アルプスを越えて南下侵入して民族移動の第二期を開始した。この新來者は主として北方伊太利を根據とし（それ故にその地名ロンバルヂヤが起る）パヴイアに都して、尙ほ半島の大部分を蹂躙且つ占領し、只だ羅馬、ラヴェンナ、竝に南伊太利の海岸地方を殘すのみてあつた。彼等は侵入以前から基督敎に化せられて居たが、それは加特力敎てはなかつた。彼等の信仰は、かのニケーアの信條の決議によつて帝國から排斥せられたアリア㊦派と云ふ異端てある。彼等は伊太利の土地を大部分沒收し、人民の生業を奪ふた。かゝる際の常として疫病さへ破裂したがため、伊太利社會は彌が上に混亂した。さなきだに、皇帝東遷のため衰微した羅馬府は、かの四一〇年の西ゴート部の掠奪以來、しば〳〵兵亂にかゝりて一層荒廢し、昔は立像や圓柱や、宮殿の都とも稱すべかりし都も、今は破壞されて全く其の面影を失ひ、これ等の尊き文化記念の原料は燒かれて石灰となり、或は城廓の建築や、道路の修繕に轉用され、貴き靑銅像も惜げなく鑄つぶされゝ淺ましき世となつた。この亂暴狼藉に遭ふて、羅馬及び伊太利の知識階級は、思を古來の習はせてあつた政治上

の顯達に絕つて、宗教界に身を投ずるの外はなかつたのである。就中、彼等の嘱望する所は羅馬司教の教會の教化事業であつた。當時社會の教育は、羅馬時代に榮えた古の修辭學校(レトーリック)裏へて、これに代はるべき自然の窮策が案出された。それは修道院(モナステリー)である。

この出家隱遁して只管神明の道を修めるの風が夙に東方に於て盛んであつたことは、云ふまでもない。今や西方に於ては、中央伊太利のヌルシヤの人、聖ベネディクチヌス⑧始めてこれに則つて、南伊太利のモンテ・カッシノ⑨の山に一團を開基した。時に、東てはユスチニアヌス治世の初期、五二九年であつた。これは東方の出家の風を改良して西方の生活に適するやうに溫和化した修道院である。凡そこに入る者は服從、清淨、清貧の三誓を取り、一定の戒律勤行に服し、遑あれば古文書を謄寫し、又は土地の開墾、機織等の生業に從事した。この派の格言によると『祈禱せよ、然らずんば働け』とある。又曰く『閑居は精神の疲病なり』と。かくの如くしてベネディクト教團が創立せられ、次第に西方一圓にその末院が建てられた。これ等は概ね山林曠野にあつて附近の土地を開き、交通を安全にし、生業の增進を計つた。故にベネディクト教團なるものは、六世紀から十世紀頃まて、宛も中古の所謂『暗黑の世』にあつて、唯一の學藝保存場、卽ち教育の中心てあり、又たこれと同時に產業を營みつゝある當時唯一の植民的工業的中心地てあつた。凡そ修道院に籠つて如上の誓を取つた者を總稱して、律僧(モンク)と

呼び、その長を院主(アボット)と云ふた。律僧(モンク)は祭司(プリースト)から區別された。祭司は實に一種の行政官の如く直接に人民を牧するもので、各一定の教區を有し、その教民を教化するの任務を有するものである。司教(ビショップ)（監督）はその長てある。けれども祭司(プリースト)の人物は概して修道院て養成されるのを常とした。故に司教(ビショップ)等の有名なる役僧は多くは律僧(モンク)出身てあつた。羅馬の司教(ビショップ)の如きも亦たさうてある。

話は跡に返つて、偖も上述のイタリアが混亂の淵に陷つた際、時は六世紀末、グレゴリー一世（五九〇―六〇四）と云ふ人物が現はれた。彼は古い羅馬の貴族の出身である。昔の如く世が世てあつたならば、プレートル、コンスルなどの羅馬の高き公職に昇るべかりし人てある。彼は當時の知識界の常としてベネディクト教團に入り、その教育をうけて羅馬の司教に仕へ、遂に選ばれて聖ペテロの椅子に著いた。彼は學德高く、說教に、書簡に、はた宣教師派遣によつて廣く西方諸國を教化した。彼の教化として最も有名なのはアングロ＝サキソンのそれてある(五九七年)。これによつて彼等の間にカンタベリ⑩の本山が建立されて、ブリタニアの島に羅馬の正教が始めて輸入された。この司教の御世に古羅馬帝國の領土内に在つた西方のゲルマニ諸國一圓は、加特力教會の内に網羅され、いづれも羅馬の司教(ビショップ)を最高の司教(ビショップ)と仰ぐに至つた。抑も司教(ビショップ)は世界に數が多い。けれども羅馬司教(ビショップ)がその内ても特に尊敬されることとなつたのは、この頃に始つて居る。凡そ人民が宗教家を呼ぶ名稱はすべて父(パパ)て

ある。然し、この頃から單に父と云へば、特に羅馬の司教を意味することとなつた。父は卽ち法皇であ
る。故に上述のグレゴリ一世[11]は大法皇と稱し、實にこれを羅馬法皇權發展の一新時期と見做すべき
てあることは當然てある。

29　フランク王國の勃興

然しながら法皇の權力の發展竝に羅馬風ゲルマニ風社會の成立を說くに當つて、他に逸すべからざ
る重大なる政治的要素があつて、これに與つて居る。

(1)　ビザンツ
(2)　恰ど七世紀に起つたイスラム（回敎）
(3)　ゲルマニの代表者フランク

この三者これてある。然し私はここては特に第三要素を問題の中心として吾々の概觀を進めるのを便
とする。他は第十講にゆづる。

抑もフランクはゲルマニ中の一大部て、その中堅部落をサリックと云ふた。この部の歷史は極めて
重大て、西歐と離るべからざる關係を作り、その結果、後の歷史に於てはフランクは拉典と同意語と
なり、かのビザンツ竝に回敎人と對立して一切西洋國民の總名となる場合さへある。例へば明史に佛

郎機傳が設けられてある、これは實はポルトガル人を指してかく名づけたのてあるが如きてある。偖
て、原始フランク部は、最初、メロウィング家[12]の國王クローヴィスの統率の下に、ラインを越えて南
下し、四八六年、ソワソン[13]て羅馬地方官の軍を擊滅し、この戰捷によつて、ガリア地方に建國し、夙
に他のゲルマニに見られぬ異常の特徵を現はした。私は次にこの特徵の大なるもの三を擧げることと
する。

(1)　フランク王國は他のゲルマニと異つて、自分の根據地から地續きに西南に向つて膨脹し、これ
と同時に自分の背後をも固めて、後方の人民をも利用した。この版圖擴張は主として征服の權利によ
つた。故にフランク王權は他のゲルマニのそれよりも強大てあつたのてある。

(2)　フランクの宗敎關係は帝國に入つた他のゲルマニのそれと異つて居る。初めラインを越えた時、
彼等は尙ほ古いゲルマニ異敎を信じたが、四九六年レーンス[14]に於て一足飛に羅馬の敎會に歸し、最も熱
心な加特力信者となつた。故にその國王は羅馬から『最も基督的なる國王』[15]の稱號を受けた。

(3)　このフランク王權と羅馬司敎の提携は、八世紀において、當時に於ける世界の大事變と相俟
つて一層親密の度を高め、その結果、フランク國王は法皇からゲルマニ諸王の中て最も信賴せられ、
特に敎會の守護職に任ぜられ、遂にイムペラトールの尊號を受くるに至つた。但し、この八世紀には

フランク國民は、その王家に交替があつて、人物の墮落せるメロヴィング家の代に、新しき王家、カロリング(16)家の支配となつた。この家の初、父子孫の三代相續いて、一代は一代より、より有力に、より大いなる人物が出たことは世界史上注目に價する。卽ちカール・マルテル、ピピン「短小」及びカール大帝(17)これてある。

以上をフランクの三大特徴とする。然らば上に暗示した所謂八世紀における世界の大事變とは何か。

(1) 回敎軍は、之より先既にジブラルタルを渡りてヒスパニアに入り、更らにピレネース(18)を越えて西方世界に侵入したが、上述のフランクの兵力はカール・マルテルの統率の下によくこれをツールとポワチエー(19)との間にて擊退し(七三二)、西方文明の危機を救ひ、羅馬の感謝を受けたこと。

(2) 東羅馬帝國に於て偶像破壞(イコノクラスト)(20)の勅令（十講36）出て、その運動は世界に擴つたが、羅馬はこれに反對して自立の態度を取り、フランクをひいて自家の後援としたこと。

(3) 西方における異端及び未信者の征服及びその敎化てある。異端の巨魁は、さしあたり、伊太利におけるかのロムバルド部てある。法王はこれを討伐するためにフランク人を招き入れた。フランク人はしば〳〵南下して遂にロムバルド人を討滅した。この討伐の手續中に、フランク人は法皇に前記被征服地のうちから土地を寄進したから、茲に所謂「ペテロの家督」なるものが擴大完成された。之を名づけて法皇の國又は敎會の國とも云ふ。次に未信者はゲルマニア內地に多くあること勿論であつた。卽ち、當時エルベ河口から西南に亘つて北方獨逸に住んて居るサクソン部を巨魁とし、種々大小の部落てあつた。是等の征服及び敎化は全くフランクの兵力と羅馬の敎權との協同提携とによるものてある。この際、羅馬の敎權を北方に於て代表したのは、聖ボニファチウス(21)（七五五年歿）その人てあつた。彼は元來アングロ・サキソン出身の律僧(モンク)てある。法皇に拔擢されてゲルマニ布敎使となり、三十年以上の間ゲルマニ未信者の間を巡錫し、その古き迷信を打破し、人民を懷柔し、有名なるフルダ(22)、其の他幾多の修道院を創めて律僧を敎育し、始めてゲルマニ人の間にその敎會を組織し、晚年その司敎者として、マインツ(23)に於ける大監督に任ぜられたが(七四八)、北方海岸の一蠻族、フリーゼン(24)に布敎の際虐殺された。この宗敎上人物の敎化の偉大なことは、凡そ獨逸の文明史上に於て、如何なる政治上君主に讓らないと云はれて居る。ボニファチウスの死後、カール大帝の治世中、約三十二年間に亘る數回の征伐によつて、流石の兇暴なるサクソン人も次第に征服され、信者となる條件を以て降伏した。勿論強制的にエルベ河等の水て新しき生活の洗禮が行はれたのてある。

以上三個の世界的大事變のいはゞ風雲に乘じて、フランク國王はゲルマニ中、特に敎會の眷顧と信任とを受けて、その守護職に推され、やがてカール大帝の卽位に於て、西羅馬皇帝となるべきてある。

30　カール大帝の卽位

フランク君主の西羅馬皇帝卽位の盛事は、民族大移動の潮流に促進されて持ち上つた羅馬風・ゲルマニ風社會のいはゞ落成式、少くともその棟上式である。

この卽位に關する直接事情は次の如く報道されて居る。時は七九九年、羅馬では或る祭禮の行列の途中、時の法皇レオ三世(25)は羅馬の貴族間に屢見らるゝ反對派の一揆が現はれて、その襲撃を蒙り身體を傷けられて殆んど死せんとした。幸に蘇生し、遁れ〳〵て北方に走りて身をカールの陣中に投じた。カールの陣中といふのは、彼は恰もかのサクソン征伐中で、今日のウェストファリヤ地方パデルボルン(26)に滯在して居たのである。カール乃ちフランク人の軍隊をして法皇を護送せしめ、翌年自らも南下して伊太利及び羅馬を鎭め、その年末の基督降誕祭に、聖ペテロのバシリカに於ける祝典に列した。此時彌撒(ミサ)の式も終つて、カールが未だ跪きから起たない瞬間に、法皇は突然冠をフランク國王の頭に加へた。參列の諸員之を見て異口同音に歡呼して皇帝カール萬歲を唱へた。カールは後に左右の人に語るやう、『あの時、かくの如き事ありと知りたらむには、睽は出席せざりしならむ』と。

以上が八〇〇年のクリスマスに於ける歷史劇的大事件の有りの儘である。然しこれを如何に解釋すべきかと云ふ所に、歷史家の任務が存するのである。これにつきては、後、中古の世も進んで十二、十三世紀となつた頃の時事問題を紹介するが便利である。といふのは、當時、羅馬風ゲルマニ風社會の骨子である獨逸及び伊太利を通じて、皇帝派(ギベリン)と法皇派(ゲルフ)(27)との兩派の抗爭(九、34)方さに酣であつた時である。彼等は各自の立場を擁護せんがため、カール大帝の卽位につきて、皇帝權は如何にして成立したか、といふ問題に論及して、各自の解釋を下した。皇帝派(ギベリン)は勿論カールが兵力て征服したからその權利が出來たと主張した。法皇派(ゲルフ)は之に反して法皇がカールに加冠したるが故に皇帝を作り出したと抗辯し、兩々相下らなかつた。換言せば、一方は皇帝の征服の權利、他方は法皇の加冠權を主張して居る。この際、恰も第三者が現はれて第三說を提出した。それは丁度同じ十二三世紀ごろに勃興し始めた都市、卽ち市民側の申分てある、曰くカールの帝冠を得たのは畢竟羅馬市民の選擧に由ると。これ等の三說はいづれも多少の根據があることは前記の報道によりて明かてあるけれども、各自の見地に立ち、各自の利益から割り出した解釋てあつて、決して事相の正鵠を得たものてはない。私はこれを世界的關係から說明するのが最も適當てあると信ずる。それは次の如くてある。

(1)　西羅馬には四七六年以來帝位空しくなつたが、人心は尙ほ羅馬帝國の永久に存續し、決して滅びざるものと信じて居る。

(2)　この間東羅馬皇帝は假に西方の帝位を兼攝して居ると考へられ、羅馬法皇も亦たこれを認めた

が、七二六年コンスタンチノープル（イコノクラスト）政府の偶像破壊令發布以來、法皇は之に反對して最早東皇帝を認めて居ない。西方人は以爲らく東羅馬皇帝は加特力の性質を失ふて異端となつたと。加ふるに最近に(22)は、ビサンヅ朝廷では女皇イレーネが、その子なる幼少なる皇帝の攝政となつて居たが、不道德で野心あり、自ら帝位を窺ひ、皇帝の長ずるや、この現在の生みの子を帝位から却けその身體を毀傷して廢人とし、自ら帝位に上つて天下に號令した。これ亦た西方人の眼から見れば簒奪である。要するに東羅馬は法皇及び西方人にとつては宗教上異端て、希臘風、東洋風に墮落し、且つ正統の帝位をも失つたものと考へられたのてある。

(3) これに反して、フランクは由來羅馬教會に忠實て、多數の異端及び未信者を征服して羅馬の教權の興隆に資し、尙ほヒスパニアに於ける回教徒を征討し、その結果、フランクの版圖は、西南はピレネー山脈の南、エブロ(23)河に達し、南は南伊太利に及び、東はダニューブ河の中流を收め、東北はエルベ河畔に達し、其の內には古羅馬帝國の西方に於ける版圖の大部分、竝に古羅馬帝國の未だ曾て支配しなかつた純粹のゲルマニア地方を含み、人民としては羅馬風諸民族とゲルマニ民族とを竝び統治して居る。所謂、かくの如き盛大な版圖はかの所謂西羅馬の滅亡以來、未だ曾て見ない所てある。

以上指摘した三個の世界的事情を綜合して推斷すると、西羅馬帝國のいはば留守居役を勤めつゝあつた羅馬法皇が、東羅馬皇帝に對立して、カールてふ有力な人物に西羅馬の帝冠なるものを加へて西方の帝位を充たし、かねて自己の敎會の重鎭となし、同時に法皇自家の地步を固めることは、正さに必ず然かあるべきことてある。故に八世紀末葉に於ける世界史の行方を察すると、かの七九九年及び八〇〇年の椿事なくとも、カールの卽位は早晩必ず起らなければならぬ事件てあつたのてある。只だそれが如何なる場合に於て、如何なる手續形式の下に起るべきかが問題てあつたばかりて、八〇〇年のクリスマスに實際に執行されたやうなフランク君主が西羅馬皇帝の冠を戴くといふことは、世界史的關係に於て必至必然の大事件てあつた。

之を要するに、紀元八〇〇年カール大帝の卽位は、四世紀以來の民族移動の潮流が開始しつゝあつた羅馬風、ゲルマニ風の兩要素の融合作用の一段落てあつて、之によつて、かくの如き渾一社會がその輪廓に於て仕上げられたことが、極めて明瞭に標徵されて居るといふべきてある。

第九講　羅馬風ゲルマニ風社會の發展

諸君！　吾々は羅馬風ゲルマニ風社會の成立を概觀した後で、こゝにその發展を追ふてみやう。これにつきて、次の三側面から考察するが適當であると思ふ、卽ち(1)神聖羅馬帝國、(2)封建制度、(3)法皇の宗教政治である。

31　神聖羅馬帝國の創立

吾々は前講に於て、羅馬風・ゲルマニ風社會が如何にして建設されたか、その成立の順序を一瞥して置いた。卽ち、この手續の中心となつたものは羅馬法皇及びフランク部族又はその國民であつて、かくの如き大いなる發展劇の最後の幕はカール大帝の加冠式であつたのである。世にこれを神聖羅馬帝國の創立と云ふ。これを建築に譬へると、この社會はいはゞ一個の大いなる神殿である。その內に神主と庄屋とが、遠く離れてゞはあるが、實は相住居して居る。法皇は儼めしい『羅馬』を代表する神主である。カール大帝は稼ぎ盛りのフランク村を支配する大庄屋で、同時に村の神殿建立を引受けた大工の棟梁である。そして、かの演劇的卽位式は宛も神殿の棟上げ式のやうである。かく觀じて來ると、抑もこの神聖な神殿の建物の內部が、如何なる造作の捗へが出來つゝあるかといふ疑問があのづから起

る。これが今後本講の目的とする所である。この造作は政治上經濟上から云へば、大地主の經營するお建制度であり、宗教上から云へば、法皇の教會が支配する宗教政治である。故に今日の題目として前記の三項目が揭げられてあるが、實は同一物の只だ異れる現はれてあるにすぎない。

本問題に入るに先つて、カール大帝の事業の世界史的意義を一言して置かう。大帝の御代はさながら沈みゆく黃昏の空に一時の榮を誇る夕照の如きものてある。古代文明の燈が消えんとする瞬間の一時の輝きてある。彼は自分の民族フランクを率ゐて四方を巡狩し、然るべき要地〳〵に滯在して朝庭を張りてその地方の資力にて自ら支持し、實にゲルマニ風の質素な生活を營み、自分の御料地(アルツペーズ)の農業經濟を增進し、以て王室勤儉の模範を立て、全國に向つて勸農令(カピツラリア・デ・ヴィリス)を發し、國內に按察使(ミッシ・ドミニチ)⑦を遣はして地方の非違を匡し、人民の疾苦を問ひ、且つ豪族の跋扈を抑制するために、教會の人物卽ち司教を任用して政治と教化とに充て、幾多の修道院及び學林を增設し、子弟の教育を奬勵した。故にカールの時、一時學問が頗る起つたから或る歷史家は之を『カロリング家時代の學藝復興(ルネーサンス)』と名づけて居る位である。例へばアインハルト②は當時有名なる學僧で、カールの大臣となり、帝の死後有名なるその傳記を書いた。帝は彼が平生愛住したアーヘン(エークス・ラ・シャペル)③にて、その寺院に葬られた。教會が彼に諡して、聖(セーント)に列して聖シャーレマーンと崇め、社會が彼を仰いで武士の典型としたのは、偶然でな

い。彼は畢竟中古を通じてローマンスに謳はるゝ理想の人物に高められたのである。

32　封建制度

大帝の死（八一四）後、世は次第に封建の傾向を現した。この封建なるものは如何にして起つたか。初めゲルマニが侵入するや、さなきだに衰微に傾きつゝあつた羅馬風の地方を見るに、その都市益々荒廢し、一方ゲルマニ地方には都市未だ起つて居ない。地中海岸にあるマルセーユの如き若干の商港を除く外の西方社會は全く田舍風に化して仕舞つた。次にゲルマニの定住と共に土地開墾が始り、今日のフランスからドイツにかけて、數世紀の間に漸次に森林、沼澤、原野を切り開くに至つた。故に五世紀から十字軍の始る十一二世紀ごろまで、歐洲は、經濟史上、自然物經濟及び土地開墾時代にあつたと云ふべきである。今少しく詳しく云ふと、貨幣の流通殆んど全く絶え、動產資本缺乏し、只だ土地と云ふ不動產資本と人間の身體の與へる勞働とのみが、一切財政經濟の融通手段となつた。ゲルマニは、最初かのタキッスが傳へた如く、部落の土地を共有とし、これを部民の間に分配、使用し、その人が死ねばその土地は部落に返るを習慣とした。然るに、彼等は一旦羅馬風地方に入るや、自らその經濟生活にならひ、且つ自ら開墾し、且つ土地占有の生存競爭盛となり、こゝに漸次私有財產權てふ觀念を作るに至つた。その中にも、彼等の敎會や修道院の如きは廣大な土地所有者となつた、

これ一つは信仰による喜捨の結果にも原因する。抑も羅馬風の經濟生活の中に、古來恩惠（ベネフィキウム）と云ふ風がある。これは大地主がその所有地を自由に使ひ、これによつて生ずる利益を用ゆる權、卽ち用益權（ウースフルクツス）⑭を他人に貸與し、自分はその土地の用益料を收ることとてある。ゲルマニの地主も亦たこれに倣つた。そして用益料は自然物竝に身體を以て支拂はるより外はない。これと同時にゲルマニ人の間には、かの隷屬（ホマーギウム（ホゲージ））のタキッスの傳へたやうに、主從相結ぶ風があつた。主君は郎黨を保護し、郎黨は主君に忠勤を抽んて居た。これを人となること、卽ち服從の誓と云ふのである。そこて、この關係とかの恩惠とが自然に結合された。卽ち恩惠を賜はる者は服從の誓をする。かくの如くして出來た土地を所領（フェウダム）⑮と云ふ。これが封建制度の中核てある。

然らば封建制度は如何にして成立したか。かゝる風習は、固より一朝一夕て成立したものてない。けれどもこれを大いに促進した動機がある。それは八世紀に於ける回敎軍の侵入てあつた。この時フランク王國は、國防の必要上當時固有の臨機の財政策を執つた。それは外てはない。ゲルマニの古制によると一切の自由民は自費て出兵せねばならぬ。けれども今や國土廣大となり、而も交通は不便てある、隨つて自由民は遠隔の地に長期間出兵することが必要となつた。而もこれは經濟上不可能てあつた。因つてメロウイング朝の執權職（マーヨル・ドームス⑯（宮宰と稱す））カール・マルテルは王室の御料地の外に、敎會の領

地を借り上げて、これを自分の恩惠（ベネフィキウム）として然る可き人々に下賜し、その代償として、馬匹を飼ひ、一旦緩急あれば、出兵するの義務を誓はしめた。卽ちこれが封建制度成立の始てある。かくの如くして、フランク王國は始めて有力なる軍隊を組織して、前述の如く、囘敎軍の前進をガリヤから擊退することを得たのてある。

但しこの財政上經濟上の便法にはおのづから政治上權力の附與が伴ふた。これは、第一に課稅や裁判等については中央政府の支配から免除されることてある。この特權を名づけた免除（インミニテイ）と云ふ。かくの如き特權を賜はりたる土地は政府の官吏から若干の場合を除いて干渉され得ないことは、猶ほ日本て守護不入地の如くてある。そこて、時と共に地主の內にはこの習慣に附け込むて私曲を營むものが起つて來た。例へば自分の所有地を、地方君主若くば宗敎上君主のやうな然るべき有力者に獻上して、更らにその同じ土地を封土として右から左へと受けると云ふが如きてある。かくの如くして全國の土地が次第に封建化し、中央政府に直屬する所謂自由獨立領は段々と少くなつた。この發展はカール大帝の死後、後に述べる種々の事情が錯湊して、九世紀及び十世紀に於て著しく進みゆき、所謂中古の暗黑（ダーク、エージ）の世を現出した。

何が故に封建制度はこのやうに大發展を遂げたのてあるか。これには次の三個の事情がある。

(1) カール大帝の死後、その子孫たるカロリング家君主は、かの前の王家たるメロヴィング家の末路と同じく、これもまた墮落し、歷代殆んどみな薄弱て、角折大帝の苦心經營して築き上げた帝國を維持することが出來なかつたこと。

(2) ゲルマニに固有の個人主義、卽ち各部落、及びその有力者が各自に獨立割據の傾向を現はし、彼等は元來各部落、各地方の地方官（コーメス）⑦てあつたものが、事實に於て父子その官を世襲して封建君主と化し、地方官たるコーメスは世襲貴族の榮爵を意味することゝなつた。コーメスは卽ちカウント（伯爵）てある。

(3) ゲルマニ第三期の移動がノルマンによつて開始されたこと。この未開異敎の大部民はフランク人の帝國の到る處港灣を利用し、川筋を遡りつゝ內地に侵入したから、各地の有力者をして、自分の實力に賴つて地方及び人民を防護するの外なく、益々封建の勢を成さしむるに至つた。しかのみならず、このノルマンは連年フランク帝國の西部地方、卽ち今日のフランスに侵入し之を惱ました。同地方に君臨するカロリング家は之を擊退することが出來ず、遂にセーヌ河口の地を割きて之に居らしめた、卽ち有名なノルマンディ⑧公國の建國てある（九一一）。その代りに、彼等はフランク人の宗敎、卽ち羅馬の基督敎に化し、爾來熱心な加特力信者となり、同時に封建制度を習ふた。之より以後、この新

進有力なゲルマニは羅馬風（ローマニアン）即ちフランス風の代表者として世界を横行し、到る處に彼等新得の信仰と自己が敎養されたる制度とを齎して、これらの二大文化を傳播扶植してゆくこととなつた。この重要な發展は、實に世界史の主潮の一てあつて、その內ても、十一世紀に於る南伊太利占領、一〇六六年のイングランド征服（『英國のノルマン征服』）一一〇〇頃の聖地占領（即ち第一十字軍の結果）は尤も注目に價する。

かくの如くして、フランクの廣大な版圖は瓦解して地方割據となり、羅馬風ゲルマニ風混和の社會、即ち西歐の大部分を擧げて一個の封建社會に化した。その中から、十世紀以後に、各地における有力者の努力、敎會の後援、土地の情況、人民の氣風等の種々の事情が經緯錯湊して、ここに、先づフランクの版圖の中、その西部に於てはフランス民族、東部に於ては獨逸民族が、それ〳〵漸次に形造られ、各自に封建國家を經營することとなつた。これが即ちフランスとドイツとの起源てある。但しイタリヤ民族の國民若くば國家としての形成は尙ほ數世紀間晩れるのてある。如上の西歐全體に亘つた社會及び國家の組織は、所謂封建制度てあつた。然らばかくの如き制度が當時の人民にもたらした利益は何てあるかといふ疑問が起る。それは確かにあつた。即ち次の如くてある。

當時人民の精神上經濟上能力は尙ほ頗る幼稚であつた、彼等は先見の明に缺け、知慮に乏しく、簡單な數字の加減すら十分に出來なかつた。交通は不便てある、警察は不完全てある、それに上述の如く外寇の危險が頻繁てある、眞に不安に滿ちた社會てあつた。かくの如き低級なる人民と不安定なる社會に對して、地方もしくは豪族各自の間に、自給自足の經濟組織と社會階級の分化、及び秩序とを與へたものは即ち封建制度の利益否な恩惠てあつた。階級の分化とは從來の(1)自由民、(2)半自由民（町に住める技術ある勞働者）、(3)不自由民といふ三階級が壞れて、その代りに時と共に、新に(1)貴族、(2)自由農民、(3)隷屬農民といふ社會の階級が出來たことを云ふ。その中、昔は大多數は誰も彼も一樣に自由民てあつた社會から、その自由民の大部分は下りて隷屬となり、殘りの一部は出世して今は即ち貴族なるものとなり、己れ獨り馬上の人となつて天下を支配した。所謂、古のまゝなる自由獨立の農民は次第に僅少となつた。この封建社會をば、グルマニ固有の一家族が各自に自給自足するといふ原始的生活に比較すると、新社會は即ち、より大いなる團體が自立自營してゆく特殊の組織を有する自然物經濟てあつて、これには、以前よりも優秀なる知力の活動——先見、考慮、計畫、組織、運用、分業——を必ず豫想しなければならない社會てある。即ち新舊兩者の間に、生活の一大進歩が認められなければならぬ。

33　神聖羅馬帝國の再興　ドイツ民族の形成

フランク人の神聖羅馬帝國が、カロリング家の衰亡のために、豪族の地方割據となり、全體の統一の破れたことは前に述べた。この帝國は、大體、アルプス以北の地方に於て更らに東西の二大部に分れて居た。この區別は、西ては羅馬風が盛んて、東ではゲルマニ風が勝つて居といふことが、各自の特徴てある。兩者の中間に横はる地帶はロターリンギア(9)（カロリング家の長子、ロタールの子孫の所領といふ義、今日のロートリンゲン卽ちローレイヌはその名殘りの一部てある）と總稱し、幾ばくもなく東西の爭奪地となつたが、九世紀の末には遂に東部の有に歸した。然し今後とも尙ほ絶えず兩者の爭奪の目的物となるべきもので、今日の獨佛間の境上の爭は、實はその歷史的連續に外ならぬ。西部ではパリーの豪族カペー(10)家が、そのカロリング家を壓倒して漸次强大となつて、遂に十世紀の後半に於て、パリー及びその附近を領して遂に王と稱した。卽ちこれ今日のフランスの建國とすべきものてあつて、實に、將來强大なるその王國を建設統一するいはゞ中核とも心臟ともなるべき大いなる運命を有して居る。しかし、建國の當初、約二百年ばかりは、微々として頗る振はず、換言せばこの期間、東部に新に起るべき王家ほどの國家統一力を有つて居なかつた。

然らば東部は如何にして發展したか。こゝてはデーン人、卽ちノルマンの一部、竝にマジャール人（ハンガリア人）の侵入に或る期間惱まされたるが、是等の二民族の入寇の擊退とスラーヴに對して東北未開の地方の防禦竝に植民といふ三大國是の必要上、東部フランクの間て有力な部族君主の互選によつて、彼等の間に國王が選立された。これが卽ちドイツの國民及び國家の始てあつた。是等の王家て、最初に選出されて眞に力强く確立したのはサクソン家てある(九一九)。

抑もこのサクソン部族はかの百餘年前まて尙ほゲルマニ異敎信者てあつて、荒い一方の未開人民てあつたが、爾來始めて加特力敎に歸依し、ドイツ部民中最も新しい基督敎信者となり、それだけ若々しい熱心な信仰を抱き、且つ武勇の點も亦他に秀てゝ居つたから、この十世紀に於ては上述の如く自分の間からドイツ國王を出して宛然の獨逸の代表部民といふ位置(11)を取ることになつたのてある。かくの如くして出來た王家から人物が輩出した。就中第二代オットー一世(九三六―九七三)尤も有力てある。主としてこの人物の統率の下に、サクソン人は他の部族の協力を得て、かのこの時まて百五十年間中歐の禍てあつたマジャール(ハンガリ)人の侵入を擊退して、これを今日の如くダニューブ河の中流地方に閉息定住せしめ、之と同時にスラーヴ人の西方前進の勢を喰ひ止めて、却てドイツ民族の勢力とその文化を東方に擴げ、以て國民全體の結束を固めるといふ大功績を立てた。今日、ハンガリア王國の人民や、西スラヴ諸國、就中ポーランド人の如きが地理上中歐、否な寧ろ東歐に位しながら、大體において、東方の基督敎文明を受けないて、羅馬加特力敎の信者となり、西歐文明の光被に浴して居

り、換言せば、今日に至るまで尙ほ羅馬風・ゲルマニ風社會の雰圍圍内に生息し、希臘風スラヴ風社會に屬して居ないのは、主としてこのサクソン人を中堅とする獨逸人の東方に對する開拓の努力の結果てある。

この廣大なる征服と敎化との運動の背後には、羅馬風の大勢力が控へて居たのは勿論てある。實にサクソン家の君主はこれと親密にして良好な關係を保つことに意らなかつた。それには何よりの好機會があつた。卽ち伊太利においては、カロリング家の衰亡以來、豪族が相分れ相爭ふて居たことてある。オットーは彼等の一派の者に招かれて、屢々、伊太利遠征を行ふた。その第二回目の時、始めて久遠の都羅馬に入り、かのカール大帝の如く、而も九世紀末以來中絶して居つた帝冠を加へらるゝ儀式を享けた、時は九六二年てある。當時、羅馬法皇廷に於ても、言ふに忍びざる腐敗と黨爭とが流行して居つた。その重な事情は或る一派貴族の婦人らが自分の情人や、小供や、若くば孫を法皇としたといふ事實に存する。所謂『法皇の婦人政治』[12]と云ふ時代はこれてある。世上に、ヨハナといふ婦人が聖ペトロの高御座に昇つて居つたとて、所謂『女法皇』といふ面白い傳說さへ起つたのは之がためてある。

オットーが羅馬に入つて加冠されたのは、實にこの婦人政治の系統をひいた法皇の一人ヨハネ十二世の手によつたのてあることは奇しき運命てある。けれども、大帝が幾ばくもなくこの汚れたる人物を廢して羅馬の朝廷及び風儀を清め、自分て一人の法皇を立てゝ法皇朝の振肅を謀つたのてある。

オットー大帝の羅馬に於ける加冠は、卽ちかのカール大帝の神聖羅馬帝國の恢復てあるといへる。この帝國の建築は、既に西部フランク地方が、上述の如く、フランス王國として獨立して居たから、只だ東部フランクの間から新に起りつゝあるドイツ民族が歷代しばゝ〳〵羅馬を遠征することによつて、始めて築き直され又は維持されたのてある。因つてこれをドイツ國民の神聖羅馬帝國と稱して、かのフランク國民のそれから區別し、俗には單にドイツ帝國と云ふて居る。これから、約三世紀間、ドイツ君主は歷代羅馬へ遠征して、帝冠を戴くを常とした。卽ちその最初の王家たるサクソン家（九一九―一〇二四、）は前記の如くオットー大帝以來、その次には、フランコニア家（サリック家とも云ふ、一〇二四―一一二五）である。更らにその次にはスタウエン家[13]（スワビア家、一一三八―一二五四）が出た。さうしてこれら三家の治世の間は、大體に於て中古ドイツ帝國の隆盛期てあつたのてある。

然らばこのドイツの主權者は、憲法上如何なるものてあつたか。各自の部族の地方に割據して居る若干多數の封建君主の間て、是等のものから互選、若くば承認を受けて、始めて立つて國王となり、而してかくの如き國王が羅馬法皇の御手によつて冠を加へられて始めて正式の皇帝となるのが、卽ち

當時のドイツの主權者てあつた。故に彼は一身にしてドイツ國王て同時に羅馬皇帝を兼ねるものてある。しかし彼は、元來その家の領地、例へばサクソニア、フランコニア（フランケン）或はスワビアに於ては一個の封建君主てある。卽ち他のものと同じく一個の公（ヘルツオーグ）[74]てある。而も國王としてはドイツ全國の秩序を正し、皇帝としてはドイツ以外の地方、就中羅馬及び伊太利をも繫ぎ、出來る丈け廣く天下を統治しやうとするのてある。故に彼は一人てドイツの諸侯ドイツの國王、羅馬皇帝といふ三個の政治上君主の資格を兼攝するものてある。而して彼が如上三個の資格中、いづれに重きをおくかは、その人の個性及び時代によつて異つて居た。十世紀、十一世紀、十二世紀に於ては、概して國王及び皇帝としての活動が盛てあつた。例へば既述のオットー大帝は勿論、オットー三世、フランコニア家のコンラド二世、ハインリッヒ三世、スワビア家のフリードリッヒ一世の如き、英主はいづれもそれてある。かくの如き有力なる人物及びその時代の場合には、概して法皇及び教會はこれに利用されて、その封建君主を抑壓し、世界を統一する機關たるにすぎない觀があつた。然しながら、十一世紀中葉以後、既に反動が起つて、法皇は皇帝の上に立たんとし、遂に封建君主を利用して皇帝に楯を突かしめ、機會ある毎に著々勝利を占め、遂に十三世紀の半に至つては、全然皇帝を壓倒するに至るべきてある。以上が卽ち中古のドイツ君主の性質て、而してその歷史上運命てあつた。

隨て翻つて法皇の側から之を說かなければ、吾人の觀察は完全になるまい。

34　法皇の天下一統政治

顧みれば、羅馬の司敎はかのグレゴリ一世大法皇以來著々西方て地步を占めて來た。既に八〇〇年彼等の一人はカール大帝に加冠して、精神上に於ては皇帝に優越するといふ姿を天下に示した。しかしながら、彼は政治上實力に於ては、吾々の一瞥したやうに、カロリング家からイタリヤに於ける若干の土地の寄進を受けて、始めて自己固有の領土（法皇の國）を作り得た位て、遙かにフランク人の勢力に及ばない。加ふるに封建制度の發展と共に、豪族らは跋扈してとかく敎會の權利を侵し、この清かるべき宗敎界も亦た大勢に動かされて、この封建に伴へる浮世の塵に染みて著しく濁化しつゝあつた。豪族若くはその子弟一門にしてその器にあらずして妄りに監督（ビシヨップ）の位地及びその所領收入を橫領するものが多かつた。之と同じく監督にして所領の擴大、政權の壟斷に力めるものも少くなかつた。その間、祭司（或は僧といつてもよい）職の賣買その他の非事が行はれ易かつた。この俗化に對して宗敎の神聖と敎會の權利とを信ずるものは、この狀態を慨嘆し、九世紀に於て、イシドール法令集（デクレタルス）[75]と稱する敎會の法令及び決議集を編纂した。その中にはコンスタンチヌス大帝御寄進狀と稱する有名なる文書がある、これによると、昔はコンスタンチヌス大帝不治の疾を獲た、幸に敎會の惠みに賴りてこの

難病から恢復した、彼は神恩に感激して、政治上領土を羅馬教會に獻じたのであると主張されて居る。隨つて凡そ法皇の政治上權力なるものは、フランク人の賜てなく、遠い羅馬帝國の昔に淵源するものてあると推論されることになるのである。この御寄進狀が抑も眞赤な僞作であることは、後に十五世紀ルネイサンス時代に至つて始めて證明されるばかりてある。一體イシドール法令集と稱するものは、實は、中古の始つ方に出た有名な學僧でヒスパニアのセヴイルラ(75)の監督イシドールの名を詐稱したものてある。因つて史學に於ては、今日これを僞イシドール法令集(デクレタルス)と呼んて居る。けれども僞作當時、このものは眞物と信ぜられ、實に幾もなく教會の至上權主張の金科玉條となつた。換言せば、法皇が教會を以て天下一統する政治組織を作り上げる根本武器となるものてある。

次に考ふべきものは、十世紀十一世紀に起つた宗風改革運動てある。これはかのベネディクト教團の中から出た。卽ちフランスの中部てその東南に片寄つた地方てブルグンドといふ公國に於て、クリユーニ(77)と云ふところにベネディクトの一本山がある。十世紀以來、この修道院て宗門改革運動が始り、宗教家の獨身(セツシイ)生活と、宗教上位地の賣買の禁止とを主張した。この新派の門末は次第に增加して勢力を得て、クリユーニ派と稱せられた。この運動は最初はたゞ純粹の宗教運動てあつて、まだ教會と國家との對抗問題となるに至つて居らなかつたのてある。

かゝる間に、法皇の天下一統政治成立の歷史中に於て、是非とも吾々の考察に入れなければならぬ人物が現はれた。それは十一世紀の中葉に出た宗教界の大立物ヒルデブランド(78)その人てある。彼は中部伊太利の人、夙にクリユーニ修道院に學び、道譽一世に高く、法皇の朝廷に入つて歷代を輔佐し遂に自ら選ばれて聖ペテロの御位に登つてグレコリ七世と稱する(一〇七三―一〇八五)。偶々當時ドイツの君主たるフランコニア家に代變りがあつた、卽ちかの有力なる皇帝ヘンリ三世が崩じて、ヘンリ四世(一〇五六―一一〇六)が立つたのてある。後者が最初極めて幼冲てその政府頗る薄弱てあつたこと、これが卽ちヒルデブランドの乘ずべき機會てあつた。彼は因て政治家的態度を發揮し、先づイシドール法令集を根據とする法皇至上主義と、クリユーニ派の克己禁慾的改革主義とによつて羅馬の權利を主張し、約二十年間の葛藤の結果、遂にかの有名なカノッサ(79)の屈辱事件(一〇七七)て大體成功し、法皇の天下一統政治の基を創めたのてある。

然らば、私はこの重大な回轉期について、これらの精神上及び世俗上の兩君主の關係を、少しく詳しく說いて見ることを、必ずしも無用とは思はない。因て事端の激成の次第を尋ぬるに、ヘンリは年長じてから師傅の手を離れて自分の城をサクソン人の當時住居する地方、ハルツ山脈の北側面の小高きところに構へてサクソン諸侯と相爭つた、これは卽ちハルツブルグ(80)城てある(一〇七三)。この時ヒ

ルデブランドは既に法皇となつてグレゴリー七世と呼ばれて居る。彼はこのドイツの内訌を機として干渉の手を入れ、ヘンリに宗教上位地賣買の罪があると稱してこれを破門した。當時宗教の制裁が人心に及ぼす効力は極めて強大なるものがあつた。故にヘンリの反對派は、得たり賢しとして、ヘンリに叛いた。かくてヘンリはスバイエル[21]に幽閉の身となり、彼の反對派は乃ち法皇をドイツに招いて皇帝を廢する協議を開かうとした。絶體絶命の窮地に陷入つたヘンリは殆んど身を以て免れ、スウィスを迂回して、年の暮、恰も嚴寒季節、スニ峠でアルプスの雪を踏んで伊太利に下つた。時にグレゴリは、恰も皇帝の反對派の招きに應じて南獨逸に赴かんとして、北イタリヤに來たが、皇帝南下の報を得て驚き、退いてカノッサ城に入つた。カノッサは法皇の忠實なる法弟子トスカナ伯爵夫人マヂルダの持城である。ヘンリはこれを慕つてカノッサに到り、城下て正月の寒天三日間嚴肅なる懺悔を繰り返し、前記貴婦人等の執成に賴りて始めて城中に入ることを許され、尊嚴なる老法皇の膝下に伏して漸く罪の赦免を得た。これが名高いカノッサの屈辱と云ふ事件て、法皇が皇帝に對して得た第一回の勝利てある。けれども兩者の衝突は、この事件ては勿論のこと、政教兩界を各自に支配する是等の兩頭目の在世中に於ても、決して落著したのてはなかつた。何となれば、現にヘンリの赦免は、差當り彼自らの恢復の一端となつたからてある。卽ち彼はカノッサから自由の身となつて歸國し、ドイツ諸侯

の叛亂を鎭定した後、幾程もなくして今度は兵を率ゐて南下し、イタリアに於ける法皇の反對派と結びて羅馬に進軍し、グレゴリを聖アンゼロ城[22]（舊ハドリアヌス帝陵）に圍んだ。この危機に際して、傲慢なる老法皇は、ロベルト・ギスカード[23]の統率する南伊太利のノルマン人の來援によつて、僅かに救ひ出されて、南の方その國に走り、間もなくサレルノ[24]の謫居中に憤死した。彼の死際の語は悲壯を極めて居る、曰く『朕は正義を愛した、故に蒙塵に死す』と。かくしてヘンリはさしあたり腕力づくてカノッサの屈辱を雪ぎ得たのてあつた。

事件の進行は以上の如くてあるが、これを世界史上から觀察すると、カノッサ事件は法皇の大勝利の始めてある。抑も、グレゴリの理想は極めて高く、その精神上感化も亦た大なるものがあつた。彼の發した御詞に徵するに、法皇と皇帝との關係は、猶ほ日と月との如きものてある、月は日光を借つて始めて輝くものてあると云ふのてある。この語は今後屢々、かゝる場合に羅馬側てはよく引用される。實にグレゴリは宗俗一切の社會を一身にて統率し、且つ東方の教會をも西方に合併して、東方の異教徒をも征伐せんとの考を抱き、卽ち後世の所謂十字軍の理想を有つて居た偉人てあつた。この宗教を以て政治の上に出てること、竝に十字軍を以て東西を統一すること、是等の二大計畫は、彼の死後、約二世紀間を貫通して、歷代の羅馬法皇の教會がその實行に著手したる二にして一なる曠世の大事業

てあつた。その結果、法皇は遂に皇帝權を壓倒して西歐の諸君主の上に位し、諸國の政治に干渉し、さながら世界の統率者の如き地位に登ることとなつたのである。かの法皇派（ゲルフ）對皇帝派（ギベリン）の爭は實にこの廣大なる法皇對皇帝の抗爭時代に於て、その後期に屬するスワビア家の皇帝時代の產物であつた。これに於て法皇は殆んど全く皇帝權を壓倒して、羅馬敎會の天下一統政治を確立した。

然らばこのグレゴリ七世の宗敎政治とは如何なる權利を主張し又た實行したものであるか。この疑問に對して次の諸項が解答を與ふる。

(1) 樞密員會議（カーディナル）㉕を組織し（一〇五九年）、法皇の選擧はすべてこれによること、言ふ心は、皇帝竝にその他の政治權力が、オットー大帝や、近くはヘンリ三世のやうに、宗敎上元首の冊立に干與するを排斥するに在る。

(2) 法皇の封建軍隊を認可設置すること。この重任はかの南伊太利に占據せるノルマン人之を承はつた、さてこそ、グレゴリの一身を聖アンゼロ城の重圍から救ひ出したのは、この冒險武士らであつたのである。

(3) 宗敎上位地を任命する權利を全然敎會の手に收むること。これは最も重大なる利害問題であつて、法皇と皇帝との間の主なる係爭點であつた。この爭長引きて結びて解けず、只だ一一二二年のウォルムス㉖の宗敎上協調（コンコルダット）が作成されて、兩者の間に互讓する所があつて、一時衝突の急を緩めることが出來た。

(4) 宗敎上位置の賣買を禁止すること。

(5) 獨身生活の勵行。これは(4)項と相俟ちて宗敎家の生活肅清に必要と考へられたものであつた。古來妻帶は敎會では明文を以て禁ぜられて居らなかつた、只だ宗敎生活には獨身が望ましく說かれて居た、殊に上流の位地に在るものにありては尤も然りであつた。けれども敎會の俗化と共に上下通じて妻帶者が多くなつて來た。それであるから、こゝにクリュニ團の主張に基きていよ〳〵一切獨身生活勵行に決し、幾多の困難を排して遂にこの風が加特力敎會生活の憲法の一となることになつた。

(6) 信者の生活に種々の制裁を加ふること。例へば解除（アブソリュシヨン）、破門（エクスコムミュニケーシヨン）、停止（インターディクト）、査問（インクイジシヨン）㉗の如し。査問は個人の抱懷する信條にも立入り、その異端にして倭めないものは禁刑に處せらる。

(7) トランスサブスタンシェーション㉘の敎義の確立。この語は彌撒に供へたパンと葡萄酒が、彌撒に與りたる信者の頂戴した時直ちに基督の肉と血と化して、卽ち神の御身體として、その人の身に移ることを意味する。換言せば、この奇蹟は敎會の力に賴つて行はれる、司敎が神と人との間を媒介するが故に始めて實現されるといふのである。この敎義が確定されて何人も之に疑を夾むを許されなか

つた。

(8) 宗教會議の召集。これは唯だ法皇の權内にあるので、一俗人猥りに行ふべからずと。

(9) 御名代(レガート)を始めとし種々の使節の派遣。これは列國が外國に向つてそれ〴〵大小使節を派遣駐在せしむるが如く、法皇は教會に屬する獨立國の朝廷に、その格式又は事件に相當して、信教の監督若くは勸告者を派遣するのである。しかし特に取り出して注意すべきは羅馬法皇廳が自ら只の普通の獨立政府を以て甘んぜず、宛も古の羅馬皇帝政府を氣取つて居る點である。見よ、法皇廳は教會内の諸國を屬州(プロヴィンス)と稱して居り、隨て之に向つて派遣する使節の内、最高のものをレガート(レガーチ)[29]と名づけて居る。是等の制はすべて古の羅馬帝國のもので、殊にレガートは古の皇帝の御名代に相當する。以て法皇の天下一統政治を企圖したる意氣の高遠を推察すべきである。

以上列擧したる諸項によりて、略ぼ法皇の宗教政治が何ものを要求したるかゞ髣髴されるであらう。是等はすべてヒルデブランド、卽ちグレゴリ七世の時代に著手され實行の途に上つた。しかし、是等權利又は主義の確立は、單に歐洲内に於ける政治上君主權との衝突のみに因つて決定したのではない、實に之と同時に相表裏する十字軍の斷行による所も亦た甚だ大である。これは第十一講十字軍の下に於て說明しやう。

第十講　ビザンツ文明　回教文明

35　羅馬帝國の三大分割

私は前講と前々講とに於て、主として古羅馬が殘した西方世界が、ゲルマニ化したこと、竝にその反對の現象とを述べて置いた。これは實に中古史前期の中心現象であつたのである。然し同じ時代を一切世界の上から達觀すると、これは全く羅馬帝國の三大分裂期であつたとも見られる。

抑も羅馬帝國は宗教上から云ふと、加特力教會であつたことは再說を要しない。このものはその古代以來東西の文明の相違のために、元來からビザンツとラテインとに分立する素質を有して居た。然るにこの羅馬帝國卽加特力教會といふ二にして一なる大組織は、最初は順次ぎに、中頃以後は同時に、三個の新なる民族的文明的潮流の大侵入を受けて、大いに分裂變化すべきであつた。その中の最大なのは勿論ゲルマニのそれであつた、主として西方の世界が、三七五年から一一〇〇年頃までの間にいつしか羅馬風ゲルマニ風社會と化しなければならなかつたのは、之が爲めであつた。次に回教が起つて、その文明の創始者にして傳播者たるアラビヤ民族的潮流は七世紀に始り、羅馬帝國に入り、その勢滔々として進み、八世紀に絶頂に達した、これがために東方帝國は、シリア、エジプト、アフリカ、

を奪はれ、西方卽ち羅馬風ゲルマニ風世界はイスパニアを取られた。この侵略の餘波は九世紀十世紀に及び、地中海上の遠近の島々は勿論、その沿岸殆んど到るところに、回敎徒の横行を見るに至るのである。

最後にスラーヴ①の侵入を考へねばならぬ。抑もスラーヴ（ボヘミア人卽ちチェック人、ポーランド人等）、東スラーヴ（露西亞人）、南スラーヴ（セルビア、クロアト、スローヴェン、ブルガリア人等）の三大團に分れ、その中で西スラーヴを除いた外の大部分は、六世紀から十世紀の間に於て、ビザンツ帝國に侵入し、若くばこれと接觸し、その敎化を受け、彼等の住する東及び南歐羅巴を擧げて、希臘＝スラーヴ混和の文明社會を形作らしむるに至つた。この文明は一方には回敎、他方には羅馬風ゲルマニ風文明と相對立して今日に至つて居る。

故に如上列擧した三個の大侵入の結果、地中海沿岸世界は、大體に於て、三大文明系統に分たれる。(1)羅馬風ゲルマニ風、(2)希臘スラーヴ、(3)回敎、これである。拙著『希臘文明の潮流』第七章近代文化と古典參照）。

36　ビザンツ文明の特徴

ビザンツ帝國は、羅馬皇帝コンスタンヂヌス大帝が羅馬帝國の首都をビザンツに遷したのに始つたといへる。而もこの帝國はテオドシウス大帝の死後（三九五）、帝國東西に分れても、儼然たる皇帝の存立によつてコンスタンチンの都が帝國の主權所在地たることを維持して、以て眞に確立した、就中、ジュスチニアーヌス大帝の時、彼の西方恢復の成功によつて、ビザンツが少くとも、理論上羅馬帝國の統一たる要求を實地に證明し、西方の帝座が四七六年以後空位となり、八〇〇年以後ゲルマニ國民に占められて居るのに對照し、君臣の別、敎會の組織、文武百官の制、悉く具備し、依然として羅馬帝國の正統なる後繼を以て自任して居る。この帝國に於ては、その君主も、その臣僚も、その人民も、出身の如何に拘はらず、ローマイ又はルーミ②と稱して自ら誇とし、サラセン若くばアナトーリ（いづれも東方人の義）から自分を區別して居る。この政治組織が、十字軍時代に於ける短期の斷絶を除き、一四五三年オスマンリ・トルコのコンスタンチノープル陷取まで、一千年以上存續すべきは、言ふまでもない。

如上は政治上のビザンツ大觀である。しかし、同じものを文化上から見ると、古代希臘の世界的文明たるヘレニズムの名殘がビザンツ文明の根本的基調を成し、これに中古に於ける東方特有の要素が輻湊して、一種特別の文化を形作り、一方に於て回敎文明に對照すると同時に、他方に於ては、基督敎世界に於ける東方文明として西方の羅馬風ゲルマニ風文明に對立して居ることが、明かである。所

說、ビザンッ文明なるものは中古の希臘文明であ
蔽はれてその眞價を認められなかつた。何となれば、彼等は希臘羅馬の古典文明衰亡後、西洋の學藝
復興（ルネッサンス）まで一千年間、一切の學統全く斷絶し、學藝復興に至つて突如として俄かに文運勃興したかの如く
臆測し、その間に於ける連繫と發展とを認知し得なかつたからである。また、彼等はビザンチニズム③
といへば、全然東方的である、專制である、卑屈であると速斷して、その特有の強點美風を探究する
に力めなかつたからである、然るに、十九世紀の進むに隨ひて、漸次種々の研究現はれ、今日に於て
は、ビザンッ文明の正當なる評價が一定して來た。いて少しくその特徴を指摘せんか。

この帝國の臣民ほどに種々雜多の民族人口から成つて居ること、近時の米國を除きては、殆んど他
に類例はなからう。重なる人口だけを擧げると、先づ勿論希臘人の子孫が傑出する、但しこのものは
數よりも知力に於て主要人口となつて居る。羅馬人又は羅馬化せる植民がある。またイリリヤ人、ア
ルメニヤ人、シリヤ人、猶太人がある。更らにクルド人、エジプト人、ベルベル④人等がある。それに
新に入り來るべき幾多のスラーヴ民族、トルコ人等が算へられなければならぬ。この複雜なる社會が
ビザンッ文明を構成維持して居るのは、そこに若干の統一的勢力を有する文化要素があるからである。

第一には、希臘語及び文學である。これは猶ほヘレニズム時代の希臘語、羅馬帝國の西方に於ける拉
典語の如く、また同時代の回敎世界に於けるアラビヤ語の如く、信仰と學術と政治とに用ゐられる公
用語である。法庭に於ける用語としては、最初は羅馬帝國の公用語たる拉典語が用ゐられて居つたこ
とは、ユスチニアーヌス大帝の立法及び諸典編纂（五講16）が之を證明して居るが、而も時と共に、そ
の用語が不便となつたから、第七世紀以後、希臘語て法典抜萃（エクローガ）⑤が出來た、即ち希臘語が一般公用語とな
つて來たことが分明する。第二には、ビザンッ特有の專制獨裁政治である。かくの如く宮室衣冠、官
僚寺觀の整備して居るものは、新ペルシヤが衰亡し、ハリファの國がまだ幼稚なる時代に於ては、西
洋世界史舞臺に於ては、唯一の偉觀といはなければならなかつた。コンスタンチノブルには敎會の管
長としてパトリアルクが居る。しかし、このものは羅馬法皇とは異なり、皇帝の羈絆の下にあつて殆
んど全くこの君主の自由自在となつて居る。それ故に、ビザンッ皇帝は政敎を合一して居るから、一
層有力である。かくの如き權力はシーザル・ポープ⑥主義と呼ばれて、後世この種のものゝ典型となつて
居る、卽ちロシヤのザールの如きである。第三には、多くの富有にして防備堅固なる都市を有して居
ることである。就中、コンスタンチノープルの財力、天險、防備は天下第一て、眞に帝國統一の儀表
たるに足る。こゝから發する貨幣は尤も信用あり、後、回敎起りて地中海上權を占むるに至るまでは、
ビザンッ人の經濟上勢力は天下に冠たるものがあつた。第四には、信仰の擴張、文物の傳播である。

この點に於て、アフリカのヌービヤ⑦人に對し、又た新來のスラーヴに對する傳道は尤も注目すべきである。殊に、後者との關係は、南スラーヴ（セルビヤ、ブルガリヤ等）に對しては六世紀以後　東スラーヴ（ロシヤとなるべきもの）に對しては九世紀以後に出來た。是等は漸次希臘加特力教會の福音に敎化せられて、東歐南歐を通じて希臘、スラーヴ文明社會を形作るべき運命を持つて居る。第五には、ビザンッ式美術である。これは既に四世紀初、デオクレチアヌス帝の養老地サロナに於ける宮殿（スパラートー）⑧建築に始り、次にラヴェンナに於ける幾多の美術、コンスタンチノープルの聖智院（セントソフィヤ）⑨はその雄麗なるものである。ラヴェンナにはブラチダ后の陵墓のモザイック、サン・ヴィターレ⑩院のユスチニアヌス大帝夫妻のモザイック群像などいづれも有名である。爾來十字軍時代となつて、西方の都市が東方との交通を開くや、自然、ビザンッの建築繪畫彫刻はイタリヤ、フランス南部に輸入して居る。この點に於て、ヴェネチヤ⑪共和國の聖マルコ⑫院の燦然たる寺觀は、當時のビザンッ影響を有力に示して居る。第六には、極東との交通奬勵である。それは、一は紅海を經てフェリックス・アラービヤ（イエーメン）⑬を中繼ぎとする交通に由る。ユスチニアーヌス大帝の時のネストリヤン宣敎師が、支那から蠶繭を輸入して來たのは、この交通である。他は黑海による中央亞細亞に由る。この點に於て、ビザンッ帝國がヘレニズム時代以來の希臘人の都市、ケルソン（セバストポール）⑭やボスフォリ⑭などの南露に於ける貿易地點を保護し、その背後地からの未開人の侵掠を防遏したのは、世界交通史上の業績に屬するのである。

その外、ビザンッ文明の社會事項としては、各都市に競馬（ヒッポドロモス）⑮の風俗がある。これは專制治下に於ける一種の輿論の發現場裡と見らるべきもので、自然尤もコンスタンチノープルに於て隆盛を極め、勝敗を爭ふ色（派）の軋轢激昂にいろ〳〵の時事社會問題が結びつき、しば〳〵政治上革命を喚起し君主の交迭を來したことがある。又た希臘及び東方人の古來敎育の結果として、人民神學上議論を喜び、宗派の爭が盛んである。七世紀八世紀に於て、西方の敎會がゲルマニ未開人の侵入によつて惱まされ、その風荒々しくなり、高尙なる議論よりも寧ろ腕力の强制に流れて居るのに比して、非常の差異があつた。併し宗論と政治と結合の結果、動もすれば實際問題となり、そこて革命的運動の破裂を促したことも、其場合少くはなかつた。その最も有名なるは、皇帝シリヤ出身のイサウリヤ家レオ⑯三世の偶像破壞勅令の發布（七二六）、及びそれから喚起された少くとも數十年に亙る破壞に對する反抗、反抗に對する鎭壓といふ大騷動である。レオは回敎事のコンスタンチノープル大攻擊の擊退者で軍國的政治家であつた。彼は、一は、回敎徒がとかくビザンッ人の偶像崇拜を嘲笑に附するの風あるに刺戟されたらしいし、かし、尤も重大なる理由は、ビザンッ人の文弱優柔にして宗敎に淫し、妄りに僧尼院に隱るゝの風を匡

正して、軍國的要素を恢復するにあつたのである。この破壞運動の波動の一として、吾人は前講に於て、羅馬法皇が之に同意しない、爾後、ビザンツの節度を受けず、西方に於て獨立に自由行動を取つて、重大な　世界史的變化を誘致したことを既に見ておいた。さればこの運動は、帝國内に於て幾多の離畔と混亂を惹起したことは悲むべきであるが、同時にビザンツ人の精神喚起に資し、幾多の人物の輩出を促がしたことも沒すべからざる事實である。九世紀、十世紀、十一世紀に於ける所謂『ビザンツの學藝復興（ルネーサンス）』なるものは一はこれに負ふて居る。

37　『信仰（イスラム）』[17]の起源

敎祖モハメット[18]はメッカの豪族コレイシュ[19]部からの出身で、つまりアラブ民族の國民的英雄であつた。併し彼の宗敎宣傳には、この國民的文明の外に、一大世界的背景があつた。それは紀元後四世紀間、西方亞細亞から中央亞細亞へかけての天地に於て、種々の宗敎上動搖があつて、殊にそのうちて一神敎的運動の流行が傑出卓越したことこれである。試に見よ。

(1)　羅馬帝國の加特力敎から異端として排斥驅逐されて、東方に傳播した種々の基督敎の分派。その最も著しいものは聖トーマスの信者やネストリウス[20]の歸依者である。聖トーマス派は印度に入つた。今日てもその遺跡がある。支那では、唐代に大秦の景敎碑て有名となつた景敎なるものは、蓋しネストリウス派の基督敎だらうと一般に信ぜられて居る。

(2)　猶太敎。その一部はアラビヤにも入つてその土族の或る者を敎化して信者として居る。

(3)　ペルシヤ敎。卽ち拜火敎であつて、印度に入りてはパーシ[21]の宗派となり、支那では祆敎といふものになつて居る。

(4)　摩尼敎。これは、申すまでもなく、紀元三世紀ごろマーネス（マニハイウス）[22]なるものが、バビロニヤのグノスチック[23]思想を基とし、基督敎及び拜火敎をも採用混和して作りたる一種の自然敎てこれまた廣く東方に弘通し、後には歐洲にも傳はつた。

かくの如き一神敎的宗敎運動といふ世界共通の空氣の影響の下に、モハメットが現はれたのである彼は己が國民、卽ち、アラビア半島に於ける沙漠の兒等に固有な、數千年來のセミチック文明社會を改革せんがために、如上の諸宗敎の長を採り、短をすてゝ、すべてを折衷して自己の信仰を作つた。故に、彼にはこれと云ふ新機軸は甚だ乏しい。彼の宗敎が最も多く學んだのは、基督敎、及び猶太敎てあつた。モハメットの敎によれば、自らこれ等二者と共通に、卽ち三者は『經典を有する宗敎』てあるとて、他の異敎から區別するが、而も尙ほ基督敎及び猶太敎を卑みてひとり自ら高しとして居た。その理由は、モハメットその人の言によると、基督敎は三位（神父、聖靈、神子基督）は一體てあ

ると云ふが、この三位とは卽ち一てはなく、語どほり、ものそれ自ら三てある。卽ち多神敎てある。且つ夫れ基督なるものは神てない、これ只だ一個の豫言者（プロフェット）のみ。又猶太敎の尊んて居るアブラハムやモーゼやの如きも、これ亦た基督と同じく、いづれも豫言者のみ。卽ち肉の人間てある、只人間の優ぐれたるものてあるばかりてある。而もこれ等の歷史的人物は、いづれも未だ完全な豫言者てなかつた。然るに今やモハメットが現はれた。モハメットは自ら基督のやうに神とは稱して居ない、唯だ神の豫言者てある、而も古來現はれたる最も完全な豫言者てあるといつて居る。故にモハメットの根本敎義を示す經典（コーラン）[24]には、彼の詞として『世に唯一の神（アラー）のみあり、而してモハメットはその豫言者なり』と云ふて居る。殊に注目すべきは、經典（コーラン）第十二章は所謂『統一の章（スーラ・ヅ・ヴユニテ）』と稱するものてある、その中に、僅か四行て前述の意味に於ける神（アラー）の性質を說き盡して居る。曰く、(1)彼は唯一神なり、(2)永久の神なり、(3)彼は生まず、生まれず、(4)何者も彼に似たるものなしと。この一章は經典（コーラン）中最も簡單なる章てあるが、而も最も重大肝要な章となつて居る、回敎では、この一章を以て經典（コーラン）全部の三分の二に相當する價値ありとして居る位てある。

要するに、イスラムはアラビア國民文明を基礎とし、而もこれを改革せんがために、モハメットてふ一大個性が現はれ、彼の時まて東方世界に流行して居た優秀な宗敎、就中猶太敎及び基督敎の一神思想を採り、而もその弱點を改め、且つそれをアラビア國民化して作り上げた信仰てある。これが回敎の特相てあつた。

この吾々の所謂アラビヤ國民化といふのは、その適例を示さば、禮拜の中心をば遂に古代アラビア文明の中心たるメッカと定めたことにある。モハメットが、その宗敎運動開始の最初、卽ちメヂナ（ヤスリブ）[25]（豫言者の市）に據つて、自分の迫害者てあるメッカに對抗した時、自分に隨從する信者の日々に行ふ五回の祈禱の方向をエルザレムと定めたことは、當時如何に彼がアラビヤ內外の勢力たる猶太敎に依賴する所多かつたかを、語るものてある。しかし間もなくこの禮拜の方向を改めてメッカとし、以て自分の國民の宗敎的感情を收攬した。一夫多妻の主義も亦た大體、アラビアの習慣によつたもので、只だその混亂して居つた習慣に秩序を與へたに過ぎない。而も、かくの如く或る秩序を與へたといふことは宗敎の改革者若くば創始者としての一大偉業たるを失はない。

38　ハリファの國　回敎世界

回敎の敎祖モハメットの後繼者はハリファ[26]といふ。これは相續者といふ意義を有する。その政治上版圖が敎祖死後約百年ならざるに、廣大なる範圍にまて擴張されたことは、その廣さ、その早やさに於て、等しく世界史の驚異に屬する。卽ち八世紀の初期に於て、西はイスパニアを含めて、それから

アフリカ北岸一圓を傳ひて東は中央亞細亞に及んで居る。だから、曾に古の羅馬帝國の範圍のみに限られて居るのではない、東方では、かのアレクサンデル大王の帝國の跡に擴がつて居るのであつて、而も兩者のいづれよりも一層廣大である。これ眞に古來未曾有の大版圖である。

この大國は、オンマヤ家のハリファの時出でゝシリヤの古き都ダマスクス[27]を都とし、ハリファ一人の掌中にあつて支配された。けれども、この版圖も亦た分裂を免れなかつた、その中、大なる分れ方は、支配者の家名によつて云へば、八世紀後半以後は、西方に於てイスパニアのコルドヴァ[28]に都したオムマヤ家と、メソポタミヤのバクダード[29]に都したかのアッバス家との對立である。その中、アッバス家は恰もペルシヤ帝國の故地を占めて、富強天下に冠絶した。十世紀以後に入つてはファチマ家がカイロ[30]を起し、こゝに都してエヂプトを支配し、以上の二家の版圖と鼎立の形勢を成した。

宗派の上から回教世界を見渡すと、種々雜多の區別が起つた。その內最も著しい區別といへば、正派（スンナ）と分派（シーア）[31]とに二大別せらる。アッバス家は正派であり、ファチマ家竝にペルシヤ人は分派を奉じた。今日のオスマンリ・トルコは、アッバス家の流を汲んで正派（スンナ）としてペルシヤの分派（シーア）に對照して居る。

又た人種竝に風俗によつて云へば、こゝにも亦た種々の別を生じて居る。最初この宗教を起したのはアラビア人であるけれども、諸國を征服し、若くばその宗教が傳播するに隨ひ、アラビア人は各地に於て他の人民と混合し、若くば各地に於て新らしい異分子が入り來つて、例へばトルコ族の如くに、アラビア人に代つて勢力を振ひ、ために原始アラビアの要素はアラビヤ本國の外では漸次に薄くなつた。且つその信仰（イスラム）は非常に廣く宣傳せられ、西は大西洋の波打つ岸邊まで、南はアフリカの內地に、北は南露西亞に、東は印度及び支那に至るまで、換言せばハリファの政治上權力の到達しない所にまでも擴がつた。支那では回教又は清眞教と呼ばれ、甘肅、雲南、貴州に多くの信者がある。故に信仰（イスラム）としての回教世界はハリファの政治上版圖よりも一層廣大である。之を見渡すに、各地到るところ各自の特色が顯著に現はれて樣々の模樣を形作る、その狀猶ほ一大モザイク細工のやうてある。例へば、シリアに於てはシリア人、アフリカに於てはベルベル人、イスパニアてはベルベル人とアラビア人との雜種であるムール（モール）[32]人が、各々有力な要素てあつて居た。

然しながら回教徒は、全體を通じて共通一樣の特徵を具へて居る。それは以下述ぶる所によつて分明するてあらう。

モハメッド及びその後繼者（ハリファ）は唯一の神（アッラー）の豫言者として、この神のために、異教徒を敎化若くば殄滅するのを國是とした。彼等は宗教と政治とを兼ねる絕對君主てあつた。彼等を制限すべき憲法が、若しこれありとしたならば、唯だ經典（コーラン）と傳說（ハディト）とがあるばかりてある。これらを合せて神法（シャリア）[33]と總稱した。

最初彼等數代の都がメヂナてあつた間は、アラビア國民的てあつたが、オムマヤ家以後、古來世界文明の中心たる地方、卽ち、先づシリア、次にメソポタミアの方面へ都が遷るに至つては、メッカ參拜の一大事を除いて、ハリファの國はアラビア的性質を失ひ、頗る世界的となつた。この世界的國家の憲法によると、信者(ムスレム)はすべて平等てある。羅馬風ゲルマニ風の社會に於けるが如き、敎會の統一政治もなければ、封建制度及び階級の社會もなく、その社會は世界的て且つ民主的てあつた。

ハリファ及び信者(ムスレム)は、元來、自ら宮室を營まず、土地を領有せず、只だ猶太人、基督敎徒から地稅及び人頭稅を徵して自ら衣食した。これ等の人民は、最も劣等な臣民として、舊の敎く彼等の住地に於て、その住居生業を許された。彼等は「群」(ライヤー)[34]と卑み呼ばれ、自由に生業を營み、神法(シャリヤ)の國を維持する爲にそれ〳〵生產に從事し、上述の諸稅を上納せしめられたことは、猶ほ群羊の牧せられて、時が來ると、その毛を苅り取られるやうなものてあつた。かくの如くして群(ライヤー)から獲得した收入は、戰時の掠奪徵發品と共に、すべて一切の信者(ムスレム)の間に平等に分配された。又た信者(ムスレム)は軍人て征服者てあつた。彼等は、かくの如き者として、然るべき要地々々に幕營を作つて、これに信者共同に生活し、その地方を監督した、例へば埃及のフォースタット[35]　天幕の義てある、後、これから起つたのが卽ち今日のカイロ府てある）の如き、この適例てある。以上はハリファの國の古き制度てあつて、その如何に家長的政治時代の精神が橫溢して居るかと察せられる。

然るにハリファの支配が天下に擴り、その信者(ムスレム)[36]諸方に定住して、平和的業務につくに及んては、各自に、土地の所有を許された。又た功勞ある者て領地を賜はるものさへあつた。地方には概してエミール[37]が置かれた。エミールは君、若くば知事の義てある。その大なるものは『エミールのエミール』と稱した。かくてハリファの國內には、次第に割據獨立の勢が馴致され、殊にアラビア國民竝に中央權力が衰頹するに隨ふて、信者(ムスレム)の戰鬪力を補充するために、外國や異民族から雇兵を採用するの風が起るやうになつたから、猶ほ更ら如上の分裂的傾向が助長されたのてある。

バクダードのハリファは尤も多く中央亞細亞から、トルコ部民を招致して之を雇兵に用ひた。この風は、八〇〇年以來、數世紀間に亘るハリファの國の歷代の習慣となつた、隨つてこれらトルコ人の亂暴狼藉を招來することになつて、かくの如きものゝハリファの國における有樣は、猶ほゲルマニ民族が羅馬帝國に於ける關係に髣髴して居た。このトルコは、十一世紀にはセルヂュック[38]部會長の名による）によつて代表され、遂にバクダードの實權を掌握し、ハリファは唯だ虛器を擁するに過ぎなくなつた。羅馬ゲルマニ世界から東征した武士軍、卽ち所謂十字軍が接觸衝突した回敎軍といふのは、卽ちこの者てあつた。更に下つて十三世紀末以後には、オスマンリ部によつて代表される。卽ちこれが今日まで

久しくコンスタンチノープル[37]に君臨して、或は迫はれんとして居るオスマンリー・ルコの祖先である。かくの如き新來者はその君主スルタン[40]（強者の義）に支配された。スルタンは大將軍の如きものである。而もこれ等はその國民と共に早く悉くイスラムの信仰に化し、ハリファ同樣に、神法（シャリア）によつて國を治めるものである。アッバス家や、ファチマ家の滅亡後、トルコのスルタンは自らハリファの尊號をも簒攝することになつて居る。ハリファは卽ち一切の回敎世界の信仰（イスラム）の敎首若くば代表者である、因つて或はイマム（祈禱の首長の義）ともいはれる。尙ほ又たスルタンは時には或は大君（パヴィレー）[41]とも尊ばれて居る。

39　サラセンの學藝　工業

サラセンとは歐洲に於て回敎徒を呼ぶに用ゐらるゝ總名で、卽ち東方人の義である。偖て彼等の文明は、九世紀、十世紀に最も盛てあつた。その特徴を摘出すれば次の諸點に集中する。

(1)　アラビア語とコーランとの文明

(2)　幾多の大都市を中心とする東西世界交通の文明

(3)　東方諸國の知識、就中希臘哲學の一部とアレクサンドリアの唯物的訓話的學風とを傳へた綜合的物質文明。

これらを以下に一まとめに說明しやう。

アラビア語はヘレニズム世界における希臘語の如く、苟もハリファの支配する全世界を通じて行はれる公用語、竝に學術語となつた。何となれば信者は第一にコーランを讀むため、第二に廣く天下に通商するため、これを學ぶ必要が起つたからである。當時サラセン人の隊商は、東は支那、西は大西洋沿岸、北は露西亞及びスカンヂナヴィア、南は亞弗利加のザンジバル[42]までの間を往來通商し、就中ペルシャ灣と地中海との海上權及び貿易を壟斷して居た。彼等は商利と共に亦た知識を廣く世界に求め、東西の地理、歷史、風俗、博物を調査記錄したから、唐・宋・元・明時代の支那、中亞、印度の事蹟は屢々彼等の著書によつて窺はれる。少しく代表的著作家をあげて見れば首肯されるだらう。卽ちイブン・マスディ（九五六年歿）、イブン・ハウカル[43]（九七六年歿）、イブン・バッータ（一三七七年歿）等の如きはサラセン地理家の中て有名な人々てある。就中イブン・バッータは、モロッコの人て蒙古の支配が東西に擴がり切つた時代の大旅行家である。彼の足跡は西方亞細亞、南方露西亞、印度、元代の支那に亘り（一三二五―一三四九）、他方にはサハラ砂漠を越えて、亞弗利加の西南チンブクツー[44]にも及んだ（一三五二）。又た歷史家てはイブン・カルヅン[45]（一四〇六年歿）を推さなければならぬ。この人はアフリカの出、カイロて死んだ。彼は回敎諸國を歷遊し、その間いろ〳〵の君主に歷仕した政治家てあつて、最後には、エジプトに仕へたが、一時かの帖木兒（ティムール）[46]の西方侵略の際、これに囚へられたこと

もある。彼の歷史に關する幾多の著書の內に歷史哲學がある、これは史學史上最初の歷史の理論又は社會學的史觀として今日尙ほ推重せられて居る。蓋し彼の著書及びその思想は、數世紀に亘つて發展して來たサラセン社會の產物といふべきである。かくの如くして、この學者はサラセン世界の最後最大の歷史家と稱せられて居る、これは尤もな次第である。

次に注意すべきは、數學と自然科學の發達である。所謂アラビア數字が如何に十進法の計算に資し、且つ如何に西歐に傳へられて學術竝に實用に便したかは、言ふまでもない。サラセン人の數學及び天文は、頗る進歩したものである。例へば代數の原語 Algebra はアラビア語の Al-jebr であつて、離れたものを結合するとの意義を有する。又た、天文學はサラセン人が古代のカルディア人或はマセマティチ[46]者流の風を受けて、星占（アストロロージイ）術で運命を卜知することに熱心であつたから、それで始めて盛んとなつた。之と同じく煉金（アルケミ）術のためにおのづから化學が起つた。そも〳〵煉金術の目的は『エリキシール』[47]を作るにあつた。エリキシールの主なるものは二つある。一は『大エリキシール』と稱するもので哲學（フィロソファース・ストーン）者の石と譯せられて居る、卽ちこれを銀、鉛の如き劣等な金屬に加へると、これ等を化して黃金となし得る藥石である。他の一は『生命のエリキシール』と云ふ、これを服用した人の生活力を强めて、不老不死ならしめるといふのである。これ等の藥物を作り出す目的のために、化學が自然に進歩し、これを工藝、醫術に應用した。この結果、アルカリと酸との區別、蒸餾（アレンビック）器の發明が起り、又種々の醫藥、例へば丸藥に金銀の色を着けるが如きことは、サラセン人の風と考へられる。而してこれ等の理化學者は、概して、同時に醫者であり、殊に哲學者であつた。この種の學者を代表するものは、東方では中央亞細亞のボカーラの人アヴインセンナ（一〇三七年歿）[48]とで、西方ではイスパニヤのコルドヴァの人アヴエルロエス（一一九八年歿）とである。いづれも名醫で、殊に後者はコルドーヴァの侍醫であつた、而して思想上では、兩者ともにアリストテレスの哲學の內、その形而下の學風を祖述、解釋、敷演して、西洋哲學史上相當に有力な位置を占めて居る。サラセンの哲學が、古代の西洋哲學からルネーサンス以後の近世のそれへ移りゆく哲學史上の橋梁を形作り、思想媒介の有力なる效用をなしたのは、實に如上の諸大家を出したるに由る。

39* サラセン文明の世界的意義

サラセン文明は、先づ西歐に對して、重大なる影響を及ぼした。西歐に於けるサラセン學術の中心地は二あつた。一はイスパニアのハリファの都たるかのコルドーヴァ、他は南イタリヤの市サレルノにあつた。當時、所謂暗黑の世の中に陷つた歐洲社會に於て、苟も知識を求める先覺者は、これ等の地に留學して、サラセンの學者に親炙するを常とし、且つ便利としないものはなかつた。獨逸のサ

キソン家を彩つたかの青年有爲の君主オットー三世が、かくの如く有名になつたのは、主としてレーンスの大監督で、後には聖ペテロの椅子に上つてジルヴェステル二世と稱したゲルベルツス(49)を師傅と仰いで、その感化を受けたからである。この學者は元來、南方フランスの人、少壯の時、コルドーヴァに遊學し、そこで學業を大成して歸り、それから當時殆んど唯一の碩學となつたのである。又た十字軍時代末期における英國の學僧ロージャル・ベーコン(50)（一二九四年歿）は、後に於て述べる筈のフランシスコ團の人なるが、實に理化學に通じて世人を驚かし、『魔術博士（ドクトル・ミラービリス）』と呼ばれた。この人も亦たかくの如き學識をサラセンから受けたと信ぜられる。かくの如くサラセン文明は、數世紀の間に、當時の西歐人よりも遙かに高等な進歩を遂げて、彼等のためには、他山の石ともなり、殊に十字軍時代と云ふ東西接觸の大機會に於て、西歐人を刺撃し、そのルネイサンスを開發する原因の一となつた。尙ほサラセン文明が如何に廣く西歐に影響を及ぼしたかは、今日西洋社會に行はれる日常生活や技術に關する事物竝にその言語の中に、アラビアに起原し、若くば少くとも、サラセン人の媒介によるものが多いのを見れば、思半ばに過ぐるものがあらう。卽ち

Ciplier（數字、零）、admiral（水師提督）、algebra（代數學）、arsenal（造兵廠、武庫）、alkali（アルカリ）、alchol（アルコール）、sofa（長椅子）、cotton（綿）、sugar（砂糖）、muslin（毛子綸）、tea 茶、arabesque（アラベスク模樣）

の如きは、ほんの人口に膾炙して居る數例に過ぎないが、いづれもサラセン起源の言語にしてサラセン輸入物たることは疑を容れない。

翻つて同やうに支那との關係を見ると、唐書の大食傳に據れば、彼等が支那に輸入した方物として琉璃器、白砂糖、薔薇水、蕃錦、花錦、氍毹、諸腦、寶鐵の如きが目につく。いづれも文化史上看過すべからざる好志料たるを失はない。

以上東亞西歐の社會に現はれたる唯だの例示に留る物品の名稱のみについて考へても、サラセン人の工業の進步、物資の媒介、知識の開發が如何に廣大、多方面にして且つ有力であつて、その世界に對する影響の如何に强大であつたかは、略ぼ推知し得られるであらう。

然らば則ち、何故にかくの如き優勢なるサラセン文明は、十字軍時代及びそれ以後に至つて、早くも進步を止めたかといふ疑問が殘る。その原因は、國家及び社會の組織が不完全にして文明の遲滯を來したことが第一に指摘せらるべきである。國家の缺點は說くまでもない。社會の弱點として、尤も人目にふれるものは一夫多妻の制である、これは未開亂暴なる社會狀態にあつては自然の女子保護法であつて、殊に最初は、敎祖之に制限を附して以て社會の秩序を正したるものと見らるべきものなれど

も、時と共に女子を抑壓し、その服裝や交際の自由をさへ束縛し、女子の奴隷的境遇を作り出しだのである。是れ社會の活動向上を妨げたること夥しきものゝ重大なる一である。次に注目すべきは、かくの如き國家社會と相表裏し相支持する思想の特徴である。これはイスラムに固有なる神學が律して居る。このものは、經典（コーラン）その他の神法（シャリヤ）を死守するものである。唯だこれに抵觸しない範圍に於てのみ知識の展開を許容するが、時代竝に世界の非常なる變化を要求する場合、これと相調和し、若くばそれと共に推移すること極めて困難にして殆んど不可能である。

　卽ち、希臘哲學についてはいはゞ、サラセンの學者らはアリストテレスの物質的方面のみを祖述して相當の造詣を示して居るが、而もそれ以上には登らぬ、況んやプラトーの唯心論的方面に於てをや、この點に關しては、國家社會の組織と、神學と兩々相俟つて、人心を壓伏する傾向が强大であつて、何等かの高尙な精神的慾望をも起さしめないやうに出來て居る。そこで、かゝる社會の人民に安心を與ふるべく、宿命說が立てられた。彼等はこの定說に囚へられ、一旦何等かの不幸や困難に陷れば、直ちにこれを諦めるのが常であつた。曰く、これキスメット（運命）のみと。實に彼等の日常生活に於てこの一語は大いなる勢力を有し、彼等は事に遇ふ毎に、二口目にこれを唱へて居る。

　さもあらばあれ、サラセン文明の、古來ひろく世界に及ぼし、且つ現に尙ほその或る大部に與へつゝある勢力は文化史上刮目すべきものである。之を要約すると、彼等は第一に、東は支那、印度及び馬來地方から西は亞弗利加內地に至るまでの、世界の野蠻未開の人民に秩序と安心を與へた。第二に東西交通を促進した。第三に、希臘思想の一部を媒介した。第四に、工藝技術を世界に傳播したこと、以上四點はサラセン文明が世界に致した功績であつて、吾々が見逃すべからざる所である。

第十一講　十字軍

諸君！　吾々はさきに古の羅馬帝國の故地に於て、儼然たる東羅馬（ビザンツ）文明の存立に對照して、西方には、羅馬風ゲルマニ風基督敎世界の成立、及びその發展したことを見た。又た回敎が東方に於て建設した世界的文明をも一瞥して置いた。今やこれら兩者——かのペルシャ戰役の如く、たゞ攻防の位置を換へたばかりの又もや東西に對陣して——の大衝突たる十字軍を考察するの機會に達した。その經過及び結果が、如何に西歐の文化の發展に影響し、隨つてこの發展を通ほして、如何に世界の運命を左右すべきか、是れ特に諸君の深大な興味を睡る所であらう。

40　十字軍とは何ぞ

私はこの題下に十字軍（クルーゼード）①の原因と誘因とを說いて、その大體の特性を示さうと思ふ。

先づ十字軍の內的原因が三つある。

(1)　法皇の天下一統政治の隆盛に伴ふた宗敎的理想。卽ちかの「天國」の著者聖アウグスチヌスが曾て說いて後世に殘したるが如く、加特力敎會の政治を以て、天下を征服すること、及びベネディクト派、特にクリユーニ派によつて促進されたが如く、克己禁慾の宗敎的生活を實現すること、是れである。

隨つて基督の殉難の聖地の名なる『エルザレム』は信者の心を魅する魔語となつて來た。かくの如き理想と、その發動とは西歐に於ける宗敎政治の興隆と共に高まり、おのづから神の寵や榮えのために、何ものか偉大な奇績が働き出さるべし、といふ空想的確信が燃えて來た。こゝに、西方社會の白熱的憧憬が、エルザレムの空に向ふて奔騰するに至つたのは自然の勢であつたのである。

(2)　封建制度の發展と共に起つた尙武的精神。

(3)　民族大移動以來連續して居る侵略的慾望、卽ち土地征服熱。

抽象的に云へば、以上三個の事情は十字軍發動の原因として既に十分である。

故に十字軍的運動が所謂十字軍戰役の破裂に先だつて、夙に存在し發動して居つたことは、自明である。抑も八世紀の初、サラセン②のピレネー半嶋及び南ガリヤへの侵入以來、早くもこれに對抗する運動が、基督敎徒の間に起り、後の語を假つて云ふと、殆んど間斷ない十字軍が進行しつゝあつたのである。かくの如き歷史の運命によつてイスパニヤ武士の間に最も熱心なる宗敎的政治的敵愾心が焚き附けられた。既に十一世紀の後半、彼等の間から、信仰ふかく、勇武絕倫にして義俠匹なきチッド・カムペアドール②と綽名なされた英雄が現はれて聲名を天下に馳せ西方基督敎武士の功名心を煽つて、物語（ロマンス）の主人公となつて居る。又た最近には、吾々のさきに見たやうに、フランスに土著せるノルマン

の武士たちは十一世紀の半ば以來、既に南伊太利に據つて、彼等の封建國家を樹立し、その方面及び、對岸アフリカに於けるサラセンを討つた。尙ほこのノルマンは酋長ロベルト・ギスカードの下にバルカン半島に渡つて異端としてのビザンツ人をも伐つた。この英雄はかの老法皇グレゴリ七世を羅馬の圍から救ひ出した同じ人物である、彼は彼の一族を率ゐてアドリヤの海の彼方に於て正しく如上の十字軍の先驅運動のチャムピオンとして振舞つたのである。以上例示した南歐に於ける宗教的戰爭の事蹟は、いづれも、羅馬風ゲルマニ風社會に於ける武士の間に歌謠（シャンソン）、物語（ローマンス）となつて語り傳へられ、切りに人心を鼓舞しつゝあつた。故に、若しこれらの運動をよく統率し得るものさへあれば、西歐一圓を擧げて一大協同運動が破裂すべきてある。卽ちこれ、かのグレゴリ七世が作り出し且殘した宗教政治の任務てあつた。只だ彼の治世中には、彼にその意向があつたに拘らず、當時尙ほ皇帝との爭が結んで解けなかつたために、この一大運動を發するに至らずして止んだばかりてある。

これを要するに、十字軍は以上三個の內的原因に基き、羅馬風ゲルマニ風社會が羅馬法皇の天下一統政治の統率の下に、狹義に於ては聖土に於けるサラセンに對して惹起されたる抗敵運動てあつて、更らに廣義に解すれば、一切の天下の異敎竝に未信者に對しても差し向けられ得べき遠征軍てある。

そこて私は狹義の十字軍の發動を說かなければならぬ。是れが世上の所謂十字軍てあるからてある。

然しこゝには唯だその誘因を指摘すれば十分てあらう。

（甲）當時東方に於ては二個の事情があつた。

(1) 回敎國を見わたすと、アッバス家の衰微と共にハリファの國は分裂し、十一世紀の後半にセルヂュク・トルコが、バクダードに入つてその實權を掌握し、その前進部族は早くもシリア、バレスチナ、小亞細亞を併呑し、一方に於ては羅馬帝國の殘物たるビザンッを脅かし、他方に於ては基督敎徒のあこがれの目的たるエルザレムを占領し、頻りに西歐の巡禮者を迫害虐待した。

(2) 次には前記のビザンッ帝國、卽ち希臘加特力敎會の事情が聖土十字軍の誘因となつた。この國はサラセンのために既に東方の領土の大部分を奪はれ、スラーヴのバルカン侵入及び橫領のため、一層領土を蹙められ、版圖上に於ては、さながら太洋中に殘れる一孤島の感があつたけれども、コンスタンチノープルの天險とその防備の完全、ビザンッ固有の專制政治の維持、莊嚴なる敎會の建築及びその制度の整備、ビザンッ文學の知識生活、卽ち九、十、十一世紀に於ける所謂『ビザンッのルネーサンス』の輝き、世界市場の一大勢力たる貨幣經濟の確立、是等の强點に依りて、尙ほよく古の羅馬帝國に恥ぢない文化的面目を保ち、進んて新來の未開民族スラヴを敎化し、希臘風スラヴ風渾一の社會の基を開いた。今やセルヂュク・トルコが小亞細亞を席卷し、ボスフォロス、ヘレスポントの峽畔を

て侵略して來るや、時の皇帝、コムネナ家のアレキシオス③一世は使を羅馬に馳せ、同教の誼を以て援助を乞ひ、若し西方武士軍が來援するならば、成るべく道路、糧食の便を計らうと申し出た。

(乙)　次に西方にも亦た東方に呼應すべき十字軍の導火線がある。それは他でもない。時は、かのグレゴリの死後數年にして卽位した法皇ウルバノ二世㊍の治世であつた。彼はフランス人で、もとクリューニ敎團に屬して居た。聖ペテロの椅子に登るや、グレゴリの如く、東西敎會合併の志を抱き、ビザンツ皇帝から援助の請求をうけて機到れりとなし、親ら本國なるフランスに歸り、この封建武士の本場て、一〇九五年クレルモン⑤に於て宗敎會議を開き、故郷の人に向つて雄辯を振つて、聖蹟恢復のため東方遠征を勸說したので、聽衆感激禁せず、異口同音に『是れ神の思召なり(デュー・レ・ヴォー)⑥』と唱和し、卽座に十字架を取つて出征を誓ふもの(十字軍の名稱こゝに起る)太だ多かつた。これと同時に、北佛ではアミアンの隱者ペテロ⑦てふ說敎者が出て、同やうの說敎をなし、こゝにてもまた非常の感動を與へた。かくの如くして、天下の武士の花であるフランス・ノルマン先づ動いた。こゝに於て宗敎的熱情勃發して羅馬風グルマニ風の全世界を燎盡し、その上下宗俗擧つてひたすらエルサレムの恢復に熱中することゝなつた。卽ち是れ所謂十字軍の發動である。第一十字軍は前記クレルモン宗敎會議の翌年一〇九六年に歐洲を發し、三年目の後、エルサレムに達し、之を恢復して、エルサレム王國を建設した。この彼等

に取りて尊き目的物果して永く維持せられ得べきか。

41　十字軍隊の性質、ビザンツとの關係。

十字軍隊の性質として私は次の三點を指摘したい。

(1)　十字軍隊は、只だ羅馬法皇といふ宗敎上元首が精神上にて指導するのみで、實際上の組織及び作戰に於ては眞の專門的統率者がない。殊に第一十字軍に於ては尤も然りて、その內に有名なる封建武士、例へば下ロルレーヌ(ロートリンゲン)公ジェフリ(ゴットフリード)ド・ブイヨン⑧の如き、多々あつたが、その間統一なきため、殆んど烏合の衆といつてよろしかつた。

(2)　次にこの軍隊は宗敎的慈悲忍辱を旨としながら、異敎異端に對して殘酷暴戾に馳せ、その趣意と行動は甚しく矛盾に陷つて居た。

(3)　十字軍は自然海外征服を目的としながら、自らは何等の之に必要なる正式海軍を有して居なかつた。

以上の特質に相應してこゝに奇妙な陸海軍が起つた。卽ち、軍隊の輸送は南歐の商業都市に依頼するの外はなかつた。そこて、これ等の商業都市に於ては、十字軍が促進した貿易關係からは偖おき、單に十字軍直接の需用に應ずるために海軍が盛んに起つた。例へば、かのヴェネチア、ゼノア⑨の如き

これてある、これと同時にエルザレム及びシリアに於ける征服地維持のために宗教的常備軍が組織された。このものは封建の騎士て同時に僧侶の誓を取つたもので、一種の云はゞ僧兵てある。かの『院武士』(ホスピダー)『御堂武士』(テムプラー)『獨逸武士』(テウトニック・オーダー)⑩といふ團體は即ちこれてある。

尙ほこの際特に注目すべきものがある。それは十字軍とビザンツとの關係てある。元來兩者の關係から十字軍の起源を論ずると、前述の如く、ビザンツが呼び、西方が應じた形てある。それにかゝはらず、第一十字軍の進軍の當初から、卽に兩者の間に衝突が起つた。これは第一十字軍が海路に由らず、主としてバルカン半島を通過したから、一層然りてあつた。この際、ビザンツ人の十字軍に對する印象と反感は、當時の目擊者にしてビザンツ文學者の一人、實にコムネナ家の皇女アンナ⑪が、これを記して殘した。曰く『アドリヤの海からヘルクレスの柱(ジブラルタ)までの一切の野蠻人は彼等の故郷を見すてゝ歐洲を經由して亞細亞に移住した。一切の國道は彼等を以て充ち塞がつた。彼等の軍人は婦人小兒を伴ふて居る、人々みな赤色十字を肩に附けて章とした。……彼等の多數なる、猶ほ濱の眞砂、夜の星の如くてある』と。アンナは尙ほ東西の宗教家の相違を記して、ビザンツの僧はモーゼ乃至キリストの如く聖く、西方のは同時に戰爭する人てあるとて、十字軍中の宗教家の殺伐野卑なること、十字軍者の亂暴狼藉を指摘した。この記事たるや、感傷的ビザンツ女流文學者の筆に成るが故に、多少の割引を要するとするも、尙ほ東西文野の差とビザンツ人の反感とを推想せしむるに十分てある。かくの如き次第てあつたから、自然十字軍隊は糧食給養のこと、竝に征服地の支配のことについて、ビザンツと相和しなかつた。この衝突は兩者の信仰、氣風、文野の相違が根底を成しておるが、それが利益の背馳によつて一層嵩じて來た。故に平生より相反目するは勿論、殊に最近にはノルマン人の侵略のために負ふた痛手の尙いまだ癒えないのに、同じノルマンを中堅とする十字軍が潮の如く押し寄せて來たから、ビザンツ人は恐怖と侮蔑の念禁ずる能はず。されば彼等は、十字軍時代を通じて、これに對して何等の好意を有しなかつたのみか、とかく猜疑心を抱き、剩へ敵意を表し、屢々回敎徒と通じて、十字軍の活動を沮害した位てあつた。この不和の關係は第四十字軍に於て絶頂點に達して破裂した。これは十字軍の經過に於て說かう。

因にいふ。吾々は東方文明の花として、既に前講に於て回敎文明を瞥見したから、今十字軍の講述中に、その雙璧の一としてビザンツ文化の側面觀を挿入するを必要と感ずる。因てこゝに十字軍時代の大旅行者、イスバニヤのテュデラ在住猶太人ベンヂャミン⑫の紀行中からコンスタンチノプル印象記を紹介する。彼は一一六〇－七三年、卽ち第二と第三十字軍との間に廣く東方へ通商した商人てある。

『貢は全國から每年こゝに齎らされ、絹、紫織物、黃金から成り、多くの庫樓に收め藏せられる。か

くの如き富とかくの如き建物は世界中いづれに於てもその比を見ない。都だけからの貢は毎日二萬フロリンに上るとのことてある。そは市中の商店、旅館、並に市場から徴せられたものと、之と同樣に諸國から入込む商人に課せられたるものとから成つて居る。この國の住民たる希臘人は甚だ黄金及び寶玉に富む。彼等は黄金の緣や刺繡細工を以て調へられた絹衣裳をつけて出遊し、馬に跨り、列を作りて練りゆく。人之を見れば、すべてこれ王者の子弟てあると言はんと欲するてあらう。國は廣し、穀物肉類酒その他一切の結構な物資は豐富てある。人民は希臘學問によく熟達し、各自に自分の葡萄と無花果との樹かげにて樂しく住居す。彼等は彼等が夷狄と呼びなす諸國の人民を雇ふて軍隊を作りてトルコ人と戰爭す。彼等は自らは毫も軍國の氣象を有しない。只だこゝにその内の若干の重要な回轉機のみを指摘するに止めて置く。

抑も十字軍はその大なるものばかりても七回あつた。その外、小勢なもの、珍奇なものが頗る多かつた。例へば一二一二年の小兒十字軍の如き傳奇的物語に類するものがあり、又た一二一七年のハンガリア十字軍の如き、東歐の亞細亞的民族が、羅馬の基督敎信仰に化して年尙ほ淺き國民の遠征もあつた。殊にこのハンガリア十字軍は或は大十字軍の内に數へられ、その第五十字軍と稱することがある。

42　十字軍經過　第四十字軍

十字軍の經過について、私はこれを談るの遑を有しない。只だこゝにその内の若干の重要な回轉機のみを指摘するに止めて置く。

抑も十字軍はその大なるものばかりても七回あつた。その外、小勢なもの、珍奇なものが頗る多かつた。例へば一二一二年の小兒十字軍の如き傳奇的物語に類するものがあり、又た一二一七年のハンガリア十字軍の如き、東歐の亞細亞的民族が、羅馬の基督敎信仰に化して年尙ほ淺き國民の遠征もあつた。殊にこのハンガリア十字軍は或は大十字軍の内に數へられ、その第五十字軍と稱することがある。

偖て十字軍はその熱心の程度、目的の相異によつて、前後二大時期に分つて考へるのを便宜とする。第一期は十字軍熱昂騰期てあつて、第三十字軍（一一八九―一一九二）を以てその絶頂點とする。これは、その目的が、この時回敎世界にサラディン[73]と稱する英雄起りて、第一十字軍の産物たるエルザレム王國を滅ぼしたから、再びその恢復及びサラディン征伐に在つたこと、この十字軍に參加した人物が、羅馬風グルマニ風世界の最高君主――獨逸皇帝フレデリック・赤髯（バルバロッサ）佛蘭西國王フィリップ二世オウギュスト、イングランド國王ノルマン・プランタジュネット家リチャード一世・獅心（ライオンハーテッド）[74]――を始め、多士濟々てあつたことに見ても、略ぼ推察し得られる。實にその間、陸にも海にも將た目的地に於ても種々の起伏波瀾があつて悲劇にもロマンスにも富んて居る。だか、流石のこの十字軍も終にエルザレム恢復の大目的を達し得ず、この基督敎徒に聖き都も今回の世界大戰まて永久に失はれた譯てある。

次に起つた第四十字軍（一二〇二―一二〇四）は、正さしく前後の過渡期を形作るものと云ふことが出來る。この度は、法皇の宗敎政治の最高點を作つた最も有力なる一人インノセント[75]三世の勸進によ

つて催され、かのサラディンが殘したエユーブ家の根據地たる埃及を征伐せんとの目的で計畫された。然るに、この十字軍は途中から、コンスタンチノープル攻撃に變じたのである。かくの如き始末になつたのは種々復雜な原因が之を然らしめたからである。最初、この十字軍者の大多數は、ヴェネチアに集合し、かねての約束により、この海國の艦船を借つて目的地に渡航すべき筈であつた。然るにこゝに誘惑が起つた。その事情は次の如くである。適々十字軍者は軍資に窮し、ヴェネチアと契約した報償を支拂ひかねた。かねてコンスタンチノープルに於ける通商植民の利益取得に熱心であつたヴェネチア商業國のことであるから、その政治家らは、十字軍者の窮狀を見ていはゞ奇貨措くべしとなし、己が利益のために彼等を利用せんとて、切りにこれに說きつゝあつた。十字軍者の中には、實にコンスタンチノープル征服によつて取得すべき利益の分前に心を動かすものがあつた。この際更らに一事件が突發して、いよ〳〵十字軍誘拐の導火線となつた。卽ち、ボスフォロス峽頭の帝都には、偶々ビザンツによく見らるゝ皇室の御家騷動が起つて皇帝の廢立があつた。廢帝の王子一人、西方に逃れ來つて、西方人の間を說き廻り、多大の條件を提供して、自己の復位を求めた。これ何よりの好餌であつた。是に於てヴェネチア人及び十字軍者の間には、コンスタンチノープル攻撃の口實が容易に發見されたのである。ビザンツ人は夙に羅馬敎會から分離して異端となり、且つとかく十字軍を妨害して來た、加ふるに最近の廢立は政治上不法、亂暴である、故にこの際若しビザンツを懲して、これを自由に支配し得たならば、是れ東西敎會合併、大十字軍發動の準備となるであらう、と云ふのが彼等の言前であつた。法皇は勿論勅を下して十字軍の目的變更を嚴禁したが、力及ばなかつた。十字軍は途上既に目的を變じてダーダネルス[76]（ヘレスポント）を入つて、コンスタンチノープルを征服し、ヴェネチア人と妥協して利益を分配し、ビザンツ帝國を橫領して之を自分等の帝國と化した。ボスフォロス峽頭のラティン又はフランク帝國（一二〇四―一二六一）と稱するものは、卽ちこれであつた。そして軍中のフランス武士の一人フランドルのボルドウィン[78]が還立されてその帝位に卽いたのであつた。

こゝに、前に理つた趣意により、再びビザンツ側面觀の挿話を試むるも無用でなからう。それは實にこの第四十字軍に從軍した有名なヴィルアルドアン[79]の『コンスタヂノープル征服記』の一節である。そこに西方の武士等の船が城下に近づきて之を見あげた時の心持がナイーヴに描かれて居る。曰く『諸君、諸君はこれまでコンスタンチノープルを見たことのない者等がこれを極めて嚴肅熱心に見守つたさまを想見すべきである。何となれば、彼等は世界中にかくの如き富有なる都市の有りうべしとは到底思ひ得なかつたからである。眼前に現はれたのは、市の周圍を環つた高い城壁、堅固な城樓、莊嚴な宮殿、雄麗な敎會――これらの數の多きこと、これを面のあたりに實見しなかつた人々には決して

信ぜられまい――而してこの一切の都市中の王ともいふべき都城の高さとその長さとである。諸君は思へ、何人もこの都を目撃して身震ひを禁じうるほど無感覺に鈍重なるを得なかつたことを。是れ不思議てない。世界あつて以來未だ曾て如何なる人民によつても、かくの如き廣大なる企が行はれたことがないからである』と。

所詮、第四十字軍は、凡そ十字軍がやうやく回教の根據地征伐といふ最初の大目的に專らならず、政治上竝に商業上の利益に眩惑されて、他の方面に向つて誘拐せらるるの傾向の始りてあつた。蓋し西方人士は、十字軍進行と共に、自己よりも優勢な東方文明――ビザンツ及び回教――に接觸し、これを理解し、始めて自らを省みて自覺を高め、自己の教會の理想の空疎なことを發見し、それよりも現實生活の痛切さを感じ慕ふこととなりつゝあつた。彼等は最初目的としたエルザレム恢復が困難にして、且つ意味のないことを悟り、これよりか、より容易に、より著實な事業、卽ち現代的富國强兵策に注目することゝなつた。故に、その後、第五十字軍（一二一八―一二二九）起るや、このものは成程、聖地に向て出發はしたが、とかく熱心を缺いて有名無實に終つた。その次の第六十字軍に至つてはあからさまに埃及に向ひ、第七十字軍は更らに轉じてアフリカのチュニスに上陸した。これら最後二回の試みは、實にフランス國王、フィリップ・オーギュストの孫、聖ルイス[20]（九世）によつて行はれたが、いづれも失敗に終つた。剩へルイは最後の上陸地に於て疫病にかゝりていはゞ殉敎者の往生を遂げた。

要するに、第四十字軍以下、十三世紀に於ける十字軍は、漸次宗敎的臭味から蟬脫し、寧ろより濃厚に政治的經濟的の色彩を加へつゝあつた。彼等の目標は十字軍固有の目的物よりも漸く他に轉じつゝある。かくの如くして聖地恢復運動としての十字軍は龍頭蛇尾に終つた。今後の對外十字軍は――もしこの語が尙ほ用ひ得べしとすれば――新味を帶びたる十字軍とならなければならぬ。卽ち今や陸地發見時代、換言せば、ヘンリ『航海公』、コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ[21]の活動期が一步々々近づきつゝあるのである。

43　西方に及ぼした影響　蒙古の西侵

かくて十字軍は直接の目的に於ては、全然失敗に了り、却つて回敎國を刺戟してその戰鬪力を挑發した觀がある。最後の十字軍が失敗に了つてから三十年ならずして、やがて、オスマンリ・トルコ族がその間から起つて來るのは、その餘勢である。けれども、この時まで約二百年間、西方諸國に於ける一切の階級をあげて、廣大なる共同遠征に從事せしめたから、十字軍が西洋文明發展に及ぼした文化上の影響頗る大なるものがあることは、言ふまでもない。その主なる點を摘出すれば次の如くてある。

(1)　法皇の天下一統政治の權力の增長、及びその威信の失墜

(2) 強大なる君主起り、近代國家運動、卽ち中央集權の端を發した。
(3) 騎士階級の發展、及びその道德の養成
(4) 東西交通・貿易の促進、都市及び市民の勃興、資本經濟の開始。
(5) 知識の開發、學術技藝の進歩。

以上五大影響につきては、私は次講に於て之を一括して說明しながら、これによつて起り、若くは促がされた西方社會の變動を幾分か詳しく述べることを便利とする。

尙ほ、この十字軍時代の大舞臺に入り込むだ一個の突發事變があつたことを注意して置く。それは蒙古の西方侵略である。事は十字軍の末期卽ち十三世紀に起つた。この大運動は、歐洲に於ては、東歐を蹂躙したる後、今日のドイツのシレジヤ地方ワールシタット附近の衝突(一二四一年)を絶頂點として、西方亞細亞にては、旭烈兀のバグダド占領でその一ハリファを滅ぼしたことに止めを刺す。この侵入者は羅馬法皇及び十字軍者に取りては自然の好同盟であつて、以て東西相呼應してサラセンに當るべきであるから、おのづから兩者の消息交通が開始されたのである。しかし、この時埃及にマメリュークの勃興して蒙古をシリヤから擊退し、且つ蒙古人早く衰弱したから蒙古の西方侵略は、政治上では、吾々の世界史に取りて一陣の暴風雨として過ぎ去つたばかりである。

第十二講　十字軍時代及び戰後の西歐社會

44 法皇及び敎會の威信失墜。

十字軍は法皇の首唱に發したから、その天下一統政治の權力增長の手段となり、之をして權力の絕頂點に登らしめたのは勿論である。實にこれによつて法皇は、羅馬風ゲルマニ風社會の一切階級を糾合して、自らその最高統率者たるの實をあげたのである。けれども十字軍が終に失敗に了ると共に、その世人に與へた精神上影響は決して良好ではない、法皇權の威信の失墜となるの外はなかつた。かくて、勿論他の幾多の事情と相俟つてゞはあるが、こゝに羅馬敎會に對する不信用、冷淡、懷疑、果ては異端の發生を見るに至るべきであつた。これが說明は固より政治、財政、經濟の上にも求められるべきであるが、私は茲に主として信仰及び知識の上から觀察しやうと思ふ。

抑も十字軍の進行と共に、出征の準備や遠征の失費戰死病歿のために、封建所領の質入、寄進、沒收、讓與等があつて、社會の財產關係一變し、その際、眞先に莫大な利益を收めたのは敎會であつた。その結果、法皇も司敎も修道院長も、財足り氣驕つて、敎化を忽にし修道を怠るの傾を免れなかつた。而も東方文物の輸入、社會の交通の進捗と共に、世人の知識漸く開發し、敎會の權力に對する疑義起り、

或は聖書の原意を尋ねて眞面目に改革を思ひ、或は懷疑的となり教權を冷笑するものも少くなかつた。かのワルデンゼル派の如き、又た、カタル派、マニ派⑦（第十講參照）などの如きはそれてあつた。かくの如き異端運動の最も大きく最も激烈なのは南佛に起つた。就中ツールーズ伯領内のアルビ②市を中心とする地方である。その地方の大名武士などもこれに感染せられるものさへあつた。敎會史上所謂アルビゼンス③派と稱するものこれである。このものは、實に羅馬敎會に對する最初の有力な反抗運動の烽火を揚げ、後に來るべき敎會改革の先驅運動とも見らるべきものである。この時、かの法皇インノセント三世は、これを鎭撫せんがために御名代を派遣したが、この使節すら却つて異端者のために暗殺せられた（一二〇九）。二十年の歲月中に始めて之を殲滅することを得た。

45　托鉢巡敎團　煩瑣哲學④

當時十三世紀は、かの前講に述べた對外十字軍も早や半ば過ぎ、歐洲内部の生活狀態の變轉が、對外よりも對内十字軍をより多く必要とする有樣の時代である。この要求に應じて新たなる律僧の敎團が起つた。その重なものは、カスティラ國の聖ドミニクスの信條を奉ずるドミニカン派と、中央伊太利アンジの聖フランシスの敎を守るフランシスカン派とである。是等の敎團は制服の色によつて、前者は黑衣衆（ブラック・フライア）、後者は灰衣衆（グレー・フライア）⑥とも呼ばれて居る。

これ等の敎團の特色、卽ち起りたる所以の根本意義如何といふに、いづれも時代の流弊に鑑み、かのベネディクト敎團固有の、三個の誓（第八講參照）の中、清貧に最も重きをおきて一切個人乃至家族の財產を放拋し、而も從來の如く、徒らに靜かな僧院に閑居して自らを樂み世間を顧みないといふ一般の律僧（モンク）のいはゆる出家隱遁の生活を排斥し、自ら進んで社會に入つて、神に對して冷淡になつて居る人民を警醒し、社會の誘惑のために、誤れる罪の子らを戒め諭して、各々眞の信仰に返らしめるのを目的とした。蓋し昔は人民が宛も赤子の慈母を慕ふが如くに自然に敎會に子來したのに、今は然うは行かない、因て敎會は宛も嚴父が放蕩兒を折檻するやうに、自ら嚴重な態度をもつて進みて民間に入りて彼等の上に臨まなければならぬやうになつた。この敎會の必要に應じて新たに用ゐらるゝことになつた方法は他でない、巡敎托鉢であつた。托鉢巡敎團の名は實に之から發したのである。この方法を有效にするため、彼等の住院も今は昔の如き山林曠野よりも、寧ろ市町村落の間に多く營まれ、直接に頻繁に俗人と接觸することゝなつた。フランシスカン派が中央伊太利に起つたのは言ふまでもない。ドミニカン派は、實に、上に述べたアルビゼンス異端發生の際に起つたのである。その敎祖ドミニクスは、イスパニアの人、初め少壯にしてこの異端の巢窟、南佛蘭西を旅行して、感憤する所あり、自ら

その異端教化の運動に參加したが、遂に自ら一團を開いて法王の認可を受け、アルビゼンス十字軍起るに及びては、自ら之に從事し、フランス王フィリップ二世オウギュスト、竝に北方フランスの封建武士の兵力と相俟つて、異端者の教化竝に査問に從事し、多年の日月を費して、その殄滅に貢獻した。これが、フランスの王權及び王領の擴大に資したことは勿論であるが、之と同時に、將に失墜せんとして居た法皇權の威信を恢復するに大功あつたのである。

然らば、これらの托鉢巡教團は當時の信仰及び知識の上に於て何物をか建設したる。私はこの問題について、只だ彼等に共通した特徴のみを說かう。先づ第一に、世間の教化である。彼等は從來の教團と同樣に、依然として信仰を本源とするもの、即ち神の惠みを源泉とし、而も當時起りつゝある知識を調和して、教會の制度及び權力を擁護するにあつた。彼等は聖母マリア若くば教會の聖者を崇拜の中心とする組合講を結びて信仰を砥勵し、隨て婦人の歸依を惹きその社會上位置の向上に資した。この點に於てフランシスカン派は童貞マリアの『清淨懷胎』てふ定說を立てゝ、一層マリアを神聖なものに高めて、その崇拜を盛んにした。第二には學問である。彼等の間から中古に於ける最大の哲學者が輩出した。これらの哲學者は、猶ほサラセン哲學者の如く、アリストテレスを宗とした。その目的は、この哲學者を利用して、法皇の天下一統政治を辯明擁護するに在つた。即ちこれ哲學及び神學の歷史上有名なるスコラ派を構成するものである。然しその學風が動もすれば、末節に拘泥し、空理空名に馳せ易かつたから、或はこれを譯して煩瑣哲學派とも云ふ。猶ほソフィストが詭辯學派と譯さるゝが如きてある。

因て私はその最も有名な代表學僧一二擧げて見やう。即ち只だ、かの伊太利人でドミニカン派に屬し、『天使博士』と云はれたアクィノのトーマス、及びフランシスカン派に屬する英人で、『魔術博士』と呼ばれたロージャ・ベーコンの二人につきて一言する。トーマス・アクィノは加特力教會の神學の大家て今日と雖も尙ほその最大權威として重ぜらるゝ學僧てある。ロージャ・ベーコンがアラビア風學術、就中理化學に通じたことは既に述べた。彼は望遠鏡を發明し、火藥を知つた。これが『魔術博士』なる異名の由來てある。特に注目すべきは彼が科學的根本的態度を持し、夙に古典の原本たる希臘の典籍研究の必要を唱へたことに在る。隨つて彼の神學上意見も亦た當時最も進歩したものてあつた。所詮、彼はその時代の學者から一頭地を拔いて進歩し、寧ろ、ルネーサンスの學者に近いものてあつた。抑もスコラ哲學は教會の神學を大成し、哲學史上、ルネーサンスに到るべき橋梁を作ると稱せられるが、吾々はロージャ・ベーコンに於て最も然ることを見るのてある。

然らば、十三世紀に起つたドミニカン派、及びフランシスカン派は、要するに、世界史上如何なる位置を占めるものであるか。蓋し彼等は、猶ほ六世紀、七世紀に於けるかのベネティクト派、（第八講28）十世紀十一世紀に於けるかのクリュニ派（第九講34）の如きものである。卽ち、當時における羅馬加特力教會の天下一統政治の擁護者として大なる功勞があつたこと、是れてある。方さに衰微に傾かんとしつゝあつた法皇の權力が一時維持されることになつたのは、如上の新しい宗教運動に負ふ所甚だ大なるものがあつた。これを後世の例に照せば、猶ほ十六世紀におけるゼスイタ教團の如きものである。以上ベネディクト派からゼスイト派までを通覽するに、吾々は凡そ修道院（モナステリ）なるものが、羅馬加特力教會にとつて、信仰上からても、教學上からても、如何に必要てあつたかと云ふ、世界史的顯著なる事實を看取するに難くはないのてある。

46　法皇の『バビロニヤ幽囚』

法皇の權力は十三世紀に於てこそ、上述の如く新らしき律僧の運動によつて、一時の危機を救はれたれ、十四世紀に於ては、これ等の律僧は、彼等の先輩の如く、再び墮落に陷りつゝあつた。これと同時に、世界の大勢が益々進展したので、法皇は直接又は間接に引き續いて激烈なる打擊をうけた。この大勢と云ふ內に、政治上の發展が數へられねばならぬ。卽ち現代に於ける國民生活、竝に國家運動が萌芽したことてある。しかし、この事項は次講に讓つて、玆てはその中の最も直接に關係があつた一大事件を指摘するに止める。この一大事件とは卽ちフランス王國の君主權が强大となり、教會に打擊を加へて、遂に自らこれを自己の臣妾奴隷の如くに自由自在に取扱つたことを云ふのてある。

少しく詳しく說かんか。時は國王フィリップ四世の御世てある。彼はかのアルビゼンス十字軍の政治上實行者たる國王フィリップ二世の四世の孫、かの第七十字軍の殉敎者、聖ルイス九世の孫てある。彼は是等の父祖の王權集中の遺業を繼ぎ、富國强兵を治世の最大目的とする現代的政治家てあつた。彼は當時復活した羅馬法の學者を用ゐて、教會及びその神の法に對抗し、教會がフランス國內て取り立てる宗教上收入を制限し、忽ち時の法皇ボニファチオ八世（8）と衝突した。彼は乃ち前記の法律家てある股肱の臣ウイリヤム・ド・ノガーレ（9）を遣り、志士を募つて、アナーニ（10）に於て、法皇を辱かしめた（一三〇三）。老法皇はこれが爲めに間もなく憤死したのてある。その後任として、フィリップは一人のフランス人を推して法皇とし、而もフランスの地に留り居らしめ、更らに、この法皇を强迫して、かの十字軍の產物てある富有なる御堂武士團（テムプラース）解散に同意せしめ、この團體が積蓄せる莫大な財產を沒收して自己の國庫を肥した。御堂武士團は、最近まて十字軍に於て歷代法皇の手足となつて忠勤を抽んてた僧兵團のーてあつて、十字軍時代が過ぎて後は、現にパリーに本部を置き、その所領財產は歐洲諸國に跨り、

その富強王侯を凌いで居た。このものが、今法皇親らの認可によつて、ドミニカン教團の宗教査問に問はれて有罪と決し、國王のために沒收されたのは、蓋し、十字軍の運動は衰へて、世界の大勢が一轉せんとしつゝあることの何よりの表象と見なければならぬ。

かくて法皇は一三〇九年から一三七六年までの間、南佛のアヴィニョン[71]に居て、さながらフランス國王の法皇たるの觀があつた。因つて世にこれを、法皇のバビロン幽囚と稱する（第六講19）。

これによつて法皇の威信益々地に墜ち、兩歐の諸國或はその命に服せず、種々の異端、又は反抗運動が屢々起つた。その最も有力なる最初のものはイングランドのウィクリッフ[72]（一三八四年歿）であつた。彼はオクスフォード大學の神學教授、法皇の爪牙たる巡敎托鉢派の腐敗橫暴を痛擊して、國民が獨立に敎會を組織すべきを主張し、英國最初の社會運動破裂ロラード[73]の亂（一三八一）を激成した。即ち是れまた敎會改革の必要唱道の第二先驅といふべきものであつた。

47　騎士風の隆盛

吾々は轉じて敎會以外の社會上の發展を一瞥しなければならぬ。先づ第一に吾々の眼前に現はるゝ社會現象は騎士風の發展である。世にこれを封建制度の花と呼ぶ。蓋し中古の中心生活は、嚴肅な敎會[74]や、浮世を離れた修道院や堅牢陰鬱なる城廓に集中して居た。是等の建築は薄暗いロマネスク式で出來て居る。當時の觀照によれば、人間には根本的に元罪がある、これを贖ひ亡ぼすために、克己禁慾の生活を理想として居る。されば上述の諸建築の裡で營まれて居る生活には、娛樂は固より、自由も便利も缺け、故らに之を進めやうとしなかつたのみならず、不自由と禁斷とのたゞ中に罪障の解脫が求められると考へられた。されば當時の社會が暗い、濕つぽい、窮窟な狀態にあつたことは吾々の想像以上にある。今や十字軍時代となつて、この封建社會は、加特力敎會てふ、世界的大勢力の提唱によつて、東方征伐を始めとし、その他の種々の協同的大運動に從事することゝなつて、その間にいはば一種の世界的大風雲が捲き起された。そこでこの大いなる雰圍の裡に於て一大敎育が施されることになつた。これは他ではない。イスパニヤ、フランス、イギリス、ドイツ、スカンヂナヴィア諸國の武士は、この廣大な世界的社交の機會に於て相接觸し、相往來し、相練磨し、傍ら東方及び南方の文明を習ふたから、こゝに彼等の社會の間に共通する一大修養が行はれ、これが次第に完成し、その結果、一種の西歐の社交界に固有特別な、而も一樣共通なる思想が釀され、全體に通じて同樣な風俗習慣が形造られるに至り、これを從來の薄暗い窮屈な生活に比べゝ、頗る晴やかな人生的な舞臺が開け、さながら多年培はれた封建制度に爛漫たる花が咲き出たかの如き觀があつた。即ち騎士風（又はナイトフード）なるもの是れである。[75]

これによると、苟も一人前の男子、昔の所謂自由民、今は即ち騎士（ナイト又はリッテル）たるもの

は、猶ほ加特力教會の所屬員が一個の世界的階級を形作つて居た如く、自分等も騎士と云ふ西歐社會全體に共通する世界的、少くとも國際的階級に屬するものと考へて居た。如何なる國の高位高官に昇り、又は如何なる地方の廣大有力な所領の主人となりうる者でも、皆な少年の時から然るべき主君を選んでこれに仕へ、多年の間、騎士となるべき習慣上一定した秩序ある躾を受け、始めて一人前となり、若くばなるべきもので、その最後の階段は卽ち騎士としての帶劍式である。これ猶ほ一人前の武士となる謂である。苟もかくの如き教養を經た以上、これ等の人士はすべて、相互に同等なる同輩（ピーア）であり、この資格に於ては、一城主、一村の領主と雖も、皇帝、國王と少しも異らないのである。かくの如き高き有爵者には只だ『同輩中の上席』が許されるのみであつた。重ねていふ、すべての王侯貴人は騎士として同輩にして同等であることに於ては變りはない。

彼等の修養上理想とする所は四ある。(1)加特力。信仰のためには水火の難も辭せない。(2)忠君。己が仕ふる主君のために忠義を勵み、盟約に背かぬ。(3)弱者保護。殊に婦人を尊敬す。(4)名譽。卑怯未練を排斥す。隨つて種々の道德の細目が起つて騎士の躾の制裁となつた。卽ち身分血統を正うし、品位を重じ、同僚相愛み、禮儀を厚うし、詩歌を諷ひ、物語を愛讀して精神を鼓舞し、然るべき主君に仕へて武藝を習ひ、競技に出場して勇名を轟かし、マリアを始とし、自己の想定して居る淑女のため、又は孤寡孤獨、その他苟も抑壓せられたものゝために、義憤を發して、士道も磨くべし、この意味に於て遍歷騎士起る、卽ち、猶ほ武者修行の如く、而も宗敎的使命を帶ぶとする者である。所謂騎士は天下の上位に立つて居て、何人にも卑下しない同等の分限者として文武兩道に熟達することを要する。

以上騎士風の大要である。この風は卽ち大體に於て西洋に於ける紳士道の始といつてよろしい。何となれば今日の西洋交際社會の風俗習慣多くこゝに胚胎する所ありと云はねばならぬからである。因に云ふが、上述によりて推想せられることであるが、凡そ騎士の社會生活は彼等の間に於て詩歌小說を盛んにした。是等の文學の目的は騎士風と戀愛とである。詩歌には戀歌（獨逸にてはミンネ、南佛のプロヴァンスにてはトルヴアドゥール）が卓越し、讀物には武士物語（ロマンス）が流行した。

再び之を要するに、十字軍後の西歐の社會は最早單に嚴肅な宗敎生活のみではない。華やかな騎士風の發現と、これに伴ふ文物の勃興とに依つて、世俗主義の生活が躍動し始めたのである。但し、かく花さくばかりの派手やかな騎士の生活の內面には、十字軍と共に大飛躍した世界の經濟上變動と相俟ちて、財政上から押し寄せつゝある生活難の悲哀があつたことを忘れてはならぬ。

されば次に吾々が見逃し難く思ふ社會現象は、近代都市生活の始り、市民階級の勃興である。

48　都市及び市民の興起

從來の社會は神に奉仕する者、若くは爲上にて土地人民を治める者でなければ、殆んど人にあらざるの觀があつた。この社會は財政經濟上に於て、土地と云ふ不動產資本と、人間の勞働とのみに依賴し、而もこれら二つのものを束縛する、一個の秩序はあるが、極めて不自由な組織の下に生活して居た。この組織によると、土地には賣買、讓與の自由もなく、人間には職業撰擇、竝に住居變更の自由もなかつた、彼等は地面附て半ば奴隷狀態にあつた。當時土地は唯一の資本である。財產と云ふと唯だこの不動產があるのみである。そしてその所有權は、上流階級の占有に歸し、他の階級に移り得ない。故に動產資本は殆んどない。偶々猶太人がこの動產資本を輸入して、利殖の方法によつて、勢力を振ふものがあつたから、敎會はこれを嚴禁し、且つ屢々この種の人民を迫害した。これには信仰上基督敎から違ふ人民であるといふ理由もあるが、經濟上利害の衝突といふことが、少からず重大な理由である。今や十字軍時代に於ける東西交通の發展に刺戟されて、西歐人自らの間にも、金錢てふ動產資本を作り、これを武器として、從來唯一の勢力を振つた宗敎及び政治上特權階級に對抗し得るものが起らんとした。卽ち都市に於ける住民である。

これより先、西歐では羅馬時代の都市は、殆んど零落殘破し、新らしいものが未だ起らない。若し尙ほ町らしいものがあつたならば、それは、概して南方に殘つて居るものばかりだ。卽ち

方交通によつて僅かに存續したのである。例へば南イタリヤのアマルフィ[78]、南フランスのマルセイユの港市の如きこれである。有名なヴェニスは勿論早くから、實にかの民族移動の初期、フン族が南下して來たから、當時避難のために、その地方人民が附近の海嶋に據つたのに始まつたと傳へられて居る位て、これとても十字軍時代までは、極めて微々たる港市てあつた。然るに十字軍時代には、吾々の瞥見した如く、十字軍隊の輸送の任務と竝びに東方貿易の發展とのために、先づイタリヤ及び南佛、東イスパニアの海岸に於て、多數の都市が俄かに盛んに起つたのである。

その內に於て、嶄然頭角を露はしたのが卽ちヴェニス、ピサ、ゼノア、マルセーユ、バルセロナ[79]、その他て、尙ほ少しく內地ではミラーノやフロレンスの諸市があつた。

就中、イタリヤ都市の物興は世界史上の偉觀に屬する。彼等は概して十二、十三世紀から起つて來た。これより後、イタリヤの資本家は奮起して、勢力を西歐諸國に發展さした。例へば、イングランドては倫敦の中心、その金融市場の目貫の場所に『ロムバード通り（ストリート）』なる名稱をも殘して居るのは、卽ち當年イタリヤ資本家の多く店舖を構へた街て、實に彼等の財政上經濟上活動の紀念である。

十三世紀、十四世紀には、この都市の物興の餘波が北方に及び、その最も早く繁榮したのは、フランドル[20]地方てあつた。卽ちブルージュやガンなどてある。これに次いでライン河畔、ダニューブの

上流、北海及びバルト海岸の各方面に於て、多數の都市が簇々起つた。凡そ都市は、自己の周圍に城壁を環らし、自己の市場を防禦し、經濟上能力によつて兵力を蓄へ、その市又は地方に於ける歴史的有力者、卽ち領主、詳しくいはゞ司敎(ビシヨップ)又は豪族から、各自特有の場合と事情とに準じて、それぞれ自治の權利を要取し、これを特許狀(カルタ・サヤーガー)に書き下して明文を以て確認せしめる。かくの如くして都市は隱然一個の多かれ少かれ獨立する國家の如き狀態をなすのが、その常であつた。加之、彼等は屢々その地方において、相聯盟して都市同盟を作つて有力者に當り、自己の階級の利權を固めるのを目的とした。例へば最も早き有力なるものは、十二世紀に於て、北伊太利にミラノを中心として出來たロムバルド都市同盟である。このものは、時は恰も皇帝(ザクセン)派、法皇(グエルフ)派の對立抗爭に乘じて、その間に第三者として起つた新勢力である。彼等は概して法皇派と提携し、皇帝權の衰微に貢獻した。又た北方にては、十三世紀にライン都市同盟スワビア(南獨)都市同盟の如きものが起つて亦た各有力であつた。而してこれよりも更らに有名なのは、ハンザ都市同盟[27]である。これはハムブルグ、ルューベック[28]の二市を中心とし、主として北獨の都市を主體とし、そのほか、南フランドルの境から、東北はバルト海岸に亘つて散在する數多の都市を聯結した一大同盟であつて、十三世紀後半から十四世紀へかけて最も隆盛を極め、當時その海軍、竝に通商の發展は雄を北方に稱へて或は勢力王侯を凌ぐに至つた。

かくの如くして中古末期に於ては資本經濟の開始と共に、市民てふ第三階級が萠芽した。從來宗敎の建物や、大名の城廓のみが、生活の殆んど唯一の中心であつたのに引きかへ、今や都市(シヴィ・ホール・ヲート・ハウス)の市役所や、市場が、新生活の中心となりつゝあつた。但し市民權と云ふても都市の人口中の一部分、卽ち資本家だけが有する權利である。彼等は各自の職業に依りてそれ〳〵組合(ザルド)を作りて市政を料理した。市の貧民及び勞働者は、最初これに與らなかつたのである。そこに中古末期の社會問題の萠芽の原因がある。イタリヤ諸市に於ける職工連中の富豪階級に對する政治的社會運動、イングランドにてウイックリフの敎會改革運動に聯關してロンドンに於てロラードと稱する運動(46末段參照)等はそれであつて、それて始めて幾分の改善が起つた。況んや農民に至つては地方に於て村人(ヴィレーン)(賤民)又は耕奴(セルフ)として排斥され、社會上奴隷的狀態にあつて、概して未だ何等の社會の活動員階級を成さなかつた。

49　階級の自由、大憲章(マグナ・カルタ)[29]

繰返せば、都市及びその市民は、騎士の後から起つた新しい活動員である、而して騎士と同じく一個の世界的若くば國際的階級を作つて居り、未だ國民的、國家的のものとなつて居ない。蓋し當時國民的、國家的觀念は尙ほ薄弱で、宗敎者と云ひ、騎士と云ひ、市民と云ひ、いづれも世界の諸國を通じて各自の階級的利害を重んずる傾向が盛んであつた。

この點に關し注意を要するのは、憲法史上屢々引用される、かの有名な大憲章（マグナ・カルタ）の成立（一二一五）とその内容である。

抑もこれ亦た十三世紀てふ封建の階級的自由、封建の階級的權利の觀念が強大を極めた時代の何よりの好發現である。當時、プランタジュネット家の國王ジョン[24]は、父祖以來、フランスのノルマン及びその大大名の血統と傳來の權利とを受けて、イングランドに君臨し、封建の最高君主として、苛酷な政治を施したから、國内の豪族、卽ち僧侶と大名との階級、竝に倫敦市民てふ階級は協同提携して王權制限の機會を窺ふた。偶々ジョンがフランスにおける戰役に於て、佛國王フィリップ二世及びその同盟軍のためにブーヴィーヌ[25]（一二一四）に大敗し、フランスに於ける自家出身地の大部分を沒收された。如上の諸階級はこの對外上の失敗を機として起ち、階級の權利を主張し、國王の封建の權利を制限し、因つてこのことを規定する特許狀に記名調印せしめた。卽ち大憲章（マグナ・カルタ）がこれてある。このものは諸階級を通じて、すべての權利を明文に規定した始めて、實に今日の英國國民の固有の憲法的自由の遠い淵源をなすものてある。而も當時の社會の實情に顧みれば、諸階級の權利と、國王の權利との一個の妥協と見らるべきもので、未だ眞の統一ある國民、若くば國家てふ觀念の上に立つたものではないのてある。換言すれば、後世英國その他諸の革命時代に於ける民權論者が鼓吹する程の重大な人民

の勝利てはなかつたのてある。

50　ゴシック建築　大學　法律學の復興

こゝに學藝の大體を一瞥しやう。しかし、私は本講の第二節に於て既にスコラ哲學を簡單ながら述べたから、これは省いて置き、こゝては只だ建築、大學、法律の三者を指示しやうと思ふ。

十三世紀における都市の物興と共に現はれた新現象の一つはゴシック[26]式建築てある。從來の建築は、かのロマネスク式てあつた。ロマネスク式の最大特徴は圓い穹窿（アーチ）てある。窓が小さくてその數も少く、天井が低く、室内が陰氣て建築全體に彫刻粧飾に乏しく、その風は、只だ堅牢一偏てあつて、言ひ知れず重々しく、頗る趣味を缺いて居る。羅馬の末路、中古のさ中までの寺院竝に城廓、宮殿は、皆この式によつた。ロマネスクとはつまりローマ風、卽ち羅馬建築の墮落惡化した形式の義てある。ゴシックとはこれに對照して名づけられたものて最初北佛に起つたのてある。この式は先づ寺院建築にあらはれた。そして新らしく起つた都市の富と、その信仰との發現てあつた。その最大特徴とする所はかの圓き穹窿の代りに尖つた穹窿（ポインテッドアーチ）が用ゐられて居るところに在る。且つ建築高く、隨つて建築全體に於て縱線が卓越して目を惹く。窓は尖穹窿にして高く大きく開き、その數も多く、從つて建築の内部は採光明るく、到る所彫刻、粧飾に富み、殊に高く尖つた塔が天に冲し、如何にも當時の理想を表

現して居るやうに見える。ゴシック建築の雄として有名なレーンスの大伽藍は（一二一〇年以後の建築）八十一米突半、ケルン[27]のそれは、（一二四八年以後の建築）一五六米の高さに達した。實にゴシック式は都市の自由と共に、十三世紀における新生活の好標徴である。

ゴシック式建築と相竝び起つた新現象は、大學生活、及び羅馬法律學の研究である。今日の所謂大學（ユニヴァルシテ）は、その遠き淵源としての希臘のアカデミア及びミユゼオン[28]のことは暫らく置き、近世では、十二・十三世紀における伊太利に始つて居る。就中ボロニア大學を最古で最も有名なものとする。これからフランス、イングランドに擴り、巴里、オックスフォード等の大學が早く盛んとなり、ついて十四世紀には獨逸にも及んだ。但し最初の大學は、敎ふるもの、學ぶもの、即ち學問に從事するすべて人々の綜合的組合である。因つて大學の部の分け方は國民別であつた。例へば、パリー大學に於ては[29]フランキ、ノルマンニ、ピカルディ、及びアレマンニの四國民部に分かれた。けれども幾ばくもなく國民別は廢されて、學問の種類によつて分科別となつた。之を諸學の統合（ウニヴェルシタス・リテラールム）といつた、即ち今日の綜合大學の始てある。

學科の內、十三世紀に於て新に起つた學問があつて、最もよく新時代の思潮を標徴して居る。即ち羅馬法（ジュア）である。このものの研究は久しく廢絕して居たが、十二世紀に於て、かのユスチニアヌスの法律類纂が發見され、その研究が起り、就中ボロニア大學に於て盛んとなつた。この大學が世界に名を得たのは、多く此の點による。尙ほ又た、其他の諸大學の盛んとなつたのも、亦たこの新らしい學問の起つたのに因る所多いのである。何んとなれば從來一切を支配した敎會（カンノン・ロー）の法、竝に封建の習慣に對して、新時代の新要求を提起するに最も適當な武器が羅馬法であつたからである。即ちこれによつて、當時の新風潮である君主の中央集權、市民の自主自治、資本經濟の運用が、頗る好都合に運び得たからである。當時の青年は最早や、かの聖アウグスチヌスや、グレゴリー世の時代の如く、唯だ神學や敎會の哲學のみに沒頭しなかつた。彼等の中には、羅馬法を習ふて、君主の官吏や、都市の裁判官や、商工組合（ギルド）の書記（ノタール）となるを希ふもの出て、その數漸く多くなつた。畢竟、こゝに新らしい時代に新らしい出世の道が開拓されたのである。

かくの如く新らしい專門が起つた。後に醫學等の專門學も、また起るのである。かく專門學が重大となるに隨つて、大學の改造がこれと伴ふて進み、上に述べたやうな綜合大學が現はれるに至つたのは、蓋し偶然でない。

尙ほその他の學藝については、詩歌、地理、博物學、なども、こゝに述べねばならぬものがあるけれども、これ等は後に讓ることゝする。要するに、十字軍及びこれにつゞく直接の時代は中古の舊生

活を打破して、新生活を開かんとする過渡の時期である。これを通り過ぎて、然る後に到著すべき彼岸は抑も何か。そは卽ちルネーサンスの現代的生活である。

第十三講　近代國家の起源

51　一般の事情　オスマンリ・トルコの西侵

近代諸國の國家は、英佛といひ獨・伊又はイスパニアといひ、各如何にして起つたかといへば、大體に於て羅馬帝國の跡に作り殘されたる羅馬風ゲルマニ風てふ西歐の世界(第八、九講參照)から分化し來たものてある。何となれば當時この方面の諸民族は未だ截然相分れないて只だ如上の文化的名目て總稱せられ得べき渾然、否な雜然たる世界的社會を成して居たばかりてあるからてある。然らばこのものから近代國家が分化出現するといふことは、卽ち今指摘した尨然たる、社會維持の羈絆となつて居る、一方では羅馬教會の天下一統政治と、他方では封建制度とが破滅することに外ならない。この發展は、西歐の諸民族が十字軍時代に受けたる廣大痛切なる教訓によつて、著しく促進されたのてある。これは世界史上頗る注目に價する。この點に於て、十字軍の感化の如何に重大てあつたかを推知するために、東西歐洲の發展の相違を比較したならば、蓋し思半ばに過ぎるてあらう。見よ、東歐に於ける希臘スラーヴの社會、就中露西亞の文明が、西歐のそれに比して遲々として進歩せず、その開化の頗る澁滯して暗黑なるを免れないのは、抑も何故てあるか。これには固より他に種々の原因もあれ

ども、一方が十字軍の渦中て大に活動したるに反し、他方が之に參加せず卽ち之によつて何等の敎育を受けなかつたことは、東西等しく基督敎國てありながら、兩者の文明の發展に、非常の懸隔を生じた重大な一般原因の一てあるのてある。吾人は世界史の潮流に鑑みてしかく斷定するの外はない。

西歐では、その君主及び政治家は、十字軍時代といふ大いなる經驗に依つて切實に富國强兵の必要を感じ、漸く中央集權策を講ずることゝなり、因て自分の用人（ミニステリアレス）（下級貴族）を股肱とし、この時代に恰も起りつゝある都市の市民の勢力を利用して、敎會、及び封建の弊害を矯正し、而も、かの市民が作りつゝある都市の自由獨立が、時と共に極端に增長する場合には、これをも抑壓するに努めた。これが十四、十五世紀に於ける西歐政治界の大勢てあつた。

この際、この政治運動は國際上から强大な刺戟を受け、且つは自らは中央集權に取つて有力な補助機關を利用して、一層盛んとなつた。それは他てない。東方には、オスマンリ・トルコてふ西歐人に對し、て尤も新しい君主專制の回敎國が起り、著々歐洲を侵略し來り、建國以來一世紀半といふ一四五三年早くもコンスタンチノープルを取つて、十字軍後幾かに復活維持されて居つた希臘人のビザンツ帝國を亡ぼし、爾來自らこゝに都し、餘勢屢々中原を窺ふた。これ、西歐の基督敎世界に於ける將さに起らんとする國家に取りては、非常なる警戒と反省との對象となつたのてある。而して西歐の社會には、

この際、羅馬法律學が復活する、農民が形作つた歩兵軍隊が起る、又た鐵砲火藥の發明がある。これらはいづれも國家運動に取りて偉大なる武器となり得たのてある。

しかし、トルコの事は遺憾ながら省略する。只だ如上の補助機關につきては一言を加へるがよからう。抑も羅馬法なるものは敎會法に眞向から反對する。敎會法は、所詮、神が勝手氣儘に行ふ支配を主張するものてあつて、中古の社會を風靡して居た。羅馬法はかくの如き宗敎の法が市民生活を支配するをその謂はれなしとて之を排斥し、苟も國家たるものが、自ら人民に對して規則正しい法治的政治を行ふべきことを要求し、今後、俗人生活の自由と幸福とを增進するために、立法司法行政を確立すべき法理的思想の根據を國家に供給した。又農民兵は、最初、十四·五世紀に於て、スウィス山中の自由民が自ら步兵として、その地方の封建領主オーストリア＝ハプスブルグ①家の騎士軍に反抗して、自己の獨立を固めたから、これが始りて爾來有名となつたのてある。因みに、ハプスブルグ城はスウィスの獨逸部（卽ち南獨、スワビアの一部分）の北部にある。こゝに起つた大名が南獨逸に擴大し、同時に、ダニューブ中流に於てオーストリア公國及びその屬領をも兼併し、此のオーストリヤ領の方が却つて家領の中心となつて、因つてオーストリア家の名稱が起るのてある。偖、このオーストリアに對抗するスウィス同盟の結束は、實に一三〇九年、叢爾たるスウィス及び外二縣（カントン）（これらを原縣（ウルカントン）②と總

稱する)に始る。これを中堅とし、上述の如く爾來兩世紀に亘つて次第にオーストリア軍を擊退しながら、自らも擴張して行つた。これがスウィス聯邦の建國である。その國民的傳說として知られて居るかの有名なる英雄ウィルヘルム・テル③の話は、正さしく當年のスウィス農民の意氣を示して居るものと言つてよろしい。爾來スウィス步兵の勇名天下に轟いて、諸國から招聘され、傭兵として各國に出稼し、益有名となつた。スウィス人に次いで。イングランドの田舍の鄕士(ヨーメン)も亦た百年戰役に於て、花の如き佛蘭西の騎兵に對抗して武勇を著はして有名となつた。又た獨逸でも、やゝ遲れて十五世紀末、オーストリヤ家の皇帝マキシミリアン一世の時、スウィス步兵に倣ふてランツクネヒト④隊が編制された。いづれも騎士軍に對する有力な對抗機關であつた。騎士軍卽ち封建の戰鬪力が受けた最初の打擊は、實にこのスウィス人を始とする步兵軍から來たのである。故に當時スウィス風といへば何等かの新しい風を意味することゝなつた位である。次に鐵砲の發明があつた。これがため、近代文明のいはゞ怖ろしい魔力の一である火藥が、始めて有功に利用されてその威力發揮の途に上り、先づ當時封建制度の結晶である武士の城廓を砲擊破壞することゝなつた。因みに斷つておく、スウィス山中の人民が自主獨立となつて、その風天下を動かしたといつたからとて、西歐の人民乃至市民の自由が直ちに實現したと思ふのは間違である。一般人民の自由はスウィスを除いてはまだ決して伸張しない、強大な君主が市民及び農民を抑壓するが、到るところの常である、その內、わづかにイングランドとネーデルランド方面には幾分か人民の社會的位置の向上をみたばかりである。

以上は西歐に於ける國家起原に關する一般事情であるが、尙ほ各國によつて特殊の事情がそこに存在して居つた。因て以下節を分つて重要な國々につきて大綱を說くことゝする。只だそれがほんの概要だけに過ぎないのは遺憾である。

52　イタリヤに於ける國家の竝立

イタリヤは、中古の半ばまで、二つの世界的勢力に夾まれて居る。一は獨逸民族が再興したかの神聖羅馬帝國、他は羅馬法皇の敎會政治である。しかし、この皇帝權なるものは、曾て見ておいたやうに、十二・三世紀に於て先づ衰弱し、ついで法皇の威信は十四世紀に於て漸く地に墜ちたのであるから今や半島には、何等の有力なる統一權力がない。そこで、前講に於て述べたやうに、十二・十三の兩世紀ごろから、イタリヤ都市の獨立時代が現はれて來た。そして、各都市には皇帝派對法皇派(ゲルフ)(ギベリン)の黨爭が繰り返され、それに下級市民の權利要求運動が加はつて、とかく社會が動搖しやすく、生民堵に安んじない、そこで各都市に於て中央集權的政治の必要が起つた。この危機に乘じて、玆に一人、若くば少數者が、屢々非常手段を以て政權を奪取獨占して、市民のために善政を布き、若くば少くともし

かく稱する專制政治が現れて來た。かくの如き有力なる執權者をデスポットといふ、猶ほ古代希臘に於けるタイラント（僭主）に相當するものである。かくの如き政治が流行したから、イタリヤの十四・五世紀は、都市獨立時代が實質上一變してデスポット時代となつて居る。隨つて、イタリヤでは、概して是等の個人的勢力の下にある國内の列國竝立の形勢が成立することゝなつた。

かくの如くして起つたイタリヤ國家には、その比較的強勢なるもの、五個國を數へる、ウェニス、フロレンス、ミラノ、羅馬、ナポリこれである。その中、羅馬とは何であるか。それは、十四世紀に於てかの所謂アヴィニョンに於ける法皇の『バビロニア幽閉』の辱をうけた法皇が、十五世紀に入つて再び舊き都に歸つて、中部伊太利に於ける所謂『教會の國』てふ歴史的領土を根據として、その地方に君臨し、宛然一個の政治上君主の如く振舞ひて、自ら樹立して居る國家である。但しさすがに法皇は自分みづから政爭の巷に立つのを避けて、自分の甥なるものを保護扶擁して一家の利益を代表せしむるのが多い、これを甥政策といふ。ともかくこの時代では法皇朝も亦た當時の富國強兵の風潮に染みて、全く現代卽ち俗化したのである。當時これらの列國竝立は、猶ほ古代希臘の都市國家竝立の盛時の如く、國際關係に於ても、將たまた各自の政治及び社會生活に於ても、頗る潑剌に活動する時代を作り出し、現代歐洲列國竝立の先驅てあり、縮圖てあり、將たその模範となつた。當時の風潮は執

權者の專制と、民の平等化とにある。イタリヤではアルプスの北方に於けるが如き階級の差別、身分の高下は少なく、一切市民平等化の傾向がある。國家の形式は多く共和制てある。その絶頂點にひとり執權が居る。この位置に上る者は生れの貴賤嫡庶や、その出所の正閏や、その手段の善惡にかゝはらず、只だ〳〵社會の幸福のために支配すると稱して、國家の權力を掌握し、平和の維持と、實業の繁昌と、學藝の保護とを目的として人民の滿足を買ふた。この際刺殺、毒害等の罪惡は屢々行はれ殆んど尋常茶飯の如くに考へられた。されば執權といへども人望を失へば忽ち遣附けられた。かくの如き暗殺は、時人の眼中では、往々何等の革命ではなく、唯だ執權者の交迭のみてあつて、隨つて市民の社會に何等の變化を起さないのが、その常てあつた。

列國中、最も有名なのは、蓋しフロレンスてあらう。これは、申すまでもなく、イタリヤのルネーサンスの搖籃地たるべき都市國家てある。こゝから儼然として輩出した幾多の人材、例へば、執權てあるメディチ家の天才的人々、竝びにこの派手やかな文化生活にいそしんだ富豪を中心に之を取り卷いた多數の政治家、學者、詩人、美術家の如きは、彼等が作つた幾多の燦然たる文化產物と相俟ちて、最も教訓と趣味とに富んだ歴史を形造り、後世諸國の文化人の視線を惹く焦點となつた。當時のイタリヤの人物といへば、本講の目的とする國家生活に關するもの一二を例示せば、畏るべき辣腕政治家

シーザ・ボルジヤ、炯眼なる政治學者マキヤヴェリの如き、いづれも後世斯道の典型と仰がれて居る。前者は法皇アレクザンダ六世の子て、實に羅馬の甥政策の體現てある、後者はフロレンスの學才、イタリヤ國家思想の權化⑧てある。

この伊太利における生活の內、その知識的、藝術的方面については、私はこれを次講ルネーサンスに於て說き、本節と相照應せしむるつもりてあるから、玆には、これだけにして、更らに吾々の當面の目的を遂ふことゝする。

53　英佛の國家確立の始

フランス王國の遠い起源が、九世紀・十世紀に於けるノルマン侵入時代に在つたことは、既に第九講にこれを述べた。しかし、それが眞に中央集權の緒に着いたのは十三世紀に在る。これには種々の理由がある。その中でも、ノルマンデ公ウィリアム⑨がこのフランスの根據地から出發してイングランドを征服（一〇六六年）し、爾來これを統治して子孫に傳へた、隨つてこれから英佛兩國の間に結ばれて來た複雜な關係が、最も重大てある。何となればノルマンデ公はフランス國王の封建諸侯の一人てあつて同時に上記の如くイングランドの王位に上り、爾來、この關係から、種々、兩國の政治上交涉が起り、加ふるに、十二世紀の後半、卽ち十字軍時代のさ中に、更らにフランスの大大名てあるアンジュー伯⑩プランタジュネット家のヘンリーが、ウィリアムの外孫を以てイングランドの王位を嗣いだから、反對に、イングランド國王は同時に佛蘭西に於てノルマンデやアンジューやその他を合せて實に王國の大半を領する大名となつた。それだから尙ほ更ら局面の紛糾を來したのてあるからてある。かのリチャード「獅心」やジョンはいづれもヘンリの子てある。そこて佛國のカペー王家は、中央集權のために、この强大なる封建臣下、實は半ば外國の君主を窘めんとし、このものは、之に反して反噬を試み、以てフランスに於ける地盤を維持せんとしたのは、自然てある。十三世紀の初、佛蘭西國王フィリップ二世は、その有力なる政策と外交關係の好運とに依つて、始めて如上の領土の大部分を奪還し得た、卽ち前々講の終に指摘しておいたブーヴィーヌの戰（一二一四）は卽ちこの運命の決著點てあつたのてある。隨つてイングランドに於ても「大憲章（マグナ・カルタ）」が成立して自己の國民の權利の濫觴が出來たのてある。

而も兩國の國家的區別は未だ明確てない。そこて、上述の英佛間に蟠つた歷史的係爭を解決すべく、十四・五兩世紀に亘つて、有名な所謂百年戰役（一三三九―一四五三）なるものが戰はれた。戰場は主としてフランス及びその近海にあつた。これによつて兩國は大體に於て現代の姿となつて截然兩分確立した。この大戰役時代の人物の注意として、私は、前期に於ては開戰者國王エドワード三世の皇太子ウェールス公エドワード「黑太子」の目ざましき奮戰に對して、佛蘭西の將軍デュ・ゲクレン（一三八〇

年歿）の活動を指摘し、後期に於てはイングランド王ヘンヲ五世（一四二二歿）の大擧侵入、その跡にすぐ佛蘭西の田舍の賤の伏屋から起つた所謂「オルレアン少女」ジャン・ダーク（一四二九）のけなげな働き振を特記しておく、是等は同戰史に傑出する人物中の花形であつた。

この大戰役後、兩國は今度は更らに各自の內部を掃蕩しなければならなかつた。十五世紀後半イングランドにては、薔薇戰役（一四五五―一四八五）の內亂が戰はれて、チュードル家（一四八五―一六〇三）の專制を產み出した。フランスてはルイ十一世（一四六一―一四八三）の奇異の好運のめぐり合せと黠猾なる政略の斷行と相俟ちて、ヴァロア・オルレアン家の統一政治が現はれた。かくて英國海峽の南北相隔てゝ、各強大なる君主國家が新に樹立した。

54　イスパニア王國の創立

この半島は、八世紀に於てサラセンの鐵騎の侵入したる以來、之に對して、ここに殘つて居た基督敎諸小國の間斷なき、云はゞ、十字軍の活動する舞臺であつたが、かの所謂十字軍そのものの時代に於ては、これ等の小國益々勢を得て著しく回敎徒を驅逐して各々南下膨張し、就中、同時代の末つ方、彼等の一、アラゴン王國は地中海上に雄飛してシチリア島を併せ領した。しかし、各國ともに、內部に君主の薄弱や、豪族の跋扈や、外國關係の不振などの弱點が輻湊して居つて、十五世紀中葉までは決して強大ではなかつた。それが始めて國際界大勢力となるのは十五世紀後半、その內のアラゴンとカスチラとの兩國が、前者のフェルヂナンドと後者のイサベラとの結婚關係によつて、結合してからである。この聯合王國は、やがて、前述のサラセンの殘物であるグラナダ王國を討滅し始めて多年のイスパニア武士の理想を滿たした。時に一四九二年の始て、かく王國の統一が大成したから、その秋にコロンブスの海外十字軍が出發することが出來たのである。

この國の王家早くもオーストリアのハプスブルグ家との結婚關係によつて、一五一六年以後、ハプスブルグ家と化し、一時カール（オーストリアては皇帝カール五世、イスパニアては國王カルロス一世）一人の下にオーストリヤと兼ね治められ、國際間に於て最強大なる勢力を發揮することゝなるべきてある。この國家の特徵は、加特力信仰と、海外十字軍とを國是とし、宗敎査問（インクヴィジション）を手段とする專制君國たるにあるのてある。

55　ドイツの混亂

以上述べた所によつて、十五世紀に於て、西歐にはイスパニア、フランス、及びイングランドてふ三大強國が起つたことが分明する。然らば中歐はどうてあつたか。

こゝては皇帝權が衰弱すると、それに代つて、強大な諸侯、例へばオーストリアのハプスブルグ家

の如きもの、及び廣大な都市同盟、例へばかのハンザの如きものが勃興し、部分々々に於ける階級的活動が盛んとなつた。而して全體を代表すべき獨逸國王兼羅馬皇帝は、選舉權を有して居る一定の有力者（選舉公）（クアフュルスト（エレクトル））[16]によつて選立せらる習慣となり、この選定は昔の如く長期間一個の家に固定したのではない。十三世紀末から十五世紀の中葉まで、しば〳〵その家が代はつた。この頃に至つて始めてオーストリア家に固定し、爾來十九世紀の始めまで、事實上、世襲となつた。しかし、この家と雖も獨逸王國及び帝國の統一君主としては、實力缺乏し、それだけ一層只だ自己の一家であるハプスブルグ一族の利益のみを、これ旨とする、これが當時の風潮であつた。隨つて獨逸は國家として殆んど統一なく雜然たる、はた支離滅裂の混亂狀態にあつた。これを西歐の三大強國に比べると、その民族は東北はバルト海の東岸から、南はイタリヤの境まで擴つて住み、頗る廣大にして、部族多數、人口衆多なる團體であるが、國民及び國家としての勢力は極めて微弱であつた。それだから羅馬法皇が教會てふ自己の手足を伸して、宗教稅を取りたて、又は免罪符（インダルセンス）[17]を民間に賣り付けて、以て自己の收入を謀るには、眞に恰好な財源地であつた。

56 大勢 イタリヤ戰役

要するに、十四、十五の兩世紀は教會及び封建を中心とする社會組織が漸く崩壞して、廣かれ狹かれ、或る範圍に於て國家的統一運動の流行する時代であつた。現代國家の模範は先づ伊太利諸國に於て立てられ、次いでその強大なもの〳〵基礎は十五世紀に至つて西歐の三大國に於て建設された。ドイツは尙ほ宗教の諸侯、騎士、都市の諸階級が割據する選舉王國であつて、國民及び國家としては最も進歩に遲れた。かゝる西歐の局面に於て、最も進歩し、最も富有なるイタリヤは國際上最も危險な位置にあつた。卽ち半島内の列國が相對峙獨立して居る宛ら巧妙なるからくり裝置の如き形勢は長く保持さるべくもなかつた。とりわけ、諸國の軋轢と各國内部の黨爭とは強大なる外國の容喙を招き易き有樣にあつて、而して恰も十五世紀末には、繰り返しいふが如く、正しくかくの如き三大強國が成立した。その内、フランス王國は、新に統一充實した國力を提げて、眞先に伊太利干渉の機會を捉へて、十五世紀末から大兵を派遣したから、イスパニア王國も亦た之に劣らじと半島に打ち入つた、ついで地理上最も緣の遠いイングランド王國すら、この政局に關係するに至つた。而してこのイスパニアはやがてオーストリアと聯合することゝなり、こゝにイスパニア＝ハプスブルグてふ強大な勢力は、堅實なるフランス王國と、互に天下の覇を爭つた。この世界的大係爭の動機、誘惑、目的、戰場は主としてアルプス山南、伊太利に在つた。因つてこの半世紀をイタリヤ戰役（一四九五―一五四四）の時代と云ふのである。その結果、幾多の變化あつたに拘はらず、遂にイスパニア＝ハプスブルグ家の勝利に

歸した。この發展は、一面より見れば、イスパニアが概して法皇と提携して、半島を自由自在に處分したことてあるといへる。法皇の側にあつても、この提携を利益とする深き理由があつた、之は次々講てゐのづから分明する。とにかく、かくの如くして、イタリヤ列國は全然外國及び敎會の支配に歸した。今後十九世紀に於ける國民統一に至るまて約三百年間、イタリヤは國民的國家としては、殆んど全く無勢力てあるといふ運命を有つて居る。されど、吾々はさしあたりこの古典傳來の國と世界の文化とのために、その千古の誇てある所謂ルネーサンスの舞臺へと急ぎ、暫らく之を眺めねばならぬ。

第十四講　學藝復興（ルネーサンス）

57　ルネーサンスの意義、その起原

ルネーサンスの語義は只だ再生といふことに過ぎない。しかし、その意味する所は學問の復活てある、卽ち廢絕した古の學問が再び蘇生したと云ふにある。換言すれば、中古末から近古にかけて、顯著となつた學問及び藝術の隆盛を指すのを通例とする。

更らに一歩を進めて、今日の世界史的觀照の見地に立つと、ルネーサンスは單に學藝の再生に止らず、同時代に之と平行して現はれた國民生活の勃興、竝にその環境の擴大をも含むものてあつて、これら一切の諸文化現象こそルネーサンスと總稱さるべきてある。『イタリヤに於けるルネーサンス文化』の著者ブルツクハルト②の高唱にかゝる、ルネーサンスは卽ち人間と世界との發見なりと云ふことは、卽ちこれてある。

蓋し中古の基督敎の思想によつて、かの古代希臘羅馬の學藝は神を瀆し罪惡を誘ふものとして排斥されて、久しく其の形を潛めて居た。然るにこゝに中古の末期十字軍以後、前々講に述べておいた如く、南歐における市民（ブルジョワ）及び人心勃興の機運が熟し、基督敎會及びスコラ派哲學に對照して、古代學藝の研

究、並にこれに伴つて起つた從來よりも『より多く人生的（フマニオラ）なる事物を』③と云ふ思想が頭を擡げて來た。

最初、古代學藝の中、先登第一をなしたものは、勿論、前々講に述べた通り、新時代に伴ふて復活したる羅馬法律學の知識である。この研究は、自然、拉典文學、拉典詩歌の研究を喚起した。これがルネーサンスの濫觴である。換言すれば、人間の個性若くばその精神の解放の始めであり、朧氣ながら現代人の目ざめてある。この新運動によつて人間の生活が單に敎會及びこれに伴ふた窮屈な社會のみに限らず、他に、より自由な、より人間らしい樂むべき社會のあることが發見され、證明され、玩味されやうとした。古の學藝及び生活がそのまゝ復活蘇生して再現したばかりでなく、その際、當時の先覺者に研究されて、現代に對する典型となつて、新しい學藝と生活とを生み出すよすがともなつたのである。

故にルネーサンスは狹義に於ては古の學藝の復活であるけれども、廣義に於ては、この刺戟によつて促された個人の自覺及びその精神的天地、並に空間的世界の擴大することである。隨つて前講『近代國家の起原』も、次講に說かんとする敎會改革や、世界の擴大なども、廣義に於けるルネーサンスの內に入るべきである。本講の目的は、一切のルネーサンスを一擧に說くことは出來ないから、暫く廣義のルネーサンスを背景として、主として狹義のルネーサンスのみを明かにしやうとするのである。

偖て、ルネーサンスの起原は、約一三〇〇年頃、卽ち十字軍の影響が十分に現はれた頃のイタリヤ社會にあつた。その搖籃の地は、既に觸れておいた通り、當時の都市生活の中心であつたフロレンスにあつたこと勿論である。

こゝに世界人ダンテ(ダンテ)④（一三二一歿）が現はれて、ルネーサンス先登第一を劃したことは、殆んど詳說を要すまい。只だ一言の注意を挿まば、それで十分であろう。卽ち、彼はフロレンス市民中の普通の名族の出身である。少壯にして一旦市の重職に列したが、フロレンス特有の黨爭の結果、革命破裂し自分も放逐されて晩年異鄕にさすろふこと廿年、具さに辛苦を嘗めて、終にラヴェンナに客死した。この亡命中、彼の生命を不朽ならしめた傑作がある。第一は勿論『神曲（ディヴィナ・コメディア）』である。⑤これは、フロレンスの國土トスカナ⑥地方に行はれた人民語を用ゐて書かれたる最初のイタリヤ國民文學である。これによつてダンテは最初のイタリヤ國民的詩人たる名譽を有し、加之、歐洲近代國語で書かれた最初の優秀なる文學を提供したのである。⑦この詩の結構が羅馬帝國の詩人ヴィルギリウスのエネアッドに則つたものであつて、その內容が加特力敎會の神學思想であること、亦た記憶すべきである。『神曲』の結構によれば、詩人はヴィルギリウスに導かれて黃泉（インフェルノ）に下つて、これを巡視し、次に（淸淨）（プルガトリオ）の山を登り、更らに天堂（パラヂイソ）に達した、これら巡歷の間に、幾多の古今の人物を拉し來つて、各自の功罪に從ひて、如上

の三界、各界九層すべて二十七層の境地のうちて、その適當な場所に排置した。畢竟、彼は自己の信仰が指命する宗教的觀照によつて、世界に對して一種の最後の裁判を下したとも、將た歷史の哲學を立てたともいへる。この點において、ダンテは加特力神學者てある。次に彼は『君主國(モナルキア)⑧について』と題する論文を著した。これは當時一般の學術語てある拉典の散文を以て書かれた。論文の主旨は、古の羅馬帝國の光榮に憧れ、これを恢復して、恰も黨爭に惱み分裂に陷つて居た伊太利を救ひ、之に平和統一を與へやうとするに在つた。思ふに、この際著者が、恰もイタリヤに南下して所謂『羅馬行(レーメルファーゲ)』を企てつゝあつた獨逸皇帝ヘンリ七世に望をかけて居つたと、殆んど一切の蓋然を以て推斷すべき理由がある。尙ほこの論文に於て、法皇については、ダンテはその神聖なる職務を尙んだが、その人を敬はなかつた、隨つて彼の考へた皇帝は只だ神のみに對して責任を負ふべきものとなつて居る。以上はダンテの重要なる著作の要點を述べたのてある。これによつて之を見れば、ダンテは正しく新舊兩世界に跨つて居ることが推知される。卽ち加特力思想を祖述して居るのは、これ舊傾向てある、國民の言語思想を重んじ、その國家の統一を望んだのは新傾向てある。

吾々はこのダンテを以て中古生活から現代に移る境目に立つものと考へ、且つ時代の趨勢てある歐洲諸國民の分化てふ新現象の最初の代表的詩人と見なして可しい。

イタリヤのルネーサンスの時期は大體三つに分つて之を觀ることが便利適切てある。第一期は約一三〇〇年から一四〇〇年までの間卽ち十四世紀てある。第二期は約一四〇〇年から一四五〇年まて、卽ち十五世紀の前半まてゝある。第三期は一四五〇年から一五五〇年まて卽ち十五世紀の後半から十六世紀の前半まてゝある。

第一期

ダンテから一世代遲れて、その故郷フロレンスから二大詩人が現はれた。ペトラルカ(一三七四歿)と、ボカチオ⑨(一三七五歿)これてある。ペトラルカは平生多くはアヴィニョン法皇朝に出入しその附近の山紫水明なる『閉ざしたる谿(ヴォークリューズ)⑩』に隱棲し、またひろく諸方を徧歷し、而もイタリヤを思ふた愛國的詩人てあつた。彼の盛名江湖に馳せ、羅馬と巴里とナポリとから同時に詩人の月桂冠を贈らばやとの招待を受けたが、彼は羅馬のものを受諾し、古羅馬帝國の思出深いカピトルの岡の上に於て羅馬市民から戴冠せられて自ら誇りとした(一三四一)。彼は古羅馬時代の光榮にあこがれ古跡の調査、古書古物の蒐集に力め、所謂人生的(フマニオーラ)なる事物の增進に尤も功があつた。法皇の『バビロニヤ幽囚⑪』と皇帝のダニューブ河畔の窟居とに憤激して、羅馬の市井の間から、コラ・ヂ・リエンチが現はれたのはこの頃てあつ

た。この壯漢は一旦推されて羅馬の護民職（トリビューン・オブ・ピープル）に任じ、古の羅馬人の國の恢復を夢みた。この際ペトラルカはアヴィニョンの閑居からしきりに文通して、このローマンヂックな奇才を鼓舞し、その回天事業を後援した。但しリエンチは實際的技倆を缺き早く失敗した。が、亦た以て、當時古典に對する復興熱の如何に熾烈なるかゝ推知される。

他の一人ボカチオはフロレンスの商家の出、學を好みペトラルカに師事し且つその友人となつた。彼はダンテの最初の註解說明者であるが、それよりも彼の名を不朽ならしめたのは、その著『十日物語（デカメロン）』[12]である。この話の書き始めは、一三四七年の黑死病流行の機會から起して居る。この時フロレンスの紳士淑女合せて十名から成る仲間は田舍の別莊に避難し、その徒然を慰むべく、一日一人一話づゝ十日間物語り合ふのである。それで合計百物語が成つた。物語の內容は、當時の僧尼、王侯、騎士、市民など有りとあらゆる階級の老若男女を捉へて題目とし、これらに關する情事逸話を含んで居る。實に『十日物語』はルネーサンス初期における社會の鏡といへる。十九世紀の或る文學者はダンテの『神曲（デヴィーナコメディア）』に對照して、十日物語を散文ながら『人曲（ヒューマンコメディ）』[13]と綽名したのは誠に至言である。

英國文學の始祖チョーサーの『カンタベリ物語』[14]はこれと關係があつたと信ぜられる。何んとなればチョーサーは當時百年戰爭の初期、財政上の外交用務で二回ばかり伊太利の銀行家の間へ派遣されたことがあつて、而して彼の著『カンタベリ物語』は『十日物語』と異曲同工に出來て居るからである。因みに、ボカチオはフロレンス、チョーサーはロンドンの各町人の出身で、それ〴〵國民文學の重要人物となつたことは、時代の標徴といはなければならぬ。

要するにダンテ乃至ボカチオも、又たチョーサーも各自國民生活の勃興が生み出した發現である。是等の天才が國民生活から織り出した重要產物は、伊太利語、英語てふ近代語及びその文學に外ならぬのである。

以上をイタリヤのルネーサンスの第一期とする。この期に於ける古典研究は主として拉典文學の古典の研究であつた。希臘古典の原本は未だ十分に窺はれなかつた。

第二期

約一四〇〇年頃からこの古典研究は希臘の原本に向つた、これが愈々第二期に入つた標徴である。何を以て然か云ふ。そはこゝに新らしい刺戟が起つて、イタリヤの學風を一變せしめたからである。即ち、十四世紀におけるオスマンリ・トルコのビザンツ帝國侵略の連續、就中、一三九六年、ニコポリス[15]に於ける西方歐洲諸國の聯合軍の敗戰の結果、希臘使節の援助を西方に求むるために、又はその他の人士が避難若くば求職のために、イタリヤに來住するものが漸く多くなつた。これらの人物の中

には幾多の希臘古典學者があつた。彼等は或はフロレンスの豪族メヂチ⑮家に保護され、或は羅馬法皇の朝廷に出入し、或は十五世紀前半中、イタリヤ竝にドイツに於て屢々開かれた宗教會議に出席し、希臘語及びその學藝を敎へた。かゝる刺戟の下に、前述の如く、既に人生運動に從事する西方人士は益々斯道に熱中するに至つた。

このビザンツ人の西遊の有樣は、猶ほ古代希臘の世界的文明時代に於て、希臘人が爭ふて羅馬社會に向ふて趨つたのに似て居る。彼等の中には、實にプラトーンの唯心論を敎へたものもあつた。これ從來拉典譯を通じて、アリストテレスの思想のみを宗としたる西方學者に取りては、一個の驚異であり、一個の天啓てあつた。これらのビザンツ人の刺戟によつて、イタリヤの學風は始めて頓みに古典の全部を受け、而もその根本に遡つて深刻な批評的態度を取るに至つた。第九講(34)にのべたイシドール法令集が僞作であるとの證明は、卽ち始めて、この時期に出來たのである。法皇の祕書官ラウレンチウス・ヴァラ⑯(一四五七年歿)の『コンスタンチンの寄進』てふ論文が、卽ちそれてある。これ全く新に起つた新しい學風の新發見に外ならぬのである。

この新風潮の勃興について、吾々はフロレンスの執權者たるメヂチ家の功勞を一言せねばならぬ。これは申すまでもなく十三世紀の都市勃興時代に於て商業兼戰爭を以て起つた資本家にして豪族であ

る。爾來この家から屢々市の重職を出した。前述のルネーサンスが第二期に入るといふ文化上の危機に際し、この家の代表者コシモ・デイ・メヂチ⑰(一三八九―一四六四)は人民派の首領として、遂に一人て市の全權を掌握するに至つた。こゝにフロレンスは名は共和制てあるが、實はメヂチ家を戴くメヂチ派の利害を標準とする一種の專制君主國となつたのてある。コシモはフロレンスを盛んにすることに努力し『國の父(パーテル・パトリエ)』と呼ばれた。彼れが學藝の保護者として努力した主なる事業は次の如くてある。(1)ビザンツ學者を保護し、プラトーのアカデミアをフロレンスに於て再興したこと。この時、ビザンツの老儒、スパルタ出身のジョルヂ・ゼミストス・プレトン⑱こゝに招聘されプラトー哲學を根據とし、新プラトニズムと基督敎とを合一すべく、唯心論を高唱した。これ、上に說明した意味に於て、ルネーサンス史上頗る重大な事件てある。(2)市の建築及び美術を盛んにしたことてある。

最後の點に於てはコシモの時恰もフロレンスに三人の天才が現はれた。卽ち一は建築において、プルネレスコ⑲(一三七七―一四四五)てある。この人はフロレンスの大伽籃(ドム)の穹窿(クポラ)塔を始めとし、幾多の有名な建築を殘した。この時、建築の樣式は、所謂ルネーサンス式の初期に屬して居る。他の方面には彫刻及び鑄造に於て、ギベルティ⑳(一三七八―一四五五)がある。この人は伽籃の向側にある洗禮堂の門扉を造つて有名てある。この扉は靑銅の鑄造て、聖書の歷史を表はしてある。その入神の技と、

卓拔した意匠とは、後、ミケランジェロをして、『眞に天國の入口に價す』と嘆嘆せしめたものである。次には彫刻の大家ドナテロがある。その彫像浮彫の高雅、至醇なる、實にルネーサンス古典の中堅と稱せられて居る。その外に、コシモの時、穩健清和なる宗教畫を以て有名なる僧アンゼリコ（一四五五歿）がある。その弟子ボッチチェリ（一五一〇歿）また一家を開いて居る。また同時に、彫刻家ではデルラ・ロッビヤ（一四八六死）があつて、ドナテロと等しく有名である。しかし後の二者は、寧ろルネーサンスの第三期に入るべきであらう。[21]

第三期

こゝに十五世紀の半葉から、伊太利のルネーサンスの第三期即ちその最隆盛期に入つた。これ實に、學藝史上、所謂レロンツォ・ディ・メヂチ[22]の政治（一四六九―九二）の時代から、所謂レオ十世の治世（一五一三―二一）の時代に至る間を中心として、種々の花やかな文化現象を含める重大時期である。

抑もロレンツォはコシモの孫に當る人てある。彼は一個の政治家て詩人、且つ人生派（ヒューマニスト）てあつた。政治家としては、自ら伊太利の中心都府に國して樽俎折衝、よく伊太利諸列國の均衡を維持し、その平和を確保した。かの前講の終に指摘したるが如く、フランス國王の侵入を始めとし、政治上所謂イタリヤ戰役が破裂したのは、實にこの半嶋の均勢維持の政治家が死んてからのことてあつた。彼は人生（フマニスム）

派として、平和繁昌のさ中に幾多の天才を集めて、ひたすら學藝の進歩向上に努めた。次にレオ十世は彼の子てある。メヂチ家から入つて聖ペテロの椅子に登つた。抑も當時十五世紀の中葉から、十六世紀の中頃までの法皇は、概して、現代的、世俗的君主てあつた。彼等は同時に學藝の鑑賞家て、その保護者てあつた。時としては彼等自らが人生派てあつたと云へる。彼等は羅馬を以てフロレンスのメヂチ家と競爭し、政治に、學問に、詩歌に、殊に、美術建築において、これを凌がんと欲し、十五世紀中葉以來、急に幾多の人材を朝廷に集め、フロレンスに對抗して、羅馬を第二のイタリヤ文化の中心に高めつゝあつた。例へばニコラウス五世（一四四七―一四五五）は實にヴァチカノ[23]圖書館の創立者と云はれて居る、又たシッキストス四世（一四七一―一四八四）は有名なるシッキストス禮拜堂の建築者てある。更らにジュリオ二世[24]（一五〇三―一五一三）は今日の聖ペテロ大伽籃建築の起工者てある。このジュリオの後をうけて法皇となつたのが、卽ちレオ十世てある。彼はメヂチ家の出身てあるが故に、彼の一身及び一代に於て、さながら羅馬とフロレンスとが結合され、法皇の傳統とメヂチ家の流れとが統一されたかの樣に見える。果して彼の治世十年間は『レオ十世の御代』とて、實に法皇の人生派（フマニスム）的輝きの頂天を作つたのてある。

試みにロレンツォからレオまでの時代を中心として、當時に現はれた學藝の天才の内から、その最も有名なるものだけを指摘して見やう、然らば伊太利ルネーサンスの第三期、卽ちその最高潮期の隆盛の狀おのづから髣髴するに足るものがあらう。

レオナルド・ダ・ヴィンチ㉕（一四五二―一五一九）

彼は多方面の天才であつて、殆んど一切の學藝に通達し、いづれにおいても秀でて居た。彼は、普通、畫家として有名で、かの『基督の最後の晩餐』の大幅を以て世界の人目の仰望を惹いて居る。卽ち、彼は、丹青の業に於て、次に述べるラファエルとミケルアンゼロと相竝びて、イタリヤの三大明星と稱せらる。けれども、その外に、詩人でもあり、理學者でもあり、又た工學者であつて、築城家をも兼ね、いづれに於ても卓越して居る。彼は實に飛行機を設計した。つまり、彼は大なる時代には稀に出現する多方面の天才で、伊太利ルネーサンスの生んだ人物の中で傑出して居る。蓋し、彼は一切の知識に通曉する博學の天才としては、アレクサンドリア時代のエラトステーネス（三講8）にも比すべく、多方面の人生運動に參加、貢獻したる偉材としては㉖ウイルヘルム・フォン・フンボールトとも較べ得べきである。

ラファエル㉗（一四八三―一五二〇）

彼は少壯にして早くも大名を成した天才畫家である。年僅かに三十七にして盛名を極めて沒した。その手腕早く一世を壓し、就中、ジュリオ二世によりてローマに召されて羅馬に聘せられ、ミケランジェロと競爭して、ヴァチカーノの宮殿を飾つたことは、藝苑に於ける不朽の事蹟として特筆に價する。その他、彼の驚くべき多數の傑作につきては、一々擧げることは勿論、特に取り出すことも出來ない。

ミケランジェロ㉘（一四七五―一五六四）

殆んど一世紀に近い長壽を保つた藝術家である。彫刻の外に建築繪畫にも秀でて居た。彼の彫刻は放膽、豪宕、雄渾、氣魄を以て鳴り、繪畫も亦た之に準ずる。その作品は甚だ多い。ヴァチカーノのシキストス堂（チャペル）の大壁畫、フロレンスに於けるメディチ家の陵墓の彫像の如きいづれも大作中の㉙雄なるものである。ジュリオ二世が聖ペテロの大伽藍建立に著手したとき、初め、建築家ブラマンテをして設計せしめた。ブラマンテ（一四四四―一五一四）はイタリヤのルネーサンス建築家の最大代表者であつた。この人の設計後間もなく死んだ後で、ミケランジェロはその跡を引きうけて工事を董督し、原設計に且つ據り且つこれを改善し、殊にこの大建築の中心たる大穹窿（ドーム）塔の架築に努力し、全建築の大成に向はしめたのである。

アリオスト㉚（一五三三年歿）

この詩人はその生涯をフェラーラ(31)に送りこゝて死んだ。フェラーラは北伊太利の一市で、ルネーサンス時代には、エステ(32)家の支配の下にあつて學藝の一中心をなした。アリオストはその君主アルフォンゾ(33)一世（一五〇五―一五三四）の保護をうけ、幾多の詩歌、戯曲を作つた。就中『オルランド・フウリオソ』(34)が尤も知られて居る。その詩才はペトラルカの再來と稱せられて居る。

ティチアン(35)（一五七六年歿）

北方イタリヤの人、その地方の有力者と關係あり、就中、既記のフェラーラ侯にも知らる。彼はヴェネチヤ派繪畫の巨擘にして同畫風を完成した。この派は感覺的生活を精神化して描出するを主義とし、それには極めて豊富なる色彩を用ゐて居る。ティチアンの傑作は、マリヤ昇天、聖母等の基督敎に關するもの、希臘羅馬の神話に關するもの、即ち、宗敎畫に多い。その外、多數の有名なる肖像畫を殘して居る。その內に、カール五世、フィリップ二世を始め、同時代の有名なる男女人物がある。それは主として、彼がハプスブル家の帝室畫家として用ゐられた點から來て居る。

コレッジョ(36)（一五三四年歿）

これも亦た北方イタリヤの人、即ちコレッジョに生る、フェラーラの藝術界に屬し、レオナルド・ヴインチの畫風を受け、ラフェールの如く中年にして歿したけれども、早く大名を成した。尤も宗敎畫が多い。畫中人物の風貌の愛らしき、恰好の美はしき、よく觀者を魅するに足り、その色調の融化して透徹せる、殊に明朗なる陰影に秀でたる點に於て有名である。

マキアヴェリ（一五二七年歿）

これは、前講イタリヤ國家竝立の條に於て既に指名したことのあるフロレンスの政治學者で、實は又た歷史家である。彼は初め、メヂチ家の一時亡命中、フロレンス共和國の政治外交に參與して居た。晩年イタリヤ戰役の最中、その多年の經驗と豊富なる學識とによつて『君主論』(37)を著はし、時代の政治上理想を描いた。この論文の直接の目的は政治上道德ではない。苟も專制支配者たるものが、國家樹立に成功しやうと思ふならば、如何なる術策が最も必要であるかを學術的に精確に描出すのにある。即ち實際ルネーサンスの最高潮期におけるイタリヤ政治家が信奉する政治主義、及びこれに據つて行つた政治手段を、深刻に、且つ最も明瞭大膽に言ひ現はした論文である。彼の屈竟の目的は、イタリヤに一大專制君主が現はれて、外國人を放逐して國民の統一を恢復するにあつたのである。この理想の實現は固より一論文のよくする所でなかつた。併しこの學術的論文によつて、凡そ目的のためには手段を選ばない政治主義をマキアヴェリズムと云ふことは、こゝに始まり、その同時代及び後世に及ぼした感化は頗る偉大てある。

以上の人物が代表する伊太利ルネーサンスの最高期は、その先驅期と共に文明史上に卓越する幾多貴重な文化遺産を殘した。このルネーサンスは、深遠なる哲理よりも、情味ある人生的精神と、花やかな藝術とに於て秀でたものである。この意味においてイタリヤのルネーサンスは、現代の思想家、歷史家、藝術家の隨喜渴仰禁じ得ない所である。今日アペナイン半嶋の國土が全世界の巡禮を惹きつけて一種の精神的文化の靈場となつて居るのは、蓋し偶然でないのである。

然らばかくの如く豊かに榮え、かくの如く意味ふかきイタリヤのルネーサンスは、十六世紀の中葉以後、何故に凋落に向ひたるか、といふ疑問が起らざるを得ない。若しこれを一言に答ふるを許されるならば、それは、當時敎會改革の反動によるといふべきである。卽ち法皇の權力、及び敎會の勢力が復興し、之と密接に提携して、加特力イスパニア王國が政治上抑壓を加へ、一方ではルネーサンスの希臘古典的、個性的方面を敎會に利用して、信者の耳目に訴へて人心の感情を滿足さすことに重きを措いた結果である、といはなければならぬ。見よ、十六世紀の後半には敎會の詩人や、宗敎の藝術家が輩出し、就中、詩人タッソー（一五九五歿）音樂家パレストリナ（一五九四歿）の如きは、いづれも敎會藝術を以てその名を天下に鳴らしたけれども、當時理性界の先覺者たるブルノー[40]（一六〇〇年歿）、ガリレオ（一六四二年歿）は各自の格物窮理の學風そのも

のゝために敎會から迫害せられ、自由、清新、純理、批評の風潮は頓みに衰殘した。これがアルプス山南のルネーサンスのカタストロフであつた。

けれども、イタリヤのルネーサンス、及び人生學派（ヒューマニズム）の感化は夙にアルプスの山脈を越えて北方の世界を風靡し、そこに既に十分の發展が進行して居つた。さうしてその餘波の及ぶところは頗る廣く且つ久しきに亘つて榮え、西歐及び北歐の敎化を開發した。

59　伊太利以外に於けるルネーサンス

イタリヤの人生學派（ヒューマニズム）の傳播につきては、かの十五世紀前半「宗敎會議」時代の會議がしばゝ南方ドイツに開かれたことが與つて力あることは勿論である。しかし、これと相俟つてドイツに於て既に有力な文化上の補助手段が發明されて居る。それは麻紙と印刷術のそれである。いづれも十五世紀の發明であつた。活字はマイシッの人ヨハーン・グーテンベルグ[41]がこれを發明し、早く諸方に傳はつたことはいふまでもない。かくて世間の典籍蒐集熱及び知識慾の高まりと相俟つて、尙も知得すべく、報道すべく、宣傳すべきものは、從來の根氣を要する謄寫の代りに、新しい黑白の術によつて迅速に比較的廉價に頒布された。隨つて書籍の賣買も亦た盛んとなつて、ヴェネチアの如きは當時の書籍取引の中心となつた。

ドイツでは、南ドイツに於て學藝が最も早く盛んとなつた、これがその伊太利との交通の頻繁に負ふ所大なるは言を俟たない。この文運はニュルンベルグ、アウグスブルグ、さてはストラスブルグの諸市がこれを代表する。當時の諺に『ニュルンベルグ、アウグスブルグ人の機智（ウィット）、ストラスブルグ人の大砲（ゲシュッツ）、ヴェネチアの權力（マハト）、鬼神も三舎を避く』[42]とあるが、この語ささしく南方ドイツからイタリヤへかけての文化圏の繁榮を標徴して居るといふべきである。

又た十五世紀はドイツ諸大學創立の時代といつてよろしい。その有名なものから擧げると、ハイデルベルグ（一三八六）、ライプチッヒ（一四〇九）、ウィッテンベルグ（一五〇二）の諸大學がそれ〳〵設けられた。その他、當時一四五六年から七七年までに創立された七大學があるが、その中グライフスワルド[43]が下ドイツにあるばかりて他は悉く上ドイツに在る、卽ち當時のドイツ文化が南方から勃興したことをトすべきてある。

こゝに於て獨逸の人生學派が儼然として起つて來た。その內、古典運動の先登第一は、南ドイツ人ロイヒリン[44]（一五二二年歿）てある。彼は古代希臘の歷史家ツキディデスを飜譯した。イタリヤに在つた希臘の亡命客の一人は、これを聞いて歡喜禁ぜず、『希臘がアルプスを越えたり』と讃歎した。後ルテルの片腕となつた年若き學才にして早く『グルマニヤの師傅（プレッケプテル）』と仰がるべきメランヒトン[45]は卽ちこのロイヒリンの親族て且つその弟子てあつた。

ロイヒリンと僅か後れて、同時代にエラスムス（一五三六歿）と、コペルニクス[46]とがある。この內最も時代に影響を及ぼしたのはエラズムス[47]てある。彼はもとロテルダムに生れたドイツ人であるが、歐洲諸國を歷遊して世界的學者となつた。晩年居をスウィスのバーゼル[48]にトし天下の師傅と仰がれた。彼は原始基督教時代の幾多の敎父（ファザー）の書き殘した原本を研究し、これに適切斬新なる註解を加へ、羅馬敎會の從來用ゐて居る人民用（ヴルガータ）聖書の誤譯を指摘し、隨つて同敎會の誤解、迷信、弊害の生ずる所以を曝露した。彼はかくの如き學問上の功勞に於て、十八世紀の知識運動たる啓蒙時代の佛蘭西學者ヴォルテールに比らべられて居る、眞に然かあるべきことてある。

この際、コペルニクスが天地の關係を觀測研究して從來敎會が敎へた地球中心說を打破したのは、これ亦た、コロンブスの新大陸發見や、かのヴァルラのイシドール法令文書の僞作證明などと相俟つて、敎會の思想を打破して、世人の人生觀竝びに世界觀に多大の光明を與へたに違ひない。

イングランドに於ては、既にウィックリフ（一三八四歿）やチョーサー（一四〇〇歿）が出たことを注意して置いた。今、エラスムスと同時代に、彼のイングランド滯在中、友として善かつたトーマス・モア[49]（一五三五歿）がある。これは有名なる社會小說『無何有鄕（ユートピヤ）』の著者てある。『無何有鄕』はアメリゴ・

ヴェスプッチのアメリカ發見の航海に參加したる一水夫がその時漂著發見したユートピヤ嶋の實見談である。この理想國の新しい完全な社會が巧みに描かれて、イギリスのそれに對照諷刺されて居る。この文運の傾向は十六世紀後半に入つて所謂エリザベタ朝時代の學藝となり、その中から、戲曲作家シェークスピア（一六一六歿）哲學者フランシス・ベーコン[50]（一六二六歿）てふ二大天才を出すに至つたのである。

尙ほ、南方ドイツでは畫家としてデューレルとホルバイン[51]父子とが出た。デューレルの天才はニュルンベルグ市の誇であり、少ホルバインはロンドンに渡り、その王室の保護をうけた、いづれも世界的名聲を博して居る。

フランスではラブレー[52]（一五五三歿）出て諷刺文學を以て有名である。イスパニアでは、シェクスピアと同時代に、ローマンスの典型『ドン・キホーテ物語』を以て名高い小說家セルヴァンテス（一六一六歿）が出た。その後にはムリリョ、（一六八二歿）ヴェラスケス[53]（一六六〇歿）の二大畫家が現はれて各異彩を放つた。ポルトガルには數奇の武士、不遇の詩人カモエンス（一五七九歿）が現はれ、自ら東洋にさすらひて、遂に「ポルトガル人」の題下に、ヴアスコ・デ・ガマの東征を中心とする國民的史詩を詠發した。ネーデルランドには哲學者スピノーザ等の學者の外に、美術に於ては、ルーベンス（一六四〇歿）、ヴァンダイク（一六四一歿）、レンブラント[54]（一六六九歿）の三名家があらはれた。これ等諸國の天才は、或る一般的意味に於ては、いづれも伊太利ルネーサンスの餘光であると謂つても差支なからう。

60　ルネーサンスの影響

以上述べた所によつて、古典（クラシクス）を標準として中世を打破し、現代を創造することが、これ、ルネーサンスの目的であり、努力であり、理想であつたことが分明する。このものは、中世を支配したるアリストテレスの學說のみに滿足せずしてこゝにプラトーンの唯心論を輸入し、スコラ派哲學の代りに人生派（ユマニスム）主義を主張し、法皇の天下一統政治を制して國民の敎會の實現を希ひ、僧侶や律僧の卓越する流風を却けて俗人（ライクス）、市民（ブルジョア）の優勝する思想を取り、敎會に對しては國家の獨立を唱へ、建築には、宗敎建築の理想たるゴシック式の代りに宗俗すべてに住適するルネーサンス式を創作して來た。げにこの新樣の建築は、啻に敎會のみならず、君主の宮殿にも都市の議事堂にも、市民の邸宅にも、いづれにも竝び用ひられ、まさしく新しい時代の新しい生活に適合するものであつた。

拉典語は最早唯一の有力な言語でなくなり、その代りに各國の現代的國語が漸く重きを成して、或は說敎にも文章にも用ひられるやうになつた。

これに連關して、最も廣く下層階級に至るまでの天下の人心を動かしたものは、この頃勃興した通俗文學である。第一に聖書の各國語の飜譯が始つた。即ち、早くは英國でその教會改革唱道者ウィクリフ（一三八一歿）、後には獨逸でその「教會改革（リフォルマーション）」の唱首たるルテルは各それてある。次に聖書の飜譯よりも一層より通俗的にして痛切なものは、いふまでもなく時事問題を諷した寓意小說や平易適切な論文の流行てある。『狐王物語』、『馬鹿鑑』の如きこれてある。況んや一代の博學鴻儒も尙ほ筆を諷刺文學に染めて居る。即ち、既說のモーアの『無何有鄉』と相竝びて、かのエラスムスは『馬鹿の讃（エンコミウム・モリエ）』を著はし、上は法皇を始め、一切の階級の生活を素破抜きすべてが「愚（モリア）」の信者てある、愚にあらずんば何人も幸福なる能はずと皮肉つた。これらの二書はいづれも諷刺文學の上乘てある。是等の二つのものは曾に當時代に對する影響が極めて大にして、思想界の革新、就中「教會改革（リフォルマーション）」に殆んど直接の威力を有つて居つたのみてない、實に後世のこの種の文學の典型に屬する。

最後に、本講ルネーサンスに於て述べた所を簡單に約言すれば、次の如くに云へる。ルネーサンスが起した人生派（フマニスム）運動は、從來人生の一部、即ち教會の支配に偏して居た窮窟にして束縛された生活を改良して、人生の全部、即ち一切古來の文化遺產を取り出し、これを模範とし、これを利用し、これを樂しみ、時代の要求、個人の理性に應じて一個の新らしい文化を創造し出すのにあつた。即ち、人間と世界とを發見するのにある、更らにこれを換言すると、現代人と現代生活とを作り出さうとするものてある。この風潮は、一旦北方歐羅巴に於て發動しては、遂に教會改革となるべきものてあつた。けれども、十六世紀中葉以後、教會改革の頓挫、それに對する反動の勃興と共に、人生派運動の風潮は、一時大打擊を蒙つて下火となつたが、而も尙ほ將來に對する伏線となり、十八世紀の啓蒙運動（アウフクレー）時代に至つて再び爆發し、始めて確實に現代人と現代生活とを形造るべきてある。所詮、現代人とその生活の起源は、ルネーサンスにありと云はねばなるまい。（65參照）

第十五講　教會改革及びその反動

諸君！　吾人は第六講に於て加特力教會の成立を見てから以來、西洋に於て教會なるものが、佛教の寺院組織と異り、國家の他の半面を代表する世界的組織であることが分明した。だから、教會問題は同時に政治及び社會に關する大事件である。故に、今説かんとする教會改革及びその反動（リフォルメーション⑰　カウンター・リフォルメーション⑱）は實に西洋近代に於ける世界的大事變である。因て從來述べた他の問題よりは少くとも幾分なりとも詳しき解説を當然要求する。

61　教會改革の原因

（イ）十字末期以來、西方の世界に於てしば〳〵教會改革的運動が現はれ、いづれも相ついて失敗に了つたけれども、絶えず天下の人心を刺撃して來て居つたこと。

かの第拾貳講(44)にみておいた南佛の異端アルビゼンスの運動を魁として、爾來しば〳〵起つて居る。その重なるものを列擧しやう。先づイングランドのウィックリフ（一三八四歿す第十二講46）が出て居る。次にはボヘミアのチェッヒ國民の英雄ヨハーン・フスが現はれた。彼はプラーグ大學教授にして說教者てある。彼は羅馬教會の弊害を一洗せんと欲し、その手先となつて居るドイツ人を排除して、國民的宗教を作らんと欲したが、一四一五年、コンスタンツ宗教大會議に召喚されて焚殺された。彼の國民の内彼の說を奉ずるものフス派と稱し、因つて兵を擧げて支配者オーストリヤ家に畔いたから、多年フス派の兵亂結びて解けなかつたが、遂に鎭壓された。最近には、フロレンスのサヴォナローラ②の宗教運動は天下の耳目を惹いた。彼はドミニコ教團の律僧にして有力なる說教者てあつた。時はイタリヤ文運竝に繁昌がその絶頂に達したころ、その中心地、恰もロレンツォ・デ・メディチの下にあるフロレンス市に於て、自ら舊約全書中にある豫言者を以て任じ、民間を行教してその歸依を博し、外は教會の元首たる法皇の腐敗、内はメディチ家の豪奢なるデスポット政治に反對した。既にして彼の宗教運動の好機會が來た、それはロレンツォの死後、一四九五年フランス國王チャールス八世のイタリヤ侵入てあつた。即ちイタリヤ役の破裂てあるから（十三講56）。サヴォナローラ乃ちこのフランス人の勢力を頼みとし、こゝにメディチ家に代つて自ら一個の宗教的共和政治を樹立し、威信一時隆々たるものがあつた。されども間もなくフランス王失敗して半島から兵を瑾すや、メディチ家、貴族、その他の肉食者流はドミニコ教團のものらと共に鋒先を揃へてサヴォナローラを攻撃し、外からは羅馬法皇から破門令さへ發せられたから、彼の人望漸く傾き、遂に一四九八年市役所前の廣場に於ける宗教裁判となり、この際混亂爭鬪破裂し、流石の豫言者もその場で絞殺され

て火中に投ぜられた、畢竟、サヴォナロラはイタリヤ戰役破裂の不幸を機として、そのルネーサンスの積弊に對する反動の發現であつた。而してこの一種の教會改革者も從來のそれらと同じくまた失敗に了つたけれども、その人心を警醒する大なるものがあつた。

(ロ)人生運動の傳播及び獨逸人の信仰。

人生主義の如何に北方に流布したかは前講に於て略ぼ瞥見した所である。この際注意すべきは、ドイツの人生運動がイタリヤ人のそれと頗る趣を異にしたことてある。南方人はとかく形式藝術に偏し、神に對する信仰そのものに深き思を寄するに至らなかつた。獨人は然らず、彼等の個性はイタリヤ人よりも一層眞摯にして內省的て、より多く哲學的神祕的傾向を帶びて居る。彼等の間にも、固より前講に指摘したやうに、藝術の開拓があつて、デューレルの如きイタリヤ大家の壘を摩するばかりの天才を出したけれども、この點に於ては、全體としては到底南方に及ばなかつた。その代りに、北方には、一方には最も眞面目なる科學的研究者が出た、例へばコペルニカスの如きてある。他方ては、極めて敬虔なる神の信仰者現はれ、宗教生活を磨き、衷心から神學を立てるものがあつた。例へば早くもダンテと同時代にエッカルト③(一三二七年歿す)出て、『獨逸神學』の著あり、後、ルテル實に之を出版し、その神祕的傾向は獨逸人の信仰を動かして居つた。つまり、ドイツに於ける精神的知識的生活は、南方先進國人の感化を蒙る所固より尠くはなかつたけれども、單に之のみて發展したのてはなく、ドイツ人の中古以來涵養したる特殊の個性がこの生活の中心となつて、南方の影響に風化されながら、而も遂に之と相異なる傾向を取ることゝなつた。卽ち是れ教會改革(リフォルメーション)が南方に於て破裂しないて、北方に於て發生大成する所以の重なる原因の一てある。

(ハ)北方にて通俗的諷刺文學が勃興して一般人心を刺撃して何等かの現狀打破を思はしめて居つたこと。これは既に前講59 60)に於て一見しておいた。

(ニ)政治上經濟上理由に基きたるドイツ國民的反抗。

第十三講(56)に於て說いた如く、西歐の三國に於ては、各〻固なる國民的國家の端緒成りて、羅馬敎會の專橫を制することゝなつて居るに、ドイツに於ては、未だ統一出來ず、國內に多數の强大なる宗敎君主領さへ蟠居し、宗敎稅や、宗敎上から强制する志納金の取立てには尤も好都合の國柄になつて居る。最近には、一五一七年三月羅馬てラテラノ宗敎會議が集つて決議し、トルコ征伐に充てるため新たに免罪符(インダルヂェンツア)④を發行することゝなつて十分一の宗敎稅を課すること、聖ペトロ大伽藍建立に資するため新たに免罪符を發行することゝなつた。さりながら、當時の國際關係上、トルコに對する十字軍は固より實行さるべきてなく、又た大本山の改築は目のあたり著手されて居るけれども、これよりもメディチ家(時の法皇レオ十世は之か

ら出て居る）の一家の藝術の好みや、生活の贅澤や、就中その家の子女の派出やかな結婚の費用が優先すべきことは、いづれも一般に知れ亘つて居る公然の祕密である。如上の決議に對して、敬虔なる所謂加特力イスバニヤに於てすら、夙に反對の聲が揚つて居る。尤も誅求の衝に當るべきドイツては、免罪符賣下げ事件て人心勃興の折柄、一五一八年アウグスブルグて開かれた帝國議會先づトルコ征伐稅に反對を表して居る。免罪符につきては、既にこの間に、その宗教上功力に關して議論が破裂して居る。以てドイツに於ける政治上經濟上理由に基いた反抗の偶然てないことが察せらるべきてある。

以上指摘した四個の事情は獨逸に於ける教會改革（リフオルメーション）破裂に取りて恰好の下地を作つたのてある。

62　教會改革破裂の事情

そこて只だ導火線のみが必要であつた。これは免罪符に對する獨逸人の反抗から來るのてある。最初こゝては、南て、スウィスのチューリヒ市に於て、その市說教者ツヴィングリ⑤、北て、サクソニのウィッテンベルグに於て、その大學神學教授マルティン・ルテル⑥、これら兩人が殆んど同時に反對の聲を揚げて居る。しかしその內、正しく如上の導火線となるべきは、後者が喚起したる關係にある。即ち一五一七年十月三十一日ルテルが發表した免罪符の功德否定の九十五個條が抑も事の始りてある。之に連關して斷續して起つた動乙た反動のために、約四年間の大波瀾が湧き上つた。この最初の波瀾は法皇の敎權ても、皇帝の勢力ても終に收拾し得ず、一世の耳目を聳動し、天下の人心を激昂せしむることになつた。その結果、先づドイツては三十年以上の敎會改革（リフオルメーション）運動の破裂及びその進行となり、尙ほついてその餘波は廣く他の歐洲にも及ぼされる。而してこの運動はドイツを始めそれ〴〵の國土に特殊なる政治上、經濟上、社會上事情と相纏綿して、西洋世界の國家及び社會の上に廣大なる變革を惹起すべきてある。

諸君！　凡そ歷史上の大事件は一般原因と特殊事情との錯湊から成るのてある。尙ほまた、よしや一般の原因、行方、又は結果なるものが大體に於て定つて居つても、或る特發若くば偶生する事變のために、大事件の進行の促進とも、若くば妨害ともなり、動もすれば或る意外の徑路を辿ることが多い、これが人生の歷史の運命てある。この重大なる運命は上に豫示した四個年間の敎會改革破裂事情に於て尤もよく例示されて居るから、この世界的大事件をば他の講よりか詳しく說いてみるの必要がある。

抑も新に發行された免罪符のサクソニ地方に於ける賣下げは、ドイツ敎會の首席であるマインツ大監督⑦（當時の人はブランデンブルグ家出身の君て、マグデブルグ監督を以て之を兼任して居る）の管轄に屬して居る。彼は三年前就任の際、大本山羅馬への獻納金三萬グルデンをアウグスブルグの豪商フ

ッグル⑧家から借り入れて居つたから、この年の免罪符の賣上高の半額は、この負債償却に充つべきことになつて居る。これは世人周知の祕密であつた。フッゲル家では免罪符賣下げ用の馬車をしつらへた。大監督の代理としてドミニコ⑨なるもの之に乘り、サクソニ地方の市邑の間を行商し、ウィッテンベルグ附近を盛んに說き回はつた。僧は車上から高らかに唱へていふ、汝の上つるグロッシェン⑪(銀貨の名)の響は、汝及び汝の祖先の靈魂を救ふべしと。この賣符說敎を以て、曾に自己の良心のみならず、自己の說敎區の問題と考へたのが、卽ち既述のウィッテンベルグ神學敎授ルテルであつた。彼は敎團からいへばアウグスチン律僧であつた。そこて前記の日、卽ち恰も諸聖(オールハーセーンツ)祭の祭日、ウィッテンベルグ敎會參詣の信者下向の折、その門扉に貼りつけて一般に示したのが、卽ち有名なる九十五個條(テーゼス)である。個條とは例へば『懺悔(ペニテンチア)は心からしなければ無功である』、『免罪符は富を漁る網である』の類である。當時の習ひとして、やがてテッツェルは反駁個條(アンチテーゼス)を發表した。この論爭に於て、世人の多數は之を單なる敎團間の勢力爭とは見ず、ルテルの立論を以て、眞に國民の將さに言はんと欲する所の道破であると肯定して、之を重大視し之に同情した。就中、サクソニ選擧公フレデリク「賢明」⑫は、自家の政治上財政上理由に基き、暗にルテルを後援した。

事羅馬に聞した。法皇レオはこの論議の危險なるを察し、急に御名代(レガーテス)カーヂナル・カエタン⑬を派遣し、アウグスブルグに於てルテルを召喚し、その說の取消を命じさした。この御名代は剛慢にして頑固、毫もルテルの如き一律僧の辯明を聽かない。そこてルテルは取消を拒絕し、却て事件の判斷を『良知良能の法皇(パパ)』に訴ふと宣言し、逃れてウィッテンベルグに歸つた。彼はこゝからは事件審査のため宗敎大會議の開催の要求を發して居る。この危機に、サクソニの一貴族があつて、法皇のためにルテルと會談して說く所があつたから、ルテルも我を折りて、若し反對派だに沈默を守らば、自分も靜肅を保ち、愼みて論議を避くべしと妥協した。事件は宛ら落著したやうてある(一五一九年一月)。

然るにこゝに意外の珍事が突發した。こゝに、南獨の人生運動の中心インゴルスタット⑭大學敎授エックてふ一論客がある。彼は既に南獨に於ける討論界のいはゞ道場破りを成功して了つたから、北獨に榮えて居るウィッテンベルグを擊破せんと欲し、之に向つて挑戰して來たことてある。而しこの挑戰はルテルの同僚カールスタット⑮に向つて幾多の問題を揭げて來て居るが、その內にはカールスタットの與り知らない問題がある、曰く法皇權の起源如何と。この揭題は事實上ルテルその人に對する挑戰に同じことてある。ルテルはこの論戰に參加しなければならなくなつた。恰も前年の夏からこの大學に就任して居る年若き文獻の天才メランヒトーン⑯も亦たルテル等の一行に加はつた。會戰の場所はサクソニ家の別家が君臨するライプチヒ府てあつた。時は一五一九年夏てある。恰も同時にフラン

クフォールト(17)てはかの皇帝マキシミリヤン(18)の崩後、その後任選擧といふ當時の政治問題としては一層重大なる會合が催ほされて居る。而も世界の文化史上からいへば、この政治的會合に優るとも劣らない意義を有つものは、如上の同時に開會されたライプチヒの公開討論會てあつた。人生運動の勃興、人心喚起の當時、公衆環視の裡て、この討論は數日に亘つて續行された。挑戰者エックは身を南獨の農民から起しながら多年論壇に馳騁した百戰百勝の雄將てあつた。挑戰された當の主カールスタットは先づ第一陣を承つて敗戰の形となつて退いた。次に七月四日といふ日にルテルの順番となつた。このチューリングン(19)山中鑛夫の子は近年の奮鬪と研鑽とに漸く確信を增して來て居る。歷史家ランケは深き同情を以て當時の討論の光景を描き出して曰く『二人の獨逸百姓の子は當時は勿論、今日も尙ほ世界を分ち居る思想界の二大潮流を代表して立つた』と。時にルテルは年三十六、身丈中等大て瘠せて、未だ後年のやうに肥滿して居なかつた。その音聲明朗てよく聖書を暗んじてこれを引證し、熱誠のあまり我を忘れ、その信念は腹の底から發した。エックは年正に三十三歲、音肚洪大て鐘の如く、演舌、身振、手爲は巧妙て、博引旁證、自由自在てあつた。この兩雄は、こゝに衆人環視の裡て、一上一下、論戰に火花を散らした。その要點は次の如くてある。

一、エック云ふ、『羅馬敎の權力は其督に發する。卽ち神の制度てある。』ルテル駁す、『否、ヒルデブランド卽ち法皇グレゴリ七世の政策から作り上げられたばかりだ、卽ち人爲制度てある。』

二、エック、『ルテルの說は法皇の神聖を犯すものてある。』ルテル、『法皇必ずしも神聖ならず、法皇なくとも信仰は成立するからてある。現に希臘敎會はその活例てはないか。』

三、エック、『希臘敎會は異端てある、何んとなれば從來の宗敎大會議は屢々これを議決したからてある。宗敎大會議は敎權てある。これに反對したものは悉く所刑せられた。就中、フスを見よ。ルテルの運命も亦怖るべし。』と威猛高に罵つた。

ルテル、『宗敎會議と雖も亦は誤謬なしとは云はれない。これに反して、フスの信條の內には、實に某督敎の古精神に適ふものがある。抑も吾人の根據とすべき唯一の敎權は只だ聖書あるのみ。』と、堅き決心を示した。

このルテルの結論は、當時、殊にライプチッヒにあつては極めて大膽なものてあつた。何となれば時は法皇の敎權が猶ほ全盛を極めて居る時代てある、場所はボヘミアの隣國、サクソニアの首府てあつて、フスの燒殺及びフス役を去る百年にして、その紀念尙ほ新たてある、卽ちフス派に對する反感は尤も盛んてあつたからてある。故に臨席のサクソニア公ゲオルグ(20)を始め、滿場の人々は、ルテルの決意を聽いて驚駭措く能はず、滿場どよめき、口々に『フス的なり、異端なり』との罵聲の裡にその日は解散し

た。その後この論戰尙ほ續いたが、その大勢は如上の一日の論戰に決して居る。それて双方の言ひ分は更らに判定を乞ふために、書き下されて巴里とエルフルト㉑との兩大學の神學部に送られたのである。

要するに、一五一七年から一九年に至る三年間に於けるルテルの態度は、次の三階段をなして發展したといへる。(一)、免罪符賣下に反對し、而も尙ほ法皇の命令に服從した。(二)、法皇の命令を拒み、宗教會議の裁判を希望した。(三)、宗教會議を否定し、聖書に最後の根據をとつた。

卽ち是れ、事件そのものが動及び反動の理によつて意外の發展を遂げたものと云はねばならぬ。されば、既述の如く、凡そ歷史上の大事變が、その根底に横はる深遠なる原因の外に、その經過しゆく時期毎に、偶然又は自發的要素のために或る變化を受けるものであるといふことは、如上の例示によつて明瞭てある。

是に於てエックは、羅馬に馳せ上ぼつてルテルの異端を報告した。法皇は因てルテル破門令を發し、六十日間の猶豫を附してこれを實行せしめた。けれども、この間に、ルテルの所信はラウレンチウス・ヴァラの『コンスタンチン御寄進狀論』(前講58)を讀むに及んで愈々固くなつた。また彼の勢力はサクソニ選擧公の保護と、ウィッテンベルグ大學の人生學者、竝にドイツの騎士たちの聲援との下に日に增大した。かくて彼は遂に一五二〇年十二月十日、公衆の面前に於て破門狀を火中に投じ、『法皇權から生じた一切の弊害も亦たかくの如くあれかし』と宣言した。

卽ちこれ、ルテルと法皇との關係の破裂てある。こゝに於て、只だ一縷の望は、かの選擧會て新に選擧せられた皇帝の個人的政治的勢力がこの事件を如何に纏め得るかにかかつて居るのみてあつた。

當時政治上に於ては、かのイタリヤ戰役の時代(一四九五—一五四四)の最中て、一五二六年には戰爭は熄むて居るが、何時再發するかもしれぬといふ危機にあつた。カール五世は元來オーストリア＝ブルグンド家の相續者て、一五一六年外祖父フエルヂナンド㉒が死ぬと、その後を嗣いて、イスパニア王位に上り、カルロス一世㉓と稱した。今や祖父マキシミリアンの崩後、一五一九年のかのフランクフオルトの選擧に於て、フランス王フランシス一世㉔との競爭に克つて當選し、ドイツの皇帝としては五世と稱して居る。その結果、彼は一五二一年の春、ドイツに入り、ウオルムスに於て彼の最初の帝國議會を催した。この議會は當時の大問題であつた帝國の中央政府組織と、ルテル事件とを議した。卽ち實に世界的重要議會てある。これに最も深い利害關係を有するものはドイツの外に三大勢力がある。フランス、イスパニヤ、羅馬これてある。

時は、イタリヤ戰役將に再發せうとし、フランスとイスパニヤとはイタリヤの戰場に於ける歷史的の衝突を繰り返すべきであるから、皇帝の政府では羅馬と同盟提携することの利益に著眼した。次にイス

バニヤに於ても當時亦た一個の教會問題があつた。これにはカールと法皇との間に種々交渉掛引があつた。その結果、遂に兩者間に妥協が成立したのである。即ち皇帝は法皇と同盟し、ドイツの利益を犧牲に供し、將さに再び破裂せんとするイタリヤ戰役、及びイスバニヤ教會問題について自家の利益を計つた。ドイツの利益犧牲とは他ではない、皇帝が議會に於て、ルテル派を一擧に禁壓し、獨逸に於ける教會の統一を厲行すること、即ちこれてあつた。ルテルは果して議會に召喚せられ、その異端取消を命ぜられた。彼はグルマニの法により一日の猶豫を乞ふた。次の日出場するや、彼は毅然としてこれを拒絶した。彼が胸を叩いて喝破した『こゝに余は立つ、余はこれより他なる能はず、神よ助けたせ、アーメン』の一語は世界的になつて居る。皇帝は乃ち勅令を發し、ルテルを法律の保護解除に處し、その説を禁止することゝした。

けれどもこの勅令發布の事情を見るに、百年前、コンスタンツ大會議に於けるフスの處分と大いに趣を異にしてゐる。かの時、フスは皇帝の身體安全保證狀があつたにかゝはらず、直ちに捕縛焚刑に處せられた。この時、皇帝の左右、殊にイタリヤ、イスバニヤの僧侶等は、直ちにルテルを捕へて羅馬に送らんことを求め、さなくとも少くとも前述の禁壓の勅令を議會の面前に於て正々堂々讀み上げて之を發表することを請ふたが、皇帝は遂にそのいづれをも許すことが出來なかつた。それは、當時輿論沸騰し、一律僧たるルテルは既に國民的英雄となり、殊に彼が議會に於て毅然たる反抗の辭を述へてからは、彼のためにその身を護らんと申し出たものが數千人に及んだからである。これがために、ルテルは安全にウォルムスを退去し、その後で、或る偶然の機會に少數の人々の集つた時、始めて勅令の發表を見たのであつた。これから以後、ルテルは、サクソニア選擧公の領内、アイゼナッハ郊外ワルトブルク[25]城に隱ること殆んど一ヶ年、主として聖書獨譯に力を注いだ。

かくの如くして最後の望、即ちルテルと皇帝との關係も亦た破れた。然らばルテル及びその一派は、果して禁壓され得べきか。この禁壓問題はドイツの內治外交と相互關係に立つものである。このデリケートな關係の渦中で、ルテル派は特殊の有利な保護をうけて、その教會改革の目的を成就すべし、これが世界史的運命である。節を改めて之を說かう。

63　ドイツの教會改革

凡そ社會の安寧秩序は中央權力の鞏固と輿論の信任とに依賴するものである。よしや中央權力が薄弱であつても、輿論が現狀態に滿足する時は、この社會には甚しき危險が起らない。之に反して、輿論が如何に沸騰すとも、權力の重心が動搖しない場合も亦た同やうてある。然るに、若し兩者同時に

動搖することあらば、その社會の危險測るべからざるものがある。

前節に述べたウォルムス議會以後のドイツの社會は、まさに斯くの如き大いなる危險に向ひつゝあつた。當時ドイツに三種の運動が相ついて、一時は竝び破裂して居つた。

第一、再洗禮派（アナバプチスト）。これは最も過激なる新信仰である。この派は典據をバイブル以上に求め、人心のみが根本證典であるとし、因て吾人の心が未だ何ごとをも感知し能はない幼少の時に行はれる洗禮は無功だ、再び洗禮し直ほすべしと要求した。なほ、この派は苟も人心の底を動かすことの出來ない物件を、すべて有害無益として排斥し、因て一切宗教上畫像の破壞を實行しつゝあつた。ウィッテンベルグにても、かのカールスタットはこの派に入つて、同地方の破壞運動漸く盛んとなつた。ルテルがワルトブルグの隱れ家から出なければならなかつたのはこの時であつた。彼は一五二二年再びウィッテンベルグに歸りて、凡そ眞信仰と無害の物品とは何等の矛盾なしと說き、同地方の破壞運動鎭撫の功を奏した。

第二、騎士の政治運動。そは、ウォルムス議會の決議で、帝國の中央政府及び裁判所が設立されたから、ライン河畔に於ける騎士等は之に反對して自己の階級の自由保護のためと稱し、所在の城廓に據つて兵を擧げたからである。但し、諸侯の軍隊は大砲を以て彼等を砲擊鎭壓して了つた。これより

騎士の階級の勢力大に衰ふ。

諸侯は勢に乘じて使を在イスパニヤ皇帝に馳せて、かの新設の中央政府を廢止することに同意せしめた。然らば第一の運動は輿論の現狀に對する不滿の發現、第二の運動の結果は中央權力の破壞である。そこて獨逸の社會は非常の危險に瀕しつゝあつた。果して第三の大運動が破裂し、社會を破壞しつくさんとした、それは農民の蜂起から起つた百姓戰爭である（一五二四―二五年）。農民は僧侶及び貴族に對して自己の階級の平等を主張して兵を擧げた。之にかの再洗禮派や騎士やの失敗連が參加し、內亂廣大激烈となつた。幸に諸侯の兵力よく聯合努力したから鎭壓され、この際農民の死するもの十萬人、彼等はこれより舊に依つて倍々抑壓された。

以上三個の暴動に對してルテルが終始一貫之に反對し、殊に農民に對しては尤も激烈なる非難の論文を公にしたるは、彼その人の偉大にして、獨逸諸侯及び諸君主の信用を搏した所以である。

恰も此時、一五二一年以來イタリヤ戰役に於て皇帝軍が大勝を得て居るから、その反動として起りたる國際關係の變動が、如上の教會問題の葛藤の中に入つて來た、卽ち、皇帝に反對する一五二六年コニヤック同盟[26]の締結が出來たから、カールはこの者に對抗するために、ドイツ人の兵力に依賴するの外はない。彼は因つて使を馳はてウォルムス禁令の實行を中止し、國人の信仰の假自由を許した。

それであるから、ドイツの諸國諸地方諸市始めて各自の自由に隨ひて各自の教會を作ることゝなつた。この組織に於て自然ルテルの新思想が標準とせられた。それは主としてドイツの北方に多かつた。この方面の諸國では修道院の解散、教會の財産の沒收、その代に學校病院の設立、宗教家が法皇と絶ちて牧師として就職することなどが一般となつた。しかしルテルの思想は決して破壞的でなかつた。彼は凡そバイブルに違背する事物を破棄すべしと唱道するも、然らざるものは、從來の教會の傳說と雖ども、之を保存せしめた。卽ち彼の企は全く新しい宗教の創立ではなく、只だ古い卽ちハイラルキの下にある教會を革新するばかりであつた。この穩健さが、卽ちルテルの偉大にして成功した所以である。

教會改革は單純なる宗教運動として獨立に進行したのではない。ドイツの內政外交と離るべからざる相互關係がある。この運動に於ける爭の中心點は皇帝が諸侯を統一するか、諸侯が皇帝から獨立して各自の主權を維持するかにあつた。しかし、この爭に於て世界の國際關係の變動といふ要素が入り込むで居る。この變動が皇帝に有利なる時は、諸侯の教會改革運動は壓迫され、不利なる場合には壓迫がゆるめられて、改革竝に獨立がさかゆるを常とす。尙ほ注意すべきは、諸侯すべてが新思想に馳せて居ない、或者は隣國又は他の一族と相爭ふために反對側に投じ、しば〳〵羅馬法皇及び皇帝側に利用せらるゝことがある。而して、法皇自らと雖も、餘りに強大ならんとする時、法皇はしば〳〵皇帝と絶ち、不本意ながら新思想側の勢力を助長する結果を生ずることが、しば〳〵あつた。

既述のコニャック同盟の首腦は時の羅馬法皇とフランス國王フランシス一世であつた。皇帝は獨逸人の信仰を、既述の如く、ゆるめたから、ドイツのランヅクネヒト等は勇み出陣した。皇帝軍はこの來會をうけて優勢となり、一五二七年には宛もルネーサンスの文化の咲きみだれて居る花の都に侵入し、したゝかに之を掠奪することが出來た。この羅馬攻陷は非常なる破壞を伴ふたもので、さながら獨逸の教會改革の血祭の如き觀をなして居る。

しかし皇帝軍優勢の結果、法皇も屈服し、トルコのヴィーン攻撃も撃退されて、カールの鼻息極めて荒らくなると、彼は十年ぶりにドイツに入つて抑壓を試みた。その方法の一はウォルムス禁令の復活實行であつた。新派は再び形勢の不利を感じ、聯合して抗議（プロテスタント）[97]を提出し、因つてプロテスタントと名けられる。されど抗議や辨解は何等の功がなく、日に危險が迫つて來たから、こゝに新教派はチュリンゲン山中シュマルカデンに會合して同盟を結び、以て皇帝の襲撃に備へた（一五三〇年末）。

かく切迫したドイツの新舊兩派の衝突も、幸にもカールが又もやイタリヤ戰役の續發のために自分

に受けることになつた牽制と、ルテルその人の平和主義的慰撫の手段とによつて、わづかに防止されて居つた。が、一五四四年戰役も終結し、一五四六年ルテルも死し、世間の舊敎的反動著しくなつて來たから、こゝに兩派は劍を拔いて起ち、所謂シュマルカルデン同盟戰役（一五四六―七年）となつた。この役、新派大敗した。皇帝の加特力政策將さに全勝を占めんとした。この瞬間に、皇帝派の諸侯の中にカールの皇帝權の餘りに强大とならんとするを恐れて叛旗を翻へすものが現はれた。その上に、フランス及び羅馬との國際關係もカールを壓迫することゝなつたから、形勢一變し、三十餘年皇帝として君臨して居たカールは遂にドイツから敗走して本國イスパニヤに歸らなければならなかつた。跡は、彼の弟フェルヂナンド兄に代りて獨逸の事を辨理することゝなり、一五五五年、アウグスブルグに於てドイツの諸部と宗敎平和を締結した。その條件は、第一、諸侯及びもろ〳〵の帝國市は各自の信仰に從ひて、敎會を組織し得。若し之を徹底的に實行し得るとして見れば、從來の羅馬法皇の下にある監督等でも自ら新信仰に歸依し、以て彼等各自の領土及び人民を化して全部新敎となし得るはづである。第二、プロテスタントのうちでルテル派（卽ち一五三〇年アウグスブルグ議會に上つた信條に由る新敎派）は帝國の宗敎として自由に行敎し得べきものと公認せられる。然らばスウィス及び南獨に起りつゝあるツヴィングリやカルヴィン派は、この公認の恩典に浴しない。

要するに、獨逸の敎會改革は61節所說の如く、一般の歷史發展と獨逸特殊の事情とに基き、ルテルの信仰と意力と常識とに俟ちて促進大成されたものである、この人物の國民に殘した感化は甚だ强大である。彼の言說にして、今日尙ほ國民の格言となつて居るものが少くない。例へば『神は一の堅固な城寨なり。一のよき鎧、よき武器なり』、また『よく禱るは卽ち半ば以上學びたるなり』の如し。

但し、アウグスブルグ宗敎平和條件中に、既に上に暗示したやうに、尙ほ騷亂の種子の存することは、吾々の記臆しおくべき所である。

64　カルヴィン[24]及びその影響

ルテルと同時代のチューリヒに於ける敎會改革提唱者ツウィングリは、舊敎派反動の初期、一五三一年、スウイスで戰死して居る。[25]その跡で、ルテルの晩年以後、スウィス西部（フランス的地方）の中心の一であるゼネヴに於て、改革を成就し、ドイツの南部と西歐（蘭、佛、英）にその新思想を宣傳し、非常の感化を及ぼすべき者が現はれた。この者はルテルがその思想を北獨と歐洲の北方とに傳播したのに對比すべき人物で、フランス人カルヴィンである。ツウィングリは俗人にして政治家、ルテルは律僧にして意志强き常識家、カルヴィンは學者にして政論家であつた。更らに後者の最大特徵とする所は、ツウィングリの地方的、ルテルのドイツ國民的に限られたるに反して、世界的根本的論理的なるにあ

る。彼は一五四一年以後、ゼネヴァ市の主權實行を委托され、その憲法を制定實行し、長老會議を作りて嚴重なる宗教的共和政治を立てた。卽ち儀式の純潔簡素を尙び、一切市民の個人としての品行を監督し、如何はしい營業を禁止し、一切の奢侈娛樂をやめ、市内の酒店は只五個所に限り、而も善良なる紳士の管理に委し、苟も法を犯すものは死刑に處した。彼は一五六四年に死するまでに、彼の思想及政治は西歐諸國の傾葵をうけ、多數の留學生ゼネヴァに來り、歸國して之を宣傳した。その結果、オランダ及び英國に於ける新教、就中清教徒、スコットランドのプレスビテリヤン、フランスのユーグノー(31)いづれもカルヴィンの流を汲むものである。更に清教徒は十七世紀には漸次北米に移住し、今日合衆國の精神文化の中核と稱せらるゝ新イングランドを作るべきである。

因にいふ、南獨に於てはカルヴィンの教は革新教會を建て、新教徒中、ルテル派（福音派 教會と對抗し、三十年戰役の結果、始めて後者の如く公認された。一八一七年、ルテルの教會改革の火の手を上げし三百年記念の時、始めて是等の兩派は合同して一となつた。

65　反動改革の起源及び發展

反動改革とは教會改革に對する反動の術語カウンタリフォルメーション(32)を譯したのである。これは單なる改革の破壞だけではない、舊派自ら反省刷新をも意味し、いはゞ寺門の一新興隆と信教領域の恢復とを意味す。この運動の起源は實にルテルの晩年、一五四〇年頃に在つた。

吾人は先づ問ふ、何故に新派は永久に全勝を遂げ得ざりしか。

之に對して新派内部に於て種々の弱點が伏在して居つたことが認められなければならない。卽ち派内に於て分爭がある。第四節に述べたルテル派に對するカルヴィンの對抗はその重なる困難である。次に凡そ新派には宗教心滿足に必要なる崇嚴壯麗なる儀軌が廢止されて居る。最後に新派は餘りに理性に馳せて、その創立當時の南歐諸國におけるローマ風地方の一般未開の人民に適しなかつた。

これらの新派の弱點に乘じてその外部、卽ち反對側にありて、有力なる對抗運動が起りつゝある。卽ちそこに反動の起源があつた。乞ふこれを分解しやう。

第一、全盛時代に於けるイスパニヤ舊教王國の反對運動。この王國の君主權及び廣大なる版圖は、由來羅馬教會の宗教的階級政治と密接なる關係を有して維持されて居る。かの皇帝カール五世は、吾人の見たる如く、この王國ではカルロス一世と稱し、彼のドイツ及び世界に於ける舊教的統一政策の主要なる策源地を、このピレネー半島のカスチラ國において居る。カールの跡では、イスパニヤ王國はその子フィリップ二世（一五五六―九八）之を繼いだ。この君主冷靜愼重よく利害を打算し、舊教的統一策を祖述して、彼の歐洲内外に跨れる大版圖を維持擴大せんと欲した。彼は歐洲に於ては、ネ

ーデルランド[33]の外に、獨佛兩國間の若干中間地帶、イタリヤの或る大部分を領有し、海外にては新世界、竝に極東にてはフィリッピン[34]群嶋を保有して居る。彼は尙ほ一五八〇年以後、更らにポルトガルの王位を兼ねたから、この海上帝國の植民地をも併有した。それ故に、フィリップの版圖は、當時の詩人から「日沒せず」と讃頌せられて居る。是等の領域から世界の富が絞り上げられる。東洋貿易の利益は莫大てある。就中、ペルー[35]のポトシ銀鑛は一五四五年以來採掘され、その產出は巨額に上ぼりつゝある。これを積みこみて歸國するガレオン船は新進の海上國民——海上から排斥されつゝある國民——に取りては美望掠奪の好目的物となり得た。當時歐洲の軍備はまだ常備軍に發達しないて、雇兵大に流行した。莫大なる金力を有するイスパニヤ國王は容易に大兵力を作り得べきてある。彼は歐洲に於けるあらゆる戰鬪員竝に軍事上の機械を利用した。イスパニヤ人は大砲を以て城塞を攻陷するに長じて居る。ドイツ人は精銳なる歩兵(ランスクネヒト)を提供する。イタリヤ人は巧妙なる雇兵隊長(コンドッティーレ)[36]である。是等はみなフィリップ二世の御用を勤め、彼の舊敎的統一政策に資した。彼はマドリッドの宮廷ふかく自己の書齋に籠りて殆んど外出しない。こゝにてひとり靜かに世界に對する政策を畫策指揮し天下の人に怖れられた。フィリップは自ら『彼自らの大臣』てあつた。かくの如き獨裁君主の下に、かくの如き王國が、舊敎的統一策を執りて羅馬法皇の敎會と提携して上述の新派の弱點に乘じて猛擊することになつて來ては、新派に取りて非常の危險たらざるを得ない。

第二、巴里に於ける反對運動。巴里は十六世紀以來ルネーサンスの影響とフランス王家の君主權の發展とに依りて盛大となり、天下の人士を惹きつゝあつた。この地はイスパニヤ王國とは獨立に、舊敎政策の別働根據地となつた。こゝにはドミニコ派の學僧盛んにして、ソルボンヌ[37]大學に據り、一切舊派の中核となり、保守思想の源泉、信仰査問の機關となつた。

第三、加特力敎會自ら自己の敎理(ドグマ)に改良を加へ、これを鞏固にしたること。この事業は實にルテルの晩年、反動の風潮著しく發生しつゝある時、墺伊の境トレント[38]に於て宗敎大會議を開催し（一五四五、十六年間に亘りて會議し舊敎會の利益を標準とし、而も時代の要求を調和し、種々の決議を作り全敎會を統一し、その興隆に資した。最初、會議の召集につきては、新派は壓迫を恐れて應ぜず、果して既に一瞥したる如く(63)、間もなくシュマルカルデン[39]の決戰の破裂を見たのである。尙ほこの會議の働き手と精神とが實に新興のゼスイタ會員(ジェズス・セス)[40]てあつたことは特筆に價す。

第四、耶蘇會（一五四〇年創立）。この有名なる敎團につきては、殆んど叙說を要すまいから、簡單に述べておかう。その創立者はイスパニヤの武士イグナチウス・ロイヨラ[41]その人てある。彼は中年まて馬上の人てあつた。彼はイタリヤ戰役の渦中て、彼の故郷、ピレネー山麓ボムバルナ[42]城の防禦戰に

傷いて浮世の望み少くなつてから、始めて發心出家し、その間苦心煩悶すること猶ほ初期のルテルの如く、而も遂にルテルとは正反對の解決法に出た。卽ち、法皇に對する絶對的服從、『さながら屍の如く』自己の自由意志を夾さみ得ない完全なる服從、これてある。初め、巴里に學び、こゝにては少數ながら一團の同志を募つた。その内にナヴァラの年少貴族、後には學德と日本布敎を以て有名となるべきフランシス・ザヴィエー[42]が居る。ロイヨラは是等の同志と共に轉じて羅馬に赴きて宗團認可を求めた。この出願の最初は從來の律僧と同やうに、唯だ服從、淸貧、童貞の三誓だけを條件としたが、容易に認可が下りさうにない。そこで第四の條件を加へた、卽ち、法皇に對する無條件の忠誠てある。これは、當時離畔相つぎ、孤城落日の難境に陷つて居た法皇朝に取りては、何よりの好條件てある、良武器である。それてこの敎團は一五四〇年公認をうけ、その獨得の軍隊的組織（會長をゼネラルといふが如き）と精神修練（スピリチュアル・エキザーシス）とを根柢とし、内に於ては、かのトレント大會議に活動し、諸國に於ては、君主の精神上顧問となり、殊に少年敎育に熱心し、外に向つては早くも印度及び日本にまても布敎した。ロイヨラ死するまでに團員多數、敎區全世界に散布し、その成功驚くべきものがあつた。凡そ耶蘇會々員は學問のすべての方面に通曉し、浮世の知識に富み、如何なる困難に遭ふも之に打勝つか、若くば之と妥協し、自己の目的『神のいや大なる榮に』（アド・グローリアム・デイ[43]）到達しなければ已まない。彼は個人としては善

人にして、非常の學者にして敎育家である。しかし、如上の加特力敎會の機關としては、定說的にして、自由研究を許さない。又た時と場合とによりて、その論說を異にし、手段を選ばない。只管法皇とその下にある耶蘇會との目的を達成するを主眼とするばかりてある。この會はよしや十七世紀には早くも腐敗盛期とす。この期に會員利瑪竇（マッテオ・リッチ）の支那傳道が始まつて居る。この會は十六世紀後半を全し、十八世紀後半には一旦解散の不幸を見たるも、本講の取扱ふ十六世紀にありては、法皇のために至誠無二の忠勤を抽んて、敎會の反動改革に於ける一大精神ともなりその一大戰鬪機關ともなつた。抑も當時加特力敎會が、舊世界に於て、曩きに敎會改革によつて蒙りたる損失を半ばは回復し、新世界に於て、廣大なる宗敎上版圖を征服し、以て舊世界における未復の損失を償ふて尙ほ餘りあるに至つたのは、蓋し十六世紀後半に於けるゼスイタ敎團の努力に待ちたるもの極めて多かつたのてある。

勿論、この外にフランシスコやドメニコの敎團の布敎もあつた。しかし、最も有力なるはゼスイタのそれてあつたことは炳乎として明かてある。時は恰も陸地發見、世界擴大の時代てある（次講68）。羅馬に於てゼスイタ敎團に倣ふて『信仰宣傳（プロパガンダ・フィデイ）』の本部及びその學林が出來て活動し始めたのはこの時代てある。今日『世界戰役』に於て流行しつゝある『プロパガンダ』の模範は玆に在つたのてある。

第五、羅馬法皇及びその朝廷の生活改善。試みに十五世紀及び十六世紀の始と、十六世紀半ば及び

後半との羅馬の元首及び朝廷を比較せよ。前者はルネーサンスの人生派が提供する一切の俗事に恥つた、卽ち世上の浮世の君主に異ならなかつたが、今は歷朝さながら清淨なる聖僧の如きてある。自己の生活を愼み、冗費を省きて慈善敎育敎化、殊に恢復運動に充て、擧朝及び敎會すべて風をなした。

如上の五個の事情は新敎派の弱點に乘じて、玆に自己の刷新皷舞、新思想の壓伏、信仰領域の恢復に從事することゝなり、神の榮光のためにと勇ましく進軍して、侵擊的征服的態度に出た。かくの如くして敎會の反動改革及びその戰役が喚起される。

66　西歐に於ける反動改革戰役（一五五八―一六〇九）

反動戰役は十六世紀中葉から十七世紀の中葉まて約九十年間に亘つて斷續して居る。これは十六世紀に於ける信仰兼政治領域の變動に對する、新派にありては、防禦戰、舊派にては恢復戰、侵略戰てある。この戰役は二つに分れる。十六世紀後半にありては西歐の三國蘭.佛.英に於ける宗敎的政治的戰役てある。十七世紀前半にありては、中歐に於けるそれ卽ち三十年役てある。而して是等兩役を通じて終始一貫して加特力派の政治的軍事的勢力の中堅を形作るものはハプスブルグ家てある。この家東西二つに分る。西歐役にあつてはイスパニアのそれ、卽ちフィリップ二世、次に中歐役にあつてはオーストリヤのそれ、就中フェルヂナンド一世の孫フェルヂナンド二世、おの〳〵活動の中心君主てあつた。

オーストリヤ

マキシミリヤン二世 ＼ ルードルフ二世
　　マッチヤス
（弟）フェルヂナンド一世 ― 男
　一五五六卽位
イスパニヤ
（兄）カール五世（カルロス一世）― フィリップ二世 ―― フィリップ三世
　一五五六讓る　　一五五六卽位　　一五九八卽位
　　子 ―― フェルヂナンド二世
　　一六一九卽位

先づ西歐戰役を說かう。この役を惹き起すべき一般原因は前節に於て既に明かてある、こゝては只だその直接原因を指摘しやう。それは、イスパニヤの舊敎的統一策がその領土たるネーデルランドを始め、之と密接の關係ある他の西歐二國英佛に向けて加へられたること、竝びにこの政策の干涉に反抗し、若くば之に剌擊されて起りたる西歐諸國の叛亂及び獨立運動とにある。この反抗的獨立運動は各國特殊の事情と結び附いて居るから、實は一々別々に細說しなければよくは分明しない。私は例によりて只だその大綱を擧げるばかりてあるのを遺憾とする。

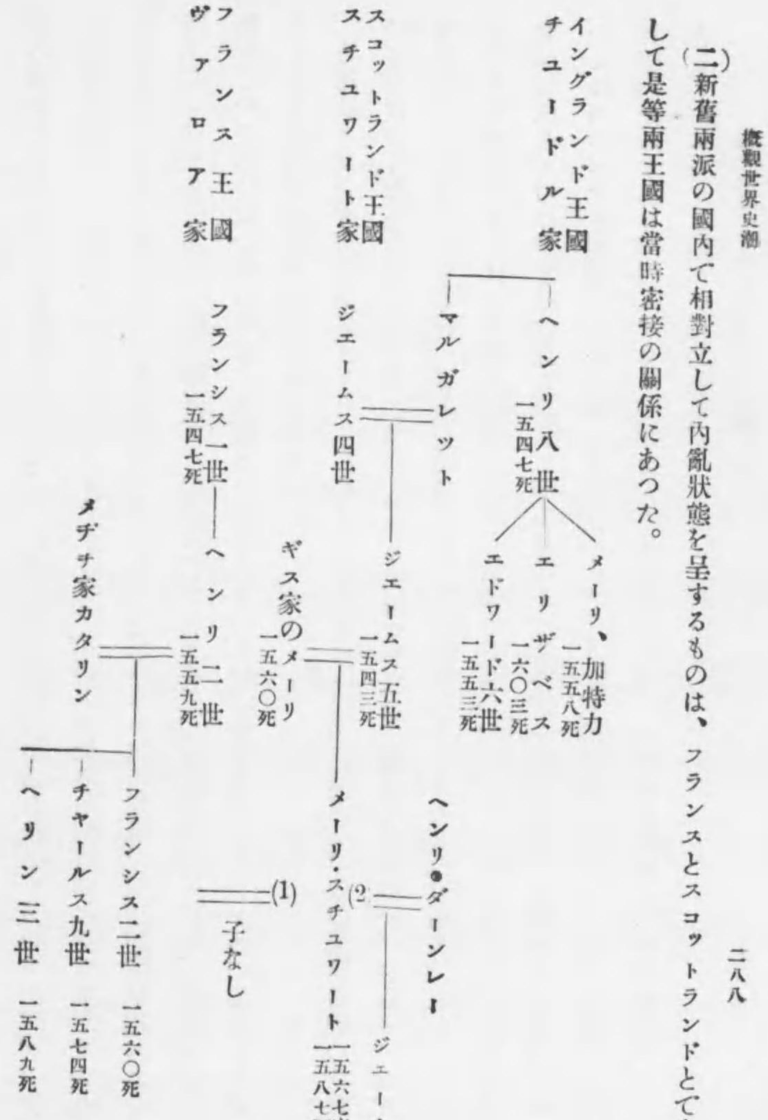
（一）ネーデルランドは、歐洲の中心が中古以來西北に移つてから、その地イタリヤについて天下の中心となる傾があつて、實にノルマン侵入時代、八九一年のルーヴァン㊴役から、ナポレオン戰役時代、

一八一五年のワーテルロー役まで、歐洲の百戰場たるべき歷史上運命を持つて居る。殊に近時、獨
英三強國の中間に介在し、十字軍以後「歐洲の經濟上社會上勃興にあひて、この地方も繁昌し、當時
伊太利について最も富有なる都市を多く有することゝなり、世界交通の衝に當り、隨つて列國の利害
こゝに集中し、おのづから國際關係や國際戰爭の中樞となつた。之を今日の政治地理に充てれば、和
蘭、白耳義、ルクセンブルグ及び北佛の一部に相當す。これがどうして一個の政治上統治されて纏つ
たものになつたかといへば、十四五世紀に於て、佛蘭西の王族ブルゴンド公家が擴大して是等をすべ
て所領することゝなつたのに始る。然るにこの家の最後の男統君主チャールス『勇膽』[46]公不幸にも一四
七七年ナンシ[47]に於て陣歿するや、そのひとり娘である相續女は一切家領を挈げてオーストリヤのハプ
スブルグ家の皇太子、卽ち皇帝マキシミリヤン一世に嫁したから、爾來ハプスブルグ家領となつた。
而して、このハプスブルグ家の世界歷史的幸運は、この同じ家をして更らにイスパニヤ王位をも兼有
せしむることゝなつた。この幸運の蒔いた種子を收穫したのは卽ちマキシミリヤンの嫡孫カール五世
である。この君主が一切のイスパニヤ・オーストリヤ家領を東西二つに分けた時、玆に舊ブルゴンド
家の所領はイスパニヤのフィリップ二世の治下に歸した。それ故に、ネーデルランドは、既記の三強
國の外に、第四の、而も當時全盛を極めたるイスパニヤといふ強國に關係され、而もその舊敎的統一

策の司配を受けることになつた。そこで、由來、多年都市の自治を味ふて居たネーデルランド人民等
は不平を高めた。就中、その北部地方はカルヴィンの個人的世界的新信仰を受けて居たから、この主
義を根據として、カスチラの專制政治に反抗し、一五六八年以後叛亂、隨て開戰狀態に入つた。この
際、イスパニヤ官吏は人民の强訴するや、之を卑み斥けて『乞食』[48]と呼びたれば、叛民自ら誇として之
を稱した。故にこの戰役はギユー戰といふてもよろしい。猶ほ同時にフランスで沸騰したのがユーグ
ノーの戰と名づけらるゝが如くである。

叛民はオランダ州の豪族オレンヂ公ウイリヤム『寡默』[49]の下に結束し、他の西歐諸國の新敎徒から援
助を受けつゝ叛抗し、遂に一五七九年『ユートレヒト』[50]に於ける聯合』を作つた。卽ちオランダ州以下、
ネーデルランドの北部七州（ゲネラル・スターテン）の聯邦の始にして、和蘭共和國なるものこれである。しかし、この國が獨
立の目的を達したるは、西歐役全體の決戰に負ふ所が多かつた。かくの如くして、一六〇九年一旦休
戰が成立したのは、實は獨立の成就に等しきものである。されど中歐役の起るや、再びその渦中にあ
つてイスパニヤと開戰し、一六四八年ウェストファリヤ[51]列國會議に至りて、始めて公法上獨立の承認
を受けたのである。但し、ネーデルランドの南部はイスパニヤ人の舊敎政策で憤柔堅固にされ、依然
としてイスパニヤ領のまゝである。

(二)新舊兩派の國内て相對立して内亂狀態を呈するものは、フランスとスコットランドとてある。而して是等兩王國は當時密接の關係にあつた。



フランスにては、一五六〇年フランシス二世死したる後、幼弱なる弟二人相ついで立ち、皇太后カタリン(52)の攝政の下にあり、國内新舊兩派の戰爭となつた。即ち一五六二―九八年間のユーグノー（同盟の義）戰役てある。

スコットランドは古來イングランドに對立するためフランスと結ぶを常とした。この時、その王家には唯だひとりの相續娘が殘つて居た。これが戲曲や物語のヒロインとなつて居る有名なメーリ・スチユワートてある。彼女は年尙ほ妙齡にして巴里に送られ、前記フランス王フランシス二世に嫁し、その花の如き社交界にて成人した。然るに早く夫を亡ひ。荒寒なる北方に送り還され、(53)その貴族の政爭渦中に入つた。彼女は初めその才色を以てよく人心を收めたるも、ヘンリー・ダーンレーと婚して和せず、禍闥門の裡から發した。そこて反對貴族連の叛抗をうけ位を廢し囚へられたが、身を以てイングランドに免れ、エリザベス(54)に賴つた。この女王は新舊對抗の形勢に鑑み、メーリをイングランドに抑留するを利とし、囚ふること十有九年（一五六八―八七）に及んだ。

(三)イングランドにては、ヘンリ八世以後、新敎の扶植未だ一定しない。彼の娘メーリ『加特力』立つや

頑固の舊敎信者である。當時天下の舊敎のチャンピヨンたるイスパニヤ王フィリップ二世はこの女王と結婚し、イングランドをイスパニヤの舊敎的統一政策のうちに引き入れた。されどメーリ早く死し、その妹立つ、卽ちこれ有名となるべきエリザベスである。フィリップはこの女王の手を握らんとし、體よく謝絶されたが、彼の政策を貫行するため、佛蘭西　内亂に干渉し、且つネーデルランド叛亂を征伐せしめ、一時叛亂鎭定の目的を達せんとした。加之、一五七一年には、トルコの地中海跋扈に對して、一切歐洲加特力諸國の海軍を催して、之をレバント[55]に擊破し、以て最早回敎國の恐るゝに足らざるを證明し、その翌年、フランスにては聖バルソロミユー[56]祭日の前夜に於ける新敎徒虐殺行はれて、こゝにてもイスパニヤ派の勢力盛んとなつた。さればその頃、フィリップの加特力敎世界政策は殆んど滿天下を風靡せんとする概があつた。

(四)エリザベス英明にしてよく大局を知り、初めはフィリップの申込に對して和かに柳に風と受流し、漸次新敎を以て、イングランドを固め、遂にフィリップに對抗して天下の新敎派の重鎭となつた。

當時の戰場は、陸上ではネーデルランド及びフランスにあり、海上では當時の世界擴大時代（次講68）の發展につれて所謂イスパニヤの大海（メイル）に擴がり英蘭二國民の海員海上に乘出して大規模の掠奪戰となつた。フランシス・ドレーク[57]の世界一周（一五七七年）は卽ちこの機會による。されば、西歐戰役の進みゆくに隨ひて、舊派の目ざす所の當の敵は次第にエリザベス及びその下にあるイングランド島國となつた。彼等は一切の勢力を集中してエリザベスを倒さんと欲した。それには、久しく幽囚中のスコットランドの廢女王メーリ・スチワート[58]のイングランド王位相續權を主張するを便利とした。幾多のゼスイタ宣敎師が海を渡りてエリザベス攻擊の宣傳（プロパガンダ）に從事したのはこの時である。獄中のメーリは舊派の傀儡となつた。エリザベスは乃ち一方では益海上掠奪を奬勵し、大陸の新敎徒を援助し、遂にメーリを誅戮した（一五八七）。メーリはエリザベスの叔母の孫に當る。

是時まで愼重自ら持し、辛抱強く機會を待つて居たフィリップも、遂にエリザベス攻擊に決し、その海軍を擧げてイングランドを犯さしむ。その規模壯大にして無敵必勝艦隊（インヴィンシブル・アルマダ）と稱す。されどイングランドの海軍はオランダ人と提携して之をドーヴア海峽に防ぎ惱まし、跡は風伯雨師の仕事に任かした。流石の「必勝艦隊」[59]覆滅した（一五八八）。

この役、實に西歐戰役の決勝戰である。この一大打擊によつてイスパニヤの勢力全く挫折し、世界の新敎派の防禦確立し、係爭諸國に於ける敎會及び國家の性質は解決され、若くば妥協されたのである。卽ち左の如し。

(イ)イングランドは自己固有の敎會を確立し英國人の國民的獨立を保守した。その敎會とは、新敎の

精神を採り、而も尚ほ監督（ビシヨップ）の制度を保つもの、之を監督教會（エピスコパル・チャーチ）若くば英國教會（アングリカン・チャーチ）[60]と名づく。監督制度の儀軌形式に反對して、所謂清教徒（ピユリタン）が起つたは之より以後のことてある。

（ロス）コットランド國民はその王家の加特力統一策を排除し、貴族等の共和主義によるプレスビテリヤン[61]教會を組織した。

（ハネーデルランド北部はカルヴイン教を以て固まり、通例オランダの名を以て呼ばれる聯邦共和國となつた。その南部は依然舊教に屬し、イスパニヤ領たること故の如し。

（ニフランスにては薄弱なヴアロア王家斷絶し、その遠族ブルボン家ナヴアラ王ヘンリ[62]兵力を以て巴里に入り、ついて輿論の趨勢を察し自分の新教信仰（ユーグノー）を放棄して、舊教に改宗し、而も國内の少數派たる新教徒（ユーグノー）のために、一五九八年ナント勅令[63]を發し、若干の都市を指定して彼等の信仰の自由を認容し、以て國内の統一の基を報めた。卽ち是れ有名なるブルボン王家[64]の開祖ヘンリ四世である。

（ホイスパニヤは尚ほネーデルランドの南部を保持し得たるも、前記の約半世紀間の大戰役と、極端なる舊教的專制的鎖國政策が、本國にても、屬地にても、海外植民地にても、株守屬行されたことゝのために、人口及び國力を減損し、フイリツプ二世の治世と共に歐洲中原の覇權を失ふた。尚ほ殘れる誇は、只だ歷史の名譽と海外植民地の廣大とのみてある。これらは今後如何になりゆくべきか。

この戰役は西歐のそれよりも、より繼つてより統一がある。卽ち事件が主としてドイツに集中し、これを中心としての國際間に於ける宗教的政治的戰役であるからてある。

西歐の戰亂漸く收まるに隨ひ、今度は中歐に於ける風雲漸く暗澹となつて來た。それは何故か。かの一五五五年のアウグスブルグ宗教平和後二十年以上は、新教派は平和條件の重要條項たる所謂『自分の領土には各自の宗教』を極端に實行してその勢を擴大して南獨にも新教の信仰區域をひろげるに至つた。例へば、北獨に於て、マグデブルグ監督領は當時の領主たる監督が新教に歸依したから、その人の宗教が領内に布かれて全然新教區域に化せられて了つたが如きてある。然るに前記の平和締結の際、フェルヂナンド一世は宗教上君主のために、一個の勅令を發して居る、曰く凡そ監督は唯個人として新派に化し得、若しその人改宗せば、彼はその監督職を失ふと、隨て一切の宗教上君主領は依然として舊信仰の國たるべきてある、卽ち是れ所謂『宗教上保留（エクレジアスチカル・レザーヴエション）』といはるゝものてある。そこて、舊教派は時と共にこの宗教上保留勅令を楯に取りて監督領の新教化に抗議し、反動改革の勢やうやく伸張するまゝに、十六世紀末つ方以來自信を增し、遂に腕力を用ゐて損害の恢復を實行しつゝあつた。この際、オーストリヤのハプスブルグ家が執行する皇帝權なるものは、それ自らとしては殆

んど無能であつたから、獨逸全國は宛ら無警察狀態に陷つた。剩へ、皇帝はオーストリヤの君主として、舊敎諸侯と提携してハプスブルグ一家の利益を計つた。舊敎諸侯中最大なるものはバヴァリヤ公である。されば十七世紀の初には、新派自ら防禦の必要を感じて自ら聯合（一六〇八年）を結び、帝國選擧公の一人ファルツ伯[65]を首領とした。この大名はカルヴィン派の新敎徒である。舊派は乃ち同盟（一六〇九年）を作り、バヴァリヤ公[66]を戴いた。是等兩君主はいづれもウィッテルスバハ家[67]といふ同一族であつて、各南獨に領土を有して相拮抗して居る。殊にバヴァリヤ公はファルツ伯の有する選擧公權を羨みて之を窺ふて居る。

要するに、アウグスブルグの宗敎平和條件が宗敎上君主の領土に關して不備であつたことが、兩派鬪爭の原因の一である。同平和の不備が尙ほ一つある。それは前に注意しておいた通り、獨逸新敎にはルテル派とカルヴィン（大體に於て南獨派）とあつて、ルテル派は公認されて居たが、カルヴィン派は未だ公認されず、それてこれら新派の反目は新舊兩派の軋轢に劣らない、かの聯合が出來ても、北方ドイツの新敎派は最初の間之に參加しなかつた。是れまた事端を滋ぐした所以の一てある。

歐洲列國はこのドイツの風雲の切迫に注視を怠らなかつた。彼等の目的は新舊兩派の權力消長よりも寧ろ列強の均勢如何にあつた。それて聯合對同盟の成立後、間もなくフランス王國は干渉を必要とし、歐洲大戰役は今にも破裂をみんとしたが、偶、その國王ヘンリ四世が巴里出陣に際して暗殺されたから、事なくして十年間延びた。

いよ〳〵の戰役破裂の導火線は、墺國領の一てあるボヘミヤにあつた。卽ちかの曾て敎會改革唱道者フスを出したチェック人にあつた。この國民はハプスブルグ家の舊敎策に反對しつゝあつた。偶、この家に代變あり、尤も頑固なる舊敎信者フェルヂナンド二世が卽位することゝなるや、チェック人はそのボヘミヤ王位を承認せず、かの聯合（ユニオン）の首領ファルツ伯を迎立して王となす。之より聯合對同盟（リーグ）の開戰となり、やがて北獨の新敎國をも渦中に捲き込み、また列國の干渉を喚起し、今後三十年間のドイツはさながら十五、六世紀のイタリヤの如く歐洲諸國の權力爭ひの角逐場裡となつた、卽ち『三十年役』てある。

本役は四期に分つて觀察すべきてある。第一期戰はボヘミヤ及びファルツを戰場とし、新派の全敗に了つた。ボヘミヤは爾來舊敎化せられ、バヴァリヤ公は戰功によりファルツの選擧權と上ファルツの地を賜はつた。舊敎派勢振ふた。之より外國の干渉始る。卽ち第二期はデンマルク國王（但しホルスタイン公[68]としてはドイツの君てある）の侵入、隨つて戰場は北獨及びデンマルクてあつた。この侵入は皇帝の上將軍ワルレンスタインによつて擊退された。次に第三期はスウェーデンの侵入期てある。こ

の國の干渉は半ばは新敎派に對する同敎の好みに依り、半ばは政治的經濟的利害のため、第二期戰に於けるワルレンスタイン[69]のバルト海沿岸に至るまでの成功を坐視すること出來なかつたから、兵を起したのである。是に於てスウェーデン國王グスターフ・アドルフス嘗時『北方の獅子』としてドイツの新敎徒に歡迎され、破竹の勢を以て深く南獨まで侵入した。舊派は再びワルレンスタインを起して之を防ぐ。兩雄はサクソニの平野リュッツェン[71]に會戰し決せず、されどもグスターフは戰死し、新派再び勢孤てあつた。しかし、舊派にあつても、ワルレンスタインの獨立的運動によつて疑懼の念起らざるを得なかつた。この人物はよく兵力を蓄へ、自立して獨逸の統一を恢復せんと欲し、新派とも消息を通じて兩派の調和を謀りつゝあつた。因て暗殺さる。舊派乃ちスウェーデン排除の目的を以て新派に接近し、北獨の新派の首領サクソニ公にラウジッツ[72]を與へ、兩派の講和成つた。若し本戰役が歐洲の國際關係に支配されなかつたならば、これて終結したてあらう。然るに、この時まて黑幕にあつて外交上から操縱して居つたフランス王國は、こゝにスウェーデンが將さに擊退されてハプスブルグ家の全勝を來さんとするを坐視する能はず、斷然起ちて大兵を獨逸に送り、スウェーデンに策應し、また獨逸の新敎派の有力者を利用し、舊敎派に當つた。卽ちこれ三十年役の第四期て、フランス・スウェーデン侵入期といつてよろしい。されど、この期間に於てドイツ人の間に疲弊の極、休養を希ふもの多い、就中、北獨の有力國ブランデンブルグ・プロシャ[73]は『大選擧公』フレデリック・ウィリヤム[74]の下に中立し、又たイスパニヤのハプスブルグ家は、その本國に於けるポルトガルの獨立（一六四〇）竝に屬地の叛亂に惱まされ、中歐の戰場から撤兵した。かくて、戰雲やうやく收り、列國ウェストファリヤのオスナブリュックとミュンスタ[75]の兩市に分れて會議し、始めて平和成立した。ウェストファリヤ講和條約は是れてある。

中歐に於ける宗敎的政治的反動戰役たる三十年役は、かくの如く戰はれてかくの如く終結した。吾人はその結果を指摘する。

ドイツ國民に對する文明史上の影響は頗る悲慘てある。さきに十五六世紀のルネーサンス、殊にかの一五五五年の宗敎平和後の二十餘年間の小康にて進歩したドイツの生業は破壞された。人口は或る多くの地方にては三分の一となつた。如何なる地方にても多くとも二分の一に減じたといはれる。況して市に於てをや。その多くは六分の一に減じ、その或る若干は殆んど皆無となつて了つた。獨逸全體を通じての損害は、人口に於ては二分の一以上、動產に於ては三分の二以上と稱せられて居る。ハンザ都市同盟の尙ほ殘れる隆盛もこれて全く破壞され、その同盟解散の不幸に陷つたのもこの戰役のためてあつた。舊敎派は本戰役中に多大の信仰地域を恢復したが、講和に於てその幾分を讓歩して

新派と調和した。が、開戰前に比すると、著しく恢復して居る。かのカルヴィン派もこゝて公認された。

政治上につきては、獨逸の諸部（大小名、騎士及び獨立市）の地方割據的獨立主權は確められた。しかし、帝國の領土内に外國が新たに割込むことゝなつた。卽ち、フランスは前世紀以來ロートリンゲンに於て横領して來たヴェルダン、メッツ及びツール[56]の三監督領の所有權を確認され、またエルザス地方に於ける或る所有權を許され、こゝに歐洲大陸に於ける覇權の基を開いた。而してスウェーデン[57]はバルト海沿岸に於けるドイツの領土フォルポムメルン州その他の所有權を與へられ、同海上に於ける強國となつた。

更らに歐洲全體の歷史の上から大觀するに、本役の結果、敎會改革に對する反動改革の事業は大體に於て終了し、歐洲に於ける新舊兩派の勢力平均に歸し、世人の注意は漸く羅馬敎會の宗敎政治及び信仰に關する問題を去りて、國家及び社會の事業に向はんとす。換言せば、新舊兩信仰の爭そのものよりも、兩派が由來立つて居る所の共通の文明、卽ち、羅馬風ゲルマニ風諸國民といふ廣大なる共同團體が保有し發展し來つた文化遺產をして、一層の發展及び世界に於ける擴大の途に上らしむることが、世上關心の中心問題となりつゝある。吾人が上に一瞥して來た反動改革及びその戰役の經過竝に錯湊が、事實に於て既に之を證明して居るではないか。

第十六講　世界の擴大　五大強の成立

諸君！　私はこの大いなる包括的題下て、コロンブスの新世界發見から米國の獨立まて、敎會改革から佛國大革命の破裂までの、約三世紀に亘る主として世界的政治上潮流を摑まんと欲する。これて、前講の敎會問題の概說に於て省略された廣大なる世俗的關係が、幾分か補はれるてあらうと、私は切に希望して居る。但し、本講の主題たる政治問題に伏在する國家、社會、經濟に關する思想は、こゝては說かず、之を次講の職分に讓ることゝする。

68　地理上發見　通商植民の發展　海上權の推移

歐洲人の地理上思想は、十字軍時代までは古の希臘や羅馬の知識界のそれと同やうに、否な寧ろそれよりも狹隘てあつて、大體に於て、地中海を以て人間の住する世界の中心と考へて居た。古代に遡つて考ふるに、當時に於ても固より夙に進步した思想家があつた。アレクサンドル大王時代には、かの有名なる哲學者アリストーテレス、スキピオ及びハンニバルの時には、アレクサンドリアの博識家エラトステネス、羅馬帝政の初期には、旅行家て地理學者たる希臘人ストラボ、竝にストア哲學者たる羅馬人セネカの如き、卽ちいづれもそれてあつたのてある。彼等の中には小說のやうな遠い印度に

關して可なり精確なる知識を有したものもあり、加之既に土地が圓球狀をなして居ることを知れるものすらあつた。けれども是等の知識は久しい間、換言せば未開民族の侵入の期間、當時蒙昧の雲に蔽はれた西洋の社會には、殆んど隱滅して居つた。が、十字軍時代となつて、始めて、是等の知識はサラセン人の經驗と媒介とによつて再び歐洲人の間に傳へられることになつた。實にこの時代の末期に於ては、イギリスの學僧ロージャー・ベーコン①、十五世紀の宗教大會議時代には、カンブレーの司教ペートル・デイユ②の如き新知識が出て、更らに十五世紀の後半、卽ち伊太利ルネーサンス隆盛期には、フロレンスの學者トスカネリ③が現はれ、各進歩した地理上思想を代表して居た。殊にトスカネリの知識は、コロンブスが所謂『印度』發見のための西方航路を取るに先ちてこの學者の意見を聽いたことで、世界周知の好話柄となつて居る。

これと同時に十字軍時代、卽ち東洋からいへば蒙古の西方侵略時代、及びそれ以來、宗教上政治上經濟上から來る必然の要求は歐洲人を驅つて次第に世界旅行、地理上探險に上らしむるやうになつた。是等の運動は概して十字軍の精神を祖述し、その氣風を帶びたものであつて、吾人は之を海外若くば世界に對する十字軍と稱しても差支はない。實に、從來十字軍の直接目的であつた地中海沿岸の回敎諸國の代りに、いはゞ之をその背後から擊き得べき、遠隔未知の異敎世界が、如上の新運動の對象となつた。そこに、卽ち『印度』や遠き東方に、昔は加特力敎會成立當時、西方から放逐されたキリスト敎徒（ネストリア派、聖トーマス派）の流が殘つて居る筈である、之を探し出し、之と相携へて廣い福音世界を開拓しやうとの望が高まつた。隨つて航海者、探險者、商人等と相竝びて、夙にフランシスコ派やドミニコ派の宣敎師も亦た南歐を出發した。されば如上の地理上知識の開發と、新しい國土の發見經營竝に敎化の熱望との結合から、知らず識らずの裡に、世界擴大の運動が囂然として起つて來た。この運動たるや、かのルネーサンスが最初主として南歐國民の先驅に任かされてあつたやうに、これも亦た、多くは南歐の冒險者流の先鞭を著くる所となつた。吾人は不幸にも、かくの如くして逸發することになつた地理上發見、植民地開始といふ奔流につきて、こゝにその逐一を物語るの餘裕を持たない、て、只だ有名な、時期作成的な事件のみを一覽的に列擧指摘することのみを以て滿足しなければならぬ。

陸上　東方海上　西方海上

一二四六　法皇使節柏朗嘉賓（プランカルピン）㊍（伊人）

一二五三　佛蘭西國王ルイ九世

使節羅柏魯(プリノ)⑤

一二七一―九五　伊人マルコ・ポーロ⑥の東方旅行及び滞在

一三四一　伊人カナリ島發見

一四一五―六〇　ヘンリ「航海」公の⑦海事奬勵

一四四五―五〇　葡人の綠岬(カボウエルデ)⑧發見

一四八六―七　葡人の喜望峯發見

一四九八　ヴスコ・ダ・ガマ⑨の東航

一五一〇　ダルブケルケ⑩のゴア占領

一五一一　馬剌加占領

一四九二　コロンブスの米國（西印度）發見

一四九九―一五〇〇　伊人アメリゴ・ヴェスプッチ⑪米國大陸發見

一五一三　西人バルボア⑫のパナマ地峽及び南海（大平洋）發見

一五一九―二二　マゼラン⑬の世界周航

一五一九―二一　コルテズ⑭のメキシコ征服

一五三一―二　ピザルロ⑮のペルー征服

一五一七―八　葡人の澳門占領

一五四二　（天文一一年）葡人日本に來る

一五四九　ザヴィエル日本に宣敎す

一五六五　フィリッピン諸島占領

一五八〇　利瑪竇⑯支那に宣敎す

イスパニア、ポルトガルを併

一五八二　コサック酋長エルマック⑰西比利亞征服を始む

一五八五　大村氏等の使節法皇に謁見す
一六二〇　蘭人臺灣に據る
一六三七　島原の亂
一六三九　日本鎖國
一六四八　露人北太平洋岸に達す

一五八八　必勝艦隊の役
一六三〇　新イングランド大規模植民の始

備考　陸地大發見の初期、時の法皇アレクサンドル六世は一四九三―一四九四年に於て御敎書を發して、世界の海面竝にこれによつて發見せらるべき國土を分割指定するために、大西洋上の或る子午線を境と定め、東をポルトガル、西をイスパニヤの各活動に一任することにしたのである。

これを通覽するに地理上發見運動の先驅者は、イタリヤ人を筆頭とし、ポルトガル人、それからイスパニヤ人の順序である。換言すればルネーサンスの人生主義の早く盛んとなつた南歐人民が、地理上世界發見に於ても、先登第一をなしたのである。而してイタリヤ人の間には彼等を統一する國家がまだ成立して居なかつたから、彼等の世界擴大運動に於ける勞作から、その收獲を苅り入れたのは、主としてピレネー半島の君主國であつた。こゝては、既に述べた通り、ポルトガルが一五八〇年に王室の男統絶えたから結婚關係によつて[78]、その地、一時、一六四〇年まで、イスパニヤの統治の下に立ち、加ふるに、その九年前、レパントの海戰に於て、土耳古の地中海に於ける勢力がイスパニヤ竝に法皇を始めとする基督敎世界の海軍のために破壞されて居たるが故に、歐洲人の世界における植民地竝に通商場裡は、殆んど全く、加特力（世界統一の義）イスパニヤ王國の君主フィリップ二世（一五五六―九八）只だ一人の掌中に歸したかの如き觀を呈した。

かくの如くして、世界海面全部は一大專制統一君主の下にあるピレネー半島國民の開拓するまゝに任かされた譯である。我が南隣、フィリッピン群島に於て、イスパニア人の經營が始まつたのもこの時期のことであつた。また、かの南海に漂著した南蠻人が、わが太閤の面前で、その領土に太陽沒することなきカステラの君の稜威を豪語したのも、この頃であつた。このイスパニヤ加特力の世界政策の大展開には、一大宗敎運動が必然上伴隨して居つたこと勿論である。かの上述の二個の托鉢巡敎團の先發につゞいて、十六世紀中葉以來新興の、而もより有力なるゼスイタ敎團が殆んど全世界に亘つて廣大なる敎化と開發との活動を開始したもこの時であつた。

この地理上大發見が歐洲人心に及ぼした影響は、かのコペルニクス[79]の天文上大發見のそれと相竝んで極めて偉大なるものがあつた。試みに、當時十六世紀から十七世紀にかけて、南歐の先進加特力諸

國民中から、如何なる地理上知識の開拓者が輩出したるかを思へ。俗人のそれらはいはずもがな、海外布教者も亦た之に劣らざる功勞者であつた、ゼスイタ教士の支那印度南米に於ける土地自然人民文化等に關する觀察及び報道は、當時極めて斬新有益なるものであつた。また、次に同じ世界開拓運動の舞臺に現はれた西歐中歐の諸國民も、亦た大いに同一知識界に貢獻した。例へば、ドイツ人、地理學者にして地圖及び海圖の記述に創見を出したるメルカトール（一五九四死）、オランダ人、航海記を以て著はれたるリンスホーテン（一五九六）、イギリス人、その一國民の重要なる航海旅行及び發見』と題する大集を出版したるハックルート（一六一六死、その名に因みて一八四六年倫敦に於てハックルート協會起り、紀行類出版を目的とす）の如きである。日本諸嶋が世界地圖上に精記せらるゝはこの頃に始る。之と同時にコペルニクスの流を汲みたる天上の世界の研究は、イタリヤの理學者ブルーノ（一六〇〇羅馬にて宗教刑罰に處せらる）、同じくガリレオ・カリレー（一六一六羅馬にてその地動說取消を餘儀なくさる）、又たドイツの天文學者ケプレル（一六三〇死）等によつて、すゝめられた。かくの如くして、歐洲人の全き世界觀はおのづから一變して來た。

之と同じく、地球上に於ける新舊兩世界の文化及びその天然から取得される富と物資が、歐洲人の政治、經濟、財政に及ぼした影響は、これも亦た等しく廣大にして有力なる世界史的要機である。即ち、金銀の饒多、物價の昂騰、生活の向上、諸國における當時固有の富國策、即ち重商主義（マーカンタイリズム）の競爭の如き皆これである。

この點については、次講に於て說くことゝするから、こゝでは、以下、只だ海上權の推移の大綱だけを注意すれば、足りとしたい。

即ち、上に述べた南歐諸國民の海外發展に對して、西歐の諸國も亦た遲れ馳せながら、十六世紀の進みゆくと共に、漸次海上に乘り出して來た。彼等は歐洲本國におけるイスパニヤに對抗する宗教上、政治上敵對運動と相俟ち、相助けて、ビレネー王國の帝國的支配に反對して海上掠奪戰の火蓋を切つた。故に前講『教會改革及びその反働』中に一瞥した一五八八年の『必勝艦隊（インヴィンシブル・アルマダ）』の役は、この意味に於ても極めて重大であつた。この役は即ち世界の海上權がイスパニアの掌中では頓に挫けて衰運に傾き、やがて西歐國民に移るべき一の顯著なる境界線をなすものである。これからオランダが先づ榮え、古代に於ける雅典やカルターゴの如く、早くも隆盛を致し十七世紀の中葉に至つて、彼等の海上の天下はその絶頂に達した。これは、この早熟の天才國民が德川時代に於ける日本に及ぼした文化影響を回顧して、思ひ合はさるべきである。既にしてその頃、イングランドに於てクロムウェル[20]の共和政治が起つて、英國民の海外運動展開のためにこのオランダの海上跋扈を抑うるを必要とし、第一回の

航海律（一六五一年、69節參照）を發して之を挫いた。次いで同世紀の後半に入つて、フランス王國はその强大な陸軍を以てオランダ本國に侵入して之を蹂躙し、且つ地中海に於てその海軍を擊破した。以上、英佛兩國から蒙つた打擊のために、流石に健氣に立ち廻つたオランダ共和國も、十七世紀の後半には漸次その海上の支配を失ふて來た。その代りに勢力を揮つたのは先づ前記ルイ十四世の下にある强大なフランス王國であつた。けれども、これとても、一六九二年のラ・ホーグ[21]の海戰に於て英國海軍に破られたから、爾來海上に於ける最後の勝利は後者に歸するといふ傾向が作られた。やがて、十八世紀の始に破裂したイスパニア相續役の名を冠する當時の世界戰役に於て、フランスが遂に再度の失敗を演ずるに及んで、イギリスの海上覇權は愈々鞏固となるんとす。

この際、十九世紀に於ける英國の政治的歷史家シーリイ[22]の有名なる講演、『英國膨脹史』の所論を指示するも無用であるまい。この講演者は、一六八八年から一八一五年に至るまでの西歐に於ける諸戰役、一、ファルツ相續役　二、イスパニヤ相續役、三、オーストリヤ相續役、四、七年戰役、五、アメリカ獨立役、六、フランス革命戰役及び、七、ナポレオン戰役、といふ七大戰役を總稱して『近世に於ける百年戰役』と云ふて居る。これは、如上の諸戰役のいづれに於ても、主なる敵對國が英佛の兩國であつて、近世に於ける是等兩强國の世界支配に關する運命は、實にこれによつて決定する、猶ほ中古末の『百年戰役』の如きものがあつたからである。實に、この期間に於て、イギリスの海上權確立し、フランスは一歩を讓つてその下風に立たねばならなくなつた。

再びこれを要するに、コロンブスのアメリカ發見、ヴアスコ・ダ・ガマの東方航路發見以來、歐洲の諸ろの獨立若くば自治都市が經濟上中心勢力として、地中海及び歐洲近海（就中北海）を活動舞臺として居つた時代は過ぎ去り、强大なる君主國若くば國民が經濟財政の單位として、太西洋を世界交通の大道と化して相馳聘する時代となつたのである。それであるから、舊世界の內部に於ては、敎會改革といふ宗敎的政治的紛爭が戰はれて居る間に、海上に於ては、間斷なき通商植民運動が競ひ行はれ、そのうちて、新に發見され開拓されてゆく新世界に關する利害が、前記の君主國又は國民の大活動を喚起する動機となつて來た。世界史の行方は如上の敎會改革よりもこの海上運動の方が次第に盛んとなるに在る。而してこの方面に於ける覇權は、一、ポルトガル及びイスパニヤが魁けし、二、オランダ之につぎ、三、フランス一時盛んて、四、イギリスに移るといふ運命を有つて居る。最後の幸運なるジョン・ブルは今日に至るまで尙ほこれを維持しつゝあるのである。

69　スチュワート王朝[23]（一六〇三―八八）　英國の憲法上衝突及び發展

諸君！　十四五世紀のイタリヤに於ける國家組織のための政變が、近代强國の權力樹立運動の模範

てあつたやうに、十七世紀に於ける英國の憲法問題は、實に近代强國は勿論、今日に至るまでの世界諸國の國憲作成の龜鑑たるべきものであつた。この近代生活に取りて重要なる事件は、私をして比較的に詳はしく說述するの必要を感ぜしめる。乃ち私は之を次の四期に分つて諸君の眼前に展開しやう。

一、起源　一六〇三―四〇年
二、內亂期、一六四〇―四九年
三、共和政治期、一六四九―六〇年
四、王政復古及び妥協成立期、一六六〇―八八年

これてある。なほ、五、結論及び將來をも添へる。

第一期、起源

チュードル家は、英國史あつて以來始めて强大なる專制王權を確立したものであつた。けれども、その最後の君、女王エリザベスは、國民がイスパニヤから獨立を保ち得るために自らは終身結婚せず、却てよくその『無敵艦隊』を擊破して國民的目的を達し、國民の人望を集めて永眠した（一六〇三）。その跡を繼いだのは、メーリ・スチュワートの子スコットランド王ゼームス六世であつた。卽ちイングランドてはゼームス一世である。彼はイングランド人から云ふと、外國君主である。而もその人となり、風采、思想ともに一種の變物にして少しも人民に愛せられなかつた。加之、彼は君主神權主義を抱き、イングランドの國敎たる監督敎會（エピスコーパリアン・チャーチ）の監督（ビジロップ）（司敎）を利用して、恰も對岸に確立したフランスのブルボン家の如き專制政治をば、自分も作り上げ、當にイングランドのみてなく、スコットランドも、アイルランドもすべてを一個の君主權の下に統一せんと欲した。

抑もこの監督敎會は、エリザベスの治世に於て、國民に取りては、國家の獨立と二にして一てある位に必要不可缺制度として確立したものてある。けれども、この敎會は最初は尙ほ寬大てあつて、かのカルヴィンの流（ピューリタン）を汲んだ淸敎派の思想の如きも之をその自由に放任して居つたのである。然るにゼームスは卽位の初、監督會議に親臨し自己の神學的意見を述べ、『監督（ノー・ビジロップ）がなければ國王（ノー・キング）もない』と喝破し、王權統一に缺くべからざる機關として、その國敎たる所以を徹底的に厲行しやうとした。これは實に舊敎的法皇（ポープ）的思想てあつて、當時かくの如き重大な權力が自分等にありとは、列席の監督さへ固より夢想せぬ所てあつたから、彼等一同却て頗る驚駭を禁じ得なかつた。

これと同時に、當時の王室の奢澤な生活と、その緊りなき政策とは、一層國王の收入の增加を餘儀なくした。それは大體次の如き諸事情が存在して居つたからてある。第一、世界の擴大は新世界から莫大なる銀の急激なる輸入、貨幣價値の下落、物價騰貴の趨勢を來たした。『富國策』の著者アダム・

スミスは一五七〇―一六四〇年間に於けるイギリスの穀物の平均市價の暴騰を指摘して約五倍として居る（小麥一クォートの價約十志から五十志となる、尙ほ74重商主義、78經濟上新思想の節參照）。第二、朝廷の奢侈である。殊に皇太子チャールス（後のチャールス一世）はフランスの王女と結婚し、藝術を好み、ネーデルランドの有名なる畫家ヴァン・ダイクやルューベンスを保護するなど、王室の生活振りが頗る派手やかであつた。第三に、海軍擴張は當時の急務であつた。第四に、アイルランド統治策開始された。その方法として一六一〇年以來ウルスタ[25]地方に於て新にイングリシの植民が行はれてアイルランド人は不毛の地に逐はれた、之がために起つた彼等の叛亂を鎭壓すべく、多大の討伐費さへ必要となつた。將來のアイルランド問題の遠因こゝにある。第五には當時大陸における新舊兩派の戰爭に、新敎派援助のため屢々補助金支給が必要であつた。當時中歐では三十年戰役の最中であるからである。以上の事情が輻湊したから、國費多端なるがため、國王の歲入はとかく支出を蔽ふことが出來なくなつた。勿論王の直轄地はあるが、土地といふ性質上、その收入は彈力に乏しい。因て王は封建的收入、商品稅、關稅の增徵を計るの外なかつたのである。

然るに國民はエリザベスの晩年以來、赫々たる國民的戰捷と共に自信を增し、その精神と感情とは溢れて海外發展と學藝の開拓となつて居る。かのシェークスピア[26]（一六一六年歿す）の國民的戲曲はこ

の時期の產物であつた。近代科學的研究の祖にして英國學風の創始者たるフランシス・ベーコン[27]も亦然うである。故にエリザベスの死後、純イングリシ國民に取りては外國出身のスチュワート家が、如上の突飛な、法皇的と見做さるゝ頑迷な思想の下に、之に相當する突飛な專制統一政策を行つたこととて、國民は次第に國王及びその政府に反感を抱き、その不平の聲をウェストミンスタの議場で漏らさずには居れなくなつた。先づ宗敎上にては、從來單に道德的反對を抱くに止つて居たかのピューリタン清敎徒やその他國敎に一致しない者や飽くまで分立を固持するセパレーチスト[28]分離派等は、こゝに一轉して政治的反抗を開始した。又た政治上では、チュードル家專制時代に閉息して居つた民權思想は、再び喚起されて頭を擡げ出した。國民は當時輩出した法律家連の提唱によつて、かの一二一五年の大憲章[29]マグナカルタ以來の先例を詮索提出し、その客觀的眞相の如何は別として、とにかく、是等の材料を自家の利益に解釋し、切りに王權の制限を企てた。王は因てしば〳〵議會を解散した。議會解散はゼームスのとき三回、チャールス一世（一六二五―四九）のとき最初の五年間に三回も斷行されて居る。されど歲入を捻出するには議會協贊は遂に缺くことが出來なかつた、そこで政府は屢々讓歩した。當時尤も花々しい攻擊は大臣彈劾に集中した。かの哲學者ベーコンはこの鎗玉に上げられた一人であつた。彼はゼームスの晩年に於て一旦大臣に登つたが、從來の慣習では單に役德として見逃がされて居る事件のために、この時收賄罪に問はれ

て辭職しなければならなかつた。最も猛烈に攻撃されたのはチャールスの大臣バッキンガム㉙公であつた、彼は國民の膏血を絞り豪奢を極めたとて彈劾された。王は因て議會に解散を命じた。

けれども、つまりは、王は財政に窮し、一六二八年又た議會を召集し、而して自己の要求に對する先決條件として、議會から上つた『權利請願(ペティション・オヴ・ライツ)』㉚を認可するの外なきに至つた。曰く、一、獻納、借上、課稅、『その他これに類するもの』は必ず議會の協贊を要す。二、自由民の禁錮處罰は必ず法律手續による。三、軍人の民家に宿營することは人民の意志に背反して强行せらるることを得ず。四、軍律は人民の刑罰手續に適用せらるべからずといふのである。この案は當時かの大憲章の再現と稱して極めて重要視されて居た。

然るに、翌年早くもこの法の解釋について衝突が起つた。就中、第一項中に噸稅(トンネージ)（葡萄酒一噸につき三志の輸入稅）及び磅稅(パウンデージ)（輸出入品の價一磅につき一志）といふ關稅が含まるゝや否かとの問題が即ちこれてある。換言すると『その他これに類するもの』なる字句の解釋如何にある。議會では、議會の協贊なしに噸稅及び磅稅を徵收し若くば上納する者は、國家の公敵なりとの決議案を造り、將さにこれを通過せしめやうとした。この瞬間に王は解散の詔勅を下した。

チャールスはこれから十一年間議會を召集しなかつた。彼は主として戰局（當時、大陸に於ては三十年戰役、海上ではイスパニヤ對オランダの衝突繼續す）に對して嚴正中立を維持し、財政に於て收入增加を計り、以てこの議會無召集狀態を辿りつゞけた。この變態期間に注目すべき三個の事件が起つて人心を刺擊して居る。

（一）アイルランドの經營。これには有力なる政治家て、後にストラッフォード伯に昇ぼされたウェントワース㉛が、總督としてその局に當つて成功した。愛蘭土に於ける英人の勢力發展及びその土地開發は、實にスチュワート家の時に始つて居る。これが當時王の財政に資すること甚だ大なるものがあつたのである。

（二）ニュー・イングランド移住植民。卽ち宗敎上政治上信仰たる個人主義の立場から、スチュワート家の政治に反對した者が、彼等の理想たる自由の天地をこゝに求めたのてある。既にゼームスの時、清敎徒の內て分離主義(セパラチズム)を取つた連中、所謂巡禮敎父(ピルグリム・ファーザース)㉜の一行三百名が、マサチュセッツに上陸し（一六二〇）、具さに艱苦を嘗めて自己の運命開拓に努力したが、まだ成功するに至らなかつた。かゝる間に、如上の最後の議會解散後、大西洋彼岸への移住植民熱は益々高り來つた。その中最も記臆すべきものは、一六三〇年にウインスロプ㉝が十五隻の船、一千人の移住民を率ねてボストンに上陸したことてある。これを始として一六四〇年までの議會不召集期間に合計二萬人が移住した。これ今

日の有名なるニュー・イングランドの始てある。後幾ばくもなく内亂時代の始となつて、その憲法上衝突の最大危機に於ては、早く有名となるべきオリヴァー・クロムウエルてさへも、當時議會の一員てあつて、或る重要な議案の可否決如何によつて自分がニュー・イングランド移住の進退を決定しやうと思ふて居た程てあつた。かくまでもイングランド憲法問題とニュー・イングランド移住との間に深い關係があつたのてある。とにかくこの樣にして今日米國の精神生活の中心地が形造られた。以てカルヴインの主義と英人の思想とが新世界に及ぼした影響の如何に大いなるものがあるかを察することが出來る。

(三)　船錢（シップマネー）といふものに關して起つたジョン・ハムデン[34]事件てある（一六三七年）。從來イングランドには、その沿岸地方から有事の日に際して隨意に船舶を獻上せしめた例がある。今一六三五年政府は財政上增收を計るためにこれを金錢に改め、而も全國から洩れなく徵收することゝした。時にバッキンガムシャーの一田舍紳士は奮起して反抗の聲をあげた。これなむハムデンその人てある。彼は前國會議員てあつた。彼が課せられた額は僅か二十志に過ぎない。然し彼は船錢そのものを不當としこれを訴へた。時節柄世上の注意はこの一事件に集中された。判決の結果は判事十二名中七名の多數て船錢を正當と認め、政府の徵稅は便利となつた。然れどもこの一事件は益々人をしてスチュワート家の暴虐を思ひ、之に對し憎惡の念を深からしむるに至つた。

チャールスはイングランドに於てかくの如く議會なしに政治を行ふて居た。然るに間もなくスコットランドに反抗が起つたから、遂に再び議會の召集の必要に迫られた。事の起りは、彼の監督制度（エピスコーペイ）[35]を以て全國を統一しやうとする政策そのものに在つた。スコットランド國民は彼等固有の長老教會（プレビテリアン）主義に據りこれに反對し、王の政策を法皇的（ポーピッシュ）であるとして國民の盟約（コヴェナント）を結びて獨立を宣した。チャールスはこれを討伐したが、失敗し、軍資に窮した。彼はこゝに大臣ストラッフォードと計り、再びイングランドの議會を召集することに決したのてある。圖らずもこれが内亂革命の發端とならうとは、實に當時政府の當路者の思ひも染めぬ所てあつた。

第二期　内亂及び革命

議會は軍費の協贊に先ちて、眞先に國民の損害を訴へた。第一に口を切つたのはハムデンてあつた。彼曰く、『裁判官は法を、而して監督は宗教を覆せり』と。この攻擊の槍先にあげられたのはストラッフォードその人てあつた。しかしストラッフォードは正々堂々自家を辯護して屈しなかつた。上院はさすがにこれを救はんと欲したが、下院は議會の非常立法權によつてストラッフォードに對する彈劾案を立法し、之を二〇四對九の大多數を以て通過し、上院に迫りて強いて同意を求めた。上院は二六

對一九を以てこの議案を通過せしめた。これは大權の輕重にかゝはる大問題とて、王の良心の苦惱一方ならず、依つて王は六人の監督（ビショップ）に諮詢した、その唯だ一人が反對したばかりて、他の五人の贊成を得たから、始めてこれを裁可した。かくてストラッフォードは誅せられ終んぬ。これチャールスの大失敗であつた。これがために議會は益々大膽となつて、王及びその政府の過去及び現在の失政二百ヶ條以上を列擧した大諫奏（グレート・レモンストランセス）[36]を提出した。例へばこの時アイルランドに於て、アイルランド人及び古英人植民の子孫、卽ちすべての舊敎徒は蜂起して新敎を奉ずる英人植民を虐殺した。被害者少くとも數千に及んだ。議會はこれを王の法皇的（ポーピッシュ）政策の罪に歸した。クロムウェルが北米移住の行否を決すべき試驗問題と公言したのは、この時の討論である。これは一五九對一四八にて下院を通過した。この際示威運動猛烈を極め、上院に出席すべき監督等は通路を妨げられて引返した。こゝに至つて王は遂に意を決し、親ら兵を率ゐて下院に入りその首領ピム、ハムデン等を捕縛せんとしたが、彼等は遁れて市中に隱れた。議會（その所在地ウエストミンスタは當時市外にあつた）も移つて市中に開會し、亂民と共に王に反抗したから、王はロンドンを去つてしまつた。これ內亂の破裂である。

王軍は騎士及び田舍鄕士から成るものでカヴァリーアと稱され、これに對抗した議會軍はその頭髮から圓顱黨（ラウンドヘッヅ）[37]と呼ばれた。彼等はスコットランドと同盟して王軍に當つたのである。この內亂に於ける勝敗の決はクロムウエルにあつた。元來彼は議場に於ける辯論の雄ではなかつた。彼は實際的人物であつた、その最も顯著なるは鐵の如き意志の人たるにあつた。彼は唯だ彼の熱烈な信仰と、その剛毅なる人格とを以て、自分と同じ傾向の兵士を糾合し、これを訓練統率して行つた。卽ちこれ有名なる所謂クロムウエルの鐵騎隊であつて、淸敎派中の過激派で獨立黨（インデペンデンツ）と稱するものから成つて居た。その結果、王軍は遂にマアストン・ムーア（一六四四）次にネースビイ（一六四五）[38]に敗北し、力竭きた。

チャールスは囚へられ、全く自主の力を失ひ、只だ獨立黨（インデペンデンツ）[37]とスコットランドの長老敎會派（プレスビテリアン）とロンドンの長老敎會派との三者鼎立の關係に依賴して、それ等の間に於て自分の通路を見出すの外はなかつた。彼は最初スコットランド人に通じた。こゝに於てスコットランド人對獨立黨の戰となつた。クロムウエルの兵力は再びプレストン（一六四八）[40]に決勝し、彼はスコットランドを平定した。然れども議會には尙ほ穩健な分子があつて、王はこれに一縷の望を囑して居た。この溫和派に對して、クロムウエルの軍中には軍人會議があつた。このものは兵力を以て議場に闖入し反對議員を放逐した、曰く不純分子を除いて議會を淸めたのであると。形勢かくの如きに至つては、その結果知るべきである。

殘れる議會（ランプ・パーラメント）はチャールスを叛逆罪に問ふべく自分みづから裁判せんとした。上院はさすがに、凡そ王が議會に對する叛逆なるものを考へること能はず、何となれば、議會は上下兩院の外に王を含むものである、王なくしては議會は成立しないからである、この理由に因て全院一致して議會が王を裁判することに反對した。下院はこれに對して三個の政治主義を立てた。(一)、一切の權力の源泉は人民に在る。(二)、下院は人民を代表して至上權を有す。(三)、下院が立法したものは、假令上院竝に王の贊成がなくとも、正當なる法律たるべしといふのである。これらの主義を根據として、下院は自ら委員を出して一個の高等法院を作り、チャールスを裁判した。凡そ英國史上、この時ほど民主主義の過激に馳せたことはない。スコットランドの長老敎會派（プレビテリアン）は、當時主權は人民に在りと主張した。これ頗る思ひ切つた民主主義である。しかし彼等は尙ほ君主權は神權に賴るものであると附加へて、これを保持せんと欲した。然るに獨立黨（インデペンデンツ）はこれを斥け絕對的民主主義を主張した。けれども、この理想の實行には、これと相矛盾する暴力が用ゐられて居る。そは軍隊の力である。かくて王は一私人チャールス・スチユワートとして、ウエストミンスター・ホール[41]に召喚された。王はこの法廷を認めなかつた。軍人は王に向ひて、その生命及び王位は保存すべきを以て答辯せよと、且つ赫し且つ誘ふた。されど王は毅然として『答辯はよく之をなし得る。併し若し自分が答辯をするならばこの法廷を認むることになる。卽ち不法權力を承認するに等しい。朕は嘗て王權の爲めのみならず、人民のためを思ふて居る。故に何等の答辯をも之を拒絕する』と斷言した。之に拘はらず、遂に彼に對し死刑は宣告されたのである。曰く『チャールス・スチユワート、暴君、叛逆者たり、殺人囚たり、イギリス共和國の公敵たり』と。是に至つて彼は君主主義のために觀念覺悟し、徐ろに小供に遺言し、然る後、ホワイト・ホール前の廣場の刑臺に上つた。この時彼は臺上から沈着いて自己の立場を述べた、曰く、『朕は嘗て一旦不正の裁判を認可したることがある。同じ不正なるもの、今や朕の身に報ゆ』と。蓋し彼は、さきに大臣ストラッフォード伯彈劾案を裁可したることを、一生の過として、久しい間悔悟して來たのである。而して彼は天晴れ君主主義の確信と、監督敎會の信仰とを死守しつゝ、靜かに頭を仲べ手を以て合圖した。手斧忽ち降る。この瞬間、數萬の觀衆期せずして異樣の悲叫を發す。時に一六四九年、一月三〇日。

第三期　共和政治期（コンモンウェルス）[42]（一六四九―一六六〇）

(一)一六四〇、卽ち內亂以來ウェストミンスターに着席して居る議會は長期國會（ロング・パーラメント）[43]と呼ばれる運命を有つて居る（一六四〇―六〇）。このものの多數議員が、一六四八年に軍人の手によつて除き去られて、その跡が殘餘議會（ランプ・パーラメント）[44]となり、それで吾人が見たやうにチャールスの死刑となつた。この時、貴族竝に君主政治が廢されて共和政治となつた。是等の政變を指導したる當時の政治上理想は、さきに軍人の

請願（ペティション）（一六四七）に現はれて居る。曰く、（一）、法律の前に於て各個人すべて平等たるべし。（二）兵役は各個人の意志に反して命ぜらるることなし。（三）、宗教に干渉し、又宗教を以て干渉せらるゝことなし。との三個條これてある。今や國家の政局に當るものは唯だ軍隊と下院とが殘つて居るのみて、而して兩者は相對立して居た。而もクロムウェルは、この議會の殘物をも解散せしめた。然しながら形式の必要上、一種の議會を召集したが、その實自らこれを任命したのてあつた。軍人は彼を推して共和國の護國卿（ロード・プロテクター）とした。又この時の議會は曾にイングランドだけてない、スコットランドとアイルランドをも代表し、一切の王黨を排除し、一院制度のものてあつた。國内には尚ほ幾多不穩の分子が潛伏して居る、一方には過激な社會黨分子があり、他方には王黨、竝に加特力教徒があつた。クロムウェルはこれらを鎭壓するため、イングランドに軍政を布き、人民の集會を取締り、演劇、競馬、鬪雞を禁止し、銘酒屋を閉鎖し、大酔を抑制し、全國宛然敵軍の重圍に陷つたかの如く、物々しき警戒ぶりてあつた。クロムウェルは人となり質朴嚴正てあつたから、軍人皆その風をなした。又彼は信仰と主義、常識と秩序の人てあつた。彼は君主に對する忠義を知らず。先づ王、次に貴族、次に下院を倒して、順次にイングランドの政治組織を全然破壞したけれども、これ以上の破壞を許容しなかつた。彼の軍隊の中にも、實は種々の過激分子があり、その内に共產黨、再洗禮派、第五帝國黨等を含んて居た

が、彼の鐵の如き意志はこれを抑壓し、イギリス固有の制度である、敎會、大學、裁判所等を保持するに努め、個人の宗敎心を放任し、只だ加特力を排除したばかりて　長老敎會（プレビテリアン）をも容れたのてある。それてあるから、この共和時代、クロムウェルの護國政治は人民の沈默服從する所となつた。蓋し、彼等の心理は、正統の治世の下に於ける不法の政治よりも、僭奪の治世の下に於ける適法の政治を寧ろ忍ぶべしとしたのてある。

（二）、クロムウェルが上述の如く反對派を嚴重に取締つたのは、一面から見れば國際關係の逼迫によるといつてもよいのてある。その直接原因は、チャールスの死刑がイギリス嶋國の各部、オランダ、ドイツ、フランス、イスパニヤ等に於て、王家に對する同情、共和政治に對する反感を起さしめるに至つたからてある。これに種々の政治上、經濟上の利害が加はり、これ等諸國の反對運動を挑發したのは勿論てある。最初一六五〇年、皇太子チャールスは大陸からスコットランド、次にイングランドに入り、國王チャールス二世として小說的冒險を試みたが、クロムウェルの兵力のために遂に敗走してノルマンディに逃れた。然し王黨は如上諸國の同情と後援とにより、海峽諸嶋や近海を根據として、共和國に對抗した。オランダ人は自然これを助けた。クロムウェルが航海（ナヴィゲーション・アクト）律を發した（一六五一）のはこの機會てある。この規定によれば、一切の輸入は必ずイングランドの船舶によるべし、然らず

んばその物品産出國の船舶に依るべしと。これ明らかにオランダ人の英國貿易に打撃を加へたものである。因みにこれは、今後イギリスが植民地との通商航海を制限するために、しば〳〵發する法律の嚆矢である、之を航海律と總稱す。この第一航海律發布の結果、オランダ戰爭（一六五二―五四）が起つた。けれども當時三十年戰爭中の引續きて、イスパニヤとフランスとは尚ほ交戰中であつた。クロムウェルは新敎徒の利益のために早くオランダと和し、フランスと提携してイスパニヤの版圖を縮むるを可とし、これと開戰して（一六五六―五八）、大陸に於てはヅンキルクを攻下し、又た西印度に於ては、ジャメイカ島[496]を占領した。これ等は一六五九年のピレネー講和てイングランドの所有となつた。就中ジャメイカはイスパニヤの廣大な植民帝國の中央に在つて、始めてイングランドの有力な植民地となり、爾來今日に至るまて西印度方面に於ける英國の海上勢力の中核となつて居る。

（三）クロムウェルの晩年、憲法改革や、過激派の陰謀や、王黨の一揆などの事件が交々起り、國内不安てあつたから、彼れは具さに共和政治の缺點を知り、議會を解散し、議會なしに課稅し、議會なしに戰爭を起し、事實上彼自ら王者たるの觀があつた。その結果、かのチャールス一世に對すると同じ非難の聲さへ起つて來た。しかし、彼の人物の偉大、心事の高明廉潔、彼の目的が國家社會の安寧幸福にあつたことは、よく彼の位置を維持し得て、遂に一六五八年十月三日、チャールスの宮殿ホワイト・ホールに於て彼の波瀾多かりし將た晩年惡魔の如く怖れられた一生を靜かに終へた。かくて彼の死と共もに、彼が維持し得た共和政治は亡ぶに至るてあらう。しかし、彼の政治は永久にその功果を殘したのてある。（一）彼の武力は始めてよくブリタニア諸島に統一的政治を布き得た。これによつて從來封建的獨立を維持して居たものは消滅した。（二）彼はオランダに對して航海律を發し、殊にイスパニヤに大打擊を加へ、イングランドの海上權を地中海及び大西洋に擴げた。（三）彼の政治は三十年戰爭に於て凋落した新敎のために、國際間に氣焰を吐いたもので、これによつてイングランドは新敎主義の強國となつた。（四）彼の政治はイングランドの社會に淸敎主義（ピューリタニズム）の思想竝に生活を扶植した。ミルトンの失樂園（パラダイス・ロスト）[497]はこの背景から生れたのてある。このピューリタン詩人がクロムウェルの祕書てあつたことはいふまてもない。（五）彼は社會黨的過激運動を抑へて英國民固有の秩序、財產、制度を保存した。以上五項は彼の政治から收められた永續的產物てあつた。

第四期、王政復古（レストレーション）及び妥協成立期（一六六〇―一七八八）

（一）一切の反對要素はこれを束縛して居た一大鐵鎖が切斷するや、忽ち頭を擡げて來た。卽ち文武の衝突、君主と共和との抗爭これてある、軍人等は自信を失ひ、再びかの殘餘議會（ランプ・パーラメント）を召集するの外なきに立ち至つた。これ、クロムウェルの死後、その子は職を繼いだが、その人凡庸にして、他にこ

れに代るべき人物が無つたがためてある。この間に王政復古の氣運は熟して來た。殘餘議會は、かの取り除かれた議員等を召還して自ら充實するの外なかつた。それて再び一六四〇年、卽ち二十年前成立當時の議會が立ち返つた、偖てこそ長期議會（ロング・パーリアメント）の名が起つたのてある。かくて天下の事すべてがかの時の逆に進展して行つた。卽ちこの議會は共和を廢して王政を恢復し、チャールス二世を大陸から迎立して後、自ら解散した。新君主は先王を弑した者の處刑の外は一切大赦し、軍人の給料を支拂ひ、監督制度（エピスコーシイ）を勵行し、長老敎會派を許さないこととした。抑もかの清敎徒（ピューリタン）の政治は一個の神の國を作ることを目的としたので、一切の華美、贅澤を禁止し、神（ゴッド）の如き人間（メン）の生活を標準とした。チャールス復位の時、地方には清敎主義の精神と生活との跡方尙ほ深く印し後世に傳はるべきてあるにもせよ、朝廷及びロンドンの生活は、俄かに一變した。それはチャールスの人物が快活て華美を好み、大陸亡命中フランス風の不道德に感染して、品行放縱となつて居た。又た一般社會がクロムウェル時代の反動として放埒の風を成して來た。そこて、世は再び『陽氣（メリー）な君主（モナーク）』いまし、社會には再び『ウィンゾルの陽氣（メリー）な嬶共（ワイヴス）』[48]が實現したからてある。

されば人心は漸く信仰に對して懷疑的となり、冷淡となり、政治や宗敎の爭よりも、寧ろ學藝の趣味や研究に傾いて來た。既に述べた英國科學の祖と稱せらるゝベーコン等の流を汲める學徒が基礎となつて、こゝに王家の保護の下に、所謂王立學會（ロイヤル・ソサエティ）の創立となつたのは、この時のことてあつた（一六六二）。

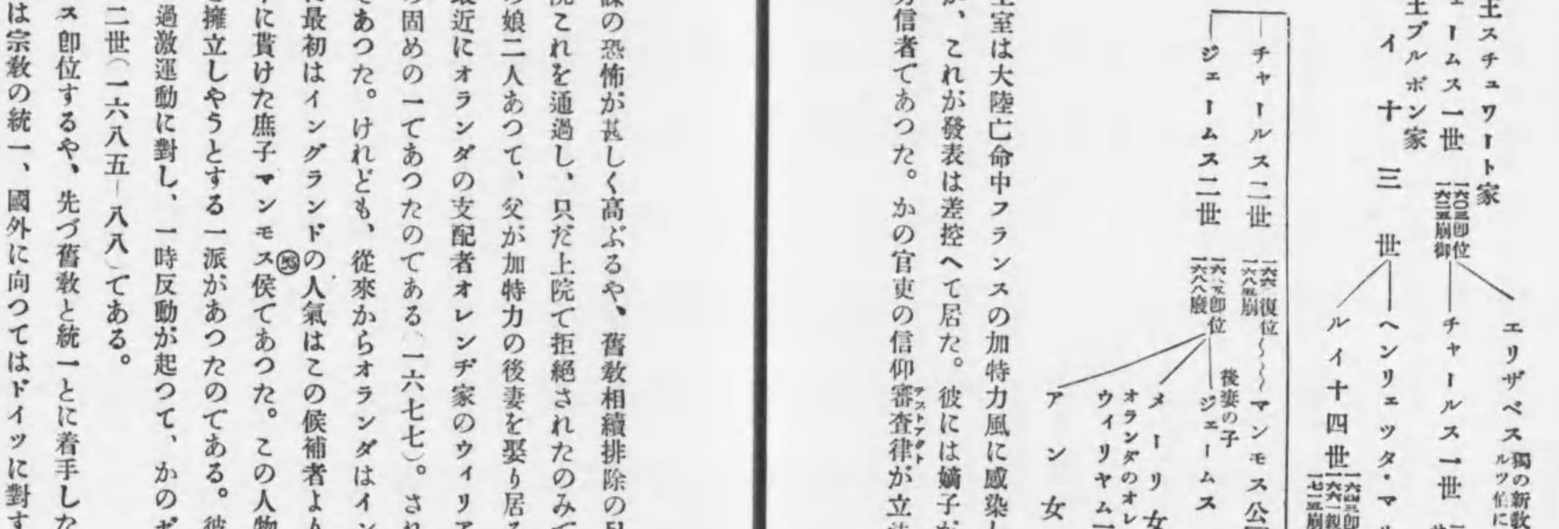
（二）さればチャールスはおのづから金錢に窮し、成るべく議會の協贊を避けて金を調達する工夫を凝らした。その一はクロムウェルが折角取つたヅンキルクをフランスに賣つたことてある。次にはオランダ戰爭（一六六五―六七）が起つた。この役、敵の海軍は一時テームス河口を深く侵入してロンドンを砲撃した。加ふるにその頃偶にロンドン市に大火破裂した。彼此のために全國の財政經濟は沈衰し、人心漸くチャールスより離れ、議會は王と相反目し始めた。既にしてフランス王ルイ十四世はオランダ本國へ侵入の計畫を立て、先づチャールスの窮乏に乘じて、密使を遣りドーヴァー[49]の秘密協商（一六七〇）を結ばしめた。その要旨は次の如くてあつた。ルイはチャールスに年金を給し、その王位の安全を保證し、チャールスは可成早く舊敎改宗を公にし、且つ歐洲戰爭の場合には常にフランスのために行動すべしとのことてあつた。ルイは一方に於て、チャールスと議會との乖離に乘じて議員をも賄ひ、チャールスと議會と相杆格牽制せしめた。當時の議會は墮落して居た。議員等の中にはフランスの外、イスパニヤからも收賄したものもあつた。しかし英議會が歐洲の外交に容喙するやうになつたのはこの時期の習慣によるのてある。それはさて置き、要するに、如上の危機たる一六七〇以後、

フランスの勢力はイングランドを支配した。即ちその國王は全く、議會は屢、ルイ十四世の勢力に左右されたのである。その直接の結果は、スチュワート家がブルボンの尻馬に乘つて、オランダ掠奪戰に參加することとなつた（一六七二―七四）。然し後間もなくイングランドはオランダと和し、兩國の支配者の家の間に姻戚關係が成立した（一六七七）。これイギリス外交の一轉機であることが後で思ひ知られる。

（三）かゝる間に國內には種々の國法竝に憲法問題が續々發生した。オランダ戰爭開始と同時に、國王は信仰容赦（インダルゼンス）の宣言を發し、一切國敎に一致しない者に信仰勝手たるべしと布令した。その實、これは舊敎信者のためを謀つたものであつた。議會はこの宣言を國法違反であるとして反對し、これを取消さしめた。議會は一步を進めて、官吏・信仰審査法（テスト・アクト）[50]を立法した（一六七三）。これによると、一切政府の官吏は、國敎を信ずと云ふ審査（テスト）を經たものに限ると規定されたのである。されど或は舊敎派の陰謀を傳へ、逮捕、監禁、疑獄相次いで起り、風聲鶴唳、人心恟々たるものがあつたから、最後に、凡そ舊敎信者には何等政治に參與するの能力なしとの立法、加特力信不能令（カソリック・ポスセビリチース）[51]、一六七八年發布、一八二九年廢止）。こゝに於て、從來上院には舊敎信者が議員たることを許されたが、これさへ不能となつた。翌年更らに人權保護のために人身保護法（ヘヴィアス・コルプス・アクト）[52]（一六七九）が通過した。これはかの一六二八年の權利請願（ペティション・オヴ・ライト）中の人權尊重の條項を特に立法したもので、特別の重罪を除き、一般犯罪の場合、逮捕後二十四時間以內に豫審を開始し、無罪なれば直ちに放免、有罪なれば保釋せらるべしと規定してある。

抑も當時の根本問題は議會と君主權との權限に關するものであつた。これについて朝野の間に一大論爭起り、こゝに英國二大政黨の名目及起源を見るのである、フィッグ（自由黨）とトーリ（保守黨）[53]即ちこれである。今兩者の主張する政目を比較すると次の如くである。一方は加特力敎徒が法皇的陰謀（ポピッシュ・プロット）を廻らし、公安を破壞しかけて居るから、彼等を處刑すべしと云ひ、他はこの非難を否定し處刑に反對した。又たフィッグは、新敎信者にして而も國敎に一致せざるもの（ノンコンフォルミスト）[54]を容認するけれども、トーリは國敎の統一（ユニフォルミティ）を勵行しやうとした。更らに前者は議會の自由を唱道し、これがために請願したので、『請願者（ペティショナース）』と稱せられた。後者はこれに對して請願權の濫用を排斥する。更らに比するに、甲は人民には君主に對する反抗權（ライト・オブ・レジスタンス）ありとしたのに對し、乙は君主の大權（プレロガティヴ）を高調する。又た一方は王族の中、國憲違反の嫌ある者を王位相續から排除すべしと主張し、他方は、王位相續を正統の順序により規則正しく行ふべしと論じた、以上は兩者の論爭の要點である。

然らば、最後の論點となつた相續問題とは抑も何ぞや。これにはスチュワート家の系圖が必要である。



この王室は大陸亡命中フランスの加特力風に感染した。かくて、チャールスは内心既に舊教に傾いて居たが、これが發表は差控へて居た。彼には嫡子がなかつた。弟ゼームスは海軍卿たり、而して公然加特力信者であつた。かの官吏の信仰審査律が立法されると、彼は辭職するの外なかつた。今や加特力陰謀の恐怖が甚しく高ぶるや、舊教相續排除の目的を以て、排除法案（エキスクルージョン・ビル）（一六七九）が提出された。下院これを通過し、只だ上院で拒絶されたのみであつた。王位の新教相續については、ゼームスの先妻の娘二人あつて、父が加特力の後妻を娶り居るに關らず、娘等は新教の信仰を保つた。姉娘メーリは最近にオランダの支配者オレンヂ家のウィリアム三世に嫁した、これがさきに述べた英蘭兩國の平和の固めの一てあつたのである（一六七七）。さればこの夫婦はイングランド王位相續の有力なる候補者てあつた。けれども、從來からオランダはイングランドと海上に於て利害衝突のある國であつた。故に最初はイングランドの人氣はこの候補者よりも他に傾いた。そはチャールスその人がオランダ滯在中に貰けた庶子マンモス侯てあつた。この人物は『新教公』と呼ばれ、性豪放てあつた。當時實にこれを擁立しやうとする一派があつたのである。彼等はチャールスの晩年輕卒に事を擧げて失敗した。この過激運動に對し、一時反動が起つて、かのゼームス二世（一六八五―八八）てある。

ゼームス卽位するや、先づ舊教と統一とに着手した。これに呼應してフランス王ルイ十四世は、國內に於ては宗教の統一、國外に向つてはドイツに對する侵略策及び戰爭とを、相竝べてます〳〵大胆に開展しうることになつた、これ歐洲國際間の最大危機の一てある（次節70參照）。かくの如きは、猶

ほ百年前のフィリップ二世の下に、歐洲人の經驗したのと同じものてある。この危機を利害關係上最も痛切に、而も最も冷靜に、最も打算的に觀察し、これが對應策を講じた有力なる一政治家があつた。卽ち前記のオランダ共和國の支配者ウィリアム三世その人てある。彼は直接にフランスの大陸侵略に抵抗するの不利を覺つて、先づゼームスの英國統一策を喰止め、以て間接にフランスに打擊を加ふべしとし、こゝに天下の新敎竝に非佛同盟を催ふし、自らその代表者（ディレクター）となつた。彼は自然イングランドのゼームス反對派と消息を通じた。恰もこの時、この危機を早めた一事件が起つた。それは一六八八年六月、ゼームスの後妻の腹から一王子が出生したことてある。こゝに於て反對派はウイリアム夫婦に向つて迎立の招待狀を發した。この書狀の記名調印者は刮目に價する。彼等は七名てあつて『七愛國者』と稱せられて居る、その顏振は、ゼームスのために誅せられた者二人、この危機に際して急に加特力から新敎に改宗した者二人、殘り三人は倫敦の監督（ビショップ）、保守黨の首領（トーリー）、自由黨（フィッグ）の首領てある、卽ち、一切の點に於て當時の國內の要素を代表し、全國民の意向を遺憾なく說明し得るやうに、組み合はされて居る。

ウィリアムはフランスの大軍がファルツに侵入した間に、自分の活動の間隙を得た。彼は一萬四千の歐洲人の——殆んどあらゆる部分を代表する——聯合軍を率ゐてオランダから出帆し、この秋イングランドの西南隅トルベイ[58]に上陸した。當時ゼームスは實にこれに二倍する兵力を擁して居たが、ウィリアム上陸以來、國民と軍隊とが次第に離反し去るを見て、遂に踏み止る能はずしてルイの國へ落ち延びた。人民はこれを遮り止めなかつた。かくて何等の流血を見ずして革命が遂行せられた。これなむ所謂、光榮革命（グローリアス・レヴォリューション）である（一六八八）。

この革命は、やがて開かれた議會の協議會に於て、『權利の宣言』（一六八九）となつて承認確立せられた。この文書は、ゼームス二世は憲法破壞の企あり、彼は位を辭したり、と前置し、國民の權利自由に關する條項を規定して居る。然る後に議會は新敎相續を決定した。

五、結論及び將來。

立憲政治は近代に於てはイングランドに始る。その濫觴は一二一五年の大憲章（マグナ・カルタ）の成立（上院の起源玆に在り）と一二九五年の議會（パーリアメント）（下院）召集とにある。この最初の議會の目的は大體に於て單に收稅事務を補助し、これを圓滑ならしめるにあつた。イングランド議會が最初から豫算協贊權（ヴォーテ・グランティング）を有するものなりと考へるのは歷史的發展の眞相を誤るものてある。この考は、時と共に發生した。その最も強くなつたのは、本節が上來說述した十七世紀の憲法上紛爭時代にある。その極、議會は王家の相續、政府の外交にも容喙するに至つた。このスチュワート家の前期に於ては、吾人の見た如く、內亂卽ち

清教徒の革命があつて、英國の社會までも改造した。けれども、それが餘り過激であつたために、中ごろに王政復古となり、最後に光榮革命に於て一種の妥協成立し、一個の原則が作られた。卽ち新教（プロテスタント）相續（サクセッション）と議會政治とである。新教相續法はフランス的專制的スチュワート家を排して、ドイツ諸侯の一家を迎立することゝなつた。議會政治とは國家の主權は王、上院及び下院の三者から成立すとの前提の下に、下院に於て多數を制する黨派（保守黨、若くは自由黨）が責任內閣を作ることである。この制度たるや、光榮革命以後の外國出身君主たるオレンヂ家時代、次には殊にハノーヴァ家時代、主として十八世紀に於ける政治上經驗によつて習慣上で確立し、一種の不文憲法となつた。これと同時にこの憲法の行はれる地理上範圍は、スチュワート家時代の歷史の進展に基いて擴張された。卽ちスコットランドがイングランドと立法上聯合し、ウェストミンスターに於ける同一の議會に代議士を送りてこゝにて代表されることとなつた（一七〇七）。この統一はイギリス嶋國民の國力發展に多大の貢獻をなした。殊にスコットランド人は十七世紀末以來俄かに經濟上活動を開始した。彼等は大胆な航海者、堅忍な植民者、堪能な通商者、有力な財政家であつた。上述の立法上聯合は、卽ちこのスコットランド人のイギリス國民の一部としての活動と密接な相互關係がある。アイルランドも當時事實上イングランドに合併されて居るけれども、その土民の信仰はイギリスと異なり、宗教上、政治上、經濟上イギリス國民から抑壓され、國民の世界的活動から除外されて居る。隨てその立法上聯合は、スコットランドのそれに比して更らに一世紀おくれて、ナポレオン時代、少ピットの執政期に始めて實現した。かくの如くして今日所謂『大ブリテン及びアイルランドの聯合王國』なるものが渾成せらるべきてある。

更らに注意すべきは議會政治（パーラメンタリズム）と民主政治（デモクラシイ）との關係てある。民主政治は、吾人の曾て見たやうに、古代希臘の都市國家に始る。當時都市卽國家といふ國家の性質上、國內に於ける一切の自由民はすべて議會に出席して、彼等の參政權を直接に行使した。中古伊太利の共和市もまた略ぼ同やうてあつた。スウィス聯邦の農民も亦た然り。されど近代國家にあつては、その性質上、一切の市民の直接參政不可能となり、因て代表者を出すことゝなつた。この事は實にイングランドに於て始まつたのてある。凡そこの代表者が如何にして選出されるかと云ふその方法如何によつて、國家の性質の差別が岐れる。十八世紀に於ける英國の代議士は貴族的中等社會を標準とし、主として廣大な地主から選出され、これに若干の都市の資本家が參加した。かるが故にその議會は頗る保守的てあつた。これ英國民の特性の一が現はれたのてある。故に本節に於て問題とした議會政治は、古代に於ける意味の民主政治（デモクラシイ）でもない、且つまた今日唱道され、しば〳〵實行されつゝある普通選擧に依る議會政治でもない、主とし

て豪族竝に資本家てふ階級が代表せられ居る議會てあつた。故に議會政治と民主政治とを全然同一なりと思ふてはならない。今回世界大戰の結果、一九一八年、英國に於て始めて實行されつゝある選擧制度は、殆んど全く普通選擧てあつて而も女子をも含んて居る。この意味に於て、卽ちすべての自由市民が代表されて居るから、頗る民主的てある。しかし、こゝまて英國の選擧法が發展するには、今こゝて指摘したこの十八世紀に成立した古い選擧制度をば、十九世紀に於て三回も改正し、更らに第四回目、卽ち前記の如く一九一八年に於て一層改良を加へられたによるのてある。これらの發展は、外は國際關係と、內は商工業の發達とに因つて國情が變化して來たから、その結果、必然不可避ものてあつたのてある。要するに、吾人は先づ本義に於ける民主政治と英國に創つた議會政治との區別を會得し、次に議會政治の歷史が、次第〳〵に民主的傾向を帶びて發展したるものてあることを知らねばならぬ。(128參照)

さて、私は轉じて、前述の光榮革命を對外關係より說明するがために、かた〴〵節を改めてフランス王國の隆盛を一瞥しなければならぬ。

70　ルイ十四世　フランス王國の隆盛

(一)　拾七世紀に於ける專制王國の摸範はフランスのブルボン王朝これを建設して居る。その勢力は

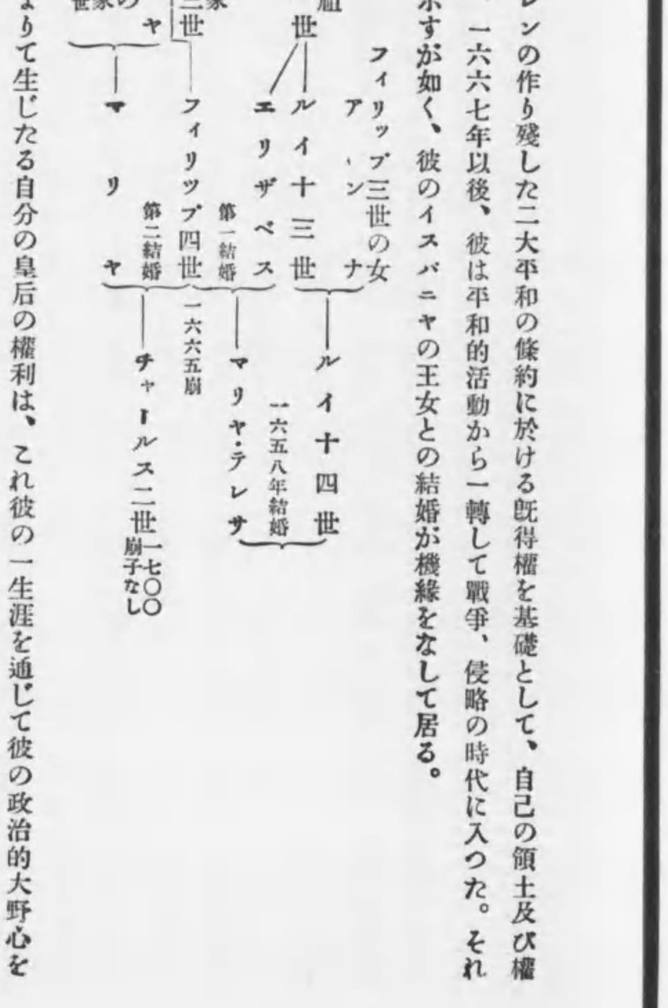
歐洲大陸諸國を風靡し、剩へイングランドの憲法上紛爭の局面にもふかく關係する所があつた。この最後の點は、前節に於て瞥見して置いた。そもそもこの王國の建設は何人によりたるか、先づその基礎を据えた者として、次の人物を指摘せねばならぬ。(イ)ブルボン家始祖ヘンリ四世(一六一〇歿)、及びその宰相シュリ侯。(ロ)ルイ十三世(一六四三歿)の宰相カーディナル・リシュリュウ(一六四二歿)、及びその後任なるカーディナル・マザレン(58)(一六六一歿)てある。ヘンリ四世の君臣は專制王國の創立者てあつた。リシュリュウは主として國內の統一及び三十年戰役の操縱に於て、マザレンは當時幼少なるルイ十四世を輔翼して、外交の發展、就中ウェストファリア(一六四八)及びピレネース(一六五九)の二大平和作成に於て、各成功し、ブルボン家の王國をして歐洲第一等の強國たる實力を取得せしめた。

今やこの王國の發展は第三の時期に入つた。卽ちマザレンが育て上げたルイ十四世の親政する時代てある、而もこのものは尙ほ實に五十五年間(一六六一　一七一五)の治世に亘つて居る。この時代の前半に於て、ルイはマザレンが遺した王國を仕上げて赫々たる威力を發揮した。彼はマザレンの手によつて所謂帝王の道の教育をうけ、英國の學者、ボリングブローク(59)の所謂、古來王位に据つた國王中、最も偉大なるものたらずとも、少くとも君主の尊嚴(マジエスチ)の最上役者てあつた。彼は人となり剛慢自ら率ゆ

ること、猶ほイスパニヤのフィリップ二世の如くてあつた。しかし彼此兩者の間に重大な相違がある。フィリップは羅馬法皇と提携してその世界的版圖を作り、ルイは法王より獨立にて雄偉なる專制王國を企てた。またルイの下には文武の良材多く用ひられ、所謂ルイ大王の時代を形作るのである。軍人には築城家として有名な將軍ヴォーバン(Vauban)が有名である。殊に、親政の初期には（一六六一―六七）コルベール(Colbert)[60]が財務官に任ぜられて、さきにフィリップが失敗し、最近にはリシュリュウ及びマザレンてさへ失敗した方面、即ち財政經濟に於て成功した。當時期のフランスが贏ち得た國家の富强、通商植民の擴大、工藝の增進、學問美術の奬勵、殊にその人民の幸福なるものは、率ねこの商國主義(Colbertism)的政治家コルベールの功に歸すべきてある。

（二）抑もフィリップの作り且つ遺した强大なイスパニヤ王國に打擊を加へ、その歐洲及び海外に於ける利權を蠶食又は割取すべきは、西歐の三國、オランダ、イングランド、フランスてある　今やその中、オランダは早く富强となるや、英佛乃ちこれを蹙め削るに努力して漸次に成功し、それから最後に覇を天下に爭ふものはこれら二國そのものてあつた。これ等の變遷の最もよく現はれたのはルイ十四世の時代てある。私は以下この當時の世界的事變について少しくその波瀾を叙しなければならない。

ルイは既記マザレンの作り殘した二大平和の條約に於ける既得權を基礎として、自己の領土及び權利擴張を目的とし、一六六七年以後、彼は平和的活動から一轉して戰爭、侵略の時代に入つた。それには、次の系圖の示すが如く、彼のイスパニヤの王女との結婚が機緣をなして居る。



即ちこの結婚によりて生じたる自分の皇后の權利は、これ彼の一生涯を通じて彼の政治的大野心を煽る根本動機となるものてある。一六六五年西班牙のフィリップ四世が死んて、その後妻の出てあるチャールス二世が立つた。ルイは自分が先妻の娘を娶つて居るところからネーデルランドに於ける家督相續轉移法(Devolution)[61]なるものを取つて君主の領土相續權に利用し、因て自分にイスパニヤ領ネーデルラン

ド相續の權ありとして、之が要求を起した。かくてこゝにルイの侵略運動の幕は開かれたのである。

一、ネーデルランド役（一六六七―六八）。この役はオランダの仲裁が入つて、エークス・ラ・シャペルの平和となり、若干の領土所得で收まつた。

二、オランダ役（一六七二―七八）。ルイはこのオランダの國際上に於ける專橫の態度に含み、且つその富を奪はんと欲した。それで間もなく復仇戰を開始したのである。しかし、オランダは孤立の地位には落ちなかつた。西東のハプスブルグ家はオランダと同盟し、これを助けてルイに對抗した。そ[62]れてあるから、戰役は世界的となつた。これてオランダは大打擊を蒙り、ナイメーケンの平和となつたが、しかし、土地を割取されたのは却てフランスの東と北との境に接して所領を有するイスパニアてあつたのである。

三、チェムバー・オヴ・レユニオンス[63]（一六八〇―八三）。これは何かといふに、ウェストファリア以來、今は合計四大平和條約が出來て居るが、ルイは是等に於てから得た權利を、フランスの利益に解釋して、北及び東の國境を擴張するの目的を以て、自らが設け自らが訴へて自らが捌く國際裁判所である。その背後には天下無雙の强大な陸軍を擁して居る。その結果、エルザス地方は完全に全部フランスの直轄となつた。その首府ストラスブルグが刃に血ぬらずしてフランスに降伏したのはこの時てある（一六八一）。このレユニオン强行期は實にルイの權力の最隆盛期てあつたといへる。

四、ファルツ相續役（一六八八　九七）。

これはルイが自分の弟のためにライン河畔の要地、ファルツ伯領の相續を要求したのに始まつて居る。これに對し、かのオランダのウィリアムを中心とする歐洲諸國の反抗運動が起つた（前節參照）。本戰役の危機は次の如くてある。

イ、一六八八年、光榮革命（グローリアス・レヴォリューション）、ルイの同盟たるゼームス二世の英國沒落。

ロ、一六九〇年、アイルランドに於けるボイン[64]河上の戰。佛軍を後援とするゼームス二世の恢復戰て、失敗に了つた。

ハ、一六九二年、英吉利海峽に於てラ・ホーグ岬沖合の海戰。英蘭聯合海軍勝ち、海上權フランスからイングランドに移る。

ニ、一六九七年、ライスワイク[65]講和。フランスは大いに讓歩をした。例へばファルツ相續はこれを放棄し、かのレユニオンによつて收得したる土地はエルザスを除く外、すべて還附した。又たロートリンゲン公國（三監督領に非ず）は或る條件の下にその君主に返された。序に、前以つて斷つておく、このロートリンゲン公國は、後、十八世紀に入つてフランスの外交とブルボン王家の結

婚政策とによつて遂にフランス王國に合併された。

五　イスパニア相續役。

如上のライスウイック條約は意外の大讓歩であつた。これはルイが一生の大目的であるイスパニア相續問題が將さに起らんとして居るから、之に對する準備のためであつた。

當時イスパニアのハプスブルグ家最後の君主チャールス二世の臨終は日々に近づきつゝあつた。この際ルイスの外交はマドリッド朝廷に於て成功した、卽ち王の遺言によりルイの孫アンジュー公フィリップ[56]は相續人に指定せられた。若しこの遺言にして實行せられんか、これ列强均勢の破壞である。こゝに於て、イギリス・オランダ、オーストリヤこれに反對して反對要求者オーストリヤ大公カールを

し、互に同盟したから、茲に歐洲と新世界とに亘つて廣大なる世界的戰亂が破裂した。最初聯合軍は概して勝利を得た。英國のジブラルタル占領の如きはその著しいものであつた。かくてフランスは疲弊したが、一七一〇年から十一年に至り、國際關係の變化が起つてこれをその窮地から救つた。何んとなれば、自己の國民的歷史を誇つて居るイスパニア人が、よくフィリップに對する忠義を守り、健げに奮戰して居る際、偶オーストリア皇帝ヨーゼフが死んで嗣子なく、イスパニア相續要求者の一人たるその弟カール大公自ら帝位に卽いたこと、また、英國內閣に政變があつて、從來戰爭を繼續して來た自由黨（ウィッグス）倒れて、保守黨（トーリス）がこれに代つたこと、以上の三大事情があつたからである。

こゝに於て列國ユトレヒトに會議し講和條約を作つた。（一七一三―一四）。これによれば、

（イ）、フィリップはイスパニア本國及び其植民地の國王と認められた。卽ち今日のイスパニア王室ブルボン家こゝに始る。但しこのイスパニアは永久にフランスのブルボンと合併することなしと規定されてある。

（ロ）、新皇帝カール六世は伊太利本土に於けるイスパニア領、サルディニア[57]及びネーデルランドをうけた。その結果、ネーデルランドはオーストリア領ネーデルランドと稱し、ミラノ及びナポリも亦たオーストリア領となつた。

(ハ) オランダは國防上の必要のため、このオーストリア領ネーデルランドに於ける境上の城砦若干をうけた。

(ニ) 英國はイスパニアからジブラルタル[68]とミノルカ[69]を、フランスからニューファンドランド、ノヴア・スコチア及びハドソン灣地方[70]を讓りうけた。

(ホ) サヴォヤはシチリアを得た。但しこのシチリア[71]はサルディニア王と稱した。

(三) 要するに、ルイ十四世はその親政の初期、よく人民の繁昌を進め、フランスの最も幸福なる時代の一を實現したが、早くもその大規模なる侵略策を發展し、中年までは、イスパニア領を削り、オランダを苦め、イングランドを自己の勢力範圍に容れ、レユニオンスを行つて、いづれも著々成功した。この間、巴里の郊外に、ヴェルサイユ宮を修築擴大し、朝延宮室庭園の偉觀を張り、詩人モリエール、ラシーヌ、コルネーユ等出でゝ大王の御世を飾り、天下の君主政治の美望の的となつた。しかしながら、彼は一六八八年以後、侵略の鋭鋒を挫かれ、最後のイスパニア相續役に入りては、自分の孫をその位に据えるの目的を達したといふ利益の外は、大體に於て失敗した。その結果、フランス王國はルイ時代に於ける擴大を保持して居るけれども、彼の專制と戰爭とのために疲弊し、殆んど破產に瀕した。よしやフランスが之がために大陸に於ける一等國たる威名を失ふたのではないにしても、後年の佛國大革命の遠因實に『ルイ十四世の御世』に胚胎することは爭へない。而してイスパニアの歐洲に於ける國外版圖は分割され　英國は佛西兩國を削つてひとり海上發展の基礎を作り得た。

尙ほ、本節中の通商植民、海上發展に關する事項は、次講75節重商(商國)主義の題下で多少補說せらるゝ筈である。

71 オーストリアの擴大　プロシヤの勃興

(一) ウェストファリア平和以後のドイツは帝國としての威力全く失墜し、その皇帝は有名無實となり、只だ諸君主に對して格式を定め、稱號を賜ふの外、殆んど何等の實權を有しなくなつた。彼が全帝國から得る歲入は僅か一萬圓內外に過ぎなかつた。帝國の軍隊は憫笑すべき程薄弱であつた。帝國の裁判所は事務が澁滯してその威信地に墜ちた。皇帝及びその帝國はかくの如き狀態であつた。これに反してこの榮位を世襲するオーストリア・ハプスブルグ家は一個のオーストリア君主として、その家の領土をドイツ以外にも、擴大して益々尨大となつた。諺に曰く『幸福なるオーストリアよ、他にはマールス(軍神)が與ふるものを汝にはヴィナス(愛神)[72]が與へ給ふ』と。然り、この家に政治上の祝福を齎らしたものは第一に結婚關係である。その次には外交であつた。既に十六世紀に於てハンガリの大

部分を獲得した。十七、十八の兩世紀はオスマンリ・トルコの衰弱期であつた。この期間にオーストリアは屢々トルコと戰つて、ハンガリ領を擴大してバルカンに對する一大強國となつた。加ふるに前節で說いた如く、イスパニア相續役の結果、ネーデルランドを取得し、且つイタリア半島に於て多大の領土を收めた。更らに十八世紀に於ては、よしやナポリ、シシリアをイスパニアに讓り、ブロシャのためにシレジア[73]を割取されたけれども、ポーランド分割に參加して一層東北に向つて擴大した。かくの如くしてオーストリアはその家古くして高貴なると、その領土の廣大なるとにより、ドイツに於ける歷史的强國として重きを成すのである。

(二)　當時、十八世紀のドイツは、このオーストリアを始として、約三百五十の大小獨立部の割據關係が著しく活動する舞臺であつた。當時の獨逸諸君主は各自に巴里及びヴェルサイユ[74]に於けるルイ十四世大王の專制政治を模範とし　都市及び弱小なる獨立部を壓迫し、人民を虐げ、帝國の名譽も國民の利益もこれを蔑視し、屢自己の利益のために外國の干涉を招來し、又は甚しきは外國と同盟し、外國のドイツ侵略を看過しつゝあつた。就中注目すべきは、選擧公（ケールフュールスト）である。このもの當時定員七名が增加して九名となつて居る。その內三名は各帝國以外の王冠を賜はり、若くばこれを取つて皇帝（カイザー）に拮抗して居た。卽ちサクソニー公はポーランドに、ハノーヴァ公はイングランドに、ブランデンブルグ境伯はブロシャに於て各國王となつて居る。

(三)　この中でブランデンブルグ＝ブロシャ[75]の發展は極めて特徵的である。この王家ホーヘンツォルレルン[76]はもと南獨逸から出て、一四一五年、ブランデンブルク境伯（マルクグラーフ）に封せられた。一五二五年、その一族は別に、かの獨逸騎士團の國ブロシャが公國に化した際、その公となつた。兩國ともにルテル派に歸依して居た　一六一八年前に、この一族關係によりブランデンブルクはブロシャを合併し、一六四〇年以後、有名なる『大選擧公』フレデリック・ウィリアムの卽位と共に國力を培養し、オランダと好を通じ、その文明を輸入して漸く開け、更らに所領を西に擴げ、國家强大の基礎を固めた。その子フレデリック三世は華美虛飾を好み、イスパニア相續役の時　オーストリアを助ける報酬として皇帝から王號を賜はり、國王フレデリック一世と稱した。しかしブランデンブルグ王とは言はず、獨逸帝國以外の地たるブロシャを以て王と稱した、蓋しオーストリアに遠慮したのである。さればその卽位式はブランデンブルグの都伯林で擧げず、ブロシャの都ケーニヒスベルグ[77]に於いて行はれた（一七〇一年一月一八日）。これをブロシャ王國の建國とする。今後ホーヘンツォルレルン家君主が自己の權力の神聖不可侵を主張する場合には、必ずケーニヒスベルグを根據とするのはこゝに基いて居る。

(四)　ブロシャ國王第二代フレデリック・ウィリアム一世は勤儉尙武、好んで壯丁を驅り集めて軍隊を

作り、宛然一種の軍事狂の觀があつた。されば、巨萬の富と精鋭なる軍隊とを殘し、これをその子に傳へた。子とは卽ちこれ、フレデリック二世、所謂大王である（一七四〇—八六）。この人は多方面の天才であつた。その趣味は當時の天下の文明國たるフランス風に傾き、その學藝を好み、就中、フランスの文豪ヴォルテールと交はつた。實に彼自らは一個の風變りの哲學者であつた。而して人となり剛毅明敏で勵精治を圖り、內治、外交、軍事のいづれにも竝び秀でて、その治世四十六年間の多事多變なる生涯中に、自分の王國を盛大にして、一個のドイツ的偉業を完成すべきである。彼は卽位の年から、そのマキャヴェルリ的策略と手段とを以てオーストリア相續役（シレジア役、一〇四〇—四八）において、オーストリアのシレジアを占領且つ維持し、次いで七年戰役（一七五六—六三）、といふ世界的係爭の渦中で苦戰し、よく墳、露、佛の三大強國の三面合擊に耐えてシレジア領有を確保した。是等兩大戰役に於ける對手は皇帝カール六世の唯一の相續娘マリヤ・テレサ[178]（一七四〇—八〇）であつた。フレデリックは尙ほ晩年に於てポーランド第一回分割（一七七三）を促してこれに參加した（次節）。畢竟、彼は大選擧侯以來のブランデンブルグ＝プロシャ聯合軍國を完成して、これを始めてドイツに於てオーストリアに對立する強國の位置に高め、歐洲に於ては五大強の一に列せしめた。この事業の偉大たるは、フレデリックの王國の他の列強に比較して土地の貧弱、人口の稀薄といふ事實に鑑みて、

當時のみならず、後世人々の驚嘆措かざる所である。彼は身を以てスパルタ的勤儉を行ひ、土地の開墾、運河の開鑿、植民地の設定、家屋の建築、大小產業の奬勵、領土の擴大、七年戰役に於ける英國との同盟、宗敎上の寬容、裁判刑法の改善等により、治世四十六年の間、終始一貫、ひたすら國力の充實を圖つた。その死んだ時、金六千萬ターレルを殘し、歲入二千二百萬ターレルに達し、而もその半額以上を軍備に費した。それもその筈、彼が卽位のとき父の殘した八萬三千の軍隊は、この時增大して二十萬となつて維持された、卽ちこの時の全王國の人口六百萬、卽ち人口三十人につき兵士一人の割合であつた。フレデリック曰く『國利卽ち朕の利なり。若し兩者一致せざることあらむか、朕は國利を取らん』と。又曰く『朕は國家の第一の僕なり』と。これをルイ十四世に歸せられる『國家は朕がものなり』との傲語に比較したるならば、兩者の思想の間に好對照を見出し得るであらう。

抑もフランスもプロシャもいづれもおとらぬ專制國家の範として知られたが、その間に自ら相異る所がある。ルイはその一身のみを重んじ、フレデリックは國家及び人民の爲を思ふて居た。つまり、プロシャは家長的專制國家であつて、十八世紀啓蒙時代に於て、他に見るべからざる模範國家として全歐の等しく注目する所となつた。

（五）蓋しフレデリック大王の時代は、ドイツに於ける新強國竝に新文化の發生の新時期を作るもの

てあつた。

新强國とはプロシャてある。この强國は、今日の最新の標準によつてこれを見れば、幾多の封建的餘習を保持し、尙ほ舊式の軍國たるを免れないのてあるけれども、當時にあつては、かの最も進歩したフランス王國に特有なる腐敗には未だ感染せず、ドイツに於ける諸國中に於て他に見るべからざる好治績をあげ、最も能率高き有功な國家てあつた。これを作り上げたフレデリックの政策は、これを今日の術語を以て評すると、一種の國家社會主義的立脚地に立てるものてあつた。プロシャの强味は實に茲に存する。一世紀後、ドイツの國家社會主義的政策を實現した政治家ビスマルクも、(113)、實は彼の先例を『老フリッツ』の政策に見出した。次にカイゼル、ウィリアム二世も(118)、亦たその平生崇拜する祖先中に於て、最も多く斯の大王に私淑したと云ふのは偶然てない。フレデリック在世中、その晩年、オーストリアに於てもプロシャに刺激されて改革の必要が感ぜられた。卽ちマリア・テレサの子、賢明なるその君ヨーゼフ二世(一七八〇―九〇)は母の死後、斷然信仰の自由、修道院解散、農奴解放、裁判制度の改正を企て、以てその散在せる種々の領土の統一と改良とに著手した。然るにその國家には彼の改革を沮むべき幾多の固有の困難が横はつて居り、それにヨーゼフは中道にして早くも崩じたから、オーストリアは改革の挫折したまゝて、フランスの大革命時代に遭遇すべきてある。

然らば、如上の所謂ドイツの新文化の發生とは何ぞ。他なし、幾多の學者文人が輩出してルネーサンス、及び宗教改革時代の文化の流を再興して近代ドイツ思想の基を開めたことこれてある。卽ち、ウインケルマン(79)の『希臘美術史』(一七六九年)は獨逸の古典派(新人生派)を開き、レッシングの『エミリア・ガロッティ』(一七七二年)、ゲーテの『ウェルテル』(一七七四年)、シルラー『ロイベル』(30)(一七八一年)はいづれも政治上、社會上、思想上意義ある作品てあつて、殊にケーニヒスベルグ大學の哲學者カントの『純理の批判』(一七八一年初版、一七八七に第二版を發刊す)が出て、獨逸思想の根底を築いた。これら皆フレデリック治世中のことてある。以て彼の治世の文化史上意義を思ひ合はすべきてある。但し、このドイツ文化の發展が、國際的大勢力として活動し、その威力が世界に加はり、諸國民の長敬を惹くことになるのは、大革命破裂後、十九世紀初期に始る。十八世紀に於けるかくの如き文化の威力は、イギリス思想、殊にはフランスの啓蒙運動に發すべきてあつた(76 77 78 93 參照)。

72　ロシアの勃興、スウェーデンの衰弱、ポーランド分割

(一)　舊ロシア(八六二―一六八九)

この間を次の三期に分つ。

一、ワリアーグ(31)の侵入及びビザンツとの關係の時代(八六二―約一二〇〇)

二、蒙古人に支配せらるゝ時代（約一二〇〇―一四〇〇）

三、モスコー[82]大公の興起及び支配の時代（一三八〇―一六八九）

ロシアの領土擴大の道具となつたものはコサック[83]であつた。コサックとは本來、人種名ではない。ロシアが未だ強大でなかつた時代に於て、ロシアの國境地方に於て雜人や亡命の人民が團結した團體である。その事業は漂泊奪掠と、農業牧畜とも兼ねた。その血族は多くはスラヴであるが、タタル[84]人即ち東方の野蠻人も參加して居る。つまりスラヴの村落や、タタルの商隊（カラヴァン）から逃亡して自由を求め、『野原（ステップ）の人』となつた群であつた。ロシアが蒙古人の支配を脫して東及び南に擴大するや、これ等の平和攪亂者處分の必要を感じた。因てこれに向て遠征隊を送り、これ等の人民の移住地の轉換を行ひ、その中、ドン＝ウラル[85]の間に留る者をロシアの主權の下におき、平素は一定の土地を與へ、事あるときは出兵せしめた。これロシアのコサック軍隊の始てある。而てコサックの亡命者は更らにウラル以東にも活動し、その一人は十六世紀末にシベリアの大部分を侵略征服した。イェルマクこれてある。ロシア政府はかくの如き冒險者流の事業を追認且つ保護し、換言すれば、コサック組織を擴張且つ利用して行つたから、十七世紀中葉にはロシアの植民は既に北太平洋沿岸まで達するに至つた。その結果の一は當時最隆盛期にある清國との折衝てあつた、この關係は一六八九年有名なるかの尼布楚（ネルチンスク）條約[86]（康熙二十八年）となつたのてある。このシベリア柘植の利益の最大なるものは毛皮の取得てあつた。既に吾々の見たるが如く、南歐竝に西歐諸國がそれ〳〵海上に於て世界に向つて植民しつゝある間に、如上のロシアは陸上に於て廣大なる植民地を開拓した。しかし、ピーター大帝の現はれるまてのロシアは、歐洲に於ては、西はスウェーデン、ポーランド、南はトルコてふ强國に塞がれて、何等の海口を有しない國家てあつた。故にロシアが近代國家となるには、領土上に於て既に一大缺陷なることは自明てある。

（二）、近代ロシア（一六八九以後）

この間に、ロマノフ[87]家が一六一三年以後起つて一切ロシアのザールとなつて居る。この家は一九一七年、最近の革命まて引きつゞき治世した。但し實は十八世紀の中葉以後、男統は絶えて、ドイツのホルスタイン・ゴトルプ家の系統となつて居た。

十七世紀の末つ方、トルコがオーストリアとの戰爭に從事しつゝある時、ロシアの皇帝（ツァー）はこの虛に乘じて南征し、アゾフ[88]を取り、以てロシアの出口を黒海に開いた（一六九五）。これ、ピーター一世（一六八九―一七二五）卽位初年の事業てあつて、彼が治世の特徵を象徵するものてある。

彼の有名な西歐見學旅行はその翌年に始る。彼は歸國するや、鋭意治を圖り、これと同時に、スウ

ニーデンからバルト海への出口を奪取するために、所謂北方戰役を起した(一七〇〇―二一)。これ恰も西歐ではイスパニア相續役の最中と同時代である。この戰役には、ポーランドも、プロシアも皆參加した。最初、スウェーデン王、チャールス十二世は勇猛であつて、妄に戰場の功名を貪つて南ロシアに侵入し、却てピーターのために(89)ポルタヴァ一七〇九)の一戰で敗られた。これ實に本戰役の決勝戰である。全戰役の結果、スウェーデンはドイツに於ては、前ポムメルンの北半部を除く外、一切の領土を、バルト海の東北方面では、フィンランド(90)を除く外、一切の領土を、いづれも失ふた。是等の獲物の分前に於て尤も利益したのはロシアであつた。この戰役中、ピーターは早くもネヴァ河畔(91)に新都を營むだ。これなむ卽ち『ピーターの都』で、ペテルブルグといつた。今のペトログラードで、まさしく、宛ら東方的暗黑の影さすロシアが、今後、大に西歐文明の光を受取るべき窓となるものである。

ピーターの志を繼ぎ近代ロシア建設事業を祖述した君主は、彼の後四十年にして現はれた。卽ち女傑カザリン二世(一七六二―九六)その人である。初め、ピーターの死後、ロマノフ家の政治再び混亂に陷り易くあつた。ピーターの外孫、ホルスタイン・ゴトルプ家(92)出身のピーター三世が立つ。彼は獨逸流を好み、殊にプロシヤのフレデリック大王を崇拜した。當時フレデリックが、七年戰役の晩年の苦戰中、幸に息をつぎ得たのは、この皇帝(ツァー)が彼と單獨媾和をしたのに由る。然るにこの君主はロシア國民の間に不人望であつた。皇后これを察し、夫を廢して自ら帝位に上り單獨に自分一流の支配を始めた。卽ちこれカザリン二世である。彼女はこれも亦たドイツ人であつたが、よくロシアの國民的氣風を知り、近代ロシア文明の基礎を完成した。卽ちその身は不品行であつたが、一方には西歐文明を理解尊敬し、フランスの啓蒙學派殊にその百科學者と交流し(77)、彼等から北方の光と仰がれ、よくロシア上流社會に西歐思想を輸入し、所謂『インテリゲンチヤ』階級の源を開いた。之と同時に、彼女はロシア傳來の土地竝に海口に對する慾望を滿たした。殊に、トルコとは二大戰役を戰ふて土地を黑海海岸に拓き、且つコンスタンチノープル(93)にロシアの代表者を出してトルコ領內に於ける基督敎徒保護權を取つた(クチュク・カイナルヂイ條約、一七七四)。これ、今後ロシアがトルコに對する保護乃至干涉を行ふべき條約上出發點となるものである。

かくの如くしてトルコに對しては十八世紀中葉までは、オーストリア獨り侵略的であつたが、これから以後、北方の巨人は歷代この舞臺に現はれてオーストリアと南下を競ひ、寧ろこれを壓倒するの概あるに至つた。これと同時に、カザリン二世はポーランド分割を行つた。

(三)　ポーランド分割。

抑もポーランドは十四世紀後半にリトウアニア(94)と合併して始めて大國となり、十五、十六世紀に東

西に擴大して最隆盛を極め、而も早く十七世紀に衰弱し、今や十八世紀に分割されて滅亡せんとす。この衰亡の原因は他なし、ポーランドでは特權階級ひとり跋扈して、中古のまゝなる惡政が行はれ、これに反してこの國の周圍には、十八世紀の新風潮によつて改革の行はれた結果、强大なる統一ある國々が起つたからである。然らば何故にポーランドは惡政を續けたか。そは、この國は舊王家斷絶後、貴族の選擧王國となり、彼等の跋扈とその弊害が甚しかつたによる。詳しく云へば、(1)貴族は自分等の間で國王を選擧する權利を有し、或は外國君主を選立したことすらあり、加ふるにかくの如くして選立されたる君主と特約を結び、その君主權を制限した。(2)彼等は議會に於て何人と雖も自由禁止權（リベルム・ヴエト）を有し、一人とても『余之に反對す（ヴエト）』と云へば、何等の法案も成立し得ざること。(3)彼等は不平あるときは同盟權を行ふ、卽ち相結びて反對政府を作り得ることてある。現に第一分割の際一個の斯くの如きものが成立して居る。加之、國內には國人の宗敎たる羅馬加特力の外に、ロシア人と同信仰てある希臘加特力もあり、又プロシヤと消息を通ずる新敎徒もあり、而もいづれも國敎のために抑壓されて、不平を抱いた。されば國民と云へば只貴族のみが國民てあつた。その下には殆んど奴隷同然の農民があるのみて、國民に中等社會といふべき堅實な要素が缺けて居た。商人や資本家が居れば、そはすべて猶太人若くばドイツ人てある。かくの如く、ポーランドは、十八世紀後半に於て、强國としては最も

進歩に遲れ、その政治、宗敎、社會狀態はすべて外國の干渉容喙を招き易い有樣てあつた。若し貴族等が眞の愛國心を維持し、何等の外國の金力乃至威力に誘惑又は壓迫されなかつたならば、かゝる不幸は起らなかつたてあらう。

一七六三年、國王アウグスト死（ママ）だ。この人は元來ドイツ諸侯の一なるかのサクソニア公である。故に後任の選擧に於て、サクソニアの相續者と、ロシア女皇カザリンの寵愛したポーランド貴族の一人との爭となつた。カザリンはプロシヤのフレデリック大王と妥協して選擧を操り、容易に自分の寵者を選立せしめた。これからロシア公使の勢力はポーランドに於て强大となつた。既にしてカザリンのかの第一トルコ戰役が起つて、ロシア軍はダニューブ州（今日のルーマニア）を占領した。オーストリア(95)のヨーゼフ二世は均勢破壞を虞れ、これが維持の必要ありとし、抵抗の薄弱なポーランドからジプス地方を占領した。これ一個の暗示をなしたのてある。何んとなればロシア若しダニューブ州領有を貫徹せんとすれば、歐洲諸國の干渉を惹起し、歐洲の戰亂となるかもしれぬ、それよりもロシアはポーランドそのものに於て容易に割取し得るのてある、換言すればロシアはバルカンに於ける賠償をポーランド分割に於て求むべく、オーストリアもプロシアもこれに均霑することとなるべきてあつた。この考はフレデリック大王から發して居る。彼は使をカザリンに遣つて交涉し、彼女の同意を得た。こ

れフレデリックの外交の成功の一である。ここに於てポーランド第一回分割が容易に行はれた（一七七二）。

カザリンの晩年、既に西歐に於てはフランス大革命破裂し、これに伴ふて西歐に世界的大戰役が起つた。この虛に乘じて、東北歐に於てポーランドの殘部は二回に分割されるのであつた。その導火線はポーランド志士がフランス大革命の思想に刺擊されて國民の自由獨立を恢復せんとしたことに在る。彼等は最初憲法を改定して世襲王國とした。然るに貴族の一部はこれに對する反對同盟を結んだ。ロシア、プロシア兩國は後者を利用して第二回分割を行ふた（一七九三）。かゝるポーランドの悲運に際して、最後に、彼等の志士の一人コシゥスコ㊾は蹶起して天日の挽回を計つた。彼はさきにフランスのラファエットと同じく、最近に米國獨立軍に參加し、歸つて母國の自由を呼號したので、所謂新舊世界の英雄と稱せらるべき人物であつた。けれども、獨立恢復軍は戰敗れ、その運命は窮つて第三回分割（一七九五）となつた。この時はオーストリヤも再び分前を取つた。かくてポーランドは全く政治地圖の上から消滅したのである。

因に如上三回に亘つた分割の總結果、ポーランド王國は次の如く三國に分配されたのである。

	面積	人口	重なる都邑
露	一八一、〇〇〇方哩	六、〇〇〇、〇〇〇	ウィルナ ブレスト・リトウスク
墺	四五、〇〇〇方哩	三、七〇〇、〇〇〇	クラカウ レムベルグ ×ルブリン
普	五七、〇〇〇方哩	二、五〇〇、〇〇〇	ポーゼン タンチッヒ ×ワルシャウ

備考　×印の都市及びその地方は一八一五年の再協定以後ロシア領ポーランドに入る

73　結論

吾人は最後に本講を回顧しその總體を拾收するの必要を感ずる。これを約言すれば次の如くである。

中世の末、近世の初、ルネーサンス及び人生主義（ヒューマニズム）と平行して、先づ南歐諸國が海外運動を展開し、西洋人の勢力を全世界に擴充するの端を發した。蹱いて西歐諸國はこれら南歐國民の跡を逐ふて却て自ら優勢となり、最後の勝利は西歐の島國の手に歸しつゝあつた。如上の海外運動は最初は主として冒

險者流の發意、專制君主の保護に負ひたるも、時と共に諸國の國民的事業となるの傾向を示し、その尤も國民的、卽ち擧國一致的なるものが尤もよく成功することゝなつたのである。卽ち島國民イギリス人である。この國民は夙に十七世紀の有名なる憲法上紛爭を切抜けて、議會政治を築き上げて以て國民の穩健なる民主的傾向を創立した。卽ち『光榮革命』後のイギリス政治上發展は、尙ほも大陸から迎へられた外國的王朝ハノーヴァ家の下に引き續きて進行し、その三代目君主ジョージ三世（一七六〇―一八二〇）一時は個人的關係の專制政治恢復を企てたけれども失敗し、如上の大勢を防ぐ能はず(79)、『君主は治世す、統治せず』、『代議されずして課稅さるゝことなし』が象徵する憲法主義の確立に向ひつゝある。これと同時に、國民の海外發展はその經濟發展と相竝ちて、產業革命の開始、海上帝國の創立、世界市場の開放運動となるべく、文學上では、夙に『ロビンソン漂流譚』（デ・フォー作、一七一九）てふ冒險小說となり、又た『支配せよ、ブリタリヤ、支配せよ波濤を』の國歌（トムソン作詞、アルン作曲、一七四〇演奏）となつて居る。フランスのブルボン王國はこのイギリスと覇を海上に爭ふたが、『近世の百年戰爭』てふ七大戰役の斷續中、只だ米國獨立の戰役に於て一成功の機會を握りたるのみ、とかく失敗がちにして、終に全然の失敗者となるの歷史上運命を荷ふて居る。而も十七、八世紀に於てその强大なる專制政治を大陸に確立し、その燦然たる文化と相俟つて、歐洲大陸第一の强國と稱せられた。かゝる間に、敎會改革の紛爭と、南歐君主國との朝家相互の姻戚關係との裡から、苦惱と幸運とに交互に見舞はれながら、オーストリアのハプスブルグ家は擴大して、中歐に於ける歷史的大國たる面目を維持した。これに對して北獨にプロシアの家長的軍國起り、他に比して尙ほ小なりと雖も、武勇と、規律と、精悍と、外交とを以て起り、新に列强に伍した。かゝる間に、東北歐では、ギリシャ・スラーブ風文化社會の裡から、東スラーブ、卽ち膨大なるロシアは漸く擡頭して來た。このものは南歐及び西歐諸國民が海上に馳驅しつゝある間に、自ら陸地續きに東方に擴大して太平洋上に遂し、次いで十八世紀の西歐列强發展時代に入つては、頓かに西方に對する海口を開拓し、西洋文明とその政爭との渦中に入り、宛然東北の巨人たるの觀があつた。かくて、十八世紀に於ては英、佛、墺、普、露といふ近代歐洲の五大强が成立した。

如上の五大强發展の裏面には、幾多の國際間の悲哀と零落と、その上に罪惡さへが伴ふて居る。卽ちピレネー國民の海上帝國竝にその歐洲に於ける覇權の瓦解、オランダの世界に於ける海上權の興亡、スウェーデンのバルト海に於ける制海權の失墜、ポーランド王國の分割の悲劇、オスマン・トルコの老衰是れてある。

第十七講　十七八世紀に於ける思潮

前講に於て世界の擴大と五大強の成立とを見て來た私は、茲に諸君と共に、その間に於て、これらと相表裏して、如何なる政治上、經濟上、はた社會上思潮が竝び行はれて居たかを、一瞥するの必要を感ずる。而して私は特に十七・八世紀のそれらに重きをおきたい。

74　專制主義（アブソリュチズム）

中古の政治上個人主義は體現して封建の階級なるものの自由、卽ち特權となつた。しかし、これらの一切の階級の上に、加特力敎會てふ唯一最高の大統一主義が立ち、煩瑣哲學（スコラスティシズム）てふ敎會の神學的哲學の思想を武器として、眞向から國家及び君主の權利を抑壓した。換言すれば、神の法なるものが、中古の政治上個人主義の上に立つて、屢これを制限したのてある。如上の中古の個人主義の裡から出發轉化して、今や君主の專制主義なるものが起つて來た。このものはルネーサンス時代の新思想の刺擊に負ふ所あること勿論てはあるが、君主そのものゝ實力の增進に伴ふて發展した政治上の主義である。凡そ理論先だちて實力之に伴ふことも少くはないが、それよりか實力起つて、しかる後理論がこれに隨ふことが專ろより多いやうてある、而して理論は容易に發見せられる。論者は中古の人生を支配した神の法を非難し、その餘りに勝手氣儘なるを攻擊し、その代りに、凡そ人間の理性の中に根本的に存在する自然法の效力を主張した。この法は一切人事の原則たるべし、神明と雖どもこれを變更する能はざるものてあると云ふて居る。これを思想史上から見ると、これは夙に古代希臘羅馬の思想家の間に考へられたかの羅馬法中の『自然法（ユス・ナツラーレ）』の換骨奪胎てある、その再現てある。かくの如くして、神法と自然法と區別し、國家學を神學より分離獨立させる傾向を生じた。かゝる新學風に屬する論者は十六、十七世紀の新舊兩敎會のいづれにも、多かれ少かれ、その輩出を見た。

この新傾向を最も有力に代表するものは、オランダ出身の學者フゴー・グロチウス⑦（一五八三―一六四五）てある。彼は彼の祖國獨立役時代に生長し、該博なる學識を以て國事に勞したが、或る政治上理由によつて罪せられ、逃れて外國に亡命し、爾來學識と才幹とを以て諸國に重ぜられ、晩年スウェーデンに仕へ、三十年役の末期出てゝ駐佛公使となつた。彼の學說が當時及び後世に重きを成したのは、一はかくの如き彼の國際間における經驗竝に名聲に賴ると謂ふべきてある。

彼は先づ『海洋の自由（マーレ・リベルム）』②を著はし、羅馬法皇が、曾て南歐諸國民の海上に乘り出した際、唯だ一片の詔勅（ブレーブ）を發して全世界の海面を東西に分ちて、盡くイスパニアとポルトガルの專有に歸せしめたのを(68)不自然なり、非道なりと攻擊し、彼の母國竝に他の新進國民の海外發展運動を正當なりとして、

これを奬勵した。彼は次に更らに一層有名なる著書『戰爭と平和との法』③（一六二五、巴里）を公にした。これによれば、國家及び社會の支配には自然法を原則とすべし。基督敎と回敎、加特力とプロテスタントとの區別により、各自に勝手氣儘な神法を主張するのは謂れなきことである。凡そ一切人類には彼等に固有なる理性に基いて共通の法があると。蓋しグロチウスの思想はヘレニズム及び羅馬時代に行はれた希臘の哲學的、羅馬の法律的思想に似たものがある。併し、昔は各國民の國家の獨立を蔑視沒却し、世界に於ける一切人民に共通する民法上の法則を求めた。即ち一個の世界的國家主義（世界一家主義）に據りて、羅馬の法律家の所謂萬民法てふ法律となつた。

グロチウスは、これに反して、各國民の國家の主權を尊重すべしとなし、隨て戰爭を以て自然の現象とするものであるから、彼の學說の根本主義は希臘羅馬人の世界國家即ち世界一家主義ではなくて、萬國竝立、即ち國際主義である。彼は因て諸國家及び諸國民の相互關係を律するために、自然法の下に、第二の法律觀念を與へた。それは理性の力によらず、意志によつて協定せらるべき法律である。かくの如くして諸國民の法律、即ち近世所謂萬民法が起つた。この法は名に於ては古代のそれと同じてあるが、實質に於ては全く異つて居る。古のものは世界一家主義の下に竝び存する一切民族共通の民法てあつた。グロチウスのそれは各國の國家相竝んで獨立する下に於て、國民相互の間の交際を律するものてある。これ即ち現今の國際法學の起源てある。

これを要するに、グロチウスの功勞は、(一)國家社會の支配に於ては、神法を斥けて專ら自然法を推したこと、(二)國家の主權を尊重したこと、(三)國際法を創始したこと、以上三點に存する。更らに彼の自然法的觀念に基いて、彼の國家に關する考を綜合すれば、國家はもと個々の自由民の結合である、主權は國家と君主とに歸すべし、但し主權は國家の條約に制限せられ、且つ個人に對しては國家の上に位する自然法に制限せられるものなりと云ふことになる。

グロチウスの次に注目すべきは、英人トーマス・ホッブス㊍（一五八八―一六七九）てあつた。グロチウスの學說の中心點は羅馬法皇の世界に對する宗敎的政治の要求の打破に在つた。これには同時代の先覺者が賞贊を惜まなかつた。トーマス・ホッブスも亦これに贊同し、國家を以て神の設備と見做さず、これを自然科學及び哲學上見地に立ちて觀察し、人爲的施設と見るものてある。彼は國家を以て人間が亂暴狼藉を防止し安寧幸福を增進するために作つた一個の契約てあるとした。彼の考によれば、この目的のために一切偏人は一個の全體の意力に自己の權利を委任する。この全體の意力は卽ち國家てある。この國家の上に立つて居る者は統治權を有する。この統治者は人民から永久的効力を有する契約によつて、統治權を委任せられたが故に、一個の專制絕對者てあつて不可抗なものてある。彼は一

切を支配する。宗教も教會も皆國家の支配の下に在る。卽ち國家は最上權を有するものであつて一個のレヴィアザンに比すべきものである。レヴィアザンとは聖書ヨブ篇第四十一章にある他にこれに類するものなき不可思議、巨大なる動物である。ホッブスの著書は因て一名『レヴィアザン』⑤（一六五一年版行）と名づけられ居る。

抑もホッブスは英國清教派革命發生時代に生長した。彼は恰もこの革命破裂し（一六四〇―四九）、クロムウェル一派の民主權論者が國王チャールス一世（一六四九歿）の首を刎ねた時、國を亡命して巴里に在り、皇太子チャールス（後のチャールス二世）の師傅となつた人である。所詮、上述の彼の著書は、卽ちこの民主的革命に對する一個の抗議である。

轉じてフランスに於ける國法の思想をみるに、それは前記グロチウス、ホッブスよりも、より以上に專制に傾き、專制の源泉を神祐に歸し、隨て王權は神聖の恩賜であつて神聖不可侵ものであるとした。この國の神學者は固よりこの說を歡迎確認した。ボシュエ⑥（一六二七―一七〇四）の如きこれである。當時ブルボン家歷代（一五八九―一七九二）の王權は、ルイ十四世（一六四三―一七一五）に於てその絶頂點に達した。この君主は聖書及び宗教を以て國家權力の源泉とし、身自ら神の如く貴く、太陽の如く無上の光榮あるものとし、自家の絶對無限を主張し、『國家、これ朕のものなり』⑦（『朕は卽ち國家なり』）と稱し、羅馬法皇に服從せず、且つフランスの教會からその新教徒たるユグノーを放逐し、全教會を加特力教の下に統一し、而もこれを羅馬から獨立せしめた。所謂ガリア教會の獨立これである。ルイは莊麗なるヴェルサイユ宮を營み、そのうちで『太陽王』（ル・ロワ・ソレイユ）の稱にふさはしい傲慢な豪奢な生活を送つた。晩年、專制政治と戰爭との弊害の曝露するや、彼の皇太孫の教育掛たる宗教家フェヌロン⑧は、『テレマック冒險談』（一六九九）を著はして皇太孫に教へ、この古希臘英雄を借つて、凡そ君主は道德的にして憲法に制限せらるべきものなりと諷したがため、大王の不興を蒙つた。ルイは昔のフランク國王の後繼者として、自ら『神祐を受けたる最基督教的王』（レクス・グリスチアニシムス）と稱した。この稱號は、昔カロリンク王朝の時には、羅馬教會に服從する最も遲りたる意味を示したのであるが、今はその反對に羅馬教會から獨立した君主が自分勝手に取つた高慢な意味を有する形式である。この變化は畢竟何を示すか、他なし、中古に於て法皇が要求した一切世界の統率權を、近世に於て政治上君主が要求することとなつたこと、これである。

かくて、ルイ十四世の確立した王權は、極めて神聖なるものであつた。それは當時一切の專制君主及びその政治家の模範とする所であつた。その結果、ルイと同時代、及びこれにつゞく十八世に於ける歐洲の諸君主て、多少なりとも、このフランスの專制政治を模倣しないものはなかつた。彼等は一

切の官吏竝に僧侶の服從を要求し、階級の權利も、個人の自由もこれを顧みず、只だ自家の權力樹立のみのために、强制的に人民を募集して常備軍を作り、以て互に强大を競ふた。その募兵手段は亂暴てあつて、强迫、誘拐、詐僞、人身賣買或ひは人身貸借の方法により、やゝもすれば一國の君主が自國の人民を驅つて兵隊を作り、これを他國の君主に貸與へ、その借料を取ることすらあつた。例へば十八世紀に於て、ハノーヴァ君主は個人として同時に英國の王位に上つて居たが、この英國君主は自分の家領ハノーヴァを防禦し、又はドイツに於ける戰場で戰ふ時、屢々ドイツ小國の軍隊を貸借した。この習慣は更らに亞米利加獨立戰役に轉用された。卽ち、英國政府はドイツの雇兵軍隊を北米に送つて植民地に於ける同胞殺戮の用に供した。この軍隊は主としてヘッセ＝カッセル⑨公國の人民から成つて居たから、米國獨立史上に於ては、一七七六年の『ヘッセ軍隊』と稱せられ、これが、本國の專制政治に對する人心の激昂を一層刺擊して、之を暴虐視する導火線の一となつた。これ、全く當時流行の專制主義の產物の一例である。

畢竟ずるに十七八世紀に行はれた專制主義は、强いて君主と臣民との區別を立て、一切民間の人士を一樣なる臣民に化し、これをして君主のために、國家觀念を抱かしめるやうに、强制するものであつた。この風は歐洲大陸に於て廣く流行した。但し、英國では大陸と事情を異にする。卽ち、スチ

アルト王家（一六〇三―八八）がプリタニア諸部を統一せんがために、一旦この風の輸入を企てたが、この主義は、初めに清敎徒革命（ピュリタン・レヴォリューション）（一六四〇―四九）、次に光榮革命（グローリアス・レヴォリューション）（一六八八）と相ついで打擊を蒙りて、全然失敗に了り、この島國では漸次他の思想が行はれて所謂英國風を作り、如上の大陸を風靡した專制主義に對照することゝなつた。これについては、尙ほ少しく76節に述べることゝする。

75　重商（商國）主義（マーカンティリズム）

この主義は、各國に於てその狀況を異にし、種々の形に現はれたから、今玆に直ちに一言を以て說明することは困難である。しかしその根本思想は、貨幣卽ち富なり、一國の富は金銀の所有に基く、隨て、この富を獲得する方法は唯だ商業のみに在ると謂ふ點に存する。中古の昔は王侯といへども自然物經濟によりて自ら支へ、多く手から口へとその日暮しの生活を送り、經濟上事業はこれを最初は猶太人のみに委任し、次にイタリア人を用ゐ、以て朝廷や國內の金品融通の事に當らしめたが、中古生活の進むと共に、自分の臣民の間から町人（ブルジョワ）が起つて都市（ブルグ）を作るやうになつて、それ以來、これをして上記の特殊人民の事業にも參加せしむるに至つて居る。然るに中古末期以來、國家經營の必要竝に慾望が大に起つた。て、君主も亦た痛切に金力の必要を感じ、上に揭げた當時勃興して來た經濟上根本思想に基き、十五・六世紀以來、先づ自家の御料地を擴大し、關稅、貨幣鑄造、漁業、森林伐採等の封建

的權利を、封建君主若くば町人の手から没收して自家の掌中に收め、以て自己の宮府の收入增加を計り、世界の擴大と共に、君主の專制權を以て植民地を開き、若くばその開設を保護し、外國貿易の輸出入を制し、ひたすら貴金屬の輸入貯蓄に力めたのである。一言以てこれを蔽へば一私人又は町人の代りに、君主、若くば君主の國家自らが一國の經濟に關係執掌するに至つた。その方法は君主及び國家を本位とした頗る利己的のもので、これのみのために戰爭を惹き起したことさへ、その例が少くなかつた。一六五一年クロムウェルの發した航海律（ナヴィゲーション・アクト）の如きはその一である、これがために英國が新敎同胞たるオランダと開戰するに至つたことは前節既に瞥見した所である。君主の貿易の目的は、可成く粗製品を海外から輸入し、その代りに精製品を多量に且つ高價に海外へ輸出し、輸出超過を計ることにあつた。因て海外貿易と同時に、從來よりも遙に大規模なる工業發生の傾向があつた。これにはルネーサンス以來の社會の奢侈の增長も與つてこれを刺載する素因となつて居るが、之と同時に新に擴大されてゆく世界市場からの需要の彌增しに殖えて行つたからである。又、國富の一條件として君主は人口增加を計つた。この點に於てはフランスは人口增殖して當時第一の大國であつた。この人口增多主義（ピーピュラニスム）は、十九世紀初に於てマルサス⑩主義が起つて人口（ポピュラー）が制限を加へらるべきものであるとするまで、頗る勢力ある經國上論說であつた。

重商主義は、上述の如く、自然植民地經營を以て一大要件とするものである。植民地經營の目的は植民地そのものの利害休戚にあるのではなくて、專制君主の下にある母國そのものの富を增加することにあつた。その好例はイスパニアである。イスパニアの廣大なる植民事業が十六世紀の一世紀の間に遂に失敗に了らなければならなかつた最大原因の一は、こゝに發見せられる。

このイスパニアの失敗に乘じて起つて來たのがオランダ、イギリスの二國であつた。こゝでは東印度會社といふものが組織された（英國のは一六〇〇年、オランダのは一六〇二年創立）。從來各都市の商工の組合（ギルド）といふ小規模のものが一切企業の單位であつたのが、こゝに如上の君主から特許（チャーター）された會社（カムパニー）が起つて、通商貿易の外に、之を保護するための土地占領、城寨建築、陸海軍編制等の事業をも行ふことゝなり、このものがやがて株式組織となり、君主も之が持主の一人となり、會社の事業は卽ち國民の事業といふことになつて來た。彼等の商船は宛もコロンブスの如くマルコ・ポーロの黃金國談（エル・ドラード）にあこがれて早く日本を訪ふた（一六〇〇、慶長五年）、その內にあつたウィリヤム・アダムスは家康に仕へて十六年間東西の通事を勤めた。彼等は平戶に商館を構へた（オランダは一六〇九年、イギリスは一六一三年）。

ルイ十四世の通商植民は半ばイスパニヤの植民政策を踏襲したが、半ばコルベールの建策を用ゐて當機軸の商國主義を開いた。卽ち、コルベールは極端な經濟上保護政策を執り、英蘭兩國の如く東印

度、アフリカ、アメリカに對する各植民會社を設け、就中北米地方を經略せしめ、先づ現今のセント・ローレンス(71)河域を基點として五大湖地方竝にミシシッピー(72)河畔地方を取つてこれをニュウ・フランス竝にルイジアナ(73)と呼んだ。今日合衆國の都市として榮えて居るセント・ルイス、ニュウ・オルレアンス(74)等はいづれもフランス人の經營にかゝつたといふ名殘である。かくの如くしてフランスの重商主義（マーカンタイリズム）が起つた。その組織が主としてコルベール獨得の政策に發する所多いから、世にこれをコルベールチズムと呼んで居る。ルイ十四世の財政は、これによつて一時こそ成功したれ(70)、遂に失敗に終つたのは、一に彼の數度繰返したる大戰爭の失費にもよるが、主としてこのコルベールチズムが餘りに極端なる保護政策であつて、干渉過度なるがため、國民は却てこれに追隨することが出來なかつたことにある。英國ではこれに反し、海外植民は君主及び政府よりも寧ろ國民全體の事業となつて發展して行つた。こゝでは十七世紀の政治上革命時代に清教徒等が政治上自由を求めるために、大規模なる亞米利加植民を始めた。この事業は早くも殆んど擧國一致の事業となつて、熱心に經營せられたから、遂にフランス人を壓倒して、上述の如き彼等の亞米利加植民地を奪ふて、之を今日の加奈陀や合衆國といふ英國出身者の領土に化するに至るのである。

以上述べた如く新世界の發見及びその開拓、東洋市場の利用の結果、西洋に於ける金銀は潤澤となつた。就中、南歐人はメキシコ、ペルーから銀を輸入し、オランダ人は日本及び東洋から黄金を掴み出し、後には英國人が印度から金銀寶玉を貰けて來たからである。

かくの如く金銀の流入竝に金儲けの見込が多くなると共に金融市場の信用高まり、これと同時に通商貿易が世界的に廣大となり、尚ほまた時々破裂する戰爭も、如上の世界の擴大と共に大規模となつて、いづれも莫大な資金を要したから、こゝに金銀貨といふ正貨に代はる便利なものが發行された。即ち紙幣竝に信用手形である。かくの如くして從來の猶太人やイタリヤ人の經營して居つた金貸業の代りに現代に於ける株式銀行業の發達を見るに至つた。十七世紀に於てはオランダ最も富み、その首府にあるアムステルダム(75)銀行は一時全世界の金權を握つて居た。これには同地に入り込むで來た猶太人が最も多く關係したのである。而して、政治上竝に通商貿易上の發展と共に英國島民次第にオランダ人に代りて隆盛となり、一六九四年以後には、ロンドンのイングランド銀行が、アムステルダム銀行に代つて世界金融の中心となつた。この頃に至つて君主と資本家との間の個人的貸借は廢せられ、君主は國家の名に於て、資本家は自分の組織したる會社又は銀行の名に於て、是等兩者の間に貸借行はれ、以て經濟界の安固を增加し、之と同時に國家觀念の發達に貢獻した。即ちこれ國債の起源である。國債は英國では一六九二年に始つて居る。

イスパニア相續役後、人氣の恢復、通商植民熱の勃興と共に、株式熱大に高まり、一七二〇年前後、一時經濟界の恐慌を起すに至つた。その原因は、戰後、平和と共に、亞米利加植民熱昂騰し、政府も資本家も餘りに金儲けに熱中狂奔し過ぎたことにある。當時スコットランド人ジョン・ローなる人があつた。『貨幣及び實業論』(一七〇五)を著はした。これによると、凡そ金銀は土地に埋藏せられるが故に正貨準備なしに土地を擔保として紙幣手形を發行し得べしといふのである。これ、土地の經營竝にその開拓よりも、未だ取得せられざる金銀の取得を豫想し、これを擔保として國富を增加し得とするものである。恰も當時フランスはルイ十四世、殊にその晩年の大戰爭の後をうけて、財政の窮乏に困んで居た時であつたから、この學說は正しくフランスの危急に應ずべきものであつた。されば ジョン・ローは巴里で川ひられ、一七一六年にローが現に設立經營せる私立銀行を國立に引きなほして佛蘭西銀行にして貰らつたのである。ローは政府からかのルイジアナ開拓の特許を賜はり、その會社を創立し煙草專賣、土地借下、貨幣鑄造等の特權を賜はり、無限の富を有すると稱するミシシッピ河畔の地方を擔保として盛に手形を增發した。最初の間は株も手形も非常の人氣を集めたが、手形の發行無限となり、ミシシッピ河畔開拓の計畫が失敗するや、一切下落して殆んど無價値となり、銀行破產してジョン・ローは逃亡し、延て多數の破產者を出した(一七二〇)。

これと同時に英國に於ても投機熱高まつた。そはユートレヒト條約(一七一三)によつてイスパニヤからアシエントー契約を得たからである。アシエントーはイスパニヤ植民地が需要する奴隸を、今後イギリスから一手專賣的に輸入し、毎年一回五百噸の商船一隻パナマ地峽にあるポルト・ベロー港に通商する權利の契約である。奴隸は毎年四千八百人と限られ、三十年間の契約である。從來ポルトガル人が、アフリカ內地の黑人捕獲者から黑奴を買ひ受けて、イスパニヤ植民地に供給した貿易茲にイギリスに移つた。加之イギリス人はこの植民地に於ける砂糖煙草棉花の耕作にも使用した。之から、イギリス人はこの無慈悲な、しかし暴利ある商賣に手廣く從事したのである。何はともあれ、アシエントーはイギリスに取りて新世界に於ける貿易の覇權を確めたものであるから、ユートレヒト平和後、イギリスは、非常の好景氣となり、南米に對する幾多の泡沫會社起り、之がために却てフランスのと殆んど同時に一時大恐慌に襲はれた、所謂「南海の泡」事件はこれである。この際、多數の破產者があつて、中には自殺したものも少くなかつた(一七二一)。以て重商主義の弊害が如何に甚しかつたかを見るべきである。

この恐慌後平和はイギリスがイスパニヤとの植民戰の開始(一七三九)、ついでオーストリヤ相續役の破裂まで、二十年間繼續した間に、英佛兩國の經濟政策の優勝劣敗は益々明瞭となつて來た。英國に

於ては國民擧國一致して通商植民に熱心し、その資本裕かに、海外からの原料輸入容易にして、海外からの商品の需要は增加した。それて同じ世紀の中葉以後に入つては、自然の必要と人智の努力との結果、アークライトの紡績機、ゼームス・ワットの蒸氣機關の各發明があり、尙ほ又石炭の利用も廣くなつた。かくして英國に於ては他の諸國に率先して成就されたのが卽ちその産業革命である。而してこの國是を維持增進するために、英國政治家は一切手段を恤まず、大陸に於ける同盟國、就中、新に興りつゝあるプロシアに向つて軍資の補助金を贈り、（七年戰役一七五六　六三）以て自分の歷史的强敵フランスを制するの用に供したのは、何人もよく知る所である。この遠大なる政策の指導者大ピットが公言した『余はドイツに於てアメリカを征服した』といふ一言は、如上の消息の喝破である。

尙ほこの英國産業上飛躍に際して起つた經濟上新思想については、後に78節に於て說くのを便利とする。

76　英國思想

吾人はさきに、イングランドがエリザベスの下に、監督敎會（エピスコパル・チャーチ）を以て加特力敎會及びイスパニア王國の壓迫から獨立し、且つ國民の自由を確得したことを見た。次に、十七世紀の始、この女王崩ずるや（一六〇三）、スコットランドのスチュアルト王國が入つてイングランドの王統を繼いで憲法上紛爭を惹起したことも亦た吾人の旣に見たところである。之を少しく思想上から再び眺めてみると、この王家は大陸諸國、就中、フランスに行はれた君主神權主義を根據とし、且つ監督敎會卽ち監督を利用して啻にイングランドのみならず、一切のブリタニアを統一しやうと欲した。これがためにイングランドの人民は甚しくその自由を抑壓せられ、この王家の支配を以てかのマグナ・カルタ以來の憲法上自由を蹂躙するものとなし、議會に據りてこれを攻擊し、且つ政府の道具となつた監督敎會に反對し、かのカルヴィン主義の變形なる淸敎主義（ピュリタニズム）の思想を根據として專制統一政治に反抗した。その結果一六四〇年以後革命となり、淸敎徒中の過激派なる獨立黨（インデペンデンツ）は議會軍の中堅となつて全勝を占め、遂に國王の首を刎ねて一時共和制を樹てた（一六四九）。卽ちこれ淸敎派革命であつて、その目的は生命自由財產の擁護にあつた。この自由とは信仰竝に思想の自由である。ミルトンの『失樂園』（パラダイス・ロスト）と『得樂園』（パラダイス・リゲインド）はこの自由思想の產物である。畢竟、この革命は極端な民主主義の全勝であつた。さてこそこれに對して一個の有力なる抗議が起つたれ。卽ち、かの74節旣說のホッブスの『レヴィアザン』これである。

然るに共和政治の中心人物クロムウェルが死ぬと、國民は再び穩健なる政治を希望し、因て王權恢復の必要を感じた。こゝに於て一六六〇年、王政復古となつた。この際、自然に監督敎會も恢復し、こゝに王權と民權との調和的政治が試みられること二十餘年、一時少康を保つたが、而も王家が、監

督敎會を超越して加特力に傾き、ルイ十四世に信賴せんとしたから、國民は不安を感じて居た。恰も一六八五年、旗幟鮮明に加特力の信仰を抱けるゼームス二世が卽位するや、ルイ十四世と同盟を結んで、神權主義及び專制政治の恢復を計つたから、一切の國民は遂に起つて反亂し、こゝに血を流さずして革命が成つた。所謂光榮革命（一六八八）がこれであつた。この革命及びこれに引續き起つた君主交迭及び內治外交の結果、こゝに英國の政治上原則が成立した。それは、イングランド及びスコットランド卽ちブリテインの君主は必ず新敎相續によつて世襲し、國敎として監督敎會を維持し、すべて立法を議會の協贊に依賴し、國民に對して責任を有する政黨內閣を通じて、治世するものなりといふことと、是である。これはその後間もなく現はれたハノーヴァ家（一七一四年ジョージ一世に初り、一八三七年ヴィクトリア女皇に至る）の支配中に確立した習慣による所の政治主義である。

この光榮革命の際、一人の思想家が現はれてこれを說明して居る。それはジョン・ロック[21]（一六三二―一七〇四）である。

抑も十七世紀の英國の學風はフランシス・ベーコン（一六二六歿）に始まつて居る。彼は『學術の進歩』（一六〇五）及び『學術の新機關』（一六二〇）を著はし、凡そ學術の研究は空想によるべからず、實驗によるべしと說いて、近代の自然科學の創始者にして歸納研究法の唱道者となり、隨て英國經驗學派の始祖となつた。ハルヴェー[22]（一六五八歿）の血液循環の發見もこの頃である。このベーコンの學風は祖述され、既に內亂の最中に、一切の政治や信仰の爭から離れ之を超越して自然界の學術的研究を目的とする「團の學者の會合が起つた。卽ちこれ曩さに觸れて於いた通り、王政復古の時、國王チャールス二世の保護の下に組織された王立學會なるものゝ起源である。この團體は今日尙ほ英國で有名な科學研究の協會であつて、創立當時早くも王家の出資に賴りてグリーニッチ天文臺を拵へて貰ふやら、すべて觀測、實驗、數學の究明に向ひ、自然、會員の中から種々の學者を輩出した。その內の巨擘としては卽ち理學に於ては引力說の唱道者ニュートン[23]、哲學に於ては前記のジョン・ロックを推すべきである。所謂、兩人は迷信背理を排して時代の世界及び人生觀を改革した。

さてロックは敎育家であり、心理學者でもあり、將た政論家でもあつた。こゝて吾人に肝要なるは、最後の資格に於て最近の革命が如何に取扱はれて居るかにある。これは彼の著書『民政論』[24]（一六九〇）によつて解答されて居る。これによると、彼は先づ自然の狀態を假定した。而してこの狀態は自然法に支配されるものであつて、しかも或る亂暴もの、又は侵入者があつてこれがために自然の秩序を破壞されることがある。因て、彼はすべての個人が自己の生命、自由、財產を保護するために申合はせて政府を作り、或る一人に全體の權限を委任したのであると考へて居る。ここまではかの

『レヴィアザン』の著者ホッブスと同說である。併しこれより以上、卽ち結論はホッブスと異つて居る。ホッブスは、一旦權力が委任された以上は、その權力を把持するもの、卽ち國家は絶對專制であると主張した。ロックは然らず、彼はこの委任の目的は唯だ人民の安寧幸福のみにある。若しこの唯一の目的が滿足されない場合に於ては、かくの如き統治團體は解散すべきものなりと結論して居る。而して何人がこれを決定するかと云ふと、ロックは、人民には政府に對する反抗（ライト・オヴ・レスタンス）權ありとしたのである。然らば則ちロックの政治論は全く最近の政變たる光榮革命（グローリアス・レヴォリューション）の辯解である、イギリス國民がスチュワート王家を改廢したことを是認したのである。けれども彼の思想は全然我儘勝手なものではない。彼は大體に於てかの淸敎徒（ピューリタン）の主張する信仰の自由を尊重するものであるけれども、これに對して三個の制限を設けた。曰く、(1)社會の安寧を害する論說はこれを許さず。(2)敎會の會員中に外國君主の臣民がある場合、かくの如き敎會はこれを許さぬ。(3)無神論（アセイスト）者を許容せず、何んとなれば無神論者卽ち無宗敎者は社會を結合する約束を尊重しないからであると。これを以て見ても、ロックの思想は、成程、極端な唯物主義に根據を置き、人民の反抗權を認め、以て半世紀後に現はるべきルーソーの民約論の先驅を形作つて居るにかゝはらず、而も尙ほ頗る穩健な所があることが分明する。

本節に述べた所はこれを要するに、十七世紀に於ける英國思想界が、經驗を重んじ、自然科學を基とし、貴族的中等社會を標準とする穩健中庸なる民主主義に傾くものであることである。卽ちこれ十八世紀に於て大成せらるべき英國の經驗學派の先驅をなすものである。かの哲學者にして歷史家たり、[25]「人間悟性（ヒューマン・アンダースタンディング）」及び『英國史』の著者ダヴィッド・ヒューム（一七七六歿）並に『富國策（ウェルス・オヴ・ネーションス）』（一七六年出版）を以て知らるゝアダム・スミス[26]の如き、いづれも如上の英國學風の產むところである。アダム・スミスにつきては次々節に於て更めて說く所があらう。吾人は、之に先ちて差當り、英國風の影響の一面として、而も特殊の發展と意義とを有するものとして、フランスの啓蒙文學を一瞥して置かなければならぬ。

77　フランスの啓蒙文學

初めルイ十四世の專制政治の弊害の極るや、フランスの先覺者は、ドーヴァ彼岸の民主的島國に於ける政治、經濟及び社會の漸次改善の途に上つてゆくのを望み見て、自家の理想をこゝに求めた。彼等は或は海を渡つてこれを視察し、歸朝するや、イギリスの學風を齎らし來り、當時世界文明の中心と號する巴里文壇に立つて、或は椽大の筆を揮ひ或はサロンの交際社會に出入して萬丈の氣燄をあげ、以て英國思想（イングリッシュ・アイデア）をフランス化し、之を極端まで應用敷延して天下に宣傳した。所謂フランスの啓蒙

運動はこれてあつた。

當時、十七世紀以來の自然法的知識傾向は、フランスに於てその絶頂點に達した。この傾向は、人間の自然理性、活々した機智、明快な言現はし方に依りて、あらゆる問題を、あらゆる歐洲の知識を求むる社會に提示し、その蒙を啓かんとするものてある。この運動の機關はフランス語及びその文學てあつた。オーストリア相續役の終結たるアーヘン講和（一七四八）締結ては、從來の外交慣用語たる拉典語の代りに、フランス語が用ゐられ、この語はそれから一般の外交界の用語たると同時に、全歐洲の教育あり、殊に上流に位する社會の交際語となつた。その狀、猶ほ東洋に於ける漢語、古代に於ける希臘語の如きてある。かゝる位置を占めたる國語國文の持主たる十八世紀のフランス先覺者流が、國家と現代とを超越して、世界的將た全人生的の自然法主義の態度を取りて、世上の蒙を啓かんと努めたのは偶然てない。

この新運動の劈頭に位して而も最も偉大なる一人はヴォルテール[27]（一六九四―一七七八）とする。彼は巴里の市民てあつた。年三十三にして渡英し、三年間の滯在中、ニュートンの國葬（一七二七）も目擊し、當代の名士と交はり、歸來、佛蘭西上流社會の知識的指導者、竝に歐洲王侯の師傅となつた。彼はロックとニュートンとを應用、敷延し、その學說深遠ならざるも、該博にして機智に富み、

歷史に論文に戲曲に將た書簡に、その著作多大にして行文流麗、その間往々思想上矛盾なきに非らざるも、よく常識に訴へて時代の迷信を排斥した。十八世紀中葉に、百科全書編纂（エンサイクロペディア）の事業起るや、ヴォルテールはこれを贊し、書を與へて激勵して曰く、『破壞せよ（エクラーゼ）、醜惡なるものを（ランファーム）』と。その意は迷信排斥にあつた。爾後彼はこの語を以て標語（モット）とし、彼の發する書簡の終りにこれを記すを常として居た。

彼は無神論者てはないが、以上の理由により、とかく頑固な宗教家から排斥迫害せられ、晚年久しくスウィスに逃れ、ジェネヴァ湖畔なるフェルネー[28]に寓居すること廿年、その名聲嘖々として諸國に傳はり、遠近から來り訪ふもの踵を接した。彼一日曰く、『余は十四年間、歐洲の旅籠屋の主人てあつた』と。

彼は政治上に於ては知識を以て專制君主を光被（イルミネート）し、これをして改革を實行せしめることを目的とした。因て歐洲の王侯爭ふてヴォルテールと交通し、或はこれを招いて賓客とした。かのプロシャ王國の强大を築き上ぐべきフレデリックは彼をオーストリヤ相續役と七年役との間、三年間（一七五〇―五三）ポッツダムの無憂殿（サン・スーシ）[29]に招聘欵留して師友としたこと、大王の『圓卓（ラウンドテーブル）』の一員たらしめた。又た露西亞の女皇カザリン二世は彼と文通して居た[72]。最後の年、彼がスウィスの隱栖から巴里に歸るや、市民はこれを歡迎すること、宛ら一大凱旋の如き光景を呈したと云ふことてある。當時は恰も米國獨立戰役の最中て、フランスの同盟なる合衆國の巴里駐在代表者フランクリン[79]は、ヴォルテールと

アカデミーに會し、公衆環視の面前に於て相抱いて相慶賀した。この光景の感動が如何に深大なりしかにつきては、當時、同じく滯佛中であつた合衆國使節ジョン・アダムスはその日記に於て次の如く書き殘して居る。『ソーロンとソフォークレスとの抱擁を看る、如何にうるはしかりしことよ！　この嘆美の聲は忽ち馳せて全國に喧傳した』と。

次にはモンテスキュー(30)（一六八九―一七五五）が擧げられなければならぬ。彼はボルドー(31)附近出身の貴族であつた。彼も亦た英國にあること二ヶ年、ジョン・ロックの『民政論（シヴィル・ガヴァーメント）』を愛讀し、その英國風を賞贊した。彼の精神はその名著『萬法精理（レスプリット・ド・ロワ）』(32)（一七四八）に於て永久に生きて居る。この書の中心思想は凡そ中央政府は三大權の分立によりて組織すべし、かくすれば以て各權力互に相制し專制政治の禍を未然に防ぎ得べしと論じたるに在る。この書は出版後、二年ならずして二十二版を重ね、諸國語に飜譯せられ、その歐洲諸國に及ぼしたる影響頗る大なるものがあつた。現今文明國の政治組織が三大權分立を綱領とするのは、これモンテスキューの學說の流れの實現である。

吾人は以上フランスの啓蒙文學の二大代表者を指摘した。今兩者を比較するに、ヴォルテールは良心の自由と、信仰の寬容のために奮闘し、モンテスキューは政治上自由のために論爭したことが分明する。然るに、こゝに是等から稍後進て、一個の新しい種類の第三の學者が現はれた。それはジャンジャック・ルーソー(33)（一七一二―一七七八）である。この人物は本と微賤の出であつた。彼の父はジェネヴァの時計商であつた。彼は少壯にして幾多の職業に從ひ、實に流離轉變の生活を送つた。彼は畢竟彼の境遇が生んだ罪惡の子であつた。モンテスキュー、ヴォルテール等は、貴族若くば華やかな富豪の生活を享け若くば之に參加し得たる者であつた。ルーソーは之に反して獨り貧困寂寞の境涯に沈淪し、冷眼を以て現代の社會を呪ひ、一種の感傷的理想家（センティメンタル・アイディアリスト）となつたのである。

さてこの變り者の天才の著作「時代は一七四九年から一七六二年の間にある。蓋し彼の思想界活動は、猶ほモハメットの如く四十近くになつて俄かに開始したのである。時は一七四九年、ディジョンのアカデミー(34)は『學藝（ルネーサンス）復興は道德の進步改善に資したるか』との懸賞論題を掲げた、彼が之に應じて提出した論文は卽ち彼の思想發表の處女作である。彼はこの內に於て學藝は一切不善の原因なりと結論した。次いで同大學から第二回の懸賞問題『人間不平等の起源及び適否如何』が出たのに對し、一七五三年、彼は又た同樣に悲觀的意見を提出し、革命的思想を唱へ世人を驚かした。但し第一論文は賞賜された、第二は然らず。以上は實にルーソーの思想界生活の始てあつて同時にその飛躍の準備時代であつた。かくて一七六一年から六二年に亘つて遂に彼の三大著作が相ついで現はれた。卽ち(1)ジュリー(35)（一名、新エロイズ）、(2)エミール（一名、敎育について）、(3)民約論（コントラ・ソシヤール）（一名、政權の原理）である。一

は戀愛の自由及び結婚の神聖を主張する家庭小說である。二は敎育小說である。卽ちエミールを假りて凡そ兒童はその自然の性質に從ひて敎育すべし、社會の敎育は兒童を惡化す、自然の敎育は兒童を善導するものなりといふことが寓されて居ることは、說明を要すまい。第三、卽ち民約論は、所詮、ロックの政治主義を敷延し、これを更らに極端に主張した政治論であるといへる。少しく詳しくいへば、ルーソーは先づ自然と社會とを嚴重に區別した。人間は原始時代に於ては一切平等であつた。卽ちこれぶ自然である。人間が集合するに及び、多數の意志によりて社會契約が成立し、これによつて各個人はその自由を放棄して全體に從ふ。これが社會であると說いた。この社會に於て、ルーソーは多數意見を重んじ、その國家の主權を人民全體に在りとした。之を他に比するに、かのロックは溫和な君主政を認めた、又たルーソーと同時代の學者はすべて王權を尊重し、只だその蒙を啓き之を敎化して新思想を以て光被せんと努めたのみである。然るにルーソーは全然君主政治を排斥し、これを以て一切の政體中、最惡のものとした。彼の說によると、若し一人若くば少數者が政權を專らにするならば、則ち社會の約束、卽ち社會の起原及びその性質に反するものである。かゝる場合、人民は極力その政府に反抗し、これを絕滅するの權利があるとした。畢竟、彼は同時代の社會を以て歷史又は文明が生んだ不幸なる產物としてこれを呪咀し、徹底的にその不平等不自由を攻擊した。以上は民約論の內容である。

ルーソーの思想は法理學に關しては、或る高遠な思想を含蓄するものであるが、歷史上根據を缺いて居ることは勿論である。彼は科學を排斥するものである。尙ほ、彼は自然を重んじた結果、人間の自然性を嘆美したと同時に、天然の美を直感體得し、曾にこれを外界から眺めるばかりでなく、これを感覺し、これを自分の魂の內に容れるやうに說いて居る。蓋し、彼の故鄕ジェネヴアは、宗敎及び政治上に於てはそのカルヴィン主義を以て、自然美に於てはその山紫水明の風光を以て、いづれも大いにルーソーの天才を陶冶したやうである。

ルーソーは宗敎上に於ては無信仰ではなかつた。聖書を學び、神を恐れたけれども、敎會の迷信を排斥した。彼は前記『エミール』に於て迷信が兒童の敎育に及ぼす弊害を指摘したので、宗敎家の迫害を蒙り、一時英國に走つた。彼は英國滯在中、目のあたり、種々の博愛運動を見て、益々フランス社會の非を感じ、歸國後一層激烈にこれを攻擊した。ルーソーの英國に於て目擊した博愛運動とは他なし、十八世紀後半に於ける淸敎派の復活してメソディスト[36]派となつて現はれたものである。この派はオックス・フォード大學に起り監獄の改良、奴隸排止等を主張した。

ルーソーは當時學藝社會から排斥され、自ら幽閉に陷り、社會は擧つて自己を迫害すると感じ、暗黒なる老境を送つた。かくして彼はヴォルテールが花やかなる生活の最後を圓滿に終つたその年、一二ケ月遲れて孤獨の裡に悲慘なる永眠に就いた（一七七八）。併し彼はこの晩年に於ても猶ほ一個の意義ある產物を遺した。それは『懺悔錄』[37]である。これは自己一生涯の告白である。彼はこれによつて自然の感化は純良であるけれども、社會のそれは不善なることを自己の實歷によつて證明した。つまり、彼の處世の理想は一言にして盡せば『貴き野人』たるに在つたのである。

ルーソーが同時代の活世界に及ぼした感化は頗る大なるものがある。嗜好上に於ては、自然美又は田園趣味の物興にある。政治上社會上に於ては革命思想の馴致にある。後年フランス革命の極端に陷つた時、恐怖時代は卽ち民約論の實現である。實に過激派の首領ロベスピエールはルーソーの發現であると云ふてよい。

これを要するに凡そ十八世紀のフランスに起つた革新文學は啓蒙文學と稱し、純理と自然とを標準とし、人生の歷史的發展を蔑視し、事物の境遇による發展、事物の遠近又は連續を認めなかつた。彼等は徹底的研究を缺いたが、而も科學的知識を重んじた。その極生れたのが、百科學派（エンサイクロペディスト）[38]である。その代表はディドロー、ダランベール[39]等である。この派は教會竝に傳說に疑を懷き、純理に支配されて、無宗教說を取つた。ディドローが唱へた格言に『哲理に達する第一步は信ぜざるにあり』といふて居る。如上の當代の學者中唯一無類の理想家たるルーソーと雖も純理と自然とを標準とすることまた相同じてある。以て啓蒙時代の一般的傾向を推知すべきである。

78　英佛に於ける經濟上新思想

吾人はこれまで思想又は信仰に關して改革又は革命的意見の潮流を紹介した。然れどもこの傾向はこれに限らず、經濟上の問題に於ても現はれて、一般の思想又は信仰のそれと相關連して發展して來た。

問題の出發點は重商主義（マーカンティリスム）の弊害に始る。吾人はフランスの專制君主ルイ十四世の重商主義、卽ち所謂コルベール主義が餘りに極端であつたから、その國の發展に對して却て禍をなしたことは旣に見ておいた。それて、ルイの時から早くも之に對する改革論がちらほら現はれた。その一人は將軍ヴォーバン（一七〇七死）である。彼はルイの築城及び攻城に參劃して大功があつた。されど彼は晩年ルイの財政上失敗に鑑み、農民のために改革を唱へ、重商主義政策に賴りて利益する商業階級から憎まれた。この新傾向が著しく現はれたのは、十八世紀の中葉、卽ち思想界に於て啓蒙主義、經濟界に於て英國の產業革命（インダストリアル・レヴォリューション）の起つた時にある。この頃、新思想、就中、モンテスキューの政治上意見に據れば、

凡そ國家の臣民たる以上は、その個人の權利を尊重すべしとの考、殊にルーソーの社會に關する理想論に據れば、凡そ一切人民は元來平等であつた、隨つて今日の社會をこの元來の自然狀態に返すべしとの要求、これらの二者が相連關して、こゝに經濟上に於ける新說が現はれて來た。これは卽ち自然尊重の說であつて、この說から現代に於ける自由貿易（フリートレード）論が發したのである。

從來重商主義は唯だ君主、國家、或る特權を有する團體又は階級の利益のため、又は植民地に對して本國の利益のためばかりに、過度の干涉手段を取り、或は特殊の禁止的重稅を課し、或は輸出入品を搭載する船舶の國籍を制限し、又は輸出入せらるべき商品の種類を制限し、或は本國の利益のために植民地に於ける或る工業を禁止した。

例へば、吾人は既に、クロムウエルの時、イギリスの第一回航海律が發せられ、如何にオランダの船舶の活動を制限したかを見て置いた（一六五一年、前講69、本講75參照）。之と同じく、イギリスは後、その米國植民地に對しても航海律を發して居る。この對米航海律の最初は王政復古の時、一六六〇年に發せられて居る。これによれば、若干の品物は直接に植民地から本國へ輸入せられなければならないとて、かゝる品目が數へ上げられて居る、かゝる品物を『數へ上げ品（エニュメレーテッド・グーヅ）』と稱する、その內に煙草がある、尙ほ、植民地物產を運搬する船舶は、必ずイギリス本國若くばイギリス植民地に於て所有せらるゝものにして、その船員も主としてイギリス人から成つて居るものでなければならない。以上が對米最初の航海律である。その後、時と共に漸次『數へ上げ品』が附け加へられてその品目多くなつた、尤も中には植民地に適切なる物產には奬勵のために保護金が下賜されるといふものもあつた。その上に、植民地の製造業にも、それが本國と競爭になりさうな場合には、制限され始めた。かくの如き制限令の初は、一六九九年の羊毛に關するものである、それは羊毛又は如何なる羊毛から製造したものは、一切、他の植民地へも、本國へも、外國へも輸出を禁ずといふのである。後には、植民地の鐵工業に大制限を加へる律令が工夫された、これによると、凡そ植民地では、鐵は粗鐵以上の工業は禁ぜられる、それ以上の鐵工業は必ず本國に於て行はるべしといふのである。但し、如上の航海律は一から十まで植民地の不利益となつたのでない、中には特別の利益も伴ふものがあつた、例へば、ヴァージニヤ煙草は外國の港へ輸出を禁ぜられて居るが、その代りに、ヴァージニヤ人はイギリス煙草市場の專賣を許されて居る、又た新イングランドの船主は外國貿易を法律て禁ぜられて居るけれども、イギリスの全版圖に於ける海運業に參加を許されて居るが如きてある。けれども、大體からいへば、如上の航海律は頗る不自然なもので、或る意味では人間に神聖なる生存權の蹂躙てあつた。それ故に、英米間には祕密輸出入もあつて、如上の法令は十分行はれたのではないけれども、この經濟上不都合は、植

民地の發展と共に痛切に感ぜられ、それが米國の本國に對する反感を昂じさし、その獨立の原因の一を形作るやうになつたのである。

かくの如き不自然な政策の結果、個人の經濟上活動の自由大に束縛され、その極却て人民をして法網をくゞり、密貿易等の不正手段に出でしめる、尙ほまた、上下共に盲目的にひたすら金銀そのものを尊び、商賣のみを重んじて算盤玉をはぢくことに熱中し、土地から天產物を作り出すべき耒耜の業を忽せにし、之を抑壓にすることになつた。今や新思想家は金錢のみが唯一の富なりといふ誤れる思想を排しやうとした。既に十七世紀の後半、かのロックと同時代の英國學者ウィリアム・ペティ（一六二七―八七）[40]死、『政治算論』（ポリティカル・アリスメチック）等を著はす）は論じて曰く、『富の父は勞働なり、富の母は土壤なり』と。これ新思想の先驅であつた。かくの如くしてこゝに一個の學說が起つた、いふ、『人生は自然に自由である。この自由は天然狀態の生活の中に保たる。天然の利用卽ち勞働は人間の義務であつて且つ權利である。金錢は人民の富を作らず。一切の富の源は只だ天然にあり。卽ち耕作にある』と。この說を奉ずるものを重自然學派（フィジオクラッツ）と呼ぶのである。この派の巨擘はフランソワ・ケネー[41]（一六九四―一七七四）である。彼はヴォルテールと同時の人、元來醫者で、ルイ十五世に仕へてその侍醫であつた。當時十八世紀は支那の政治、社會、道德が始めて有力に歐洲に知られ、その平和にして進步せる文化が

賞された時である。彼はその經世濟民說によりフランスの孔子と稱せらる。その著『經濟槪覽（タブロー・エコノミック）』に題したる標語（モットー）に曰く、『農民貧ければ王國貧しく、國王も貧し』と。これ正しくケネーの根本思想を指示するものである。けれども、この重自然學派（フィジオクラッツ）は單に農民の尊重すべく、之によつて國富を致し得べきことのみを唱へたのではない。一切の殖產興業の束縛を解き、一切取引の自由を主張し、人民の職業に關する世襲、組合、階級の制度を攻擊した。彼等はこの點に於て一個の標語を下してゐる。曰く『自由ならしめよ（レッセ・フェール）』[42]と。その後、他の一人はこの語の後に『而して放任せよ（パッセ）』の語を附加した。かくして出來上つたこの標語は一切人民の實業が當事者たる個人と個人との間の自由契約に放任されてこれに干涉するなかれとの主義を示すものとなつた。この時代に於て政治上、社會上にも應用せられ、盛んにその流行を見るに至るのである。

これを要するに重自然學派（フィジオクラッツ）なるものは重商主義（マーカンティリズム）の集團的、强制的勤勞手段を排斥して、個人的、自由的勤勞法を唱道し、ここに始めて國民經濟（ナショナル・エコノミー）なるものに一個の組織を與へたのである。

この派の提議に基き、且つ當時の英國に於ける經濟界大變動、卽ち產業革命（インダストリアル・レヴォリューション）の實際の事實に徵して、最も偉大なる經濟學上產物が現はれた。卽ちアダム・スミスの『富國策（ウェルス・オブ・ネーションス）』（一七七六）是である。この著書は爾來經濟學上の權威、且つ經濟界の指針となるべき世界歷史上尤も記臆す

べきものの一てあつて、その所說は世上に所謂自由思想を宣傳するもの〻金科玉條となつた。

然らば以上述べた經濟上自由思想は當時如何に實際界に適用せられたか。(一)佛蘭西に於てはケネーの學說は、大革命破裂以前に於てケネー(92)の弟子なる一大政治家チュルゴー(93)(一七七四—七六)により實地應用を試みられた。(二)英國では、アダム・スミスの敎はウィリアム・ピット(94)(一七八三—一八〇一)により、(三)獨逸にあつては同じ主義は稍遲れてプロシアのシタイン、ハルデンベルグ(95)の改革(一八〇七以後)に際して(次講83)、各々實地に試みられて近代に於ける經濟上社會上大改革の實現を齎らした。

終に、猶ほ一言注意して置くべきことがある。こゝに所謂個人の自由なるものは、當時にあつては、おのづから有力なる個人の利益に傾くものてあつたことこれてある。市民(ブルジョア)即ち資本家の利益、更らに換言すれば、第三階級の利益てある。隨つてこの資本家と自由契約を結ぶべしと勸められた貧困者は、生活の弱者たるが故に自然に不利益に陷らざるを得なかつた。例へば英國產業革命當時、その新に起りつゝある工場の勞働者は幼年者、又は女子が多數を占め、而も容赦なく酷使せられ、身體の健康、智力、德性が共に無殘にも毀損せられたのてある。さればレッセー・フェール主義の思想は第三階級のために作られた哲學てある。かくて第四階級の利害は未だ十分に公正なる顧慮を受けなかつた。故にこゝに將來十九世紀に於て、かくの如き不利益不公平に傾くべき社會發展に對して、更らに改良の要求が當然に起るべきてある。(111參照)

79 改革か革命か(リフォルムかリヴォリューションか) 米國獨立及びその影響

如上の十八世紀に風發した新思想の傾向を見るに、自己の目的實現のためには、自己の前途に於て、苟も特權を所有し利益を壟斷する者が橫はるあらば、かくの如き特權をすべて破壞し了らずんば已まざるの勢を示して居た。この特權打破には種々の方法があつた。新思想が君主權と提携することもその一てあつて、これは十八世紀後半、歐洲諸國を通じて流行した。例へばプロシヤのフレデリック大王(一七四〇—八六)、ロシアのカザリン二世(96)(一七六二—九六)、オーストリヤのジョセフ二世(一七八〇—九〇)の如き、既に吾人の前々節に於て一瞥した通りてある。最も保守的にして時代進步に遲れて居る羅馬風の諸國、卽ちイスパニア、ポルトガルと雖も、フランスと同じく三國相前後してジェスイタ敎團の禁壓及びその放逐を斷行した。何となれば、この二百年前聖ピータの傳統者を孤城落日の危機から救ひ出した羅馬敎會の精軍も、重商主義の時代の俗流に染みて、當時十分に腐敗して居つたからてある。因て法皇はジェスイタ敎團解散令を發して如上の既成事實を承認するの外なかつた(一七七三)。是れ啓蒙思想に動かされたる世界的新風潮の然らしむるところてある。

以上列擧する所は、いづれも君主權を以て新思想を行ひ、國家及び社會の改革を成就せんとする試

みてある。この風潮の行方を察するに、若しかくの如き改革が失敗し、若しくば不可能となる場合があつたならば、ポーランドの如く滅亡するか(一七七二―九五、前講72)、若くばフランスの如く大革命(一七八九―九五、次講)となるの外なかつたのである。

この際革命の先驅として、アメリカに於けるイギリス植民地が母國政府から離叛して成功したことは、世界史上極めて意義ある大事件である(一七七六―八三)。

抑もこれらの植民は、これより先、七年戰役(一七五六―六三)の渦中に於てフランス人と植民地戰を戰つて成功し、その十三州の間に一種の國民的自覺を高めた。彼等は久しく母國政府特有の既述の如き保護政策に支配されて居る。戰役中、イギリスには專制的なるジョルジ三世立ち(一七六〇)、自分一人の氣に入る內閣を作り、之をして如上の保護政策を一層勵行且つ擴大せしめて來た。これは母國政府としては、戰時に於ける植民地防護より生じたる損害の復舊と、戰後に於ける植民地統一とのために行はれたるものである。それだけ、植民地に取りては干涉の繁激、負擔の增加と感ぜられた。彼等は漸くこの母國との關係の改善、自家の位置の向上を希つた。その結果、本國政府との間に、稅關の取締の方法やら、課稅竝に立法に關して、次から次へと衝突が起つて爭が嵩じて行つた。

因みに、當時十三州の人口を見るに、前記事件の開始と目すべき年、一七六〇年には奴隸を合せて約百六十萬人に達して居る、而して十五年間に、卽ち最初の大統領就任の翌年、一七九〇年には約四百萬人を數へて居る、卽ち、本國政府の干涉の嚴重、次には戰役に拘はらず、尙ほ植民地の通商生業移住の盛んにして、その社會の繁榮が建國期の當初から米國一流の長足の進歩をなしつゝあつたことが、推知せられるではないか。

さて前段に指摘した本國對植民の爭議の際、植民地側の固執したる主義が十七世紀の淸敎派革命以來確立して來た母國自らの憲法主義であつたことは、注目に價する。抑も彼等はその間に當時既にイエール、ハーヴァード、コロンビヤ、プリンストン、ペンシルヴェニヤ、ヴァージニヤの六個の大學を有し、淸敎派の神學的根據に立つた自由思想と、ロックの『民政論』とによつて敎育されて居たから、この米國獨立運動に於ける本國との論爭は、頗る理想的にして法律的であつた。就中、ヴァージニア州出身の少壯なる法律家にして民權の擁護者たるパトリック・ヘンリ[147]の如きは、法庭に又た州議會に於て、侃々諤々の議を吐き、人心を動かした。彼は牧師給料賠償事件(一七六三)に於て、敎區役員側に立ちて辯論したる時、事件の法律問題をそこのけにし、本事件の起原が元來國王が恣に州議會の法律を改廢したるに基くが故に、この點を捉へて直ちに政治論に入り、社會は契約なりとの理論に據り、國王はこの條件を破りたるが故に、『彼は一個の暴君に墮落したものである、隨て從の臣民の服從に

對する一切の權利を失ふたものである』と結論した。この政治論は當時の植民の胸中を代破したものである。本國の立法に對する最初の重大な爭議は、一七六五年の印紙法であつた。これはアメリカ印度人の叛亂征討及び植民地經營に充つべく植民地に於ける印紙貼用による課稅法で、グレンヴィル內閣がウェストミンスタ議會に提案可決せしめたものである。その目的も、その稅目も、壓制的のものでなかつた。けれども人心漸く勃興の折柄とて、イギリス憲法主義の中心點たる『代表されずしては課稅さるゝことなし』（ノー・テクセーション・ウィズアウト・レプレゼンテーション）といふ思想が植民の腦裡を支配して新立法に對する反抗となつた。この反抗は先づヴァージニヤ州議會から發した、それは、かの牧師事件で有名となつたヘンリが、この年補缺選擧て著席して居つたから、彼は一個の決議案を提出可決せしめたのに始る。之によれば、植民は課稅及警察に關して自己の議會によつて支配さるゝ權利ある、この權利を自己の議會以外の如何なる者にも委任することは不法である、イギリス及びアメリカの自由を破壞するものである、といふのである。かくて植民諸州の間に輿論起り、ニューヨークに於て印紙法の議會（コングレス）を開き、『權利の宣言』と國王及びイギリス議會（パーラメント）に對する請願を可決し、植民地の人民がウェストミンスタに於ける衆議院（ハウス・オブ・コモンス）に於て代表されて居ない、且つ代表されることは出來ないこと、及び、彼等は彼等自らの議會に依るにあらずんば憲法的に課稅されないことを發表した。されば問題は一轉して憲法問題となつた。本國政府はやむを得ず印紙法を撤回したけれども、尙ほ自己の憲法主義を固持して、自己の議會（パーラメント）を通ほして植民地に向つての立法に努めた。されど、その後も植民地の反對の激烈なるがため、政府は讓歩するところあつたけれども、尙ほ茶の輸入稅のみを存置して、以て自己の主張を保持せんと欲した。この稅は三片（ペンス）で、極めて輕微てある、加之この輸入茶は輸入者たる東印度會社を助くるために本國經由の課稅十二片を廢したから、植民地ては、實は差引九片廉價の茶に接することゝなる譯てある。然るに、植民は却て之を憲法主義買收の卑劣手段と看破して一層激昂した。この新法による最初の輸入茶がボストン埠頭に入るや、一夕印度人に假裝せる一團が船に闖入して三百四十の茶箱を海中に投じたのは、『ボストン茶遊會（ボーストン・ティーパーティ）』（一七七三）とて米國獨立の有名なる挿話となつて居る。

かくの如くして、反抗、騷擾、傷害破壞、隨所に破裂し、事實上叛亂狀態となつた。この爭に於て、植民地に取りて、自然の好同盟として著目されたのは、フランス國民とイギリス在野黨とてあつた。されば十三州は代表者としてフランクリン、ジョン・アダムス[48]等を歐洲に派遣し、これ等の人士は巧に周旋奔走してフランス國民の同情と、英國在野黨の歡心とを繋いて成功した。就中、フランクリンは夙に鄕里て避雷針を發明し（一七五二）て、歐洲まて有名となり、常識と交際に長じた老紳士て、アメリカ特出の自助自成の典型として巴里のサロンの獅子と持囃された(77)。當時、この人の周旋に依り、一人

のフランス人で政治記者であるトーマス・ペイヌ[49]の渡米は、兩世界の英雄ラファイエットのそれに劣らず注目に價する。この政論家は新世界で『常識（コンモン・センス）』と題する小冊子を出版して植民に訴へ、ロックの政治主義を根據として人民の反抗權を主張し、苟も植民がフランス政府と同盟を結ばんと欲するならば、彼等自ら先づ母國から分離獨立の必要があると說いて、大いに人心を激勵した（一七七六）。又た英國の在野黨の首領大ピット[50]（當時貴族に叙せられてチャタム伯と云ふ）は議會に於て亞米利加植民の英國憲法主義によれる反抗を賞讃し、『余はアメリカにして倒れんか、彼女は吾が憲法の柱を抱きて共に倒れん』と叫んで、熱心に政府の反省を促し、その讓歩を勸めた。

因みにいふ、當時ヂョーヂ三世の治世の前半は、イギリス議會がビット父子を始め、エドマンド・ボルク、フォックス等の古典的雄辯家を輩出した。又た政論大いに起り、雜誌に著書に匿名論文に裁判に、イギリスの內外を問斷なく刺戟した。このイギリス政治法制に關する當時の著書では、イギリス法律家ブラックストンの『英國法の解釋』[51]（一七六五―六八）、スウィスの政論家デロルムの『英國憲法』（一七七一）尤もひろく行はれ歐米人の法律思想の啓發の功太だ大てあつた。

話跡に返りて、本國と植民地との調停は終に成功しなかつた。十三州は先づ自ら大陸會議（コンチネンタル・コングレス）と稱する聯合會議を催うして共同の大事を議決してその實行に著手し、一七七五年以來開戰狀態となり、翌一七七六年、愈有名なる獨立の宣言を發した。この文書の起草者はヴァージニア出身の議員にして辯護士、後第三回大統領となるべきトーマス・ジェファソン[52]てあつた。彼は年尙ほ壯、平素からロックの民治論を愛誦する一人て、この際一氣呵成に執筆し了つた。故にこの獨立宣言書は頗るロックの口吻を存し、往々原文そのまゝの所がある。有名なる冒頭の一句『すべての人間（オール・イン・アール・クリエーテッド・イクオーリ）は平等に創造された』はその一てある。

かくて一七七六―八三年に亘る七年間の苦戰と、歐洲の同情、その諸國との外交關係、殊に一七七八年以後はいよ〳〵フランス國民の同盟とにより、一七八三年、十三州は遂にイギリスから獨立を承認され、所謂『聯邦（ユニオン）』が事實上確立した。卽ちこれ君主權に對する民主權の大勝利てあると共に、商國主義、就中航海律に現はれた保護政策、卽ち特權擁護主義の打破てあつた。

戰後の經營、就中聯邦憲法の制定は、戰前戰時に勝るとも劣らない幾多の困難が纏綿して居たに拘はらず、數年間に成就した。かくの如くにして作り上げられた米國憲法はその國家と共に、清敎派時代以來百餘年間、英國人が母國及び植民地に於て經驗したる政治生活と、ロックの『民政論』、及びモンテスキューの『萬法精理』等に收められる新政治思想との結合てあつて、憲法史上、凡そ制定憲法の嚆矢にして、且つ稀世の傑作てあると謂つても、決して溢美てない。かくて獨立軍の司令官たりし寬大

讓譲の長者ジョージ・ワォシントンは選ばれて第一回大統領として就任した、時に一七八九年である。

この新世界に於ける民主的國家の成立といふ大事件が、舊世界に及ぼした感化は實に深大なものであつた。何となれば、上述の歐洲諸國に於ける改革は成敗相半し、米國獨立が成就するまでは、大勢尙ほ未だ定らない。この時改革の最も大なる試みは、歐洲大陸の最大國家たるフランス王國　人口に於て五大强中僅かにロシアに及ばざるのみ、オーストリヤの二千萬、イギリスの千二百萬、プロシヤの五百四十萬に對して二千五百萬を有す）の首府にして、天下の文明の中心たる巴里（人口に於て唯だ倫敦に劣れるのみ、約五十萬を有す）及びヴェルサイユに於て行はれつゝあつて、この試みの成否如何は、全歐洲の運命に關するもので天下の萬人等しくその成行を凝視する所であつた。この際、かの米國獨　事件により逆にフランスに輸入さるべき革命思想、竝にその戰場から凱旋し來りたるフランスの新人が、この歐洲の最も重大なる局面に及ぼす影響は、これ亦たおのづから重大ならざるを得なかつたからである。

抑もこのフランスに於ける國內の困難の遠因はルイ十四世時代（一六四三―一七一五）の專制政治に在る。彼の曾孫ルイ十五世はその後を受けて、これまた長い、實に六十年近い治世の間に、同じ舊式政治の弊竇を一層增長したばかりてあつた。されば、その孫ルイ十六世が一七七四年に卽位するや、

時代思潮に從ひて改革を斷行すべきや、將たみづから革命を招くべきやと云ふ、正さしく岐路に立つて居る。吾人はこの運命づけられた新君主が、その治世の最初十五年間に於て、如何にこの難局に處したかを一瞥して本講を終へやう。

ルイは不人望なオーストリヤからマリア・アントアネットを娶り、卽位の時、年甫めて二十歲、尙ほ世間知らずの未熟にして善良なる一靑年てあつた。かのチュルゴーが擧げられて財政に任じたのは、この君主治世の初年てあつた。この新政治家は啓蒙時代の新思想を代表して改革を計り、その成績早く見るべきものがあつたが、惜むべし、唯だ宮中及び頑迷な輩の反對のために一年有餘にして罷められた。ついてアメリカ獨立戰爭が破裂して財政の危機を速めた。この戰役の最中にジェネヴァ出身の銀行家⑤③てゐも新敎信者たるネッカーが拔擢されて財務官となり、その財政の經驗と博愛的新思想とを以て改革に努めたけれども、これ又失敗に終つた。かくてフランスに於ける王權と新思想とのいはゞ提携に依る改革の企は遂に破れ、輿論は益々沸騰して君主政の鎧甲裘なきに失望し、所謂「國民（ネーション）」の權利を主張した。然らば國民（ネーション）とは何ぞや。從來から特權を有するものは、これを僧侶竝に貴族なりと解釋し、新に興りつゝある市民（ブルジョア）は自らが卽ち「第三級（サアド・エスタート）」が國民てあると主張して居た。この時、下級僧侶のうちからアベー・シエイエースなるものが出でゝ、後者の味方となつたのは尤も人目を惹いた、卽ち

『第三級（タアト・エスタート・ドゥ・トロワ）はあらゆるものなり。』と標榜して國民（ネーション）は卽ちこの第三級に他ならないことを力說したことである。政府は遂に窮して總部會議（スタツー・ゼネラル）卽ち一切階級の會議をヴェルサイユに召集して之に訴ふるの外なかつた。時は一七八九年五月である。而も開會の初、諸部のうち第三級は漸く重きを成すの傾向が早くも現はれた。卽ち、これルイ十六世の改革の企が著々失敗し、最早その成功の望なきに至つたことを證明したものである。

されば、議會に於ける巴里亂民の示威運動は次第に險惡となつた。この危機に際して、憐なる國王は意志薄弱にして左右に誤られて方針一貫せず、處理よろしきを失ふた。かゝる間にバスティーユ獄（55）破壞（一七八九年、七月十四日）の暴擧が破裂した。傳へいふ、この夜、急を告ぐる警鐘を聞くや、ルイは驚き起きて、侍臣に問ふて曰く、『否、陛下、そは叛亂（リヴォルト）にあらず、革命（リヴォリューション）なり』と。『朕は國家なり』と自信豪語したる『太陽王』の子孫はこゝに始めて革命なる語を耳にしたのであつた。

第十八講　フランス大革命　ナポレオン戰役

80　大革命の概觀

フランス大革命は、それ以後は別問題として、凡そ人類の歷史ありて以來この時まで他に類例なき急激なる大變動であつた。吾人は急轉直下なる語が、古來の歷史上發展の潮流に於て、こゝに至つて始めて最も適切であることを發見するのである。

吾人が既に前講の終にその端緒を見ておいた如く、フランスの內外ともに、天下公衆の環視の裡に、總部會議（スタツー・ゼネラル）が一七八九年五月ヴェルサイユに召集されてから、巴里の人心益激昂、風潮日に險惡、わづか五個月の短日月間に、ブルボン王家の君主政治及びその社會は、事實に於て、全く根本的大打擊をうけて蕩ゆべからざる創痍を蒙らなければならなかつた。吾人は單に概觀だけを提供する。

かの有名なる七月十四日のタバスティユ破壞の亂暴が起るや、その翌晩から貴族富豪等の逃亡始まり、亂民の暴擧絕ゆることない、遂にヴェルサイユの議會は電流に打たれたるが如く、或る一夜のうちに、一切の特權を廢止した、ついでラファイエット⑦の提議の下に、所謂歐洲最初の人權の宣言は發せられ、十月、ヴェルサイユ宮中軍人に宴を賜ひ、或はクーデターの風說起るや、巴里の饑民、多くは婦人も

加はり、ヴェルサイユに進行し、宮中に闖入し、國王及び家族を拉して巴里に歸り、チュイルリ②宮に居らしむ。議會も亦た巴里に移る。之より議員等も亦た多く富豪貴族等の跡を逐ふて都を去つた。最近まで大臣であつたネッケルの娘ステール③夫人は父と共に一旦亡命したが、都に還つて風物の變化に驚心駭目、夫の故郷の君主スウェーデン王グスタフ三世に與へた手紙に書いて曰く、『君よ……妾は自ら怪み問ふ、過ぐる一ケ月間に、一千年の星霜の經過したるにあらざるかと、若し名譽ある國王陛下が尚ほ舊に依つて在さざりしならば、妾は一個の別世界に移住したるの感に堪へざりしならむ』と。歐洲に於ける最も尊貴なるブルボン王室は今は早や幽閉同樣の身となつた。只だ之より以後、革命の政治家ミラボー④の手腕によつて幾分か時局の收拾を見、王政は僅かに維持されて居たのみてある。かくて一八九〇年立憲王政の新憲法が成立した、卽ちこれモンテスキューの政治思想の實現と謂ふべきてある。

然るにこの年ミラボー死し、政界またその人なく、內、經驗に乏しき論客跋扈し、互に急進を競ひ、最初はジロンド派、次にジャコベン⑤倶樂部相ついて權を執り、外、皇后の故郷オーストリヤはプロシヤと提携して亡命者流の側に立ち、王室及び保守主義者の救護のために、佛蘭西に向つて開戰したから、其後二年の內に、王政は名義に於てゝも廢せられて共和政となつた。善良なる國王は國家の裏切者として、ルイ・カペー⑥の名の下に、議會の裁判を受けなければならなかつた。彼は遂に死刑に處せられた。

一七九三年一月。卽ちこれルーソーの思想の發現である。而して更らに進んで、一七九三年から九四年には恐怖時代（レーニュ・ド・テロア）となる。この時、皇后アントワネット⑦を始めとして王族、貴族、名士才媛の多數がこれがために斷頭臺に上ぼされた。卽ちこれルーソーと百科學者（アンシクロペディスト）との思想の實現てあつた。大革命の發展もこゝに至つて極る。

これを百年前の英國の光榮革命（グロリアス・レヴォリューション）（一六八八）に比較すると、いづれも權利と憲法とのためにする爭てある。併しその間に重大なる相違がある。英國に於ては、その時既に久しい習慣により、民權の傳來があり、不文の憲法が成立して居た。只だこれを實行せんがために革命が起つて、その結果、王家の交迭を見たのみ。これに反しフランスは如何なる憲法をも有しなかつた。專制政治の亂暴に對して、新に權利の規定を要求するものてあつた。英人には既に政治上熟達して居たが、佛人は政治上の經驗乏しく、只理論に長ずるのみてあつた。英人にはその社會は既に存在成育し、その制度略ぼ確定して居た。佛人には、よしやその上流が燦然たる文化に照被されて居つたにせよ、全體の社會そのものが未熟てあつた。故にその革命は曾に政治上の爭のみてなく、實に社會上の革命てあつた。さきに清敎派（ピュリタン）革命のとき、クロムウェルが兵力を以て共和國（コムモンウェルス）を作るや、彼は同時にその鐵の如き意志を以て一切既存の社會と制度とを保護した。フランスに於ては、恐怖時代の後に於て、一七九五年、タロム

ウェル同樣の鐵血の雄たるナポレオンが現はれた時には、從來の社會が既に全く顚覆された跡であつた。英國の革命は宗教家が信仰のためにこれに關係して活動した。佛國の革命は信仰のない若くば薄い者が跋扈する運動であつた。その極、一時かの恐赫時代には基督教廢止、純理（ラ・レーゾン）の崇拜（リーメン）とまで走つた。英國では、貴族と、財産あり、知識ある市民とが相提携して輿論を作り、單に王家の橫暴とその加特力信仰とに反抗した、彼等は終に王家を改易したけれども、政治及び社會制度を破壞するまでに至らなかつた。學校、教會、裁判所はいづれも保存せられたのである。フランスでは貴族と僧侶は獨り特權を占有し、而も曾て封建時代に負擔した國家に對する役務を今は忘却して了つたから、國民の怨府となり、その反抗を蒙り、革命の猛火によつて全然、少くとも或る期間は、燒き盡された觀がある。英國にては、下層の人民は比較的冷淡であつたが、フランスでは群衆蜂起して秩序を破り暴力を揮つた。以上簡單ながら、以て兩國の革命の相違竝びに之に現はれた兩國民の發展及び氣質の杆格を見ることが出來やうと思ふ。

然らば大革命中のフランスの教會は如何と云ふに、一七九〇年の憲法は教會の所領を收公して、これを財政整理の財源に充てた。新憲法の政府が紙幣を增發したのはこれに由る。而して僧侶は官吏と同樣に取扱はれて、俸給を支給され、羅馬法皇に對しては從來の服從を誓はず、只だ政府に對して服從を誓ふべしとした。故に僧侶は最早教會の僧侶ではなく、政府の僧侶である。即ち、宗教の僧侶でなく、俗の司教者である、これを世俗僧侶（シヴィル・プリースト）と云ふた。蓋し世俗僧侶とは羅馬教僧侶（ローマン・プリースト）に對する義である。何となれば、この時から一八〇一年まで、佛蘭西の僧侶中には、大革命が作り出したこの憲法を遵守せず、依然として羅馬法皇を首長と認めるものが多數あつたからである。彼等の根據地は都會ではなく、地方にあつた。革命論者は新法制を作つて監督等をその數世紀間住み馴れたる宮殿から放逐した。されど監督等は田舍の糞屋に隱れて多數の百姓を愛撫し、地方民心を維持して居た。かくの如くして、ナポレオンが一八〇一年法皇と宗教上協約（コンコルダト）を結ぶまで、フランス教會は政府派と羅馬派との分裂（シズム）に陷り、社會は混亂を極めた。

81　ナポレオンの出現　英伊獨との關係

一　新思想の胚胎

かの一七八九年七月バスヂーユ破壞を以て開始された大革命の亂暴狼藉は、一七九五年ナポレオン・ボナパルトの出現を以て收拾された。即ち、この時、『恐赫政治』の反動として現はれた溫和なる『國民協議會』は、この人物を雇ふて、巴里の亂民を砲擊鎭壓し、このいはゞ血祭で、三たび目の協議會が作つた改正憲法に依つて、總務政府（ディレクトル）⑧なるものが確立したからである。これからの問題は、この大革命が

この時までに國際界に惹起したる波動が今後如何に進み行くべきかに集中する。そこに、歐洲の大舞臺に於ける新思想の胚胎と傳播とがあるべきである。

そも〳〵、この時までにジヤコベン派の政府が執り來つた極端なる民主的政策、就中、國王の廢位、次にその弑逆、竝に一切歐洲諸國に向つて、苟も專制政治に苦める國民あらば、進みて之に援助を與ふべしとの、いはゞ民主的十字軍の檄を傳へたことは天下を震ひおのゝかしめ、諸國の過激派乃至抑壓されたる者は因て氣を思ふた。その餘波の及ぶ所を例示せば、西印度諸島にも傳播し、こゝの黑奴獨立してハイヂ⑨共和國を建つるに至つた位である。況んや、フランスに隣接し交通利害の頻繁なる諸國にあつては、恐慌一方ならず。之がために、保守派の反動運動著しく起るべきは偶然でない。イギリスの政論家にして議員エドモンド・バルク⑩の有名なる『フランス革命につきての回想』はかくの如くして現はれた。しかのみならず、最初革命に同情したる政治家竝に知識階級の者にして、今や却て愼重警戒の態度に出でゝ反對派と化するものがある。當時のイギリス首相少ピット（老ピットの子）はその重要なる一人である。

是に於てイギリスは墺普兩國の革命對抗戰に參加し、歐洲の諸國を催うして之と共に對佛聯合を作るに力めた。これより英國は二十二年間、中間の一年を除くの外（一七九三―一八一四年間の戰役　内

一八〇二―三年間の平和）終始一貫して革命的ナポレオン的フランスと戰ひ、屢自ら中堅となりて歐洲諸國の聯合を催うし、最後にその目的を達すべきである。是れ『英國膨脹史』の著者シーレーがその著に於て近世百年戰爭と名づけて居る戰役の連續（十六講68）の内に於て、その最終戰役を形造るもので、實にこの時までの世界未曾有の大戰役である。この一大事變に際して、イギリス嶋國は大陸諸國と異なり、海上の覇權を維持して自ら守り、曾に革命から來る思想上直接影響、竝にナポレオンの侵略はこれを避け得たのみならず、よく當時進行しつゝある英國の産業革命を擁護促進し、フランス及びその與國、オランダ及びイスパニヤの海外版圖を蠶食して益々大となつた。之に反して大陸諸國は佛國の陸軍及び侵略策に敵し得ず、その革命思想を蒙り、多少なりとも、直接にして急激なる國内の改造を受けないものはなかつた。

畢竟するに、大革命の狂瀾怒濤は一七九五年總務政治の成立、ナポレオンの出現を以てフランス國内に於て收拾されたけれども、イギリスを除くの外、尚ほその波動を歐洲諸國に及ぼされることになつたと謂へる。

この大波動を尤も直接に最も激烈に感受したものは何ものか。そはフランスに接壤して國家組織の尤も不完全なる神聖羅馬帝國の殘骸であつた。この帝國は、只だ中古以來の傳統に依りて十九世紀始

まて存續するの奇運を荷ふもので、實は神聖でも、羅馬てもない、將た何等の帝國らしき統一もない、多數の封建的獨立國又は市を含むて居る尨雜なる一大團體てある。その國民の中堅民族はドイツ人てあるけれども、その包含する地理上面積は歷史上發達の結果として、ドイツ地方の外にイタリヤ地方もある。是等の所謂帝國內の土地人民は、この大なる時期に際して、果して何物をか贏け得たる。曰く、領土上の大變革と新思想の洗禮てある。而して新思想とは卽ち國民主義及び自由主義である。

二、イタリヤとナポレオン

十八世紀始以來、ミラノ公國、卽ちロムバード平野の主要部は、イスパニヤからオーストリヤの有に歸して居るから、こゝにハプスブルグ家が重をイタリヤになすの端緒が出來て居た。この地に於てオーストリヤを打擊するために、ナポレオンは總務政府の命をうけて不意にアルプスの險を越え、墺國人の意表に出てゝよくその目的を達した、卽ち墺國軍を伊太利より擊退し、墺國をして和を乞はしめた。カンポフォルミヨ講和は卽ち是れてある。かくてイタリヤに在る間に、ナポレオンがその人民に與へたる感化は頗る廣大てあつた。彼は元來イタリヤ人の出身である。彼はイタリヤ滯陣中、己が同胞國民に向ひて切りに古羅馬の英雄時代の光榮を鼓吹し、シピオ、ブルツス、シセロの名を追憶せしめ、巧みに人心を收攬した。この際、かの法皇の國とその建國の古さを競ふて居る中古の共和國ヴェネチヤは、ナポレオンの鐵腕に握られて粉碎された。法皇の領土も亦たその北部を削られた。而して是等の征服された地方を土臺として、新に創立されたのは、卽ち偉大なる歷史的聯想を有するイタリヤの名を冠するもので、後、ナポレオン自らその王位に昇つた。ルネーサンスに於ける人心が外國人の支配によつて壓伏されてから、茲に三百年、イタリヤ人の間に始めて再び國民的精神は喚起され、統一國家に對するあこがれの念が油然として湧き出たのはこの時てある。この同じ國民的精神の餘波が更らにアドリヤの海を越えて希臘人の間にも波及し、詩人リガスの獨立運動となり、これは失敗したけれども(78)、今日の希臘獨立の種子が蒔かれたのも亦たこの時に始つたのである。

蓋しナポレオン・ボナパルトは、その出身に於て、ルネーサンス時代の伊太利雇兵隊長(コンドッティエレ)(77)の階級に屬し、その使命に於て、正さしく啓蒙時代の『光被されたる專制者』(イリュミネーテッド・デスポット)の一人にして、而も斯くの如き人物中最も偉大なるものてある。彼はイタリヤ遠征に於て自己の權力を固め、當時のフランス共和國の尤も必要とする內部の統一と對外勝利とを兩つながらフランス人のために贏ち與へたのてある。彼は一旦掌握した權力を飽くまて之を熱愛して、己れ一人にて之を壟斷し、他に頒つを肯んじない。彼は遂に一七九九年、無能なる總務政府を改廢して、古羅馬共和國の官職コンスル政治を設け、自らその首席コンスルとなりて、實はシーザルと同樣なる權力を占めた。

彼はフランス共和國の憲法を尊重し、而も事實の上に於て、之を自分一人の專制君主國に化したのである。この專制國は三個の方法に依つて維持された。第一、十八世紀の新思想に基きて法典を編纂し、一切人民の法律上平等を實現し、なほ之をナポレオンの征服の及ぶ所にも及ぼし、普く同やうの恩惠にせしめた。イタリヤ及び西南ドイツ地方が、直接に間接に、『ナポレオン法典』の恩澤を受けたのは之に由る。第二、大革命以來兩統分立に陷りたるフランス敎會を復舊し、人民の信仰を統一するために、一八〇一年羅馬法皇と宗敎上妥協(コンコルダット)を結び、一方には、一切僧侶をして法皇に服從せしめ以て人民の信仰の倚藉する所を恢復し、他方には、同じ僧侶をして說敎壇上からナポレオンの新政治の功德を讃歌せしめた。第三、ナポレオンはフランス共和國を踏臺として國外の土地人民の征服を行ひ、猶ほ古のシーザルが羅馬人の帝國を建てたるが如く、フランス人の帝國を作り上げ、更らにかのカール大帝の如く、形式に於ても自ら皇帝といふ榮位に上つた(一八〇四年)こと、是れてある。

三、ドイツとナポレオン(一七九五―一八〇六年)

ドイツ人はナポレオン時代の前半期に於ては、未だ國民的精神を發揮するに至らず、かの放フレデリック大王の殘したる軍國、卽ち將來獨逸統一を成就すべきプロシヤ王國は、第一聯合對ナポレオンの戰局に於て、早くも半途から脫退して一七九五年バーゼル[12]に於て單獨講和した。而して爾來、約十年間中立と休養を貪り、ナポレオンの天下一統に對抗する世界からは頗る臆甲斐なく感ぜられた。このプロシヤの中立期に、ナポレオンの埃及遠征の隙に乘じて、オーストリヤは第二回目に起ちて復た敗れた一七九九―一八〇一年)。そこでナポレオンの指圖の下に、一切ドイツ諸國諸部の代表者はレーゲンスブルグ[13]に會議し、領土關係改造を議定しなければならなかつた。かくの如くして一八〇三年レーゲンスブルグ帝國代表者決議が出來た。これによれば、フランスの征服がライン河左岸全部に及びたるが故に、之がために蒙りたるドイツ諸國の損害は右岸內に於て賠償されなければならない、因て、右岸內に於ける宗敎上君主の所領及び多數の騎士の所領は沒收されて、如上の賠償に充てられたのである。聯合の中堅を以て任じて居る流石のイギリスも一時ナポレオンと講和しなければならなかつたのは、この頃てある。

しかし、この成上者の要求あまり過大にして專制自ら率ゐ、且つ前述の如く遂に帝位を履まんとするに及び、英國再び開戰し、オーストリヤも三たび目にまた起ち、ロシアと提携し、相與に、海に陸にナポレオンに當つた。海上の懸引に於ては、ナポレオンの海軍遂にネルソンを欺く能はず、最後にトラファルガ[14]の悲劇に了るべきてあるが、陸上ては、オーストリヤは、それだけナポレオンの復仇的突擊を受け、都ヴィーンを占領され、アウステルリッツ[15](一八〇五年『三帝會戰』)に大敗して降を請

ふた。之にてドイツ改造の事全く確立して動かすべからざるに至つた。オーストリヤの君主は先づ自らオーストリヤ皇帝の尊號を取り、やがて、その祖先がこの時まで三百年以上踏み來つた神聖羅馬帝國の位をすべつた。一千年の歴史を負へる神聖羅馬帝國こゝに名實共に解體した（一八〇六）。之より以後、ドイツは大體に於て三大勢力に區分し得べし、卽ちオーストリヤ、プロシヤ、及び南ドイツである。その內南ドイツはそのバーヴァリヤ、ユルテンベルグ、バーデン三國が比較的最も擴大し、この時ナポレオンが組織したライン同盟の中心となつたのであるから、一層、前記兩强に對抗して優に第三勢力を形造ることゝなつた。

されば一八〇五—六年はドイツ改造の最大危機であつた。この危機まで十年間中立の安逸を貪つて居たプロシヤは、始めてナポレオンの壓迫を感じ、一八〇六年秋斷然起つて戰ふた。開戰の始、イェーナ、アウエルスタット[16]に大敗し、故フレデリック大王の軍國組織の老朽用ふべからざることが實地に證明された。王室遠く東北の境に逃れ、ロシアの援軍をうけても尙ほ利あらず。一八〇七年チルシット[17]講和の屈辱を受け、エルベ以西の地を失ふた。

要するに、以上はナポレオン時代前半期に於けるドイツの改造である。この改造は十八世紀の新思想とフランスの利益とを標準とするものにして、その傾向著しくフランス的であるが、而も尙ほ人道の上に於て幾多の幸福をドイツに齎らした。卽ちドイツの西南部は、之がために、前に述べた如く、著しくフランス思想、法律及び制度を受け、殊に法律上平等の精神輸入され、從來封建君主の割據と橫暴とに呻吟したる地方とて、如上の改造と改革を歡迎した。

さきに十七世紀以來、フランスの領有となつたエルザス（アルサス）及びロートリングン（ローレーヌ）[18]の地方が、全然フランス化したのは、このフランス大革命及びナポレオン時代に始る。殊にエルザス地方は、首府ストラスブルグ[19]を始として、中古からドイツ文化の誇の一となれる地方であつた。爾來、フランスに蠶食され、遂にルイ十四世の時に確實に領有に歸した。しかし言語、風俗、感情に於ては實は尙ほ久しくフランス化しなかつたが、この時代に於て、住民はふかく大革命の『自由、平等、博愛』の思想の鼓吹をうけた。ついで、彼等は、是等の思想を宣傳するフランス軍隊の赫々たる戰捷の輝きに眩惑された。これがために、その地方人心は全くフランスの『祖國』（ラ・パトリ）の『光榮』（ラ・グロアール）に心醉し、之と共鳴同化するに至つたのである。ナポレオンの下に働きたる將軍の內には、實に多數のエルザス・ロートリングン人があつた、エルザスからはケルラマン、クレーベル[20]、ロートリングンからはネー、ウーディノ[21]の如きて、いづれもみな平民の出身で一躍して赫々たる武將となつた。

以て大革命及びナポレオン征服のドイツに對する感化の如何を察すべきである。最初の間、ドイツ人は從來の惡政に對する反感上ナポレオンの寧ろ歡迎すべきものあるを知つて、未だ之に對する國民的反抗心を燃やすに至らなかつた。當時のドイツ人は、詩人ゲーテの言をかりていはしめば、『吾人は國民にあらず』てあつたのである。

82　文藝史上のナポレオン帝國

吾人は前節に於て、イタリヤ雇兵隊長型の人物にして十八世紀の『光被されたる專制者』の一人としてのナポレオンを、その政治上改革事業に於て一瞥した後て、その連續と發展とを見るに先ち、かくの如き人物及び事業に必然相伴ふべき文化現象、卽ち學藝上關係を大觀して置かなければならない。

彼は精力絶倫にして活動異常、而も彼の事業多端に亘つて彼の目的は一貫集中した。彼は一切の平和的文化方面にも、自己の鐵の如き意志を投げ込みて、干渉支配至らざるなし。彼は既述の如く、羅馬敎會と妥協して國內の說敎壇を操縱し、言論出版を取締り、戲曲に干渉し、フランス文學中その古典となり居れるコルネーユの作に對しても、をの科白の改作を命じた。苟もナポレオンの新政治に反對するものは何人といへども容赦されない。當時革命の風雲の熟すると共に、大に起りたる巴里のサロンも、痛切にナポレオンの意力を感じなければならなかつた。是等の社交機關の主人公にして、新政府の壓迫を蒙り都を去つたもの少くない。かのステール夫人は一八一一年に各亡命した。

詩歌には、大革命及びナポレオン時代のフランスの勝利と光榮とを謳ひたる新しい產物頗る多い。前者の適例は、卽ち一七九二年、革命政府に對する內部の反抗と墺普兩國の侵入といふ內外の危機に際して、全國戒嚴令の布かれた時にある。この時、ストラスブルグ軍隊の一士官ルージェー・ド・リール[24]は、同地方に於けるライン守備隊のドイツに對する敵愾心を鼓舞するために、悲歌慷慨の作歌作曲を試みた。この作品は、幾ばくもなくマルセーユの愛國健兒の一團が、當時、危急存亡の秋にある國家擁護のために北上するや、之を高唱宣傳したから、廣く流行し、遂にフランスの國歌となつた。卽ち是れマルセイエーズ[25]である。

ナポレオンの傾向は、既に述べたる所によりて容易に看取せられ得る如く、實に古典羅馬を理想としたのである。彼は羅馬の皇帝（インペラトル）に私淑し、古代羅馬風の官職、衣冠、建築、美術、工藝を愛して自分の作り上げたフランス人の帝國及び自分の帝室を飾り、茲に美術史上所謂『帝國式（アンピール）』を構成するに至つた。畫家にはジャック・ルイ・ダヴィー[26]あり、多くのナポレオン像を描いた、卽ち聖ベルナル峰を越ゆる、騎隊の驚幟を授與する、或は皇后ジョセフイーヌ[27]に冠を加ふるが如き種々の歷史上瞬間が傳へ

られて居る。建築物には、今日なほ巴里の所在に多くのナポレオンが殘した記念を見る。例へばヴァンドーム[28]廣場に於ける圓柱碑、これはかの羅馬の皇帝トラヤーヌスのそれに倣ひ分捕砲を以て鑄造したものである、またレトアール[28]に於ける凱旋門などの如き、今も尙ほ巴里觀光客の驚嘆を惹いて居る。

ナポレオンはフランスを以て古羅馬の繼紹者の如く考へた。彼は歷史を愛讀し、大シーザルの事業にあこがれ、またカール大帝を夢みた。彼始めてイタリヤにある時、海を隔てゝエピルスの山々を遠望しては、油然としてアレクザンドル大王の世界征服を憶ひ出でた、さてこそ彼のエジプト遠征となつたれ（一七九八―九九）。この、最近にはひとり十字軍を想起するばかりの壯擧は、その中心の實際目的に於てイギリスの海上帝國打破にあつたのは勿論であるけれども、一は如上の彼の古典歷史癖から受けた刺擊に負ふて居ることも、亦た爭ふことが出來ない。彼がピラミッド下の戰が始らんとするや、部下の將士を激勵して『兵者らよ、四十の世紀は汝等を瞰下ろしつゝあるにあらずや』と言ひ、進みて中古の遺物たるマメリューク[29]を討滅し、久しく之に統治されたる土人を慰撫して『羅馬の軍隊（レジオン）はあらゆる宗教を保護せり』とて、一視同仁的政治を開始した。尙ほこの遠征に、フランスの學者技師等も同行したれば、近世埃及の政治上社會上開發も、また古代埃及學（エジプトロジー）の扶殖も、みなナポレオンのナイル河畔遠征に始つたのである。

畢竟ずるに、ナポレオンは平和的文化方面に於ても自己の傾向と趣味とを強行した。その結果、思想上に於ては、近時に於ける帝國主義及び古典主義を鼓吹完成したのである。

しかしながら、この思想上政策がナポレオン帝國の隆盛と共に最も威力を發揮した瞬間に於て、既に之に反抗する暗流が激成されつゝあつたことは、思想史上特記に價すると思ふ。

この暗流の代表者は、これまでたび〳〵引合ひに出したステール夫人である。彼女が有名なる銀行家にして一時ルイ十六世の大臣となつたネッケルのひとり子であることは既に述べた。彼女はスウェーデンのステール男爵に嫁し、巴里に於てサロンを開き、名流を會して思想の宣揚に努めた。彼女は夙に身みづから大革命の風雲を體驗し、早くからその弊を悟つた、卽ち革命が新に生み出した亂暴狼藉と壓制束縛を感じ、之を惡むだのである。彼女はこゝにナポレオンの帝國主義と古典主義と反對して、精神の自由と社會の改良とにあこがれた。この專制征服家が首席コンスルとなり、實はシーザルの帝政を布くや、かねてから自由主義者の間で期待されて居つた眞の憲法的生活が、一切虛僞となり夢と化したるを見て、夫人は斷然新政治者に對する反抗の意志を表明した。彼女はコンスル[30]の迫害のために一八〇二年故國を亡命し、イタリヤ、ドイツを周遊し、ドイツにてはワイマル[31]に於て詩人グーテ、及びシルレルと交はり、伯林では文獻學者アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルと談じ、ます

〳〵精神的理想的觀照を養成した。夫人はこの間に具さにドイツの文物を觀察したから『ドイツ印象記』を著はしてその精神文化を賞揚し、以てナポレオン治下に於けるフランス社會の束縛狀態を諷刺した。皇帝はこの書物の出版を嚴禁し、探偵を放ちて夫人を驅迫せしめたから、夫人は更らに轉々歐洲諸國を飄零し、到るところ激刺たる新思想を以て知識界に歡迎され、一層ナポレオンに對する輿論の反感を喚起した。

第二の代表者はシャトーブリヤン(32)である。彼の出生地は敬虔なるブルターニュ(33)の田舍であつた。彼は所謂『亡命者流(エミグラシ)』の連中と共に大革命來の亂暴狼藉に反對し、この際荒みゆく人心を維持するには、唯だ正しきキリスト教(コンコルダ)の信仰にありとした。されば彼は一八〇一年の宗教上妥協以來、復活の兆ある加特力教會を衷心から歡迎し、因てその翌年『キリスト教の精神』を著はした。彼はこの著に於て、固より教會の定說に全然合致したのではないけれども、キリスト教の精神を信仰上極めて結構にして且つ美學的にも尤もうるはしきものとして、贊歎措かなかつた。彼は最初コンスル政治に仕へた。しかし、ナポレオンが、さきに廢されたブルボン王家の一族の一人であるダンギアン公(34)を、故なくして而もドイツの地まで蹈み込みて捕縛し、虐殺せしめたから(一八〇四)、彼はこの亂暴に對して現政府に嫌氣さし、官を辭して國を出て東方を旅行した。ナポレオンこの人を召喚再用せんと欲したけれども、

シャトーブリヤン遂に之に應じなかつた。後、帝政滅落の時、ブルボン家の王政復古のために最も有力なる政治家の一人として活動したのは卽ちこの人であつた。

以上二文豪は、かくの如くしてフランスのローマンチック運動の開始者にしてその有力なる先驅となつた。この文化運動そのものについては後に改めて說くつもりだが、ともかく、こゝに述べたフランスの文藝史上だけから見ても、ナポレオンの統一政治が、如何にローマンチックの流風を激成したかを想見すべきである。

大革命及び帝國時代に於ける純理傾向の發現の一として、唯物的學風の勃興につきては、後に第二十講のうちで、ローマンチックと相對比して、之を述べる積りである。

83　對ナポレオン反抗運動、自由戰役

ナポレオン帝國の盛衰の回轉機は、一八〇七―八年にあつたといへる、これからナポレオンは少くとも精神上に於て下り阪に入つた。何を以てしかいふ。

彼は陸上に於ける百戰百勝の成功にかゝはらず、海上の事意の如くならず、かの一八〇五年秋トラファルガ沖の敗戰以來、再び雄を海上に爭ふ能はず。因つて、一八〇六年秋、プロシヤ征伐の次、伯林から勅令を發して、フランス及びその同盟國のイギリスとの交通貿易を禁止し、ついで翌年ヂルシ

ット講和の時、ロシアのアレクザンダ一世と妥協同盟して、前記勅令の趣旨を東北歐洲にも及ぼし、尙ほ同年兵を送りてポルトガル王國をも占領し、以て自ら大陸を封鎖して海上の商人國に打擊を加へんと欲した。彼は更らにこの政策を貫徹するため、恣に諸國の土地の改易、合併、一族諸將の封侯を行ふた。卽ち北にては、オランダを合併し、ドイツのハンザ諸市をリューベックまで收めて、つまり、フランス帝國領をバルト海の一角まで延長し、南にては、ナポリ王國に功臣を封じ、法皇を放逐しその敎會の國をもフランスに合併するに至つた（一八一〇）。かくの如くナポレオンの下に於けるフランス人の帝國なるものは、且つは自ら擴大し、且つは同盟の網をひろげて、彼が開始した大陸封鎖組織なるものと同一物となつて來た。この組織は大陸に於ける植民地物產の輸入杜絕を意味し、成程イギリス貿易の打擊たるには相違ないが、それよりも大陸に於ては、却て日常の必要品の缺乏を來し、人民は珈琲、茶、砂糖等の饑饉を感じ、商人は不景氣に泣いた。

それ故にナポレオンの天下一統政治は、今やその後半期に入りて、漸くその前半期に齎らしたる福音宣傳的意義を失ひ、貪婪、暴戾、征服、擴大に馳せ、世界の同情から遠かり、諸國に於ける人心の離背を誘致しつゝあつた。

かゝる間にナポレオンに對する激烈なる國民的反抗の火の手がピレネー半島から早くも爆發して居る。それは彼が大陸封鎖を完全にするために一八〇八年春イスパニヤのブルボン王家を廢し、その代りに弟ジョーゼフ[35]を立てたから、この歷史の誇を負へる國民は一齊に起ちて不正規的戰法を以てフランス守備軍を惱まし、天下の敵愾心を鼓舞したことである。

次に第二の、而して極めて強力なる國民的反抗はドイツに現はれた。オーストリヤはイスパニヤの叛亂、イギリスの海軍上陸、殊に北方ドイツの敵愾心を賴みとし、一八〇九年、こゝに四たびナポレオンと戰ひて終にまた敗れ、ナポレオンの請を容れて皇女マリヤを彼に與へなければならなかつた。

北方ドイツの敵愾心とは他でない、ザルシットの屈辱以來、かの縮小壓迫せられて居るプロシヤ王國が非常の決心を以て臥薪嘗膽恢復を計りつゝあるからである。この運動はスタイン男爵の入閣に始る。彼は英斷を以て封建の餘習の打破を行ひ、國政を一新し、全國民の活動を喚起した。卽ち國內の土地及び人民の階級制の廢止、職業選擇の自由、都市の自治制、一切國民に對する兵役の强制、敎育の刷新等是れてある。敎育には、文部大臣ヴィルヘルム・フォン・フンボールト[36]の下に、當時有名なる敎育家ペスタロッチの思想及びその方法輸入されて普通敎育創まり、又た伯林大學創立し、兵役には軍學を以て有名なる將軍シャルンホルスト[37]の下に、ナポレオンの嫌疑を避くる爲めに短期交代の訓練法が厲行され、文武相竸ち、擧國一致、國運の挽回を謀つた。スタイン幾ばくもなくナポレオンの諱

忌に觸れて放逐されたから、かのオーストリヤの四たび目の興起の時に、北方ドイツが統率者を失ひて、遂に呼應するの機を失ふた。けれども、ハーデンベルグよく巧妙にスタインの遺志をつぎ、遂に最後の目的を達すべきであつた。因てこの時期の改革をスタイン・ハーデンベルグ改革といふ。

この改革が一層有功であつたのは、その喚起した人心の物與に存する。この時まで、ドイツの知識界は政治狀態の腑甲斐なきに失望し、自己の精神文化の誇のうちに隱れ、靜穩なる書齋又は社交生活に入り、宇宙的世界的態度を持し、世上の實生活の變轉を冷眼蔑視して居つた。ワイマルに於けるゲーテを中心とする知識界は卽ちそれであつた。彼等には政治的國民的國家觀念の熱烈が缺けて居た。然るにプロシヤの屈辱、スタイン改革の開始以來、この知識界は祖國の悲境に感憤し、一轉して國民的國家的となつた。この運動の中心は伯林であつた。こゝて宗教家シュライエルマッヘル[39]はその精神的說敎を以て、哲學者フィヒテ[37]は通俗講演を以て、おの〳〵國民に訴へ、ゲーテの友人シルラ（一八〇五死す）の遺したる愛國的戲曲『ウィルヘルム・テル』等の演奏、詩人モーリッツ・アルント[40]の文筆、體育の祖ヤーン[41]の靑年訓練と相俟ち、前記の當路者の施政と相照應して、大いにドイツ國民の精神を喚起した。當時上下の標語とする所は、『物質上に失はれたる損害を精神上に於て恢復する』にあつた。プロシヤが、後、一八七一年に於てエルザス・ロートリンゲンを恢復してドイツ國民を統一し、その國家を完成すべき偉業の精神上基礎は、實にこのスタイン・ハーデンベルグ改革時代に据えられたのである。この故に、大學敎育史上、歷史家モムゼンの語を假りていへば、ドイツの國民統一は伯林大學の創立（一八一〇）を以て始り、ストラスブルグ大學のそれを以て成ると稱せらる。

かゝる間に、イギリスは兵をピレネー半島に上陸せしめ、その國民的叛抗を助長し、間斷なくこの方面へナポレオンの注意を惹いた。而して東方に於ては、ロシアのアレクザンダ一世はやうやくナポレオン帝國の一層の擴大に快からず、又た大陸封鎖を苦痛として、これが實行を弛め欵をイギリスと通じた。是に於てナポレオン大軍を催うし、一八一二年ロシアを長征して敗退するや。之を追躡南下し來るコサックに對して、これと呼應して起ちたるは卽ちプロシヤであつた。オーストリヤも亦た之につゞいだ。こゝに第五回目の聯合成り、こゝに所謂自由戰役起る。兩軍の決戰は一八一三年秋、ライプチヒ[42]の野に戰はれた。この役、實に歐洲中の諸民族參戰した、因て『諸國民の會戰』と稱す。ナポレオン敗走す。翌年、聯合軍長驅して巴里に入り、二十三年間の歐洲の戰役終結した。

尙ほナポレオンはウィーン會議に於ける列國の爭議に乘じて、翌年春、再擧を企てたるも、ワーテルロー[43]に敗衂してその功なかつた、卽ち『百日』の天下に過ぎなかつた。彼は聖ヘレナに流された。

84　**ウィーン會議**[44]（一八一四―五）**及びその決議**（一八一五）

ナポレオン討滅の結果、フランスはその擴大を削られて、而も大革命初期の領土を維持し、ブルボン王家の復歸を迎へた。而して戰役中の混亂を整理して列國の關係の安定を決するために、諸國の代表者一八一四年秋からウィーンに會議した。

問題の中心點は、大革命以前歐洲を支配して居つた君主の專制主義と、爾來新に發生し、殊に自由戰役に於て氣焰を高めたる自由主義及び國民主義とは、如何に調和さるべきかに在つた。諸國政府はふかくこれに利害を感じた。就中、オーストリヤの宰相メッテルニヒ(44)は、ハプスブルグ家の版圖が啻にドイツ國民のみならず、イタリヤ、スラーヴ、マジャール、ルーマニヤ等の諸民族の間に擴がり、是等の統治維持の必要から、如上の新思想を抑壓して保守主義の復舊を熱望しつゝあつた。この際、フランスの代表者タレーラン(45)は諸國政府に於ける君主主義の復興の潮流を察し、而も聯合諸國間の利害衝突とに乘じ、巧みに樽俎折衝し、ナポレオンとフランス、僭奪主義と正統主義とを區別し、自らフランスの代表者として諸國の間に割込みて對等の位置を占めて諸國に說いた。卽ち彼は大革命及びナポレオン戰役の善後策のために、僭奪者征伐の根本主義として正統主義(レジチマル)を承認すべきこと、隨てこの主義の標準に據りて從來の君主又は主權者がその位置と領土に復せらるべきことを主張した。かくの如くして、會議はメッテルニヒの保守主義の指導の下に、タレーランの正統主義の主張に傾聽し、之に從ひて決議を進めることになつた。

されば、ナポレオンは僭奪者として排斥され、フランス、イスパニヤ、イタリヤに於けるブルボンの諸君家はそれ〳〵復位した。就中そのフランスに於ける代表者はルイ十八世と稱し、一八一五年巴里に歸り、この年を以て卽位二十一年と號した。

しかしながら、歷史の發展に徵するに、この正統主義及び復古主義なるものが、半ば只だ便宜上設定された政治主義に過ぎなかつたことは明かである。さきに自由戰役の途中、實に聯合諸國はナポレオンと妥協し、その帝位及び世襲を認めやうとした瞬間もあつたのである。今、またヴィーン決議に於ても、正統主義が全然徹底的に實行されたのではない。その實行は、前記のブルボン諸家の外に、只だドイツに於ける有力なる君家の場合に於てのみに限られた。かの一八〇三年に沒收されたドイツの宗教上領地、竝に騎士の支配したる小弱なる領地は、終に如上の恩典に浴しないで、いづれも、有力者の犧牲に供せられたまゝになつて仕舞つた。ヴェネチヤ共和國も亦た同やうである。

殊に注目すべきはポーランド王國に於て然りとする。この王國の第一回分割は、成程、フランス大革命以前に於ける既成事實であつたけれども、第二、第三分割は、實に大革命と同時に、卽ち、さながらフランス共和國の陸上、イギリスの海上に於ける各擴大と、相平均するための如くに、同時代に東

方に於て三大強國が敢行したる悲劇であつた。然るにウィーン會議は之が復古を計らなかつた。この亡國の國民は分割以來のまゝに依然として三大國に分り充てられて居る。但し、會議の結果、ロシアの分前は、以前よりも著しく西南に擴大して、ワルソー[47]をも含み、且つ憲法を與へられてポーランド立憲王國となり、ロシアの君主を戴くことゝなつた。

更らにヴィーン會議が決定した領土關係をば、かの十八世紀に成立した五大強竝立の上から觀察すれば、如何に。先づ、戰敗國たるフランスと雖ども、その本國は大革命破裂以前よりは少しく擴大する所あり、ドイツの愛國者が會議の際恢復を熱望したエルザス・ロートリンゲンをも、尙ほ保持するを許されて居る。況して東歐の三大強は著しく擴大した。卽ちロシアは前記の如く、ポーランドに於ける前進の外に、尙ほさきにナポレオンと妥協の產物をも保持した、卽ちスウェーデンから取つたフィンランド[48]、トルコから奪つたベッサラビヤ是れてある。オーストリヤはネーデルランドを失つたけれども、イタリヤに於てロンバルヂヤ[49]を復し、之に故のヴェネチヤ共和國の地を加へた。これからハプスブルグ家は一層勢力をイタリヤ半嶋に增した。プロシヤ王國は、オーストリヤと同やうにポーランドに於てその領地の半ばをロシアに讓らなければならなかつたけれども、この東に於ける損失の代りに、サクソニ王國の北半部とライン河畔に於て重要なるラインランドとを加へた。それてあるから、

ホーヘンツォルレルン家は從來よりも一層ドイツ的强國を作るの地盤を取つたのてある。

而して海上の强イギリスは戰役中に占領したマルタ、ヘリゴランド[50]の諸嶋、フランス及びその同盟國オランダの植民地、例へば喜望峰植民地などを保持し、イオニヤ海の七嶋（內にコルフー[51]卽ち古のコルキラあり）の保護權を得、ます〳〵海上に雄視した。

尙ほ、オーストリヤ領ネーデルランドとオランダとは合併し、オランダのオレンヂ家を戴きてネーデルランド王國と稱した。

又た世人の注意と利害關係との中心對象となつたのは、如何にドイツ國民が組織されるかに在つた。これはこの時聯邦組織て一先づ解決された。卽ち聯邦諸國は三十五より成り、代表者をフランクフルトに於ける聯邦會議に派遣し、オーストリヤの議長の下に全體の事を議するに在つた。實は眞の統一がない。これらの聯邦には、オーストリヤ、プロシヤの兩强はその領土の全部を以て加入しない、只だ一八〇六年帝國解散以前までのドイツに屬したる地方のみを以て加盟して居る。これらに對して、さきに擴大された南ドイツの勢力がある、卽ちバヴァリヤ王國、ユルテンベルグ王國バーデン大公國これてある。而してハノーヴァ王國はイギリス國王、ホルスタイン公國はデンマルク國王、ルクセンブルグ大公國はネーデルランド國王がおの〳〵個人的に之を聯有するといふ條件の下に、いづれもド

イッの國として聯邦の會員である。それであるから、ます〳〵以て、この聯邦組織の雜白なることが推想される。

要するに、ヴィーン會議及びその決議は、君主の復古主義、專制主義が、人民の自由主義、國民の獨立主義を以て國家及び社會を改造せんとする新思想を壓伏したといふ傾向を明示して居る。そこに次の卽ち十九世紀の大問題が伏在して居る。

第十九講　自由主義及び國民主義の發展

85　歐洲列强の反動的協調（リアクショナリ・コンサート）

諸君！　前講の終に於て概瞥したる如く、ヴィーン會議及びその決議は、大革命及びナポレオンに對する反動の勝利であつた。この際、フランスにては、ルイ十八世は成程國民に向つてイギリス歷を模した憲法を賜ふた。けれども、亡命者（エミグラン）流は王室と共に復歸し、ゼスイタ敎團は再興し、貴族僧侶共に勢力を恢復し、大革命以前の『舊政治（アンシャン・レジーム）』の再現が夢みられつゝあつた。實に、彼等は、久しい間流離の不幸を嘗めながら、遂に『何ものをも學ばなかつた、又た何ものをも忘れなかつた』との痛評さへ受けた。尤も憲法的と稱せらるゝ自由主義の本場イギリスといへども、ワーテルロ戰後の十年間は反動著しく起りて、萬事保守に傾いた。況して中歐諸國に於ては、ドイツ聯邦の組織は出來たるも、統一の國家としては有名無實であつて、よしや諸君主は自由戰役を戰ひたる人民の勞を犒ひて立憲を約束したけれども、これを實行したるは若干の中小國のみであつた、オーストリヤ、プロシヤを始め、多くは約を履まない、國民の先覺者は故國に失望して、當時反動に陷れる如上の西歐諸國の政況すら、之をも、却て羨望の的としなければならない程、ドイツの政治は低調の有樣にあつた。

しかしながら、大革命及びナポレオン時代に馴致され、又は激成された歐洲の新思想は、如上の反動に直ちに屈服して了はなかつた。この暗流は次第に頭角を露はして、各地到るところに、君主に對する臣民、政府に對する人民又は國民、征服國民又は統治國民又は統治國民に對する被治の國民、專制に對する自由、保守に對する進歩といふ反抗を起し、政治的地理上からいへば、東歐に對する西歐の對立は顯著となり、諸國に於て、如上の新政治主義を標準として、憲法制定若くば改革の要求は次第に喧しくなるべきてある。これを一八一五年以後十九世紀中葉までの歐洲の大勢とす。之を通覽するのが本講の目的てある。

さてヴィーン會議後二年間ばかりは、諸國みな戰後の休養を嗜みて比較的靜穩てあつた。初め、ワーテルロー戰後、聯合軍の諸君主の巴里に入るや、ロシアのアレクザンダ一世は多年の大戰役の慘禍に感動され、他の諸君主に向つて、今後キリスト教の博愛慈仁の主義に依り、同胞君主相提携して各自の臣民を恤み、以て歐洲の平和を維持したいと申出て、諸君主の贊同を得た、卽ちこれ神聖同盟の結びてある。このものや、當時全く宗教的善意に發したるものてあるが、而もその實空しかるべき性質のもので、初めのほどは何等の政治上効果を有しなかつた。

然るところ、かの自由戰役に活動したる、而も戰後の結果に不平を抱いて居るドイツの青年志士は、一八一七年秋、『諸國民會戰』の四周年、ルテルの敎會改革三百年を壯んにしつゝ、ドイツ青年組合の發會式をワルトブルグ城に擧げた。その式は宗敎的にして沈痛てあつた。この報傳はるや、風聲鶴唳、諸君主驚き、メッテルニヒの指導の下に相協力して嚴重なる反動的取締手段を執ることになつた。この保守政治家の新思想觀は徹底して面白い、曰く『思想（アイデイヤ）は本來この現世に現はれ來るべきてはなかつた、而も一旦不幸にして現實に侵入して來たからには、諸國共同一致これを殄滅しなければならない』と。彼はワルトブルグ祭後の諸君主警戒の機に乘じて、巧みにかの神聖同盟を利用し、ロシア皇帝を始めとし、列國君主及び政府を勸誘し、しばゝ會議を開き、所謂歐洲の協調（コンサート）を催うした。因つて諸君主はこの合奏に從ひて同歩調を取り、國內では、所謂『三個の危險物』を取締つた、卽ち大學と、出版物と、體操（ツルン）とてある。體育の祖ヤーン（ツルンファーター）が迫害される者の一人となつたのはこの時てある。外ては、不穩の國々に向つて列强共同に兵力干涉が斷行さるゝことゝなつた。當時一八二一年イタリヤとイスパニヤとに革命運動竝び發した。神聖同盟諸國は聯合軍を指定派遣して之を鎭壓した。これよりドイツ、イタリヤ、ポーランド等の志士は故國の專制に失望し、歐洲を東西に分ちて比較し、東歐を暗黑とし、西歐を光明とし、彼等の多くは西歐に亡命し、倫敦、巴里、スウィスのゼネヴァを以て反動運動の策源地とした。彼等

は各自に青年イタリヤ、青年ポーランド、青年ドイツなどを結社し、尙ほ、一切歐洲を結合して青年ヨーロッパを作り、世界的に氣脈を通ずるに至つた。

かくの如くして、最初は神經的なザールの憤から發し、單に宗教的のものと見做されて居た神聖同盟なるものは、早くも歐洲國際界に於ける有力なる反動的政治的聯盟と化し、諸國の自由主義及び國民主義を禁壓する機關となつた。

86　アメリカ諸國の獨立　モンロー主義①

神聖同盟は既述の如く南歐諸國、先づイタリヤに、次にイスパニヤに於ける革命に對していづれも成功した。しかし、新世界にはひろく多數の植民地がある、是等は母國がナポレオンに占領された時以來、自ら獨立を稱しつゝありて、その運動次第に進み行く有樣にあつた。神聖同盟諸國は既にフランス軍を派遣してイスパニヤ本國を鎭定した以上は、同じ政策を、この方さに離畔中である植民地にも及ぼさんと決した。

かくなつて來ては、神聖同盟は、猶ほ今日世界戰役後の大問題になつて居るかの『國際聯盟』に似て來たといへる、只だその規模の小なると主義の異なるとの違ひがあるばかりだ。主義とは今は民主、當時は君主である。違ひの著しいのは規模にもある。神聖同盟では、今日國際聯盟の埒外にあるロシアとオーストリヤが重なる役者であつたこと、また、國際聯盟の重なる役者であるイギリス、米國及び日本を始め、その他ひろく全き世界が網羅されて居るに對して、神聖同盟は歐洲の或る限られたる交通の外は全然鎖國の夢を貪つて居なかつたことである。當時、日本は尙ほオランダ一國との或る限られたる交通の外は全然鎖國の夢を貪つて居た。イギリスは、國情が異なるの故を以て、神聖同盟に對して中立傍觀の態度を取つて居た。米國は建國年尙ほ淺く、大革命以來の歐洲に於ける廣大なる政局とは全然政治上無關係にあるといふ國是を立てゝ居た。然るに神聖同盟の發展しゆくにつれて、後の兩國は全然無關心たる能はざる事情に臨むで來た。

それは前記のイスパニヤ植民地に對する神聖同盟の兵力干渉の議が現はれて來たからである。

そも〳〵イギリスは、十八世紀の初、卽ちイスパニヤ相續役以來、南米と通商上尤も親密にして自由なる關係に入つて居る。因て、この時の外務大臣カンニング②は合衆國に向つて、共同に、神聖同盟の海外干渉に抗議せばやと勸誘した（一八二三）。合衆國政府は神聖同盟の干渉に反對なることに於ては同意見であるけれども、イギリスとの共同抗議は、卽ち歐洲政局とは相互に無關係非干渉といふ合衆國建國以來の國是に背馳し、之がために葛藤調停相つぎて、或は新世界の分割ともなるかも知れないから、遂にイギリスの勸誘を謝絕し、單獨に自己の反對意見を發表することゝなつた。

これには、更らに一個の動機の刺激が加はつて居た。それは神聖同盟の唱首たるロシア皇帝の臣民

が北米の西北海岸へ南下することてある。といふのは、ロシアの毛皮獵者の北太平洋に於ける活動である。ザールは既に一八二一年の勅令て、是等の冒險者の利益保護の目的を以て、北緯五十一度以北のアメリカ海岸百哩に外國人の立入ることを禁止して居る。彼等は尙ほ絶えずそれ以南にも侵入しつゝあつて、その勢力圈を或はオレゴン地方に及ぼすかも知れない虞れがあつたからてある。

それて、一八二三年十二月、大統領モンローは、國務卿ジョン・クィンシ・アダムス③の參劃に基き、有名なる御　書を發した。之によると、ロシアの植民に關しては、『アメリカ諸大陸は、その取り且つ維持し來りたる自由獨立の事情に基き、今後如何なる歐洲國家から將來の植民の用に供さるべしと、思惟されてはならない』と抗議した。獨立しつゝある植民地に對する干渉の企につきては『合衆國の市民は、太西洋此岸の同胞の自由と幸福のために、他事ならぬ最も親しき感情を抱いて居る。……同盟諸國の政治組織は、本質上アメリカのそれと異なり。……吾人は、彼等がこの半球の如何なる部分に對しても、彼等の政治組織を擴充せんとする如何なる企圖といへども、之を吾人の平和と安全とに取りて危險なりと、しなければならぬ……。今日如何なる歐洲の國が所有する植民地又は屬地に對して、吾人はこれまて干渉しなかつた、今後も干渉しない。しかし、既に獨立を宣言し、維持し、且つその獨立が吾人に承認されたるアメリカの諸政府につきては、是等を抑壓するため、又は是等の運命をその他何等かの方法て制馭しやうとするため、如何なる歐洲強國から如何なる干渉てもか行はるれば、すべて之を合衆國に對する一個の非友誼的態度の表現と見做す、吾人にはそれ以外の見方が出來ない』と主張した。卽ちこれ、獨立以來四十年間に發展し、やうやく充實しつゝある合衆國が、國際界に於て自己を主張したる始てあつて、又た將來、モンロー主義（ドクトリン）の名の下に、國際界に有名となるべきアメリカ外交政策の最初の出發點てある。

このモンロー主義の發表と相俟ちて、同じ趣意に一致しつゝ、イギリスの外相カンニングは、彼自らの神聖同盟對抗策を發展した。彼は巴里政府に向つて、若し神聖同盟が兵力を植民地に加ふるならば、イギリスは直ちに植民地を獨立政府として承認すべしとの警告を發した。それて同盟の干渉は遂に沙汰止みとなつた。その結果、南米及中米諸國は、彼等自身の發展のまゝに、各自の建國を成し遂げた。後、イギリス議會に於て、カンニングが徒にフランス軍のイスパニヤ占領を許したるを非難したるものがあつた時、之に對して、彼が答へた『余は舊世界の平衡を恢復するために、新世界を喚起して成立せしめた』との有名な一言は勿論歷史上眞理に屬する。しかし、それと同時に、アメリカ合衆國のモンロー主義の宣言の效果も、亦た認められるべきてある。

如上の米露間の勢力圈問題につきても、幾くばくもなく妥協成りて、北緯五十四度四十分を以て分

界線とすることになつた。

87　バルカン民族の動搖　希臘の獨立

神聖同盟は既に海外干渉の企に於て躓いた。しかし、歐洲於にても、この同盟が自ら苦境に陷らねばならない一大事件が既に發生しつゝある。それはバルカンに於けるキリスト敎民族がトルコのサルタン政治の羈絆から獨立せんとする運動である。

キリスト敎民の主なるものは、いふまでもなく、希臘民族である。彼等は古代以來、なほかの猶太人の如く、一種の散住（ディアスポーラ）の運命を持つて居る、只ださほど廣くないばかりである。彼等は東部地中海方面にひろがり住みて通商海事に從ひ、尤も多くコンスタンチノプルを始とし、北にてはオデッサ⑭（一七九二年ロシア之を建つ）、小亞細亞にてはスミルナ⑮、南にてはアレクザンドリヤ等の都市に住して居る。彼等は中古の民族移動の餘響を蒙り、或はスラーヴの混血を受けて頗る雜白なる人民たるを免れないけれども、他の東方に於ける民族よりも、遙かに知識と才幹あり、古のヘルラスの名に負ひて、さすがに文化の誇を持して居る。殊にコンスタンチノプルには、彼等の間から出たる希臘敎會の管長（パリアルカ）が居り、またこゝに住する希臘人の中には、土耳古の征服以來も、尙ほその文官に重く用ゐらるるものもある。然るに大革命及びナポレオン時代の自由主義及び國民主義發生のころ、希臘人にして歐洲に遊び、その新思想を汲む者漸く多くなつて來た。就中、アダマンチノス・コライス⑥は巴里に住して、身を古典の學業に委ね、近世希臘語及その文學の基を開き、希臘精神の復活に頗る貢獻した（『希臘文明の現狀』、一八〇二年巴里出版）又た詩人コンスタンチノス・リガス⑦はナポレオンのイタリヤに下り、アドリヤの海までの國民を救はんと宣言した時、同じ精神の波動を感じ、ヴィーンに於て土耳其討滅の陰謀に催うし、事露はれて土耳其政府に渡され、ベルグラード⑧の露と消え、今も尙ほ愛國詩人自由の喚起者として國人に尊重せらる。その遺したる詩歌は一八一四年ヤッシ⑨にて出版せられた、その內に實に「希臘のマルセィエズ」と呼ばるる國歌もあつて、汎（パン）ヘルラスの健兒の血を熱せしめて居る。

吾人は、この際、政治上の自由主義國民主義と相竝行し相提携して、精神上にローマンチック思潮の流れて居ることを、吾人の念頭に置かなければならない。これ、文學上では、ドイツにシューゲル兄弟、フランスにシャトーブリヤン、イギリスにバイロンやシエレーやスコット⑩の出た時代である。殊にバイロンは夙に詩筆を載せて東方に遊んで『チャイルド・ハロールトの巡禮』⑪を著はして居る。フィヒテ、ヘーゲル、シェリング⑫の精神哲學が皷吹され、又たニーブール⑬の羅馬史、サヴィーニ⑭の中古羅馬法史など、幾多の歷史的研究が勃興しつゝあるも、亦たこの時期であつた。ローマンチックの一般につきては、別に說く筈であるから(93)、今はこれだけで滿足しなければならぬが、要するに、かの大

いなる政治思想の隆起と相竝びて、こゝに文獻學上精神科學上に於て、人心著しく自覺的となり、我自らを知るために、現代民族の起源を遡り尋ねることが、當時一般知識界社交界の流風となつて居る。これが卽ちローマンチックの神髓であつた。西歐の諸民族にありては、彼等自らの起源は、所謂ローマンチック卽ちローマニック時代に他ならない。彼等の間で思ひを羅馬敎會や封建武士の中古生活に馳せるやうになつたのは偶然でない。之と同じく、彼等の間で、東方の諸文學の研究も亦た大に起りつゝあつた。希臘は是等研究の對象の第一目的であつた。希臘人自らにありては、彼等の追憶は、おのづからヘルラスの古典乃至ローマイ(東羅馬卽ちビザンツ)の帝國時代に遡るの外はなかつた。かく、民族の歷史的研究若くば少くともその思ひ出さるゝことは、こゝに政治上に於て人民の自由の叫び、國民の獨立のあこがれとならざるを得なかつた。これが人間精神の自然の發露である。

蓋し十九世紀の初期に於ける自由主義、國民主義の流行は、猶ほ二十世紀の今日に於ける社會主義、民主主義の傳播に相對比すべきであらう。前者は、中等社會を橫流するローマンチックの衝動によつて、やむにやまれぬ大勢となつて來た。後者は、一般民衆の生存要求權に立つて居る世界の思潮である。兩者に共通點がある、卽ちその時代々々の支配階級に對する反抗なること是れである。

バルカン半嶋に於けるキリスト敎徒の反抗は自然にその無理解なる支配者土耳其政府に向けられた。この土耳其に對しては歐洲特有の宗敎的政治的國際關係が附きまとふて居る。この國の十七世紀からの衰弱以來、オーストリヤはしきりにバルカンに向つて南下して領土を擴げつゝあつた。十八世紀に入りてロシア俄かに圖南策を伸ばし、オーストリヤと競爭して寧ろその上に出てつゝある。この大國は、一七七四年クーチユック・カイナルヂ條約以來、自ら土耳其領內のキリスト敎徒の保護權を取り、バルカンに對する干涉の出發點を占めた。そこで、希臘人はおのづからロシアに傾き、ロシアは彼等を招いて新占領地に於てオデッサ市を建設した、また彼等をロシアの官吏軍人に登用した。現に彼等の同胞の一人カポヂストリヤス(16)はアレキザンダに用ゐられてその外務大臣となつて居る。オデッサでは「同志會(ヘテーリスライヤル)」が結社された。カポヂストリヤスはその會員である。かくの如くして、ロシアは隱然希臘獨立運動の後援者たるの觀があつた。

されば、一八二〇年、ロシア境のトルコ領モルダヴィヤ州(17)の首府ヤッシの占領が、ロシアに仕ふる希臘人將校イプシランヂ(18)の手で行はれたのは、偶然でない。この瞬間、ザールは神聖同盟のこの年の會議地ライバハ(19)にあつた。彼はメッテルニヒの反動政策の掌中にあつたから、カポヂストリヤスのこの希臘人運動援助の議を斥けて、オーストリヤ政治家の主張するバルカン鎭壓說に服從するの外はなかつた。それてイプシランヂの企は忽ち失敗に了つた。

しかしこの擧兵の焰は一切バルカンの希臘人の運動に點火するに十分であつた。到るところ、土耳其人の放逐と虐殺が始つた、これに對して、土耳其政府及び土耳其人の殘忍なる復仇的手段及び復仇戰は破裂した。彼等は埃及軍をも招き入れて、モレア(ペロポンネソス)半島を蹂躙せしめた。歐洲列強は干渉しない。されば回敎徒は次第に希臘人を追ひちぢめた。かくて希臘人の包圍された場所の有名なる一は、中央希臘のミソロンギであつた。獨立軍日に盛る。歐洲の輿論こゝに大に起りて希臘人に同情し、希臘愛護會を設け、金品、兵員、械仗を義捐して獨立軍にみついだ。ドイツのウィルヘルム・ミュルラが『希臘人の歌』を風詠し、又たかのチャイルド・ハロールドの詩人バイロンが、彼の曾遊の地、彼の詩材を掬したる古典の國のために義憤を禁じ得ず、孤劍難に赴き、ミソロンギの蠻烟瘴雨のうちて熱を病むで倒れたのは(一八二四年四月)、この時である。これらの壯烈が世上の希臘熱をますます〳〵煽起したことは勿論である。しかし、一八二五年末までのうちに、歐洲君主中公然援助を送つたのは、只だバヴァリヤ國王ルードヴィヒ一世のみであつた。一切歐洲政府は、すべてメッテルニヒの睨みに魅せられて居た。オーストリヤ領内には、バルカン在住民と同じ血族の人民が多いから、メッテルニヒに取りては尙ほ更ら希臘人の獨立運動鎭定の必要があつたのである。

さりながら、イギリスには最近アメリカ諸國獨立事件の外交に成功したカンニングが居る。彼も亦た希臘愛護思想の一人であつて、獨立の見地から早く希臘人を戰鬪國と認めて、彼等のために干渉の機を待つて居た。既にしてアレクザンダは希臘事件のため衷心悶々のうちに崩じ、その弟ニコラス一世立つ(一八二五年)、實は、ロシア人の間に夙にアレクザンダの萎縮的外交に對する不平は高まりつゝあつたのである。新皇帝は熾の如き意志の人であるから、猶更らこの國民的憤慨を晴らさんと欲した。カンニング乃ち機到れりとしロシア政府に接近し、倫敦に於て相與に希臘事件の協定に努むべしと約した(一八二六年)。メッテルニヒが之を以て『過去と將來との分れ目』と見做して居るのは、理由がある。果してフランスも亦た之に加はりて三國協商となつた。されば、聯合艦隊は出動し、回敎軍のモレアからの撤退を要求し、こゝにナヴァリノ灣口に於ける埃及艦隊の殲滅戰(一八二八年十月)となつた。希臘人始めて蘇生し、歐洲に於ける一大支配者たる土耳其政府は大打擊を蒙つた。卽ちこれ、メッテルニヒが、これまで幾多の列國會議に於て、歐洲に指圖して來た君主主義擁護の兵力干渉主義といふ堅城鐵壁覆壞の一端である。

加ふるに、ロシアは翌年から單獨に土耳其と開戰して之を敗つたから、希臘人は列强の承認の下にアルタ・ウォロ線以南の半嶋を以て獨立王國を組織し、かの希臘愛護者として有名なるバヴァリヤ國王の一王子オットーを迎へて王とすることになつた。この王國が未だ全希臘人を網羅して居ない、只

だその一部であることは勿論である。その上に、この王國の創立が、まだ土耳其の羈絆を脫し得ない他の『ライヤー』と斥稱せらるゝ多數民族の刺撃となつたことも亦た勿論である。卽ち、近東問題の一段落は附いたが、尙ほ將來の禍機が伏在して居るのである。ライヤーとは羊の群の義である。

88　イギリスの改革

イギリスは由來議會政治の本場である。その憲法は文字を以て制定しない、只だ數世紀間の發展、殊にかの十七世紀の憲法上紛爭(69)を經て、十八世紀の初には、一定の憲法上の習慣が確立して今日に至つた。これによれば、政府は、新敎相續による世襲君主と、貴族院と、衆議院との三個の權力から成り、君主はこの世に君臨(レイン)し、責任內閣はホイッグとトーリ(歷史の發展によればホイッグは今日の自由黨、トーリは今日の保守黨の先驅者である)との相對立する二大政黨中、下院に於て多數を占むるものを以て組織せられ、下院は豫算、其他財政に關する重要議案の先議權を有し、上院は只だ之を承認し若くば之を拒否するの權を保ちて居る。この所謂政黨政治は、最近に於ける黨派關係の變化を除きては、大體に於て今日まで保たれて居る。

然るに十八世紀の後半以來、イギリスの產業革命、竝びに之に伴ふ中產階級の勃興と共に、一方には、都市大に起りて人口の異動甚しく、從來の選擧區にして有名無實のものも出來、之に反して人口稠密のところが適當に代表されないものもあり、他方には、動產資本增大し、財產知識竝びすぐれたるものにして、選擧權を有せざるもの多くなつた。それで、從來の選擧制度が、貴族的大地主的階級の代表に偏し、眞に產業革命によつて勃興したる新國民を代表して居ないことが、明かとなり、アメリカ獨立事件時代に於て、既に選擧法改正の聲盛んとなつた。然るにフランス大革命及びナポレオン時代の困難と共に、一時反動起りて、一切改革の要求抑へられ、殊にワーテルロー戰後の小十年間は、反動の風潮尤も濃厚となつて居たから、人心遂に耐ゆる能はず、時勢に適應する自由的改革を要求し、一八二〇年時代の進みゆくと共に、かのカンニングの外相の自由なる外交展開の時代に於て、自由要求の政治運動次第に活潑となつて來た。

當時のイギリスは、經濟上では、かの『富國策』の著者アダム・スミスの唱へた自由放任主義(レッセー・フエール)が流行して居る時である、又た立法上では、功利哲學主義の政論家ベンザム(25)(一八三二死す)の晩年期で、彼の主張した『凡そ立法の標準は最大多數者の最大幸福に在り』との學說重きを成して居る時である。それで是等二大思想家の思想は當時の改革の要求の據つて以て立つべき哲學的根據となつて居る。ベンザムのいはゆる最大多數とは、今日の民主主義者の唱ふる一般民衆を意味するのではなく、當時勃興しつゝある多數の有產者を意味するものである、卽ち知識と財產を兼有する中產階級に外ならない。

この功利學說をうけて當時有名となつたものに、哲學者ジェームス・ミル、經濟學者リカルドー、歷史家チョルヂ・グロート[26]等がある。いづれも哲學的急進派（ラヂカル）を形造つたのである。當時政論大に起り、その機關として新聞雜誌俄かに盛んとなつたのは、注目に價す。凡そ新聞雜誌の勃興は古來フランス革命に於ける巴里に若くものはなかつたのである。之について長足の進歩を遂げたのは、イギリスに於て見たのである。十八世紀末つ方、既に『倫敦タイムス』が發刊され、十九世紀初には、ホイッグは『エヂンバラ評論（レヴュー）』を（一八〇八）、之に對してトーリは『四期評論（クオタリー・レヴュー）』を（一八〇九）各創刊し、自由改革の風潮起ると共に、言論の束縛も解けて、いづれも早く有力なる政治及社會機關となり、就中『倫敦タイムス』最も重きを成し、英國政治に於ける『第四權力』と稱せらるゝに至つた。議會の傍聽自由となり、新聞は從來課せられたる一片の印紙稅を免除され、その價は安くなり、加ふるに、一八三〇年以後鐵道始めて開業し、後十年、郵便法改正されて一片郵稅法となり、電信の開通と共に彼此相竸ちて社會の交通を促進し、集會は自由となり、輿論の勢力ます〳〵強大となつた。

かゝる社會の進歩と共に、英國議會は種々の新時期を劃すべき改革案を立法して之に照應し居ることは、切に世界の注目を惹いた。

第一、舊敎徒は、かの信仰審査律（テスト・アクト）に基き、久しい間、單に信仰の故を以て參政權及び任官權を停止

されて居る。卽ち所謂『加特力不能（カソリック・ヂスエビリテ）』なるものに束縛されて居つた。これは、新舊敎徒の差別感が薄らぎ、而もローマンチック風潮と共に羅馬敎再興の傾向ある十九世紀初期に於ては尙ほ更ら甚だ不合理と考へられた。殊に、一八〇一年以來、グレート・ブリテンと立法上聯合して聯合王國を作るを許されて居るアイルランドに於ては、その土人の尤も痛痒を感ずる所であつた。何となれば彼等は舊敎信者である、而して彼等の故鄕に於てイギリスの新敎移住民及びその敎會のために經濟上抑壓されて居るからである。こゝに千八百二十年代、自由の風潮起ると共に、アイルランドの志士オーコンネル[27]は先づ舊敎徒解放を唱ふるを利とし、盛んにその運動を起したれば、輿論之に傾き、政府默する能はず、一八二九年自ら舊敎徒不能の廢止案を提出通過せしめた。これによつて加特力敎徒も亦た新敎徒臣民と政治上同等となつた。而してこれは今日イギリスが逢著すべきアイルランド問題に取りては、アイルランド人からいへばその解決、イギリス人からいへば難問題發生の各第一步であつた。

第二、舊敎徒の解放について起るべき政治運動は、かの選擧改正のそれであつた。このものは、前述の如く、十八世紀末以來の多年イギリス國民の宿題であつたが、一八三〇年フランスでは七月革命が破裂した時から、解決の氣運大いに熟した。この秋流石のウエリントン內閣も辭職し、六十年來始めてのホイッグ內閣成立し、やがて選擧改正案の提出となつた。この際、上院反對をつゞけたけれども、

民間の示威運動盛んにして、一八三二年上院も同意し、改正案始めて確立した。この選擧法は從來の選擧區の廢合を行ひ、中には新選擧區を設定し、議員を人口に應じて適當に分配し、且つ選擧資格を低減したから、從來の有權者四十萬人から八十萬人となり、全人口の二十四分の一を占むることになつた。之を大體から評せば、地主の權力は制限され、商工業者のそれが擴張され、政權は貴族的中等社會から市民的中等社會に移つたといつてよろしい。

第三は經濟上立法である。その目的はかの自由放任主義（レッセー・フェール）によつて自由貿易を實現するにあつた。その改革は徐々に進行し、十九世紀中葉、穀物輸入稅の逓減全廢及び航海律の廢止に至つて終了した。畢竟ずるに、リッチャード・コブデン[92]等の所謂マンチェスタ派の勝利にして、イギリスの世界に於ける自由貿易、世界の市場開放運動の成功を意味すること勿論である。

イギリスは一七一四年以來ハノーヴァ王國と共に一個の君主の個人的聯有の下にあつたが、一八三七年ウィリヤム四世死して子なく、兩國は相續法の相違によつて分離し、イギリスは女王ヴィクトリヤ[93]の治世となつた。女王よく憲法を重んじ、最も立憲的君主と稱へられて居る。

89　七月革命

フランスにては王政復古の際、反動の兆候漸く起り人氣よろしからざるも、ルイ十八世は人となり溫和にしてその政治も穩かであつたから、事なくして過ぎた。然るに一八二五年王崩じ、その弟チャールス十世年六十九にして立ち、頑固にして時勢に通じない、フランク王朝の古例に依り、故らにレーンスに於て卽位式を擧げて居る。彼はゼスイタ敎團を庇ひ、亡命貴族（エミグラン）を保護し、最後に一八二九年保守的政治家ポリニャック[33]を用ゐ、宛然舊政治（アンシャン・レーム）の復歸を再現しつゝあつた。民間の不平反抗次第に起る。當時なほ少壯なる法律家にして新聞記者アドルフ・チェール[31]の如きは大膽に政府を攻擊し、また通俗詩人ベランヂェー[32]の如きは王室及び上流の頑迷守舊の風を諷刺し、かく民論漸く穩かでない。チェールは新に『國民』を刊行し、『君主（レーン）君臨して統治（カヴァン）しない』といふ憲法主義を發表し、論じていふ、イギリスては一六四〇年には確かに革命があつた、それは一個の新しき社會を作り出したからである、一六八八年には革命がなかつた、何となれば、只だ、如上の新社會を如何に支配すべきかを知らない王朝が、之を如何に支配すべきかを知る王朝によつて入れ代へられたばかりて、あるからであると。この議論は、フランスに於て君臨する王朝も、大革命によつて起つた新天地の支配を知るを否とに因りて隨意に廢立し得べし、是れ憲法上差支なき應急手段であることを、明かに諷して居るのである。

されば一八三〇年春、代議院は著席するや、直ちに不人望なるポリニャック內閣の罷免を要求し、遂に解散せられた。內閣は人心を外に轉ぜんがために、六月、細故に藉口してアルヂェリヤ遠征軍を

發した。されど七月の臨時選擧の結果は内閣に幸ひしなかつた。政府はアフリカからの勝報を待ち、アルヂェリ(33)陷落の報を得て、更らにその聲を大にしたけれども、國民は冷淡てあつた。王は、首相ポリニヤックの、君主は國安の保持法律の執行に必要なる手段を取り得との憲法第十四條の明文に據り、憲法中止すら斷行し得べしとの意見に基き、かの新選出代議院の未だ召集成立しないにも拘はらず、官報紙上、代議院を解散し、一般の出版を檢閲し、選擧權資格を高めて改選せしむとの勅令を發表した。時に七月二十六日てあつた。『國民』を始め諸新聞聯合提携して勅令に抗議し、人民を煽動したから、巴里市中に柵築かれ、こゝに三日間官民の衝突あり、死傷三千八百名、その六分の一は官兵てあつた、官兵の一部の人民側に附きたるが故に民軍の勝利に歸した。この騷動に於て、一七八九年の老英雄ラファイエット又もや人民の崇拜の中心人物となつた。王は時に郊外の避暑地に在り、三十日始めて勅令取消を申出たけれども時既に遲かつた。市役所は既に占領され、三色は揭げられ、この夜オルレアン公ルイ・フィリップ(34)迎へられ、ラファイエットと公衆の面前に於て相抱擁して喝采を博した。彼はやがて國王となつた。新君主は憲法第十四條を削除し、自由主義の大臣任用に同意した、こゝに於て『市民王』又は『市民王國』の稱起る。この時、かのヴィーン會議に於ける正統主義の唱道者てあつた老タレーランも、夙にこの王朝交迭に同意し、これを承認していふ、新君主は全くの正統てなくとも、少くともグローシ、レジティト準正統てあると。しかし、かの時以來、歐洲の公法の一となつてゐる正統主義が、この『市民王』が作られたことによつて一大打撃を受けたことは、その後の影響によつて明證せらるゝのてある。

然らば七月革命の影響如何を見わたしてみやう。

七月革命と、前節に一瞥したイギリスの改革とは、一葦帶水を隔てゝ頗る親密な相互關係があつて、たがひに相影響し合つたといふことは看過出來ない。その上、是等兩國の政變は、由來西歐の自由主義の本場から發して居るから、他の歐洲に及ぼす影響は頗る大なるものがある。ネーデルランドに於ては、既に前年のイギリスに於ける舊敎徒の政治上解放の報道に甚深の感動を受けて居るところへ、こゝに七月革命の焰の揚がるを望み見ては、一個の革命破裂せざるを得なかつた。何となれば、こゝにてはかのヴィーン決議により、舊オーストリヤ領ネーデルランドはオランダよりも人口國力ともに大なるに拘はらず、そのオレンヂ家の下にオランダに合併統一せられ、オランダとは信仰人情の相異なるがために、頗る不利益を蒙つて居たからてある。されば、七月革命の翌月、ブリュッセル(35)に於て革命破裂し、オレンヂ家の守備隊を放逐して獨立を宣言した。そこて列强ロンドンにて協議し、この獨立を承認し、ドイツの一君家サックス・コーブルグ家の王子レオポールド(36)を迎へて王となす。即ちベルギ王國の建國て、イギリス風の憲法を制定して自ら治めた。これまたヴィーン會議の正統主義の破壞

の一である。

七月革命の中歐に對する影響は、その各地に現はれ、ドイツではカルボナーリ[39]等の多少の運動となつたけれども、何等永續的効果を結ぶに至らなかつた。ポーランド王國につきては特に一言を要する。この國に對しては革命の影響著しく現はれ、この秋、獨立運動破裂し、國王ニコラス一世(卽ちロシア皇帝)を廢するに至つた。然るに翌年、ロシアの大兵殺到して、ポーランドは容易に鎭壓され、剩へ一八一五年の王國の憲法を取消され、ロシア帝國に合併して單にヴィスチュラ地方に化せられ、嚴重なる統治を受くることゝなつた。ポーランドの眞の暗黒こゝに始る。

以上、本講が述べ來つた所を要するに、メッテルニヒの反働政策の下に、宛然國際兵力干涉主義の機關として行動することゝなつた神聖同盟は、第一、新世界に對する干涉の企に於て挫折し、第二、ギリシャの獨立事件を中心とする歐洲の國際界に於て破壞されて居る。而して更らに千八百三十年代に入りては、西歐に於て、第一、イギリスの內治の改革、殊にその選擧改正の實現、第二、フランスに於ける七月王國の建設、第三、ベルギ王國の創立、といふ三大事件相つぎ相竝び發動したから、歐洲の自由主義及び國民主義は是等を以て自家の成功と見做して自信を增した。しかし。東歐及び中歐に於てはメッテルニヒ尙ほ依然として勢力を維持して、ドイツ及びイタリヤを反動の繩張內に束縛すること、舊の如してある。

90 一八四八年の革命前の歐洲

一生涯のうちに、さきに一七八九年の革命を體驗し、今また一八四八年の革命に再び遇ふべき歐洲國際界の重要人物が三人あることを、先づ指摘するがよからう。卽ちイギリスの老政治家ウェリントン公[38]、フランスの市民王ルイ・フィリップ、及びオーストリヤの宰相メッテルニヒである。後の二人は、いづれもこの革命で沒落してイギリスに避難する、といふ皮肉な運命を持つて居る。實に巴里は如上の六十年間に、七月革命を含めて、三たび革命の中心となつて歐洲を動かしたのである。而して將さに破裂せんとする革命は、西はセーヌ河畔から東バルカンの境まで、北はシュレスウィヒから南は羅馬ナポリまでの到るところに起るべきて、卽ち歐洲五大强中、イギリス島國とロシアの專制帝國とを除きては、すべてを風靡すべきてある。

しかしながら、この革命は單に巴里に於ける最初の焰の飛火ばかりて起つたのではない、各地に於て革命破裂の素地が夙に準備されて居つたのてある。因て、私はこの一八四八年の革命前の歐洲といふ一節を設けて、その事情を說かなければならぬ。

ナポレオン戰後約三十年間、歐洲の中原は概して平和を享けた。この期間に、自由主義及び國民主

義大に熟し、加ふるに社會主義さへ萌芽し、是等の主義を根據として該政府に對する民間の反抗氣分次第に醞釀し、政府と人民との間に一大鴻溝が穿たれて來た。

イタリヤ人は一八二一年と、七月革命後一八三一年との鎭壓の苦々しい經驗を嘗めて、ますゝオーストリヤといふ外國勢力排除の必要を感じ、彼等の間に起りつゝある三個の國民的勢力のいづれかに依賴して、自己の目的を達せんとした。一、ピエモン・サルヂニヤ[39]王國の國民的兵力、二、『青年イタリヤ』[40]を組織して居るイタリヤ統一の豫言者ともいふべきマッヂニその人の理論的共和主義、三、ローマンチック風潮と共に起つた新加特力敎主義、これは、一八四六年、聖ピータの椅子に上ぼつたピオ九世[41]が卽位の初には自由主義的政策を執つたから、人氣を高めて居る。(113)、の三者である。彼等すべての目ざす主要仇敵は、重ねていふ、ロンバルド・ウェネチヤを握有して全半嶋を睥睨しつゝあるオーストリヤであつたのである。

オーストリヤが作つて居る帝國は、前記の上イタリヤに於ける領土の外に、ボヘミヤ、舊ポーランドの一部、及びハンガリを含むで居る。ハンガリ王國は、ハプスブルグ家の個人的聯有の下にあるが、その支配民族はマジヤール人で、而も國內にスラーヴ人及びルーマニヤ人を含むで居る。その內のクロアート[42]は南スラーヴ族の一で、セルヴィヤ人と同族で相隣つて居る。ボヘミヤにてはチェヒ人及びスロヴァック人がその多數住民であつて、舊ポーランドの住民と共に西スラーヴ族を形作つて居る。尙ほオーストリヤ本部の南部にも、スローヴェンと稱する南スラーヴ族の一が住むで居る。是に由つて之を觀ると、ハプスブルグ家の帝國は、ドイツにも、イタリヤにも、バルカンにも、東北ヨーロッパにも、四方に手足を伸ばし、その內に幾多の相異なれる民族を含み、一種の組合細工（モザイク）の觀を呈して居る。而してオーストリヤ本部が統治する部分の大部分はドイツ聯邦に加入して居る。

かくの如き雜白な組織を有つて居る國家の政治家が、十九世紀の主潮たる自由主義及び國民主義を蛇蝎視したのは尤である。而も是等の諸民族を通じて、各部に於て、多かれ少かれ、各自の人民の自由、國民の獨立の希望と運動とが勃然として起りつゝあるのが、一八四八年革命破裂前に於ける最近の大勢であつた。例へば、ハンガリの支配民族マジヤールは、ハンガリ傳來の憲法主義に據りて自覺を高め、イギリス風の自由を希ひ、一方にはオーストリヤのドイツ的ハプスブルグ的統治に對抗し、他方には國內のスラーヴ、就中クロアートの抑壓を目的とし、マジヤール國語及びその主義による政治の普及に努めつゝある。加ふるに、七月革命の影響を蒙つてからは、更らに彼等の內からルイ・コッスート[44]の下に急進的自由派現はれて、前記のいはゞ保守的自由派以上の要求——例へば王國の會計の監督、出版集會の自由、國民の代議制度、殊にハンガリ王國の自主自治の如き——を發して保守派と抗

爭しつゝあつた。又たスラーヴ人自らの間にも自由獨立の主張起り、ボヘミヤのチェッヒはオーストリヤに對し、ハンガリヤのクロアトはハンガリヤに對して、おの〳〵自主自治を求めつゝある。ポーランド人が彼等の露普兩國に於ける同胞と共に機會を窺ひつゝあるは勿論てある。而してオーストリヤ本部は、メッテルニヒの膝もとに屈伏されて居るけれども、その人民の間にも不平の暗流は絶えなかつた。

ドイツ聯邦の諸國に於て著目すべき一二を擧げてみやう。ハノーヴァ王國は、さきに見た如く、一八三七年、イギリス王家の個人的聯有から分れ、エルンスト・アウグスト(45)の支配となつたが、この國王は國内てはイギリス人だとて氣受よろしからず、卽位の初、自分一存て憲法を撤廢して了つた。そこてゲッチンゲン(46)大學の七敎授は新君主に對する服從の誓を拒むだ。王は彼等を罷免した。ドイツ人擧って彼等に同情した。プロシヤにては、一八四〇年、君主の代變りがあつて、新國王フリードリヒ・ヴイルヘルム四世(47)立ち、輿論に迫られて各地方議會から代表者を召集して、聯合地方議會を伯林に開いた（一八四七）。されど、王はこれに何等の立法權を許さない、只だ請願權を與へたばかりて、官民間の意志が相乖離し、居ることが明瞭となつた。

要するに、一八四八年までの内に、歐洲の中原は、既に自由主義と國民主義の洗禮をうけて、何時ても蜂起の準備が成つて居た。これは、郵便・電信・鐵道竝に出版物等の交通機關が、この千八百三十年乃至四十年代に著しく進捗して社會の輿論作成に貢獻して居るから、一層然りてある。

そこて、吾人は眼を轉じて、革命破裂の中心地を觀察しなければならぬ。卽ち『市民王』の君臨する『七月王國』十八年間の治績如何が、導火の中心問題たるべきてあるからてある。

かの一七八九年の革命はその初期に於て第三階級卽ち市民（ブルジョア）の勝利てあつた。七月革命も亦たさうてあつた。ルイ・フィリップの王位及び王國の保證は實にそこにあつた。これは、この政治の强點でもあるが、同時にその弱點てもあり得る。君主はおのづから資本家及びその自由主義と結託し、是等の階級の利益增進を施政の標準としなければならなかつた。又た國際界に於ても、この主義の本場たるイギリスと提携することに努め、以て之を以て自家の位置の保證とするの必要を滿たして居つた。

然るに、當時國際界の暗礁たる近東問題と、ビレネー王國問題とに於て、フィリップは不幸にして失敗を重ねた。

前者に於ては、フィリップはかのナポレオンの歷史の光榮鼓吹者たるチェール（この時首相たり）の外交策に據り、埃及の副王を助けてこれがために土耳其のサルタンの版圖を割かしむるの方針を取つたが、イギリス、オーストリヤ、ロシア、プロシヤの四國の反對を蒙り、チェールを罷めて四國に屈

服しなければならなかつた。當時ドイツ・フランス兩國の間におの〳〵國民的敵愾心盛んに起つた。フランス人はライン河域をフランスに恢復し、以て『かのワーテルローの仇を報ずべし』と高唱した。ナポレオンの遺骨が聖ヘレナから持歸られて巴里に於て改葬されたのは恰もこの頃であつた。かの一八二一年寂しくこの孤嶋で永眠して殆んど顧られなかつた英雄は、今一八四〇年に於て、宛ら蘇生み返つたかの如く、再び國民の崇拜の的となつた。獨佛兩國の間に、それ〴〵の國歌が作られたのはこの機會である。ドイツ人はラインの歌を謳ふて『彼等はこれを持つべからず、わが自由なるドイツのラインを』と唱へる[48]ニコラウス・ベッケルの作）。之に對して、フランスの詩人は『われらは汝のラインを持ちにき』と遣り返へした[49]（ド、ミュッセー作）。ドイツに於て『ドイツの國、ドイツの國一切に冠たり』ホフマン・フォン・ファルレルスレーベン作）の謳ひ出されたのも、間もないその頃であつた。かくて七月王國の外交の腑甲斐なきことが暴露し、その反比例に四十年前の帝國政治の光榮が切りに偲ばれることになつて來た。

ティエールの跡に、『歐洲文明史』の著者ギゾー[50]が首相となつた。彼は市民王のために最後まで忠勤を抽んじた。彼の執政期に、かのピレネー王國に關するこれまで屢繰り返へされた國際問題が、更らに結婚事件となつて持ち上がつた。即ち、この時イスパニヤの若き女王が然るべき配偶を求めつゝあることである。當時フィリップは年ます〳〵老ひ、死後に於ける自己の朝家の確立を翼ふことゝなり、その熱心のあまり、自己の同盟たるイギリスを出し抜いて、自家の利益のために、イスパニヤの結婚を取極めさした（一八四六）。それは、女王に或る明かに虚弱なる夫を選定し、女王の妹にフィリップ自らの末孫を娶はしたこと、是れである。これでイギリスの威情は痛く損はれた。その外務大臣パルマストン[51]は、因て一切歐洲在野の反對派をつらねて、七月王國に當らんとするに至つた。このイギリスとの提携の斷絶は、卽ち、七月王國の保證たる資本家及びその自由主義に取りては、少からざる打撃であつたに違ひない。

この國際界に於ける七月王國の不安を一層氣遣はしくしたのは、夙にその內部に於ける困難の增長であつた。といふのは資本家に反抗する社會主義的運動の勃興と、資本主義と結託する官僚政治の腐敗の曝露とである。

社會主義的暗流は、既に大革命及びナポレオン時代に胚胎し、頭を擡げることすら時々あつた。つまり、資本主義と共に文明の利器が輸入された結果、資本家ます〳〵富み、下民いよ〳〵貧困となりつゝあつたからである。この不幸なる傾向に對して、これは社會組織の不公平から來るのであるから、これを根本的に救濟しなければならぬと論じ始めたのは、卽ちサン・シモン[52]（一八二五死）である。

社會主義（ソーシアリスム）といふ術語はこの人に始る。彼の考は『人々の能力に應じて勞働を與へよ、勤勞に應じて報酬を給せよ』といふのである。同時代にフーリエー[53]（一八三七死）が出て、凡そ四百戸づゝの家族が一隊（ファランクス）を作り、共同に住居し、共同に勞働し、共同の財産を作るがよろしいと推薦した。彼はかくの如き共同の住居を、希臘のファランクスに因みて、ファランステール[54]と名づけ、かくの如きものから一切人民を包容する世界國家を作り上げて、コンスタンチノープルを都とすべしと主張した。是等兩人はいづれも純なる學者であつて、その說はいまだ危險とはなるに至らなかつた。然るに七月革命以後のフランスの現實生活は、一轉して危矯なる學說を生み、而も之を實際的勢力たらしめた、即ちプルードン（一八六五死）と、ルイ・ブラン[55]（一八八二死）のそれである。是等は正さしく一八四八年の革命に對して實際上の勢力となるべきであつた。プルードンは『財産とは何ぞや』（一八四〇―一國版）を著はし、『財産は贓品なり』と結論し、ルイ・ブランは一八三〇―四〇年間の『十年史』五冊（一八四一―六出版）を著はし、これも亦た市民の資本主義を痛擊した。殊にルイ・ブランは、深刻なる社會主義的共和論者たると同時に、人となり一個の有力なる革命的資質を備へて居た、即ち辯舌と掛引とに於ける巧妙なる政治的伎倆是れである。彼は前記の著書を勞働者の手にしやすき便利な形にて公刊して彼等に痛切なる標語を示した、曰く『社會には競爭がある、道德には懷疑がある、政治には無政府狀態があ

る』と。是がルイ・ブランの七月王國十年間の治績に對する結論であつた。尙ほ、十九世紀に於けるフランスの女流文豪の一人ジョルジ・サン[56]（オーロール・デュペン嬢の擬名、一八七一死）が、その精神的才筆を以て社會小說を著はし現代を諷刺したのもこの頃であつた。以上の社會問題に對する諸運動は、機會だにあらば、第四階級卽勞働者社會を、何時でも政治の活舞臺に引き出し得るまでに訓練した。

機會は七月王國晩年に於ける代議制度の腐敗及び之に對する改正運動に伏在して居つた。當時政府は選擧を操つり、官吏を選出せしめ、若くば任官の豫約を以て候補者を政府黨に引き入れたから、四百五十名の代議士の中百九十三名は政府の官吏であり、また、選擧權は、その資格制限のため二十萬人に限られ、而も選擧が馬鹿らしくなつたから、實際の投票者はその五分の一、卽ち全國丁年以上男子の二百分の一に過ぎないといふ不始末となつた。政府はかくの如くして常に多數を制して居るから、官吏は厚顏無恥となり、幾多の裁判事件に於て續々行政上腐敗が曝露して來た、これがギゾー內閣の有樣であつた。ティエール、その他有力なる自由主義者は、こゝに選擧法改正を唱道したが、ギゾーは之を尙早として排斥した。是に於て、一八四七―八年、この問題を國民に問はんとて、しきりに選擧改正會が催された。これ、如上の社會主義者を始め、ボナパルト（ナポレオン）派、王黨、その

他一切の『七月王國』に對する反對派の、以て乘ずべき好機會であつた。

之を要するに、一八四八年初に於ける歐洲は宛ら噴火口頭に座して居る、これが爆發はまたもや巴里兒の手で點火せらるべきであつた。

91　二月及び三月革命　その影響

一八四八年二月、フランスの在野黨は選擧法改正大會を巴里に開くことになつた。この際、政府の措置よろしきを失ひ、市民王ルイ・フィリップ亡命し、その後に假政府組織された、かのルイ・ブランは委員の一人となつた。假政府は社會主義の要求たる人民の『勞働に對する權利』を承認し、國費を以て國民勞働場を設立しなければならなかつた。勞働者の集り來るもの十萬、假政府は之を養ふべきであつた。別に、リュクザンブール[57]宮に、勞働者の議會が開かれ、ルイ・ブランは彼等の使徒（アポストル）と稱へられ、その議長に選ばれた。之を二月革命と稱する。

一八一五年以來歐洲の秩序維持者を以て自任したメッテルニヒは、二月革命の報を得て、かの一七九一年フランス共和國の十字軍侵入が再演せらるゝの虞れありとし、ドイツ聯邦政府に命じてライン河畔の防備に從事せしめた。かの時の革命のドイツ蔓延には、かくの如く、二年の日子が要されたのであつた。然るに、この時は只だ巴里からの一電報を要したばかりて十分であつた。一切の中歐諸國は忽ち燎原の火に燒きつくされんとす。卽ち三月革命の破裂これである。

先づ凱歌を奏したのはメッテルニヒの膝元にあるヴィーン及びブダペストの市民であつた。四十年間歐洲の『反動』の源泉と目せられた老政治家は、忽ち一夜にして逃亡しなければならなかつた。歐洲の自由派は快哉を叫んだ。プラーグも、ウェネチヤも、ミラノも同じ月のうちに起つた。流石のオーストリヤ帝國も一時は瓦解するかと思はれたのである。

サルヂニヤ王國はミラノに侵入し、この際自ら自由なる憲法を發布し、半島の民心を繫いだ。ドイツに於て最も王家に忠誠を抽んでゝ居ると稱せらるゝプロシヤ人も、同じ月、伯林に於て宮兵との市街衝突に陷つて數百の死傷者を出した。國王之を哀み、親しく市中を巡幸して人民を慰撫し、一個の愛國的宣言を發し、自ら外來の危險に對してドイツ統率の任を執るべしと唱へ、ついでプロシヤ國民議會の召集を約した。

シュレスウィヒ・ホルスタイン[58]につきては、この年一月、デンマルク王家最後の男統君主たるべきフリードリヒ七世（一八四八―六三）が卽位して居る。デンマルクの國民黨は危機の切迫に先ちて、シュレスウィヒをデンマルク王國に合併せんと企圖した。ドイツ人の輿論は之に反對し、シュレスウィヒをホルスタインと同じやうにドイツ聯邦に引き入れんと欲して居た。だから革命破裂の報到るや、キ

ト[57]ルでは、デンマルク人に反對の國民運動が起され、前記の如き感奮狀態にあるプロシヤは兵を派して之を援助した。

これと同時に、ドイツ各地の有志者は、國民の代表者となつて聯邦政府の所在地フランクフルトに集りて、自ら國民議會を作り、諤々諤々の議を吐きて、ドイツ國民的憲法を制定せんと努め、その國民統一の希望頓みに高まつた。

以上は三月革命の概況であつた。要するに、この革命は、若し歐洲を東・中・西の三部に分つときは、中歐を通じての自由及び國民主義の發現であつた。これによつて、オーストリヤも、プロシヤも各憲法を求め、マジヤールも、スラーヴも、各オーストリヤの束縛を免れんとし、イタリヤ人はサルヂニヤ王國の下に北イタリヤからオーストリヤを除かんと企て、ドイツ人はプロシヤの下にデンマルクの支配をシュレスウィヒから排斥せんとし、之と同時にドイツの中央に於て國民統一を成就せんとする大企圖が現はれた。

然るに、その夏から年末にかけて、歐洲の風潮溫和に傾き、春以來の革命を破壞し始めた。

卽ち、巴里では、かの社會黨の亂暴狼藉に對する溫和なる共和黨の反動起り、國民勞働場閉鎖を命じ、この際の叛亂を嚴重に處罰し（六月の砲擊）、新に共和國憲法を制定し、一般投票に問ひたる結果、かの大ナポレオンの甥ルイ・ナポレオンは大統領に推された。

また、オーストリヤの兵力は、先づプラーグ[60]に於て、次に北イタリヤに於て、各統治を恢復し、つ[61]いて都ヴィーンの亂を鎭壓し、フランツ・ヨーゼフ時に年十八歲を以て擁立され、一切オーストリヤ帝國に對する統一憲法發布された。この大業恢復の精神は政治家シュワルツェンベルグ[62]公であつて、彼は實に第二のメッテルニヒと稱せらる。

プロシヤにても、約によりて國民議會の召集があつたが、年末に解散されて、欽定憲法の發布となつた。

以上、巴里、ヴィーン、伯林の鎭定は、畢竟、時局の妥協と見做すべきである。そこで、翌一八四九年から、妥協不可能なる地方に對しては、兵力干涉主義が又もや實行されることになつた。

卽ち、北イタリヤに於けるオーストリヤの兵力は、こゝにサルヂニヤ王國の兵を擊破し、その國民獨立の企圖を放棄せしめた。又た當時、マジヤール人はコッスートの下にハンガリの獨立を宣言したが、ロシアのニコラス一世はオーストリヤの要求を容れ、大兵をハンガリに討ち入れ、オーストリヤ軍と共に之を合擊鎭定した。

故に一八四九年の反動主義の兵力的厲行は實に墺露二國から發したのである。これによつて、プロ

シヤは南ドイツに、フランスはイタリヤに、各兵力干渉を行ふの勇氣を皷舞された。南ドイツでは、かのフランクフルトの國民議會失敗に歸し、議員の殘れる有志は兵を擧げたからである。イタリヤでは、羅馬法皇ピオ九世は共和主義者マッヂニ及びガリバルヂ[63]のために都を落ちのびなければならなかつた。その跡で、加特力フランスの大統領としてナポレオンは、こゝに北イタリヤのオーストリヤに對抗かた〳〵、フランス軍を送り、法皇を都に恢復し、こゝに兵を駐めて之を安堵せしめたのである。

然らば、ドイツ統一問題は如何になつたか。かのフランクフルト國民議會に於ては、對ナポレオン及びローマンチック時代が培養した幾多の精神的人材雲の如く集りて議論を戰はした。彼等の考は大ドイツと小ドイツとに分れた。小ドイツはオーストリヤを排除せんとするもの、この說遂に多數を占めた。シュワルツェンベルグがオーストリヤ帝國統一憲法を發布したのは、一はこの決議に對抗する面當てであつたのである。多數派はプロシヤ君主をドイツの世襲君主に推した。然るにフリードリヒ・ヴィルヘルムはこれを辭退した。上に既に述べたる議會失敗の最大原因は實にこの拒絶にあつた。

プロシヤ王は何故にこの申出を受けなかつたか。それは他でもない。當時歐洲の風潮既に反動に復しつゝあつた、加之、王及び王の周圍の人々はプロシヤ一流の君主主義の信仰を抱き、凡そ民間から發したるものは、如何なる贈物も之を納るゝを欲しなかつたからである。プロシヤの君臣は寧ろ自ら進みて或物を作り上げんと欲した。されば幾ばくもなく、プロシヤは諸君主自らの自由意志による聯合（ユニオン）を唱道し、オーストリヤの君主を世襲大統領に推し、プロシヤ君主自ら世襲元帥たらんと期した。當時自由派は今は振はず、この聯合をすら不承〳〵に贊成しなければならなかつた。然るにかの第二のメッテルニヒは、茲に第三ドイツを喚起した、卽ちバヴリヤ以下の諸國はオーストリヤに左袒した。加之ロシア皇帝も之に加はつた。この反對運動は、かの一八一五年のドイツ聯邦は猶ほ繼續實行中であると稱し、プロシヤに向つて迅速に聯合の解散すべきを要求した。この國際的威壓と、かのプロシヤ君臣の君主主義の信仰から來る煩悶とは、遂にプロシヤをしてシュワルツェンブルグの高壓手段に屈服するの外なからしめた（一八五一年オルミュッツ[64]協商）。

かくの如くして、一八四八年の革命の結果は全く破壞され、ドイツは一八一五年のまゝの聯邦に復し、シュレスウィヒ・ホルスタインも舊狀態に歸し、ハンガリは自由を奪はれ、イタリヤはオーストリヤ及びフランスに威壓されることゝなつた。中歐は再び反動に陷つた。

92　フランス國民の第二帝國　クリミヤ役

二月革命と溫和の風潮との妥協として現はれたかのフランス大統領ルイ・ナポレオンとその國は、その後、如何になつたか。これが尙ほ注目すべき一重要問題である。

吾人は、彼が就任早々、イタリヤ出兵に於て外交上成功したことを既に一瞥した。

彼は新共和國の憲法の弱點に乘じ、自ら人民及び國家のチャンピオンとなつて國内に臨むだ。この際、彼及びその周圍は新憲法の缺陷を指摘するに努めた。即ちそれが主として中等市民の社會を標準とし、人民の選擧權享有の範圍を縮めて居る、議會を一院制として居る、大統領の再選を許さない、隨つて國家の最高機關が薄弱にして安固を缺く、といふこと是れてある。されば、一八五一年十二月二日、一朝、クー・デ・ターが斷行された。然る後に、大統領は普通直接選擧と、大統領の再選と、その下にある兩院制度とを骨子とする、實はナポレオンのコンスル及び帝政と同樣なる憲法を、一般人民の投票に問ふて作り上げた。而して外に對しては、『帝國は征服にあらず平和なり』と聲明し、イギリスの自由貿易派と好を結び、以て内外の安心と信用とを博し、翌年同月同日、更らに帝位を踏みてナポレオン三世と稱した。

このフランス人の第二帝國の主人公は、更らに國際問題を提へて自家の位置を固めた。それは、多年歐洲の宿題たるトルコ處分に關する葛藤から新に生じたものてある。といふのは、最近に於ける歐洲の中原の革命の鎭定者ロシア皇帝ニコラス一世が、自己の國際界に於ける威力を自信し、或る回敎對キリスト敎徒問題を機とし、急にこの『東方の病人』を料理せんとしたのが、事の發端てある。イギリスは乃ちこの企に反對した。ナポレオン乃ち之に乘じてイギリスを拉し、いはゞ西歐の自由主義の聯合を作り、ロシアの南下策に當つた。かくて聯合軍はクリミヤ半島[65]に上陸し、ロシアの要塞セヴストポール[66]を包圍攻擊すること殆んど一年（一八五四―五五）、遂に之を陷れた。この役、オーストリヤは中立し、一八四九年ロシアから受けた恩義を裏切つた。この際、ニコラス崩じ、アレクザンドル二世立ち、西歐諸國と和し、一八五六年巴里講和條約となつた。

この一役、實に西歐の自由主義が東歐の保守主義に對して得たる一大勝利と考へられた、自由派は大に喜んだ。而してこの勝利はナポレオン三世の政策とフランス陸軍の戰功とに負ふ所大なるものがあつたから、一層、その第二帝國の光榮に資した。尙ほ、この際土耳其が雪に覆滅の危險から救ひ出されたのみならず、宛ら一個の戰勝者の如く、領土の保全を保證されたことも注意すべき結果の一てある。

再び、一八四八年の革命の結果を按ずるに、このものは具體的産物に乏しきことは既記の如くてあるが、而も尙ほ顯著なる文化産物を殘したといへる。先づ、新思想が廣く一般人民に宣傳されて、第四階級の少くとも思想上の勝利が始まつたのは、この革命によるといふべきてある。因みにいふ、マルクス及びエンゲルス[68]は、既に一八四六年を以て、天下に向つて共産主義の宣言を發して居る（二十三

講參照)。次にフランスにては、再び帝國が起つた。このものは名こそナポレオンのそれの再生であれ、君主その人は、實は、かの時のそれの如き武斷的有力者でなかつた。この事は幾ばくもなく曝露されるであらう。彼は寧ろ一般人民の輿論を基礎として居る。卽ち、一八四八年の革命の結果、一種の民主的帝國がフランスに生れたのである。更らに記臆しおくべきは、中歐に於ける國民の統一の企はすべて盡併に屬したけれども、ドイツにてはプロシヤ、イタリヤにてはサルヂニヤ、おの〳〵如上の革命の際に發布した憲法を保持し、各國民の望をつないだことである。是れ亦た將來のため注目すべきである。最後に、當時ドイツ國民統一の壯圖の失敗の原因は種々あれども、就中、愛國の志士等が感傷的自由主義に馳せ、徒らに言論と多數決とを過信し、實行機關の充實と國際關係の作成とを蔑視したることは、最も顯著なる現實の失策であつて、將來の國民統一に對する好敎訓となつたのである。

第二十講　十九世紀の思潮　學藝及びその應用

諸君！　本講及びその題目につきて、私は一言の前置きを必要とする。

熟ら十九世紀に於ける世界史の趨勢を察するに、吾人はその二個の方面に向つて飛躍しつゝあるを發見し、之を明確に指摘するを禁じ得ない。卽ち、一は、憲法作成の運動である。これは、當時自由主義及び國民主義の要求に基きて發生して居るものであつて、吾人は前講に於てその發展の徑路を述べて來つたから、更らにその收穫を觀察し、その成果を掴まんと欲する。この方面の紛爭に於ては、廣大なる政治運動起り、時には激烈なる軍事行動が伴ふて行く。次に第二の方面は頗る之とその選を異にするものである。これは思想界の生產及び知識界の開發に屬し、學藝の開拓及び自然界の征服となるべきもので、隨つて個人の人間としての自覺、社會の改良、交通の進步、世界の擴大等の文化現象を齎らすべきである。これらは、よしや往々通商植民の發展、軍備國力の競爭を促がして鐵血の慘劇を演ずることあるにしても、それ自らに於て平和競爭的文化運動である。この方面に於ても、十九世紀の世界史は、第一方面たる憲法作成運動に比して、優るとも劣らない活動と成功とを遂げ、前古未曾有の彬然たる文化舞臺を、吾人の眼前に展開せんとして居る。

實は、是等の兩者は相離るべからざる相互關係を有つて居る。彼等は唯だ同一の世界史體から、現はれたる兩面に過ぎない。誰かその一を視ずしてその他を解し、將た兩者を綜合せずして全豹を把捉し得やう。見よ、國民主義はロマンチックを煽り、ロマンチックは國民主義を燃んにした。之と同じく、自由主義は唯物的學風を哺育し、唯物的學風は自由主義の根蒂を固めた。是等、憲法作成運動の精神たる二個の政治主義につきて、吾人がその發展を概瞥し了りたる後、その成果たる國民的國家の建設に說き及ぼすことを次講に延ばして、玆に本講に於てその中間の幕合として十九世紀の思潮、竝に學藝及びその應用を窺はんとするは、卽ち政治と其他の文化運動との相依相關を重要視する私見に基くのである。私は、一を以て他を排斥し若くば少くとも蔑視することが、世界文化史の結構を完全にする所以でないことを確信するものである。

93 ロマンチック①

十九世紀の劈頭に現はれたる新思想といへば、政治上に於て自由主義及び國民主義が燃え立つて居るが如く、これらと相竝びてロマンチック思潮が湧き出して居る。このものは主として若くば最初は文藝に關するものである。而も政治、その他百般の社會生活と密接なる交涉を有して居る。かくて問題が極めて廣汎且つ複雜に亙るものであつて、一言て之が定義を下し難い所がある。しかし、先づ敢て概瞥を下すと、このものが第十七講に觸れておいた十八世紀の思潮たる啓蒙運動、就中その古典主義に對する反動から起つたものであることは、確かであるから、私はその起源如何から之が考察を始めるの他はない。

古典主義につきて、かの時は主としてフランスに於けるものを窺つたばかりであつたが、實はドイツに於ても、フランスのヴォルテールらと同時代に、ヴィンケルマン等の希臘研究家が出て、當時のロココ時代の固陋虛僞淺薄野卑に對する反感と純ヘルラスに對する尙古的憧憬とから出發して一種の新しい人生運動が開かれて居た。これを十五世紀のそれに對照して、新人生運動②と稱す。ヴィンケルマン③の『希臘美術史』（一七六四）文獻學者フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ④の『ホメーロス研究』（一七九五）の如き、その知的生產の秀逸に屬し、それ〴〵の專門に於ける新時期を劃するものと稱へられて居る。詩人レッシング、ゲーテ、シルラ等の敎養及び趣味はみな同一思潮のうちて煦まれたのである。かくてドイツ、フランス、そのいづれにしても十八世紀の思想の基調は純理と古典とにあつたことが分明する。當時の先覺者たちは人生自然の純理の慾求を標準として、且つは世界の知識を蒐め且つは事物を判斷し、民族の感情乃至國民の歷史を蔑視し、宇宙的態度を執り、思を高遠に馳せて自己から全然相離れたる模範を想定して之を崇拜した。卽ち古典の理想化はこの世紀の主潮に屬して居

た。この傾向は、同時代のドイツに於ては、その政治上狀態が國家として憫むべき有樣にあつたが故に、故國に對する失望から一層盛んとなり、フランスてはその燦爛たる怪光を放つて居る『舊政治（アンレアンレジーム）』を革新せんと欲する理想から一層强烈となつた。大革命は卽ちこの後者の傾向の發現にして、その結果、『新政治（ネデルンレジーム）』を作り出し、ナポレオン之を受けついだ。當時、大勢の趨く所、驀直に純理の命ずる目的に向つて突進したるが故に感情生活は惜氣もなく蹂躙され、却て『舊政治』に優るとも劣らない亂暴狼藉が働かれた。この思潮に反對して、夙にフランス人の間を咽びゆく暗流がながれた。かの『民約論』の著者ルーソーは、政治論者としては、純理の一本調子にて歷史の根據を無視して啓蒙思潮のうちて錚々たる位地を占め居るも、社會生活に關しては、人間の感情を基としたる當時無類の感傷的理想家てあつた。この點に於て彼はフランスのローマンヂックの最先鋒といへる。次に大革命及びナポレオン時代の才媛ステール夫人及びシヤトーブリアンがこの政治上社會上の暴虐時代に反抗してローマンヂックの先驅をつとめたことは、吾人の第十八講に於て概瞥したところてある。しかし、一層有力にして根底ある時代反抗はドイツから起つた。こゝては、既に十八世紀末、文藝上から、ドイツ人の多くがフランスの古典を崇拜するの風あるを慨し、之に反對する反抗氣分、大に高まつて來た。前述のドイツの古典詩人レシング、ゲーテ、シルラ等はそれてある。就中、ゲーテは彼の異常の詩才と長き文化生涯とを以て、當時の社會に感化を及ぼすこと大なるものがあつた。彼は少壯の時かのヴィンケルマンと同やうに南國にあこがれてイタリヤに旅行し、古典主義の雄者の一人たるを失はない。かくて、彼は何等の政治上愛國者てはなかつたけれども、彼の感情は根本的にドイツ的てあつて、ドイツ文化の感情的方面に貢獻する所極めて大なるものがある。この人物は、猶ほ中古と現代とに跨り立つイタリヤ國民的詩人ダンテの如く、十八·九世紀の交、古典主義（クラシシズム）とローマンヂックの先驅をなす者てある。

果して十九世紀の始、ゲーテの老熟に入るに隨ひ、ドイツの思想界は一變し、從來暗流てあつたものが表面に現はれて來た。卽ちローマンヂックの流行てある。この時の風潮の勃發は最早單純なる文藝上の趣味や動機やのみから持ち上つたのてはなく、實にこの時に破裂した世界的大事件の刺戟によるところが多い。卽ち大革命の亂暴、殊にナポレオンの帝國に對する政治上反抗てある。換言せば、天下一統思想に反抗する國民主義及び自由主義の活動てある。何となれば大革命は歷史を無視し、ナポレオンを受けて自己の權力樹立に急にして、民族國民を恤まず、冷かなる意力と鐵血との下に諸國を蹂躙し、一切世界を束縛せんとした、卽ち、大革命もナポレオンも、いづれも純理の權化、暴力

の發現に他ならないからである。それ故に、フランス内部に於てはスタール夫人等夙に反對の聲を揚げた。外に於て幾ばくもなく強烈なる國民運動の爆發するは偶然でなかつた。この運動の中堅はドイツであつた。この時まで宇宙的古典的はた單に文藝的態度を取つて居たドイツの知識界は、こゝに一轉して國民的政治的感情的となつた。カントの後繼者フィヒテが慨然ドイツ國民に告げて、彼等の精神に點火したのはこの時である。かゝる間に、文藝及び一般思想界、一般の趣味界は翕然として純理から感情に奔り、統一に對して自由をうれしみ、古典の形式から解放されて、民族的國民的精神を尊重するやうになつたのである。

以上の精神發展の傾向は、古典や外國思想や專制統一の政治に反對して民族（フォルク）又は國民（ナーシヨン）が我自らを標準とし且つは問題とし、之をあこがれと研究との對象とするに在る。かの十八世紀の古典主義（クラッシシスム）は遠く希臘羅馬の古典を直接目的とし、現代の民族又は國民を第二次として輕んじた。然るに新風潮は現代の特相は如何、わが民族は如何、わが國民は如何、所詮、我自らを問題とするものであつて、こゝに我の自覺高まつて大に强烈となつて來た。先づ文學上では文獻學者シュレーゲル兄弟を始とし、自己の理想境を『青き花』と稱して之にあこがれて夭死した感傷的青年詩人ノヴァーリス⑤本名ゲオルグ・フリードリヒ・フォン・ハルデンベルグ）、グルマニの古傳說及び言語學を研究したるグリム兄弟（ヤコブ・グリム、ウィルヘルム・グリム）等は、この傾向の代表者である。哲學上ではかの既述のフィヒテ（一八一四死）と、之と相竝びてヘーゲル（一八三一死）シェルリング（一八五四死）が出て、ロマンチック哲學の三巨頭を形作つて居る。

さて、この精神運動が何故にロマンチックと名づけられるのであるか。これに對する解答は現代國民の歷史的起源に存するものであるから、世界史潮の概觀を主要目的とする本講が、この點につき一言を繰り返すのは、失當であるまい。

何を以てしかいふ。そもそも現代の國民は古典世界そのものに起つたのでない、ヘレーネドム（希臘國民的文明）からも、ローマンドム（羅馬國民的文明）からも始まつたのではない。彼等は古典希臘や、古典羅馬やには何等の直接關係を持つて居ない。是等が形作つた古典文化の世界が衰亡に傾きつゝある時代に、ゲルマニ民族が始めて侵入し、この侵入のつゞきゆく手續のうちに、現代國民の遠き起源が始めて發して居る。換言せば、民族大移動及びその定住といふ大なる數世紀に亘れる時代に、古典文明の成果たる羅馬世界と新しく入つたゲルマニ風の人民とが、地方によつて比例の多少の差こそあれ、何等かの相互の抱合作用を行つて、始めて一種固有なる新複合體を作り出した、即ちこれがローマニック（又はローマンス）風の人民世界である。この

渾然たる世界的團體のうちから分化して來たのが卽ち現代の民族又は國民てある。無論、この人民世界は、公平に嚴密にいへば、決して單にローマ風世界とはいへない。寧ろローマ風殘ゲルマニ風世界と稱すべきてある。何となれば、若し學術的意義に於けるローマ風世界は何かと問はれるならば、古羅馬の要素が尤も濃厚に殘つて居る南歐人民の世界だけになるべきてあるからてある。しかし、古典世界に入つて行つたゲルマニ風人民が、そのいづれに定住して或は北方に居つたにしても、ローマ風 古羅馬文化に對照して)の文化の光明を多少なりとも被らないものはなかつた。言語詩歌ては、ローマンス(ローマ風のもの、義)といふ文化作品が輸入される、信仰ては、羅馬加特力が布敎される、經濟生活ては、ローマ風大地主の經營法が摸倣される、當時腕力以外のものては、多くは南方から輸入されない文物はなかつたといつても差支なからう。これが歐洲諸國民の文明の起源てある。されば、大革命及びナポレオンの專制統一に反抗して起つた民族的國民的氣分は、是等の國民の歷史を無視した亂暴そのものに反對するのてあるから、自分等の歷史的起源を思ひ、之を中古に於けるローマ風の風化の盛んな時に求めるより外はなかつた。大革命及びナポレオンは、十八世紀の百科學者(エンサイクロピヂスト)や啓蒙學者が思想上になしたやうに、實行上に於て敎會を破壞し若くば除外したのてあつた。之に對して、ローマンヂック者流は自分等の民族の祖先を哺育した羅馬加特力敎會を思ひ、少くとも中古の宗敎的傾向を重んじ、封建制度時代の風俗を偲び、すべての中古的文物を追憶して之を理想化した。物語に傳へらるゝ修道者(モンク)や武士(ナイト)の生活、民間に起つた神話、民謠、風俗などを懷古して研究の題目とし、因つて敎會や封建制度の遺蹟遺物として古い僧院や昔の城廓は喜んて遷宗され、歷史に富んだ市場、由緒の纏綿して居る山や泉や洞穴が訪はれて、種々の考證、史詩、歷史物語が編まれた。かくの如くして、何ものても、奇も中古的のもの、卽ち、ローマンスめいたものは、一切世人の興味の對象となつた。これが卽ちローマンヂックの名の起る所以てあつて、同時にその傾向の中心てある。

かくの如き傾向は先づ文藝や趣味の上に發し、それから、政治、宗敎、學問、社會の流行に影響を及ぼして行つた。例へば、政治上に於て、人民の自由主義、國民の獨立主義は之によつて盛んとなつた。宗敎ていへば、羅馬加特力敎會の中興、竝にその他の宗敎的傾の復興、學問に於ては史學の創立及び國民史の勃興(史學の創立につきては、對ナポレオン時代にニーブール出てゝ羅馬史を研究し(一八一二)、ナポレオン滅落後にランケ現はれて羅馬風ゲルマニ風諸民族史(一八二四)を著はしたが如き、今日世界を風靡して居る文獻的批評的史學研究法の創立となるものてある)、言語學及び文獻學の隆盛の如き、また詩歌小說美術に於ては國民的英雄を主人公とする歷史もの又は古傳說的牧歌的題材を取りたる作品流行するが如き、いづれもローマンヂック流風の餘響といはなければならない。

蓋し十八世紀の古典主義（クラシシズム）は大體に於て古典に對するあこがれてあつた。ローマンチックは十八世紀の懷のうちで哺育され、その古典に對するあこがれを現代國民に移して我自らのあこがれに化したものである。それてあるから、ローマンチックは古典主義運動に比すれば、より多く歷史的連續を顧慮して居る。十九世紀に於て、諸學問を歷史的研究法によつて建設するといふ學風は、實にローマンチックに負ふて居る。このローマンチックの歷史的方法がやがて再び希臘羅馬の古典に適用されて、古代の文獻が十八世紀よりも一層深く廣く研究されることゝなつた。しかのみならず、他の古典、卽ち東方の文獻も亦た之につれて研究の對象となり、古代東方の言語文字（例へば埃及、アッシリヤ）梵語及び東西の比較言語學も亦た始めて有力なる開拓を受けた。フランス人シャンポイヨンがエジプト神字（ヒーログリフ）を讀解し（一八二二）てエジプト學を創め、また、梵語學者にして比較言語學の創始者ドイツ人フランツ・ボップの研究の成功したのも（『梵語、ゼンド語、希臘語、拉典語、リトアニヤ語、古スラーヴ語、ゴート語及びドイツ語の比較文法』伯林一八三三―五二年出版六冊）この時期てあつた。かくの如きはまたローマンチック學風の餘澤である。

かくの如く歷史的觀照が進んて來たから、歷史的懷古や空想が一般に逞しくなり、國民精神、民族精神、時代精神、世界精神などいふものが想定される傾が著しい。故にローマンチックは一般に歷史的考方を奬勵したものてある、けれども、眞の歷史の科學的研究法がまだ普及して居なかつたから、過去を空想化し又は理想化するといふ傾向も亦た免るゝこと出來なかつた。それてこの種の歷史的空想又は理想を逐ふて時代のローマンチック精神を喚起したる詩歌文學に關するものが少くはなかつた。例へばイギリスては詩人シェリや、同じくバイロン、小說家ウォルタ・スコットの如きてある。スコットの小說はスコットランドの中古生活及び風景に對するあこがれを惹き、シェリ（一八二二イタリヤにて溺死す）及びバイロンは歐洲の東南に飄零して自由の空氣を鼓吹し、いづれもそこて客死し、大いに世人の感動を惹いた。就中、バイロンの希臘獨立役に於ける殉死（一八二四）が最も歐洲のローマンチック精神を焚きつけて、一個の希臘愛慕熱（フィルヘレニスム）の昂騰期を作つたことは、吾人の前講に於て一瞥した通りてある。かく觀じ來ると、ローマンチックは最初の動機は自己の民族乃至國民といふ「我」自らの反省自覺に在つて、轉じて自己の起源の歷史的觀照となり、更らに一步を進めて人生文化の起源に向つてのあこがれとなつて來て居る。然らば、この最後の意味に於ては、ローマンチックは現代と古典とを問はず、何ものか苟も無限なるものに對する感情的理想の憧憬てあるといふことが出來る。

ローマンチック思潮の絕頂は十九世紀の上三分の一期に於て達せられたと考へてよろしい。それは、この思潮の重なる代表者が多くその頃に長逝し（ヘーゲル一八三一、ゲーテ一八三二、スコット同ピ

く一八三二年に死す）たること、他の思潮が之に代つて著しく傑出し始めたことゝに存する、無論、ローマンチックの流は今後尚ほ不斷に起伏して傳はつてゆき、或意味では十九世紀の主潮といつても差支なきほど、之を貫通して居るけれども、吾人は今十九世紀の中期の入口に立ちては、寧ろ他の知的現象に向つて眼を轉じなければならないことを切實に感ずる。卽ち唯物的學風である。

94　唯物的學風の基礎

さきに十五六世紀のころ、ルネーサンス時代に於て、印刷術の發明、羅針盤及び火藥の應用が地中海交通時代を大西洋利用時代に改造し、始めて西洋の勢力の東洋に對する優勢の端を開いた。これと同やうに十九世紀には、蒸氣電氣の應用、鐵道の布設が始まつて大西洋交通時代を擴大して、更に從來よりも活潑に印度洋及び太平洋を利用し、眞に四海一樣の交通時代を作りだし、その內に於て印度、濠洲、兩米、太平洋岸の植民及び開發尤も顯著となり、或意味にては太平洋上活動時代開始といふ世界史の一大時期を劃しても差支ないと思はるゝまでに、世界交通上の變動が進み行かんとする。

是等の地球上に於ける水陸兩面のいはゆる征服の進行の窮まるに隨ひ、終に兩極地方の探險ともなり、剩へ人心は遂に高きに上りて空中の征服だにも企てんとす。實に科學應用の結果、時間と空間とは有功に利用され、時間は長く使はれ、距離は短く縮められ、望遠鏡によつて遙かに天體の動靜を眼中に收め、スペクトラム鏡によつて天界に於ける發光體の組成が果して如何なる元素を含むて居るかを分明にするを得るが如き、既に、十九世紀の中期に於て、現代人をして自然と宇宙とに對し、よしや舊の如く依然として無限の崇敬と驚嘆とを禁じ得ざらしむるにせよ、最早や古のカルデヤの星占學乃至アラビヤの煉金術の者流の迷信的態度を取らしめない、却て、或は如何なる事物にても人智を以て解釋し得ざるものなく、また如何なる目的にても人力を以て達成し能ふにあらずやとの考を抱かしむるに至つて居る。卽ち是れ政治上社會上に於ては西方ヨーロッパの自由主義の勝利、學術上に於ては自然科學の進步に基きたる人心の覺醒と自信とを意義するものである。

吾人は、この傾向が非常の飛躍を遂げて唯物學史上の絕頂點を形作るのは實に十九世紀の中期に在ること、その內でも、殊に一八四八―六五年の時期に於て尤も顯著なることを、まさしく發見すべきである。

さて、是等の進步は、學術上に於ては、十九世紀中葉固有の唯物學風に負ふて居る。而してこの唯物的學風は如何にしてその基礎を作り得たるか。かく觀じ來れば、吾人はこゝに十九世紀中葉以前からのこの學風の源流を指摘して置くを頗る妥當と考へねばならぬ。

一體、近世の學問に二大流派がある、イギリス風とドイツ風とである。ドイツの學風はカント及び

その後繼者らの「我」を目的として之を內省する精神哲學を以て代表されて居る。これに對し、イギリス風は夙に十七世紀に於て、フランシス・ベーコンに始り、次にニュートン、更らにヒューム等を經て盛んとなりたる經驗學派である。このものは人間の感覺に依つて經驗するところを基礎とし、之を政治と道德の研究に及ぼし、一切經驗によりて人生の法則を立てゝ政治學倫理學等の學術を建設しやうとして居る。この學風は、十八世紀の中葉以來の產業革命の發展と相俟ちて、遂に功利說を生むに至つた。この功利主義（ユーティリタリアニズム）の思想家の代表者は、十九世紀の初期にベンザム（一八三二死）、中葉にジョン・スチュワート・ミル⑪（一八七三死）、後半にハーバート・スペンサ⑫（一九〇三死）がありて、いづれも世界に有名となつた。ベンザムは十八世紀末以來イギリスの進歩的思想の急先鋒となり、常に『最大多數者の最大幸福（グレーテスト・ハピネス・オブ・ゼ・グレーテスト・ナムバー）』を以て政治及び社會改良の標準とすべしと唱道し、實に近時功利學派の哲學の祖と稱せられた。彼の所謂最大多數といふは、いふまでもなく、當時市民卽ち資本家階級と封建的特權階級の對抗時代に相當して居る最大多數を意味し、卽ち方さに勃興しつゝある第三階に外ならなかつた。このベンザムが與へた標語及び之が指導する方針は、十九世紀のイギリスを影響する所實に大なるものがある。若し社會の原約（オリジナル・コントラクト）を高唱したルーソーが十九世紀のフランスを開き、純理批判の著者カントが十九世紀のドイツを作つたといへば、同じ意味に於て十九世紀のイギリスを創めたものはベンザムといへる。實に彼はイギリス市民の哲學の開山と稱すべきである。ベンザムの弟子にジェームス・ミルがある、彼は印度史を著はしたる經濟學者で、晚年東印度會社の重役となつた。ジョン・スチュワートはその子にして、若年から早く學才を現はし、哲學及び經濟を以て鳴り、一世の指導者となつた。スペンサは社會學を以て有名である。

近時の自然科學はその淵源を前記イギリス哲學に發するところの大なるは勿論であるが、この際、フランス人の功勞も亦た多とすべきものがある。十八世紀の巴里では當時天下の文明の中心を以てして、前述のニュートンやヒュームの學風を祖述したる學者相ついで現はれ、自然科學上では百科學風起り、又た經濟上では自然尊重說の現はれたるは、吾人の曾て瞥見したる所なるが、大革命時代の理性發揚期に入りて更らに幾多の學才輩出したのは吾人の刮目に價する。

當時、十八世紀の中葉、化學に於てはフロジストン⑨說起りて、從來行はれたるアラビヤの煉金術者流を壓倒し、凡そ物體の燃燒は、その內に內在するフロジストンと稱する氣が空中に飛び去るに由る、と解釋して居つた。然るにフランス人ラヴォワジェー⑩はこの謬見を打破して、燃燒は空中に酸素なるものがあつて、物體が之を取りて化合し、却て物體の重量を增すものであると證明し、つまり、酸化の原理を發見して今日の化學の基を開いた（『化學綱領』一七八九年）。彼は後、些細な理由で恐赫政治の

犧牲となつた一人て、實に大革命の亂暴の好例となつた。又た當時數學者にして天文學者ラプラース(77)現はれ、始めて星雲の說を唱へて太陽系の起源を決定し、これら游星の運轉に關する理論を進め、『フランスのニュートン』と稱せられた。彼はコンスル政治の初に登用されて一時その內務大臣てあつた。メートル法が始めて實施せらるゝことになつたのは、この學者の內相期てあつた(一八〇〇)。この法が本質的に科學的度量衡を定立したることはいふまてもない、而してこの制定は實に大革命時代を一貫せる科學的世界的精神の發現といふべきてある。又たこの頃、巴里人ゲイ・リュサック(82)は化學及び物理の研究を進め、ドイツの理學者アレクザンダ・フォン・フンボールト(83)と提携して水の組成を究め、また自ら風船に乘じてその時までの最大記錄(實に七〇一六米突)の高空に登りて、大氣及磁氣を觀測した(一八〇四)。同時代にイギリスにハンフリ・デーヴィ(79)あり、少時ラヴォワジェーの化學を讀み、感じて身を理學に委ね、早く麻醉瓦斯を發見公表し(一八〇〇)、また電氣化學を研究し、一八〇六年、英國ロイヤル・アカデミのために講演し、その學說はフランス學會に認められ、かねてナポレオンの設定せる學術賞三千フランを與へられた。時に英佛戰爭中てあつたに拘はらず、この事があつたのは以て當時の學界の美風を想はしめる。アメリカ人フルトン(84)が機械を好み、イギリス及びフランスに遊び、セーヌ河にて始めて蒸汽を以て舟を行つたのも、亦た同じくナポレオン帝國の時てあつた。今日世界人生

の幸福の一たるイギリスの醫ジェンナ(15)の種痘免疫の發明も亦た大革命時代にして、この法イギリスから漸次諸方に輸入せらる。その日本に傳へられしは恰もわが幕末なるは人の知る所てある。

95 專門技術の進步　物質文明の發展

凡そテクニックが文明の進步に缺くべからざる必要條件たるや、言を竢たない。之を古來の變遷に徵するに、大體三階段を經て居る。第一、希臘羅馬時代、その特徵は水道、道路、車輛、攻城機械に現はれて居た。第二、ルネーサンス時代、その强點は鐵砲及び火藥、羅針盤、印刷術に在つた。第三は卽ち十九世紀てある。これは蒸氣、電氣の各應用、道路殊に鐵道の布設を以て古來のテクニックを凌駕して居る。

鐵道の布設に先ちて輸入されたるマカダム式道路建築は、先づ十九世紀劈頭の最大テクニックとして指摘さるべきてある。これは申すまてもなく、スコットランドの技師マック・アダム(16)(一八三六死)の輸入に係る。羅馬帝國の末路以來、歐洲諸國の道路は概してそのまゝに放棄され、昔に比して破壞されて粗惡となりこそすれ、殆んどそれ以上に改良されなかつたが、今始めて羅馬時代以上に改良されたのは、マカダム式の輸入に依る。このもの諸國にも布及されて、歐洲の交通を便利にした。ついて、一八三〇　四〇年間の十年間に至つて、上述の十九世紀の三大發明ともいふべき技術が始めて交通に

活用されることゝなつた。卽ち、一八三〇年、リヴアプール・マンチェスタ[77]間の鐵道の開業を始とし、諸國之に倣ふた。ドイツにては一八三五年ニュルンベルグ・フュルト[78]間を嚆矢とし、これより十五年間に六千吉米突以上に延長した。その結果歐米の社會生活の大變化を來したことは吾人の想像以上であつた。試にエルザス州のストラスブルグからスウィスの入口たるバーゼルまでの交通につきて、時代によれる速力の變化を見よ、一五〇〇年の旅行は徒歩にて行き疲れて幾日を要すべきか不定であつた、一五五〇年、馬車馳せて八日間を要し、一六〇〇年郵便車完成して四日間、一八〇〇年急行車應用されて二日間と改善していつたが、一八四一年に至りては鐵道開通して二時間の汽車の旅行となつた(最近には若し飛行を利用せば果して幾分をも要せざるべきか)。第二は、一八三三年、ゲッチンゲン大學に於て數學者ガウス、物理學者ウェーベル[79]の兩敎授が敎室と觀測所との間に始めて架した電信である。第三は汽船の渡航の發達である、このもの最初は火輪によつて航行したが、一八三〇年代からスクルーが始り、一八三八年、汽船の遠洋航海確實となり、始めて歐米間の汽船連絡開通した。要するに千八百三十年代は十九世紀の交通革命の開始期であつたといへる。

當時は西歐の自由主義が滿風の帆をかけて發動しつゝある時代で、苟も知識ある中等社會といふ階級の勢力を高めることが、當時の最大目的であつた。彼等は上は爲政家の暴虐と、下は人民の亂暴とに對して、社會を安固にし、一切の政治上改革を以て法律上平等といふ狀態を確立するに努めた。又た學術の應用と工場の設備に依りて必要品を大量に生產し、社會の日常生活の改善と衣食住の安値を企て、一切政府の濫費とその干涉とを抑制し、政府を單に消極的機關に化し、公私ともに生活の自由放任主義を主張し、民間の自由契約と自由事業を奬勵した。かゝる努力の結果、日常生活の便宜俄かに增加し、例へば現今行はるゝ化學的燐寸は、一八三三年ヴィーンとダルムスタット[80]に於て同時に發明された。又た改良石油ランプの工夫されたのもそのころである。ついで、一八四〇年にはサー・ローランド・ヒル[81]の建議に基き、イギリスにて郵便法の改正行はれ、現今行はるゝ便利なる郵便制度(一片稅法)が開始せられた。是等の事實は、如上の交通革命の開始と相俟ちて、千八百三十年代は、最近の專門的技術史上、眞に維新の開闢期とこそ稱すべけれ。

これらのテクニックの進步及び應用は、如上の自由主義と相俟ち相助けて、千八百四十年代以後に入りて、社會の實生活に對して非常なる結果を齎らした。卽ちイギリスにては、穀物輸入稅及び航海律廢止し、自由貿易確立し、大陸にては、一八四八年の革命は勞働者の位置を改善してその自覺を高めた。かゝる際、恰も一八四八年カリフォルニヤ[82]に於て、ついで數年後濠洲に於て、各處饒なる黃金

の産地發見あり、之がために、世界の金産額は、千八百四十年代の十年間と次の十年間とを比するに、約四倍となつた。尙ほ、この黃金發見は一八九五年トランスヴァールに於けるそれまで、實に一大新時期を作つて居る。それは、アメリカ發見の翌年から、一八四〇年までの三百四十八年間の採取高が、合計四百六十四萬キログラムであるに對して、一八五一―八〇年の三十年間が、早くも五百六十萬キログラムを出して居ることを見て、直ちに首肯される。隨て、物價の暴騰を喚起したることもいふまでもない。何はともあれ、この黃金發見の直接人心に及ぼした影響は急激であつた。猶ほ十五六世紀に於ける東方の黃金國の話やペルー、メキシコの銀鑛の開掘と同じく、而も時代の交通の飛躍につれて一層急激に大に人心を刺戟し、恰もイギリス人の世界に於ける市場開放の運動と歐洲に於ける政治上社會上困難（例へばドイツに於ける反動の復歸、アイルランドの馬鈴薯飢饉の如き）と相俟ちて、西洋人の地球上に於ける移住を奬勵した。それで歐洲からの移民の數は、之を上述の同じ十年間づゝを比較するに、合衆國へは一倍半、濠洲へは八倍となつた、吾人は更らに進みて、一八五〇―六〇年間の世界交通の進捗を證明するため、同期間の兩端の年を相比するに、この間に世界最初の海底電線は先づドーヴァ海峽を渡り（一八五一）、ついで大西洋に沈設されて、イギリスを通じて大陸と新世界との交通を促がし、石炭の產額はこの間に殆んど二倍し、鐵道の延長は三倍以上の哩數となり、全世界の貿易額も亦た二倍となつて居る。これは、十九世紀中、他の如何なる十年期に於ても見る能はざる統計の飛躍にして、隨てこの十年間に於ける世界擴大の進歩が異常なるを示すに他ならぬ。

若し夫れこの十九世紀の中期の世界に於ける西力の彌蔓を、當時の歷史上事件を以て現實に說明せよとならば、吾人は同時代に於ける幾多の通商植民上大事變の進行を眼前に展開しうべきてある。イギリスの印度帝國の再造完成はこの時期ではないか。土民兵亂[23]の破裂及びその鎭壓（一八五七―五八）、英國東印度會社の特權の廢止、その代りにイギリス政府の印度直營、所謂、印度に於ける被治者の幸福增進を施政の理由として土著君主の沒收と西洋の文物利器の輸入とを斷行し、所謂ブリタニヤの平和を二億の土民に享受せしむることは、このころに始まる。同時に歐米諸國が支那帝國解放の運動を强行したのも亦たこの頃ではないか。就中ロルカ・アロー[24]號事件を機として英佛聯合軍の北京侵入（一八五七―六一）は尤も人目を惹いた。この際、ロシア人は極東に於て沿海州を橫領して、日本海上に傲慢なる名のウラジオストック[25]（東方を支配せよ）を創立した（一八六〇）。濠洲に於けるイギリス植民地がその國家組織の緖に就いたのもこの頃てある。之と同じくカナダては所謂そのドミニヨン憲法が制定された。フランス皇帝ナポレオン三世は既に後印度に於てコチン・チャイナ[26]を創立經營して居る。米國の西方擴張及び太平洋海岸開拓は勿論いふまでもない（次講98參照）。天惠豐かなる日本の文化國

が、その世界交通上重要なる位置を占めながら、ひとり桃源郷裡の夢を貪るを許されなかつたのは偶然てない。されば、わが開國は恰も一八五三―六五年に相當するてはないか。既にしてフランス人フ[27]ルヂナンド・レセップスはスウェズ運河開鑿に從事し、一八六九年を以てその開通式を擧げ、東西航路を短縮した。米大陸ては、同年、最初の太平洋岸に達する鐵道（オマハからサン・フランシスコま[28]て）を開通し、その三年前には太平洋海底電線が既に沈設されて居る。かくて全き地球上の交通ますく急速となりつゝある。

如上の世界の擴大が演じ出されつゝある間に、各國の國內人口の異同も亦た甚だ大なるものがあることを知つておかなければならぬ。その尤も著しきはいふまでもなく合衆國てある。こゝては、その國土の西方膨脹、人口の西方異動の速さ驚くべきものがある。南北戰役は之によつて激成され、この戰役の勝敗は如上の人口異動を決定した。卽ち自由勞働者が一切の膨脹したる大合衆國を占領することを是れてある。歐洲にても亦た人口異動太だ盛んてある。就中、石炭の豐富にして水力の利用のきく地方ては、その人口牽引力極めて旺盛てある。かくて一國內の都市人口と田舍人口との增加の懸隔次第に甚しく、その比差は次第に都市人口の優勝に歸しつゝある。その尤も著しきはイギリスてある。こゝては都市人口に對する田舍人口の比は一八五一年には既に四割九分てあつたが、一八六一年には四割五分五厘、一八七一年には四割三分二厘に減じつゝある。之を同時に於けるフランスに見るに、七割四分、七割一分、六割九分に漸減しつゝあつた。如上の歐米に於ける人口異動の現象は、他の語て言ひ換ふれば則ち都會の新設、都市人口の膨脹、世界的大都市の勃興を意味するのてあるのてある。倫敦は十九世紀の劈頭に百萬未滿てあつたが、三十年代には百七十萬となり、八十年代には既に四百萬を超過し、巴里は同じ期間に五十五萬から九十萬を經て二百四十萬に達するの大都となり、新興の世界市としては、伯林と新ヨルクとは各三十年代の始に僅かに二十萬を超えたばかりのものが、八十年代の末つ方には一躍して百五十萬に垂々たらんとす。

十九世紀中葉に於ける交通の進步、世界の擴大の發現の一は、世界博覽會の開始てある。その開始者は他てない、自由貿易の元祖、世界市場開放の唱首イギリス人てあつた。時は一八五一年　倫敦郊外の水晶宮に於て開會され、よくイギリス工業の名聲を世界の四方に傳へた。マンチェスタ派の自由主義者はこの成功を誇りて產業の世界と永久の平和との開始祭と見做し、自家の確信を堅すること少くはなかつた。之に倣ふて、早く引きつゞいて諸國に於て開會された。一八五三年新ヨルク、一八五五年巴里、一八六二年第二回倫敦、一八六七年第二回巴里、卽ち是れてある。かくの如くして、方さに始めて開國されつゝある日本の美術品も、巴里に於て展覽され、フランス工藝美術の趣味の發展に影

變するやうになつた。要するに、世界博覽會の開始は、十九世紀中期の時代傾向の發現にして、同時に之を促進する有力なる機會を作つたものである。

96　唯物的學風の隆盛　知識と信仰との衝突

吾人は既に唯物的學風の淵源を說き、これが、十九世紀中期に入ると共に、次第に進展の歩武を速め、同時に實地に應用せられ、國家社會、延いては世界の人類の利用厚生に資しつゝあるを看て來た。かくの如く統計の數字を以て直示し得る文明の大飛躍期に於て、唯物的科學の純知識も亦たその最高發展にあつて、如上の物質的文明の根底を形作つて居る。

吾人は先づマルサス(Malthus)の人口論から說かなければならぬ。彼はかのベンザム、ジェームス・ミルと同時代に現はれたイギリス經濟學者の一人である（一八三四死）。彼は當時恰も產業革命時代のイギリス經濟生活に現はれたる社會の弊害に鑑み、啓蒙學者等の信ずる社會の道德の進歩といふことを疑ひ、重商主義時代以來富國策の一となつて居る人口衆多主義(ポピュレーショニズム)を否定し、人口制限の必要にして自然なることを考へた。この考の根據とする材料は、人口增加率と生活材料增加率との比較に在つた。マルサスの調査によれば、人口は幾何學的級數を以て增加するも、食料の增加は僅かに算術的級數に止るといふのである。故に人口制限は必要である、而してこの制限は社會生活の困難の結果、罪惡と貧困とによりて行はる、是れ自然の配劑である、如何なる人爲を以てしても打勝つべからざる社會の必然であると。眞にこれ唯物的に器械的に社會を觀たものである。但しマルサスは、後、上述の罪惡(ヴァイス)と貧困(ポヴァーティ)との外に、更らに一個の制限要素を加へて自說を和げたばかりである。即ち道德的抑制(モラル・レストレイント)是れである。要するに、マルサスの『人口論』(プリンシプル・オブ・ポピュレーション)（一七九八、匿名初版、一八〇三、改版）は、產業革命の前期の產物たるアダム・スミスの著『富國策』に對立して、經濟學上社會學上一種の意義を有つて居る。富國策は富の哲學であつた。人口論は產業革命の後期、即ち十九世紀の前半に現はれたる一個の貧の哲學であつて、この重大なる社會問題に對する今後の議論の出發點となつて居る。

この人口に關する唯物的悲觀說は、十九世紀の中期に至つて大いに緩和されるやうになつた。それは唯物的學術の進歩及び應用、交通の進歩、並に世界の擴大に依る。この時、ドイツの應用化學の大家ユスツス・リービヒ(Liebig)は化學的食料品並に人工肥料を製して有名である。當時地球上未開地の開發と共に南方ロシアの穀物、南米の家畜、その他世界の天產物の利用盛んとなり、罐詰貯藏法と輸送法の進歩とによつて歐洲の食料大いに潤澤となり、人をしてマルサスの人口制限論の必ずしも憂ふるに足らざるを感ぜしめた。但し、この世紀の後半に入りて、人口制限論は種々の動機から再び起り、所謂新マ

ルサス主義となるべきてある。これにつきては後再び說く機會があらう。

フランスのオーギュスト・コント(31)（一八五七死）は一切の形而上學說を斥け、只だ經驗的知識のみを基礎としてその上に自然の理法を立て得べしと主張し、所謂實證主義（ポジチヴィスム）の哲學を組織した。このコントの哲學は現今の社會學なるもの、學術的基礎を準備したものてある。之と同じくベルギの學者ケトレー(32)（一八七五死）は自然現象を觀測し、統計を作り、因つて是等の知識を基礎とし之を人事の上に應用して人生の物理的法則を立てんと努めた。之と同時にイギリスのバックル(33)は一八五七年『英國文明史』を著はし、イギリスの文明を天然の影響によつて統計的に解釋せんとした。ドイツではローマンチック哲學の巨擘ヘーゲル(34)の死（一八三一）後、自然科學盛んとなりて精神哲學を壓倒した。ヘルムホルツ(35)はローベルト・マイエルの勢力保存說を大成し（一八四七）て有名となり、爾來物理に生理に數學に於て嶄然たる大家を成し、その死に至るまて（一八九四）唯物的學風の牛耳を執つた。スウェーデンのベルツェリウス(37)（一八四八死 既述のリービヒ（一八七三死）らが應用化學を進めて社會人生の利用厚生に資したのも、亦た同時代てあつた。又たドイツのブンゼン及びキルヒホフ(38)がスペクツルム鏡を發見して發光體のスペクツルム分解を創めて、ます〳〵人智の自信を增したのも、亦た千八百五十年代てあつた。

かくて十九世紀は、政治經濟上資本主義と自由主義との天地てある如く、知識上之と提携する新しい科學の世界てあつた。實にこのものは十九世紀の中期にその隆盛の絶頂點に上り、唯物的學風の殆んどひとり舞臺を作り出した。この學風は三個の方面に分解される。第一は實驗科學そのものゝ進步てある。第二は實驗科學が確立した理論及びその宣傳てある。是等の各方面の發達は人心をして從來定立せる宗教に對して少くとも冷淡ならしめたことは爭へない。しかのみならず、新得の知識は或は舊來の教會の教ゆる所の愚劣を嘲笑し、甚しきはその信仰を破壞することと少くはなかつた。これらの點に關して、尙ほ少しく解說を進めることは必ずしも無用てあるまい。

第一面は、既に述べたる所によりておのづから明かなるが如く、凡そ自然界の事物は上は天體から下は細菌に至るまて窮めつくされないものはない、といふ自信を根據として、萬物の靈長たる人間に關する事柄と雖も、すべて實驗科學的に、卽ち唯物的に取扱はれる。そこて生物學、生理學は勿論のこと、人種學、人類學、言語學、考古學、宗教學、心理學、社會學、統計學等の人事に關する新しい分科起り、それ〳〵の專門家が各自の專門分科に沒頭するは勿論、一般の人心にして是等の新科學に多少なりとも注意を奪はれないものはない。

第二面は卽ち科學の發明及び發見の實用應用てある。電氣に關しては、既に電信を見たが、今後早

く電話、電燈、電動力となるべきてある。また遂に無線電信が出來るてあらう。自動車、飛行機が出來やう。既に寫眞は、一八五一年ロンドンに於ける第一回世界大博覽會に於て、タルボト[39]によつて提供された。この技術の進歩と普及とは、やがて知識の穿鑿と民衆化とに貢獻する所大となるべきてある。やがて電氣版も、蓄音機も、活動寫眞も工夫されるてあらう。建築では、既に前記の博覽會で、鐵筋ガラス張の大構造作られた『水晶宮（クリスタル・パレース）』の名世界に轟いたが、やがて鐵筋コンクリート建築が出來やう。醫療には麻酔や消毒や、外科的手術大に進み、上水下水を始とし、衞生保健の工夫ます〳〵備はらんとする。應用化學としては、既述の肥料の人工及び食品の製造罐詰を始とし、アニリン色素の染方、コールタール、ゴムの産物の如き、いづれも實用の廣大なるものがある。かく科學の應用によりて、現世の幸福が無窮に增々擴大され得べしとの確信起り、人間の性質習慣すら外科的治療や科學的生殖竝に養育によつて矯正改良し得べしと考へられた。その極、唯物學派の一派からは、科學的の人類改良法は、宗教家の靈魂救治法よりも、より有功なりと思惟せらるゝに至るべきてある。ダルウィンの一族フランシス・ガルトン[40]（一九一一死）の主張せる優生學（ユーゼニックス）の如きその一例てある。

第三面は、卽ち是等の實驗科學の理論として進化論の確立及びその宣傳てある。吾人が既に94節、『唯物的學風の基礎』に於て引用したドイツ人アレクザンダ・フォン・フンボールト（一八五九死）は恰もマルサスと同時代の人てある。彼はヴィルヘルム・フォン・フンボールト[41]の弟、久しく巴里にも住み、世界的學者となつた。彼は諸國を旅行して博物地理を研究し、長き生涯を通じて自然現象の描寫とその理論の宣傳とに努め、就中晩年『世界（コスモス）』（一八四五―五八）を著はし、宇宙及び自然に關する知識と美感とを高唱し、自然科學趣味の普及に對する功勞頗る大なるものがあつた。やゝ遲くれて同時代に、イギリス人チャールス・ライエル[42]（一八七五死）は地質學の革命者として現はれて來た。彼は現代の地層變化の作用を觀察し、之を地球の過去に適用し、その地層の歴史を結論し、隨て人類の地球に現はれたるべき古さの五萬年以上なることを測定した（『地質學原理』一八三〇―三三、『人類の古さの地質學上證據』一八六三）。それて、同じ學派のものは或は十萬年以上とも推定するに至つて居る。畢竟、ライエル等の理論は、いはゞ地球の進化に基いて居るて居る。同じ進化を一切の生物の上に確立したるは、卽ちチャールス・ダーウィン[43]（一八八二死）、及びアルフレッド・ラッセル・ウォレース[44]（一九一三死）の二人とす。兩人は別々に獨立に研究して偶然に同一結論に到達して共同に進化論を作り上げんとす、以て時代の學風が、翕然として一定の方向に向つて熟し行きつゝあるを察すべきてある。ダルウィンはマルサスの人口論とライエルの地質學原理とに感動し、夙に人口論のうちに含まれたる人間の生存競爭の原理を、一切の生物の種の變化に適用し得べしと考へ、私かにこの考を書き下しておいた。既にし

で少壯のウォレース(44)は南洋に於ける研究旅行の途次、亦た偶マルサス人口論を思ひ起して、適者生存といふ同一結論に達し、之をダルウィンに報道した。是に於てダルウィンこれに力を得て始めて發表したるが、卽ち彼の有名なる『種の起源』（一八五九）である。この內に主張されたる進化の原理は、後ウォレースの著『自然淘汰論』によつて更らに敷延せられた。而して次代に於て一層進化論の宣傳の功を成したるものは、社會學者スペンサー及び生理學者ハックスレー(45)とす。兩者は、一はその通俗的綜合哲學を以て、他はその文質兩ながら具はれる筆を以て、いづれもよく世上を敎化した。

かくの如くして知識の側から信仰に對抗する戰鬪が進行した。その結果、バイブルの創世記に據つて、或る數千年前の昔、神なるものが、この世の創造と共に、一擧に自己の姿に形どりて最初の人間アダムを作つたと宣示して居る敎會は、眞向から打擊された。また、かくの如き人間の子孫が棲息することになつたこの世界は、神が造つた唯一の神の恩寵である、といふ定說に對して、十九世紀の新科學は各自の路を分つて進軍していはゞ眞理の簒奪者を合擊し、以て敎會の自己中心說を破壞した。この知識軍の成功はかの十六世紀のコペルニカスの天文學上發見以上であつたことは言ふまでもない。この打擊は實に十九世紀の中期に確立したといへる。當時、フランスではルナン(46)、ドイツではダヴィド・ストラウス(47)が、各耶蘇傳を著はし、キリスト敎々祖を自然界に於ける人間として評論し、これを神

祕奇蹟の迷雲から解放し、これに合理的歷史的位置を與へ、その結果、神學史上の新時期を開いた（ルナン一八六三年出版、ストラウス一八三五年初版、一八六四年改版）。換言せば、進化論からの敎會に對すると同じ打擊が、同時に精神界に屬する學者からも打ち下ろされたことは、これ亦た時代の知識的傾向の發現であつて吾人の刮目に價する。

それであるから、敎會と雖も、多かれ少かれ、時代の風潮に動かされて之に適應するの外なかつた。その內で、新敎會はその組織自由であるから、舊敎會よりもより早く科學的精神と推移し、舊敎會はその制度法皇の統一の下にあるから、之と調和することと困難遲鈍なるを免れなかつた。この點は、倘ほ次講に於て、國民的國家と法皇ピオ九世の下に於ける加特力敎會との關係を說くところがあるからそこで更らに幾分かの側面觀を受けることとてあらう。（103參照）

しかし、終りに一言、舊敎派のために知識上の公正を與へておかなければならぬ。法皇のうちにても自由主義に對して寬大なる人があつた。例へばピオ九世のすぐ後に出たレオ十三世（一八七八—一九〇三）の如きてある。彼はよく西歐の民主的精神を理解し、神學と進化論とは精神界と物質界とにそれ〳〵分屬するものてあるとして、進化論を寬大に取扱ひ、敎會の歷史や學術の研究を奬勵し、舊敎會內に於ける現代的傾向を馴致した。羅馬敎會に於ける現代派（モダニズム）こゝに起る（但し次の法皇ピオ十世保

守的にして之を禁壓した)。されば、舊教會からも、夙に二大自然學者出て、レオ十三世の時に榮えてその御世を飾つた。卽ち一はパスツール(一八九五死)である。彼はフランスの舊敎徒である、有機化學を改革し、バクテリヤを研究し、病理、傳染病、衞生、醱酵、蠶等に關する發明發見多かつた。巴里に於けるパスツール研究所の名は今日世界に轟いて居る。他はメンデル(一八八四死)である。彼はオーストリヤ人、律僧にして最後にモラヴィヤの都ブリュン市に於ける修道院長となつた。彼は院の庭園に於て實驗所を設け、動植物の遺傳を研究し、所謂メンデリズムの名を不朽に傳へて居る。いづれも、十九世紀中期の學風の所産である。

第二十一講　國民的國家の建設

97　自由主義及び國民主義の收獲期

人民の自由と國民の獨立との要求は、十九世紀の初期からその中期に至るまでの政治上主潮であつた。このものは、一八四八年の革命の結果が遂に失敗に了つたと共に、一八五一―五八年の間、一時下火となつた。歐洲の政治及び社會は宛がら再びメッテルニヒ時代の反動に復歸するかの如くに見えた。然るに、一八六〇年の近づくに從ひ、人民及び國民の聲が又もや次第に高まるやうになつて來た。この再興しつゝある運動は、從來のものゝ如くロマンチックの勝つたものでなく、以前よりもより多く現實的のものとなつて來た。卽ち、詩人の空想的思索や、豫言者の感傷的言論よりも、寧ろ政治家や實際家の指導する現實政策により多く支配されるやうになつて來た。換言せば、自由主義及び國民主義は十九世紀の中期までの事變の經驗と、思索の洗錬と、知識の發展とによりて、中期以後堅實となり、茲に始めて多大の成果を收めんとするのである。

殊に、今回は國民の權利要求が著しく頭角を露はして來たことは、尤も顯著なる世界的事實である。試みに、一八六〇年前後、卽ち恰も我が國の幕末維新に於ける國論沸騰期と同時代の世界を一瞥せよ。

吾人は、當時、數年間に亘りて、全世界に、到るところ何等かの形で國家及び社會の全き注意を惹くべき大運動があつて、それがいづれも國民問題を中心として居るのを發見するであらう。

その重なるものを列擧せんか、一八五八—六五年のルーマニヤ、一八五九—六一年及び一八七〇年のイタリヤ、一八六二年のギリシヤ（この年、國民的革命破裂し、翌年デンマルクの王子ジョルジ迎立せらる。この際イギリスは新君主のためにイオニヤ七嶋の保護權を放棄し、いはば一種の持參財產となさしめた、卽ち是れ一九一三年まで君臨すべきジョルジ一世である）、スカンヂナヴィヤに於けるノルウェー對スウェーデンの確執、一八六三—四年に於けるドイツ對デンマルクの抗爭、アイルランド對イギリス問題（一八六五年フェニヤ陰謀事件の破裂はその一面である）、マジヤール對オーストリヤ及びクロアート問題（一八六七年のアウスグライヒ協定）、スラーヴ民族間の獨立要求（一八六三年のポーランド叛亂はその一發現である）、更らに最も廣大且重要なるものとしては、ドイツ國民の統一問題、卽ち一八六四—六六年に於けるプロシヤ對オーストリヤの葛藤、次に一八七〇—一年に於けるプロシヤ對フランス戰役、是れである。吾人は是等の一々を窺ふの餘裕を有しない。只だ、その內、歐洲の中原の大勢に尤も關係深きドイツ及びイタリヤの各統一を中心として、以下の數節に於て概說を試みやうと思ふばかりである。要は、十九世紀の主潮が如何なる成果を結びたるかに存する。成果とは卽ち國民的國家の建設に他ならない。なほ之に連關して、羅馬法皇及びその敎會が、これ等の國民主義及び自由主義の勝利から、如何なる影響を蒙つたかといふことも亦た一瞥を要する。

以上の本目的に入るに先ちて、同時代に於ける新世界に於ける痛烈なる國民問題（一八六一—五年）が、吾人の注視を惹かざるを得ない。これは、米國特有の植民地的社會事情を基礎とするが故に、舊世界のそれらと同列に置きがたきものがあるけれど、國民組織の再造といふ意味に於ては、同一範疇に入れてもよからうと思ふから、劈頭に概說しておかう。

98　アメリカ合衆國の再造　メキシコ遠征

十九世紀に於ける最も偉大なる國家發展、最も長足の社會進步の實現された國土といへば、何人も先づ指をアメリカ合衆國に屈するに異議を夾むまい。吾人は既にこの建國の年尙ほ若き民主國家が、一八二三年、モンロー主義の發表に於て、早くも國民的自覺を示したことを記憶する。この國家が、その取り來つた急激の發展と尨大なる膨脹とを、千八百六十年代に至つて、再び整理し自ら改造して更らに一個の鞏固なる國民的國家の基礎を据えたことを、千八百六十年代に至つて、再び整理し自ら改造して

かくの如き歷史發展の場合の觀測には、特に統計上の指數を必要とする。吾人の概說は單に次の略表を掲げて自ら滿足しなければならない（十七講79參照）。

自一八〇〇アメリカ合衆國の土地人口膨脹略表
至一八六〇

年次	面積（百萬平方哩）	全人口（百萬人）	奴隷人口（百萬人）	州（ステート）	自由州	奴隷州
一八〇〇	〇、八五	五、五〇	〇、九〇	一六	八	八
一八三〇	二、〇〇	一三、〇〇	二、〇〇	二四	一二	一二
一八六〇	三、〇〇	三一、〇〇	四、〇〇	三三	一八	一五

しかし、右は單簡ながら、熟ら之を玩味し、且つ次の一覽と照らし合したならば、その間に深い意義が看取されやう。

一八六〇年に於ける合衆國南北の相異一覽

	面積（百萬平方哩）	人口（百萬人）	白人（百萬人）	奴隷人口（百萬人）	外國人	州	一平方哩四人以上の開度をなすもの	人口十萬以上の州	人口十萬以上の市	紡績工場數
北方州	*〇、八〇	一九、〇〇	一九、〇〇	少數	五、〇〇	一八	七	四	**八	九九
南方州	*〇、九〇	一二、〇〇	八、〇〇	四、〇〇	少數	一五	二	〇	***三	八

備考　＊この外に未だ州とならざる廣漠なる地方がある。＊＊新ヨルク（八十萬）、シカーゴ、フィラデルフィヤ、ブルクリン、ボストン、シンシンナヂ、バッファロ、及びニューアルク＊＊＊ポルヂモーア、ニュー・オルレアンス及び聖ルイス。——その內南北役の時南方に附きたるはニュー・オルレアンスの一市のみ。

卽ち、北方諸州は人口稠密、都市盛大、商工業及び海運を營み、隨つて保護貿易主義を主張し、之に反して、南方諸州は綿花煙草の大耕作に從事し、器具・日用品をイギリスに仰ぐが故に、自由貿易を利とした。北方の人民は通商貿易に營々役々して、自然、自分で政治上權力を掌握するに熱心でなかつた。居る。北方は自由勞働に生き、奴隷を排斥して居るも、南方は之を以て生活上不可缺ものとして

しかるに南方の住民は農業の利益薄きが故に、官職に就くことをば一個の處世の手段とし、且つ之に由りて南方の利益を謀るに努めた。例へば、建國以來この時まで七十二年間に於て、南北が大統領を占めたる年月の長短を比して見よ、北方は僅かに二十年間であるに、南方は五十二年間を占めて居る。北方は知識著しく發達し、大學の數も多く、既に幾多の人物を世界の知識界に寄與して居る。例へば文學者ワォシントン・アーヴィング（一八五九死）、歷史家バンクロフト（一八九一死）、詩人ロングフェロー（一八八二死）、哲學者にして詩人エマルスン（一八八二死）、の如きてある。然るに南方は知識上概して劣等てある。加ふるに、北方はどし〳〵歐洲から白人の移住を受け、人力財力竝に知力を充實してゆく傾向がある。要するに、北方は南方に比して進歩的で、開國進取的であつて、道德上ても、物質上ても、將た政治上ても、次第に勢力を增しつゝある。

如上の南北の思想及び利害の背馳は、合衆國建國當時の十三州それら自らの爾來の發達に現はれて

居るのみてない、合衆國の領土が更らに西方に擴大しゆくに隨ひて、是等の地方の發展から新に作らるべき州が南北いづれの傾向に從ふて組織さるべきか、といふ新しい問題の發生によつて、一層激烈となつて行つた。西方擴大の第一次は、卽ちナポレオンから購入したイスパニア領ルイジアナ、卽ち概していはゞミシシッピ河畔の廣大なる地域てあつた。南方は最初から人口稀薄て、その上北方ほどに增加しないから、下院に於て代議士の數を北方ほど增し得ない、兎角勢力を失ふ虞れがある、因てこれを上院に於て償はんと欲し、新開地方に於ける奴隷州の增設を主張した。この爭は、一旦一八二〇年ミスーリ妥協となる。卽ちミスーリはこゝに奴隷州として合衆國の一員となる。これは第二十四の州に相當し、以て自由奴隷各十二州となるべきてある。但し今後はミシシッピ河以西に於て新に州を組織する場合には、ミスーリ州の南の境を劃する緯度(北緯三十六度三十分)を以て南北に分ち、それ以北に於て奴隷制度を許さないといふのてある。

これて奴隷問題は一時下火となり、南北は他の重要問題、卽ち關稅の設定は自由主義若くば保護主義のいづれによるべきやて、互に數年間鎬を削つた。これが幸に妥協されると、この次は、千八百三十年代の半ば以後、再び奴隷問題喧しくなり、これが嵩じて一八六〇年前後に於て南北分離して開戰狀態に入るべきてある。

これは合衆國の更らに西方に擴大發展しつゝあることゝ相依るのてある。卽ちメキシコ共和國からテキサス③地方の合併を手始めとし、更らにカリフォルニヤ及び新メキシコ⑭を割讓せしめ、その結果、合衆國の版圖は、イギリスとの間にオレゴン⑤協商で北緯四十九度の境の確定したると相俟ちて、北はヴァンクーバの沖合から南は下カルフォルニヤ境まて、大平洋岸に達したからてある。殊に、前記メキシコからの割地條約批准交換に先つこと三個月、一八四八年、新領土カリフォルニヤに於て、幸にも豐饒なる沙金の發見せられ、且つその地農業に適し　また太平洋通商の基點たり得るが故に、北方の人民及び外國からの移住民爭ふて西へ西へと突進した。而して當時は恰も鐵道大布設の時期に相當し、また、太平洋交通の飛躍期もこの頃てあることは記憶に價する。以上の發展が一層南北の爭を煽つたことは想像に餘ある。

時の大統領はカリフォルニヤを無條件の自由州とした。そこて南方太だ不平てあつた。が、この不平を緩和するため、嚴重なる奴隷逃亡取締法⑤が通過され、またミスーリ河の西岸、北緯三十七度以北に於て、カンサス及びネブラスカの二個のテリトリを作り、將來州(ステート)に編入される場合、各自の任意の制度を採らしむべしといふ妥協が出來た。しかし、これはかのミスーリ妥協に矛盾する。また、この奴隷逃亡取締法が非常に嚴酷不人情を極めたものてあつて、北方人士の感情を害すること夥しかつた。

女流小說家ビーチヤ・ストウの有名なる『アンクル・トムス・キャビン』⑦が現はれて、奴隷虐待の慘狀を描き、輿論の同情を促進したのは、恰もこの頃（一八五二年）である。南方を根據とする民主黨（デモクラット）の內にさへ、奴隷廢止を主張し、カンサス・ネブラカ案に反對するもの現はれて自ら獨立派を作るに至つたから、差しあたり、カンサスの土地は南北から移住爭奪の目的となり、一八五五―六一年間全く內亂狀態に陷つたのである。

この危機に際し、一八六〇年の秋の大統領選擧はエブラハム・リンカーン⑧を選出した。彼はミシシッピ河畔イリノイズ州貧家の出身、幾多の米國人物の如く、勤勉力行して偉大となりたる所謂自成（セルフメード）の人にして、剛毅にして常識に富み、思想穩健、融通の利く人物であつたが故に、先輩を凌ぎて共和黨の候補者に擧げられた。彼の當選を合圖として、南方では南カロライナ⑩先づ分離を議決し、翌年二月一日までの內に七州の分離を見た。但しその後更らに南方の四州が加盟して、合計十一州自らアメリヤ聯邦（コンフエデレート・ステーツ）と稱し、自分の大統領としてジェッフェルスン・ダーヴィス⑪を選立した。

三月四日リンカーン就職するや、彼は奴隷問題を第二とし、重きを合衆國（ユニオン）家に置き、『ユニヨンは憲法（コンスチチューション）より も 古 い』と叫び、單個の州自らの決議によつて破壞さるべきものでない、これは根本的永久的性質の組織である、自分はこのものから委任されたる大權の執行に怠るものでないと宣言した。

リンカーンは直ちに南方海岸封鎖を實行せしめ、開戰から三年のうちに、遂にこの目的を達した。この間、英佛兩國が南方を暗助したことは、公然の祕密であつた。殊にイギリスは通商關係から、常に好を南方に通じ、脫走船舶及びその乘組員の大多數を之に供給し、且つ自らも私に艦船を浮べて、南方のために掠奪及び封鎖破りを行ふた。アラバマ號⑫は卽ちその一であつた。されば、南北戰役後、英米兩國間の感情穩かならず、一八七一―二年ゼネヴアに於ける仲裁となり、イギリスが中立國たる義務を怠つたとて償金を支拂ふことになりて、事始めて已む。卽ちアラバマ事件是れである。

さて陸上では、最初は南北ともに常備軍がないから、双方とも新に軍隊の組織訓練に著手した。そして開戰のはじめ、南方優勢であつたが、時と共に北方の强味が現はれて來た。それは、北方が白人口及び財力に富みて、地力の充實して居つたこと、北方の將軍グラント⑬の軍隊組織及び作戰計畫のよろしきを得たること、外國からの移住民、就中ドイツ人が北方に服役したること、道德上に於て北方には正義の確信が强かつたこと、最後に、大統領リンカーンの善く戰爭の目的に適合したる政治を施したること、就中、一八六三年一月一日を期して一切叛亂中の諸州に於ける奴隷を解放するといふ命令を發したるが如きである。それに既述の海上封鎖の功も加はつて、一八六五年春、南方の首府となつて居るリッチモンド⑭も陷りて、亂遂に平いだ。

リンカーンは再選され、戰亂終結の年の春、第二期大統領に就職したが、間もなく暗殺された。されど大勢は既に決し、北方を標準として南方を調和すべく進行した。やがて、憲法の改正があつて、奴隷制度は全然絶滅された。これて合衆國が再造され、自由勞働と保護貿易とを國是とする國民的共和國其礎が築き上げられたのてある。

この足掛け五年に亘る內亂、及びその鎭定が世界に及ぼしたる影響は今一々說く遑がない。只だ一つ、歐洲の當時覇を稱して居る強國との關係は、之を逸することが出來ない、卽ちフランス人の第二帝國が、自らラテン民族のチャンピオンとなつて、メキシコ遠征を試みた事件てある。

メキシコは、イスパニヤから獨立以來間もなく共和國となつたが、黨爭激烈にして內亂殆んど常に絕えない、外は合衆國から土地を割取され、內は財政紊亂し　之がため歐洲の資本家にして損害を被れるもの少くはない。それて、イギリス、フランス、イスパニヤの三國は單に共同の損害賠償要求のために、一八六一年の冬、共同に兵をメキシコに送つた。然るに、この時ナポレオン三世の野心が現はれた。彼は最近にフランスの驚幟が北京城頭に翻されたるが如く、メキシコに對しても天晴の功業を立てばやと欲した。恰も合衆國が南北分爭中てあることは何よりの機會てあつた。そこて皇帝は南方に同情し、その分離獨立を豫期した。彼はこの虛に乘じて、大西洋外に於て、ゲルマニ種に對して、一大ラテン同盟を作り、之をフランス人の帝國の下に置かんと豫想した。これは吾人が後節に於て見んとするが如く、バルカン半嶋やイタリヤに於て、彼が扶植を試みて居る同じ民族乃至國民主義をば、大仕掛に新世界に於て適用せんとするものてあつた。

運動から脫退した。フランス軍は單獨に進軍してメキシコの高原に入り、一八六三年の中葉に首府を占領し、こゝに假帝國政府を建てた。ナポレオンはオーストリヤ皇帝の弟マキシミリヤン公(15)を誘ふて往きて新帝國の冠を取らしめた。メキシコの共和黨は之に反抗し、マキシミリヤン苦戰した。かゝる間に南北戰役はナポレオンの豫期に反して、北方の全勝に歸した。この國民統一の政府は、こゝにかのモンロー主義の趣意に據り、フランスのメキシコ干涉に反對して強硬に抗議した。ナポレオン之より以後遠征に不熱心となり、遂にフランス軍をメキシコから撤退せしめた。ローマンチックな憐れなるメキシコ皇帝はその運命のまゝに見殺しにされた、卽ち共和黨が捕へて銃刑に處したのてある。(一八六七年六月)。

時は第二回巴里世界博覽會開會し、歐米の王侯將相來會し、ナポレオン帝國が最後の外觀を張つて居る最中、如上の悲報は事後二週間ならずして、恰も博覽會賞牌授與式の日(七月一日)に到著し、フランスの光榮を汚損すること少くはなかつた。この急速の通信は新ヨルクからの海底電線の功てある、

以て當時世界交通の一變し、諸國の相互關係の促進し來れるを想ふべきである。

99　イタリヤの統一

吾人の概觀は再び舊世界の本舞臺に歸らなければならぬ。こゝにては國民運動の最大奬勵者は誰あらう、第二帝國の主人公ナポレオン三世その人であつた。

彼は偉大なる叔父滅落後、少壯の時を流離變轉のうちに送りたる際、一八三一年イタリヤのカルボナリ⑯運動と因緣を結んで居る。それて、一旦フランスの權力を掌握してからは、一層イタリヤ人の獨立を助成すべき德義上義務を負はなければならなかつた。彼は今や最近にはクリミヤ戰役を實行して、**自由主義のために氣を吐き、武勳赫々**、列國會議を巴里に催うし、帝國の光榮を耀かし、さながら歐洲の支配者たるかの觀がある。かくて莊麗なるチュイルリ宮庭の九重の雲にかくれて、昔日感輙不遇の時に於ける國民運動に對する熱心は漸やく冷却したかのやうに見えた。一八五八年一月、皇帝夫妻駕をオペラに驅る、イタリヤの愛國者爆彈を投ず、死傷多し、而も玉體全く無事であつた。暗殺は失敗し下手人は遂に刑せられたが、而もその目的は奇妙にもこの年内に達せられることになつた。

そは間もなく二個の事件に現はれた、一は、巴里に於て無名て、『ナポレオン三世とルーマニヤ問題』と題する一小冊子が公けにされたことてある。これには、凡そ國民の發展は文明の進歩に缺くべからざる必要條件てあるから、ルーマニヤ、マジヤール、イタリヤの三國民は各獨立の權あり、隨つて是等三者を束縛するオーストリヤは最も進歩に遲れたる國家てあると、論斷されて居る。

このフランス皇帝の國民主義鼓吹は、彼の次に述べんとするイタリヤのための直接行動と相俟ちて、ルーマニヤ人を奬勵し、一八五九年二月、自ら統一の君公（由來その地ワラーキヤとモルダウイヤトとの二州から成る）を選立せしめた。尙ほ、統一を固くするために、一八六六年、外國から、ホーヘンツォルレルン家のチャールを迎立す、卽ち現今のルーマニヤ王家の祖である。

第二の事件は、この夏、フランス東部のブロンビエール⑰溫泉場て、皇帝がサルヂニヤ首相カヴール⑱伯と會見したことてある。會談の內容は祕せられて居るが、何が目的てあつたかは事後の經過が有力に物語るべきてある。

翌年一月新年、皇帝拜賀の日から早々兩國はオーストリヤに對して急に外交を開始し、ついて同盟してオーストリヤと開戰し、マゼンタ、次にソルフェリノ⑲（各六月）に於て之を破つた。幾ばくもなくヴィラフランカの和成り（七月）、オーストリヤはロンバーヂアの最大部分をサルヂニヤに割讓した。この講和は固よりカヴールの意てない、否な彼とナポレオンとの間の默契を滿足さして居ない。その條件が實際ウェネチヤを尙ほオーストリヤに保たしめ、その上、殘れるイタリヤ諸獨立部の現狀維持

を規定して居るからである。

然らば、何故にナポレオンはかくの如き不滿足な講和を急いだか。それは次の如くである。一は、彼自らが大ナポレオンの如き敢爲な武將たる冷酷の資質を缺き、ソルフェリノの損害の莫大に驚いたこと。他は、この戰捷後、イタリヤ有志家の統一運動急激となり、法皇の敎會（スプート・オブ・セヤーサ）國の北部（ボロニヤ）はその手に落ち、羅馬竝に法皇そのものすら或は危からんとして居る、苟も加特力フランス及び帝國的フランスの代表者としてのナポレオンたるものは、この危機に起つた自國の人心の激昂を顧慮しなければならなかつたこと。更らに重大なのは、ソルフェリノの決戰以後、ドイツに於ても、國際の均勢破壞を恐れ、單に舊敎的パヴァリヤ王國が法皇及びオーストリヤに同情したばかりでなく、新敎的プロシヤすら、外來の危險に備ふべく、ライン河畔へ展望隊を急派し、『ラインの境界はポー河畔に於て防備されなければならぬ』との輿論起り、北イタリヤの戰場及び變動に熱心に注意したこと。如上の事情がナポレオンを動かしたからである。さすがの皇帝も因て大に煩悶し、如上のイタリヤ人を滿足し得ない、自分自らも必ずしも名譽とし得ない講和を急がなければならなかつた。彼の國際界に於ける威信はソルフェリノの戰勝の瞬間を絕頂點とすべきは論を俟たない。

カヴール憤懣辭職した。されども彼の志をつぐ者イタリヤの諸方に於て運動し、統一の大勢避くべからず。ナポレオン今はこれを已むを得ずとし再び一八六〇年一月よりサルデニヤと提携妥協した。カヴール乃ち復職した。その結果、イタリヤの諸國自ら一般人民投票に依りてサルデニヤに合併し、サルデニヤ王國の一部たるサヴォイとニッザ[20]は同やうにフランス合併に決した。而してシシリヤ・ナポリ王國に對しては、ガリバルヂの義勇赤襯隊往きてこれを征服し、この征服地またサルデニヤ王國に收められた。かくて羅馬とヴェネチヤとの二國の外は悉くサルデニヤ國王ヴィクトル・エマニュエル[21]に附きて、イタリヤ王國と號し、かの一八四八年のサルデニヤ憲法は直ちにイタリヤ王國の憲法となつた。

カヴールは以上の大勢定りたる時、過勞の結果俄かに病歿した。猶ほマッジニが統一の豫言者、ガリバルヂが統一の武將であつたが如きてある。マッジニ及びガリバルヂは、この際、共和主義による統一の成らざることを憤つた。それてあるから、新王國政府はフランスと妥協して、一範圍の不完全なることを憤つた。

『統一國家（ナショナリテ）』の著者ダンテの誕生六百年忌に相當するこの年、詩人の故郷フロレンスに遷都するに決し、この年、一八六四年、恰もイタリヤ國民的詩人、かの幾分か國民の不滿を和げた。

殘れるヴェネチヤは、一八六六年、王國の同盟プロシヤがオーストリヤを擊破した時、羅馬は、一八七〇年、ナポレオンがプロシヤに滅ぼされて彼の守備隊が引き揚げた時、おの〳〵王國に合併され、

王國政府は永久の都に還り、クイリナル[24]宮に居り、ヴァチカノに立籠れる法皇と相對立することゝなつた。

しかし、なほイタリヤ人はオーストリヤ領トレント[25]中とトリエスト[26]海岸方面とに住して居る。イタリヤ愛國者はこれらを『イタリヤ未だ恢復(イルレデンタ)せらざる[25]』ものとして將來國民運動の目標として居る。

100　ブロシヤの維新(ノイエーラ)　ビスマルクの入閣

ブロシヤが、メッテルニヒの後塵を拜したるに拘はらず、經濟上交通上ドイツ統一に成功しつゝあつたことは注意すべきである。卽ち、かの大ナポレオンが破壞し去つた自國の領土を、新得のそれと共に整理し、一切領内の障壁を撤して關稅統一を計畫し、これを領内に介在し又は隣接する諸國にも及ぼして、著々成功し、十九世紀の中葉には、既にオーストリヤを除きたる殆んど一切のドイツの國土は、ブロシヤの下に、關稅同盟に加入して居ることとである。この成功は、ブロシヤがヴィーン會議にも、一八四八年の好機にも、政治上失敗してドイツ自由派の失望を買ふたに拘はらず、當時の人心のせめてもの滿足とする所であつた。ブロシヤは一八五一年オルミュッツ[28]の屈辱以後、再び反動に陷つたが、一八五九年を以てかの神祕的君主主義の國王フリードリヒ・ヴィルヘルムの代りに、その弟にして人望ある自由戰役以來の老軍人ヴィルヘルムの御世に入つた。世人は之をブロシヤの維新の始として歡迎した。

然るに、時恰もイタリヤ統一戰役に際し、國際界著しく興奮して居る。新君主は一八四八年の失敗をブロシヤの兵力の缺乏に歸し、陸軍大臣ローン[27]の建策に基き、軍備擴張案を提出した、議會はイギリス風の憲法主義によりこれを以て軍國專制の端と見做して激しく反對した。解散相つぎ、民間は『維新』に失望した。この憲法上紛爭には三種の解決が豫想された。一は、かの清敎革命の如く議會の全勝、君主の敗亡である。次は、ナポレオン一世乃至三世の如く政府のクー・デ・ター斷行である。更らに第三は、一七九二年のフランスの如く外國戰爭を開きて内部の紛擾を他に轉ずること、是れである。この危機に巴里駐在公使オットー・フォン・ビスマルク[22]急に召されて入閣した。彼は錚々たる貴族(ユンケル)派を以て目されて居る。時人は如上の第一若くば第二の不幸が齎らさるゝにあらずやと恐れた。しかし、これは遂に杞憂に屬すべきである。却て眞の『維新』はこの新人物の入閣に始つたことが後で思ひ知られる。何となれば、彼はこゝに從來のブロシヤの傳統的内治外交策を一變してドイツ問題解決の端を發したからである。

彼の考によれば、ブロシヤは、由來、ドイツの中小國に於て流行する感情的自由主義を畏敬し、之を自己の國内にも採用し、外に向つては、君主の正統主義に固著し、オーストリヤ及びドイツ諸國に

對して保守萎縮の態度を執つて來た、是れ誤つて居る。プロシヤはドイツ統一といふ使命のために、この目的に向つて大膽率直に現實的に邁進するを要す。卽ち、內に於てはホーエンツォルレルン家の君主權を固め、外に向つては全然自由放膽なる政策を行ひ、大目的のためには、鐵血によつて多少の君主を犧牲に供するを辭しない、といふ覺悟なかるべからず。ビスマルクは以上の理由に基き、入閣の初、プロシヤ議會の豫算委員會に臨みて胸襟を開き之に說いていふ、わがプロシヤの重きを成す所以はその自由主義に在るにあらず、その實力に存するなりとて、一八四八年の殷鑑遠からざるを諷した。しかし、當時彼に對する貴族的保守武斷の疑尙ほ深くして、議員等にはビスマルクからの和衷協同の希望を容るゝの雅量がなかつた。外に對しては、この時、ドイツ諸君主フランクフルトに於て會議しつゝあつたから、ビスマルクは一個の聲明を發表していふ、凡そドイツの國事は、かの一八四八年の國民議會の如く、直接普通選擧法によつて全國の國民を代表して居る議會が成立してこそ、始めて委託さるべきなれ、諸君主猥りに之を私するの權利を有しないと。世人は大いに驚いた。畢竟、彼の立脚點は感情的自由主義にあらず、國民の自由主義にある、而してこの主義を確立するには、ホーエンツォルレルン家の君主權を鞏固にしなければならぬ、といふに在つた。彼はこの當時獨得の立場から、議會が協贊を拒むて居るのを無視して、陸軍擴張案を實行して將來の危機に備へ、歐洲に對しては列强間の國際條約を基礎とし、必要に際しては之と協商し、以て良好なる國際關係を作り、一朝ドイツに事起りたる曉、毫も干涉の口實を如何なる列强にも與へざらしむるに苦心した。例へば、彼の入閣の翌年、一八六三年、ポーランド叛亂破裂するや、彼は直ちにロシアと協商して之が鎭定を促進完成し、爾來ロシヤをしてプロシヤを德とし、ビスマルクのドイツ問題の料理中、之に容喙せしめなかつたが如きである。

101 シュレスウィヒ・ホルスタイン問題の解決　普墺戰役

如上のビスマルクの政見が實地に試みられるべき最善の機會は間もなく現はれた、それはシュレスウィヒ・ホルスタイン問題の再燃である。

この問題は、かの一八四八年以來の紛擾の善後として一八五二年列强の間に倫敦協定書が出來て、次の如く妥協されて居る、曰く、兩姉妹公國は永久に獨立し而も永久に相分つべからず、曰く、デンマルク王家の一切の所領は保全せらるべし、曰く、最後の男統君主フリードリヒ七世百歲の後、一切の所領はその最近女統たるグリュックスブルグ[23]家に傳へらる、最近男統相續者アウグステンブルグ[24]家のクリスチヤンは權利を放棄す、といふのである。然るに、このクリスチヤンの子たるフリードリヒ・フォン・アウグステンブルグはこの協定書に記名して居ない、彼はドイツの相續を支配すべきサリック法に

據り、當然兩公國を要求し得べきてあつた。而してデンマルクの國民黨は彼等固有の國民主義により、最後の男統君主の永眠に先ちて、シュレスウィヒ合併の宿志を達せんと欲した。彼等はプロシヤが憲法上紛爭に惱み、ドイツ聯邦の因循姑息にして爲すなきに乘じ、こゝにシュレスウィヒ合併の新統一憲法案をデンマルク議會に提出議決せしめた。その際、フリードリヒ七世は批準に先ちて崩じ（十一月）、かの議定書に基きクリスチヤン・フォン・グリュックスブルグ立ちてクリスチヤン九世と稱し、一切王家の領地を相續した。國民黨は新君主に迫り急に新法を批準發布し、ホルスタインには別に一個の憲法を與へしめた。ドイツの愛國者及び聯邦の多數は、クリスチヤン九世の兩公國相續をドイツ相續法違反として之に反對し、アウグステンブルグ家の權利を主張した。この時、ドイツ輿論大に高まり、一八四八年以來の激昂を示した。彼等の目的は兩公國をデンマルク王家から分離獨立さし、アウグステンブルグ家の下に、之を一個の纏つた姉妹公國として聯邦の一に加へるに在つた。

ビスマルクは冷靜に理非と利害を考量した。彼は相續問題に重を措かない、尙ほまたドイツ聯邦に一個の小邦を加ふることにも極めて冷淡てあつた。彼は列强の協定を一切の基礎とし、相續問題とドイツ問題とを區別し、相續につきてはクリスチヤン九世の兩公國に君臨することを承認し、而もドイツの利害につきては、シュレスウィヒとホルスタインとが分離されたることは當にホルスタイン公國の損害てあるのみならず、實にシュレスウィヒに於けるドイツ人の損害てあるから、この點につきてデンマルク政府に抗議すべしとした。聯邦會議の多數及び一切ドイツ諸國に於ける自由派（プロシヤ議會も）はこのビスマルクの態度を以て非愛國的とし、盛んに之を攻擊したけれども、ビスマルクは固く自說を持して、而も容易にオーストリヤを拉し得た。何となれば、この國はかの協定書の調印者にして人民的君主の排斥者てあつて、この場合には自繩自縛の有樣に陷つて居るからてある。ビスマルクは悠然聯邦との關係を離れて、歐洲列强としての普墺兩國の聯合を催うし、兩國の名に於てデンマルクに向つて、單にシュレスウィヒ合併の憲法取消を要求した。デンマルクは果してドイツの輿論のビスマルクに對する反對と、列强の己を保護すべきことゝを恃みとして、要求を斥けた。兩强乃ちデンマルクに宣戰し、容易に之を擊破屈服した。列强は敢て干涉し得なかつたのてある。戰爭は條約を破棄した。されば、シュレスウィヒ・ホルスタイン公國は割讓された。換言せば、兩公國は、之をデンマルク王家に保全さすといふ國際條約を外交の出發點として來たプロシヤとその同盟オーストリヤとの共同所有に歸した。實はオーストリヤはプロシヤに引きづられたばかりてある。

是れビスマルク外交の勝利てあつた。加ふるに、兩公國のその統治の方法につきて兩强忽ち意見を異にした、何となればこの共有地は兩强に對して同一の價値を有するものてない、プロシヤはこの所

有を重大視し、自家のドイツ統一の目的のために、こゝにプロシヤ風の統治を布かんと欲し、オーストリヤはこの北方に偏在する地方を、プロシヤの專制に任かさんよりは、寧ろ之を放棄してその代りにシレジヤを恢復するか、若くばドイツの輿論に從ひて、之をかの人民的君主に與へて自己に好都合なる一聯邦員を作るに如かずと考へたからである。かくの如くして、いはゞ二人共謀强奪した土地の同じ舞臺で、早くも因果な夫婦の喧嘩が始まつたのである。即ち、いや〳〵共犯者となつたオーストリヤは間もなくこの共同生活から追拂はれなければならない、といふ悲劇的運命を有つて居る。

そも〳〵この爭の根柢には、ドイツ國家問題に關する兩强の歷史的利害衝突が橫はつて居る。即ち、比較的にいはゞ、非ドイツ的老大國とドイツ的强國との對抗であつて、多年この抗爭に惱みつゝあつたドイツ國民は、今いづれに適從して、如何なる國家を建設すべきかといふ一大危機に臨みつゝあるのである。プロシヤはこれに解答を與へて、非ドイツ的利害を有するオーストリヤがドイツに重きを成す間は、國民はその實力相當の勢力を歐洲國際界に發揮することが出來ない、却て兩强の間に介在する第三ドイツは偶漁父の利を得て、或は私曲を行ひ、或は外國の用をなすかも知れない、それはナポレオン時代に演ぜられた醜態が證明して居る、是れ最もドイツ的强國たるプロシヤの忍ぶ能はざる所である、といつて居る。

イタリヤに於て最近に興つた王國政府も、亦たプロシヤと同樣なる言ひがゝりを、オーストリヤに提出し得る深い理由を有して居る。

さればシュレスタイン・ホルスタン統治問題の爭の嵩じゆくや、一八六六年春、プロシヤ、イタリヤ間の攻守同盟成立し、各自にオーストリヤ排除を目的とした。その夏開戰となつた。ドイツは二つに分れた、その中國の多數はオーストリヤに附いた。イタリヤも同時に起つた。しかし、一切局面はドイツ兩强の主力のボヘミヤに於けるケーニグスグレーツ(31)（サドヴァ）での衝突によつて決定された。オーストリヤ和を求め、ビスマルクは單に歐洲國際間に於ける當座の政治上目的の達成のみにて滿足し早く之を許した。この役僅かに七週日に亘つて多年のドイツ問題を解いた、因て之を七週間役又はドイツ役ともいふ。解決の要目は左の通りである。

オーストリヤはドイツ聯邦から退き、ドイツの處分をプロシヤに一任す。而してシュレスウィヒ・ホルスタインをプロシヤに與ふ。イタリヤては之と同じくヴェネチヤはイタリヤ王國に割かれた。

プロシヤは北ドイツの四個國を合併した、即ちハノヴァ王國、ヘッセ選擧公國（カッセルを都とするもの）、ナッサウ公國(32)、フランクフルト市これてある。サクソニ王國及び南ドイツ諸國は釋された。

プロシヤは北ドイツ諸國と共に一個の聯邦を作り、プロシヤ國王永久にその盟主となり、自己の大

臣中より任命する一人を通ほして聯邦の政治を行ふ、卽ち宰相（チャンセロル）である。ビスマルク之に任ぜらる。立法部は二院から成り、上院は聯邦諸政府の代議員から組織し、下院はさきにビスマルクが聲明したるが如く、國民の普通選擧による代議士から成る。聯邦各國は各自の司法、警察、財政、宗教、教育を行ひ、軍備、外交、通商、交通の事は之を中央政府に一任し、是等に要する費用は關稅の收入と各國の醵金とに依り、豫算を作りて之を支辨す。この憲法はやがて南ドイツに及ぼされてドイツ帝國の根本法となるべきてある。

なほ、オーストリヤは、かくの如くドイツから排除されたから、翌年、皇帝が國王として個人的に聯有するハンガリ王國と妥協を遂げて『協定（アウスグライヒ）』[33]を作り、オーストリ・ハンガリてふ二重聯立國家を建設して自ら鞏固となつた。オーストリヤの憲法生活こゝに始る。

以上はドイツ戰役の結果てある。赫々たる戰捷はプロシヤ議會の憲法上反抗を和げ、この反抗の中心たる進歩黨は多數を失ひ、その代りにビスマルクを援助する自由派起る。之を國民自由黨（ナショナルリベラル）と稱す。

102　普佛戰役（ドイツ統一役）

一八六六年のドイツ戰役がドイツ問題を解決したといふのは、それは只だドイツ內に於ける決定だけてある。同じ問題を歐洲に於て解決したのは、次の一八七〇―七一年の普佛戰役てある。これはその期間によつて七月戰役とも、その意義によつてドイツ統一役とも呼ばれて居る。前者はビスマルク統一事業の序幕に過ぎなかつたけれども、彼の外交的公生涯の開始にして而も最も困難なる事件且つ最も立派なる外交勝利てあつたが故に、私は之を幾分か詳しく委曲に入つて描寫したのてある。今本戰役は既に世人の尤もよく知れる所てあるから、大いに省略して要點だけを話してみやうと思ふ。

クリミヤ役て威名を揭げたナポレオン三世はソルフェリノ戰役以後、吾人の暗示した如く、國際界の信用を失ひ始めた。爾來、彼の派遣したメキシコ遠征は世界の面前て失敗に了り、シュレスウィヒ・ホルスタイン事件竝にドイツ戰役の危機にも、彼は無爲に過ぎ、ケーニヒグレーツの打擊を傍觀してプロシヤをして北ドイツ聯邦を作らしめ、間接にナポレオン帝國の威名を傷けた。それて、ルイ十四世以來、フランス人が二百年間大陸に於て享有した何物か偉大なるもの俄かに去つてドイツに移らんとする趨があつた。夫ナポレオンの威名を繼いて居る者、及びその國人は、衷心七週間戰役の變化の急激なるに驚かなければならなかつた。フランス人の間から、『サドヴァて破られたのはフランスてある』の聲起り、この痛ましき感じはチュイルリ宮中を動かした。

さればナポレオンは一八五九年以來の漸次の失敗に對して自家の位置保持のため、頻りに外觀を張り（例へば一八六七年、世界大博覽會を再び巴里に開きたるが如き）、內治を一層自由的に改革して人

民の歓心を求め、殊に熱心に何等かの外交上成功を睨ふた。最後のものは自然ドイツ戰役善後の際、ラインの境に向つて求められ、最初はライン河畔の要地ファルツの要求となつた。その意は一八六六年に於けるドイツ政變に對するフランスの補償だといふのである。次にルクゼンブルグ[34]公國買收の試みとなつた。いづれもそれ〳〵見事に拒絶された。幸にルクゼンブルグをばスウィスやベルギと同じく中立國とするといふ妥協成立し、纔かに獨佛間の危機を緩うし得た。

根本に蟠まれる問題は十六世紀以來の兩國民間の歷史的衝突である。フランスは、當時ドイツの敎會改革事件の混亂に乘じて、ロートリングンに於けるメッツ以下の三鎭督領を横領し、ついで三十年戰役に於てその所有權を確め、なほエルザス地方に於ても所有權を獲得する所があつた。是等の既得權を基礎として之を我物顔に擴大してエルザス・ロートリングンをフランスに合併する實績をあげたのは、卽ち大王ルイ十四世の治世であつた。フランス人に取りては、エルザス・ロートリングンの地は羅馬時代に於ては元來羅馬のものだ、フランスは羅馬の後繼者であると考へて居る。換言せば、ラインの河が果してドイツのものか、フランスのものかといふ問題に歸著する。而してナポレオンはエルザスを出發點としてドイツを蹂躙した。ドイツ人はナポレオンを倒した跡て、このエルザスを恢復せんと欲して列强に妨げられて志を遂げなかつた。故にサドヴァ以來、兩國人間の敵愾心の增長避くべからずなつて、フランス人の間で『サドヴァに報ぜよ』の喊聲が高まつたのは偶然でない。

こゝに兩國は切りに軍備を競ふた。サドヴァの決勝がプロシヤの火針銃[36]の功力に歸せられて居るから、フランスてもシヤスポー[35]銃を採用した。フランス人の間にショーヴェニズム日に熾んとなつた。しかし、戰役の結果、當時ナポレオンその人漸く老衰して多病てあつたから、彼はとかく皇后その他左右に支配され、政治外交の統一を缺き、陸軍省は怠慢がちて準備十分てなかつた。行政機關の各部腐敗し、立法部は因て當局を信ぜず、必要支出に對してすら協贊を吝み、一切國家をあげて紀綱弛み、人民をして國家の光榮そのものよりも、寧ろ國民の經濟生活の安固を思はしむるに至つて居つたことが明かになつた。換言せば、國民の大多數には戰爭の準備も覺悟も十分てなかつたのてある。

戰爭の導火線は又もやピレネー山南の王位相續問題から發して居る。問題はホーエンツォルレルン家の一支族の一人がイスパニヤ革命派に迎えられたに始る。フランス人之を以て自國の危險として抗議す。その人辭退した。フランス人は尙ほも將來に對する保證を宗家の代表者たるプロシヤ國王ヴィルヘルムに强請して以て外交上の地步を占めんと欲した。王は時にライン河畔エムス[37]温泉場滯在中て、フランス公使からこの談判を受けたが、かくの如き要求を斥くるの外なかつた。この事伯林のビスマルクに電報された。ビスマルクこの電報を簡勁なる形に改めて發表した。ドイツ國民大いに激昂した。

他方ては巴里の人心また沸騰した。かなたて『ラインの守り』を謳へば、こなたては『マルセイエーズ』を唱へた。ナポレオンの政府は遂に戰爭を決心するの外なきに至つた（一八七〇年七月十四日夜）。

皇帝政府は初めオーストリヤとイタリヤとの入援を豫期し、隨つて南ドイツ諸國の去就につきてもひそかに賴む所があつた。然るに開戰の始め、ナポレオンの外交及び作戰の齟齬と、プロシヤの多年の準備と參謀總長モルトケ[35]の下に於ける機敏有功なる軍事行動とのため、いづれも事豫期に反し、歐洲の輿論はプロシヤ側に集り、少くとも最初はドイツのために中立することが明かとなつた。

衝突は、八月始、プロシヤが一切ドイツ軍を統率してエルザス・ロートリンゲンに侵入したるに始り、前後二期に分れる。卽ち之より九月始セダン[37]に於ける降伏までは、ナポレオン三世自らの防禦戰であつた。次に十月から翌年一月までは、巴里の包圍期で、卽ち新に組織されたフランス共和國の防禦戰てあつた。巴里は一月二十八日に開城した。かくて戰役は七ヶ月て終つた。

巴里開城の十日前、ヴェルサイユに於ける攻圍軍の大本營では、宮中の鏡の間に於て、ドイツ皇帝卽位式が擧げられた。これが新ドイツ帝國の建國てある。ついて、かの七月革命の英雄、老ヂュールはフランス國民議會の代表者となりて、ヴェルサイユに來つて講和を定めた。之によれば、共和國はドイツ帝國にエルザスの最大部分とロートリンゲンの一部とを割く、その內にメッツがある、是等の

面積は我が四國の五分の四、人口當時一百五十萬、その內にメッツ市を始とし幾部分はフランス語を話す地方がある。償金五十億フランが支拂はれる。

如上のドイツ統一戰の結果を案ずるに、これにてドイツ及びイタリヤの國民統一は大體完成され、十九世紀の政治上主潮に基く歐洲中原の大問題は終結したと謂ふべきてある。

尙ほナポレオン三世の滅落に連關しては、二個の國際上新結果が生れて居る。一は、フランス國民が又もや共和制を取り、溫和なる憲法を作りて一切の黨派——正統派、オルレアン派、ボナパルト派、共和派、僧侶派——を包容調和したことてある。第三共和國これてある。ヂュールはこの新共和國の大統領に推されて新國家を固めた。彼の政治思想は一八四八年以來の經驗によりて圓熟し、一方ては、かの多々ある君主權の主張者に反對しては、『共和國は尤も分裂を少くするものなり』と論じ、過激派に對しては、『共和黨の無い一個の共和國』の建設を主張した。彼は君主派も過激派もいづれをも滿足ささなかつたから、諸派の反對を受け、三年の內に辭職したけれども、それまての內に、早くも敗戰後のフランスを整理し、期に先ちて償金を皆濟し、第三共和國の信用を復したるは、永く世人の記憶に存する所てある。

他の國際事件は、黑海問題てある。それは、クリミヤ役の勝利者にして巴里條約の指圖者たるナポ

レオンの沒落と共に、ロシヤはドイツの好意を信じ、且つ英米の葛藤とに乘じて、この條約中の黑海に關する條項を破棄することを通告したことてある。かくの如くしてこの海は再びロシヤの湖水の如くに化し一切の兵備を具ふることになつた。

103　國民的國家と加特力教會

大ナポレオンの統一的支配の滅亡後、その反動として宗教的氣分復興し、羅馬教會に對する信仰及び教會の勢力の一新再興しつゝあつたことは、吾人のしばゝ〳〵瞥見した所てある。

千八百四十年代の半ば、歐洲の自由主義國民主義が將さに現狀に對す　反抗運動を發せんとする危機、羅馬にはピオ(パイアス)九世現はれ、最初、自由主義を標榜し、イタリヤ國民の望の一となつたことも、亦た嘗て注意しておいた。實はこの法皇の治世は、恰も十九世紀の中三分の一期（一八四六年即位、一八七八年崩御）に當り、法皇としては珍らしい長い治世て、その間に、彼の教會と當時勃興の國民的國家との密接なる交渉が行はれたから、宗教的文化史上、ピオ九世の時代と名づけられて有名となつて居る。かくの如く、その時代を名づくるまでに、この法皇を有力ならしめた根本的動因若くば一般的背景は、既に自由主義國民主義の勃興といふことて暗示されたるが如く、第一、法皇がイタリヤ半島に於て『教會の國』と稱する獨立の政治領土の君主てあること、第二、加特力教會の元首として歐洲列强の消長に深甚の關心なき能はざることにあること、第三として、十九世紀に於ける法皇の教會の擴大といふことも數へらるべきてある。實に、法皇は之等由つて自家の信念と責任とを增したのてある。

さてピオは一八四八年、三月革命の苦き經驗を味ひ、翌年ナポレオンの兵力に賴りて復位されたる後は、全然世上の風潮と共に反動政策を取つた。彼はゼスイタ派を無二の股肱と賴み、同派の二人にして尤も智略に富みたるカルヂナル・アントネリ(40)を大臣とし、法皇の國の領内を取締り、その人民の暴動を禁壓した。既にして加特力全世界に對しては、一八五四年十二月八日、『童貞マリヤの清淨懷胎』といふ教義を宣言し、盛大なる儀式を行ひて、聖母崇拜を再興し、天下の善男善女の歸依を惹いた。またカリフォルニヤ濠洲を始とし、海外移住の盛んなる當時、法皇はます〳〵世界に向つて信仰の傳道を擴張せしめた。然るに、この五十年代の末から、イタリヤ統一運動著しく進行した結果、法皇はその直轄地の一部を削られ、ナポレオンの斡旋により、僅かに羅馬の都及びその附近（所謂ピータの家督）を保つのみとなつた。之と殆んど同時に、北方にてはプロシヤの維新始り、ついてビスマルクが現はれた。法皇大に不安を感じた。偶々日本は、開國の結果、そのキリスト教傳道を復活して來た。法皇はこの際、昔一五四九―一六五一年間日本に於て殉教したる者(切支丹)をあげて盡く聖者に列し、

『敎會は困難なる時世にありて神の味方を要するが故なり』と天下に徇へた(一八六二)。ついて、一八六四年、イタリヤ政府の統一政治次第に捗り、都をフロレンスに進めることに決するや、法皇はその年末、聖母祭に於て有名なる回章を全世界に發した。これは、現代の政治、社會、學術に現はれたるあらゆる世上の弱點又は弊害と考へらるゝものを指摘し、これらを『破滅に導くべき時代の誤謬』と名づけ、之を箇條書(シラブス)にしてこの回章に附し以て全世界に敎示した。この箇條書は八十四節から成り、普に一切のキリスト敎及敎會に敵對する傾向を非難したるのみならず、信仰儀式の自由や、出版科學の自由やに對する要求、政治上權力が宗敎上權力以上に獨立せんとする要求、民法上生活に於て僧侶を俗人と同樣の位置に置くべしとの要求、一言にしていはゞ、現代の國家生活竝に社會生活に於ける一切の主義主張をば、悉く異端として排斥して居る。

されど、この瞬間に於て、國民的國家作成の運動は瞬間もその歩武を緩めなかつた。卽ち、一八六六年、新敎國プロシヤは新イタリヤ王國と同盟して舊敎國オーストリヤに開戰し、後者はケーニグスグレーツて打擊された。法皇の大臣アントネリ報を得て『世界は破滅せり』と詠歎したといはれて居る。しかし、法皇政府は尙ほも屈せず、一世の自由の風潮を防遏すべく、一八六七年聖ピータ記念祭を以て、世界の宗敎大會議召集の計畫を發表し、いよ〳〵一八六九年末、聖母懷胎祭を以て、これをヴァヂカーノ宮中に召集した。實に、これ、かの敎會改革に對抗するため開かれたるトレント大會議以來の盛事て、正さに第二十回世界宗敎大會議である。この會議は翌年夏まで約半歲以上繼續した。その主要目的は『法皇には誤謬なし』[41]の決議に集中し、この敎義は久しく討議辯難を重ねて、最後に、反對者の不參又は讓歩によつて、殆んど滿場一致の形式て可決した。時は七月十八日、老法皇親臨して嚴かにこの決議を宣言した。これはナポレオン三世がプロシヤに向つて開戰を決定し、兩國恰も戰時狀態に入るの時てあつた。然るに皇帝早く敗れ、九月始、降伏した。この報到るや、法皇朝の驚愕一方ならず、フランス守備隊羅馬を撤退し、これと入れ違ひに、イタリヤ王國の軍隊都に入り、王國の首府はこゝに移つた。この際、政府は法皇に殘れる一切の政治上領土を沒收し、只だ之に君主としての待遇とヴァヂカーノ竝にラテラーノの二宮、及び郊外の別莊一個所と若干の年金とを許與し、故カヴールの宿志たる自由國家に於ける自由敎會の確立といふものゝ實現を計つた。傲慢なるピオは之に反抗した。彼は列國公使に向つて、自ら列國によりて釋放せらるゝまて『ヴァヂカーノの囚人』と宣言し、宮中に籠りて外居せず、年金、その他王國政府の處置を斥け、國王を破門し、世界信徒の信仰と同情を一身に集めた。この法皇一八七八年を以て歿したるも、彼の採りたる如上の抗議の形式は今日に至るまて改められず、法皇と王國との外交關係絕え、羅馬府の交際界は今も尙ほヴァヂカーノとキリナルとの

兩陣に對立して居る。

ビオ九世の晩年、彼の『ヴァチカーノ四人』期、彼は尙ほも新興のドイツ帝國と衝突した。そも〳〵法皇とプロシヤとの惡感情はかのケーニグスグレーツ戰後に崩ざして居た。それが、今やドイツ統一後、法皇主義の徒、或は中古のやうにドイツ皇帝の兵力を以て『敎會の國』の恢復されんことを熱望して、ビスマルクの拒絶する所となつてから、一層嵩じた。やがてポーランド問題と『文化鬪爭』とに於て破裂するのである。

プロシヤのポーランド問題は、一八一五年の決議で、プロシヤが更めてポーランドの一部を領有することに定まつた時から出發する。最初、政府は寬大なる政策を執つて居つた。それで當時、加特力敎會及び國民自由主義の隆盛と共に、ポーランド人の國民運動大に進行した。彼等の間に國民的史詩を謳ふて國人の愛國心を皷吹したるミツキエヴィッチ(一八五五年死)等の思想家が輩出したのは、この頃てあつた。されど、プロシヤはドイツ問題に忙はしかつたが故に、ポーランド人の國民運動を放任するの外なかつた。加ふるに、政府は夙にプロシヤ一流の普通義務敎育を圖行してポーランドに及ぼし、また、十九世紀の自由主義に基きてポーランド農民の解放を行ひ、彼等をして漸次獨立地主たるを得せしめたから、彼等の間に漸次國民的自覺の喚起と中等社會の興起とを見た。而して是等一切の文化運動の精神となつて居るのはポーランド人の僧侶(加特力)てあつた。僧侶の有力者は單に信仰の指導者たるのみならず、學校を監督敎導し、經濟機關の樞機を掌握し、或は國會議員を兼ねたるものもある。かく一身にして諸種の事業を兼ね、而も當時中興の世界的勢力たる羅馬敎會に屬し、且つ十世紀の主潮たる國民主義を負ふて居るのであるから、ポーランド僧侶の國民運動に對する貢獻は實に言外にあつた。十九世紀中葉に於ける有力者にポーゼン及びグネーゼン大監督レドホウスキてあつた。彼は最近の宗敎大會議に參列して『法皇無誤謬』の議に協贊しポーランド主敎に任ぜられ、ポーランド國民的僧侶を養成し、ゼスイタ敎團の在住を許し、小學校に於てポーランド語を奬勵し、ます〳〵ドイツ風を壓倒して成功しつゝあつた。

プロシヤ政府がポーランド取締を開始したのはドイツ統一戰役後にある、卽ち、時は一八七二年及びそれ以後てある。その方法は他なし、學校監督權を敎會から奪ひて政府の手に收め、一切小學校に於ける敎育をドイツの國語に依らしめ、苟も舊敎的嫌疑ある敎師は之を罷免した。プロシヤ領ポーランドの學校騷動ここに始る。

尙ほビオ九世死後の事てあるが、如上の學校政策だけては、ポーランドのドイツ化は不十分てあるから、ビスマルクの晩年、更らに一の新しき手段を附け加へた。それは帝國議會の立法に依り、移農局

を設け、莫大なる國費を支出し、ポーランド農村の土地を買收し、こゝにドイツの新敎を奉ずる中等農民を移住せしめて、著々ドイツ的村落を作つたのである。要するに、如上學校の國語政策と移民政策とはポーランドのドイツ化運動の二大手段であるが、既記の如く、ポーランド人のプロシヤ内外に於ける自覺と、政府に對する對抗運動とは、これ亦た既に强く起つて來たから、政府の事業は、所詮、成敗相半ばして最近の世界戰破裂に至るべきてある。

プロシヤ領ポーランド問題は法皇ピオの直接關係する所てはなかつた。しかし、之と同時に同じドイツに於て、極めて直接にして露骨なる衝突が演ぜられて居つて、かねて如上のポーランド問題を煽りつゝあつたのは、文化史上面白い相互關係の現象を呈して居る。卽ち、敎會と帝國政府との『文化鬪爭』の開始てある。事は新ドイツ帝國に對する舊敎派の直接間接の反對運動を取締ることに始つた。一八七一年十一月、帝國議會は、凡そ說敎壇上に於て政治を誹謗して帝國の平和を攪亂するの說敎をなすものは、二年以內の禁錮に處するの法を發し、次に翌年ゼスイタ敎團放逐法を立てゝ之を實行した。これが既に法皇の敎會の不興を來して居る。而して更らに一八七三年に至りてプロシヤ王國自らは、王國內の舊敎徒の法皇主義禁壓の目的を以て種々の特別法を發布した。その內に、凡そ宗敎家がその位置を得るには、國家の試驗を受くべし、その科目は哲學、歷史及びドイツ文學とすることが規

定せられて居る、世にこれを『文化試驗』といつて居る。之を始として、プロシヤにては一八七五年より多數の加特力取締法が續々立法發布された、是等は多く五月に立法されたから、五月法と總稱せらる。」是等の立法に對して舊敎徒の抗爭著しく起り、その結果、罰金を課せられ、監禁され、甚しきは免職されたもの多く、その內には、かのポーランド主敎レドホウスキを始とし、多數の監督もあつた。この事件に對してドイツの舊敎を代表する政黨（中央黨、尤も熱心し、一切のプロシヤに反對する政黨（ポーランド黨、ウェルフ黨、社會民主黨、エルザス・ロートリングン黨）と連衡して政府及び國民自由黨に對抗した。是等反對派の發言場は帝國議會とプロシヤ議會とてあつた。その狀一時は猶ほ中古のウェルフ對スタウエン（ゲルフ對ギベリン）の抗爭を憶ひ起さしむるものがあつた。

この所謂『文化鬪爭』は世界の注意を惹き、就中、羅馬法皇廳之に熱心した。ドイツ政府は初め一八七二年四月、羅馬法皇廳駐箚公使の後任にバヴァリヤ國の貴族にして法皇のカルヂナルたるホーエンロー[146]公を任命せんとし、法皇廳の內意を伺ひたるに、拒絕せられた。ビスマルク乃ち帝國議會に於て演說して『吾人は敎會の事ても、將た國家の事ても、カノッサに赴くものてない』との一言て、法皇に對する宛然宣戰を布告し、議會の喝采を博し、ピオは之に對して、ドイツからの羅馬參詣人に向ひて、『現代アッチラの怖るべく惡むべく』天罰免るべからざるを公言した。爾來、前記の如く、ドイツに於

ける舊敎徒取締いよ〳〵嚴重となり、恰もイタリア王國に於ける王國對法皇の軋轢に相呼應するが如き概があつた。

ピオの死後、その後任に穩健なるレオ十三世立ち、羅馬始めて調和的態度を取り、ドイツに於ても國内に於ける統治政策上、妄りに舊敎徒を怒らすの愚を悟り、こゝに兩者再び相近づき、年來の文化鬪爭を忘るゝことゝなつた。(96參照)

第二十二講　三國同盟　列強の通商植民

104　十九世紀下期の近東問題　露土戰役

ドイツ統一戰後の歐洲國際問題は、歐洲中原は均勢狀態に入つたから、フランスからの復仇の虞れに對する新ドイツ帝國の警戒と、バルカンに於けるキリスト諸國民問題及び之を中心とする關係列强の利害衝突、卽ち近東問題と、列强の世界に對する通商植民上活動とに集中すべきてある。吾人は先づ近東問題から一瞥しやう。

クリミヤ役及びその終結たるパリ條約(一八五六)の經過によれば、トルコはさながら戰捷者若くば建全なる國家の如く、その獨立保全を確められ、自己みづからの自主的改革を期待されたけれど、それは時と共に終に空想に屬することゝなりつゝあつた。

眞先きに、巴里條約締結後間もなく、トルコの保全條項を蹂躙したる事件が發生して居る、それは既述のルーマニヤの獨立てある(一八五九—六六、二一講99)。コンスタンチノープル政府は之に抗議したけれども、その甲斐なく、既成事實としてこれを默認するより外なかつた。當時のサルタン・アブダル・アヂズ⑦(一八六一—七六)は、同時期のエジプトに於ける同胞君主ゲヂーヴと同やうに、全然浪

費に馳せ、その財政窮乏し、とかく歐洲資本家の支配を受けがちとなり、領内のキリスト敎民に對しては、舊の如く暴虐を事としたから、サルタン及びその官吏の政治が到底現代國家の自由及び國民主義と相容れざるものなること、早くも曝露された。

それで、キリスト敎民の叛抗及び之に對する復仇殆んど間斷なく起りつゝあつた。中にも、一八七五年、ボスニヤ及びヘルツェゴヴィナ②地方に一揆持上り、翌年、その隣國モンテネグロ③及びセルビヤ之に參加し、ブルガリヤも亦た起つた、之に對するトルコの復仇的虐殺は非常の多數のキリスト敎徒の血を流し、殊にその年五月の初めサロニカ市に於てドイツ及びフランスの領事暗殺され、事態いよいよ重大となつた。之と同時にその月末以來サルタン廢立の宮中革命破裂し、九月には、アブダル・ハミッド④二世（一八七六―一九〇九）が立つた。これ今後三十三年間探偵と暴虐とを以て支配すべき問題の君主である。新政府は『青年トルコ』派の西歐主義に擬して、自ら憲法を發布して列强からの改革の要求に對抗し、キリスト敎徒の叛亂に對しては、斷然兵力を進め、先づセルビヤを討ちて克ち、ベルグラードに迫つた。只だ敎民の背後に立つて居るロシヤ政府の最後通牒に威赫されて、餘儀なく休戰を許したばかりてある（十月末）。

當時のロシヤのアレクザンダ二世（一八五五―八一）は、猶ほクリミヤ役破裂の原因てあつた先代ニコラス一世のそれの如き『東方の病人』片附の策を再び執ることになつて居たのてある。之より先、クリミヤ役の敗戰はロシヤの內政の弱點を曝露したから、新君主は卽位の始、內治の自由主義的改革を始め、殊に全國內の數千萬人の半奴隷的農民解放を斷行し、彼等のために自由農民となるの手段を立てた。これロシヤ史上の一新時期である。しかし、一八六三年のポーランド叛亂後、政府は態度を一變して國內抑壓に出て、却て無政府主義の虛無黨を激成した。而して十九世紀中葉以來スラーヴ諸民族の自覺高まり、最初一八四八年プラーグに於てチェック國民的詩人コラー⑤等の首唱の下に汎スラーヴ會議を催うしたことがある。こゝにロシアのスラーヴ愛護主義はこの文學的精神的なる汎スラーヴ主義を政治上に轉用し、之をモスコウヴィの國粹主義に結び附け、ロシア政府の保護の下に一切スラーヴ民族の統一を期した。この風潮はバルヂック沿岸に於けるドイツ人口をロシア化する運動となり、その學校敎育に干涉することになつて有名てある。當時ロシア國粹主義の代表者はモスコウの新聞記者カトコフ⑥（一八八七死）てあつて、ザールの正敎的專制主義の增進に與つて大功がある。これらのいはゞロシアの帝國主義の活動家として、外交家イグナヂェフ⑦が傑出して居る。彼はさきに極東にありて支那から黑龍江地方を割取し（一八五八）、ついて北京駐在公使たり。今や一八六四年以來、コンスタンヂノブルに駐在して居る。如上のバルカンの危機に於けるブルガリヤの勃發は、主としてこの外

交家の煽動による。ザール政府は之を以てクリミヤ役の屈辱を雪ぎ、ロシア國民的汎スラーヴ主義を滿足さし、以て國内の不平を宥め國民の鬱憤を晴らすの好機會と考へたのである。因て、最もバルカン問題に直接利害を感ずる強國オーストリヤ・ハンガリに對しては、七月、露墺兩國君主のライヒスタット⑧會見により、ブルガリヤ獨立の曉には、ボスニヤ・ヘルツェゴヴィナを與ふべしと約して、その中立を確めて居る。

この危機に際し、クリミヤ役の同盟者のうち、フランスはナポレオン三世既に倒れて第三共和國創草の際にあり、自ら外交の陣頭に立ち得なかつた。ひとりイギリスは、印度の支配者及び極東交通の維持者として、殊に陸上からのロシアの擴大に對する海上からの對立者として、無關心たることは出來なかつた。當時朝野の議論兩分した。自由黨は野にありて、グラッドストン⑨の下に、キリスト教徒の自由と安全とに重きをおき、イギリス人の公德⑩に訴へてトルコの慘酷を非難し、或は之を歐洲から驅逐すべしと主張した。保守黨は首相ヂスレーリの下に大英國の利害を打算して專らロシアの野心を制すべしとし、因てサルタンからキプロスを割かしめて、之に占據してロシアの亞細亞に下るに備へ、最初は列强のトルコ警告に加はらなかつた。既にして五月に於けるブルガリヤ虐殺の眞相（殺害されたるもの一萬二千人に及ぶ、その内パタクといふ一山村人口七千人中五千人は最も慘忍なる方法を以

て殺された）が明かとなるや、イギリスの輿論沸騰した。政府乃ち始めて仲裁に從事したが、その功なく、年末既述の如くロシアの干渉となるや、遂に諸國と共同勸告をサルタンに試みることゝなつた。サルタンは新發布の憲法（カヌー）に基きて議會を召集して勸告を不必要として謝絶し、且つパリ條約により諸國干渉のいはれなきを主張した。

それでロシアは、翌年春、單獨にトルコに宣戰し、ルーマニヤと協商してその軍をこのダニューブ王國から進めてバルカンを越えしめたが、この際、トルコ軍背後に集中してニコポリスの南方ブレブナ⑪の險を死守すること數月にして始めて降る（千二月）。これでロシア軍は始めて自由に南下するを得た。コンスタンヂノプル危くなつた。

イギリスの輿論再び沸騰し、その政府乃ち地中海艦隊を馳せ、パリ條約にかゝわらず、ダルダネルスを通過してコンスタンヂノプル面前に現はれしめた。ロシア乃ち逸早くトルコと和し、サン・ステファノ⑫條約（一八七八年三月）を要取した。これによれば、モンテネグロ、セルビヤ各擴大して獨立す、新にブルガリヤが組織され、キリスト教君主の下に行政上獨立す、その領域はアドリヤノプルの境及びエーゲ海岸に達し、實にサロニカをも含むべきものであつた。ルーマニヤはベサラビヤをロシアに讓り、その代りにドブルッチヤ⑬を受く、ロシアはカウカスス方面に於てカルスを含むアルメニヤ地方を割取し、

償金三億ルーブルの支拂をうくること、是れである。

列國は今更の如くロシア領土及びその勢力圏の餘りに擴大するに驚き、サン・ステファノ條約改定の議を起した。ビスマルクは乃ちドイツ帝國のバルカンに對する政治上軍事上野心なきを公言し、自ら『正直なる仲買人』として、この夏、列國會議を伯林に召集して諸國の間を周旋して前記條約に改定を加へた。改定點は次の如くである。ボスニヤ及びヘルツェゴヴィナはオーストリヤ之を占領してその行政に任ず、モンテネグロ及びセルヴィヤはその擴大を幾分削減せられる、ブルガリヤの設定は前記の『大ブルガリヤ』の範圍の三分の一に縮められ、サロニカ市及びマセドニヤ地方は依然トルコの直轄とし、バルカン南側のブルガリヤは東ルーメリヤと名づけて別にキリスト敎知事の支配とし、トルコの完全なる主權の下に置く、ギリシヤ王國にその北境を擴大すべく若干地域を之に割讓すべきことをトルコに勸告す（一八八一年實行せられた）、といふのである。

この會議には、ロシアの宰相ゴルチャコフ[15]はイギリスの代表者ディスレーリ（ビコンスフィールド卿）及びオーストリヤの宰相アンドラッシ伯[16]と意見杆格し、ビスマルク之を仲裁し、而も自らは中歐連衡の利益の上から、オーストリヤ側に傾いた。少くもゴルチャコフはビスマルクの『仲買』を不正直として大に之を含むだ。さればイギリス代表者は『名譽ある平和（ピース・ウイズ・オノー）』を齎らして凱旋したが、ロシア人は憤懣し、

かのカトコフ等の率ゆる新聞論調は尤も獨墺に對する敵愾心を披攄し、或は『コンスタンチノプルは伯林で征服されなければならぬ』を論じ、或は『コンスタンチノプルに行く道は伯林及びヴィーンを通る』と說くに至つた。

かくて、露土戰役及び伯林會議はバルカン問題を全然解決し了つたのではない、却て新しい問題を發生せしめたといへる。何となれば、ロシアはブルガリヤの組織、オーストリヤはボスニヤ、ヘルツェゴブィナの委任統治、イギリスはキプロス占領によつて、各トルコ領分割の勢を促進し、且つ新進國家の活動を刺戟したからである。

その內尤も注目すべきはブルガリヤである。このものはサン・ステファノ條約規定の『大ブルガリヤ』から大斧鉞を加へられたが、ともかく差當りロシアの隷屬的國家として、ザールのバルカンに於ける勢力擴大の記念產物である。今日ブルガリヤの議會（シブランエ）を訪ふものは、議會前の『救國主』と稱せらるゝアレクザンダ二世の騎馬像と、議場に掲げられたる同君主の油繪肖像とに刮目せざるを得ないであらう。但し、このサルタンとザールとに半屬的國家は爾來決して單純に從順無爲なる日を送るものでなかつた。その最初の君主アレクザンダ公（バッテンベルグ[17]家、一八七九―八六）はその家の結婚をイギリス皇室と通じ、イギリスの勢力を利用してロシアを牽制し、切りにブルガリヤ國民精神を喚起し、

遂に東ルーメリヤをして合一統治を申出でしめ、自ら『兩ブルガリヤの公』と稱した(一八八五)。彼は自然ロシアの諱忌に觸れて退位しなければならなかつた(一八八六)。翌年推立されたのが、卽ちサックス・コーブルグ・コハリ家出身のフェルジナンド(75)公(一八八七―一九一八)、後には、世界戰役には獨立の國君ブルガリヤのザールとして參戰すべき人てある。當時ブルガリアの國民的運動の精神は、その國民的政治家スタンブーロフ(一八八四議會議長、一八八七―九四首相、一八九五暗殺)て、一時ブルガリヤのビスマルクと稱せられた。

要するに、この新進國家の國民的統一運動と、その完全なる獨立の希望とは、マセドニヤ地方に於けるキリスト敎徒對回敎徒竝に諸民族の抗爭、クレタ(希臘人)の獨立運動、アルメニヤ人虐殺問題と相竝びて今後近東問題の波瀾の原因となるべきてある。

105　三國同盟　二國協商

新ドイツ帝國の建設者ビスマルクの外交は、フランスの復仇を避くるために、一方てはオーストリヤと提携し、他方ては可成ロシアを怒らさないことを最大目的とした。されば彼は一八七二―三年、獨墺露三大君主の會盟を催うし。宛然西歐の自由主義に對立して東歐の君主主義の示威てあるかの如く、之を以て平和の保證とした。世に之を三帝同盟と呼んて居る。

しかし、前節に說いた近東問題の經過は、墺露二國の歷史的利害背馳を現實に曝露し、ついて伯林會議の結果はロシアの憤怒を買ひ、全然ビスマルクの對露策を破壞することゝなつたから、中歐二帝國は汎スラーヴ主義の帝國からの復仇を怖れなければならなかつた。それて翌一八七九年十月、兩國の防禦同盟を結んだ。之によれば、若し一國がロシアに攻撃されたる時、他國は全力を盡くして之を援助し、相互に同意するにあらずんば講和しない、若し一國がロシア以外の强國(フランスを暗示す)に攻撃されたる時、他國は善意の中立を守り、更らに若しこの攻撃がロシアに援助されたる場合、相互に援助し、相互同意なくしては講和しないといふのてある。

ビスマルクは、これても尙ほ、露佛兩國から共同攻撃を受けたる場合を危險とし、更らに第三の加盟者を求めて之をイタリヤに得た。この新王國は最近にその建國運動の時以來、オーストリヤと法皇とに對する共同利害のために、ブロシヤと同盟して來てその目的を達した。されば羅馬政府は今やオーストリヤが大體イタリヤ半島から排除されて了つたから、差當り之に滿足して居る。それて、若し新にオーストリヤに代るべき恐るべき敵國あらば、再びドイツと提携すべき關係にあつた。この機會は伯林會議以後に作られた。それは、次節に述ぶべきフランスのチュニス經營開始てあつた。この地は申すまてもなく聖ルイの殉難したフランス人には尊い思出の地てある、しかし又た古のカルタゴの

故地にして、羅馬政府はイタリヤ王國の安危に關する地點と考へて居る。初め、フランスの外相ジュール・フェリは海外發展に熱心であつた。ピスマルクはフランスがチュニスを略取するに反對しないと聲明してフェリ[19]の功名心を唆つた。そこで一八八一年以來、フランスのチュニス遠征及びその經營が始まつたのである。是れ、ドイツに取りては、フランスの復仇心を海外に轉じ、イタリヤを同盟に惹き付けるといふ一擧兩得を齎らすべき福音である。イタリヤは果してこのチュニス經營によつて威赫されたから、おのづからドイツに接近し、一八八二年五月、獨墺二國同盟に加入した。これて三國同盟完成し、ビスマルクが感じたる伯林會議後の國際不安を醫することを得た。

加ふるにビスマルクは尙ほ三帝同盟の傳來を棄てず、ロシアを宥むるの機會を窺ひつゝあつた。時は一八八一年、アレクザンダ二世暗殺され、アレクザンダ三世立ちて、最初、バルカン問題よりも內治取締に重きを置いた、加ふるに恰も伯林會議時代のロシア政治家も次第に世を去つた。この機に乘じてドイツの宰相は再び東歐三帝會盟を催し、ロシアから、露獨のいづれかが第三者から攻擊された る場合、各自に中立すべしとの約を取り、ます〳〵フランスを國際界から遠けた。ビスマルクの外交いよ〳〵成功したのである。

露佛の國際上接近はこれまでしば〳〵その機會があつたけれども、一八八五年まて兩國の國家及び社會の非常なる相違とビスマルクの外交とに妨げられて、成るに至らなかつた。この年、フェリ辭し、その海外發展策中止し、第三共和國には專ら國力の充實とドイツに對する復仇とを目的とする政治的傾向起つた。この點に於て、王黨、ボナパルト(ナポレオン)黨、急進黨の三者一致し、當時人望ある將軍ブーランゼー[20](一八九一自殺)の下に一種狂熱的主戰主義の勃發となつた。この傾向と共に、ロシアと接近すべしとの輿論漸く高まつた。之には財政上經濟上からするが便宜にして效力が多い。されども、最初の間、ロシア經濟界を支配したのはドイツの財力であつたから、一八八八年十月に至り、始めてフランスの銀行家は成功し、四分利を以て五億フランをロシアに融通した。ロシアは之を以て五分利の公債と借り替へた。これから以後、フランスの公債增加し、一八九四年までに總額四十億フランに上つた。この外にベルギーの資本の輸入もあれど、フランスの資本は之よりロシアの重なる勢力となつた。是等のものはロシアの殖產興業、鐵道の布設、殊にシベリヤ橫斷大鐵道に利用された。かくの如く露佛の握手は先づ財政上から始まつたのである。

かゝる折柄、ドイツには少壯有爲なるカイゼル・ウィルヘルム二世卽位し(一八八八)、間もなくビスマルクを罷め(一八九〇)、自己の獨裁的外交を開始したから、露佛兩國共に警戒を加へ、遂に兩者の意志疎通した。時は一八九一年の夏、フランス艦隊のクロンスタット訪問はその標徵である。この

時、世界に於ける最大專制君主アレクザンダ三世が親しく共和國の軍艦に行幸してマルセーエーズ吹奏の際も脫帽して之に敬意を表したのは、滿天下の耳目を驚かす所であつた。翌々年、ロシア艦隊はツーロン(21)を答訪した。蓋し兩國のこの關係は、最初、單に軍事上協定に過ぎなかつたやうである、即ち一種の親密なる協商(アンタント・コルヂアール)(22)と見らるべきである。されど、一八九五年ごろには最早同盟(アリアンス)の關係に進みたる形跡がある。

畢竟、三國同盟對二國協商(同盟)は、伯林會議以後に於ける國際間利害關係が生み出したる外交上の産物である。これらの關係締結の根蒂が本質的に親密なる國民的感情に在るのではない。その內にも比較的に感情的なるは、支配民族が相互にゲルマニヤ民族といふ共通の情緒を有する墺獨二國である。しかしながら、この同盟とても、ロシアに對する共同の利害的恐怖がなかつたならば、かくは成立するに至らなかつたことは勿論である。何はともあれ、如上の二大對立は、成程二十世紀の初に入りて多大の變化を受けたけれども、大體に於て、世界戰役まで歐洲に於ける國際基調を形作つて居ることは吾人の記憶すべき要諦である。

106　英露の植民及びその對抗

近世の歐洲人の植民を回顧するに、ポルトガル、イスパニヤ、オランダが順次に一時活動の花を咲かしたる後、十七八世紀のフランスに大飛躍の兆候ありたるも永續しなかつた。それて、最近に於ける最大植民國は先づ指を英露二國に屈すべきである。彼等の植民事業はそれ〳〵特徴を有して相對照し、而して終に利害の背馳をみるべきである。

一は倫敦及びリヴァプールの港頭を出發點とし、他はモスコー府を中心とし、甲は海を越えて海外に向ひ、乙は陸つゞきに躍進した。自然、植民者の人柄が違つて居る、一は航海者、商人、會社員、他は軍人、道路建築者、植民地總督である。この事業の異同は、猶ほ古代に於てアテーネ人の海外植民と羅馬人の帝國建設との對照に比すべきものがあるやうてある。即ち、一は母國の型をそのまゝ海外に移植(プランテーション)し、その結果、之によつて生じた散在する諸植民地はよく母國から何等かの分離獨立を成し得べきてある。アメリカ合衆國、カナダ領(ドミニヨン)、濠洲聯邦等の如きこれてある。他は自己中心を擴大延長するものてあつて、之によつて出來上つたものは、廣大ながら一個の纏つた版圖を形作つて、中央權力の鞏固なる限り、容易に分散しがたき狀態にある。

兩者の十七八世紀の昔に於ける膨脹はさて置き、十九世紀だけを返り見やう。當初、イギリス人は軍國の雄ナポレオンから商人(シヨツプキーパス)と指斥されたに拘はらず、彼等の海上帝國をフランス人の帝國の企圖から安全に維持し、却て之を倒して自ら更らに一層の擴大を致したるは、吾人の曾て瞥見したところ

てある。同じナポレオンは陸上に於てコサック兵團の强靱に惱まされ苦々しい體驗を嘗めた。彼は、このロシア陸上帝國擴張の組織の極めて有功なるを知り、その將來恐るべしとし、歐洲は五十年の內に共和國となるか、然らずんばコサックとなるべしと豫言した。換言せば、西歐風が天下を風靡するにあらずんば東歐風が世界を蹂躙すべしとの謂てある。されどもナポレオンの失脚後、中歐の諸國民が漸次ともかく新たなる國家確立に入りたるが故に、ロシアは西方進出を塞がれたから、それだけ南か東かに向はなければならぬやうになつた。南へは卽ち黑海方面に對する膨脹にして、トルコといふ所謂東方の病人の處分に集中し、クリミヤ役（一八五四―六）及び露土役（一八七六―八）となつたが、イギリスの帝國策及びそのトルコ保全策に妨げられて、志を得なかつた。その都度、ロシアはますます東方に進出するの外なきに至つた。何となればロマノフ家の皇室、貴族、官僚は全然東方的亞細亞的に豪奢を營み、非常の生活費を要し、之を支辨するために絕えず土地の獲得及び經營を必要とするものてあつたからてある。このいはゆる『土地慾』の腹を肥やすに缺くべからざる特殊機關は卽ち前記のコサック組織てあつたのてある。

さればロシアは中央亞細亞にては、クリミヤ役後、一八六四年タシケント、一八六八年サマルガント[23]を取りて英領印度を窺ふた。イギリスは常に之に警戒を加へ、露土役の危機に於て、帝國主義の政治家ヂスレーリ（ビコンスフィールド卿）內閣に在り、一方には印度總督をして女王ヴィクトリヤを印度女帝と宣言し、その卽位式（ダーバー）（一八七八、一、一）を行はしめ、以てロシアの中東侵略に備へた。間もなくアフガニスタンの征服に了り、その外交關係はすべてイギリスの支配に歸した。之に對抗すべく、ロシアは更らに侵略を擴げ、一八八四年メルヴを占領した。そこて、アフガン役（第二役一八七八―八〇）となつた。これは一は露土役に對するロシア人の復仇運動に由ること勿論てあつた。されど結果はアフガニスタンに於てイギリス人に對する反抗起り、兩帝國の間に中東に於ける境界の協定成り、直接衝突の危を緩めた。

極東にては、クリミヤ役後、吾人の旣に見たる如く、ロシアはシベリヤ沿海洲を經略し、ウラジオストックを創立したるが、今や露土役後、三國同盟の成立のため、ますます西方を塞がれたから、フランスの資本を利用して經濟上軍事上一層東方へ發展するため鐵道を延長し、殊に太平洋岸との連絡のためにシベリヤ縱斷鐵道布設（一八九〇年代）に從事し、その規模の大なること全世界の耳目を驚かした。この大運動の終端目的は朝鮮の攪亂滿洲の占據てあつて、こゝに二十世紀の初には、ロシアに對する日本とイギリスの同盟を喚起するに至るべきてある。

イギリスのエジプト及びスーダン[24]經營

近世エジプトの開發が、大ナポレオンのナイル河畔遠征以來のフランス人の努力に俟ちたることは、曾て之を瞥見した。この跡をうけて、十九世紀前半、フランス人は一八四〇年『市民王國』の外交上屈辱にかゝはらず、近東に於ける優勝文化國民たる位置を占めた。殊にナポレオン三世の時、既述の如く、フランスの武は近東に耀き、レセップスはスエズ運河開鑿に從事した。後者の功成るや（一八六九）、皇帝は之を機としてフランスの郵船を保護してイギリスのジブラルタ經由の東方航通（Peninsular & Oriental 汽船會社）と競爭し、世界貿易をマルセーユ港に惹き付けんとした。之をフランスの近東活動の絶頂點とす。然るに第二帝國早く亡びて近東權力關係全く一變し、覇權イギリスに移る。

イギリスのこの方面に於ける威力は、遠くネルソンの海上捷利（アブーキル灣の役、一七九八）に淵源すること勿論であるけれども、これが實權掌握は實にフランスの第三共和國の時、一八七五年、スウェズ運河株の大部分の買收に始る。

そも〳〵運河會社はエジプト政府から九十九年間の租借にて一八六九年開業した。時は恰もエジプトの財政經濟上危機に相當する。何となれば國人は夙に運河の將來に望を屬して黃金時代を夢みたが、開通後、之によつて生ずる利益は殆んど全く外國資本家に吸收さるゝことが、早くも明かとなつて失望し、その上に、同時に世界の經濟變動の影響が痛切にエジプト人の生活を翻弄したからである。とゝふのは他でない。當時、アメリカ内亂の結果、南方の棉花輸出減じ、世界の棉花缺乏し、一時はその價四倍以上の騰貴を來したから、一八六〇年代以來、ナイル河畔は棉の耕作を始め、一時非常の暴利を占め、人民擧つて奢侈に耽り皷腹擊壤したが、アメリカの平定と共に棉價暴落復舊し（エジプトの財界の大恐慌を來した。かくて運河と棉花との思惑が最後に失敗に了つた時は、當時の君主イスメイル[25]が、既に一八六三年以來、西洋の贅澤を輸入して東洋風豪奢の馬鹿をつくした跡であつた。彼は自己の浪費と不景氣との尻をうけて財政窮乏に苦み、政府の所有する十七萬七千の運河株（會社總株數四十萬株、一株額面二十磅）の賣却を密かにフランスに交涉した。フランス躊躇す。イギリス乃ち四百萬磅を投じて之を賣收した。是れ時の首相ヂスレーリの英斷て、その將來に對する關係極めて重大てある。

こゝに於てイギリス人はフランス人と共同にエジプトの國債監督を行つた。この次に起つたイギリスの權力增得の機會は一八八二年のアラビ・パシヤ[26]事件てある。

この間に代つた新君主の薄弱と、外國人の跋扈に對する民間の不平とが、こゝに國民的改革の運動を喚起し、君側肅清のクー・デ・ターとなつた。この際推されて陸軍大臣となつたのが卽ちアラビてある。彼は歐洲にて學び青年トルコの立憲運動に私淑し、國民黨の牛耳を執つて居つたのてある。この

革命の結果、果してアレクザンドリヤに於て歐洲人の虐殺迫害が破裂した。イギリスはフランスに交渉した。共和政府はまた躊躇した。イギリスは乃ち單獨に兵力干渉を行ひ、カイローを占領し、アラビ・パシヤを錫蘭に流し、國民の排外運動を鎮定した。之からエジプトの政治はイギリスの監督の下に支配せられることになつた。

エジプト國土の治績は、古來ナイル上流地方の安固如何に係ることが多かつた。この時は卽ちスーダンに於けるマーヂ(27)教主（回教の豫言によれば救世主いつか現はれて世界を信仰の下に統一すべしとあるに基さて起る）なるもの〻處分問題である。この者當時のエジプトのスーダン總督の無能に乘じて猖獗であつた。イギリス乃ち將軍ゴルドン(28)（支那、戈登）を派遣す。イギリスの熱帶アフリカ經營こゝに始る。彼はエジプト軍の收容撤退の訓令をうけたるに拘らず、イギリスの威名維持のために上ナイルの要害地カルツーム(29)を保ち、十ケ月間圍まれ（一八八四―五）、救援軍到著二日前陷りて死んだ。その壯烈はイギリス人の敵愾心を鼓舞した。數年間鐵道布設等の大準備の後、將軍キチナー(30)の遠征となり、遂にマーヂの餘孽を擊破しその根據地オムヅルマン(31)を下し、スーダン全く平定した（一八九八）。キチナーと同時に、フランスのマルシャン(32)少佐は佛領コンゴーを經て二年間探險の後、オムヅルマン隆伏後數日白ナイルの上流ファショダ(33)に達し、こゝにてスーダンをフランスに合併すと宣言した。こゝに兩本國政府の交涉となり、マルシャンは命を受け恨を呑んで撤退した。

かくの如くして、イギリスはアラビ・パシヤ事件に於て、愼重に干涉してエジプトの政權を收めたが、スーダン經營に於ては頗る大膽敢爲となり、フランスの雄圖を挫いた。

108　アフリカ分割

凡そ陸地の發見及び柘植には、これに從事する人力が國家として個人として將た人口として之に堪能なること、當該陸地が開發の價値あることがそれ〴〵極めて必要なるは勿論であるが、その外に自然征服に缺くべからざるテクニックが如何に具備するやといふことも亦た大いに顧慮されなければならぬ。實に之によつて本問題が解決せられること太だ多いからである。それで、第二十講既述の十九世紀に於ける專門的技術の大進步が、希臘羅馬時代やコロンブス乃至クック時代に比して、如何に有功に陸地の發見竝に柘植を促進したるかを想像し得べきである。今や船艦、道路、車輛の驚くべき進步、蒸汽、電力、石炭、鐵の利用、攻防開柘の器具の發達、醫療衞生の學問が各自の方法材料に於ける未曾有の收得、これらは、すべて十九世紀に於ける新興の歐洲國民的國家及びその國民の用に供せられて、海外運動及び未開地の發展に向つて傾注されてゆくべきであつた。而して是等が天然と土人關係とに於て尤も抵抗少くして利益多き方面を選むことになるのは當然である。アメリカ大陸はモン

ロー主義の縄張の内に屬して、とかく面倒を惹起しやすく、亞細亞大陸にては、印度支那が新にフランスの開發に委せられたる外、支那帝國の徒らに老大にして實は扱ひやすきこと未だ曝露して居なかつたから、こゝにても餘地少く殘せられた。それ故に殘る所の利用しやすき大陸として、一八七〇年代から世紀の末つかたまで、大體に於て唯だアフリカのみが歐洲人の重要なる爭の肉となつたのは偶然でない。

アフリカ大陸の開發は、一八七〇年代までは探險者及び宣敎師の活動時代であつた。かくの如き二重の資格者として、實にリヴィングストン(34)のアフリカ內地大探險はこの頃に完成した。而してこの人一時中央アフリカに於て行方不明となつたから、之が搜索發見に從事したスタンレー(35)の活動もこの時である(一八七一)。是等二大探險家の輩出で所謂『暗黑(ダークスト)のアフリカ』の時代は大體その終を告げ、茲に相當の確信と豫定の計畫を以て進入する新しき人物の時代が始まつた。卽ち最初に商人、次に陸海軍そのものであるべきで、換言せば、いづれも國家を背景とする人物である。この時代に、實に歐洲の政局略ぼ妥協に就き、寧ろ洲內の衝突の虞れを他に轉じ、自他ともに相利するを實明なりとする考が、卓越して來た。既に伯林會議以來、ビスマルクはフランス人に既にアフリカを暗示した。フランス人因てかのさきに一八三〇年に於て創めたアルゼリヤの東隣に於て、吾々の既に一瞥した如く、チュニスに著手し(一八八一)、更らに西アフリカ、コンゴー、及びマダガスカルの植民に熱心し、かくて十九世紀下期に入りてフランスは俄かにアフリカの最大面積の植民者となつた。他の國家も亦たこれに後れなかつた。ベルギはフランスのコンゴーの南にコンゴー自由國を開設し(一八八五)、イギリスは既設の如くエジプトからスーダンまでを經營した。

以上は伯林會議以後約十年內の大勢であつて、實に、アフリカ大陸は歐洲列國の國際危險を轉嫁すべき、いはゞ避電柱の据置場となつたかの如き觀を呈した。

ドイツ帝國は新建國の最初、自己に對する國際關係の安定するまで、國家として何等の植民をも差控えて居た。これは宰相ビスマルクの政策であつた。かの三國同盟の完成後、國內の產業頗る充實し、國民の間に海外植民地建設の熱望起るや、ビスマルク始めてアフリカ及びポリネジヤ(南洋)に於て獨逸帝國最初の植民地を創立した(一八八四—五年以後)(36)。卽ちアフリカにてはトーゴー、カメルーン、ドイツ西南アフリカ、ドイツ東アフリカである。いづれも列國に立ち遲れての占領であるから、風土人文の關係決して良好なるものにあらずといへども、他に對する對抗位置を占め、殊に後の二者はイギリスの南アフリカ經營及び之と連關する『岬(ケープ・タウン)からカイロ』卽ちアフリカ大陸の南北縱貫策と衝突すべき運命を有つて居る。されどビスマルクの晩年、及びヴィルヘルム二世の初年、當時英獨の間柄尙ほ

平穩であつたから、妥協容易に成立し、圓滑にアフリカに於ける境界の設定竝にヘリゴランドの讓與（一八九〇）となつたのである。

この間に、イギリスの南亞經營頗る進むで來た。この經營の基地は岬植民地（ケープコロニー）である。これは本とオランダ植民地であつたが、一八一五年以來イギリス領と確定した。これが漸く繁昌して來た原因は、イギリス人の拮据經營と、南アフリカの氣候溫和と、金剛石の産出とにあつた。この植民地からイギリス人は北方に保護を擴げた。ペチュアナランド[37]是れである。更らにその東北にローデシヤが出來た（一八八九）。これは南亞のクライヴと稱せらるゝセシル・ローズ[38]（一九〇二死）の經營にかゝる。彼は冒險を以て巨富を致した金剛石王で南アフリカ會社の社長たり、後、岬植民地の首相となつた。是等の保護領は前記ドイツの南亞植民地を東西に中斷するの位置を占めて居る。しかし差當りての困難は、かのオランダ植民の子孫たるブール[39]人（農民の義）と新しい支配者たるイギリス人との間に蟠りて嵩じゆく軋轢であつた。ブール人は未開頑強勇敢なる植民[40]であつた。自然、イギリス人を避けて東北へ移動し、先づオレンヂ自由國、次にトランスヴァール共和國[41]を作つた。この兩國民の軋轢は、一八八五年以後、南亞繁昌の最近原因となるべきものが現はれたことに依つて一層促進された。それは他でない、かのトランスヴァール南部地方に於ける豐饒なる黃金の發見である。黃金發掘史上、かのカリフォルニヤ

濠洲のそれ以來世界の新時期を劃するものは、卽ちこれである。されば忽ち大移入が始まつた。事業家、技術家、鑛夫、商人續々繰り込み、暫時にしてトランスヴァールの人口三倍した。ブール人はこれらの外來者を惡みてユーヂランダ[41]（アウトランダ外國人）と呼ぶ。その多數はイギリス人であつた。ブール人は自分の成金國家の政治と利益とを自己の間に壟斷せんと欲した。イギリス人は之に反對して自己の經營及び富力を基礎として參政權を要求し、遂に一八九五年の末、南アフリカ會社[42]のドクトル・ジェームスンがトランスヴァール侵入を試みることになつた。このクー・デ・ターは失敗に了つた。その背後に岬植民地（ケープコロニー）の首相ローズが在ることは勿論であつた。彼は已むを得ず辭職した。この事件は一層ブール人の反感を刺戟し、彼等は大統領クリュゲル[43]の下に兵器糧食を蓄へ、ユーヂランダの請願を斥け、オレンヂ國と攻守同盟を結び、遂に一八九九年十月以來イギリスとの開戰となる。この時イギリスにはビコンスフィールド[44]の帝國主義の後繼者ソリスベリ[45]の內閣（一八九五―一九〇二間繼續、チェンバレン植民大臣たり）あり、二年半に亘る植民地的苦戰を闘ふて始めてブール人を征服することを得て、その地を合併した。後南亞全體の憲法成り、南アフリカ聯邦と稱す。

畢竟ずるに、アフリカ分割は一八八〇年代には衝突少かりしも、一八九〇年代には行詰り、先づ英佛のファショダに於ける、次にイギリス對ブールの南亞に於ける衝突となり、いづれもイギリスの利益

に解決した。實に、後者はイギリス帝國の植民能力に關する危機であつたのであつて、この際、プール人の同種民族的同情者としてドイツ人が暗中飛躍したことは、公然の祕密である。英獨の反感こゝに崩す。換言せば、十九世紀末に於て世界の植民通商上の權力關係の漸く一變しつゝあることが暗示せられる。

109　極東の變動

かゝる間に、十九世紀の最後から二十世紀へかけての十年期に於て、極東に於ける權力關係が一變した。それは、日本嶋帝國の勃興し、尨大悋傲なる中華帝國の老朽羸弱は曝露され、歐米列強が頓みにこの方面に對する突進を開始したからである。大和民族が始めて强國民として世界史に入つたのはこの時期である。この際、如上の大事變は諸君の熟知事項であるが、さればとて、私は、その大要だけでも省略することが出來ない。

明治天皇（一八六七―一九一二）の下に於て、日本が君主政治の復古と西洋文明の輸入との結合に依つて斷行したる國民的革新、及び之によつて成就したる國力發展は、實に世界史の驚異の一に屬する。夙に法律上平等は確立される。普通教育は施される。徵兵は布かれる。陸軍はドイツ式、海軍はイギリス式に則つて組織される。一八八九年以來欽定憲法は實行される。高等教育と近世的產業漸く興る。

九十年代に入りて合衆國の銀政策の結果銀價下落し、歐米の金貨本位國各打擊を蒙り、隨つてその市場に東洋物資の輸入を惹くや、日本の絹、茶、陶漆器、麥稈等の貿易は好景氣となりつゝあつた。

朝鮮半嶋に於ける韓國につきて、日清兩國の交涉夙に結ばれて、この際遂に破裂し、日本の新組織の陸海軍は容易に清國を擊破し、早くも下關條約を要取し得た（一八九四―五）。こゝに、露佛獨の『三國干涉』ありて遼東半嶋は還附されたけれど、臺灣は日本の手に殘り、嶋帝國の極東に於ける霸權確立した。

ロシアは當時既にシベリヤ鐵道起工中にして、大平洋岸に飛躍の意勃々動きつゝあり、日本の戰捷に無關心たる能はざりしは明かである。この歐亞の大帝國の政治家に對して、かの中歐の霸權維持と海外發展とに焦慮しつゝあるドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が與へたる暗示が、如上の三國干涉の誘因であつたと稱せられる。ともかく、この君主は『黃禍（イエローペリル）』を世上に言ひ觸らして有名である。而してかくの如くして日本に領土保全を强勸したる支那大陸から、逸早く自ら膠州灣を占領次に租借したるはドイツであつた（一八九七―八）。この國はかくて極東に於ける最初唯一の根據地を獲得した。この『三國干涉』及び膠州灣占領は、ドイツが多年ドイツ風文物輸入を以て繫ぎ得たる日本國民の道德的好感を毀損したること夥しい。ロシアはやがて直ちにドイツに倣ふて而も遼東半嶋そのものから旅順口大

連を橫領した（一八九八）。露獨に對して均衡維持のためと稱して、イギリスが威海衞、フランスが廣州灣を租借したのも、これからであつた。加ふるにロシアは、その後、朝鮮に於ける日本の失策に乘じて韓國朝廷を取り込み、又た淸國から東淸（滿洲）鐵道布設權を得て、歐洲大連間の直接交通を企圖した。

既にして北支那に擧匪の排外運動破裂したのは自然である。この際在留外人救ひ出しのため列國の聯合軍北京に侵入して之を占領した（一九〇〇夏）。諸外國が更らに支那に對する厚顏しい要求を競ひ起したのはこの時である。この危機に當り、ロシアは東淸鐵道保護のためと稱し滿洲を占領した、のみならず、之を根據として、當時困惑中の淸國政府を威嚇且つ懷柔し、他國の要求に對抗すべく之に援助を與うる代りに、自己の權利要求に讓歩せしめた。

されば、十九世紀末に於ける世界の通商植民上の大問題は、南半球に於てアフリカ分割の結末として南亞戰役の破裂となりつゝある間に、極東にては、頓みに扇點の曝露された老大帝國に對する列國の平和的侵迫運動（ピースフルペネトレーション）に留めを刺して居る。前者に於ては危機幾ばくもなく去つたけれども、後者の舞臺に於ては、一八九五年、瞬間の勝利を誇りたる日本は、三國干涉のためにその獲得したる極東の覇權を制限され、却て歐洲列强の活動を喚起し、就中露獨の躍進著しく、特にロシアの振舞は殆んど傍若無人に近きものあるに至つたのである。既に暗示した日英同盟の成立の偶然でないことが再び推せられる。この外に、アメリカ合衆國の海外運動も同期以來世界の大問題の一となつて來た。

110　米國の發展

吾人はさきに南北役（一八六一―五）が卽ち合衆國民主政治の再造事業であることを見ておいた。之によつて、アメリカのいはゆる第二建國が出來たのである。既に、この戰役そのものゝ進行は、將さに改造されんとする新國家の國是の實行且つ確立であつた、卽ち自由勞働と戰時保護關稅政策とこれである。

如上の大勢は最近の米國發展の出發點であつた。これから、國內の製造業は保護されて外國の競爭から安全となり、軍需品、鋼鐵、鐵道材料、被服、食糧の需要を充たすべく、諸種の工業が促進された。これら工業の勃興は、戰前戰後、人口の驚くべき增加と相俟ちて、鐵道の長足的進歩となつた。この鐵道布設と、之に伴へる幾多の新企業とは資本の流入及び勞働の移入を喚起し、こゝに大西洋から大平洋に亘れる大陸舞臺を化して世界に於ける經濟上最大投機場裡となしたのである。この經濟發展の順序は、概していはゞ、鐵道先づ成りて人口及び事業次にこれに從ふを常とす、猶ほ滿穿たれたる跡、水之を追ふて流るゝが如きである。發展の中心其地は無論第一建國の發祥地たる東北方面にある。

これから西方及び南方に向つて同方面特有の湖川の水路と道とによりて人口及び事業の膨脹しゆくが通例であつた。鐵道の延長につゞきて、而も之と同時に、最新の科學上發明も亦た早く上記の中心其地から實施されて來た。卽ち、電話は一八七二年グラハム・ベル[46]によつてボストンとサーレム間に、電燈は一八八二年エヂスン[47]によつて新ヨルクに於て、電車は同年同人によつて新ジャーシーに於て、電氣鐵道は一八八五年リッチモンド及びボルチモーアに於て、各開設され始めてから、一層米國社會の發展を助長した。

以上の諸事情が輻湊して、その結果、合衆國の產業革命を惹起完成した。就中、廣大なる企業は鐵道、石油、鐵、石炭にある。是等の經營によつて、こゝに幾多の米國式の自助自成（セルフ・ヘルプ・セルフ・ガード）の大富豪現はれ、遂に相互の間に無用の競爭を避くるために、資本の大合同（トラスト）組織され、益巨億の富の集積を致すべきである。かのロックフェルラ、モルガン、カルネギー[48]等の『弗の君』（ドルプリンス）の名聲が天下に輝やくのは、これからである。

工業の原動材料たる鐵と石炭の產出は、從來全世界の半ば以上を出すとは、從來イギリスの誇であつた。然るに十九世紀末には、世界の二大新進工業國が勃興してこのイギリスの獨壇場に仲間入した。卽ち、その一たるドイツ帝國は殆んどイギリスに追ひ付いた。他の一は卽ち合衆國である。この者は英獨兩國の合計よりも尙ほそれ以上の多額を出すことになつた、卽ち鐵は一八六〇年に百萬噸であつたものが一八九〇年には既にその一萬倍となつたが如きである。又た米國の製造品の價の總額が、千八百九十年代の半ばには、既に如何なる外國のそれをも凌ぐに至つたことも特記に價するであらう。而もかゝる米國の大飛躍は單に商工業界のみに止らない。農業に於ても、同時代の他國に見るべからざる進步開發を見た。そはテキサスの米作、カリフォルニヤ、フロリダの果樹の栽培に鑑みて容易に首肯されるであらう。

所詮、合衆國は十九世紀中に於て、その生產豐富となり、その資本漲溢し、海外に於ける市場及び投資機會を求むるの必要に迫られつゝあつた。

合衆國傳來の外交策たるモンロー主義は、さきに吾人の一瞥したやうに、宛然家傳の寶刀の如く、南北役後ナポレオン三世のメキシコ遠征に對して揮はれた。その跡では、久しく適用の機會を見出さなかつたが、國力上述の如く充實するに隨ひ、一八九五年、大統領クリーヴランド[49]及びその國務卿、オルネー[50]によつて、ヴェネズエラの事件に向つて再び振り翳された。事件は、この南米の一共和國が隣接せる英領ギアーナ[51]との境界爭のために合衆國に訴へたのに始る。國務卿乃ち傳來の主義に據り、一個の宣言を發してヴェネズエラ[52]を保護した。ソリスベリは固よりこの主義なるものを認めなかつたけ

れども、米國と爭ふを不便とし、事を巴里に於て仲裁會議に附するに同意した。その決定はイギリスの利益となつたけれども、事件の發展の經過は明かにモンロー主義の事實上承認と同じてあつて、このものがアングロサクソン帝國主義に對して勝利を獲たことを意味した。ともかく、これて兩英語國民の國際感情が融和した。合衆國はこの機に乘じて米國砂糖資本家の爲めに、布哇の內政に干渉し、遂に之を合併した（一八九八）。同嶋勞働人口の最大多數を臣民とする日本は、恰も朝鮮に事あり、之を默過するを便とした。この合併はモンロー主義の擴張といはんよりも寧ろその脫線であつた、卽ちその帝國主義化の始てある。同じ脫線は、やがてイスパニヤ王國のアメリカに殘れる重要植民地キューバ[53]嶋に對する干涉に於て、一層露骨となつた。こゝにても、砂糖煙草の栽培を經營する米國資本家の利益が、合衆國外交の標準となつて、植民地菲政に反對する土民の叛亂渦中に干涉を加へしめることになつた。イスパニヤとの戰爭は遂に避けられなかつた（一八九八）。最初の活劇はサンチヤーゴ[54]の攻圍降伏であつた。この際、後年大統領となるべきローズヴェルト[55]の勇敢なる働振は有名となつた。つゐて同年米國艦隊のマニラ砲擊となり、フィリッピン群島も占領された。イスパニヤは力屈し、巴里講和に於て、合衆國に對してキューバの獨立、ポルト・リコ[56]の割讓、フィリッピンの賣却、グワム島の放棄を許諾しなければならなかつた。因みに、尙ほイスパニヤはグワムを除くマリアンヌ及びカロリン群嶋をドイツに賣却した。これてイベリヤ半島の老植民國には、本國に近きカナリヤの如きものを除きては、全くその歷史的屬地の殘をも喪失した譯てある。サモア群嶋も亦たこの頃獨米の間て分割された。その外、合衆國は支那及び滿洲にも關心して外交上馳聘することゝなつた。但し日米關係は別に第二十四講て說く筈てある。

要するに。七十五年前、モンロー主義の宣言て、米大陸に繩張して之を自國の利害圈とし、而も從來から存在する歐洲國家の植民地にも干涉しない、つまり、列强と政治上無關涉てあると標榜した合衆國は、こゝに、西印度に於ても、太平洋上に於ても、南洋にも、確實なる領土的根據を占有し、極東に於て列强と相馳聘することゝなつて來た。卽ちモンロー主義の本國の帝國主義化である。これが十九世紀末までの米國發展のいはゞ總計である。

第二十三講　民主・社會・博愛・平和主義的運動

111　英佛に於ける民主及び社會主義の初期

民主主義及び社會主義は二十世紀の今日全世界の大勢である。しかし、その出發點は十八世紀の啓蒙思潮にあつた。この思潮に激されて勃興したのが卽ち當時フランスの輿論であつた。これによれば當時の舊政治（アンシャン・レジーム）は無力である、この政治は國民によつて改革されなければならない、而も上二級の連中が、自分らのみが唯一の國民であるとして、一切の權力を壟斷するのは非理である、國民とは市民卽ち第三階級の外はない、だから第三階級は卽ち一切である、一切の爲政の標準たるべきであるといふのである。その結果、一七八九年の大革命が持ち上つた。この革命は市民卽ち資本家が宗教上及び政治上特權を有する階級に對して得たる勝利であつた。當時彼等が革命の標準とした『自由・平等・博愛（リベルテ・エガリテ・フラテルニテ）』の三語は、今尙ほ巴里に於ける官公衙や敎會等の苟も公衆の出入する建物の上に麗々しく刻みつけられ、朝夕フランス國民の仰望具瞻する所となつて居る。是等の標語が示すところの同一精神は、當時多數の諸國に傳播して、人身及土地の各階級制の打破、市民の職業撰擇の自由、財產權の安固の保證となり、東歐を除きて歐洲大陸を通じて到るところ自由なる社會を現出した。これは歷史の潮流からいへば實に急激廣大なる變化であつた、しかしこの變化に於て、當時はまだ十九世紀中葉以後の所謂社會主義は盛んとならない。つまり、今日から顧みれば、唯だ、有產者としての市民を標準とする民主（デモクラシー）主義の發揚を見たばかりであつた。

同意義の民主主義の勝利は夙にイギリス嶋國に於てフランスに先んじて獲得されつゝあつた。只だその過程がフランス革命の如く急激に將た華やかでなかつたから、吾人の注意を惹きやすからざりしのみ。卽ちイギリスの產業革命である。このものはフランス革命以前、十八世紀の後半から始り、之と同時に盛んとなり、それ以後に亘り、前後通じて約七八十年間の大現象である。この革命は、機械工業の開始と海外貿易の發展とを骨子とするが故に、フランスほどの政治的成功ではなく、より多く經濟的性質を帶び、その結果、資本の集積となり、資本の集積は卽ち資本が一切を支配する傾向となり、所謂資本主義が隆盛となつて來た。かくの如きものが十八世紀から十九世紀への交の所謂民主（デモクラシー）主義であつたのである。

この新しい時代に、英佛兩國に國民の經濟及び社會を研究し之に關する學說を發表するものが現はれた。卽ち曾て見たフランスのケネーの自然尊重及び自由放任の說、イギリスのアダム・スミスの『富國策』の如きはいづれもその有名なるものであつた（十七講）。その外同じ經濟思想の流れのうちから、

少しく後れて、マルサスの人口論(二十講96)、リカルドーの⑦地代論が出て、範を後世に垂れた。以上列擧する一切の學者は國民經濟學者と總稱せられ、多くイギリスから固有に多く輩出して十九世紀の經濟學の基礎を確立した。因てこの學問或はイギリスの學問と稱せられて居る位てある。而して是等の學者は近代の經濟學史上ては古典(クラシックス)として尊重されて居る。彼等はおのづから社會問題にふれて居るしかしながら、彼等の此問題取扱方は尚ほ頗るナイーヴてあつた。何となれば彼等は自由放任主義によつて養成出現された資本主義をば唯一最高の社會組織と思惟し、これを說明するに努めたばかりてあつたからてある。彼等は、成程、かのマルサスの如く、社會の害惡を除くことをも考へたけれども、彼等の立場は資本主義に在つたのてあるから、一般下層人民の社會そのものゝ利害休戚に對して十分深刻なる考慮を致すには至らなかつた。

この資本主義と相提携するものは十九世紀の自由主義てあつた(十九講)。この主義は一切公私の事業の自由放任を主張するものてあつた。自由放任は自由競爭となり、自由契約となり、自由契約に於ては、資本家は强い相手てある。彼等は勞働者に對して自家に利益ある條件を指圖した。勞働者は弱い相手てある。彼等は資本家から指圖された不利益な條件を甘受しなければならない。これが一般傾向てあつた。當時の爲政家は自由放任政策に依據して居るから、彼等の立法及び施政はま

す〳〵この傾向を助長した。この傾向の發展しゆくと共に、社會組織の弱點は著しく暴露され、社會の害惡は增長した。卽ち貧民階級(プロレタリア)の發生てある。プロレタリアといふ②原語は、古羅馬共和國の所謂セルヴィア憲法による人民の階級別に於て、その最下級民に對して用ゐられた名稱てある。その語義は兒孫を生み出すといふことて、國家に對して、人間を提供するより外に何もないといふ卽ち無財產者といふことてある。かの中古の都市の町人なるものゝ勃興と共に現はれた市民(ブルジョワ)といふ階級に對立すべく、十九世紀に於て更らに新に擡頭して來た新しい階級の名稱に用ゐられたのが卽ちこの語てあつた。この貧民階級の發生といふ現實の悲哀に鑑みて、こゝに資本主義の無制限なる橫暴に反對して之を制限又は破壞せんとする運動が起つて來た、之を一般的に社會主義(ソーシアリズム)といふ。

このものは、最初は、十八世紀の自然學派の學說、卽ち天然自然の純理を根據とするものてあつた、之を純理社會主義と呼ぶ。このものは更らに二つに分れる、一は理論的社會主義てある、他は無政府(アナルキ)主義(ズム)てある。

前者はさらに七月王國の社會狀態の說明に引用した社會主義の唱首サン・シモンを始め、フーリエ③や、イギリス人オウエン等之を代表して居る。この派は全然學者的てあつて、言論文章を以てその思想を宣傳した。その或るものは自ら實例を立てゝ自家の自然の秩序といふ主義を證示せんと欲した。

オウエンはその一人であつた。彼はスコットランドのグラスゴー附近ニウ・ラナルク⑭の人、夙にそこに模範紡績工場を經營し、その經驗に基き、ひろく勞働者の生活改善を思ひ立つた。彼は因て土地を新世界に求むることゝなり、合衆國のインヂアナ州に於て模範的勞働村落を創立し、こゝに自己の理想とする共産主義を實現せんとした。この試みは不幸にして失敗に了つた（一八二五―七）。彼は尚ほその死（一八五八）に至るまで、イギリスの勞働問題に關係し、その組合運動（トレード・ユニオン）の勃興に貢獻したのである。しかし、彼は大體からいへば實行よりも思想の人であつて、矢張り理論的社會主義者に屬する、されば、この派の社會主義は樂天的空想的に馳せる傾があるから無何有（ユートピアン）郷的社會主義とも稱せられて居る。

他の純理社會主義卽ち無政府（アナルキズム）主義は、前者と同じく同一の天賦人權の理論から出發して居るけれども、前者の個人主義が尙ほ團體としての共存に重きを措いて居るに反して、これは極端なる個人主義を高唱するものである。彼等は個人主義を論理的に徹底さして行つた結果、或る一人が他の一人を權力づくで支配するといふ現在の法律的關係を非とした。だから、無政府主義は寧ろ無統治主義といつた方が穩當であらう。ともかく、この派はこの支配狀態を不自然非理とし、その原因を經濟上の害惡に歸して居る、卽ち私有財産の存在これてある。されば、かの理論的卽ち無何有郷的社會主義者は私有財産關係を改造せんとして居るけれども、この無政府主義者は之を破壞せんとするものである。彼等の代表者は、かのサン・シモンと同時に吾人が一瞥しておいた『財産は贓品だ』との結論者ブルードン⑤である。しかし、彼は彼の破壞主義を、まだ經濟生活關係以外に及ぼして居なかつた。然るに、彼の感化を受けたものゝ內には、更らに之を政治に及ぼして無國家主義（アスターリズム）を唱へるものが少くなかつた。その尤も有名なるはロシア人バクーニン⑥（一八一四―七六）であつた。彼は後に述べるマルクスと同時代で、友人同志であつて終に說を異にした。彼はマルクスと同やうに一八四八年中歐の風雲動いた時に政治運動に從事した。彼はその主義及びその過激なる手段のためにザールの政府に囚へられてシベリヤに送られたが、一八六〇年、アメリカ船に依つて日本に脫れて歐洲に歸り、スウィスに居りて更らに運動した。彼の宣傳によれば、『國家は害惡なり（レタ・マル）』、故に國家に對して一切の革命的直接手段は正當であるとて之を推奬した。當時アレクザンドル二世の治世の後半期に於けるロシアの專制政治は、却てこの無國家主義宣傳を刺激した。さればロシアの青年（主として學生）の間には、當時所謂虛無黨（ナイヒリズム）の名稱の下に、祕密結社が起つた。その內に妙齡の婦人もあつた。されば十九世紀下三分の一期にはしば〳〵歐米の支配者の暗殺が行はれた、一八八一年アレクザンドル二世、一八九四年フランス大統領カルノー⑦、一八九八年オーストリヤ皇后エリザベス、一九〇〇年イタリヤ國王ウムベルト、

一九〇一年合衆國大統領マッキンレー⑦、いづれも無政府主義の犧牲となつたのである。

しかし近時無政府主義は虚無黨的恐怖手段の功少きを悟り、寧ろ宣傳に重きを置く傾向がある。ロシアに於てすら然りてあつた。最近の無政府主義の代表者はロシア人クロポトキン⑧（一八四二生）てある。彼一八七六年以來、脫國亡命して多くロンドンに住し、西歐の自由民主思想と政治經濟生活の現狀とに鑑みて、バクーニン等の過激傾向を洗鍊した。バクーニンは南歐的影響をうけて破惰的直接行動を激勵した。クロポトキンは比較的穩健てある。彼はフランス革命を論じて思想と民力との自然の合同協力てあると觀察し、而も或る多數の者（社會主義者が執つて居る議會の多數決の如き）が他の者に對して支配することを絶對に非定し、一切の支配卽ち强制を要せざる社會を理想とした。他に之と同やうの主義を宗教の支配上に適用して居るものがある。ロシアのトルストイ⑨（一九一〇死）はそれてある。卽ち無敎會主義是れてある。

以上は只だ純理を根據とする社會主義の概觀を示したに過ぎない。この主義によるもろ〳〵の運動が、資本家に對する第四階級の自覺を高めるに貢獻したことは、明瞭てある。卽ち最近の民主的精神及びその運動の喚起てある。それ故に、如上の社會主義的運動に聯關して、西歐に於ける實際的民主運動を一言するはこの際妥當てあらう。

英佛に於ける最近の民主的自覺は、一八三〇年代に於ける政治上經濟上關係と社會主義者の實際的政治運動とによつて高まり、こゝに具體的產物を生むに至るべきてある。かくの如きものゝ實現方法は他てない、さきに一七八九年資本家が特權階級を倒すに用ゐたると同一方法てある、卽ち代議制度に外ならない。

さればイギリスては選擧法の改正運動となつた。これは一八三二年に於ける第一回改正を始とし、一八六七年の第二回、一八八五年の第三回を經て次第に普通選擧に近づき、遂に一九一八年にはその殆んど理想の實現に到達しつゝある。これらの長年月の發展の過程には、每に勞働者の間に集會や示威運動が伴ひ、勞働者は資本家に對する自家の組合を組織することが必要てあつたこと勿論てあつた。この組合制度は一八六七―七四年の立法にて公認された、卽ち今日世界の模範となつて居るイギリスの勞働組合（トレード・ユニオン）の始てある。以上の諸運動には概してフランスの如き革命的亂暴が伴はなかつたことは、イギリス社會の特徵てある。

次にフランスに於て、勞働者の間に政治運動を指示して之を惹起せしめ、この第四階級に始めて政治的意義を與へたのは、一八三〇年七月革命以後のことてあつて、實に吾人の嘗て見たる如く、ルイ・ブランその人の事業てある。從來の社會主義者はひたすら理論に偏して居たのてあるが、彼は實際的

政治的伎倆を具へ、言論に著述に、人民の自覺を喚起し、遂に一八四八年二月革命勃發期に於ける活動員の第一人者となつた。されば、一七八九年の大革命が第三級の勝利であつたのに對して、一八四八年のそれが第四級の凱歌を奏したのであるといはれるのは、茲に存する。勿論『六月』の砲撃以來、巴里は溫和に復したけれども、一八四八年以來、第二共和國はこの新しく自覺した階級の潛勢力を常に必ず打算に入れなければならなかつた。小ナポレオンのクー・デ・ター斷行もひそかにこれを頼みとした。爾來第二帝國となつても、フランスの政治神經は民衆の意向に對して過敏であつた。ナポレオンの帝國が平民的帝國と稱されるのは之がためである。

112　マルクスの社會主義

十九世紀の前半に於けるドイツを見るに、この國は政治上經濟上の進歩はともに英佛兩國より遲れ、その代りに精神的知識的文化の發展著しきものがあつて、よく詩人の國、哲學者の國と稱せられ、國人自らも之を以て自らの慰めとし將た誇として居た。その社會主義にも、また同やうの傾向が認められる。

然るに一八四八年は一の時期を劃して居る。そのころまでのドイツの社會主義は未だ英佛の如く政治的若くば經濟的になつて居らない、ロマンチックな詩歌的空想や、國民經濟學者の學者的理論であるに止つて居る。つまり、系統的學說にも、實際的勢力にも未だ成つて居らなかつた。如上の年代に至りてカール・マルクスが出て、始めて社會主義を秩序的に學術化し、當にドイツの社會主義を大體作り上げ、又た當に、將さに起らんとする政黨としてドイツの社會民主黨のために、その學術的根底を築いたばかりでなく、實に前節に述べた英佛に於ける純理社會學を改造して、新に世界的に一個の社會主義を創立したのである。

マルクスの學風は歷史的考察に基いたる現實的社會主義であつた。從來の社會主義は、既述の如く十八世紀の風潮をうけて、ひたすら純理に馳せ迂遠に陷つて居つたが、マルクスはロマンチック哲學が養成した歷史的研究の學風をうけて、社會を歷史的に觀察し、社會の歷史發達は只だ〳〵經濟生活のみに因つて左右せらるゝものであると考へ、こゝに唯物的歷史觀を立て、この史觀を社會の現實界に適用し、社會問題を現實的に解釋せんと試みた。

マルクスは一八一八年、當時最近にプロシヤ王國領となつたラインランド州のトリーヤ⑨（トレヴェス）市に生れ、一八八三年倫敦で歿した。彼の家は猶太人であつた。父は辯護士、母はドイツ人で、その內でも寧ろオランダ人に近い婦人であつた。それ故にマルクス家は頗る世界的趣味の家庭であつてよくヴォルテールとシェキスピヤとを愛讀した。この風カールに傳はつた。家庭では英佛兩國語が

多く話されて居つた。カールは高等教育をうけ、新聞記者となり、一八四四年プロシャの警察から保安條例に處せられ、巴里に逃れたが、更らにプロシャの通牒によつてギゾー内閣から國外に放逐されたから、一八四五ブルッセル府に轉住した。一八四八年の革命の時、一旦ドイツに歸り、かのバクーニン等と共に運動したが、革命失敗に了るや、豐年再びドイツを去り、迫害を免るゝためにイギリスに渡り、死に至るまで倫敦に滯在した。

畢竟ずるに、マルクスはフランスに近い西南ドイツの出身で、而も猶太人で、一八四〇年代の革命の環境で生ひ立ち、ドイツから、巴里、ブルッセル、倫敦へと順次に轉々したから、ゆたかに西歐的思想にいそしんだ世界的人物にして世界的頭腦であつたのである。

彼は事物を徹底的に理解し論理的に批評する非凡なる能力を有し、その間何等の迷想を許さない。彼は歷史的心理的見地に立ちて、社會の暗黑面を洞察し、人性の惡なること、隨つて人間生活に弱點多きことを確認した。そこで彼はドイツのローマンデック哲學の最高點たるヘーゲルの歷史哲學の形式と、西歐、就中イギリスの産業革命後に曝露された社會の現實との二つを結び付けて、現代固有の經濟的社會生活の原則を立てた。かくの如くして、マルクスの思想は、十九世紀に於ける社會に關する哲學思想の中に於て最も高き最も大いなる位置を占め、且つ同世紀に於て、ヘーゲルの辯證哲學とダルウィンの進化論と相竝びて、世界の思想界に對して尤も偉大なる感化を及ぼしたる三大思想の一となつて居る。

彼は多數の論文を發表したが、晩年倫敦執筆の『資本論』（一八六七年第一卷出版）がその主著である。彼は歷史はすべて經濟條件に左右される社會運動であるとの唯物史觀を立て、以て現代を批判し、凡そ身神の勞働は全價値の源泉であるに、只だその一小部分のみ勞働者に支拂はれ、他は悉く『剩餘價値』として資本家に收奪さる、この弊を打破するため、共産主義によりて分配を公平にすべしとす。

この際吾人に肝要なるは、彼の歷史的心理的理論よりも、その社會運動に關する意見に在る。

この意見はマルクスが齡尙ほ三十歲に達しない時、一八四六年、ブルッセルに於て彼の同志エンゲルスと共に『正義團』を結び、そのプログラムとして發した『共産主義の宣言』に胚胎して居る。彼の意見はその後の發展はあつても、この宣言を基として敷延されたに過ぎない。これによれば、一切の歷史は階級鬪爭の歷史であつた。今日の歷史は資本家と貧民との鬪爭の歷史である。畢竟、階級別なるものは一定の生産及分配關係の産物である。この關係の如何によつて社會の支配關係が定まる。かくの如くして、今日までの經濟生活に於ける支配者は資本家となつて居る。今日以後の支配者はまさに貧民であるべきである、隨て、現代の社會運動は卽ち貧民運動であるべきである。詳しくいへば、資本家の支配を打破する使命を有する所の社會要素をば、如何に組織すべきかといふ運動に他ならな

い。この運動の目的は只だ從來の財産取得の方法を廢止することのみによつて可能である。換言せば、私有財産及び私有生活制度の代りに、共産主義を確立するより他に解決の方法はない。故にこの主義を抱く者は、一個の政治上黨派として、貧民階級のために奮闘すべきである。而してこの宣言は架空の理想に基くものではない、現在、眼前に實在する社會の活きたる事實に根據を置いて居る主張であるといふのである。

つまり、マルクスの究極の目的が貧民の救濟にあり、卽ち社會主義にあることは他の社會主義と同一であるが、之を達するには資本主義を全然排除しなければならぬといふ點に於て特徴を有つて居る。現今までの資本主義が獨占する大量生産制度を貧民化、卽ち共産化しなければならぬ。換言せば、從來の經濟生活に於て貧民は客體であつたが、これが主體とならなければならぬ、それには階級鬪爭は必然的方法であるといふこと、これがマルクスの社會主義的運動に關する主張の中心點である。

要するに、マルクスの社會主義はかの純理社會主義に對照して歷史的であり、その內の無何有鄕（ユートピヤ）的社會主義に對しては現實的であり、又た無政府主義に對立して社會的である、隨て、之を名けて歷史的現實的社會主義といつてよろしい。更らに換言せば、マルクスの偉大なる點は、從來の社會主義者が斷片的に又は空想的に構想したるものを、歷史的心理的に捉み、之を現實と結合さし、貧民階級を

113　ドイツの社會民主黨　ビスマルクの國家社會政策

ドイツに於ける社會運動の開始はフェルヂナンド・ラッサール⑩（一八二五、ブレスラウ生、一八六四、ジェネヴァ死）に在る。實にこの人物の興味多き生涯のうちで、その花やかな晩年約二年の間にあつたのである。彼は商人の子であつた。彼は兩親共に猶太人にして、その信仰を保つて居た。彼は明晰なる頭腦と燃ゆるが如き義俠心とを有つた天才肌の青年として早く名を著はした。彼は一八六二年以來マルクス等の思想に則り、第四階級のために運動を起し、論文と演說とを以て勞働者の自覺を喚び、翌年ライプチヒに於て全ドイツ勞働者協會を創立し、苟も勞働者が直接に政治に參與しなければ、ドイツの國家及び社會問題は解決し得ないと高唱して、當時恰も勃興しつゝあるドイツの資本家のイギリス風感傷的自由主義の鼻柱を挫いた。

ラッサールがゼネヴァて戀愛事件のために決鬪て頓死したる年、彼の創立した協會の會員僅かに六千四百人のみてあつた。これが後年有名となるべき社會民主黨（ソーシャルデモクラット）に發達するには、その年、マルクスが

して眞の自覺に上らしめ、且つこの自覺を世界的に普及せしめたるに在る。彼は彼の主著『資本論』發表の前年、一八六六年、倫敦て國際的勞働者協會を創立して之を指導した。彼の思想の影響は頗る廣大且つ永續的てある。就中、一九一七年のロシアの過激派革命の如きは卽ち之に由るのてある(126)。

倫敦から自分の直弟子であるドイツ人法律家ヴィルヘルム・リープクネヒト(71)（一九〇〇死）を故國に歸還派遣したるに始る。この運動家は當時二十四歳の職工ベーベル(72)の助を得て社會運動を開始した。その結果、一八七五年、ゴータ大會に於て、リープクネヒト＝ベーベル派は故ラッサール派と合同して今日の社會民主黨を作つた。かくの如くして、ラッサールの蒔いた畑から、その收獲を取つたものはマルクスの門弟たちであつたのである。

この社會民主黨は、政黨として早く發展し、法律的に代議士の選擧を爭ひ、自黨の候補者に對して他の黨派よりも、次第により多數なる投票を集め、大體に於て改選毎に有力となり、現に一九一二年即ち世界戰亂破裂前のそれに於ては、議員數に於て比較的最大政黨となつて居る。かくの如き社會主義者の議會政治による運動は他に對して模範となつて居る。

しかし、これに連關してはビスマルクが夙にドイツ帝國に對して普通選擧を許與して居たこと、殊に彼の國家社會政策の開始を知りおかなければならぬ。以下これにつきて一言する。

そも〳〵前述のラッサールの一八六二　四年に於ける位置は、猶ほルイ・ブランの一八三〇―四八に於けると同一の意義を有つて居る。時はプロシヤ對オーストリヤ及びドイツの自由派の抗爭、竝にプロシヤに於ける憲法上紛爭の時期であつた。この際、資本家の自由主義に對して、勞働者の政治的自覺を喚起して打擊を加へたのは、ラッサールに他ならない。彼は自由派の自助自立主義に反對して、國家からの保護の必要を主張し、新しい社會問題を現實に惹起した。この論爭に於て、自由派はイギリスのマンチェスタ派の自由主義を耐述し、一切の人民の自由組合の方法に依るべしと唱へた。之に反して、ラッサールは國家をして組合を保護し、之を有功なる生產機關となし、これと同時に、勞働者自らにも政治上發言權を頒ち與ふるを要すと主張したのである。この際、この勞働運動者が、當時の國民統一を目的とするプロシヤ政治家と或る何等かの密接なる連繫を保つて居つたことは、公然の祕密である。實に、ビスマルクは、ラッサールの運動の高潮に達したる時、一八六三年九月、オーストリヤがドイツ諸君主の協議に依つて國事を定めんとの企に反對して、凡そドイツ統一の解決には各國の人口に應じて直接普通選擧による議會の成立を先決條件とする旨を發表し、彼のプロシヤ王國内に於て執り來れる保守政策と明かに對照して、大いに天下を驚かした。この宣言は、勿論オーストリヤ及び自由主義のドイツに對抗して是等の上に出づるを目的とするものであつて、社會主義そのものに對する信念から發表したのではない、只だ現實に適應する彼の高等政策の發動であつた。ラッサールの死後三年、ケーニグスグレーツの戰捷後、オーストリヤを排除してから、新ドイツの憲法の制定さるゝや、ビスマルクは果して彼の言質を實行し、帝國議會の議員は直接普通選擧によることゝしたの

てある。

統一完成後、社會民主黨は次第にその要求を高め、或はロシアの虚無黨にかぶれて過激の手段に出づるものがあつたから、ビスマルクは、一方には社會黨臨時取締法を設けたが(一八七八)、却て社會民主黨に對する世人の同情を激成したる形勢があつた。この際この國家主義的政治家が、之と同時に社會主義の要求にして合理的なるものを容るゝを利益とし、之に適應する政策を創めたのは、世界史上の偉觀てある。

ビスマルクの取つた立場は國家政策にあつた。彼はドイツ帝國の國防と財政とを竝び安固にし、且つ産業を保護するために、保護貿易主義を必要とし、西ドイツの工業をイギリスのそれから保護し、東北ドイツの農業を南ロシア及びアメリカのそれに對抗せしむるために、保護關稅を設定し、不合理なる直接稅を整理し消費稅を課し、同時に前記の如く社會主義を調容して勞働者を保護し、國家の活力を高むるに決心した。かくの如くしてビスマルクは從來ドイツに輸入されて居つたイギリス風自由主義を棄てゝ、一個の保護主義に入ることゝなつた、卽ち所謂國家社會主義の實現てある。この政策の開始は伯林會議後の十年、卽ちビスマルク在職の晩年にあつた。

尙ほこれにつきては、吾人はドイツの國家經濟主義の先覺者フリードリヒ・リスト(一八四六自殺)を追憶するの義務がある。彼はプロシャの關稅同盟作成、イギリスの自由貿易主義全盛の時代に現はれ、忌諱に觸れて、一時、合衆國に亡命住居し、新企業に從事した。彼はこの經驗に基き、凡そ國家は保護政策によりて自己の經濟財政生活を充實すべしと唱へた。彼は當時天下を風靡して居るアダム・スミスを宗とするマンチェスタ流の自由主義が只だ大英帝國の世界貿易壟斷とイギリス工業の繁昌とのみに適應するものたることを指摘し、之に反して、苟も新進國家たるものは自己の產業奬勵のために保護主義を執り、保護稅を設定すべしと論じた(『政治的經濟の國家的組織』一八四〇、スツットガルト出版)。この彼の思想及び政策は彼の生存中には十分行はれなかつた。然れども、合衆國强大の原因たるその保護貿易主義、竝に新ドイツ帝國の產業保護の國是は、卽ちリストの遺策に合致するものに他ならない。つまり、ビスマルクの國家社會主義は、一方には、社會民主主義の要求を參酌するものてあると同時に、他方に於ては、四十年前のリストの思想に裏書きを發見して居る。尙ほ注目すべきは一八七〇年代に起りたる敎壇社會主義(カテーダル・ソーシアリスム)てある。このものは伯林大學のシュモルラ[79]及びワーグナ[79]、ミュンヘン大學のブレンターノの諸敎授の創立にかゝる。彼等は十年前ラッサールの勞働運動によつて喚起された『自助(セルフ・ヘルプ)が將た國家保護(オア・スステート・ヘルプ)か』の爭議を解釋して、倫理的文化的基礎の上に是等二個の方法を結合して一個の新しき經濟組織を建設せんとするものてある。この學說とビスマルクの國家社會政策

とは竝行するのであつて、各成功して相互に確め合つたといつてよろしい。その結果、如上の爭議はおのづからその終を告げたのである。

然らば、ビスマルクのこの新政策の目的及び手段は如何であつたか、少しく之を指摘しておく必要がある。卽ち、一般の利益のために個人の活動を制限すること、國民全體の社會連帶（ソリダリア）を鞏固にすることが、その目的であつた。是等の目的を達するために、ドイツの生産を外國の競爭から安全にするために保護稅を設け、社會主義の合理的要求を容れて勞働者の生命の安全、生活の改善を保護するの法（所謂ビスマルクの社會法）を立て、プロシヤ王國の鐵道を買收して國有且つ國營として運輸の安應確實を期し、ドイツ帝國の國家としての始めての海外植民地を經營し（一八八四以後）、ハンブルグ及びブレーメンの二獨立都市國家を關稅同盟に引き入れ、而もその海外航路を保護し、國民的基礎に立ちて國內移民を奬勵し（ポーランドに於て）、更らにドイツの國際上位置を安固にする爲めに外交關係を調攝す（三國同盟）るのであつた。

それ故に、伯林會議以後のドイツが一新文化時期に入つて、物質上精神上、國力の充實を來すことになつたことは、ビスマルクの國家社會政策の開始に負ふ所大であるといはなければならぬ。

國家社會政策の開始以後、ドイツの國狀一變したけれども、資本主義の制度は尙ほ儼存して却て益

繁昌し、之と同時に、社會民主主義が國家に吸收されないで存續して居ること猶ほ舊の如くである。しかのみならず、後者の運動は却て既述の如くます〳〵盛大となつて居る。しかし、彼等のうちに、自家の目的を達する手段につきて說を異にして、近時二個の分派を生ずるに至つた。一は現在の資本主義の政府を倒すために、マルクスの遺した意見に依り、革命的鬪爭的手段を執るべしと固持するもので、リーブクネヒトの子カール・リーブクネヒト等その首領である。他は最近に現はれたもので、改正派（ヴィルヒニスト）と稱する。卽ち、社會民主黨の綱領の改正を主張し、以て現政府と妥協し、之をして社會政策を實行せしめて、漸次自家の大目的に到達すべしとするものである。後者は多數を占めて居る。つまり、ドイツの社會主義は政府と衝突しながら、而も大局の上に於て國家主義に近づきつゝあるものであることが分明する。

尙ほその外に、十九世紀の末つ方から、唯物主義に對する反動から、新理想主義てふ文化的光明が新にほのめき出して居る。それ故に、社會主義のうちにも、この新思潮をうけて理想主義的社會主義を唱ふるものすら現はるゝに至つて居る。（117、二十四講118）。

114　勞働問題

社會主義が自然の重要題目とするものは勞働問題である。この問題は、既に見たる如く、先づ西歐

の先進工業國、就中イギリスに於て起り、ついでドイツに現はれ、こゝにては社會民主黨の取扱ふ所となつて居る。イギリスにては夙に一八三三年に工場法設けられ、その勞働組合は一八七〇年前後に國法を以て承認確立され、早く勞働者の位置の安固改善をみたるが、遂に一八九〇年代以來、ジョン・バーンス[15]等の首唱の下に勞働黨組織され、爾來この政黨は若干の議席を占めた。それてあるから、由來イギリス議會政治固有の二大政黨は、アイルランド國民黨の外に、更らに一個の政治上新勢力を顧慮しなければならないことになつた。バーンスは一九〇五年自由黨内閣の一員となつた。世界戰役の危機には勞働黨の勢力一層高まり、ロイド・ジョージ内閣にヘンデルソン[16]ありて之を代表した。フランスには、敎授ジャン・ジョーレス[17]あつて、穩健なる社會主義の牛耳を執り、常に狂熱的愛國心に反對し、ドイツと調和して國際の平和を維持せんと主張し、一九一四年開戰の始め一人の狂熱愛國者のため暗殺された。

勞働爭議の要點を指摘することは、この際無用てあるまい。

凡そ資本家は勞働者を自分に從屬する位置に保ちおかうとするのてあつて、彼等は二個の主張を提出して居る。卽ち、資本家は只だ個々の勞働者とのみ勞働契約を結ぶこと、また、勞働者は契約前にあつては自由決定權を有し、而も一旦契約を結んだ以上は、全然資本家に從屬すべきものてあること、是れてある。之に對して、勞働者は社會主義を根據とする。この主義は人間の生存權を主張していふ、凡そ人間には生活し、而も幸福なる生活を享ける權利があると。又た、人間に勞働の權利があると同時に、その義務があることを唱へていふ、凡そ生活は必ず勞働に依るべきてある、苟も勞働しないものは食ふべからずと。故に社會主義はこの勞働義務といふ原則に據り、未來の理想國家を描き出し、これを一個の勞働國家（エレーボル・スワート）として居る。換言せば、この主義は勞働の神聖を唱へ、殆んど之を崇拜するものてあつて、このいはゞ宗敎的信仰を中心として種々の勞働問題を論議して居る。卽ち勞働者の組合組織、勞働と生產との關係、勞働と享樂との關係の如き問題これてある。この社會主義の上に立つて居る勞働觀は、如上の資本的の利己的態度に反對して、三個の自家正當防禦手段を主張して居る。

第一は勞働者階級の間に自ら勞働運動を行ふことてある。この運動は更らに分れて三となる。卽ち、一は自家の利益のためにする攻守同盟てある。このものは平時にあつては勞働組合（トレーヴ・ユニオン）、非常時にあつてはストライキ（ゼネスト）、同盟罷業（ボイコット）、同盟怠業（サボタージ）（妨業）、若くは大合同（サンヂカリスム）の直接行動てある。二は政治的協會又は黨派の結社、三は消費竝に生產の組合てある。

第二は國家竝に公共團體に於て社會政策と稱する手段を取らしむることてある。例へば、法律を以て小兒、少年男女、婦人を虐使することを禁止し、各種勞働の作業時間及び夜業に制限を加へ、休日

を設定し、衞生、娯樂、修養の設備を指定し、疾病、傷害、老年、死亡に對する保護を設くべきてある。所詮、工場法及び勞働保險の立法となるべきてある。又た社會的には、公設市場、公設食堂、公私設の簡易住宅、例へば大都市の郊外に於ける田園市（ガーデン・シティ）の施設となるべきてある。又た勞働者のために交通費の輕減や娯樂の提供が企てられ、時としては最低賃金が設定せられ、或は勞働會議所設立の要求すら起つて來てる。畢竟ずるに、如上例示する社會政策の中心精神は國家が勞働條件を支配し、勞働組織を公認し勞働者の生活の安固と向上とを保護促進し、つまり、國家社會主義を實現するにある。

第三は學術的研究、竝に之によつて確立された知識を根據とする社會の輿論を手段とするのてある。卽ち、諸種の社會問題研究から生ずる世上の風潮てある。凡そ社會改良（ゾーシャル・レフォーム）といふことは十九世紀以來現代輿論の標語となつて居る。しかし、共產主義や殊に無政府主義、及びこれらに伴ふ運動のしば〳〵恐赫破壞に馳せたることは、累を社會改良に及ぼし、動もすれば穩健なる社會主義をすら蛇蝎視せしむるに至つた嫌があつた。加ふるに、十九世紀末、世界の通商經濟關係が一般に好景氣てあつたから、勞働者の生活も自然に改善され、一般輿論の社會に對する不滿は輕減する傾があつた。然るに二十世紀に入りて、大資本の合同組織（トラスト）やその聯合組織（カルテル）起り、小資本家竝に勞働者を壓迫し、是等及び知識階級の生活難を來し、加之、大資本家が軍國主義と結託して利益を獨占する傾向が著しく現はれたから、世界の輿論は再び不滿となり、社會主義者流に有力なる反抗運動の口實を與ふるやうになつて居る。この際遂に世界戰亂が破裂した。

115　婦人問題　女子參政權問題

婦人の自覺の顯著となつたのはフランス大革命時代てあること勿論てある。この時歐洲最初の人權の宣言が發表されるや、フランスの婦人等も之に倣ふて女權の宣言を公けにした。恐赫政治（レイン・オブ・テロル）の犧牲になつた男まさりのローラン夫人、[78] ローマンヂックの先驅者ステール夫人（十八講82）の如きはその錚々たるものてあつた。この女權思想は同時代のイギリス婦人にも共鳴された、メーリ・ウォルストンクラフト[79]（英國思想家ゴドウィン[80]の妻にして、その間から同名の一女子生る、卽ちローマンヂック詩人シェリの後妻となる人てある）『女權の擁護（ヴィンディケーション・オブ・ザ・ライツ・オブ・ウエメン）』（一七九二年出版）を著はして、同時代に於ける女權論の代表となつて居る。ドイツの婦人運動は西歐より遲れ、且つそれほど花々しくはないけれども、ナポレオン時代に猶太人出身の知識的淑女ラエル・ファルンハーゲン[20]夫人が出でゝ、伯林社交界の中心となつて婦人運動の先驅をなして居る。

更らに女權史の飛躍を形作るものは一八四〇年代てあらう。當時フランスにても女流小說家ジョルヂ・サン（一八七六死）が現はれて居る。同時に一層刮目すべきは、合衆國に於ける『婦人の獨立の宣言』

の發表である。これは一八四八年セネカ・フォールス[24]に於て、ケデ・スタントン夫人[25]（一九〇二死）邸に於て、米國獨立宣言に擬して作られたものである。その他、米國ではスーザン・アントニ[26]（一九〇六死）、ドイツではルイゼ・オットー[27]（一九〇二死）、イギリスでは經濟學者フォーセット[28]の夫人の如きが相ついて出て居る。

如上の婦人の權利の要求は、最初は十八世紀の啓蒙思潮から發した人間天賦の個性主義を立脚點とするもので、隨て男女同權の要求となり、それが更らに分れて敎育、職業、國家生活に於ける自由平等の要求となつたのである。就中、敎育の要求につきては、男子ひとり知識の神の殿堂に入りて、之を獨占する理由はない、女子も亦た同じ神祕の奥を探りてその樂を享け、かねて男子と共鳴し、男子と同等の位置を占むべきものであると主張せられる。

以上は精神上道德上の出發點であるが、十九世紀に入りて、第二の動機が現はれた、卽ち社會上經濟上缺陷から起るものである。この缺陷は現代の產業制度に伴ふ社會生活の弊害から來て居る。何となれば、男子は生活難の增加、又は生活慾の向上のために容易に結婚しない、若し結婚するとせば、結婚から直接間接に自己の財產收入を作り、生活の安全を求める傾向が出來て來た。だから女子の結婚も亦た困難となつた　それて彼等も自立自活の道に就き、未婚て暮らすもの多くなり、隨て、內的に、女性自らに備はれる天職をつくすこと出來ない、外的に、多數男子の荒める生活に相當して、女子の若干多數は只だ性慾滿足のみに甘んじ、自ら家庭を作る能はず、彼等の內の一部分は全然墮落的行爲に陷るものさへあるに至つた。歐洲の開化國にては、女子人口が男子人口よりも多數なることは、女子結婚難の一事情であるけれども、この事情はとかく餘りに過大視される傾があつた。それよりも、より重大なるは如上の社會生活の缺陷である。

蓋し、人文の發達は社會生活の擴大を來し、この新生活は家族生活を侵蝕する。この侵蝕は最初男子に始まつた。男子は必然上自己の活動範圍を擴大しゆき、家族生活を顧み又は樂むといふ遑が少くなつた。この風はやがて婦人に及んだ。現代に於ける社會生活は宛ながら大海の潮流の如く、家族生活は海中の孤島の如くて、波濤は次第に島を蠶蝕して社會生活といふ新大陸を作り上げつゝある。かの島は削り取られて殘るところは唯だ婦人の母性あるのみ。このものが存在してこそ、家族生活の唯一の中核が持續されるなれ。然るにこれすら動もすれば浮世の荒波のために洗ひ去られんとす。何となれば、婦人の社會的經濟的生活は必然的に男子のそれの跡を逐ふて漸次擴大しつゝあるからである。

こゝに於て痛切なる婦人問題起る。この問題はイギリスの產業革命、卽ち機械工業の結果が家族の手工業を壓倒した時から始つた。この傾向は十九世紀の大工業組織、大資本主義の勃興によりて一

急激となつた。既に一八三九年イギリスの工場勞働者約五十萬に達して、女子はその二分の一を占めて居た。下層社會の婦人は生活の必要上から心ならずも工場に牽かれゆき、中流以上の婦人も、半ば自由意志により、それ〳〵より高尙なる戸外出稼に從事することゝなつた。この點に於て、ドイツはイギリスよりも遲れて居るが、近時工業の勃興と共に漸次イギリスと同然となり、二十世紀の最初十年期の調によれば、ドイツの成長せる婦人の約三分の一は家外勞働に從事して居る、その內、十六歲乃至三十歲までの家外勞働婦人の內、未婚のものは實に九割二分である、次に三十歲以上五十歲までの內、既婚者は三割八分に達し、五十歲以上では寡婦が五割七分を占めて居る。この統計によつて見ると、多數の若き成熟した女子が生活のために獨身で出稼し、一旦婚嫁するも小供が出來、生活困難を感じたるために、間もなく再び出稼するものが多いと、いふことが推知される。

つまり、現代生活は婦人の結婚を困難にし、多數の處女をして多くの年月の間家外出稼に從ひつゝ漸次老ひゆかしめ、又た多くの既婚婦人をして家內と家外との兩樣生活、卽ち游牧的生活を營ましむるものであつて、その結果、婦人の天稟たる母性が著しく迫害毀損され、家族生活の破壞を來しつゝあるのである。この害惡の根本的原因は現代の產業組織たる資本主義の跋扈に在ると主張されて居る。それで、婦人の間にありても、男子の間と同じく、勞働問題が起つて居ることは偶然でない。賃金、

その他婦人勞働特有の勞働條件が論議せられる。就中、婦人の經濟生活に適應するための敎育竝に結婚は如何に取扱はるべきか、又た職業と母性との矛盾を如何に調和すべきかなどの問題が重要視せらる。更らに一步を進めては、婦人の經濟上功勞に對して國家生活上の報酬が要求せられる。卽ち婦人の參政權問題となるのである。

合衆國にては、最初婦人の間から禁酒禁煙（テンペランス）運動起つたが、この運動捗々しくなかつたので、この目的を達するために、婦人選擧權の必要が痛切に感ぜられて茲に婦人參政權運動となつた。加ふるに、この平民的國家では、婦人の敎育及び職業大に發達し、婦人にして高尙なる職業に從事するものは他國の群を拔きて頗る多數である。例へば、二十世紀の最初十年期の統計によれば、辯護士二百人、記者九百人、說敎者一千二百五十人、女醫五千人と註せられ、若しそれ敎師に至つては、先生といへば實際女性と考へられ居るほどに無數であり、又た各種工藝學校四十三のうち二十三は女子を收容敎育し、この結果、建築技師二十二人を數へ、中には有名なる公共の大建築を仕上げたるものもあり、且つまた二十五年間に婦人が取得したる特許四千個を指摘し得るに至つて居る。それであるから、婦人參政權は漸次合衆國の州から州へと傳はつて部分的に立法實行され、既に一九一五年には、モンタナ州から一人の最初の婦人國會議員を出すに至つた。

次に議會政治の本場を一瞥しやう。イギリス代議制度は古來財産を以て基礎條件とするものであつた。かの一八三二年の選擧改正に於て、國會議員選擧權をば明文を以て男子（ヂーム）と限定するまでは、苟も一定の納稅をなすものは女子といへども選擧權を有して居つた。現に地方議員選擧にはその尙ほ　年後まで女子の選擧權を認めて居つた。かくの如き權利は、婦人としての自覺を以て實行されたものでないやうであるけれども、納稅と選擧權とが男女にかゝはらず相離るべからざるものであるといふ歷史上理由を確立せしめ得る。故に、イギリスの婦人參政權論者はこの點に第一根據を据えた。次に、イギリスには大陸諸國よりも婦人參政權論者に都合よき事情があつた。それはこの海國には從來徵兵による軍國制度が成立して居らないし、又たサリック相續法は適用されて居ない、現にヴィクトーリヤ女王が立ちて治世して居る（一八三七―一九〇一）からである。それで、政治家や學者にして種々の點から婦人參政權を贊成するものが少くなかつた。尤も有名なるはかの當時代の哲學者ジョン・スチュワート・ミル（ジェームス・ブ・ウーマン）である。彼は『婦人の隷屬論』を著はして女子の解放を主張し、當時國會議員であつたから、婦人の選擧權取得の請願を紹介して有名である。但しこの時は一九六對七三で否決された。二十世紀に入りて民主的社會主義的風潮の盛んとなるや、婦人參政運動もやうやく熱し來り、その內、フォーセット夫人（25）ウェッブ夫人等は穩健なる方法を執りたれども、パンカルスト夫人等の一派は直接行動を主張實行し、示威妨害等頗る奇矯過激なる方法に出てたから、世人の注意こそ惹きされ、却て識者の同情を失ひ、その請願は議會の拒絕する所となつて居た。かくの如くして世界戰亂の破裂となるや、こゝにイギリスは古來未曾有の軍國の危機に入り、この非常狀態は婦人參政問題の形勢を一變し、始めて之を解決するに至るべきてある。この點は最終講世界改造の下て話す方が適切てあらう（128）。

116　博愛・平和主義的運動

博愛主義及び平和主義の極致は、世界一家、四海兄弟、卽ち世界主義（コスモポリタニズム）である。このものは政治上では、古代羅馬帝國及びその傳統による思想之を代表して居る。羅馬の帝國（インペリウム）又は『羅馬の平和』（パックス・ローマーナ）といふ語は卽ち世界主義の古典的標徵てある。更らに宗敎上ては、一千五百年來羅馬加特力敎會、卽ち聖公一敎が同じ主義を標示して來て今尙昔の如くてある。しかし、近代歐洲諸國家竝び起りて相對立し、尙ほ各自に相競ふて新世界に植民又は立國するに及びては、『羅馬の平和』は疾くに夢となり、羅馬加特力敎會の世界統一の要求も亦た破綻を生じて來て、こゝに世界主義（コスモポリタニズム）よりも寧ろ萬國竝立主義（インターナショナリズム）（國際主義）が天下の通義となつて來たやうてある。

十九世紀の初期、ナポレオン帝國の天下統一の計畫破れて、歐洲列强の協調主義（コンサート）起りて世界を風靡せんとしたが、而もその後、尙ほ革命戰役しばゝ破裂し、また植民地及び新舊世界に於て種々の國

際的困難間斷なく起りてやむことなかつた。只だイギリス帝國の自由貿易及び世界市場開放運動が進行したから、資本家の提携を基調とする經濟上世界平和或は可能なりといふ自信が高まつた。恰も十九世紀の中期、倫敦に於て、かの世界最初の大博覽會が開かれたのは、如上の確信の證明と見做されて居るのである(二十講95)。而も當時、歐洲大陸には、一八四八年革命の反動著しく起り、その保守派はこの所謂『平和祭』を嘲笑し、多數の群集が平和破壞の亂階でなからうかと、大に危ぶんだ。しかし、是等兩派の見地がいづれも誤謬であつたことが、早くも發見された。何となれば、一方には大博覽會はこの第一回のものに限らず、その後回を重ぬるも決して人民の亂暴を招致したることなく、却て世界の實業を促進したことが明瞭となり、他方では世界では戰爭が實際尙終熄しない、早くもクリミヤ役勃發し、ついで中歐の國民統一戰の連續破裂あり、更らにその上に露土役といふ一大不幸さへ增したからである。是等の十九世紀中期に於ける戰亂の結果、歐洲に於て、國民的强國が作り出されて、最近の列强の體系を完成し、又もや巴里に、伯林に、列國會議を開きて歐洲の協調を合奏して平和の維持に力めることになつた。これと同時に、一八六四年、ゼネヴァ協約によつて萬國赤十字社成立し、世界諸國之に加盟して軍事の慘禍の輕減に資した、これには、その後、土耳其も日本も亦た入社した。

以上述べたる列國會議、博覽會、赤十字社の類は、すべて概して諸國政府又は準政府から發したる博愛平和の運動であつて、その精神は國際主義(インターナショナリズム)に基くものである。

この主義は、十九世紀後半以來、地球上交通の擴大進歩につれて、民間の實業、諸種の交通、思想交換等のために擴張適用された。そこて幾多の國際協會又は聯盟が催され、因て幾多の國際會議すら開かれた。一八七五年の萬國電信同盟、同年のメートル法採用同盟、一八七八年の萬國郵便同盟、ベルンに於ける特許(一八八三年)及び著作權(一八八七年)に關する萬國協約の如き、是れである。この種の國際會議の重要なるものには社會主義、婦人問題、宗教、種々の學術に關するものが太だ多い。

民間の平和運動も、また十九世紀に於ける文化運動の一てある。殊に一八七八年以後、その運動增進し、萬國平和協會の設立となり、この會は一八八九年以後は年々正規に集會し、一八九一年以後、ベルンを以てこの運動の本部として居る。幾多の博愛的有志家は之を贊し、平和主義の宣傳竝に平和の確立のために、或は執筆又は演說し、或は多額の出資するものがある。かのトルストイの論文及び小說、アメリカの富豪アンドリュー・カルネギ[26]が萬國平和會議のためにハーグに於て平和殿を建立し、殊にはニュー・ヨルクに於て世界の平和事業促進のために大規模の研究機關(カルネギ研究所(インスチチュート))を開設したが如き、スウェーデンのアルフレッド・ノーベル[27]賞金の如きは、いづれも有名てある。ノーベ

ルは化學者にして技師であつて、夙にダイナマイト等の爆發物を發明して巨富を致し、その死するや（一八九六）、世界文明の進歩のために資金を遺した。この資金は毎年五個の賞金を發するに決した。その三個は科學、一個は理想主義的文學、他の一個は國際平和の功勞に酬ゆるためである。例へば最後の點に於て、日露戰役の仲裁者アメリカ大統領ローズヴェルト㉘は受賞者となつた。最初の十一年間に於けるノーベル受賞者は六十五人（分賞者とも）、その内、イギリスは五人、フランスは八人、ドイツは實に十七人を擧げて居る。

されど、國民的强國の完成、列國の世界政策の發展と共に軍國主義大に發展し、世界の平和を脅威すること夥しい。これに反對して平和主義の旗幟の下に宗教家、學者、實業家集りて國際關係の緩和に努めて居る。殊に各國の勞働者は概ね世界的若くば國際的社會主義を抱き、如上の同じ旗幟の下に馳せ參じ、恰も實業家の一部が軍國主義と結託して軍備の擴張、海外經營に於て大資本家的利益を壟斷し、各國内部の生活の安全を害するに反對し、相提携して諸國共通の社會主義運動（インタナショナル・ソーシアリズム）を開始して來た。以上列擧した一切の世界の平和主義者は國際關係の衝突を調和するを死活問題とし、因て國際紛議の仲裁を提議し、軍備の制限と仲裁裁判所の設立を希望した。十九世紀末、世界の國際關係やうやく切迫するや、ロシアのニコラス二世如上の趣意を贊し、自ら發起してハーグに於て第一回平和會議を開いた。

時は日清戰役以後、南亞戰役以前のことである（一八九九）。會するもの二十六個國、この會議に於て列强は兵備制限の意志なきこと、人種差別觀念の强大なること明瞭となり、只だ戰爭の慘禍の輕減といふかのジェネヴァ協約の趣意により、戰爭の亂暴を制限する或る申合をなしたるに止る。その後、日露戰役のあとで、實はローズヴェルトの思ひ付きで、表面上再びニコラスの公式召集により、第二回の會合（一九〇七）が催された。この時も軍備制限の大目的は遂に達せられず、只だ戰時に關して多少の餘り重大ならざる協定が出來たばかりである。しかし、この會議は仲裁に關して若干の經つた產物を提供した、即ち萬國仲裁裁判所が永久に常設さるゝことである。この設定によつて、百年前には戰爭の原因となりやすかつた些々たる爭議が、仲裁裁判に附せられ、戰爭破裂の原因を防止しうることになつた。さりながら、當事者は只だ自己の自由合意によつて爭議を起訴し得るばかりで、之を訴へなくてもよろしい。よしや仲裁に附することになりても、裁判所が下したる判決に對しては、その實行機關が缺けて居るから、効力甚だ薄弱たるの慨みを免れない。

之を要するに、平和主義運動は、資本家及び勞働者の經濟上利害が概して平和と結び付いて居るのと相俟ちて、次第に發達したけれども、世界の現實問題に際會しては實際の効力の無いことが明瞭となりつゝあつた。さうして幾ばくもなく世界戰亂が破裂したから、一層然りとする。

117　最近の學藝　新理想主義

民主・社會・博愛・平和主義の諸運動を說き終らんとするに臨み、私は十九世紀下期以來の最近の學藝、及び之に伴ふ新思潮を概觀して置かねばならぬ。

この世紀の中期の思潮が、ローマンヂック主義を抑壓して唯物主義の全盛を致したことは、吾人の既に一瞥したところである。卽ち、學問に於ては、實驗科學及びその理論として進化論、藝術に於ては自然主義的描寫となり、政治に於ては、現實政策卓越し、經濟界に於てはアメリカ主義の流行となり、社會に於てはマルクスの社會主義及び之に伴ふ階級鬪爭の宣傳となつた。すべてが翕然として唯物の風を成したのである。この傾向は十九世紀の末期に於ても、尙ほまた二十世紀の今日に至つても、決して衰へたのではなく、却て隆盛を致して居ることは否定出來ない現實である。

しかしながら、十九世紀の末つ方の近づくに隨ひ、先覺者の間に於て、如上の傾向が獨り全盛を極めて居るのに慊らず思ひ、之に反抗して彼等の心中に新しい道德的理想的風尙の光が次第にひらめいて來たことも、亦た文化史上爭ふべからざる精神的史實である。例へば藝術に於ていはゞ、只だ自然を有のまゝに描寫するだけでは、餘りに器械的である、苟も生命ある藝術は吾人の感覺が視たまゝのその印象を描き出すところに存在しなければならぬといふ慾求が現はれて來た。この際、恰も幕末維新の日

本から、巴里に輸入紹介された日本畫が暗示した影響も亦た否定出來ない。この一派はその題目を捉えて毎に何々の印象と稱した。因て印象主義（インプレシヨニズム）といふ名稱が起つた。フランスのマネー(73)（一八八三死）はその代表的畫家である。この新しき繪畫の傾向は更らに一步を進めた、それは單に印象を描き出すばかりに滿足しないのである。藝術家の藝術的意識を純粹に表現せばやとの强烈なるあこがれとその努力となつた、卽ち後期印象派（ポースト・エンプレシヨニズム）若くば表現派（エキスプレシヨニズム）なるものは卽ちこれである。フランスのセザンヌ(74)（一九〇六死）、ドイツのヒルデブラント(31)の如きその有名なるものである。純文學に於ても亦た同やうな傾向の變化があつた。卽ち單なる自然の器械的描寫に滿足しないで、現實の奥にひそむ何物か理想的神秘的なるものを捉まんと欲した。ノルウェイの戲曲家イブセン(32)（一九〇六死）はその巨擘である。

かゝる間に自然科學に於ても亦た自己の學風そのものゝ行詰りを自覺するやうになつた。デュ・ボア・レイモント(33)（一八一八―九六）はその代表者である。彼は伯林大學の生理學敎授であつて、『自然認識の限界』（一八七二）、『世界七不可思議』（一八八二）等を著はし、自然科學が到底認識し得ない不可思議の存在することを指摘した。彼の所謂七個の認識すべからざるものは、卽ち物質とは何か、力の本質は何か、運動の起源如何、世界の目的は何か、感覺の成因は如何、言語の起源如何、自由意志の不可知なることを是れである。

かくて抽象的精神的問題に入りては、自然科學的研究法は自家の不十分なることを自白しなければならなかつた。しかし、自然科學はそれ自らの範圍に於て十九世紀末つかたから二十世紀にかけて、更らに精徹なる點まで研究上の進歩を遂げたることは、これまた没すべからざる業績である。その最も有名なるものはレントゲン線の發見（一八九五）、キューリ夫人[34]のラヂウム發見、マルコニ[35]の無線電信、ボアンカレの數學理論の如きものである。

それであるから、最近の思想界は自然主義、經驗學派を決して全然排斥し得ないのみか、ますます之を徹底的に理解把捉することを怠らないで、而もその上に更らにより高尚なる理想を索むることゝなり、因つて精神的批評的内省的研究法を執ることゝなつた。されば文化人の心は、十九世紀中期の唯物主義を去つて、上期のローマンチック風潮に再び類似したる或る精神的理想的傾向に向ひつゝある。この過渡期に立つたのは卽ちドイツの詩人にして哲學者たるニーチェ[36]（一八四四―一九〇〇）である。彼の意志哲學は、彼の思想生活の中途に於て、ダルウィンの進化論の影響を受けて、生物學的生命の如きものを思索の中心とし、自然主義、享樂主義に傾いたのであるが、その長からぬ天才的生涯の晩年の傾向によれば、その生命が進化高揚して『權力に向ふ意志』を有する一個の超個人（シューパー・ヒューマン）となつた。これが生活の窮極であつて理想の絶頂である。換言せば、生活の理想は超個人的意志を以て世界を享

樂する最高權力となるに在りといふことになる。故に、ニーチェの思想は兩面あつて、猶ほルーソーやゲーテらの如く、思想史上新舊兩世界に分屬して一時期を劃するものである。

かくの如き傾向は、人格の價値や人間の精神を尊重するものであつて、詩も、劇も、美術も、建築もこれによつて理想化され、工藝品にも新意匠が工夫される、所謂新ローマンチック是れである。而して同じ主義は更らに高尚なる精神問題に移され、哲學に於てはカントに立ち還れと絶叫されて新カント派の勃興となり、これが社會及び國家の生活の上に投射されて、理想的社會、殊に新しき理想的國家が憧憬の的となつた。之によれば、勞働者と雖も、自己の人格の完成竝に自己の技術の藝術化によつて理想的國家の有力なる荷擔者となり、彼等の抱く社會主義も亦た理想主義化さるべきである。以上の新傾向を總稱して新理想主義と名づく。ドイツのオイケン、ヴィンテルバンド、リッケルト、フランスのベルグソン[36]らの思索家はこの傾向の代表者である。

かくの如き精神傾向の尤もよく現はるゝ一は音樂である。之につきて、多少陳ぶべき筈であるが、私自らにアポーロからの天惠の乏しいのと、講義にその餘裕がないのとのために、遺憾ながら省略する。只だ一般的にいふ、ベートーフェン[37]以來十九世紀を通じ、殊に最近に於て、音樂の發展及びその趣味の進歩普及は驚くべきものがあつて、正さしく時代の銳感と氣分の躍動とを的確に象徴すると。

第二十四講　世界政策の衝突

118　カイゼル・ヴィルヘルム二世（一八八八―一九一八）

伯林會議後、ビスマルクの三國同盟を中心とする外交政策と國家社會政策とが、ドイツの國家の保全と國力の增進とに貢獻したこと、竝に之によつて生ずる製產の超過を捌くべく、彼の執政の晩年、その國民の海外植民竝に通商を促進したことは、吾人の第二十二講に見ておいた所である。

今、この帝國に、少壯有爲なるヴィルヘルム二世が君臨し、更らにその一新生面を開かんとするのことは吾人の刮目に價する。この代變り後間もなく、老宰相ビスマルクは隱退しなければならなかつた（一八九〇）。新君主はこの建國の政治家が殘したる現實的政策の遺產を尙ほ紹ぎながら、これに時代の新風潮たる理想主義的氣分を加味してドイツ國民の世界に於ける雄飛を企圖した、卽ち所謂世界政策（ヴェルトポリチーク）の展開である。蓋し、兩々相比して、若しビスマルクを現實政策の化身とすれば、ヴィルヘルム二世は寧ろ理想家であつたと謂つても可からう。

當時、二國協商は十分その功力を發揮し得なかつた。何となれば、その一たるロシアが極東經營に①沒頭し、他の一たるフランスが、一八九五―一九〇六年に跨れるドレーフュス大尉の賣國疑獄事件を中心として、國內紛擾の渦に捲き込まれて居たからである。またイギリスは南亞の經營に從事し、ついてその征服戰役の煩累に苦みつゝあつた。それであるから、ヴィルヘルム二世治世の初年に於けるドイツは、自然に國際上の間を得て、著々自己の大目的を逐ふことが出來た。卽ち、內は益〳〵保護貿易主義によりて國內の產業を奬勵し、科學を增進して工業を盛んにし、敎育を改良充實し、藝術を保護し、國民の愛國心を皷吹し、詮ずるところ、ドイツ主義を中核とする汎日耳曼主義の自覺を高めその運動を擴大した。汎日耳曼主義（パンゼルマニスム）②とは他なし、當時ドイツの政治家、軍人、學者、資本家等の喜んで皷吹するところ、就中愛國的歷史家トライチケ（一八九六死）のそれは尤も有名である。つまり、一切世界に於けるドイツ民族要素を糾合統一すると同時に一切世界に向て之を擴充せんとする主義の運動であつて、歐洲てはスウイスのドイツ部、オランダ、ベルギー、バルヂック沿岸地方、オーストリヤ、スカンヂナヴィヤの諸國を自己の繩張內に網羅せんとす。その範圍は北はベルゲン、南はトリースト、西はオステンド、東北はレヴァール③までに及ぶべきものと主張せられ、海外では南米（例へばブラジルに於けるサン・パウロ州に於けるドイツ人の移住）、アフリカ、南洋、極東にまでもその勢力を擴げつゝあつた。

この汎ゲルマニ主義的運動とカイゼルの世界政策とは二にして一てある。就中、この主義及び政策

の實行手段として、カイゼルの熱中したのは海軍擴張と』『東方策』(オリエントポリティク)即ち近東發展とであつた。海軍擴張につきては、先づバルト海と北海との連絡といふドイツ年來の宿題が、キール運河の開通（一八九五年）によつて解決し、以てドイツ海軍の能率を倍加した。ついで膠州灣の占領（一八九七）によつて、極東に於けるドイツ海軍根據地の基を粗めるや、カイゼルは親ら極東增援艦隊のキール出發に臨みて、司令官たる自分の弟ハインリヒ親王を送りて、『帝國の權力は海軍を要求す、二者は一にして分つべからず、帝國のために海軍の努力は必要なり、卿よ、若し吾人に反抗する者あらば、裝甲ひたる鐵拳を揮ふて之を倒せ』と激勵した。やがて、海軍大臣ティルピッツ(ティルピッツ)の立案せる二十年計畫の第一期海軍增建案は通過した。幾ばくもなく、南亞戰役の危機に於て、ドイツは、イギリスと拮抗するには海軍力の薄弱なることを感じたから、更らに一層の擴張（一九〇〇）が實行された。加ふるに一九〇三―四年以後は、尙ほもイギリスと競爭して、當時始めてイギリスて考案されたドレッドノート型戰艦を自分も作り始めた。如上の結果、ドイツの制海力の噸數はイギリスに對して一九〇四年には一對四、一九〇九年には五對九の比に上り、露佛を凌ぎて早くも世界の第二位に上つた。それ故に一九〇八年以後特にイギリス人のドイツ海軍恐怖病が始り、兩國の間の海軍擴張の競爭となる。

カイゼルの『東方策』は、本とビスマルクのオーストリヤとの提携に基くものであるが、最近には、

一八九八年、彼親らのコンスタンチノプル及び聖地(ホーリーランド)訪問によつて一層飛躍した。當時、彼は猶ほ中古の十字軍者の如くイェルサレムに入り、この神聖なる都に於て、加特力教會のためにその建物を喜捨建立することゝなり、同時にダマスカス市を訪づれて當年の回教の英雄サラディンの墓に花環を捧げ、宣言して曰く、『全世界に擴がり住する三億の信徒(モスレム)は、ドイツ皇帝が何時にても彼等の友人たるべきことを信じて可なり』と。蓋しカイゼルの抱懷するローマンチック理想主義はこゝに遺憾なく發揮されたといふべきてある。コンスタンチノプル訪問は聖土への途上て行はれた。この時、カイゼルはサルタン・アブヅル・ハミッドをイルヂス宮に訪ひ、苞苴を厚うしてトルコ君臣の歡心を繋ぎ、以てバグダド鐵道布設の內諾を取つた。この外交上成功はその後現はれていよ〳〵バグダド鐵道會社の設立となり、この會社をして漸次小亞細亞を橫斷して目的地に到るの工事を進捗せしめた。これと同時に、ますます〳〵オーストリヤと手を携へて、東方貿易及びその文物研究（一八九八年ドイツ東方協會の創立）を奬勵促進し、切りにイスラム敎徒の精神を鼓舞した。その影響は早く後者の間に現はれた。東方の宗敎家、學者、軍人、志士、殊に多年歐洲人から支配又は抑壓されて居た東方人民は如上のドイツ人の宣傳に呼應して、自家の自由獨立の機到れりとて、陰に陽にカイゼルを保護者と仰ぎて、こゝに、一切の回敎世界の再興を謀ることゝなつた。所謂汎イスラム主義(パンイスラミズム)の勃興これてある。この運動の中心

はコンスタンチノプルとカイローとにあつた。これがために、英露佛の各國はそれ〳〵植民地人口に多數のモスレムを有するが故に、漸く不安を感ぜざるを得ないやうになつた。この動搖を煽起したる中心は汎日耳曼主義（パンゼルマニズム）の本國にあること勿論である。こゝにてはあらゆる努力が試みられた。伯林の東方語學校に於けるセミヂック文學及びアラビヤ語研究の⑤如き、東方に於けるドイツ學校の設立及びその家庭教師の派遣の如き、將軍フォン・デル・ゴルツ⑥を派してトルコ軍隊を教習編制したるが如き、殊に、一九一〇年秋、ミュンヘン市に於ける回教博覽會の開催の如きである。これらの運動の竝進によつて、ドイツ人のイスラム世界に對する興味、傾向、活動、勢力は大に高潮した。彼等はこの運動を名づけて『東方への押寄せ（ドランク・ナハ・オステン）⑦』と呼んで居る。

尙ほドイツはアメリカ合衆國との國交に重きを措き、兩國の通商交通を增進した。この點につきて、ハンブルグ・アメリカ汽船會社が政府の保護をうけて、ドイチランド號（一九〇〇）外三隻を建造して、ハンブルグ・ニューヨーク間の大西洋連絡を促進したのは、ドイツ人の誇りとする所である。是等は一九〇六年イギリスのキュナード汽船のルシタニヤ⑧號の進水まで、世界最新式客船であつた。また文化史上等しく注目すべきは、カイゼルが大統領ローズヴェルトと交渉し、獨米交換教授の制を創めて、兩國の知識の融通思想の諒解に資したことである。ローズヴェルト任滿つるや、一九一〇年、自ら伯林大學を訪ひ、カイゼル夫妻の面前に於て『世界文化』を講じ、大學から名譽ドクトルを贈られた。

かくの如くして、一九一三年、世界戰役破裂の前年、カイゼル・ヴィルヘルム二世は、その卽位二十五年を祝したる時、彼の國民が同期間に政治、經濟、軍事、外交、知識、あらゆる方面に於て偉大なる發展を經由し來りたるを回顧して、自ら滿足することが出來た。かくの如き廣大長足の進歩は、同時代に於て、恐らくばその前年に崩御したる明治天皇治下の日本を除きては、他に匹儔を見ない。これによつて到達されたるドイツ文化の昂騰は、その國人をして、宛ら彼等の國歌の所謂『ドイツ國一切に冠たるドイツ國⑨』の實現の感を抱かしめた。

されど、海軍擴張植民地經營等は帝國財政の不足を齎らし、絶えず增稅計畫を伴ふたから、しばしば帝國議會に於ける政府と有力なる黨派との折衝起り、その協定やゝもすれば資本家地主及び保守主義の利益に傾き、一般民衆の負擔輕からざることゝなつた。それであるから、社會民主黨は次第に多く議席を占めた。彼等は一旦一九〇七年の植民地經營の豫算否決後の臨時總選擧に於て打擊を蒙りて、七十九人より四十五人に減落されたけれども、間もなく補缺選擧に於て次第に恢復增員し、一九一二年の總選擧には、一躍して全議席三百九十七名中百十名を占め、一切の政黨中比較的最大多數政黨となるに至つた。卽ち、カイゼルの赫々たる帝國には、その文化政策の發展と國力の充實とに拘らず、社會

の下層、殊に都市に於ける勞働階級を通じて、民主的風潮の横溢しつゝあることが察せられる。

119　世界の國際關係の一變

ドイツが極東竝に南亞の動搖に際して、一自己の海軍擴張の必要を感じ、之が實行に著手して居る間に、イギリス人は實に南亞の危機を親しく體驗して、自己の本國と植民地との連繫が頗る薄弱にして統一を缺き、他の强國をして乘ぜしめやすきことを覺つた。それで、彼等は當時の統一黨内閣の植民大臣チェンバレーンの提唱にかゝる帝國主義に據り、全帝國の結束を考慮しつゝあり、之と同時に、從來おのれが國際間に於て執り來つて誇りとした所謂『光榮ある孤立』(splendid isolation)(10)の位置を、心細く思ひ始めた。極東の新興の島帝國も亦たロシアの殊に拳匪の亂以後に於ける滿韓に對する侵迫運動に苦悶し、こゝにイギリスと利害の共通を感じつゝあつた。因て兩國の間に交涉取りかはされて容易に意志相疏通し、一九〇二年一月三十日を以て日英同盟條約の締結調印となつた。その目的は共同に支那及び韓國の領土保全と、是等に於ける一切國民の通商上機會均等とを維持するにあり、若しこの目的のため同盟の一國が他の一外國と戰ふ場合、他の一員は嚴正中立し、他の第三國が敵國を助くるを妨げ、若しこれが參戰する場合には、自分も同盟側に立ちて共同開戰するといふにある。この同盟の成立は實に世界の國際間に於ける一大異變である。何となれば、多年諸國の間に自己の獨立獨行を孤負したるジョン・ブルが、茲にこの同盟を作りて自らを束縛したるものである、そればかりでない、實に西歐に於ける一先進國が極東に於ける一新進國民との親密なる提携であるからである。この同盟は、日本が若しロシア一國との開戰すべき場合に、イギリスの直接援助の開始を規定して居ないけれども、事實に於て、コサックの侵略に對する日英の防禦同盟であるといふても差支なく、之がために大にロシア人の惡感が增發された。殊に彼等の滿洲占據に對して、當時イギリスの言論界は盛んにその非を鳴らしたから、一層然りとする。尙ほ、この同盟が、日露戰役の末期に改訂されて、極東の外に印度にも及ぼされ、一層鞏固なる防禦同盟となつた(一九〇五、九月)ことは、言ふまでもない。

諸君！　日露戰役は吾人の熟知する如く遂に破裂して二個年に跨る大戰役となり(一九〇四―五、當時にあつては未曾有の兵力を以て、陸では奉天(一九〇五、三月)、海では對馬(一九〇五、五月)に於て決戰した。これはロシアに取りては、一種の植民地戰であつて、之に殆んど獨占的に自己の利害を打ち込んで居たロシアの特權階級の名に因みて、『大公連中の戰爭』と嘲笑的に名づけられて居るが、その勝敗の結果、極めて重大なるものがあつた。凡そ强國の受けた打擊にして、この時より甚しきはなく、之によつて世界史に一新時期を劃し出したことは確實である。それは、一は、歐米列强關係に對する深大なる影響に存し、他は、黃色人の白人に對する勝利とも、若くば一小國の一大强國に對して

奏されたる凱歌とも見立てられ得るからである。後者の意義に於ては、この戰役は世界の小弱乃至老大諸國に對する痛切なる刺戟となつた。卽ち、ペルシヤ、トルコ、印度、支那、アイルランド、ポーランド等に於て、幾ばくもなく立憲又は獨立運動の切りに惹起されたのは、卽ち主として之に由る。

しかしながら、日英同盟及び日露戰役は、直接に於ては、その事極東のみに關し、未だ歐洲國際界の大變動を惹起するに至らなかつた。かくの如きことは、主として前節に概觀しておいたドイツの勃興から起つて來るのである。卽ちビスマルクの遺産たるドイツ國民の帝國が、ヴィルヘルム二世の下に、一層強大となつて飛躍し、從來陸上の覇者であつたものが、更らにその外に海上の帝國を築き上げんと企てゝ著々成功し、他の列强に比して國力增大が極めて顯著にして周圍の不安を惹起したことに他ならぬ。

第一に不安を感じたのは、一八七〇―一年の打擊から殷ひ出されたフランス第三共和國であつた。このものは、一八九〇年代に於てロシアとの二國同盟(105)を作り上げたに拘はらず、ロシア帝國が極東經營に向ひて西方關係を忽諸に附する傾向あると、これにはドイツの煽動が與りて力があること、これらの事情に對して、衷心では自ら同盟の利を受くることの薄きを感じて居た。一八九八年ファショダ(71)事件を機として、こゝにフランスの外交一變の必要が起つた。この時デルカッセ外相となり、之から七年間(一八九八六月―一九〇五)フランスの國交を司り、漸次イギリスとの敵對的態度を改善して、專らドイツに當るの策を執つた。

先づ、對獨關係の準備として、フランスは三國同盟の一たるイタリヤと互に接近して、兩國間の通商條約を改定し、植民地問題につきて意志の疏通を計り、且つイタリヤの三國同盟に對する義務が單に防禦的のものであるとの諒解を得た。植民地問題の妥協とは、フランスがモロッコに於て、イタリヤがトリポリに於て、各自の勢力を扶植すべきことにつきて、兩國互に反對しないといふことである(一九〇〇、一九〇一、一九〇二)。これデルカッセ就任以來フランス外交一變の結果である。

第二の結果は一層の重要なるものである。卽ちイギリスとの協商である(一九〇四、四月)。之につきては、この島帝國にても要路の人物の入れ代りがあつて、その外交振りの一變して、若しくは、この島帝國にても要路の人物の入れ代りがあつて、その外交振りの一變して、若し然るべき相手があるならば、之と握手の用意が出來て居つたことも亦た刮目に價する。卽ち一九〇〇年十一月ソリスベリ外相を罷め、ランスダウン(72)之に代り、その三月後には女皇ヴィクトリヤ崩御し、皇太子エドワード七世立つたことである。就中、新君主、時に年六十歲以上、常識と同情に富みたる好紳士にしてまた圓熟なる交際家であつて、よく大局を洞察統理するの材を有つて居た。イギリス外交の一變及びその對獨策の開始はこゝに始る。吾人の既に一瞥した日英同盟は實にこの君主治世の初

に締結されたのである。彼はフランス人との提携に興味を抱き、親しくしば〳〵巴里に遊びてその政治家と交はつた。この間に、兩國民の利害衝突の少きこと、之に反して英獨のそれが多大となりつゝあつて、獨佛の歷史的背馳に劣らないことが雙方の間に理解されて來た。

實に英獨の關係のかくの如く一變して切迫しつゝあることは、當時二十世紀初頭に於ける外交問題の最重大なる關鍵であつた。何となれば、十九世紀中に於ては、ドイツの海外發展はまだイギリスを驚かす程には至らなかつた、當時ジョン・ブルはミケルを陸上の友として親く思つて居た。然るに南亞戰役中に至りて、始めて變調が現はれた、かのジェームソン侵入の失敗の報が歐洲に傳はるや、トランスヴァール大統領に眞先に祝電を發して、イギリス人の不快を買つたのはカイゼルであつた。やがて戰役となるや、ドイツ國民は絶えずブール人に同情を表した。但しドイツの當局者は表面好意の中立を保つたから、兩國政府の關係切迫しなかつたばかりである。されども、この頃ドイツの商船竝に貿易の增加は驚くべきものがあつた。その輸出入總價額は一八九五年以後の十年間に實に二倍した。その商人は次第に市場を世界に擴張した。ドイツ技師、ドイツ書記はいづれもその道に堪能にして、次第にイギリスのそれらを驅逐して之に代はりつゝあつた。支那に於ても、近東に於ても、ドイツ人の勢力隆々として高まつた。倫敦に於てすらドイツ人の經營竝にその個人活動が次第に進み、市中到

るところドイツ商人、ドイツ番頭、ジャーマン・ボーイス、（ジャーマン・ボーイス）ドイツ商品は驚くべき多數に上りつゝあつた。之と同時に、尤もイギリス島帝國をして恐怖の念を增加せしめたのは、既述のドイツ海軍擴張の躍進であつた。就中その第二期計畫（一九〇〇）尤も然り。ついでドイツはバグダード鐵道を起工し、スウェズ經由の印度交通を威嚇するの端を發し、また同時に、膠州灣頭に青嶋を經營して山東省に於て漸く永久的政模を進めた。是等はいづれもイギリス海上帝國の不安の種でないものはない。かくの如くして、ドイツ人は二十世紀に入りては、最早や昔日の陸鼠ではなく、イギリス人と等しく水鼠となつて世界の海面に浮びて競爭し、或は之を凌ぐかも知れないといふ勢を呈して居る。されば、由來、前世紀來、彌榮えゆく島國の繁昌と世界の海面の支配とに自ら飽滿して居つたジョン・ブルが、二十世紀の最初十年間には、夜半『ドイツの侵入』『ドイツの危險』といふ惡夢に襲はれやすくなつたのは、經濟上はた政治上確かなる理由が存在する。

それ故に、英佛兩國が、各自の炯眼なる先覺的爲政治家の指導の下に、ドイツに對抗するために、相互に共鳴して協商を作り上げたのは、偶然でない。その內容の眼目は埃及とモコッコとに在る。即ち、フランスはイギリスのナイル河畔に於ける優越なる位置を、イギリスはフランスのモロッコに於けるそれを、各互に承認し、兩國は是等の各に於て互に外交上相援助すべきこと、是れてある。尙ほ

數月後にフランスはイスパニヤともモロッコに關する妥協を作つた。之からは、デルカッセは西部地中海に於て十分活動の自由を得た、しかのみならず、如上の英佛協商はかくの如き單なる明文上だけの成功に止らない、實に多年ドーヴァ兩對岸國の間に穿たれて居た鴻溝に一大橋渡を成したのであつて、隨て兩國民の間に蟠つて居た反感を一掃した。之より世界戰役破裂までの十年間、及び同戰役中の兩國の密接なる關係は、全くこの親密(アンガント・コルジアール)なる協商に基くのである。

殘つて居る對獨問題は、イギリスがフランスの同盟國ロシアと握手すべきことである。かゝる間に、ロシアの極東に於ける敗戰が明瞭となり、頗る廣大なる影響を國際間に及ぼして來た。イギリスは最早ロシアに對して亞細亞に於てこの上の警戒を加へ防禦手段を講ずるの必要を感じなくなつた。殊に近東に於ては、ドイツの『東方策(オリエントポリーク)』が纂直に躍進して英露の利益圈内まで割込むて來たから、一層イギリスのロシアに對する爭因が減じて來た譯である。唯だ中東に於てのみ幾多の未定案件が殘つて居た、卽ちペルシヤ、アフガニスタン、西藏に關するものである。是等に關して、遂に一九〇七年八月兩國の協商成立した。これにて、露佛に加ふるにイギリスを以てし、三國協商(トリップル・アンタント)が完成した。その上に、同年イギリスの同盟たる日本は、フランスとロシアとに、各協商を結んだから、三國協商の結合は一層鞏固となつた。この三國協商に對立して、三國同盟はイタリヤがフランスと旣述の如く妥協し、且つオーストリヤと境界問題につきて暗鬪して居るから、頗る薄弱の感を免れない。

之を要するに、二十世紀の初期に於ては、カイゼル・ヴィルヘルム二世の世界政策による汎日耳曼主義著しく勃興し、一方にはロシアの汎スラヴィズム、他方にはイギリスのアングロ・サキソン帝國主義の跡を逐ひて、是等と衝突しつゝある。之によつて、イギリス君主及びその政治家の下に、外交上から諸國の連繫(コルダン)を作りて中歐側を包圍し、之を孤立に陷れるといよ政策が促進されて、次第に成功しつゝあるのを見る(包圍政策(エンサークリング・ポリシー))。

120　日米關係

しばらく日米關係のことをこゝに掃んでおくが適切であらう。

日露戰役後、さきに概說したところから推知せらるゝ如く、その影響はひろく有色人種の白人に對抗する自覺の喚起となり、彼等をしておのづから日本の威名を慕はしめ、それだけ白人の日本に對する嫉妬となつた。この際、日本國民は銳意所謂戰後經營に尽掌した。彼等は如上の東洋に於ける自己に有利なる風潮の勃興に乘じて、狂熱的產業保護政策を執り、歩を內外の經濟上施設に進めた。卽ち、鐵道を國有にし、海軍を增建し、汽船會社を補助して東亞、歐米、南洋航路を延長し、絹、銅、石炭、紡績、樟腦等の工業を奬勵し、南滿鐵道を經營し、韓國を開拓し、支那、印度、フィリッピン、

濠洲、南洋諸島に向つて日本商品の販路を擴張した。

これに連關して、人口增溢の盛んなる島國政府が諸方に向つて國外移住を奬勵し、殊に布哇、北米を始とし、中米、南米に對しても、移民會社を保護し、頻繁に多數の移民を送らしめたことは、尤も列國の注意を惹いた。是等の勞働者は、他の歐洲からの者に比して、多くの特徴を有つて居る。彼等は生活費低廉にして、規律と勤勉とに秀で、頗る移住地の資本家に歡迎されるが、その習性固く國粹を保持するがために、外國風俗に移り易くないので亦た有名である。彼等は少壯の時稼ぎ蓄へたる金員を本國に仕送り、老境に入るや、錦衣歸鄕するを樂みとした。

偶、一九〇六年四月、サン・フランシスコに大地震あり、損害甚だしい。その復舊のため多數の日本勞働者需要せられ移住頓みに激增した。彼等の多くは、布哇に於て甘蔗栽培の勞働に從事するもの、こゝから、更らにより利益多き米國西海岸へと轉航したのである。サン・フランシスコを中心とする合衆國西部海岸地方の白人勞働者は日本人と競爭し得ない。濠洲に於ても、新ジーランドに於ても、みな然り。されば、太平洋沿岸一般を通じて、白人側から日本移民排斥の聲が揚つた。米國西部諸州にはかねて支那人移入取締法があつてその入國を禁止して居る。諸州の立法部は乃ち白人勞働側の運動に支配されて、この法律を一切蒙古人に及ぼすといふ法を新設して、事實上日本人の排斥

を企てた。日本政府は日米通商條約に據り之に抗議した。合衆國中央政府は當時大統領ローズヴェルト（一九〇一―九）、次にタフト[13]（一九〇九―一三）の下にあつた。この政府は如上の排斥法の設定毎に、しば〳〵之を禁止した。しかし、それだけ一層激烈に、『ジャップ』に對する排斥熱は且つ煽られ且つ高まつた。各州は中央政府の禁止權が及び得ざる州の立法權能を利用して日本人に復仇した。卽ち學校兒童の敎育問題である。サン・フランシスコでは、如上の地震破壞後の復舊の時を機として、日本兒童を普通の公立學校から排斥して、黑人の兒と同やうに、蒙古人として別に隔離して敎育せしむることになつた。日本國民は憤懣した。すると、流言が起つた、日本人は國事探偵である、或はメキシコに於て米國侵入の軍備を凝らして居ると。兩國の關係頗る緊張した。されば、その頃歐米に遊んだ日本紳士が屢ば問ひかけられたのは、『かのボルト・アーサー[14]を夜襲したやうに、この次に遣附られるのは青島か、マニラか、將たサン・フランシスコか』といふ皮肉な質問であつた。それが尤も多くドイツ人や米人から受ける挨拶であつたのである。

ペルリ[15]の浦賀訪問以來、知識上はた通商上、兩國間の親密なる交情が增進して居るに拘はらず、如上の移民關係から嵩じて來た兩國特殊の反感關係は、確かに二十世紀に於ける世界の國際問題の一大要素となつて居る。

但し、日本政府は米國との國交保全といふ高等政策の見地に立ちて、漸次妥協的態度に出たから、兩國關係は破裂を見ずして存續することが出來た。卽ち、差當り學童排斥といふ國民的名譽汚損を雪ぎ得るために、米國をしてこの排斥を解除せしめた、その代りに、米國人の經濟上社會上最も苦痛とする布哇から西海岸地方への轉航を禁止することに同意したのである。次には、特別の場合を除きて、一般移民を制限するといふ覺書が日本政府から提出された(一九〇八)。爾來、この好意的協約は忠實に實行されて事端の發生を防遏した、世に之を紳士協約(ジントルメンス・アグリーメント)と呼んで居る。蓋し、如上の日本の高等政策は、その海外貿易の約三分の一を占むる米國市場を保持しなければならぬといふ國民生活の一必要條件と、極東に於ける自國の重大なる利害とに依つて制約される所が多かつたのである。

極東では、當時問題の極めて多い且つ複雜なる支那及び滿韓がある。これらは、アメリカに於ては動亂常なきメキシコと相竝びて、日米兩國が互に相注意する所であつて、甚しきは、互に牽制し合ふべき究竟の鬪爭場裡とすら見られて居る。

支那は一九〇八年十一月、光緒皇帝及び西太后の崩御以來、形勢一轉して革命を速め、一旦時局の殆んど唯一の有力收拾者として袁世凱出でゝ自ら帝政を紹ぐを企てたけれども、彼も中道にして歿し、大勢は遂に中華民國の名の下に立憲的共和政治に向つた。只だ南北の政治家らは利害相合はない、とかく國家の統一を缺き、また財政薄弱のため、列國から借款し、隨つて之と共に種々の要求を持込まるゝを免れなかつた。この危局に於て、日本と合衆國とは支那政治家の眼中ではいづれも重きを措くところ、殊に一九一四年の歐洲を中心とする世界戰破裂後尤も然りとする。概していはゞ、彼等には米國に依賴して日本に當るの傾向が多かつた。されば、極東に於ける問題は、次に述べんとする滿韓のそれを含めて、メキシコ問題よりも利害がより直接且つより廣大にして多變的であるから、日本は尤も深くこれに痛痒を感じ、而も自家の財政基礎鞏固でないから勢ひ愼重の態度を取り、之に反して、合衆國は帝國主義的大資本主義　利益の上から、頗る積極的放膽なる行動に出づるを例として居るので、日米の外交關係は、とかく日本をして受太刀に立たしむる趣があつた。

日本の戰後經營の重要件案の一である滿韓のそれをみるに、最初、日本の元勳政治家伊藤公みづから韓國統監となりて、その統治に苦心しなければならない理由があつた。一九〇七年、かのハーグに於ける第二回萬國平和會議の開かるゝや、韓國皇帝の密使なるもの、突然、こゝに現はれて統監政治の高壓を訴へた。會議之を願みなかつた。日本乃ち皇帝の廢立を斷行した。この間にローズヴェルトは世界殊に日米の時局に鑑み、萬一の場合東西相策應しうるために、パナマ運河の完成に努力し、また海軍擴張に從事し國民の志氣を振作しつゝあつた。その跡をついだタフトはます〳〵外國貿易增進

策をひろげ、支那に於ける借款に應じ、鐵道布設權を取つた。この際、合衆國は日本の滿蒙經營に對する容喙を始め、遂にその國務卿ノックスは更らに日露兩國に提議して、滿洲鐵道を國際の平和と交通とのために中立化しやうと申出づるに至つた。當時、日露の親密なる協商が出來て居たから、兩國は提携して提議を斥けた。（一九一〇、一月）その前年秋、伊藤公は問題の滿洲鐵道に關し、露國と協定のため、自らハルビンに使し、そこで韓人のために暗殺された（一九〇九、十月）。この兇行の善後策として、寺內子統監に任じ、遂に韓國を併合して朝鮮となし、こゝに總督府を置いた（一九一〇）。

蓋し、日露役後、日本國民の重大視したる韓國問題は、なほ恰も同時期の西洋に於けるフランスのモロッコ問題に髣髴たるものがあつた、而して當時モロッコにてはドイツが干渉してフランスの優越なる位置に盾突いたが、當時の韓國の處置には、かくの如き干渉國が現はれなかつたことは、日本外交の幸福であつた。

この間、日本は既にかの所謂『紳士協約』に因つて自ら抑制する所があつて、移民問題にいはゞ蓋を蔽ふたのである。けれども、尙ほ他に一つの問題が現はれて居る、それは在留日本人の米國公民權及び土地所有權問題である。公民權はイタリヤの移民には一八九〇年代までは許されて居なかつたが、その後今は既に獲得されて居る。然るに日本人にはまだ許されて居ない。又た、土地所有權も禁止されて居る。加ふるに借地權につきても、一九一三年カリフォルニヤ州政府は、凡そ『公民權を取得しえざる人民には三年間以上の借地權を禁止するといふ法を立てた。これ實は殆んど唯だ日本人のみに關する禁止である。それであるから、日本人の神經は可なり刺撃されて居る。

かくの如く日米關係未だ釋然たらざるものがある。偶、合衆國の重大視するなるメキシコ問題に於て、或は合衆國からは日本が痛くない腹を探られ、若くば第三者から日米離間の機會を捉へられんとして居るのは、理由ないてはない。

メキシコ問題とは他なし。この國は十九世紀の初期その建國以來、とかく內亂の多い歷史を有つて居る。最近にはその大統領ポルフィリヨ・ヂアズ[177]（一八八四―一九一一）久しく鐵腕を振ふて國內を抑壓して居つたが、叛亂起つて容易に治らない。國務卿ノックス[178]は米國資本家の利益のために、ヂアズに要求して、速かに內亂を鎭定するか、否らずんば辭職せよといふ（一九一一年三月）。その結果、ヂアズ職を去つた（五月）。而も合衆國の助けたる大統領マデロ[179]は當選こそしたれ、同じく內亂を收拾し得なかつた。その次の大統領ウェルタに至つても同やうてある。それてあるから、タフトの次の合衆國大統領ウィルソンは、一九一三年十二月、宣戰に等しき宣言を發した。彼は翌年遠征軍を派遣したが、却てウェルタとその叛軍と雙方から抗議を受け、外交上困難なる位置に陷つて居る。

このメキシコ事件の進行中のことである、時は一九一二年、日本の某會社が土地をメキシコの下カリフォルニヤ州マグダレナ灣に於て購入するとの風說あるや、合衆國にてはモンロー主義の外交策が上院で發揮せられた。卽ちその議員ロッヂ(21)の提出により一個の決議となつた。如上の風說の起因たるべき事實につきては何等明確の證據はない。決議の要領は次の通りてある、アメリカ大陸の港又はその他の地點にして、之を陸海軍の目的のために占領することが合衆國の交通及び安全を脅かすべき地位にあるものを、アメリカ大陸以外の政府と密接の關係を有し、實際上陸海軍の目的のために之を支配する權力を該政府に確めるに至るべき法人又は組合の占有に歸せしめることに對して、合衆國は曇如たるを得ずといふのてある。卽ちこれ有名なるロッヂ決議（一九一二、四月二日）て、日米關係史上の一好記念となつて居る。

それから世界戰亂の酣かの時てある。一九一七年春、獨米の關係切迫し、間もなく開戰となるべきころ、ドイツの外務省はメキシコ駐箚公使に向つて、合衆國參戰の曉には、日本とメキシコとを連ねて三國同盟を作り以て合衆國を攻擊するやう取り計ふべしと訓令した。この電報遮られて合衆國政府の手て公けにされ、頗る世界の注意を惹いた。

この年、ドイツのプロパカンダは盛んに日米兩國の衝突を起さしむるに努め、或は國交の危殆を釀す虞れがあつた。而して日本にありては支那に於ける自己の經營安全の保證が必要てある、殊に滿蒙及び山東に於けるものを然りとす。就中、山東の利權は開戰の翌年、一九一五年の日支條約に依り、將來還附まて日本の保有に歸し、日本は歐洲聯合諸國からも承認を取つて居る。それて合衆國からも認めさす必要がある。そこて日本政府は、その秋、石井子を特派して國務卿ランシング(22)と協定し、覺書を交換して誤解を未然に防いだ。その協定の中心點は、合衆國及び日本兩國政府は領土相接近する國家の間に於て特殊の關係が生ずることを互に承認す、隨つて日本が支那に於て特殊の利益を有することを承認す、日本の所領に接壤する地方に於て殊に然りとするといふにある。之と同時に支那の領土主權の保全、その門戶開放、これに於ける機會均等といふ從來の國際協定も加へられて居る。之を石井ランシング協約と稱す。

如上の明文は、或は日本人によつて、合衆國のモンロー主義に對して、東洋のモンロー主義と誇稱されて居る。しかし、その所謂接壤する地方といふのは山東を含まない、只だ滿蒙地方のみと諒解さるべき理由がある、尙ほ特殊の利益といふのは、國際の辭令上、優越の利益に及ばないものてある。

一九一九年巴里講和會議に於て、日本が人種差別撤廢といふ一般原則を提議して世界の耳目を聳動

したのは、吾人の記臆に新なる所である。この議は、一般人類の通義として公明正大である、しかし、日本の移民といふ實際問題が實地に於て眞の解決を了へて居ないから、いろ〳〵の困難を伴ふて居る、隨つてこれは政策上當を得ない提議と解せられたのである。果して濠洲首相ヒューズ㉓の反對高唱の下に否決された。

121　イギリスの民主的改革　アイルランド問題

アイルランドに自治（ホームルール）を許すか、若くばこれをイギリスと統合（ユニオン）の下に置くかはイギリス內政の重要問題であつて、かねてイングリッシ對アイリッシの民族抗爭を意義し、殊に後者は多年多數アメリカに移住して本國の自主獨立を後援して列國の關心を惹いて居るから、アイルランド問題は或る意味に於て大陸に於けるポーランド國民問題に似たるものがある。

イギリスの自由黨のうちに分裂が起つたのはこの問題からである、卽ち自治を與うべしとするグラッドストンの率ゆるものから、分離して統一を主張する自由黨が出來た。このものはチェンバレーンの下にあつて保守黨と合して統一黨（ユニオニスト）を形作つた（一八九五）。十九世紀に於て多年自由貿易を國是としてきたイギリスが、帝國主義及び保護貿易主義を取り、殊に南亞統一戰（一八九九―一九〇二）を遂行したのは、この統一黨內閣であつた。この戰役はイギリスの弱點を曝露し、保護稅の弊害や、壯丁の體格の不十分なるを感知せしめたから、眞先に勞働黨の社會主義的反對を喚起した。自由黨はこの新風潮を看取し、こゝに新しい自由主義を取つた、卽ち十九世紀に於ける自由放任主義（レセーフェール）は時勢に適しない、自由黨は自ら進みて社會の困難を救助し、その幸福の增進を實行しなければならないといふのである。因てこの政黨は下層社會の經濟生活の改善を標榜し、勞働黨と提携することになつた。その結果、アイルランド國民黨を加へて、自由黨は一九〇六年以來多數を制して內閣を乘取り、一九一四年の世界戰役の開始に至つて居る。

新內閣は、アイルランドの自治の外には、トランスヴァール共和國に行政上自主を與ふること、その金鑛から支那苦力を排除すること、勞働者の保險を設くること、イングランド及びウェールスの國民教育法案、常備軍の外に護鄕兵（テリトリアルス）を組織すること等を政綱とし、海軍擴張は、最初その計畫を縮少したけれども、ドイツのそれの躍進に鑑み、やがて競爭的に之を進行することゝした。この內閣には、一九〇八年以後、アスキス㉔その首相となり、ロイド・ジョージその藏相となり、勞働黨の入閣者ジョン・バーンス（地方行政長官）等と共に、如上の新活動の首腦となつたのである。就中、ロイド・ジョージの政見及び畫策は頗る民主的社會的にして由來保守的なるイギリス人士を驚倒した。如上の政綱によりて明かなるが如く、アイルランド問題及び植民地關係の外では、社會改良と海軍擴張とがこの內

關の重要なる事業であるから、これらの費用に充つるために、ロイド・ジョージは増税を斷行し、之を大地主や富豪に於て、より多く負擔せしむるの方針を取つた。社會改良の主なるものは、工場法及び鑛山法の改良、最低賃銀法の設定、小兒保護法、老年者養護法、勞働者の職業周旋法、勞働者保險法、教育の改良法等の立法となつた。その外に、社會上財政上最も重大なるは土地問題であつた。ロイド・ジョージは、一九〇九年以來、實に大地主に對するいはゞ征伐を開始したのである。この點に於て、開戰前一九一三―四）に土地改良委員會が設けられて、小作人の保護、農夫の勞働保護、狩獵取締、荒廢に委せられたる土地の檢出及び利用、田園生活的住宅經營（『田園都市』）、土地の價値を精確公平に檢定し以て賣買と課稅とに便にすることを目的として居るが如きは、頗る吾人の注目に價する。かの既說の婦人參政權論者の奇矯なる直接行動的運動の起つたのはこの民主的施政の風潮に乘じたのである。

如上の改革の遂行費と海軍建造費とに充つるための幾多新稅の設定の必要は、こゝにイギリス上院をして斷乎たる反對運動に出でしめた。そもゝゝイギリスの憲法によれば、上院は豫算が下院通過後上議せらるゝや、只だ之を全部承認するか若くば非常の場合に之を全部拒斥するかの權能を附與せられて居るだけて、之を修正することは出來ない。世人は、一九〇九年春、內閣が人氣ある豫算を上院に廻附するや、上院が嫌やゝゝ全部承認するの外なかるべきを豫期した。然るに上院はランスダウン卿の議によりかくの如き財政計畫に伴ふ根本的改革は、豫め國民の意見を知得するにあらずんば、之を承認しがたしとの決議を三七五對七五票を以て可決した（十一月三十日）。下院はこの豫算拒絕を以て憲法破壞、民權の僭奪と宣言した。首相アスキスは乃ち下院解散に決し、下院之に三四九對一三四票を以て同意し、翌一九一〇年早々臨時總選擧となつたが、結果は、何等の問題の決定とならなかつた。何となれば幾分か自由黨は失ひ統一黨は得る所あつたけれども、兩者の得席數二七四對二七三であるから、自由黨は尙ほ內閣を維持した。アスキスは、因て、豫算提出に先ちに、憲法主義として所謂"禁止決議（トーレクリューション）"[25]を新下院に提出し可決せしめた。それは、第一、金錢に關する法案を拒絕若くば修正することは、上院にその權能なきこと、但し、かくの如き法案の種類の決定は、下院議長に一任す。第二、その他の法案にして三回の議會を引きつゞきて、下院に於て通過したるものは、上院之を拒否し得ざること、但し、その案の提出と第三回目の通過との間は二個年經過するを要す。第三、下院の任期七年を五年に短縮すること、是れてある（一九一〇、四月）。上院はこの禁止案の論議を延期した。世人は、この際、或は望を老熟なる國王エドワード七世に屬した。これ平生ひたすら外交に沒

頭し、内閣の事を一切内閣の責任に委して居る君主ながら、その個人的勢力が、兩院の行詰つた衝突を調停しうるであらうと豫期されたからである。然るにこの重要なる高貴の人物が偶病みて崩御し去つたのは、恰もこの憲政の危機であつた五月。されば、この夏から秋まで、兩院直接の交渉となつて往再決し得なかつた。上院の首領ランスダウン卿は再び陣頭に立つた。それて上述の如き財政に關しない法案につきて、その拒否に關する兩院の意見の相違を、再び人民の投票に問ふべしと決定した(十一月)。その結果、下院は再び解散し、同年内に二回目の臨時總選擧が行はれることになつた。選擧の結果は大體に於て前回同やうに、何等の決定的差異を示さなかつた。之を選擧人の投票數に見るに、禁止案に贊するもの二百三十萬票に對し、反對するもの二百四十萬票であつたから、大問題を決するに足らない。内閣は依然勞働黨とアイルランド黨との提携て、自ら維持し、翌年夏の初には、若し上院にして尚ほ頑固なる場合には、先例により新に自派の上院議員を勅選せんとの決意を極めた。

この憲法上衝突の危機に際して、外交上危機が入り込むて來、これに應じて自由黨内閣が愛國的態度を執つたから、上院の反對は急に緩和された。それはこの年七月のモロッコ事件が急轉して大藏大臣ロイド・ジョージのマンション・ハウス演説(26)となつたことてある(次節參照)。上院に於ける保守黨の首領バルフォーアはこの時今後反對を放棄すべしと發表し、翌八月上院は一三一對一一四票の多數にて禁止決議を承認した。

殘る所はアイルランド問題てある。

アイルランドへのイギリス人の植民は、主として十七世紀スチュワート家の時に始る。その植民地は主として嶋の東北部にある、卽ちベルファスト市を中心とするウルスタてある。この地方はこの活潑なる植民人口をうけて、嶋中最も繁昌する部分となつて居る。全嶋の人口の四分の三は加特力てある。尤も新敎的てあるウルスタ地方すら、舊敎徒と新敎徒は數に於て殆んど相當る。それ故に、アイルランドはイギリスに取りては常に面倒なる問題となつて來て居る。卽ちしば〳〵不穩、叛亂、時としては官憲の暗殺、外國からの侵入さへ伴はるゝ物騷な事件を惹起したのてある。

少しくこの問題の十九世紀に於ける重要なる史的發展期を繰り返し指摘せんか。對ナポレオン戰役の重大機に於て、一八〇一年、立法上統合が斷行されてアイルランドを大ブリテン及びアイルランド聯合王國(ユナイテッドキングダム)の一部とした。次にローマンヂック自由主義の高潮期、一八二九年、加特力敎徒の政權停止が解除されて、國人の宗敎的政治的不平の一部を緩減した。されど宗敎上不平がまだ尚ほ殘つて居た、それはイギリスの監督(新敎)敎會がアイルランド全體に對しても國敎として確立し、舊敎徒たるアイルランド農民といへども、この國敎のために宗敎稅を負擔しなければならなかつたからてある。

この不平は一八六九年アイルランドに於ける國教廢止によつて除かれた。

跡に、差し當り控えて居る重要問題は島内の大多數人口を形作つて居る農民の生活に關する土地問題であつた。彼等は大部分はイギリス資本家を地主と戴きてその地を小作し、豊凶不定の馬鈴薯耕作に從事して、その生活極めて不安であつた。彼等の十九世紀に於ける新世界大移住は主としてこれに因る。それて、地代を輕減して公正（フェーア）にすること、小作はその契約を一定安固（フィクスト）にして猥りに取り上げられないこと、小作權の賣買讓與が自由（フリー）なるべきこと、即ち三個のFを標語とする要求が、十九世紀中葉以來、多年アイルランド人の間から起り、本國及びアメリカに於ける内外人の同情に訴へた。イギリス議會のとかく頑固なるや、この目的を達するにはアイルランドの政治上自主の必要が感ぜられ、就中政治家パーネル（一八九一死）の激烈なる政治運動となつて來た。その結果、漸次改善され遂に政府の低利貸附資金[27]を以て四十九年間の年賦にて農民自ら小作地を買ひ上げてゆくといふ法律成立し（一八九一）、こゝに農民は自由民として生活の安定を得ることになつた。

更らに殘つて居るのは國民の政治問題であつた。即ち前記の國民の自主自治の要求である。それて、グラッドストン自由黨内閣は、一は保守黨に對抗するためにアイルランド黨と握手して一案を提出した、即ち所謂自治案（ホーム・ルール）であつた（一八八六―一八九三）。この案は只だ上院の否決によつて成立しなかつた。

二十世紀に入つて、アスキスの自由黨内閣は、前記の憲法上の危機の去るや、こゝに始めてアイルランド處分てふ宿題の解決に著手した。彼等はアイルランドの首府ダブリンに於て獨立の議會を作るにある。イギリス人は之を以てアイルランド農民が自分等を支配する政治と見做し、若し之が實現せば、自分らが統一（ユニオン）によつて享受せる憲法上既得權の損害であると論じて、この案に反對した。しかし下院は多數を以て通過した（一九一三、七月）。上院は反對した。のみならず、ウルスタに於けるイギリス人はベルファスト[28]に於て假政府を樹立し中央政府に反抗の氣勢を示した。サー・エドワード・カルソン[29]實にその首領であつた。翌年下院は同一案を再び可決し、上院はまた再び否決した。この間、アイルランドはベルファスト對ダブリンの内亂狀態に陷り、現に世界戰將さに破裂せんとする外交危機の瞬間に於て、ダブリン市中の一衝突となり、若干の死傷を出して居る（七月二十六日）。

大戰役の破裂は、イギリス嶋内の一切改革の企畫と共に、アイルランド問題を平和恢復の時まで延期せしめた。しかし、この國際上好問題はイギリスの一切の反對者からは捉へられずには居なかつた。殊に世界戰役の第三年、イギリスが遂に全國徵兵制度施行を餘儀なくされた時、アイルランド國民黨は之に同意したけれども、そのシン・フェーン[30]（我等自らの義）黨はこれに反對し望をドイツの勝利に繫いだ。

偶サー・ロージャ・ケースメント(31)なるものがドッ潜航艇の援護によりて兵器彈藥を齎らして、ひそかに西海岸に歸來するや、之を合圖としてダブリンに於てアイルランド共和國が建てられ、イギリスからの獨立を宣言した(一九一六、四月)。ケースメントは開戰前まで久しくイギリスの領事として諸方に在勤したことがある、開戰以來ドイツに滯在してその政府と通じ、しきりに故國の獨立を策して居た。如上の叛亂は市中に於て、一週間、可なりの慘血を流し且つ破壞を持來して始めて鎭壓された。

122　最近の近東問題　モロッコ及びトリポリ事件

話跡に返りて、さきに述べた國際關係の一變に引きつゞいて起る歐洲列强の大問題を說かなければならぬ。

日本の勃興は、一面から見れば、日清戰役に於て支那帝國の弱點を曝露して、極東問題を荒ら立てたのであるけれども、他面に於て、日露戰役を戰ふて、極東の平和を恢復しその局面の安定を確立した。これは爭ふことが出來ない日本の業績である。近東諸國及び地中海沿岸に於ける回教諸國に於ては、卽ち然らず。彼等自らの間から何等の有力國家起ること能はず。これらは、却て歐米國際界に取りて尤も抵抗の薄弱なる方面て、野心深き國民的國家が各自の世界政策を闘はす恰好の馳聘場裡となつた。而してこの舞臺に於ける暗闘紛爭が嵩じて、遂に世界戰亂の火を點ずべきてある。いて、この

まさに人生の頭上に落ち來らんとする恐るべき大なる世界史的運命の日のいはゞ前夜を物語らう。

ドイツは一九〇四年の英佛協約後といへども、ロシアが極東に於ける敗戰(一九〇四―五)のために薄弱となりたると、フランスの內閣が社會黨及び平和主義者のために動搖がちてあるとに乘じ、ます〳〵自分の對海外策を大膽に發揮した。當時カイゼルが最も世人を驚かしたる外交運動の一は彼のモロッコ訪問てある。時は一九〇五年三月、ザールの陸軍の奉天戰に於ける大敗を聞きたる後、彼の每年早春に行ふ地中海旅行に上り、その途次突如タンヂェール(32)港に上陸して、モロッコのサルタンを見舞ひ、その代表者と會見してモロッコの完全なる獨立を維持すと宣言した(三月三十一日)。

それから、ドイツはフランスのモロッコ侵迫を非とし、之を以て歐洲の平和の攪亂者と見做し、その責任者の罷免とモロッコ問題協議會の召集とを要求した。その時まて七年間フランスの外交を有力に指揮したデルカッセの引退しなければならなかつたのは、この危機てあつた(六月)。是れ明かにドイツの外交の成功である。因てイスバニヤのアルヘシラス(33)に於て會議開かれ(一九〇六春)、モロッコの保全と外人の安堵に關する協定が出來た、これにはフランス及びイスバニヤの警察隊指揮權が定められた。この際、ドイツの要求は、只だオーストリヤが忠實に援助したる外、イタリヤすらフランスとの協商によりてフランスのモロッコ優越權に左袒したるが故に、多く斥けられて居る。この會議の

經驗に鑑みて、既述の翌一九〇七年の英露協商も促進された譯である。

一九〇八年、ドイツに取りて第二の機會が現はれた。この年、コンスタンチノプルに於て、青年トルコ派の革命破裂し、一八七六年の憲法を恢復實行すると稱し、オスマンリといふ國名の下に一切の國内の異民族を合同統一して、國家の進歩と領土の保全とを謀らんと期した。この革命の内部の動機は、マケドニヤ問題にある。この地方に於ては歴史的に多數の異民族異教徒相犬牙錯湊して住み、民族宗教の爭奪殆んど常に絶えず、團隊（バンド）と稱する獨立部隊横行して相衝突し、掠奪殺戮頻りに行はれ、彼等の背後には利害關係の國民又は國家がありて之を操つて居る。この無警察の狀態改善のために、イギリスはロシアとレヴァールに於て妥協して將さに強硬なる談判をサルタンに持ちかけんとして居た。青年トルコは機先を制したのである。他の動機が日露戰役後のロシアのバルカンに對する威壓の輕減にあること勿論である。

さて、この革命の混亂に乘じて、而も青年トルコ政府がその立憲的政綱によりてトルコの利權恢復の要求を起すべきに先きだちて、一大鐵槌が打ち下ろされた。それはオーストリヤが委任統治領ボスニヤ・ヘルツェゴヴィナをオーストリヤ・ハンガリに合併し、その帝國領の一部分としたこと、之と同時に、これに策應して、ブルガリヤがトルコから完全なる獨立を宣言し、その君主はブルガリヤ人の

ザールと稱したことである（一九〇八、十月五日）。この打擊は宛も歐洲の國際界に爆彈を投じたる思ひあらしめた。何となれば、これ伯林條約の明文を公然蹂躙し、青年トルコの統一主義を傷け、セルビヤ人の國民大統一の要求の前路を遮るものであることは明かであつて、その上に、墺匈國がブルガリヤと提携して、セルビヤ、トルコ、希臘の利益に反して、勢力をエーゲ海に伸ばさんとする前提であると解し得られるからである。如上の合併の責任者はオーストリヤの皇儲フェルヂナンド及び外相エーレンタールであつた。皇儲は墺匈に於ける各支配國民たるドイツ及びマジャール人に對立して、スラーヴ民族を保護し、且つ之を取り込みて、第三國民團を形作り、從來の帝國の兩頭組織を三重國家に改造しやうと思ふた。ドイツのカイゼルは、最初フェルヂナンドのこのスラーヴ保護策を喜ばなかつたけれども、世界の形勢の變化に鑑み、ハプスブルグ國家がバルカンに向つて膨脹して、ドイツの『東方策』と平行互助するを可なりと信じ、途中からフェルヂナンドの政策を贊成して、如上の合併を斷行せしめたのである。現に合併の翌月、カイゼル親らフェルヂナンドを訪問して親交をかわし、皇儲がオーストリヤに於てドレッドノート建造中であるのに對しても、特に熱心なる贊辭を呈した。この際、ロシア人の間には自然に汎スラーヴ熱大に高まり、或は開戰の議があつたが、フランスは防禦同盟の外はロシアを助くるの義務なく、ロシアは疲弊未だ癒へず、何等の強國の軍事上援助なしには、中

歐の二大帝國と決戰し能はなかつたから、ザールの政府は恨を呑んだ。されば、當面のトルコは二百萬磅の償金を得て泣寢入るの外はなかつた。この事件は、猶ほ一九〇五年のカイゼルのタンヂェール訪問がフランスの鼎の輕重を問ふたのであるが如く、ロシアの國際界に於ける威名を毀損すること大なるものがある、尙ほ又た國際條約の不安全を曝露したものであるから、歐洲の外交界をして漸く警戒を加へしめることになつた。

あくれば一九〇九年の春、サルタン・アブヅル・ハミッドが反動的非常手段に出たのに對して、青年トルコはその本部サロニカから兵を都に進めて、第二の革命を斷行した。卽ちサルタンを廢し、モハメット五世を立てた。この革命の眞の働き手は敢爲なる少壯軍人エンヴェル・ベー[34]少佐であつた。彼は親獨主義の首領の一人にして、深くドイツと結託し、後、早くパシヤに進み陸軍大臣となつて權力を揮ふた。之よりドイツのコンスタンヂノープル及び近東に於ける勢力益發展した。

既に見たる如く、一九一〇五月、ドイツ包圍外交策の張本、イギリス國王エドワード七世崩ず。この君主の永眠はドイツ軍國主義者の快とする所にして　國際界安全の損失であつた。

一九一一年、モロッコに叛亂起り、外人の生命財產不安であつた。時に、この春デルカッセ再び內閣に返りてその海相であつた。フランス乃ち軍をモロッコの內地に進めて　その都フェッヅ[35]を占領す。ドイツは、之を以てアルヘシラス協約の破壞にして、列國の行動を自由にするものと見做し、因てフランスの進軍と均衡を維持する必要ありとし、七月、一軍艦を派遣して　モロッコの西南隅大西洋上の一商港アガヂル[36]を占領す、揚言していふ、同地方に於けるドイツ資本家の經營を保護すと。實はこの方面に於けるドイツ人の利害關係まだ甚ほど重大に發展し居るのではない、只だこの機會にドイツの大西洋上植民地連絡上の海軍根據地を確得しやうとし、且つこの一擊によつて英佛協商の强弱深淺を測定しやうとするものであつた。されども列國の意向非なるものがあつて、ドイツは次第に利益の交換に傾き、モロッコに對する賠償をフランス領コンゴーの海岸に求めつゝあつた。

かゝる間に、イギリスの藏相ロイド・ジョージは、七月二十一日、マンションハウスに於ける倫敦市長の招待席上、資本家に對して、『吾人は世界の銀行家である、吾人が吾人の商品を世界に賣ること世界の保險會社である、吾人の商品を世界に賣ること他の如何なる國にも優る。吾人は苟も世界の幸福に貢獻するものに無上の利害を抱くものである、之を損するものはすべて主として吾人の損耗である。只だこの瞬間に、如上の增進しゆく幸福を或は毀るかも知れない一個の事情があるばかりだ。』

平和は繁榮持續の第一條件である。英國の勢力は、しば〳〵過去に於て、人生の自由のために測るべからざる多大の奉仕を捧げた、恐らくば未來にても然有り得やう。吾が邦は一度ならず過去

に於て大陸の諸國民を壓制の不幸から救ひ、しかも國家の滅亡からさへ保存してやつた位だ、彼等はとかくこのイギリスの功勞を忘れんとしたがる。……しかし、若し吾人に一個の重大なる境遇が課せられたとせよ、それは、平和が只だ一偉業とを以て自ら取得したものである——この位置を放棄し、而して、只だ、大英國が、その死活的利害にふれる問題に於て、宛ら國際間の評定で最早や全然蔑視されるが如き取扱を容すことによつてのみ保持されるとせよ、若しかくの如き境遇が吾人に課せられるとせば、余は強く主張する、かくの如き代價を拂はなければならぬ平和は、吾人の如き一大國民が甘受するに耐えざる一大屈辱である。國民の名譽は卽ち黨派問題でない。吾人の大なる世界貿易の安固は決して黨派問題でない。』と演說して、イギリスの威名維持上ドイツに對する强硬なる態度の必要を諷した。この所謂マンション・ハウス演說はドイツ人に對して深大の感動を與へた。而して當時ドイツには開戰に必要なる財政準備の乏しきことも發見せられたらしい。それでドイツは『すべて居つた。

この際、イタリヤは一九〇〇年以來のフランスとの默契を賴みとし、突如として軍艦を急派し、トリポリ(39)を占領した。トルコ怒つて之に宣戰した(一九一一、九月)。この伊土戰役の突發は、實にカイゼルの三國同盟とトルコ及び一切回敎徒とを連結する(汎イスラミズム)一大聯盟計畫を破壞するものであつた。

モロッコに關する妥協は十一月條約を以て成立した。(一)ドイツはフランスのモロッコ保護權を承認し、自らはモロッコに對する政治上要求を全然放棄す。これによつてフランスのモロッコに於ける位置確立した。(二)フランスはその代りに、その領コンゴーの西北部に於ける內地の沃野十萬英方里を割讓す、これによつて、ドイツ領カメルーン(38)は直接にコンゴー河及びその支流ウバンヂに達することゝなつた。

さればカイゼルがアガヂルに於て打たしめた芝居は、始は脫兎の如く、終は處女の如きものがあつた。條約成立して、宰相ベートマン・ホルウェヒ(37)が之を帝國議會に報告するや、議場に嘲笑起り、就中、保守黨員ハイデブランド(36)之に反對の聲を上げていふ、新條約はこれドイツがロイド・ヂョージからうけたる屈辱であると。時に皇族席にありて傍聽したる皇太子ヴィルヘルムすら手を拍つてハイデランドに聲援し、物議を釀した位である。その他ドイツの新聞雜誌も亦た多く不平を洩らした。しかしイギリス、フランス兩國はこのアガヂル事件の經過てドイツの野心を經驗し、殊にフランス人はコンゴーの沃野を割取されたのを含むだ。

英獨間の國際關係の必迫は、兩國間の海軍擴張の競爭とモロッコ問題とに尤もよく現はれ、世界の平和を脅威すること夥しいから、兩國の政治家中には、之を憂ふるものあり、一九一二年には兩者の和解互讓を策し、その距離頗る接近し、イギリスは自分にはドイツを侵略する企もなく、且つ又た故なくしてドイツ攻擊に參加しないと聲明したが、ドイツはそれ以上を要求した、卽ちドイツが大陸に於ける開戰に入りたる曉、イギリスは絶對に戰局から中立することの宣言である、イギリスは之を拒絶した。

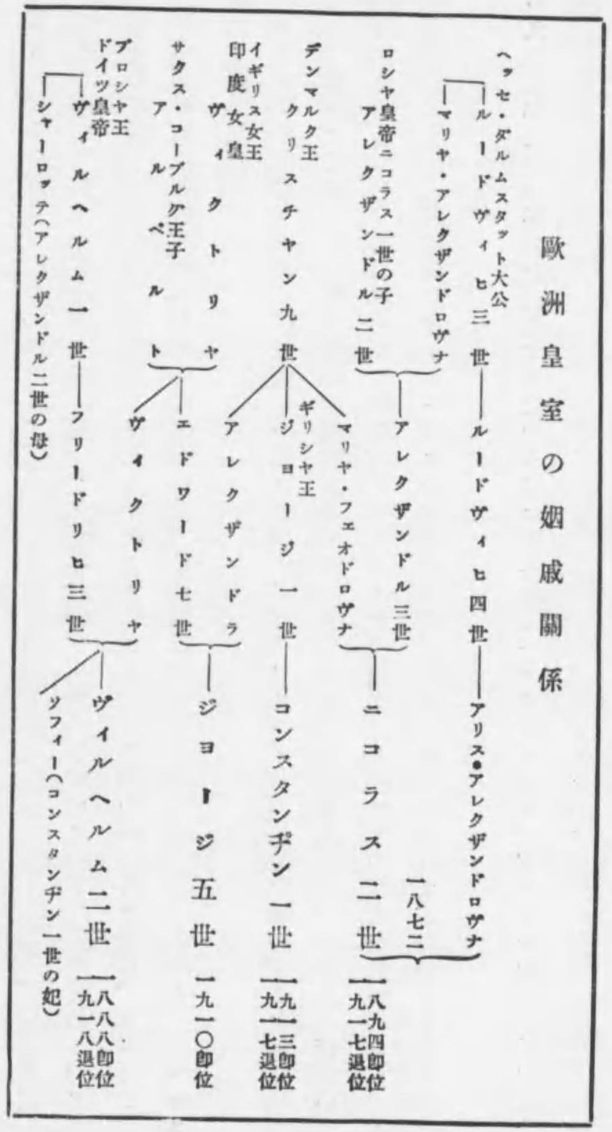
かゝる間に、かのトリポリ占領から起つた伊土戰役は長引いた。イタリヤは海岸及びエーゲヤ海島の占領に於て容易に成功したけれども、トリポリ內地の陸戰には利がなかつた。しかし、海上連絡力を有しないトルコは疲憊した。この際に乘じ、バルカン諸國はルーマニヤを除き、玆に瀕死の病人片附の機到れりとして、ロシアの默契の下に相同盟してトルコと開戰した。青年トルコ政府は已むを得ずトリポリを放棄してイタリヤと和し、專らバルカン同盟に對戰したけれども、脆くも大敗し、アドリアノープルを除き、早くもコンスタンチノープル附近まで擊退された。之を第一バルカン戰役（一九一二）とす。こゝに休戰となり、倫敦に於て會議したが、同盟側の要求はトルコに容れられず、戰役再び繼續した。諸國は講和條件の必要とするアドリアノープル及びスクータリ[41]の二地點を兵力を以て奪取した。これてトルコ遂に屈伏した。そこで戰勝の獲物の分配となつて、最も戰功あるブルガリヤひとり多きを貪つたから、こゝにセルビヤ、ギリシヤの兩國同盟してブルガリヤと開戰して之を敗つた。この危機に於て、トルコは敵の內訌に乘じて、陸軍大臣エンヴェル・パシヤの下に兵を進めて、アドリアノープルを奪回し、且つ、この時まで中立したルーマニヤは、均勢維持のためと稱し、ダニューブ河口ドブルッチヤの地をブルガリヤから占領した。之を第二バルカン役（一九一三）といふ。ブカレスト條約にて萬事決定した。

バルカン役の結果、トルコは最後の一擊によつてアドリアノープルの要地を維持するを許されたけれども、歐洲にては、その所有地の面積約五分の四と人口十分の七とを失つた。バルカン諸國いづれも擴大した。しかし、第二バルカン役に於てブルガリヤの敗北、セルビヤの擴大を見た。以上、ドイツの『東方へ押寄す』政策及びオーストリヤの南進の國是に取りては、いづれも不利益となるものである。

一九〇五年以來の事變を通覽するに、ドイツの外交は(一)カイゼルのタンヂェール訪問（一九〇五）、(二)墺匈國のボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ合併（一九〇八）、(三)ドイツのアガヂル占領（一九一一）に於て、順次に大膽なる打擊を國際界に加へたのである。而もアガヂル劇の善後策に於て、ドイツは第一著に失敗し、次にトリポリ役、殊にバルカン役の破裂及經過はドイツの外交を一層不安の位置に陷

れ、その威名の累をなした傾がある。是れドイツの汎日耳曼主義及び軍國主義連中の憤慨する所である。

歐洲皇室の姻戚關係



第二十五講　世界戰役　世界改造

123　世界戰役の原因及び導火線

諸君！　諸君は、私がこれまで數講に亘つて說き來つた所により、世界戰役が次第に招致されつゝあつたことを、略ぼ推知せられたであらう。第一、吾人の舞臺には、世界の擴大と歐米の國民の發展とに因つて、強大なる國民的國家の成立とその世界政策の展開とが齎らされて居る。而して、この國民主義の要求は、多くの強大なる國民の場合—獨伊米の如き—に於て滿足されて居る。しかし、只だこれらのみが各自の要求に應じてそれ〳〵鞏固なる國民的國家を作り上げて居るけれども、小弱若くば老大なるものにあつては、未だ各自の要求の實現を見て居ないから、是等のものは常にその機會を窺ひて國際の暗流を作つて居る。彼等の機會は、將來に於て、如上の強大なる國民的國家の世界政策上大衝突から生ずべき何等かの國際權力關係の大變動の曉に於てのみ、始めて發見捕捉さるべきである。而して、これらの大衝突の原因を滋くすべき現實の問題は少くなかつた。就中、諸國民間に蟠つて居る領土に關する嫉妬軋轢は、その最も大なるものである。この際、各國政府はとかく軍國主義を立て、國防のためと稱して軍備の競爭を行ふた。彼等はいふ、これ平和維持のために武裝するのみと。

而して、この武裝平和主義を主張するものは、實に之を本職とする政治家及び軍人ばかりでない。實に平和的經濟的事業を職分とする者の內にも、亦た大いに之に與つて居るものがあつた。卽ち一方には特殊資本家である。例へばドイツのクルップ會社、イギリスのアルムストロング會社、フランスのシュネーデル會社の如きである。是等は軍國主義と相消長する營利業者である。他方では學者、詩人、歷史家の內に軍國主義の鼓吹の一群があつた。彼等は、學術上から、進化論が確立した生存競爭及び適者生存の原理を國民及び人生の生活に適用して、戰爭を人文發展上缺くべからざる因子として是認推奬して居る。ドイツのベルンハーヂ將軍の著書、同じくハンス・デルブリュック⑦敎授の講演の如きは、いづれもその有名なるものである。かくの如く、國家生活が二十世紀初期の世界政策の展開といふ大勢に牽かれて、激烈なる生存競爭に入ると同時に、資本家及び學者等の一部が之に呼應して軍國的衝突の傾向を煽つて行つたから、民主論者や、社會主義者や、平和主義者や、宗敎家らの戰爭防止運動は、事實に於て、軍國主義者の後へに瞠若たらざるを得ざる有樣にあつた。

されば、そも〳〵將さに破裂せんとする世界戰役の根本原因は、固より十九世紀の歷史が築き上げたる國民的國家主義、及びこの主義の上に建設された強大なる國家がそれ〴〵展開した帝國主義、卽ち世界政策相互の衝突にあること勿論である。しかし、是等の衝突が實現せらるゝ具體的問題は何であるかと解剖的に觀察せば、何人もその利害の尤も重大なるものが三あつたことを發見しないものはなからう。卽ち第一は世界の通商植民場裡に於ける英獨兩國の衝突。第二は、エルザス・ロートリンゲンに關する獨佛兩國の歷史的爭奪。第三は、近東に於ける中歐同盟と列強、就中、ロシア帝國との衝突である。第一は尤も深刻廣大なる係爭にして、これが世界戰役を激成したる最大原因に位することは、その經過に徵して明かであるが、しかも直接に戰役破裂の導火線とはならなかつた。第二は歷史的に西歐と中歐との中間に橫はれる深き根底を有する重要原因であるけれども、その地は、差當り最近四十年間以上、鞏固なるドイツの統治を受け、その人民少くとも物質的幸福に浴して居るから、國際界の大變動なき限り、直接の問題とはならなかつた。之に反して、第三の近東問題は最も直接である。一九〇八年の靑年トルコの革命以來、本問題の經過は、前講旣說の如く、層一層世界の危機を呼びつゝ累進して來た。殊に、最近にバルカン役の破裂及び結果は半島諸國の竝び擴大を見、是等諸國各自の國民主義の勃興を來し、而も彼等の作りたる新境界は未だ各自の國民意識を滿足する國民的境界ではなかつた。それ故に將來に於ける一層の國民主義の衝突が痛切に豫想された。旣に歐洲に於けるトルコの版圖の瓦解が、かくの如く、重大なる國際の危機を呼び、若干の見逃すべからざる具體的變化を齎らしたりとせば、今後、只だ一老フランツ・ヨーゼフ皇帝その人の個人結合によつてのみ、繫が

れて居るハプスブルグ家の二重國家が、若し何等かの事變又は方法て分散することあらば、世界の危機一層測るべからざるものがあらう。かくの如き情形揣摩の下に、バルカン役の經過と將來の豫感とが歐洲の强國は勿論、その小國をもあげて悉くそれ〳〵萬一の警戒を怠らざらしめた。

されば、一九一三年、バルカン役が終了すべき時、諸國は早くも軍備擴張に注意し、從來先例なき大軍國主義の並び發揮せらるゝを見る。ドイツは先づ平時人員を六五六、〇〇〇人から八七〇、〇〇〇人に增員し、之に應じて臨時軍費十億マルクを可決した(六月三十日)。この年は恰もナポレオンに對する自由戰役の百年に相當し、その記念は國內到るところに壯んにせられ、就中この秋ライプチヒに於ける諸國民會戰(フェルケルシュラハト)記念碑の除幕式に於てドイツの人氣の高潮に達するを見た。フランスはドイツの擴張に答ふべく、兵役二個年を三個年に延長し、ロシアは七月の議會に於て新陸軍案を提出し、兵役三個年を更らに半年延長せんとし、フランスの軍司令官ジョッフル乃ちロシアに使して、兩國の軍備計畫につきて諜じ合はす所があつた。尙ほロシアは獨墺の境に向つて鐵道布設に著手した。オーストリヤも亦た平時人員四六三、〇〇〇人を五六〇、〇〇〇に增した。イタリヤも軍事改良を開始した。イギリスは海軍費を增加した。蓋爾たるベルギ王國は永世中立國の保證を有するもの、而も此年、最近にドイツが比較的經濟上利害の薄きベルギ境に向つて鐵道布設中なるに驚き、普通兵役の制を輸入し、從來十三萬の守備兵を飾りおきたるに過ぎざりしを、之に十五萬を加へて、小國としては可なり重要なる國防を完成するに決した。

要するに、世界戰役の直接導火の原因として如上の三大問題を擧げ得べきも、その內尤も直接なるものはバルカン問題に若くものはなかつた。

果して世界戰役はバルカン問題から點火された。卽ち、一九〇八年のボスニヤ・ヘルツェゴヴィナの合併者たるオーストリヤの皇儲フェルヂナンド及びその妃は、一九一四年六月二十八日、大演習の途次、ボスニヤの首府セラエヴォ②に入るの瞬間、セルビヤ青年に狙擊暗殺されたこと是れてある。何となれば、セルビヤ政府及びその國民は深く如上の合併を含み、墺匈國內の同族合併の宿志を拋たないて、切りに大セルビヤ主義を宣傳して居たから、兩國境上地方の紛擾絕ふることなく、相互の間の交通最も警戒せられて居たが、暗殺の行はるゝや、その下手人はベルグラード官憲と連絡あることが全然明瞭となつたからてある。オーストリヤの人心大に激昂した、蓋し、これはモロッコ事件以來挫折の傾を免れなかつたドイツ外交に取りては、何よりの好機會てあつた。加ふるに當時協商諸國はそれ〳〵多少の困難を抱いて居る。ロシアの財政經濟尙ほ未だ癒えない。フランスは內閣の醜態竝に陸軍給養の不整頓曝露し、且つモロッコ遠征中てある。イギリスにてはアイルランド自治問題のために、そのウ

スルタ州に於けるイギリス人は島内の自治に反對して却て中央政府の命を奉せず、現に恰も內亂狀態を醸しつゝある。また汎イスラミズム主義運動漸く盛んにして、埃及等にはイギリスの統治に對する不穩の兆現はれて居る。之に反してドイツはドレッドノート型戰艦時代となつてから、キール運河の取擴げに決し、一九〇五年以來一億二千萬圓を投資して工事に著手し、一九一五年までに竣成を期したが、モロッコ乃至バルカンの危機にあふたから、こゝに工事を急ぎ、一年間繰り上げて一九一四年六月方さに開通した、これドイツ參謀本部の重きをおく所であつた。而してモロッコ事件以來ドイツは正金の集積に努め、開戰當初には十一億圓以上に達せしめて居る。それ故に、ドイツはこの時若し開戰すべしとせば、尤も有利の位置にあつたものといへる。

七月二十三日、オーストリヤはセルビヤ政府に四十八時間を期する最後通牒を發した。その內に於て、一切オーストリヤ排斥を目的とする結社、出版、敎科書の禁止、オーストリヤに反對する官吏の罷免、墺匈國の領土保全の破壞を目的とするセルビヤ人の運動取締鎭壓、これには、セルビヤ政府がオーストリヤの代表者の立合とその承認とを受くべきこと等が强請された。セルビヤは、かくの如き要求は苟も獨立國家の主權を毀損すべき條項を含むて居るから、是等の一切要求を鵜呑みに容るゝ能はずとして、之を拒絕し、同時にペトログルグ政府にこの外交上壓迫の苦を訴へて、その援助を電請した。それて、ザール・ニコラス二世が、ロシア國民は同族の義に仗りセルビヤの窮境に冷淡なる能はずと聲明したのは、この時である(二十四日)。この際、イギリス外相エドワード・グレー③は倫敦に於て列國大使の協議會を催うして、調停を企てたけれども成功しなかつた(二十六日)。この間にイギリス海軍は海峽に集中して居る。オーストリヤは遂にセルビヤに宣戰してベルグラード砲擊を開始した(二十八日)。ロシアにてはこの春以來軍國主義者流勢を得て平和派を壓倒しつゝあり、この月二十日フランス大統領ポアンカレ④のクロンスタット來訪を受けて(二十二日まで)ロシア滯在、二十五日ストックホルム立寄、二十七日歸著、氣焰ます〳〵高まりて切りにザールを動かし、七年前の屈辱を雪ぐべしとなす。ロシアは既に二十五日を以て一部動員を開始し、且つドイツに交涉して、オーストリヤのセルビヤ攻擊を中止せしめんと要求したが、ドイツは、是等兩國の衝突を只だ當該兩國の事と限定し、他國の干涉を非とすと揚言し、因てカイゼルはロシアの動員解除を電請した(二十八日夜)。之に對するニコラスの返電に『朕は豫見する、朕は甚だ速かに、朕に課せられた壓迫に對してもはや耐え得ないて、戰爭に導くべき方策を執るやう餘儀なくされるてあらう』(二十九日晝)とあるは、尤もよくロシアの內情を裏切るものといへる。かくの如くして露獨兩强は先づ戰時狀態に入つた(八月一日)、世界戰役は避くべからざるやうになつた。

ドイツは、ロシアの同盟たるフランスに對するため、イギリスに局外中立を請ひたるに、イギリスはまづドイツのベルギ中立を尊重せんことを求めた。然るに、ドイツは、同一時に東西の强敵に對抗すべき內線的戰略の必要上、フランス打破を急ぎ、ベルギに向つてドイツ軍の國內通過を强請した。ベルギは西歐强國の後援に依頼し、これを拒絶した。ドイツ直ちに大軍をベルギに入れた。イギリス乃ちベルギ中立の蹂躙に藉口してドイツと絶つた(八月四日。卽ちこれ一方はイギリス、フランス、ロシア、セルビヤ、ベルギ、他方はドイツ及びオーストリヤの對戰の開始である。前者を協商軍(アンタント)また聯合軍といひ、後者を同盟軍または中歐軍と稱す。モンテネグロついで協商側に加はつた。

この際尤も注目されたのは、由來三國同盟の一員たるイタリヤ王國の去就であつた。オーストリヤのセルビヤに宣戰するや、イタリヤは早くも既に、オーストリヤに對して、セルビヤ占領の場合には、之に均等すべき賠償を得たしと申込むで居る。いよ〳〵中歐兩國が諸强國と開戰するや、羅馬政府はイタリヤの三國同盟加入の條件が元來防禦にある、之に反して中歐兩帝國の開戰は防禦戰でないとの理由の下に、自ら中立を宣言した。之から、イタリヤは雙方の外交戰の目的となつたが、翌年春遂に聯合側に引き入れられるに至るべきてある。

124 戰役の經過　一九一四年八月—一九一八年十一月)

(一)ドイツの東西進擊、戰局の東南擴大

開戰の初(八月)ドイツはベルギー境上の要塞リエージ⑤攻擊に最初の十日を要したるが、その後は、その大軍早くベルギー及びルクゼンブルグを突破南下し、北方フランスに入り直にパリーを指した。この間にイギリス軍フランドルに上陸してフランス、ベルギーに加勢したるもその功なかつた。ドイツ軍は九月上旬既にマルヌ河域に達した。フランス軍こゝにて始めてよく防ぎ、ドイツ軍は退きてエーヌ⑥河畔を守つた。この擊退戰はフランス軍司令官ジョッフルの功勞である。されど別にドイツはベルギーの要港アントワープを攻陷し(十月九日)、之と同時にイギリスの來援軍をイープルに壓した。これより西方の戰線は、兩軍塹壕を固くして對峙し、第三年の夏まで概して動かない。

かゝる間に、ロシアはオーストリヤ軍を境上に破り、ガリチヤ州に侵入し、その首府レンベルグ⑦を取り(九月二日)、別にドイツ領東プロシヤ州に突入した(八及び九月)。ドイツは國內の鐵道網を利用し、將軍ヒンデンブルグ⑧を起して速に東プロシヤの急を救はしめ、タンネンベルグの大勝を博し(八月二十六—八日)進みてロシア領ポーランドを侵した。ヒンデンブルグの名天下に振ふ。されどガリチヤにては、オーストリヤ軍ひきつゞきて利あらず、その要塞プゼミスル⑨僅かに孤守して第二年の春遂に陷つた(一九一五年三月)。ロシア軍乃ちカルパチヤ山脈を越えてホンガリヤに入らんとした。ドイツは

因てマッケンゼンの下に大軍を轉じてオーストリヤを救ひ、ロシア軍をガリチヤのヂュナエッツ河畔[10]に砲撃撃退して、六月プゼミスルを恢復した。之より獨墺軍は進みて三面よりポーランドを包圍合擊して、八月遂にワルソーを取り、ポーランド全部を占領した。なほドイツ軍の左翼は長驅してリガに迫つた。この東部戰線の勝利及びその廣大なる征服はドイツ人の『軍談的』として誇る所である。開戰滿一年の終に、ドイツは、敵が獨墺からエルザス及びガリチヤ各一部に於ける合計一一、〇〇〇平方キロメートルの占領せるに對して、中歐軍の露佛白の地一八〇、〇〇〇平方キロメートルの占領を自ら誇り、その間敵捕虜百七十萬人を數へ、その五分の四はロシア軍人であると稱して居る。

この間に、トルコは起ちて同盟側に參加したから(十一月)、戰局は近東一圓に擴がり、スエズ運河地帶、メソポタミヤ、コーカサス地方の三方面に波及した。翌年四月以來、聯合側は大擧して陸海よりダーダネルス攻擊を開始し、一方ロシアに策應し、他方イタリヤを誘ふた。開戰以來雙方の引張合になつて居たイタリヤも遂に聯合側に參加してオーストリヤを擊つことになつたのはこの時である（五月）。このイタリヤ參戰とダーダネルス攻擊とは、兩々相俟ちてバルカン諸國を誘ふにあつたけれども、後者の失敗に了りたると共に勸誘未だ功を奏しなかつた。かゝる間にドイツは前述の如くこの年夏のロシア敗退の隙に乘じて、バルカンを壓迫して來たから、ブルガリヤ遂にこれに應じて起ち、おのれは第二バルカン役の損失を償はんとて、中歐軍と共にセルビヤを夾擊した(十月)。セルビヤ早くも占領せられ(十二月)、ドイツと近東との連絡の路全く通じた。聯合軍乃ちダーダネルスから兵を轉じてサロニカに上陸せしめて、僅に敵のエーゲ海岸に出づるを沮止した。

(二)日英の制海、イギリスの努力

聯合、同盟雙方の通商植民上の利害はひろく全世界に擴がつて居るから、開戰の始、世界到る處の海面に、海軍の衝突があつた。ドイツは近時大いにその海軍を增大したけれども、未だイギリスに及ばざれば、深くその主力を收めて出戰せしめない、專ら潛航艇、ツエッペリン航空船、飛行機などを縱ちて奇勝を制するに力め、隨つて、たゞ第三年五月のユートランド沖[11]の遭遇激戰の外は、未だ海上主力の決戰を見なかつた。この役、イギリス軍艦の損失ドイツのそれよりも多大て、ドイツ人自ら捷を稱して居る。されど、イギリス海軍は、最初ゼリコー提督、ユートランド以後ベッチ[12]提督の下に敵の主力艦船に對しては、日本海軍と策應して、早くこれを殆んど全く掃蕩し、ドイツ植民地全部を占領し、大いに威力を海上に發揮した。

開戰の初、日本は大隈內閣及び加藤外相の下にあり、日英同盟條項に據り、東洋に於ける平和と通商とを確保するの義務ありとなし、因て平和恢復の曉、支那に還附する目的を以て青島引渡をドイツ

に要求した。ドイツ答へず、日本乃ち宣戰し（八月二十三日）、ついで青島を攻圍して、十一月上旬これを降した。蓋し日本の對獨戰爭の原因は一は上記の日英同盟の義務に據り、他は一八九五年の三國干涉に對する復仇にあつた。かの同盟は元來十二年前ロシアに對する防禦同盟として成立したものであつたが、この時ドイツに對するものと化し、十年前の大敵ロシアは日本と共同戰役の昧方となつたのである。翌年春、日本は支那と交涉を重ね、他に割讓せずとの條件を以て青島を戰局平定後に於て還附すべきを約し、その代りに關東州租借期限を延長し、東蒙古の市場を開かしめた。日本の海軍は別に太平洋上の警備に任じ、ドイツ艦船を驅逐し、ドイツ領南洋諸島の赤道以北半部を占領し、後、驅逐艦隊を地中海に派遣し、聯合軍輸送の保護に任ずるに至つた。また日本はこの際ロシアと親交を加へ、銃砲、彈藥、軍需品を供給してこれを助け、東部戰線に於けるロシア軍の威力の缺損を補充した。

聯合諸國は、開戰の初、ロンドンに會して單獨に講和せずと約し、ドイツ軍國打破を目的とした。されど、イギリスにては、その陸軍、初め微弱にして、殆ど聯合互助の用をなさない、最初のフランドル戰にはドイツ皇帝から『あはれな小軍』と卑められた位であつた。第二年五月、始めてアスキスの下に擧國一致內閣成り、軍需大臣新に置かれて、ロイド・ジョージ大藏より轉じてこれに任じ、陸軍大臣キチナ將軍（一九一六、六月死）に協力し、大いに兵を內外から募つた。遂に第三年の春、イギリスは遂に斷然イギリス人傳來の兵役の自由主義を拋ちて全國に徵兵令を布きて大軍を組織し、これと同時に國中の工場、勞働者を動員して專ら兵器、軍需品を製作せしめた。（128參照）。これよりイギリス漸く振ひ、優勢の海軍の外に、多大の兵力と豐富の軍資とを以て諸國を援助して、聯合結束の中堅となり、世界役に於ける眞の抗爭者がドイツに對するイギリスなること、次第にます〳〵明瞭となつた。

（三）戰局の變動、講和提議

第三年（一九一六）の春、聯合軍の西部戰線開攻の準備漸く成りつゝあつた。この際、ドイツはこれに先んじてヴェルダン要塞を强襲し、急にフランスを屈せんとしたが、フランス軍よく防ぎ、秋に至りてこれを擊退することを得た。守將ペータン[13]の功多きに居る。このヴェルダン役に策應すべく、この夏、イギリス、フランスは相提携してソム河畔の敵線を强壓して、次第に若干地域を略取し得た。聯合側の陸軍の氣勢こゝに始めて揚つた。されば明くれば第四年（一九一七）の春、ドイツ軍は漸く兵力の缺損を感じ、聯合軍の總攻擊に先だちて、更に西部戰線の突出部より撤退し、若干哩後方の戰線を守つた。世にこれをヒンデルブルグ線といふ。當時ヒンデンブルグがドイツ參謀總長たるの故である。

三年間久しく形勢を觀望せしルーマニヤは、第三年の秋、聯合軍の稍振ひ、殊にロシア軍のガリチヤに於て恢復する所あるを見て遂に起ち、トランシルヴァニヤに侵入したが(九月)、忽ち同盟軍に壓退せられ、ロシアの援軍もその功なく、却て國の大半を敵に占領せられた(十二月)。ドイツはこの戰捷を機とし、アメリカ合衆國大統領ウィルソンを介して聯合側の講和を誘ふたが、をりしもイギリスにては再び内閣の改造ありて、アスキス退きてロイド・ジョージ首相となり、少數者の有力なる軍事參議會成立し、聯合諸國と共にドイツの提議を拒絶した(十二月)。

この間、イギリス印度から派遣せられたるメソポタミヤ遠征軍はバグダードに向ふの道、ク・テル・アマラ(79)に於て却てトルコ軍に圍まれて降伏した一九一六年四月)。その後、交通機關及び兵站の改良と共に、救援到りて遠征軍再び振ひ、第四年(一九一七)の三月に至り、遂にバグダード占領の目的を達し、ドイツ近東政策の尖端を挫いた。これと同時にスエズに於けるイギリス軍も漸くパレスチナに侵入し、遂にその年末には、イェルサレムを占領した。バグダード及びイェルサレムの陷落は回教徒に對する道德上効果甚だ大なるものがあつた。またギリシャは久しく中立の名の下にドイツに傾き、サロニカ軍の背後を脅して居つたから、聯合側は海軍を以てこれを封鎖し、遂にその國王の交迭を斷行して參戰せしめた(六五二頁系圖參照)。

(四)封鎖及び宣傳戰(プロパガンダ)の高潮、米國參戰、露國脫退

海上にてはイギリスの封鎖益々嚴重となり、ドイツは次第に食糧、軍需品の缺乏に苦むだ。その食糧切符制の始まつたのは第三年の二月からである。ドイツ因てこれに報復せんがために潜航艇をイギリス近海及び地中海に放ちたれば、聯合側の艦船多く擊沈され、わが商船また時に遭難し、損害しばしば中立國の船舶竝に生命財竝にも及むだ。第二年五月のイギリスのキュナード會社のルシタニヤ號(15)擊沈の如きは一千百名以上の死者を出し、内合衆國旅客百名以上を含み、世人を戰慄せしめた。合衆國は最初より戰時禁制品を聯合側に賣込み、尤も戰時通商に利を占めつゝあつた、因てしばゝドイツに無警告商船擊沈の不法を詰りて、その反省を促した。されどドイツは、講和提議の斥けられたるが故に、第四年二月新にイギリスに對する一層嚴重なる封鎖區域を設けて、殆ど無制限擊沈の實行を開始し、數月の間に島國を降伏させんと期した。これより海上の損害、危險頓みに一時增加したから、合衆國遂に忍ぶ能はず、大統領ウィルソン(前年十一月選擧によりて再選)は世界の平和と正義との回復のためと稱し、同盟側と斷交した。ドイツがアメリカ參戰の場合、獨日墨三國同盟を締結すべく、メキシコ駐在使節に發したる訓電米國にて遮られ、却てます〳〵合衆國民激昂の種となつたのはこの危機である(前講參照)。かくて合衆國は、四月、遂に協商側と竝行して參戰するに決した。從來モン

ロー主義を標榜して來た合衆國のヨーロッパ戰參加は世界史上未曾有の事變といふべきである。この際、ウィルソンは檄を諸國に傳へたから、これよりドイツと斷交または宣戰するもの多く、支那もまた八月これに參加宣戰して、勞働者を派遣した。イギリスは時と共によくドイツの潛航艇戰に當り、合衆國の參戰に力を得てますます〳〵封鎖を峻嚴にした。その結果、ドイツと世界との交通殆んど全く杜絶した。それはドイツの思想上宣傳の禁壓をも意味するものである。この際、聯合側に於ても之に對する對抗宣傳に努め、民主主義の發揚、ドイツ軍國主義の撲滅を期すと稱し、アメリカの參戰、ロシアのザール政治の顚覆以來、その聲一層大となり、世界政策の衝突戰はさながら如上の主義戰に化したるかの觀を呈した。

この間にロシアは戰爭の失敗と食糧の缺乏とに苦みて、大に戰志を挫かれ、この際、國民の自由を唱ふるもの、勞働者及び兵卒の集團らは相與に罪を皇室及び官僚に歸して、第四年三月、一朝革命を起し、早くもロマノフ家を廢して假政府を立てゝ居る(126參照)。されど國內ますます〳〵混亂して外戰を行ふ能はず、過激派(ボルシェヴィキ)は勢を得て、十一月第二革命を發し、その首領レニン及びトロッキ(16)の下に政權を壟斷するや、全帝國いよ〳〵瓦解し、諸種の異分子蜂起して相鬩ぎ、剩へオーストリヤ、ドイツの捕虜等これに參加して、その餘波極東に及んだ。就中、在露チェック・スロヴァック(17)人は、民族自決主義に基き、國民の獨立を期するために聯合側の運動を起すに至つた。因て、之を救解して過激派に當るため、第五年の夏、日本を始め、諸聯合國が東部シベリヤに出兵することになつたのは、吾人の熟知する所である。

ドイツはロシアの革命以來、これに外交と兵力とを併せ加へてその局面を自己の利益に導かんと努めた。この年の秋、ドイツは一旦リガ市及びその灣を攻略してペトログラード侵入の勢を示し、遂に十二月過激派政府をして休戰を請はしめた。これと同時に、ドイツはオーストリヤを助け、イタリヤの戰線を突破して多大の損害を與へ、進みてヴェネチヤ方面に迫つた。但しイタリヤは聯合國の援(18)をえてよくピアーヴェ河畔に支へた。ドイツはこの年末よりロシア過激派政府とブレスト・リトウスク(19)にて會議を重ね、第五年(一九一八)三月上旬、遂にこれと單獨に講和して、廣大なる國土を割取した。是等の土地から幾多の中歐側の國家が作られることゝなつた。ルーマニヤ王國も亦已むを得ず、ブカスト條約を以て講和した。この間、ドイツは聯合諸國の講和參加を誘つたが、その效なかつた。

かくて聯合側は第四年春以來、ロシアの協力を殆んど失つたけれども、合衆國の參戰をかち得た。この國は爾來舉國一致して大いに陸海の軍備を竝び進めて兵力を輸送し、第五年七月西部戰線最後の危機にはその軍人のヨーロッパの戰地に在るもの既に百萬を越えて居た。

(五)西部戰線最後突擊の失敗、休戰、『十四個條』

さればドイツは決勝を急ぎ、第五年三月下旬以來、西部戰線の突破を敢行し、ソム、フランドル、エーヌの各方面に於て、激戰の後、頗る侵略する所があつた。聯合側は困て司令作戰の統一の必要を感じ、フランス司令官フォック[20]之に任じてドイツの突破に備えた。ドイツ軍はエーヌ方面にては再びマルヌ河に達し、七月中旬遂に渡河を強行したるが、こゝにて始めて痛く擊退せられた。これよりドイツ全軍潰走し、九月、ヒンデルブルグ線さへ守を失ひ、世界の戰局こゝに決定した。是に於て同盟四國の連繫破れ、ブルガリヤ、トルコ、オーストリヤ相ついて降伏したから、ドイツ勢孤となり、また自ら支うる能はず。

之より先、この年の一月ドイツがブレスト・リトウスク講和を迫りつゝある時、ウィルソンはその議會に御敎書を提示し、その內に於て世界の平和恢復の大綱として、『損害の補正及び權利の維持』なるもの十四個條を擧げて居る。その要點は次の如くてある。

(一)外交及び國際條約の公開、(二)和戰兩時とも、國際條約強行のためにする封鎖を除き、一切の公海の絕對的自由、(三)出來るだけ經濟上障壁の撤廢、及び一切國民の通商條件の平等、(四)國內安全と兩立する最少限度まて軍備の輕減、(五)植民地人民の利害が支配者の公正なる要求と同等に顧慮せらるべしと

の主義を嚴守して、植民地統治權の自由公平なる協定、(六)ロシア領內から撤退、及びロシア國民をして無礙獨立の發展を遂げしむるため、諸國民の最善最自由なる協力を安固ならしむるやう、ロシアの一切問題の協定、(七)ベルギーより撤退、及びその一切の損害の恢復、(八)北方フランスより撤退、及びその恢復、(九)イタリヤ國境の改正、(一〇)オーストリヤ・ハンガリヤ國內諸民族の自主的發展、(二)バルカン諸國より撤退、恢復、並にセルビヤに海口を與ふるを始め、諸國相互關係を彼等の利益及び國際の安全に資するやう、是等諸國の協定、(三)オスマンリ帝國に於けるトルコ部の獨立、他の諸民族の自由發展、並にダーダネルス海峽の開放、(一三)ポーランドは海口を與へられ、國際間に安全なる位置を確保せらるゝやう獨立す、(一四)諸國民の平和聯盟の締結、これである。

ドイツは乃ちウィルソンに向つて如上の十四個條を基礎として和議の開始を申出て、因て先づその仲介に依り聯合諸國との休戰を求めた。イギリスが第二條海洋の自由に關する個條を保留したるのみにて、イギリスを始とし一切交戰國はこれに同意し、ドイツ軍の占領地全部の撤退、聯合軍のライン河以西占領、多數の砲門、車輛、飛行機、軍艦　潛航艇の引渡といよ極めて峻嚴なる條件の下に、ドイツに休戰を許した。時に十一月九日てある。この時ドイツに革命勃發し、皇帝亡命しその他の諸君家も沒落した。(127參照)。

125　巴里の講和會議　ヴェルサイユ條約

殆んど全世界の諸國が、最近五年間悲慘に破壞されて居た世界の平和を、こゝに恢復し、之を永遠に確保しやうとする、これが一九一九年一月以來巴里に催された講和會議の使命であつた。かくの如き重大なる會議は有史以來未曾有のことであつて、またこれによつて協定さるべき諸條約ほど、世界史上緊要なる意義を持つて居るものはなからう。何となれば、先づ第一に問題とする所は、眞に名詮自稱の如く、世界の係爭であつたからである。卽ち世界諸國中戰役から自分の中立を最後まで押し通したものは、只だオランダ、デンマルク、スウェーデン、ノルウエー、イスパニヤ、ペルシヤ、メキシコの如き重要ならざる諸國を始めとし、その他中米、及び南米諸國の一部のみであつた。その他は一切の強大國を始めとし、支那、ブラジルは勿論パナマ、ハイヂ、リベリヤの小國に至るまで悉く參戰した。その結果、一方、中歐の同盟四國に對して、他方、聯合側は二十四國を算し、是等雙方の交戰國及び植民地は、實に地球上の陸地面積の殆んど七割を蔽ひ、人口及び富に於ては各約九割を占めて居る。それであるから、講和の第一目的が、殆んど全地球に亘れる交戰國間の直接國交の恢復にあることは勿論である、しかのみならず、第二には、將來に對する戰爭の防止、及び人類社會の幸福の增進に資すべき國際的施設も亦た重大なる目的となつて居る。卽ち、國際聯盟及び國際勞働に關する協約となるべき深大なる動機が伏在して居る。だから、この講和會議が、最初から非常なる重大會議として、滿天下の囑目關心する所となつたのは偶然てない。

最初、會議には、聯合側の代表者のみ召集された。諸國はおの〳〵第一流の政治家を以て講和使節に任じた。大戰の終末期以來、有力なる參戰と適切なる發言とて重きを國際間に成して來た米國からは、その大統領ウィルソン自ら海を渡つて來た。凡そ現職の合衆國主權者が任地を離れて國外に赴くは之を以て嚆矢とす。ウィルソンは夫人帶同にて、年末、先づイギリスに到著し、その皇室及び國民を訪ひ、次にフランス、更らにイタリヤを見舞ふた。これら各國の歡迎は盛大を極め、その狀さながら歐洲の救世主を引接するが如きものがあつた。日本は西園寺公及び牧野男を特派し、聯合側の五大國の一に列した。

會議は、一月十八日から巴里の外務省に於て、フランス內閣議長クレマンソー[21]主宰の下にしば〳〵開かれた。但しロシアの代表者は來て居ない。この時ウィルソンが旣述の『十四個條』を執つて自己の立場としたことは、勿論てある。日本が人種差別撤廢を提唱して、世界の耳目を惹いたのは、この機會であつた(120)。しかし、參列諸國は各自の實際的利害を顧慮し、ウィルソンの高唱する理想主義的提案に、悉く盲從するといふ譯には行かなかつた。イギリスは自己の海上帝國の利益と統一とに重

きを措き、海洋の自由なるものゝ實現を喜ばない。フランスはひたすらドイツに對する復仇と將來の安全の保證とに熱中した。イタリヤはアドリヤ海對岸に對する自己の國民的國家的擴大を主張した。日本は山東に於ける利權の無條件割讓を固執した。濠洲は日本國民の太平洋上に於ける膨脹を忌み嫌ふた。米國に於てはいふまでもない。尙ほこの國にては、種々ウィルソンに對する非難が起つた、就中、大統領が戰時以來殆んどひとり米國外交を左右し、宛然專制支配者の如くに振舞ひ、頗る國民の輿論を蔑視する傾があるといふこと、是れである。この不平は主として、國際聯盟の企に對する非難となつて現はれた(129)。それであるから、協議の進行と共に、『十四個條』の理想は、多かれ少かれ制限せられ、若くば裏切られなければならなかつた、さうして、種々の實際的妥協が成立した。

かくの如くして、四月に對獨條約の草案成り、五月、始めてドイツ講和委員を招致して之に手交された。場所は、かの普佛戰爭の終結會議が演ぜられたのと同じヴェルサイユ離宮、その『鏡の間』そのものであつた。提案に對して、何等の口頭討論は絶對に許されない、只だ書面を以て意見の提出が容るされたばかりだ。その結果、わづかに若干の餘り重大でない緩和が讓歩されたばかりであつた。ドイツは屈伏の外なかつた。六月二十二日、ワイマール(22)に於けるドイツ國民協議會は、二三七對一三八の多數を以て承諾を可決した。同二十八日、既述の同じ記念すべき場所で、ドイツ全權委員は列國使節と會合し講和條約に記名調印した。この日は、偶然にも、さきに戰役破裂の導火線をなしたセラエボ暗殺の、恰も滿五年記念日であつた。而して翌一九二〇年一月、米國を除き、諸國批准の交換が行はれて、この對獨條約は實行されることになつた。

さて、このヴェルサイユ條約は、その中に、既述の動機によつて協定された國際聯盟と國際勞働とに關する各協約が含まれて居るから、一層注目すべきものである。是等の國際的協約が設定されて居ることは、この條約をして世界史上未曾有の特徴を有せしめる重大事情の一である。いて、私は先づこれらの協約から之を要約してみやう。

國際聯盟(23)の目的及び方針は次の如くである。

聯盟國は國際間相互の協調を緊密にし、且つ國際間の平和と安全とを確保するために、國際の紛議は之を干戈に訴へて解決することをしないとの義務を承認し、各國民間の公明正大にして名譽ある關係を規定し、各國政府の行爲に對する實際上の規則として國際法の協定を確立し、各國間の交渉に於て正義を維持すると共に、すべての條約義務に對し之を嚴正に尊重することを　盟約するのである。かくの如き盟約は、ウィルソンの宣言した理想によれば、今後世界の憲法となるべきであつた。

如上の目的及び方針による方法は、可なり詳はしく具備して居るが、その要點は次の通りである。

組織は聯合側の英、佛、米、伊、日の五大國、イギリス植民地から出來て居る五個國、その他聯合側に參戰したる諸國、及びまた新に創立さるべき諸國（ポーランドの如き）、すべて三十二個國より成る。これまで中立國たりしものは加入を勸誘せらる。敵國たりしものは許されて居ない、但し講和談判中、平和條件の履行されたる場合、早き將來に於て參加が許可さるべしとの諒解が出來て居る。聯盟本部はスウィスのゼネヴァに在り、こゝに常設聯盟事務局を置く。會議は二種ある。一は聯盟總會、これには各國一個の表決權を有す、他は聯盟理事會、これは五大國と他の加入國中の四個國と合計九個國の各代表者から成る、これらは各一個の表決權を有す。理事會は少くも毎年一回開くを要す。各會議の決議は特定の外は、即ち重要問題はすべて代表者の滿場一致を要す。以上は組織の大要である。次に聯盟の事業として軍備輕減及び戰爭防止が重をおかれて居る。即ち軍備は最少限に制限し、理事會に於て之を十年毎に審査決定し、また加入各國は軍備に關して隔意なき報道を交換す。因みにいふ、ドイツに對して、陸軍十萬人、海軍十萬噸の制限を規定してあるから、若し諸國のそれが之に準じて制限せらるゝとせば、とかく軍國主義の國家として、第二のドイツと目されがちなる日本の軍備も大に輕減さるべきことになるであらう。戰爭の危險に對する豫防としては、若し外敵が聯盟國へ侵入し、又はその虞れある場合、理事會は聯盟の義務遂行のために、その執るべき具體的方法を獻策する、即ち被侵略國の領土保全及び獨立擁護の手段である（第十條）。又た加入各國は若し國交斷絶となる虞れある紛爭の起りたる場合、その問題を仲裁裁判又は理事會の審査に附すること、且つ仲裁裁判の判決又は理事會の報告の發表後三個月を經るまでは、如何なる事情あるとも開戰しないことを、互に協諾する等の細則が設けられて居る。それて、この規定に背きて猥りに交戰の擧に出でたる場合、聯盟はこの國を以て聯盟各國に對して戰爭行爲に出でたるものと宣言し、あらゆる通商・財政・交通の關係を絶つべきである。之に要する兵力の按排につきては、理事會之を計畫す。

更らに、戰役の結果沒收されたる領土にして未開人民の住居するところは、この種の人民の安寧と發展とを期するために、最も適當にして進んでその任に當るべき先進國に委任して、その敎導開發に當らしめる。即ち植民地の委任統治の規定これてある。從來の國際規約につきては、加入國は本聯盟規約に抵觸する一切の義務、竝に國際祕密協定の廢止を承認す、但し平和維持の遂行を目的とする仲裁裁判條約の如き國際協定、竝にモンロー主義の如き一定の地域に對する宣言は、この聯盟規約によつて何等の效力上の影響を受けないと定められて居る。以上は國際聯盟の大要てある。

次に國際勞働協約はその要點左の如きものてある。

國際勞働事務局は、聯盟組織の一部として國際聯盟本部の所在地に設立せられ、勞働問題の國際的

調節に關する報道、報告の蒐集配布、協定案の起草に任じ、少くとも毎年一回勞働總會を開く。この總會は聯盟各國より政府の代表者二名、使用者の代表者一名、勞働者の代表者一名を送るべし。凡そ勞働會議の決議につきては、各國政府之に準據して立法するの義務がある。若しこの義務を守らざる國あらば、勞働局の役員は審査委員を任命し、その報告によりては、國際聯盟は當該國に對して適切なる經濟上の警告方策を執り得るとある。

轉じて、戰役の敵對關係の直接處分を見るに、大要は以下の通りてある。

ドイツは一八七一年に割取したエルザス・ロートリングゲンをフランスに還附する。なほ、之に隣接するザール[24]流域の炭田地方は、ドイツが北方フランス占領中、その炭田を破壞したる損害賠償として、國際聯盟からフランスの統治に十五年間委任せられる。この期滿つべき時、この地方の所屬は一般住民の投票によつて決定す。プロシヤはベルギーに對してマルメデ[25]等の若干地域を割讓す。又た、プロシヤは新に獨立を恢復したるポーランド國にポーゼン及び西プロシヤ地方を割き、上シレジヤの一部と東プロシヤの南半部とは、プロシヤとポーランドのいづれに歸すべきかを一般住民の投票に問はる。又た、東プロシヤの東北隅にあるメーメル[26]地方は放棄せらる、これは新に作らるべきリトアニヤ國に與へらるべし。ヴィスチュラ河口ダンチヒ[27]はポーランドの海口たるべく、國際聯盟の保證の下に、自由港として獨立す。されば東プロシヤはプロシヤ王國の飛地となり、而もフレデリック大王のポーランド分割以前よりも一層削小されたる狀態に縮められて居る。なほ、一八六四年デンマルクから割取したる地方の內、シュレスウィヒ州の北半部も亦た一般住民投票に附せらるる。以上の領土變更は、之を要するに、ドイツがこれまで保有して居つた面積二〇八、〇〇〇平方哩、人口六八、〇〇〇、〇〇〇人の內から、若し上シレジヤが上記の手續で失はれるとすれば、三〇、〇〇〇平方哩（日本の本州の三分の一より稍大なり）と六、六七四、〇〇〇人を失ひ、面積に於てはフランス（從來のドイツと殆んど同面積てあるところへ上記の新恢復地五、六〇〇平方哩を加へるから）より遙かに小となり、若しドイツが、その上に、東プロシヤとシュレスウィヒとに於ける各人民投票地をも失ふとすれば、更らに面積八、〇〇〇平方哩を減ずべきことを意味する。この際、經濟上注意すべきは、還附地ロートリンゲンの鐵、委任地ザール流域竝に投票地上シレジヤ地方の各石炭が、從來ドイツ工業に取りては頗る重大なる富源を形造つて居たものてあることてある。

ドイツの植民地はすべて沒收されて、イギリス、フランス、日本の委任統治に附せらる。その內、イギリスは、アフリカに於ても南洋に於ても、各最大部分を取つて居る。日本の委任は赤道以北の南洋諸嶋のみてある。山東に關しては、ドイツが膠州灣占領後間もなく支那と締結した條約（一八九八、

三月）及びそれ以來の協定によつて獲得した膠洲灣及び山東に於ける權利特權は、その政治上のものたると經濟上のものたるを問はず、すべて日本に割讓せらる。日本が之を支那に還附すべきことは、一九一五年（大正四年）の日支條約にて明確てある。しかし、そのことは本對獨講和條約の明文に現はれてない。支那の講和委員は講和會議に向つて、ドイツから直接の還附を主張したが、會議は之を容れなかつたのてある。それてあるから、彼等は尙ほ更ら對獨條約に記名を拒絕して了ひ、隨て獨支間の講和は未だ成立しない。

何はともあれ、ドイツの植民地關係はビスマルクの帝國植民地創立以前の狀態に引き戻された、即ち何等の海外領土を有しないことになつた。ドイツは會議の際、直ちに國際聯盟加入を要求し、隨つて、自分みづからが自分の植民地の委任を統治されることを希ふたが、すべて拒絕された。換言せば、ドイツには海外に於て、何等の貯炭所も、何等自己の原料產地も殘されて居ないことになつた。

ドイツの軍備は、既述の如く、陸軍十萬人、海軍十萬噸に制限する詳細の規定がある。その上に、ライン河域方面の防備を禁止され、ヘリゴランド嶋、キール運河に於ける各防備と共にいづれも破壞され、その內、運河は開放して一切國民の商船軍艦の自由通航に任かす。

ドイツは一切の侵略地に於ける人民の一切の損害賠償の責に任ず。之によつて支拂はるべき金額は、聯合國際賠償委員會から、遲くも一九二一年五月までにドイツに通知される筈てある。それまでに取りあへず二年以內に正金、物品、船舶等にて二百億マルク（約百億圓）を支拂ふべきてある。ドイツは、最初、賠償金總額の豫め決定されんことを要求したけれども可かれなかつた。尙ほ、聯合諸國の商船の損害に對して、一千六百噸以上のドイツ商船の全部と一千乃至一千六百噸商船の半部等を、二ヶ月以內に交附し、更らに追加賠償として、向五ヶ年間每年二〇〇、〇〇〇噸の商船を建造して聯合國に渡すべきてある。ドイツは休戰以來聯合軍の占領地駐屯軍の費用を、その今後占領する期間は、他の支拂よりも眞先に支拂ふべし。

ドイツはブレスト・リトウスク條約及びブカレスト條約の破棄を承認す。

ドイツは戰爭の責任者として審問せらるべき聯合側の指名する人々を引渡すことを承諾す。その筆頭に前カイゼルだけは條約文に既に明記されて居ることは世界の大いに注目するところてある。ヴィルヘルムは今はオランダに寄寓し、同國政府はその引渡を拒むて居る。因みに、オーストリヤの廢帝カール七世は指名されて居ない。この人は戰役第四年、一九一七年秋老帝フランツ・ヨーゼフの崩御によりその跡をついだのてあつた。

以上は對獨講和條約に據るものてある。次にオーストリヤとの條約は七月巴里郊外サン・ゼルマン

宮で手交され、十月二十五日、同所で調印された。これによれば、大要次の如くてある。

オーストリヤ・ハンガリといふ尨大なる二重國家は分散す。オーストリヤは東てはヴィーン、西てはインスブルックを含む一個の頗る狹小なる地域に限らる。而もこのドイツ人の國は新ドイツ聯邦に加入を禁止されて居る。ブレンネル峠以南(トレンヂノ)の地及びトリーストはイタリヤに割讓せらる。その他の領土は悉く放棄される。その內からハンガリヤ本部が、オーストリヤと同じく、ブダペストを中心とする一個の狹小なる地に限りて、獨立國として殘さる外は、すべて新國家の創立若くは既設小國の擴大の用に供さるべきてある。卽ち、チェック・スロヴァック國の創立、ポーランド新國家への割讓、ルーマニヤ王國に對してトランシルヴァニヤの割讓、セルビヤに對してクロアヂヤ、スロー[ヴェ]ネン[ヅ]を割きて、是等三部合一の南スラーヴ[ユーゴ]國の創立に、それ〳〵充てらるべきてある。これらの領域は境界委員によつて定めらるべきてあつて、まだ精確てない、殊にユーゴ・スラーヴの如きはそれてある。

この國につきて最も困難なのは、フューメ[31]問題てあつて、『十四個條』の一の原則に據れば、この港は新に創立されたユーゴ・スラーヴに與へらるべきてある。然るに、イタリヤ政府は一九一五年春の參戰に先ち、その報酬として、英佛露三國との秘密條約によりダルマチヤ沿岸の大部分の割讓を約されて居る。その範圍內には、フューメの港市は含されて

居ない。しかし、イタリヤは自己の國民が多數そこに在住するの故を以て、『十四個條』中の民族自決主義を楯に取つて、巴里會議に於て敢然之を要求した。米國は如上の條約には與つて居ない。ウィルソンはユーゴ・スラーヴのためにイタリヤの要求を却けた。それが爲めに、イタリヤの使節は憤然巴里を引揚げて一時會議から脫退の意氣込を示した位てであつた。米國は依然懸案となつて居る。九月の某日には、突如として(四月)、わづかに仲裁によつて會議に復歸し、如上の講和に參加したのみてある。フューメ[31]イタリヤ愛國詩人ダヌンチヨ飛行機に乘じて、この市に入り、爾來、イタリヤ政府及び聯合占領軍を蔑視して、自ら國民のためと稱して全市を占領した。このアドリヤ海上の爭の地點が如何に處分さるべきかは、極東に於ける山東問題と同じく、日伊兩國の各自に深大の利害を感ずる所にして、世界國際間の難問題に屬する。

更らに轉じて、吾人はトルコのサルタンが包有する歐亞に跨れる老大國が如何に處理さるべきかを見なければならぬ。實はこれは未だ確定しない。只だ、その內から、希臘王國の擴大に供せられる所があり、若干の保護國が作られ、又た殊には、英佛伊間の分轄する幾多の委任統治領が設定さるべきは、世人の豫想する所てある。世界の經濟上外交上最も注目されるのは、コンスタンチノープルの支配、及びダーダネルスの通航問題てある。この通航は列國に開放さるべきてある。しかし、都の支配

につきては、米國の委任統治に附すべしとの議一時盛んてあつたが、最近の國際事情の變動のために模様改へとなり、依然サルタンをこゝに留めて、兵備の制限、列國監視の下に君臨せしむることに内定した（一九二〇年四月サン・レモ[32]に於ける英佛伊の會議）。蓋しこの處分には、汎イスラム世界の人心が敎首としてのトルコのサルタンに對する同情を起し、殊に英領印度に於ける回敎徒の自主的自覺の勃興著しきものがあるが故に、之を宥める必要が與つて力あるやうてある。

一層重大なる懸案はロシア問題てある。この廣大なる全版圖が、過激派政府と非過激派との對抗て内亂に陷り、聯合諸國竝に接壤地方との關係が殆んど全く不定狀態にあるから、世界戰役の終結がまだ完全に收拾されない、しかのみならず、動もすれば世界の平和を脅威する暗雲が尙ほ棚引いて居る。

一言にいへば、巴里會議は、開會以來一九二〇年の初めまての一年間に、諸國の國交の恢復と世界の平和の確保とに對して、既に多大の事業を成し遂げて居るけれども、上述の如きロシアの内亂狀態の外に、米國元老院の態度、中歐近東の不安等のために、會議の使命は尙ほ未だ完了して居ないのてある。その事情は、次節以下に述べんとする所を考へ合はしたならば、思ひ半ばに過ぎるてあらう。

ロシア專制政治に對する改革の企は、十九世紀中葉から著しく起つて居つたけれども久しく成功しない。世界の獨裁主義の絶頂點に位するザールの權力が何等かの憲法によつて制限され始めたのは、二十世紀の初、實に日露戰役の敗北以後にある。即ち、この時一九〇五年破裂の革命の結果、ザールは已むを得ず所謂『十月勅令』を發し、この約束に從ひて翌年ロシア最初の帝國議會（ダウマ）[33]が召集されたのてある。この勅令を贏ち得た立憲派を名づけて十月黨と稱す。この勅令の發布は未だ内閣の責任及び議會の主權を確立したのではないが、而もたしかにロマノフ家の專制政治に對する一大制限を劃し、東スラーヴ及びその下に支配される諸民族から成る半歐半亞的大國家の立憲生活の開始にして、最近の革命に至るまての政治上發展の出發點てある。

この發展の思想上源泉は、ロシア特有の『インテリゲンチャ』[34]と稱する知識階級から發して居る。このものゝ傾向は大體二つの方向に走つて發展した。一は、前記の十月黨に現はれた憲法主義てあるが、他は、虚無黨に現はれたバクーニン等の無政府主義（第二十四講參照）の流れてある。後者は十九世紀の末から二十世紀にかけて衰へた、否な他の主義の方へ移つたともいへる。それは虚無黨が執つて來たその固有の恐怖破壞手段が大局の上には奏功少いことが發見され、自然に之を差控えて、それよ

りも社會民主黨的傾向に移つて行つた。それは大いに時勢の變化と相關連して居る。恰もこの頃、ロシアは現代的政治家ウイッテ㉟（一八九一年大藏大臣となる）の指導の下に、產業保護策を執り、西歐の資本を輸入し、鐵道布設、工場設立、鑛山採掘等に努めたから、俄かに產業革命の生活に入つた。そこて新しい經濟及び勞働問題が起り、新たに勞働階級が現はれて來た。十九世紀の虛無黨の流れを汲める革命主義者はこの階級に新思想を注入して民主主義の目的を達するを使としたからである。それて、この頃に、かのカール・マルクスの共產的社會主義の思想が盛んにロシアに入つて來た。但し、一九〇三年倫敦に於て、ロシアの社會民主黨協議會が開かれた時、彼等の內に意見の相違があつて、二つの分派に分れた。一はボルセヴイキ（ミンセはより多くの義、一名マキシマリスト㊱）、他はメンセヴイキ（ミンセはより少きの義、一名ミニマリスト）てある。猶ほドイツの社會黨がブルカルと改定派（レヴイジヨニスト）に分れて居るが如きてある。過激派は直接運動によつて政府を斃さんと欲し、ミニマリストは目的のために妥協を辭しないのてある。この時過激派はレニンの指導の下に多數を制した。この派の意見と運動とはロシアに取りて間斷なき刺擊且つ脅威てあつたのてある。

さて、その後、十月黨は憲法主義者として唯だ溫和なるものに過ぎないものになつた。何となれば十月勅令に不滿を抱きて憲法生活の徹底的改善を期するものが起つたからてある。この新憲法主義者を名づけてカデット（立憲民主の頭文字による）派と稱す。モスコウ大學敎授ミリユーコフ㊲等その首領てある。之に反して、十月黨は國內の民主化又は共和化よりも、寧ろ立憲君主主義の下に、國權の伸張を希ひ、況スラーヴ主義に傾き、全國民族（例へばポーランド、フィンランド）及び國外に向つてのロシア化運動を奬勵した。大貴族大地主等も亦た議會の立法のために、自己の廣大なる財產を收奪されんことを恐れ、宮中の反動派と結託した。それてあるから、議會開會後間もなく、反動の風潮起り、過激派の亂暴の代りに、之と同やうに亂暴なる保守的高壓政策が實地に現はれて來た。かゝる間に世界戰役が破裂したのてある。

戰爭は開戰當時非常に人氣があつた。宣戰の夕、ザール・ニコラス二世親ら宮中の露臺に現はれた、そして人民は熱心に君主の萬歲を祝した。この光景はロシア專制政治に於て近時未曾有の現象と稱されて居る。都のドイツ的名稱ペテルブルグが、スラーヴの名のペトログラードに改められたのは、この時てある。政府はこの人心昂騰に乘じて、內は、ウオッカを始とし一切酒類を禁止して國民を激勵し、外は、オーストリヤを擊破し、將さにハンガリヤの野に入らんとした。然るに、戰役第二年の初夏以來の大敗退及びその慘めな結果は、遠くはかのクリミア役、近くは日露役の敗戰の時の如く、種々のロシア固有の弱點醜狀を曝露した。卽ち、軍事行政の不完全なること、最高幹部が敵に買收されたこ

と、少くとも怠慢であつたこと、宮中の不評判なること、就中、ザールの優柔不斷にして皇后（ドイツのヘッセ・ナッサウ大公の女）のドイツ的感情を有して居ることてある。この際非難の中心となつたのは、不思議な說敎者ラスプーチン[38]が宮中にて信用され、彼の君主神權の說やドイツとの平和に傾く意見が吹き込まれたことてある。それて、この怪僧が、或る貴族の催した舞踏會の一夕（一九一七、一月）、席上て愛國的少壯貴族の手てリンチに處せられ、その屍翌朝ネワ河岸に投棄されて居つたのは、實にロシア生活特有の裏面、彼の宮中に於ける魅力に對する反感、敗戰に對する國民の憤慨を、有力に物語ると見らるべきてある。當時最も戰慄すべきは、食料の不足及び之に伴へる人間の心理作用てあつた。由來、ロシアは農業國にして平時多大の穀物を輸出するを常とす、戰爭破裂以來、この時まて二年間輸出が杜塞して居るから、國內に穀物不足の筈がない、而も國內の餓死が始まつて來た。勿論、敗戰の際とて、運輸機關の大混亂も伴ふて居る。加ふるに人心沮喪して種々の臆說さへ起つた。曰く、宮中及び官僚は心ひそかに單獨講和を希ふて居る。資本家は穀物の買收を行ふて居る、兩者は相結託して市場に於ける食料の不足を齎らし、以て單獨講和の口實を作らんとして居ると。實に、この冬（一九一六—七）食物不足し、人心洶々たるものがあつた。內閣は行きづまりて、しば〳〵交迭し、而も毎に反動派が占めて居る。

それて、三月上旬ペトログラード市內騷亂し死傷頗る多かつた。されど、最初數日間、軍隊未だ亂民に加はるに至らなかつた。然るに、三月十一日に至つて軍隊の一部遂に亂民と握手した。この時、議會は既に大本營（モギレフ[39]に在る）から、一個月停會の勅電をうけて居たから、議員等靜かに退散せんとする趣があつた。彼等は軍隊の叛亂の報を得て、こゝに自信を增し、自ら委員會を組織した。この委員會は直ちに大本營に向つて彼等の要求を發し、之と交涉をかわして居る間に、市中の革命は刻々に募つて行つた。ニコラス乃ち十三日大本營を發し、歸都の上最後の手段を講じやうとしたが、この宮廷列車は途中にて遮られてプスコウ[40]に引き返すの外なかつた（十四日夜）。彼はこゝから責任內閣の任命の承諾を勅電し、以て民心を鎭撫せんとしたが、時既に遲かつた。委員會は十五日にザールの退位を決定して居り、使をプスコウに馳せて帝と會見し、その退位の詔勅を要取して歸つた。それ故に、ロマノフ家顚覆革命は、三月十二日から十五日の四日間に成就したのてある。

當時議會の委員等は尙ほ立憲君主政を維持せんと欲し、皇太子を擁立しやうとした。然るにニコラスはこの十七歲のいとしい唯だひとりの男子と離るるを欲しない。委員は因て位をニコラスの弟ミカエル大公に傳へんとした。イギリス大使は當時革命に同情し、この君主交迭に贊成し、以てロシアの戰爭的態度を恢復せしめやうとした。されど大公は將來立憲議會が成立して自分の相續を承認するま

ては、就任を肯んじなかつた。かくの如く主權の所在が久しく決しなかつたことは、革命前後の第一失敗といふべきてある。

何となれば、この間に勞働者及び兵卒の組織する勞兵會(ソヴイエット)(41)は強大となり、次第にその要求を高め、議會(ドゥーマ)及びその委員政府は之に左右せらるゝの外なきに至つたからてある。かの立憲民主派(カデット)の首領ミリユーコフは、初め、この假政府の外相に推され、戰爭續行を主張して一時人氣を收めて居つたに拘らず、早くも桂冠しなければならなかつたのは之に由る。この間にケレンスキ(42)頭を擡げて來た。彼は少壯なる法律家てある。彼は立憲派と勞兵派との雙方に兩屬し、而も次第に後者に拉し去られた。

聯合諸國は最初望をこの革命にかけて居つたが、早くも失望しなければならなかつた。それはロシアの實情が戰爭續行の不可能なることの明瞭となつて來たばかりてない、革命政府が公然『無併合及び無賠償』を宣言し、之を以て戰役收拾の國是とするに至つたからてある。この宣言は、實は單獨講和の口實を得るためとも解せられ、或場合には一步進めて、自國の敗戰の希望となるかも知れない。ケレンスキはこの國是を承認採用するの外がなかつたけれども、彼は尙ほ之に『聯合側の戰敗なしに』といふ主義を附け加へ、聯合側の後援を得て、戰爭續行に決し、自ら戰線に赴き、ブルシロフ將(43)軍のガリチヤ進擊を視、一時勝利を占めたことがある（七月）。しかし、彼は大局收拾の器量を缺き、將軍コルニロフ(44)の反抗をうけた。一時兩人相對立して內亂狀態となり、而も兩者ともに相ついて失敗するに至つた。

ドイツ軍のリガ市及びその灣內の諸嶋に對する侵略と、その外交的操縱との竝び進められたのはこの危機てある。實にこの間に過激派(ボルシヴイキ)とドイツの運動とは偉大なる勢力を發揮し、人心を支配することになつて來た。過激派の指導精神はレニンてある。彼は戰爭中スウィスに留り、こゝから敗戰主義(ディフィーズム)の宣傳を發しつゝあつたが、本國の革命破裂と共に歸國した。この際、彼がドイツを通過するを許され、その官憲と消息を通じたことは、世界の注目する所てある。更らに第二の精神、寧ろレニンの手足となるべき怪腕家トロツキがある。彼はニュー・ヨークの隱れ家から歸國して來たのてある。

是等の過激派の代表者が遂にロシアの全權を掌握するに至る機關は、勞兵會(ソヴイエット)とその背後にある多數の農民人口とにあつた。歐露の人口一三〇、〇〇〇、〇〇〇（ポーランドを除く）その內僅かに二〇、〇〇〇、〇〇〇が都市に住して居る、この都市人口の內、二、〇〇〇、〇〇〇づゝペトログラードとモスコウに在り、更らに同數がリガ、オデッサ、キエフの三市の合計人口てある、それて殘り一四、〇〇〇、〇〇〇が小都會の人口てある。されば歐露の農民(ムージック)は一一〇、〇〇〇、〇〇〇人を算し、實に全人口の八乃至九割を占めて居る。彼等は極めてまばらに散在する村落に住し、貧しい小屋住居に家畜と共に同居

して懶惰な日を送る。ロシアの國粋的思想家はこの村落の共同的生活を以て、西歐の資本主義的生活に比して、理想的美風と確信し、將來の文明はロシアに屬すべきてあるとの空想を抱きて之を鼓吹して居る。農民は遲鈍にして、全く原始的掠劣なる利用法を以て土地を使用して居る。彼等は只だ土地の多き貪りて之が集約的利用法を知らない。彼等は、クリミヤ戰役後に現はれた一時の自由の時期に、奴隷の狀態から解放されて（一八六一年の勅令）、一人前の地主に高められたけれども、人口の增殖と共に、所有地の狹隘を感じて來た。皇室竝に貴族は尙ほ廣大なる土地を掩有して居る。農民等は生活の窘迫と共に更らに土地の分配を熱望した。彼等はナイーヴなる人民て、只だ三個のものを信じ崇めた、それは神とザールと土地とてある。ザールは農民に取りては、之に對する何等の道德的信仰を有しないて、その命のまゝに死ずべき唯一の偶像てあつた。この偶像は一朝革命によつて倒された。彼等は自分の倚る所を失ふた。假政府は、勞兵會の要求により、軍隊の階級及び服從、竝に軍法裁判及び死刑を廢止した。戰線に於て、大部分は農民から出て居る兵士たちは、今は民主政治の世てあると告げられた。彼等の情慾の向ふ所は今は只だ故鄕と土地とあるばかりだ。彼等は一日も早く歸鄕して土地の分配に與らんことを希ふた。この際、ドイツの飛行機は撒紙をまきちらした、曰く土地の分配が始まつた、早く歸れ、然らずば殘らなくなるだらうと。されば、假政府の民主政治は唯だ少數者の自覺に基くものであつて、ロシア臣民の最大多數は革命と相關しない、只だ少數者の指導と宣傳とのために軍國の解體を齎らしたのである。

かくの如くして十一月七日第二革命成り、ケレンスキ逃亡し、レニン及びトロツキの下に會（ソウイエト）政府成立した。この際、召集著席した國民議會は、その多數が過激派（ボルシェヴィズム）主義に反對するや、忽ち解散された。會（ソウイエト）は自己の組織を中央から地方に及ぼして人民を制壓し、廢帝一家を監禁してシベリヤに送り（翌年七月エカテリンブルグに於て全部銃殺さる）、反動派を羅織して以て復仇を防ぎ、マルクスの共產主義により、全國工場銀行その他の經濟機關を收公して、資本主義的軍國主義に反對してプロレタリア思想を國際間に宣傳し、さしあたり國內に侵入し來るドイツ軍に對しては無抵抗策を執り、ドイツの貧民階級の自覺に訴へ、思想の上からドイツ軍國を打破せんと欲した。それ故に、ドイツとの講和を開くことゝなるや、會（ソウイエト）の代表者トロツキは會場を中立國の地に遷し、自由公開の會議とし、世界の面前に於て講和せんことを主張した。されどもこの議容れられず、遂に既述の如く、ブレスト・リトウスクに於けるドイツの高壓的講和及びその條約となつたのてある（一九一八、三月）。

マルクスの主義が、彼の故鄕ドイツに於ても、その思想を生み出した西歐社會にも、未だ纏つた實

現を見て居らないのに、一朝、東北歐の專制大國を征服し、そこで極端なる試みを受けて居るのは、世界史上の奇觀といふべきである。

127 ドイツの革命

ドイッ帝國政府は開戰の初め、社會民主黨の多數派の首領シャイデマン[46]等及びその派の援助を得たから、殆んど擧國一致の後援に依り、戰爭の目的を達せんと欲した。然るにイギリスが最初から聯合側に加はり、而も時と共にその中堅となりて聯合を結束して海上を制したから、ドイッは早く物資の窮乏と人力の減少とを感じ、志氣やうやく沮喪し、只だ東部及びバルカンに於けるその時〳〵の戰勝によつて國民の希望をつないで來たばかりであつた。されば、戰時の困難の嵩じゆくと共に、社會民主黨の間から、次第に政府に對する警告の聲が發せられることになつた。就中、社會民主黨創始者の一人ウィルヘルム・リーブクネヒトの子、カール・リーブクネヒトは、少數社會民主黨を率ゐ、尤も激烈に政府の戰爭戰策を攻擊し、開戰の第三年（一九一六）の五月四年半の禁錮に處せられた。されば、この年の末つかたから、過激運動勃發し、その派自らスパルタクス團[47]と稱し、全國勞動者間の人氣を博して次第に猖獗となり、同盟罷工しば〳〵諸都市に於て破裂し、時に政府は之が鎭壓に兵力を用ゐなければならなかつた。スパルタクス　紀元前一世紀の初、南方イタリヤに於て、羅馬共和國の資本主義的政治に反抗して起つた奴隷勞働者の叛亂の頭目であつた、この名を冒した團體の性質目的は推して知るべきである。政府は自然已むを得ず國內の改革を約束し、わづかに軍國の破綻を防遏したのである。就中、多年民間から非難されて居たプロシヤ王國の議會の性質は、この危機に於ける內治改革に資本主義の利益に偏して居ること是れである。カイゼルは因つて現下の焦眉の軍國の目的を達したる曉には、この選擧法を改正すべしと確約し、以てその國民に最後の努力を課して居つた。

ルーマニヤ蹂躙後の平和提議の斥けられてから、ドイッが無警告擊沈を開始したことは（一九一七、二月以來、最初は、國民をして之に最後の希望をつながしめた。當時當局者はこの新戰法によりて六個月間にイギリス島國を饑餓に陷れ、傲慢なるジョン・ブルを降伏せしむべしと國民に豫告した。この希望の出現と殆んど同時に勃發したロシアの革命（一九一七、三月以來）、隨つてその戰爭不能、之に反してドイッ軍の東方侵略の續行は、一層ドイッ人心の窮迫を緩めることになつた。然れども、無警告擊沈は時と共にその功豫期の如く擧らない、そればかりでない、却てアメリカ合衆國の參戰を喚起したから、得失全く相殺された。その結果、この年の夏、國內に平和熱大に起つた。時の宰相はベートマン・ホルウェヒ[48]である。彼は開戰以前からこの時まで八年間在職し、開戰の責任を負ふべき一人て

ある。彼は、この時社會黨中央黨等の議會多數から成る講和派と軍國主義者との中間に板挟みとなりて辭職した（七月）。是れドイッ疲弊の何よりの標徴である。唯だ上述のロシア帝國の瓦解とブレスト・リトウスク講和とのみが、一九一七―八年冬期に於けるドイッの慰みとし、一縷の望みとする所であつた。かゝる間に、アメリカの參戰の効果は將さに來らんとする夏の戰に著しく現はれんとするやうになつたから、ドイッは、この春以來、最後の突擊を試みた。而もそれが既說の如く遂に失敗となつたのである。

されば、戰役の結果、たとひドイッが大局の勝利を制したとしても、ドイッの改造が避くべからざることゝなつて居たことは、上述の事情に基き、たしかに疑ふことが出來なかつた。まして、それが反對に大局の敗戰となつたのであるから、ドイッは急轉直下に非常の革命に赴かざるを得なかつた。十一月休戰と共に、伯林を始めミュンヘンその他到るところに革命破裂した。オーストリヤに於ても同やうであつた。ヴィルヘルム二世は退位亡命してオランダに奔り、アーメロンゲン伯の居城に寄寓し、その他ドイッ聯邦の諸君主悉く退位し、又は廢位された。ハプスブルグ家のカール七世も亦たスウィスに落ち延びた。伯林では、社會民主黨の多數派の內から、エーベルト推されて假大統領となり、その少數派と提携して假政府を組織した。この際、スパルタクス團はロシアの過激派と消息を通じ、

その資金を受けて市中に於て暴動を起し、假政府を乘取らんとし、一時內亂（一九一九、一月）となつたが、假政府は軍隊の援助を受け、兵力を以て市中を鎭壓した。過激派の首領少リーブクネヒトを始めとし、ローザ・ルクゼンブルグ[51]といふ有力なる婦人等之に死した。

假政府は乃ち國民協議會をチューリンゲンの舊都の一て、かの國民的詩人ゲーテ、シルラ等の紀念を留めて居るワイマール市に召集して憲法制定に著手し、國名を依然ドイッ人の國と稱し　ドイッ國民の諸國の聯合による共和政治を作らんと欲した。一時バーヴリヤは獨立運動を起したが失敗に了り、又たライン州はフランスの保護の下に獨立せんとする形勢があつたが成功せず、遂にいづれも如上の新ドイッ組織に參加した。加之、この新ドイッはオーストリヤに於けるドイッ民族の國、卽ち殘存せるオーストリヤと消息相通じ、合同の希望があつた。しかし、巴里講和會議は舊ドイッ帝國以外の如何なる部分も、新ドイッ國に包含せらるべからざることを嚴命した。しかのみならず、かのヴェルサイユ條約調印て、ドイッは、既述の如く、國內の領土資源は削られ、ライン以西は聯合軍に占領され、軍備は極小限に制限され、海外植民地全部を失ひ、莫大の損害賠償を課せらるべく、多大なる軍艦商船を沒收されて、事實上、海外飛躍の羽翼を剪り取られ、原料の輸入乏しく、工場の活動も海外貿易もいづれも復舊すべくもあらず、石炭食料不足し、マルクの爲替相場大に下落し、物價暴騰し、國情

騒然、人心太だ々悩たるものがある。新政府はシャイデマン、ノスケ[52]等の新興政治家の勢力を以てしても、信望力量に乏しい。それであるから、舊軍國主義者は鞏固なる國家の再興を冀ひ、過激派は資本主義を全然破壊せんとて、おの〳〵各自の機會を窺ふて居る。前者は田舍に歸臥中のヒンデンブルグ將軍に望を屬して居る。明くれば一九二〇年一月、講和條約がいよ〳〵批准交換されて確定してから、間もなく、カップ[53]の下に、伯林に反革命的軍國主義的革命が破裂した。假大統領エーベルト以下新政府は一旦都を落ちてドレースデンに奔り、更らに南獨に落ち延びなければならなかつた。しかし、彼等は早く全國諸官僚及び勞働者の總同盟罷工を催うして反革命政府の成立を妨害した。その上に、軍國主義者の準備が未だ十分でなかつたから、カップ等は自ら伯林すら之を維持する能はず、その運動全然失敗に了り、エーベルト等再び都に復歸した。しかし、この混亂の機に乘じて却て過激派が再び起つた。彼等は兵を擧げてライン・ウェストファリアの工業地方（ルール[54]河域）に據つた。エーベルト政府は軍隊を派して僅かに之を鎭壓し得たばかりである。

但し講和條約調印後、世界の國際關係は幾分かドイツに對する同情と利益とにかたぶく傾向あり、ドイツ之を賴みとし之に乘ずる所あるは注目すべきである[129]。

128　イギリスの改造

戰時の必要は軍備及び軍國組織の流行となつた。聯合諸國はプロシャの軍國主義の殄滅を期して居る。而も、この目的達成の手段として、彼等自ら軍國的組織を取り、然る後に始めて成功することが出來た。世に之を新軍國主義の勃興といふ。何となれば、是等新興の軍國の精神は君主の專制主義にあるにあらず、國民の民主主義にあるからである。されば、一名、民主的軍國、若くば國民的軍國主義といつてもよからう。

イギリスは二十世紀の初期、世界戰役破裂の前に、既にその民主政治を進展しつゝあつた（前講121）。しかし保守舊に依り、未だ改造されない重大なことが、少くとも二つあつた。既ち、由來海上の自由鄕として徵兵制度の無いことを以て誇りとし、大陸諸國に對照して居ることと、その議會政治の本場なるに拘はらず、尙ほ或る若干財產制限選擧を維持して居ることとてある。今やこの國は既に暗示した通り、一大變化をうけた。卽ち、對獨の必要上、已むを得ず戰役の三年目から始めて徵兵令を布いた。また、同國の戰時內閣は、最初、アスキスの下に諸政黨の聯合したる擧國一致內閣であつたが、その功力薄弱であつたから、第三年の終から、ロイド・ジョージを首相とする內閣成り、その內より、首相と共に三保守黨員ボーナ・ロー、カルゾン卿、ミルナ卿、勞働黨員アーサ・ヘンダソン[55]を以て五人の軍事內閣を作り、軍國の大事の專制斷行の任に當らしめた。これ正さしく新軍國主義の典型である。

この新軍國主義には、必ず社會の內容上改造が伴はなければならなかつた。それは、先づ選擧法の改正、隨つて議會の改造となつて現はれた。

イギリスの選擧法は、既に一瞥して置いた通り(88 115 121)、一八三二年、一八六七年、一八八四　五年の三回改正されて、その都度、選擧權を總人口の二十四分の一、十二分の一、七分の一へと漸次普及して來た。最後の改正以來三十有餘年、選擧法の不備不徹底がしば〳〵非難されて居る。何となれば、これは尙ほ依然として一定の財產を條件として居るが故に、一方では、約二百萬人の選擧區住民は選擧權に浴しない、他方では、一人にして二個以上の選擧區にそれ〴〵資格を有し、復投票を實行し得る、かくの如き人民はその數五十萬人に達して居る、その上に、過去三十年以上の間に幾多の人口異動があつたから、同じ一票を投ずるにしても、選擧區によりて、その比價に亂高下が生じた。加ふるに、女子は、その職業上はた精神上獨立の向上と共に、參政權要求を起し、その運動が熾烈となつて來たからである。以上の理由に基き、第一、財產制限撤去、策二、『一人一票』、第三、『一人一價』、第四、女子の政治上解放といふ四種の新要求が齊しく擡頭して來、ともかく、何等かの選擧法改正はイギリス全國の輿論となつた。

一九一二年の夏以來、アスキスの自由黨內閣は一個の改正案を提出し、二回まで下院を通過した。

これは財產制限の撤去と複投票の廢止とを主眼とした案であつて、議員分配の改正と女子の參政權の要求とを抜きにした。女子の參政權は、『婦人參政權論者(サフレヂエット)』の奇矯なる態度が却て世人の反感を唆り、かた〳〵議者と淑女とから擯斥される傾があつたから、當時まだ立法上の問題となるに至らなかつた。只だ、一人一價、卽ち議員分配の公正は統一黨の要求であるから、この點で、統一黨は上院に據つて二回まで如上の自由黨內閣の提案を否決した。こゝに一九一四年、三回目の提出となるべき筈のところ、大戰の突發のために無期延期となつた。而して、議會は一九一〇年選出のもので、一九一五年滿期改選に當つて居るにかゝわらず、國內の平和のためにそのまゝ著席を續けた。しかし、戰役の永引くと共に、國民が軍國のためにする擧國一致の戰時活動の開始と、イギリスの對敵關係とは、おのづから選擧法改正の斷行と新議會の作り直ほしとを必要とせしむるに至つた。

何となれば、開戰と共に多數の男女勞働者はおの〳〵軍國の事に服し、戰前に我儘氣隨を通ほした女子參政權論者といへども、愛國の至情に立返り、有聲勞働者と相竝びて赤十字に、軍需品工場に、軍事行政の補助に、警察や、郵便の事務に、それ〴〵熱心に從事して、その働き振りおさ〳〵男子のそれに劣らない。試みに、英國戰時に於ける各種職業の被傭役男女の割合を、戰前のそれに比するに、金屬、化學、紡織の民營工業に於ては、六八對三二から五八對四二となり、同官營工業に於ては、九七對

三から五三對四七となり、運輸交通業に於ては九八對二から八九對一一に進み、金融及銀行業にては九五對五から六〇對四〇、郵便電信電話局にては七六對二四から四八對五二、中央政府官署にては九一對九から四三對五七に變化し、その他を併せて、すべての被傭役男女の割合は七六對二四から六三對三七となつたのである。以て戰時に於ける女子の活動を想見すべきである。これと同時に國民の徴募が始り、次にやがて徴兵令の執行となるや、多數の壯丁は海外の戰場に出征した。それでかくの如く組織された新軍國が、ひたすら一般民衆の協力のみに依つて維持され有功となつて居る以上、既述の四種の要求に基くところの選擧法改正、隨つて之によつて民衆の政治上意見如何を徴することは、新軍國に取りて絶對必要のことになつて來た。特に女子參政權につきていはゞ、大戰役といふ非常の時機はよく從來の行き懸りを抛ち、政敵互に恩仇相忘れて一致妥協せしめ得たのである。次に、戰役の對敵關係から論ずれば、この戰爭が、時と共に、中歐同盟の專制獨裁主義に對する世界の民主主義の衝突であること、即ち敵味方の旗幟が次第に鮮明となつて來たから、苟も正義の師に參加する一切の國民は、何等かの重大なる正義そのものが取り殘されて居る以上、みづから之を實地に體現しなければならない。かくの如き推理は必然不可避てある。之によつて生ずる結論は他てない。即ち、苟も世界に於ける議會政治の本場、代議政體の典型、聯合諸國結束の中堅たるイギリス國民は、この際、他に率先して自己の選擧法を改正して、新に徹底的民主主義の議會を作り出すことによつて、始めて自家の眞面目を維持且つ發揮し得べきてあるといふこと、是れてある。

かゝる輿論の發動の下に、戰役の第三年、一九一六年の秋以來、選擧法改正の協議會催うされ、越えて一九一八年三月改正案成立して法律となつた。この新選擧法の特徴は次の如くである。第一、イギリス從來の選擧法の根本思想たる財產條件を殆んど全く撤廢し、凡そ選擧は人間そのものに固有なる權利てあるといふ主義が大體に於て確立した、即ち滿二十一歲及びそれ以上の男子は、財產關係なく、只だ六箇月間(從來は一年間てあつた 住居したる以上は、その選擧區において選擧權を獲得する。第二、陸海軍人、船員、商人、漁夫等にして選擧區を離れたるものゝために、郵便若くば代理を以て投票し得しめる。第三、複投票は制限されて、唯だ一人二票まて許される、即ち、一年十ポンド以上の營業所を所有する選擧區に於て、竝に一定の大學の學位を有する者は、その大學の選擧區に於て、各、第二の投票を執行し得る、それ以上は許されない。第四、女子の選擧權の許與てある。但し年齡は男子の如く二十一歲以上としないて、三十歲以上と定めてあるは注目すべきてある、而して一戶を構へ若くば一年五ポンドの土地財產(その夫にてもよろしい)の所有者たるものてある。その外議員數の增員及び分配の改正があつて、投票の一人一價主義が發揮されて居る。

以上の結果、從來の選擧人數八百萬人であつたものが、二倍して一千六百萬人となり、この增加した八百萬人は、その內、二百萬人が男子で、殘り六百萬人は新たに參政權を得た女子で、更らにその內五百萬人は所謂婦人である。而して前回の改正の時有權者は全人口の七分の一であつたものが、今や三分の一の多きに上つたのである。

要するに、如上の一九一八年の選擧改正は殆んど無制限に近い普通選擧の實現で、殊に世界に於ける一個の強大國全體として女子の政治上解放の最初である。是れ、主として大戰役の產み出した英國の新軍國の發現に外ならない。卽ち、平和的であるが、實は、既設の露獨の革命と相竝びて、一種の重大なる革命と見做しても可い。

恰もその年末休戰成立し、中歐同盟瓦解屈伏し、イギリスは新軍國主義の勝利に輝やいて居る瞬間、年の十二月、この新選擧法によつて總選擧執行され、ロイド・ジョージの聯合統一內閣は最大多數を占め、自信を負ふて巴里講和會議に臨むを得た。この選擧に於て女子候補者は只だ一人アイルランドにて、選出されたけれども、その人シンフェーン叛亂者の一人で獄に下されて居つた。されば翌年、イングランドに於ける或る選擧區の補缺選擧において、アストル夫人當選し、ウエストミンスタ議會の議員席に、始めて婦人の著座を見るに至つた。

その他、イギリス戰後の改造問題は、內は大戰の勃發が中斷したアイルランド自治問題と、軍國組織から平時狀態への復舊、殊に勞働者の生活の保證問題とに集中して居る。後者に關して勞働條件の協定、總同盟の威赫、鑛山國有の議など起り、國內は、光榮ある平和の歡喜に滿つると同時に、社會上不安尙ほ未だ全く除去されたのではない。外に向つては、歐洲大陸及び全世界に對する貿易の復舊と廣大なる植民地を連繫する海上帝國組織の確立とを國是とした。その前者につきては、特に金融市場の中心が倫敦を去つて新ヨルクに移らんとしつゝあるから、これが維持に努めつゝあり、後者に關しては、ゼリコ提督を植民地海面に派遣し所要の計畫を立案せしめつゝあることが、世上の注意を惹いて居る。尙ほ敎育の根本的改善も、戰時及び戰後の重要問題の一となつて居る。

129　戰役の影響　戰後の重要問題

古來大戰役には國家及び社會の再造、改革、若くば革命、一言以て之を蔽へば何等かの改造が伴ふを常とする。最近の世界戰役に於ても亦たさうてある。而も、その舞臺が廣大てあり、その關係が複雜深刻てあつただけ、その戰時及び戰後に及ぼしたる影響も亦た極めてひろく且つ痛切てあつて、隨て、之によつて惹起されたる諸問題、殊に諸國の改造運動は頗る顯著なるものがある。改造運動の最も大なるものは、既に前三節に於て順次に一瞥したロシア及びドイツの革命竝にイギリスの選擧改正

である。吾人は更らに進みてこれら以外に於て、戰役の影響と戰後の重要問題とを一瞥して本講を終了せんと欲する。

先づ、本戰役に參加した陸海兵力の巨多なること、その死傷損害の無數なること、その軍費の莫大なること、隨て、間接の損害を加算して經濟上損失の多額なること、是等すべては、振古未曾有の現象を呈して居る。試みに少しく生命の損害と軍費に關する統計を擧げて、以て、如上の世界史上眞に異常を極めた所以を髣髴せしめやう。

交戰七大强ノ人口・壯丁・兵員・損傷・俘虜一覽（萬人單位）

國名	人口	壯丁全數	召集總員	戰役來期ニ於ケル		全戰役間ニ於ケル	
				戰場兵員	後方兵員	死者	廢疾者
英	四、五〇〇萬	九五〇萬	七〇五萬	一七二萬	三五九萬	九〇萬	四八萬
佛	四、〇〇〇	八八〇	七三二	一九〇	二四〇	一三八	一一二
伊	三、五〇〇	六七〇	五六〇	一四七	二五八	四六	五七
米	一一、〇〇〇	二、四〇〇	四〇〇	一一三	二五八	五	二三
露	一六、〇〇〇	三、二〇〇	一、六七〇			一七〇	二六六

獨	六、八〇〇	一、三六〇	一、二二五	三九四	四七〇	一六〇	一〇五	九六
墺	五、〇〇〇	一、一〇〇	九三〇	一七四	三六五	八〇	一三〇	一八一
各國（米露ヲ除ク）ノ人口ニ對スル百分數	二〇、八		一七、四	四、五	七、一	二、二	一、九	一、七

諸君はこの表を熟覽玩味し、且つ之を我が國民が古來經驗したる最大戰役たる日露戰役のそれらとを比較したならば、世界戰役に於ける規模の如何に莫大なるかを推知し得るであらう。

次に軍費に關しては、次の如く推算し得る。

イギリスは、開戰の初めてある一九一四年八月四日から閉戰の年度末たる一九一九年三月三十一日までに於て、その本國は四一、八八七百萬弗を費し、之に濠洲、新ジーランド、加奈陀、南アフリカ、印度の各それを加ふる時は、大英帝國の全戰費は實に四百六十億八千五百萬弗の巨額に上つて居る。之を日割にすると、イギリス本國は、開戰最初の數月間に於ては一日殆んど一千萬弗に近い軍費を支出し、それが次第に增加し、一九一八年に於ける最終戰の數月に於ては最高額に達し、當時最多の平均額は一日殆んど三千六百萬弗を數へて居る。翻つてドイツを見るに、その開戰の初めてある一九一四年八月一日から休戰前てある一九一九年十月三十一日までに、總額四百八十六億一千六百萬弗に上

り、日割にすると、最初は平均一千三百萬弗、終には平均三千四百萬弗づゝを支出したことになる。フランスはイギリスと同期間に總額三百二十六億一千四百萬弗、日割最初八百五十萬弗、最後三千二百萬弗である。但し弗換算は戰前に於ける各國貨幣の相場による。合衆國は、その開戰した一九一七年四月五日から閉戰の年度末たる一九一九年六月三十日まで、總額三百二十二億六千一百萬弗に上り、一日平均殆んど四千萬弗に達して居る。ロシアは、過激派政府の樹立前たる一九一七年十月三十一日までに、總額二百六十五億二千二百萬弗一日平均二千二百萬弗以上を費した。その他、イタリヤ、ベルギー、ルーマニヤ、セルビヤを加へて協商側は合計一千五百六十億五千萬弗、中歐側の四個國は合計七百六十億八百萬弗、雙方の大總計二千三百二十億五千八百萬弗、その內、英米獨佛はおの〳〵各自の同盟國へ貸附け、その合計二百十一億二千三百萬弗となつて居るから、之を差引いて二千百九億三千五百萬弗が卽ち世界戰役に於ける參戰諸强國の戰費の合計である。而して諸國の公債は戰前に於て二七、八八三百萬弗であつたものが、戰後には二二四、一七四百萬弗卽ち約八倍となつて居るから、戰時公債はつまり一千九百六十二億九千一百萬弗起された譯で、隨て、上述の戰費はその最大部分は公債で支辨されたことが判る。以上の數字て、直接の經濟上失費だけても如何に莫大てあつたかゞ想像されやう。（一九一九年十二月『アメリカ經濟評論』所載、セリグマン著『戰爭の費用及びその支辨』に據る）

戰役はかくの如き多大の破壞と損失とを齎らしたけれども、之と同時に、その目的遂行の必要上、亦た大に科學の研究、技術の開拓、諸種の工夫、發明、發見を促がし、いろ〳〵の文化產物を提供したことは否定出來ない戰役の副產物である。最も耳目に顯著なるは、潛航艇、飛行機、航空船、巨砲、裝甲自動車に於ける進步である。その內潛航艇の使用及び航空術の利用はこの戰役に於て始めてその實用的效果を實現し、テクニック界に於て將來の大成を期せられて居る。就中、飛行機及び航空船は啻に軍事上の一大革新を齎らしたのみならず、一般の交通上、既に實用に供せらるゝところもあり、更らに近き將來に於て一大革命を實現すべく期待されて居る。過去、一九〇九―一九一九年の十年間に於ける飛行距離の飛躍は實に驚くべき進步を示して居る。卽ち、一九〇九年七月には、フランス人ブレリオ始めてイギリス海峽を越えて世界を驚倒したるが、戰役中の進步は、一九一九年六月、ヴェルサイユ條約成立の月、イギリス人オルコック及びブラウン[55]をして、始めて一躍、大西洋を橫ぎらしめたのである。尙ほ、その年末には、イギリス人は英濠の連絡飛行に成功し、明くれば一九二〇年の春、フューメ飛行占領を以て有名なる詩人ダヌンチョの發企の下に、イタリヤ飛行家は羅馬を發し、印度支那を經由し、わが東京を志ざし、正さに彼等の所謂日出づる帝國訪問の目的を達した。

戰時經濟は、交戰國の財力を破壞したことはいふまでもないが、之に反して、中立國の商工業界及び海運業界に莫大の利益を與へ、しば〳〵非常の暴利取得者を出し、各國內は勿論、世界諸國間に於ける富の分配に、一大變動を與へた。合衆國は、最初三年間中立國として、その地理上優越と豐富なる資本と進步せる工業とを以て、戰鬪國に對する戰時貿易の利を占めて、ます〳〵驚くべき巨富を蓄積し、ついで參戰するや、その資力と軍備とをつくして歐洲に臨み、最後の戰局の決定に對して重大なる威力を發揮した。日本も亦た事實上中立國同然の位置にありて戰時貿易の利を致し、その利得は固より合衆國のそれの幾十分の一に相當するのみなれども、經濟上日本としては、その資力暴かに膨脹し、『鐵成金』『船成金』を始めとして、多數の所謂『成金』者流の飛躍を見、國狀一變の狀がある。

米國に於ては、世界戰役破裂の初め以來、戰爭の渦中に捲込まるゝ虞れもあつたから、臨機應變の必要上、夙に有志者の『プリペアヂネス』運動起り、所在に學生や青年の示威行列が盛んに行はれた。ついで、この國も亦た參戰するや、大統領ウィルソンは徵兵制度を立法開始し、食糧の節約及びその產出の奬勵を計り、鐵道を國家管理に移し、急に大いに船艦飛行機を建造し、兵員軍需の大輸送に努めた。これまた、かのイギリスの新軍國の出現と同じく、大規模の軍備の斷行にして、卽ち一大民主國の軍國化である。この際、合衆國にてはドイツの探偵、ドイツの運動、ドイツ思想を取締り、かねて雜白なる國內人口を統一して、眞のアメリカ國民を作り上ぐるの必要を感じ、英語の普及、殊に移入外國勞働者の敎育、少年感化の如き國民的事業を開始した。それ故に、合衆國の世界戰役に參加したることは、同時にその人民のアメリカ國民化運動を始めたことであつたと謂つても差支はない。この際、この國民運動の發展の機に乘じて、かの多年燻ぶりつゝあつた婦人參政權運動、禁酒運動はそれ〳〵活潑に燃え上り、諸州に宣傳して著々各地を征服して行つた。その結果、禁酒法は旣に定規の贊成を得て全國の憲法となり、隨て、合衆國全部は一九二〇年以來、憲法上ドライの國土となつた。婦人參政權運動もまた殆んど同やうの成功を收めんとしつゝある。

回顧すれば、合衆國は、さきに一七七六年來の獨立戰爭て始めて作り上げられ、次に一八六〇年代の南北戰爭て再造されたのてあつたが、最初の建國以來百三十年、今こゝに、世界戰役といふ一大機會に於て、三たびめの建國に際會しつゝあるといふても、大した過言てもあるまい。

米國をして更らに一新時期に入らしめたのは、旣に注意した如く、大統領ウィルソンの世界戰に於ける參加及び歐洲外交界に於ける活動てあつた。しかし、この彼の學者的理想的外交及び統治策は動もすれば街學的にして專斷に馳せ、國內に於ける反對政黨たる共和黨、並に民主黨一部のもの丶非難を買ふた。彼等は元老院に據り、その憲法上權能に依りて、忌憚なくヴェルサイユ講和條約を批評し、就

中、その内の主要部分の一たる國際聯盟が、由來モンロー主義の外交傳統を孤負する米國政府をば、容易に世界の紛局の渦中に引き入るゝの危險を包藏するものと考定し、因て條約を無條件に批准することを拒絶した。ウィルソンは固より何等の保留を許容すべくもない。それてこの問題は、將に來らんとする一九二〇年秋の大統領改選に於ける、合衆國民の考慮の一となつて居る。

しかのみならず、この米國の批准拒絶の態度は巴里講和會議に於ける聯合側の協定竝にヴェルサイユ講和條約が恢復したる世界平和の威重を殺ぎ、これによつて妥當されたる幾多の事端をして再び擡頭せしむる虞れを惹起するものである。卽ち米國民は最早や歐洲の戰局に參加するを欲しないらしくなつて來た。加ふるに、イギリスは夙にウィルソンの提唱にかゝる海洋の自由を放棄せしめ、ドイツ海上權を全然殄滅し了り、自己の世界に於ける制海權を擴大確立したから、ドイツを現狀以上に苦むる必要なく、寧ろ早く之との通商を恢復し、自國の經濟市場を大陸に擴大するを利とした。かくてイギリスの輿論はドイツに課せらるべき賠償金の出來るだけ輕減を始とし、軍備制限の緩和など、ドイツの條約上負擔の改定に傾いて居る。イタリヤも、オーストリヤ・ハンガリ帝國の沒落したる以上は、ドイツとの舊交恢復を念とし、如上の點に於てイギリスと同歩調を取りつゝある。フランスは條約の勵行を固持して居る。故にヴェルサイユ講和條約調印後の一年間に、聯合諸國の協調は漸く弛み、

フランスは、對獨上、當に米國の援助を期することが出來ないのみならず、英伊兩國からも或る孤立の位置に陷りつゝある。この傾向は一九二〇年四月サン・レモに催された歐洲聯合側諸國の協議會に於て現はれて居る。これ敗戰國ドイツが尙ほ以て乘ずべしとする所である。

ロシアの過激派政府に對しては、聯合側は、最初、ロシア內部に於ける非過激要素を後援して之を討つの策を取つた。卽ち、南露に於てはデニキン、バルヂック沿岸に於てはユーデニッチ、シベリヤに於てはコルチャック(57)（オムスクに假政府を建つ）、これらの下に集中した各方面の恢復派是れである。然るに一九一九年秋以來、過激派政府勢力を增して、逆擊に轉じ、如上の三方盡く崩潰した。この際、聯合側の結束亦た統一しない。イギリスは、少くとも經濟上に於てなりとも、可成早くロシアと和せんと欲する態度を示して來た。合衆國も亦たシベリヤから撤兵した。日本は尙ほ東部シベリヤに駐兵し、同方面に於ける帝國特種の利益の擁護に努めて居る。この際、一九二〇年三月、交通社絕の結氷期、ニコライエフスクに於ける日本の官憲、守備兵及び居留民の慘殺は、尤も人心を戰慄せしめた。日本乃ち浦鹽を始めとして過激派の武裝解除を行ひ、切りに善後策に從事しつゝある。蓋し、過激派は世界の深憂である。彼等は諸國に向つて國際的共產主義の宣傳に努めて居る。之につきて、一は、ドイツを始め、戰敗國が戰後の負擔の過重に失望して、過激派に惡化する虞れがある。他は、各自國內の不

平家が或は之と呼應するかも知れないといふ威赫がある。現に、イギリス政界の一勢力たる勞働黨はその政府が執りたるロシア過激派征伐の政策に反對し親露的態度を示して居る。

實に、諸國を通じて、不平の要素が伏在して居る。それは戰時軍國の勞役に服したる人民は、戰後、之に對する報酬と慰安とを求めて居る。然るに、世界を通じて物價は戰前の平均約三倍（露獨の如き物資窮乏し貨幣暴落したるところは、倍數を示し得ざる非常の程度）に暴騰して居る。資本家は自家の立場を固持する。勞働條件は被傭者を滿足しない。思想は世界戰後の進轉と共に奔流して、さすが民主的傾向に馳せて居る。それて、諸國に於て組織的同盟罷工流行し、以て政府竝に資本家に對抗しつゝある。ヴェルサイユ條約中の國際勞働規約により、一九一九年秋、第一回國際勞働會議ウォシントンに開會し、日本委員も參列し、八時間勞働、婦人小兒勞働に關する制限等につきて、種々國際規約を協定した。但し國情氣候の如何によりては、特に除外例が設けられて居る。日本印度等はそれてある。國際勞働規約は、一般的に世界の勞働問題を緩和するの功あるべしと雖も、まだ直接に各國內の實際問題の紛爭を解平し得ない。

この際、日本に於ける戰時中の社會變動は實に驚くべきものがある。戰時工業、戰時海運、戰時通商の急激なる發展につれて、國內の富の蓄積、資本主義の橫溢、物價の暴騰、生活の困難、思想の民主化、勞働者の同盟罷工の頻發、普通選擧の要求など、從來見るべからざる痛切なる社會問題の頓みに竝び發生するを看た。政府は因て選擧權資格を直稅三圓に低下して民論の緩和を圖り、尙ほ勞働組合を立案しつゝある。如上の狀態を戰前のそれに比せば、人をして殆んど隔世の感を抱き、之と同時に、尙ほ前途の波瀾を思ひ、悲喜相半ばならしめる。更らにこの重々しい氣分を增すものは、その外に橫はる外交問題てある。卽ち、山東事件を中心とする支那の排日問題、シベリヤ出兵の善後問題、多年懸案の日米關係問題、滿期に近づきつゝある日英同盟の存廢問題等これてある。

民族自決主義は、戰時以來、聯合側から高唱され、既に講和會議に於て若干多數の民族に適用された。しかし、これら以外の民族の間には、この新提唱に煽られて、一層不平を高むるもの少くはない。現に朝鮮人の內には、支那、シベリヤ、米國等を策源地として、內外呼應して獨立を企つるものがある。唯だ政府及び總督府の堅實なる統治策はよく半嶋を鎭撫して居る。尤も世界の注視を惹いて居るは、イギリスに於て、戰前から久しく懸案未了となつて居たアイルランド自治問題てある。このもの戰後再び擡頭し、シンフェイン黨切りに示威運動を行ひ、時としては陰謀殺掠に及び、或は叛亂狀態に化するに至つて居る。

その他、南北抗爭の結んて解けない支那共和國の統一同題、英領印度に於ける　治問題、アルメニ

ヤ問題、埃及竝に近東に於ける諸民族問題、ボーランド及びバルト沿岸の國民問題等が現存して居る。これらは、いづれも、ロシアの過激派政府の將來及びトルコ帝國の處分を中心として、その周圍に相連繫する世界の重要懸案である。

おもふに、世界戰役が直接に決定した世界の權力關係變化は、一方、露獨の各雌伏、汎スラヴ主義、汎獨主義の全敗である、他方、イギリス海上帝國の優勝と、アメリカ資本主義的統一共和國の雄飛とである。フランス及びイタリヤは疲れて强國としては殆んど無力に近くなり、日本は所詮國力の成り上り者にして、寧ろ意氣を以て勝つのみ。世界は畢竟アングロサクソンの天下となつたのである。轉じて思想上から見るに、戰役が產出し、若くば促進したる重要傾向は、新軍國主義、民主主義、國際聯盟主義、民族自決主義、過激主義の類である。これらのいづれが勝利を占むべきか、將た、新理想主義の下に、如上の一切の戰役から起りたる最近の傾向を調容統攝したる平和主義が優勝すべきか。たゞしは、後者が唯の文化主義者の空想の裡に消えて了ふべきか。これらは、すべて今後の問題に屬する。而してすべての傾向の眼ざすところの目的が、唯だ一つの標語に集中して居ることは、確實である。曰く世界改造！

諸君！　何はともあれ、私が開講第一に便宜上豫見したるが如く、『世界史の第四日』といふ何か新しい大いなる世界文化の日が、今や開始されつゝあるのではあるまいか。

凡そローマンスはそれ自らて一個の完結である。それは序幕開き、波瀾起伏し　さうして大團圓を以て收拾されるを常とする。歷史、特に世界史はさうでない、何等の豫定されたる筋書を辿るものでない、五千年間を通ほして世界にひろがり〳〵たる人生の潮流をながれ來て、尙ほ止まるところを知らない。所詮歷史は如實にして無限なるローマンスである。この悠久なる活劇の只だ過去のみが、吾人史學者の直接使命に屬する。若しそれ既往に徵して將來を卜するが如きは、世上の讀史家の特權に委すべきである。たゞしは、世界史の行方は或る何等かの神祕的豫定計畫を追究するものであると、目的論的に考察しやうと欲するならば、それは歷史哲學の自由に歸せしめやう。一個の世界史家としての私の任務は以上て不十分ながら果されたとしなければならぬ。この終に臨みて、私は諸君の淸聽を感謝する。

概觀世界史潮　終

第二十五講　世界戰役　世界改造

固有名詞原語表

第一講

1. Classicus (Klasis, Classics)
2. Modernus. (Modern)
3. Medium aevum (mediaeval age)
4. Egypt, Babylon, Assyria, Hittites, Troy, Mycaene, Crete.
5. Carnac.
6. Classicism Romanticism.
7. Aufklärung.

第二講

1. Anaxagoras, Socrates, Plato, Herodotus, Thukydides, Aeschylos, Sophocles, Euripides, Phidias, Polygnotos.
2. Aegean Sea.
3. Homer (Homeros)
4. Lydia.
5. Ionia.
6. Aristagoras.
7. Pisistratos.
8. Clisthenes.
9. Orpheos.
10. Thrakia (Thrace)
11. Delphi.
12. Parnassos.
13. Pythians.
14. Apollo.
15. Xerxes
16. Thermopylae.
17. Salamis.
18. Plataeae
19. Pentecontaetia.
20. Panhellenese.
21. Thales of Miletos.
22. Heraclitos of Ephesos.
23. Sophists.
24. Protagoras.
25. Auguste Comte. Rousseau

第三講

Julius Caesar.
25. Dictator.
26. Catilina.
27. Brutus. Caesar Octavianus. Marcus Antonius (Antony)
28, Actium.
29. Horatius (Horace

第五講

1. Octavianus.
2. Res Publica (Republic)
3. Princeps (Prince)
4. Via Appia. Pantheon. Colosseum. Thermae.
5. Jus Civile.
6. Praetor Perigrinus. Jus Gentium.
7. Gaius.
8. Jus naturale.
9. Corpus juris Civilis.
   1. Codex Justinianus.
   2. Institutiones.
   3. Pandectus and Novellae.
10. Homo novus.
11. Nero.
12 Suetonius.
13. Pax Romana.
14. Fellah.

第六講

1. Jehovah.
2. Edward Gibbon. Theodor Mommsen.
3. Zeus. Olympos.
4. Stoics (Stoicism)
5. Seneca. Epictetus.
6. Neoplatonism.
7. Cybele (Magna Mater). Serapis et Isis. Mithra.
8. Agrippa. Pantheon.
9. Hebraei (Hebrew).
10. Israel. Judaea.
11. Diaspora.
12. Messiah (Christos)
13. Jesus Christ.
14. Herode.
15. Pharisae (Pharisees)
16. Caesarea.
17. Tiberius.
18. Galilaea.
19. Jerusalem.
20. Paulus (St. Paul).
21. Antiochia.
22. Tarsos in Cilicia.

1. Ochlocracy.
2. Antalkidas.
3. Menandros.
4. Cynics, Kyniker.
5. Isokrates.
6. Chaeronea.
7. Issos.
8. Proskynesis.
9. Imperium, Imperialism.
10. Hellenedom, Hellenism.
11. Actium
12. Ptolemaeos (Ptolemy)
13. Koine.
14. Hipparchos.
15. Manetho of Heliopolis
16. Septuaginta
17. Megasthenes
18. Strabo, Arrianus
19. Ashoka
20. Periplus of the Erythraean Sea.
21. Marcus Aurelius Antonius
22. Phidias Polyklitos. Iktinos. Polygnotis.
23. Praxiteles of Magna Graecia, Lysippos of Sikyon.
24. Venus of Milo (Melos)
25. Apelles.

第四講

1. Imperator. Imperium.
2. Caesar, Kaiser, Tsar(Czar)
3. Rex.
4. Palatinus, Capitol.
5. Civis Romanus.
6. Pyrrhos of Epirus
7. Carthago (Carthage). Poeni (Phoenicians)
8. Hannibal.
9. Zama.
10. Ptolemaeos Philadelphos.
11. Museum (Museion)
12. Fabricius
13. Jugurtha of Numidia.
14. Achaia.
15. negotiatores. publicani.
16. ambitio (ambition)
17. Polybios.
18. Ostia, Puteoli.
19. Cato.
20. Gracchus (Tiberius and Caius)
21. Cicero.
22. Tribuni Plebis. Consul. Senatus.
23. Scipio
24. Sulla (Sylla) and Marius. Pompeius (Pompey) and

3. Salic law (Lex Salica).
4. Ravenna.
5. Pannonia.
6. Pavia.
7. Arianism.
8. St. Benedict(Benedictus) of Nursia.
9. Monte Cassino.
10. Canterbury.
11. Gregory the Great
12. Meroving (Merovus) Clovis (Chlodovech)
13. Soissons.
14. Rheims (Reims).
15. Rex Christianissimus.
16. Karoling.
17. Charles Martel (Karl) Pipin the Short. Charles the Great (Charlemagne).
18. Pyrenees.
19. Tours. Poitiers.
20. Iconoclast.
21. St. Boniface (Bonifacius).
22. Fulda.
23. Mainz
24. Friesen.
25. Leo III.
26. Paderborn.
27. Guelf and Ghibelline..
28. Irene.
26. Ebro.

第 九 講

1. Capitularia de villis. Missi dominici.
2. Einhard.
3. Aachen (Aix-la-Chapelle).
4. beneficium. usufructus.
5. homagium. (homage). feudum.
6. Major Domus (Mayor of the Palace).
7. Comes (Count)
8. Normandy.
9. Lotharingia Lothringen, Lorraine.
10. Capet.
11. Otto 1.
12. Pornocracy.
13. Saxonia (Sachsen). Franconia (Fanken, Salic). Staufen(Hohenstaufen, Swabia)
14. Herzog (Duke).
15. Pseudo-Isidoric Decretals.
16. Isidor of Sevilla.
17. Cluny (Clugny) in Bur-

23. Ephesus.
24. Nazareth.
25. Bethlehem.
26. Titus Flavius
27. Plotinos.
28. Diocletianus. Constantinus
29. Saxa Rubra.
30. Milano (Mediolanum)
31. Nicaea.
32. Theodosius
33. St. Augustinus of Hippo Regius. Civitas Dei (City of God).
34. St. Jerome.
35. Johannes Chrysostom.

第 七 講

1. Germani (Germans).
2. Hippo Regius.
3. 1. coloni.
   2. laeti.
   3. federati.
4. Visigoth. Ostrogoth. Frank. Vandal. Burgundi. Suevi (Alemanni). Anglo-Saxon.
5. Catalaunum (Chalôns)
6. Lombards. Saxons, Avars
7. Norman. Danes. Variags (Warangians)
8. Magyars (Hungarians)
9. Tacitus.
10. Latin-Teutonic
11. Jacob and Wilhelm Grimm.
12. Monumenta Germaniae Historica. Leopold von Ranke.
13. Karl Lamprecht.
14. Vistula (Weichsel)
15. Wergeld.
16. Odin (Wodin). Frigg. Donar (Thunder).
17. Walhalla.
18. Walkures.
19. Loki.
20. Nieffelheim.
21. Holla (Hell).
22. Goetterdaemmerung.
23. Richard Wagner "Nibelungen"
24. Regensburg (Ratisbon)

第 八 講

1. Theodosius. Justinianus.
2. Byzanz (Byzantion).

36. Moslem.
37. Emir.
38. Seldjuk.
39. Osmanli.
40. Sultan.
41. Imam. Padishah.
42. Zanzibar.
43. Ibn Masudi Ibn Haukal. Ibn Batuta.
44. Timbuktu.
45. Ibn Khaldun.
46. Chaldaeans. Mathematicians.
47. Alchemists. elixir.
48. Avincenna of Bokhara. Averroes of Cordova.
49. Gerbertus of Rheims(Pope Sylvester II)
50. Roger Bacon, Doctor Mirabilis.
51. Kismet.

第十一講

1. Crusade.
2. Cid Campeador.
3. Alexios I of Comnena.
4. Urbano II.
5. Clermont.
6. Dieu le volt!
7. Peter the Hermit of Amiens.
8. Geoffrey of Lorraine (Gottfried von Lothringen).
9. Genoa.
10. Hospitaler, Templer, Knights of German Order.
11. Anna Comnena.
12. Benjamin of Tudela
13. Saladin.
14. Frederick Barbarossa, Philip August, Richard Lionhearted.
15. Innocent III.
16. Dardanelles (Hellespont)
17. Latin (Frankish) Empire on the Bosphoros.
18. Baldwin of Flandres.
19. Villehardouin.
20. Tunis. St. Louis (IX)
21. Prince Henry the Navigator. Columbus. Vasco da Gama.

第十二講

1. Waldenser (Vaudois). Katharer, Manichaeism.

gundy.
18. Hildebrand (Gregory VII).
19. Canossa.
20. Harz, Harzburg.
21. Speyer (Speier).
22. St. Angelo (Mausoleum of Hadrianus).
23. Robert Guiscard.
24. Salerno.
25. College of the Cardinals.
26. Concordat of Worms.
27. absolution, excommunication, interdict, inquisition.
28. transubstantiation.
29. legati (Legates).

第十講

1. Slavs. Bohemia. Czechs. Poland, Servia (Serbia). Bulgaria.
2. Romaei (Romai). Rumi (Roumi).
3. Byzantinism.
4. Illyrians, Kurds, Berbers.
5. Eclega.
6. Caesaropapism
7. Nubians.
8. Salona (Palatium Salonae, Spalato)
9. St. Sophia (Hagia Sophia)
10. San Vitale.
11. Venice (Venetia).
12. San Marco.
13. Felix Arabia (Yemen).
14. Cherson (Sebastopol). Bosphori.
15. Hippodromos (Circus).
16. Leo Isaurian (Syrian).
17. Islam.
18. Mohammed.
19. Coreish.
20. St. Thomas. Nestorius.
21. Parsees.
22. Manes (Manichaeus).
23. Gnosticism.
24. Coran (Qur'an), Alkoran.
25. Medina (Medinat-al-nabi).
26. Chalifa (Caliph).
27. Damascus. Ommaya.
29. Cordova.
29. Bagdad. Abbas.
30. Fatima. Cairo.
31. Shia (Shiites). Sunna (Sunnites).
32. Moors (Maurs).
33. Hadith. Sharia.
34. Rajahs.
35. Fostat.

第十四講

1. Renaissance.
2. Jakob Burckhardt.
3. Humaniora.
4. Dante Alighieri.
5. Divina Comedia.
6. Toscana (Tuscany).
7. Virgil's Aeneid.
8. De Monarchia.
9. Francesco Petrarca.
   Giovanni Boccaccio.
10. Vaucluse.
11. Cola di Rienzi.
12. Decamerone (Ten Days).
13. Chuacer's "Canterbury Tales.
14. Nicopolis.
15. Medici.
16. Laurentius Valla (Lorenzo V.)
17. Cosimo dei Medici.
18. Georgios Gemistos Plethon of Sparta.
19. Brunellesco.
20. Ghiberti.
21. Donatello. Fra Angelico. Botticelli. della Robbia.
22. Lorenzo dei Medici.
23. Nicholaus V. Vaticano
24. Sixtus IV. Julio II.
25. Leonardo da Vinci.
26 Wilhelm von Humboldt.
27. Raphael Santi.
28. Michael Angelo (Michelangelo).
29. Bramante.
30. Ariosto.
31. Ferrara.
32. Este.
33. Alfonso 1.
34. Orlando Furioso.
35. Titian (Tiziano).
36. Correggio.

39. Il Principe (the Prince).
40. Tasso. Palestrina. Bruno. Galileo.
41. Johann Gutenberg.
42. Nürnberger Witz, Strassburger Geschütz, Augsburger Pracht, Venedigs Macht, Den Teufel seine Kunst verlacht.
43. Heidelberg. Leipzig. Wittenberg. Greifswald.

2. Albi in Toulouse.
3. Albigenses.
4. Begging Orders. Scholasticism.
5. St. Dominicus of Castile. Dominicans. St. Francis of Assisi. Franciscans.
6. Black Friars.
   Gray „
7. Thomas Aquinos.
   Doctor Angelicus.
8. Bonifacio (Boniface) VIII
9. William de Nogaret.
10. Agnani.
11. Avignon.
12. Wycliffe.
13. Lollards.
14. Romanesque.
15. Chevalier Knight, Ritter; Chivalry, knighthood.
16. Pares (Peers).
17. Primus inter pares.
18. Amalfi.
19. Florence, Pisa, Marseilles, Barcelona.
20. Bruges, Gent.
21. Hanseatic League.
22. Hamburg, Lübeck.
23. Magna Charta.
24. John of Plantagenet.
25. Bouvines.
26. Gothic Style.
27. Rheims, Köln (Cologne).
28. Bologna.
29. Franki, Normanni, Picardi, Alemanni.
30. Universitas literarum.

第十三講

1. Austrian Habsburg.
2. Ur-Kanton.
3. Wilhelm Tell.
4. Landsknecht.
5. Despots.
6. Napoli (Neapolis, Naples).
7. lo stato (the state).
8. Caesar Borgia. Machiavelli
9. William, Duke of Normandy
10. Anjou.
11. Jeanne d'Arc, Maid of Orleans.
12. War of Roses.
13. Tudor.
14. Valois-Orleans.
15. Aragon, Castilla.
16. Kurfürst (Elector).
17. Indulgence.

36. Condottiere.
37. Sorbonne.
38. Trent (Trient).
39. Schmalkalden.
40. Societas Jesu (Jesuits).
41. Ignatius Loyola.
42. Pampeluna.
43. Francis Xavier.
44. ad gloriam dei.
45. Louvain (Loewen)
46. Charles the Bold.
47. Nancy.
48. Gueux.
49. William the Silent of Orange.
50. Utrecht.
51. Westphalia.
52. Catherine of Medici.
53. Henry Darnley.
54. Elizabeth.
55. Lepanto.
56. St. Bartholomew.
57. Francis Drake.
58. Mary Stewart (Stuart).
59. Invincible Armada.
60. Anglican Church (Episcopal).
61. Presbyterian Church.
62. Henry of Navarra(Navarre).
63. Nantes.
64. Bourbon.
65. Elector Palatine Count (Pfalzgraf bei Rhein).
66. Bavaria (Bayern).
67. Wittelsbach.
68. Holstein.
69. Wallenstein.
70. Gustavus Adolphus.
71. Lützen.
72. Lausitz.
73. Brandenburg-Prussia.
74. Frederick William the Great Elector.
75. Osnabrück, Münster.
76. Verdun, Metz, Toul.
77. Vorpommern.

第十六講

1. Roger Bacon.
2. Petre d' Ailly.
3. Toscanelli.
4. Plano Carpini.
5. Rubruquis.
6. Marco Polo.
7. Prince Henry the Navigator.
8. Capo Verde.
9. Vasco da Gama.

44. Reuchlin.
45. Melanchthon.
46. Copernicus.
47. Erasmus of Rotterdam.
48. Basel,
49. Thomas More's "Utopia"
50. Shakespeare. Francis Bacon.
51. Dürer. Holbein.
52. Rabelais.
52. Cervantes's 'Don Quixote' Murillo. Velasquez.
53. Camoens.
54. Spinoza, Rubens. Van Dyck Rembrandt.
55. Encomium Moriae (Praise of Folly.)

第十五講

1. Reformation.
2. Wycliffe, Johann Huss; Savonarola.
3. Eckart.
4. indulgentia (indulgence).
5. Ulrich Zwingli.
6. Martin Luther.
7. Archbishop of Mainz (Brandenburg, Magdeburg).
8. Fugger.
9. Tetzel.
10. Wittenberg.
11. Groschen.
12. Frederick the Wise.
13. Cardinal Cajetan.
14. Ingolstadt.
15. Dr. Eck.
16. Carlstadt.
17. Frankfurt-am-Main.
18. Maximilian.
19. Thüringen.
20. Georg (George)
21. Erfurt.
22. Ferdinand.
23. Carlos 1 (Karl V)
24. Francis 1.
25. Wartburg. Eisenach.
26. Cognac.
27. Protestantio, Protestants.
28. John Calvin.
29. Geneva (Genf).
30. Presbytery.
31. Puritans, Presbyterians, Huguenots.
32. Counterreformation.
33. Nederland (Netherland).
34. Philippine Islands.
35. Potosi in Peru.

67. Sardinia.
68. Gibraltar.
69. Minorca.
70. Newfoundland, Nova Scotia, Hudson Bay Territory.
71. House of Savoy.
72. Bella gerant alii, tu felix Austria nube !
Quae dat Mars aliis, dat tibi regna Venus.
73 Silesia (Schlesien)
74. Versailles
75. Hohenzollern.
76. Markgraf von (Marquis of) Brandenburg.
77: Königsberg.
78. Maria Theresa.
79. Winckelmann.
80. Lessing, " Emilia Galotti."
Goethe, Die Leiden des jungen Werthers.
Schiller, Der Räuber.
Kant, Kritik der reinen Vernunft.
81. Wariag (Warangians).
82. Muscovy
83. Cossacks
84. Tatar.
85. Don-Ural.
86. Nertchinsk.
87. Romanow (Romanoff)
88. Azof.
89. Poltawa
90. Finland.
91 Neva.
92. Holstein-Gottorp.
33. Kutchuk-kainardji
84. Lithuania.
95. Zips
96. Kosciuszko.

第十七講

1. Hugo Grotius.
2. mare liberum.
3. de jure belli ac pacis.
4 Thomas Hobbes
5. Leviathan.
6. Bossuet,
7. L'état c'est à moi.
8. Fénelon's Aventures de Télémaque.
9. Hesse-Kassel
10. Malthus.
11. St. Lawrence
12. Mississippi.
13. Louisiana
14. St. Louis, New Orleans.
15. Amsterdam
10. Alfonso d' Albuquerque.
11. Amerigo Vespucci.
12. Balboa
13. Magellan.
14. Cortes.
15. Pizarro.
16. Mateo Ricci.
17. Cossack Yermak.
18. Lepanto.
19. Copernicus
20. Oliver Cromwell
21. La Haugue.
22. Seeley, Expansion of England.
23. Stuart (Stewart).
24. 'No bishop, no king.'
25. Ulster
26. Shakespeare.
27. Francis Bacon.
28. Puritan, Separatist
29. Duke of Buckingham.
30. Petition of Rights.
31. Wentworth, Earl of Strafford
32. " Pilgrim Fathers " Massachusetts.
33. Winthrop.
34. John Hampden.
35: Episcopacy.
36 Great Remonstrances.
37 Cavaliers, Roudheads.
38. Nase By.
39. Indenpendents.
40. Preston.
41. Westminster Hall.
42. Commonwealth of England
43. Long Parliament.
44. Rump Parliament.
45. Lord Protector.
46. Dunkirk, Jamaica.
47. Milton's 'Paradise Lost.'
48. The Merry Wives of Windsor by Shakespeare
49. Dover
50. Test Act.
51. Catholic disabilities
52. Habeas Corpus Act.
53. Whigs, Tories
54. Nonconformist.
55. Duke of Monmouth.
56. Torbay
67. Hanover (Hannover).
58. Cardinal Richelieu.
Cardinal Mazarin.
59. Earl of Bolingbroke.
60. Colbert
61. Right of Devolution.
62. Nimwegen.
63. Chamber of Reunions.
64. Boyne.
65. Rijswijck.
66. Philip of Anjou.

11. Condottieri.
12. Basel.
13. Regensburg.
14. Trafalgar.
15. Austerlitz.
16. Jena and Auerstadt.
17. Tilsit.
18. Elsass (Alsace). Lothringen (Lorraine).
19. Strassburg.
20. Kellermann. Klèber.
21. Ney, Oudinot.
22. Corneille.
23. Récamier.
24. Rouget de Lisle.
25. Mallseillaise.
26. Jacques Louis David.
27. Josephine.
28. Place Vendôme. l'Etoile.
29. Mamelukes.
30. Weimar.
31. August Wilhelm Schlegel
32. Chateaubriand.
33. Bretagne (Brittany)
34. Duc d'Enghien.
35. Joseph.
36. Pestalozzi.
37. Scharnhorst.
38. Schleiermacher.
39. Fichte.
40. Moritz Arndt.
41. Jahn (Turnvater)
42. Leipzig.
43. Waterloo.
44. Congress of Wien.
45. Metternich.
46. Talleyrand.
47. Warsaw.
48. Bessarabia.
49. Lombardia.
50, Heligoland.
51. Corfu.

第十九講

1. Monroe Doctrine
2. Canning.
3. John Quincy Adams.
4. Odessa.
5. Smyrna.
6. Adamantinos Corais.
7. Constantinos Rhigas.
8. Belgrade.
9. Jassy.
10. Byron, Shelley, Scott.
11. The Pilgrimage of Childe Harold.
12. Fichte, Hegel, Schelling.
13. Niebuhr.

16. John Law.
17. Asiento.
18. Porto Bello.
19. Arkwright.
20. James Watt.
21. John Locke.
22. Harvey.
23. Newton.
24. Civil Government.
25. David Hume.
26. Adam Smith.
27. Voltaire.
28. Ferney.
29. Sans-Souci
30. Montesquieu.
31. Bordeaux.
32. Esprit des Lois.
33. Jean Jacques Roussean.
34. Academy of Dijon.
35. Julie, ou la Nouvelle Héloïse. Emile, ou de l'Education. Le Contrat Social.
36. Methodists.
37. Confessions.
38. Encyclopedists.
39. Diderot, d'Alembert.
40. William Petty.
41. Francois Quesnay.
42. laissez faire, et passer.
43. Turgot.
44. William pitt.
45. Stein, Hardenberg.
46. Frederick the Great. Catharine II Joseph II
47. Patrick Henry.
48. John Adams.
49. Thomas Paine.
50 William Pitt (Earl of Chatham)
51. Blackstone. Delolme.
52. Thomas Jefferson.
53. Necker.
54. Abbé Siéyès.
55. States-general.
56. Bastille.

第十八講

1. Madame Staël.
2. Lafayette.
3. Tuileries.
4. Mirabeau.
5. Girondists. Jacobins.
6. Louis Capet.
7. Marie Antoinette.
8. Directory.
9. Hayti
10. Edmund Burke.

1. Romantic.
2. Neuhumanismus.
3. Winckelmann.
4. Friedrich August Wolf.
5. Novalis (Georg Philipp Friedrich von Hardenberg)
6. Grimm Brothers (Jacob and Wilhelm)
7. John Stewart Mill.
8. Herbert Spencer.
6. Theory of Flogiston.
10 Lavoisier.
11. Laplace.
12 Gay Lussac.
13. Alexander von Humboldt.
14. Fulton.
15. Jenner.
16. Mac Adam.
17. Liverpool, Manchster.
18. Nürnberg, Fürth.
19. Gauss, Weber.
20. Darmstadt.
21. Sir Rowland Hill.
22. California.
23. Sepoy.
24. Lorcha Arrow.
25. Vladivostok.
26. Cochin China.
27. Ferdinand de Lesseps.
28. San Francisco.
29. Thomas Malthus's "Essay on Population" (1798)
30. Justus Liebig.
31. Auguste Comte.
32. Quételet.
33. Buckle.
34. Hegel.
35. Helmholtz.
36. Robert Mayer.
37. Berzerius.
38. Bunsen, Kirchhoff.
39. Talbot.
40. Wilhelm von Humboldt.
41. Sir Charles Lyell.
43. Charles Darwin.
Alfred Russel Wallace.
44. Huxley.
45. Renan.
46. David Strauss.
47. Pasteur.
48. Mendel.
49. Brünn.

第二十一講

1. Fenian plot
2. Missouri Compromise.
3. Texas.
4. New Mexico.
14. Savigny.
15. Romaei.
16. Capo d'Istrias.
17. Moldavia.
18. Ypsilanti.
19. Laibach.
20. Morea.
21. Missolonghi.
22. Wilhelm Müller.
23. Navarino.
24 Arta-Volo.
25. Jeremy Bentham.
26. George Grote.
27. O' Connell.
28. Richard Cobden.
29. Queen Victoria.
80. Polignac.
31. Adolph Thiers.
32. Béranger.
33. Algiers (Algeria)
34. Louis Philippe, Duke of Orléans.
35. Brussels.
36. Leopold of Saxe-Coburg.
37. Carbonari.
38. Wellington.
39. Piedmont-Sardinia.
40. Mazzini.
40. Pio IX (Pius)
42. Croatians.
43. Czechs, Slovaks.
44. Louis Kossuth.
45. Ernst August.
46. Göttingen.
47. Friedrich Wilhelm IV
48. Nicholaus Becker.
49. Alfred de Musset, Hoffmann von Fallersleben.
50. Guizot.
51. Palmerston.
52 Saint-Simon.
53. Fourier.
54. Phalanstère (phalanx)
55. Proudhou, Louis Blanc.
56. George Sand (Aurore Dupin)
57. Palais Luxembourg.
58. Scheswig-Holstein.
59. Kiel.
60. Prag (Prague)
61. Franz Joseph.
62. Schwarzenberg.
63. Garibaldi.
64. Olmütz.
66. Crimea.
66. Sevastopol.
97. Karl Marx, Engels.

第二十講

field)
11. Plevna.
12. San Stephano.
13. Dobrudja.
14. Kars.
15. Gortchakoff.
16. Andrassy.
17. Alexander of Battenberg
18. Ferdinand of Saxe-Coburg-Cohari.
19. Jule Ferry.
20. Boulanger.
21. Toulon.
22. Entente Cordiale.
23. Samarcand.
24. Sudan.
25. Khedive Ismail.
26. Arabi Pasha.
27. Mahadi.
28. Gordon.
29. Khartum.
30. Kitchner.
31. Omdurman.
32. Marchand.
33. Fashoda.
34. Livingstone.
35. Stanley.
36. Togo. Kamerun.
37. Bechuanaland.
38. Cecil Rhodes. Rhodesia.
39. Boer (Bauer)
40. Transvaal.
41. Uitilander (Outlander)
42. Dr. Jameson.
43. Krüger.
44. Earl of Salisbury.
45. Joseph Chamberlain.
46. Graham Bell.
47. Edison.
48. Rockefeller, Morgan, Carnegrie
49. Cleveland.
50. Olney.
51. Guiana.
52. Venezuela.
53. Cuba.
54. Santiago.
55. Roosevelt.
56. Porto Rico.

第二十三講

1. Ricardc.
2. Proletariat.
3. Fourier. Robert Owen
4. New Lanark.
5. Proudhon.
6. Bakunin
7. Carnot. Umbert. M'Kinley.
8. Kropotkin (Krapotkin)

5. Oregon.
6. Kansas., Nebrasca.
7. Stowe's Uncle Tom's Cabin.
8. Abraham Lincoln.
9. Illinois.
10. S. Carolina.
11. Jefferson Davis.
12. Alabama.
13 General Grant.
14. Richmond
15. Maximilian.
16. Carbonari
17. Plombierre.
18. Cavour.
19. Magenta, Solferino, Villafranca.
20. Savoy. Nizza (Nice)
21. Victor Emanuel.
22. Quirinal.
23. Trent (Trient, Trentinos).
24. Triest.
25. Italia Irredenta.
26. Olmütz.
27. Roon.
28. Otto von Bismarck.
29. Glücksburg.
30. Augustenburg
31. Königsgrätz (Sadova)
32. Nassau.
33. Ausgleich.
34. Luxemburg.
35. Chassepot.
36. Chauvinism.
37. Ems.
38. Moltke.
39. Sedan.
40. Cardinal Antnelli.
41 Papal Infallibility.
42. Kulturkampf.
43. Mickiewicz.
44. Ledochowski of Posen and Gnesen.
45. Ansiedlungskommission
46. Cardinal Prince von Hohenlohe.

第二十二講

1. Abdul Adiz.
2. Bosnia Herzegovina.
3. Montenegro.
4. Abdul Hamid
5. Kollar
6. Katokoff
7. Ignatieff
8. Reichstadt
9. Gladstone.
10. Disraeli (Earl of Beacons-

21. Lodge.
22. Lansing.
23. Hughes.
24. Asquith.
25. "Veto Resolutions"
26. Mansion House
27. Parnell.
28. Belfast in Ulster.
29. Sir Edward Carson.
30. Sinn Fe n.
31. Sir Roger Casement.
32. Tangier.
33. Algéciras.
34. Enver Bey(Pasha)
35. Fez.
36. Agadir.
37. Tripoli.
38. Ubanji
39. Betmann-Holweg.
40. Heydebrand
41. Scutari.

第二十五講

1. Bernhardi. Hans Delbrück.
2. Serajevo.
3. Sir Edward Gray.
4. Raymond Poincaré
5. Liége (Lüttich)
6. Marne. Aisne. Joffre.
7. Lemberg in Galicia.
8 Hindenburg.
9. Prsemysl.
10. Dunajec.
11. Jütland.
12. Jellicoe. Beatty.
13. Pétain.
14. Cut-el-Amara.
15. Lusitania
16. Lenin. Trozki.
17. Czech-Slovak.
18. Piave
19. Brest-Litowsk.
20. Foche.
21. Clémanceau.
22. Weimar.
23. League of Nations.
24. Saar
25. Malmedy.
26. Memel.
27. Danzig.
28. Saint-Germain.
29. Jugo-Slav.
30. Fiume.
31. D'Annuncio.
32. San Remo.
33. Duma.
34. Intelligenzia.

9. Trier (Treves)
10. Ferdinand Lassalle.
11. Wilhelm Liebknecht.
12. Bebel.
13. Gotha.
14. Schmoller, Wagner, Brentano
15. John Burns.
16. Lloyd George. Henderson.
17. Jean Jaurès.
18. Madame Roland.
19. Mary Wollstonecraft. William Godwin.
20. Rahel Varnhagen
21. Seneca Falls.
22. Cady Stanton.
23. Susan Anthony. Luise Otto. Fawcett.
24. Beatrice Webb.
25. Pankhurst.
26 Hague.
27. Alfred Nobel
28.
29. Manet.
30. Cézanne.
31. Adolf Hildebrand.
32. Ibsen.
33. Du Bois-Reymond.
34. Roentgen. Madame Curie. Marconi. Henri Poincaré.
35. Friedrich Nietzsche.
36. Eucken. Windelband. Rickert. Bergson.
37. Beethoven.

第二十四講

1 Dreyfus.
2. Pangermanism.
3. Ostend. Reval.
4. Tirpitz.
5. Panislamism.
6 Von der Goltz.
7. Drang nach Osten.
8. Lusitania.
9. Deutschland, Deutschland über Alles.
10. Glorious Isolation (Splendid Isolation)
11. Delcassé
12. Lansdowne.
13. Taft.
14. Port Arthur (旅順)
15. Perry.
16. "Gentleman's Agreement."
17. Porfirio Diaz.
18. Knox.
19. Madero.
20. Huerta.

35. Witte.
36. Bolsheviki. Minsheviki.
37. Cadet. Miliukoff
38. Rasputin.
39. Moghileff.
40. Pskow.
41. Soviet.
42. Kerenski.
43. Brusiloff.
44. Korniloff.
45. Jekaterinburg.
46. Scheidemann.
47. Spartacist. Spartacus.
48. Betmann-Holweg.
49. Amerongen.
50. Ebert.
51. Karl Liebknecht. Rosa Luxemburg.
52. Noske.
53. Kapp.
54. Ruhr.
55. Bonar Low. Curzon. Milner. Arthur Henderson.
56. Bleriot. Alcock. Brown.
57. Denikin. Koltchak. Judenitch.

固有名詞原語表

終

索引

アの部

アイルランド　第六章
アイルランド問題　三一、六三、六三九
アイルランド經營　三一五
アイルランド立法上聯合　三三五
アイルランド自治案　六四〇、六四一
アイルランド共和國　六四三
アイコノクラスト　偶像破壊を見よ
アインハルト　一四五
アウエルシタトの戰　一四六
アヴァール　一一四
アーヴィング(米國文學者)　一四九
アヴィニヨン　一八一
アヴェルロエス　一八二
アウグスツス　一八三
アウグスチヌス、聖アウグスチヌスを見よ
アウグスブルグ　二三三
アウグスブルグ帝國議會　二六三
アウグスブルグ宗教平和　二七九、二九三、二九四
アウグスト(サクソニ公、ポーランド王)　三二七
アウグステンブルグ家　三三一、三三二
アウスグライヒ(オーストリア・ハンガリ協定)　三三八
アウステルリッツの戰　四二五
アガザル　六四七、六四九
アクシウム　四五二、七三
アグリッパ　九四
アークライト　三四六
アジア(羅馬屬州)　六五
アシエントー(契約)　三二五
アスキス　六五五、六六八、六八一
アストル夫人　四〇四
阿育王の西方傳道　四九
アダムス(ウィリヤム)　三七一
アダム・スミス　四二一、四三二
アダムス(ジョン)　六四九、六五九
アテーネ　雅典　二四一
アナクサゴラス　一八、三三
アナルキズム　無政府主義を見よ
アニャーニ　二〇三
アヌバス家　二四三

アハイア(羅馬屬州)　六五、六九
アッピア街道　六六、七九
アフガニスタン　五五七
アブダル・ハミッド　五四三、六一五、六四六
アブダル・アヂヅ　五四二、五五三
アブーキル灣の戰　五五八
アフリカ　六五、一九九、五六一―五六六
アーヘン(エークス・ラ・シャペル)　一四三
アーヘン平和　三四〇、三六二
アマルフィ　二一三
アンゼリコ(フラ・アンゼリコ・デ・フィエソレ)　二三四
アムステルダム銀行　二七三
アングロ・サキソン　二四
アングロ・サキソン帝國主義　五七二
アンタルキダスの平和　一二七
アンタント・コルヂヤール　五五三―五五四
アンチオキア　四五、五五、八五、八七、九八、一〇〇
アントニウス(マルクス)　七二
アントニウス(マルクス・アウレリウス)　五〇、八三、九二
アントアネット(マリア)　四〇五、四〇七、六八一
アントネリ(カーヂナル)　五三五、五三四
アンドラシ　五四八
アントニ(スーザン、米國女權論者)　五八八
アンナ・コムネナ(ビザンツの皇女)　一九二
アメリゴ・ヴェスプッチ　二五四、三〇二
アラゴン　二三〇
アラバマ事件　五一五
アラビア　サラセンを見よ
アラビ・パシャ　五五九―五六〇
アリオスト　二四七―二四八
アリスターゴラス　二四
アリストファネス　四七
アリストテレス　二四、四一、六九、一八一、一八四、二〇四
アルキメデス　四八
アルゼシラス會議　六四五、六四七
アルゼリヤ遠征　四七一
アルフォンゾ一世(フェララ公)　二四八
アルビゼンス派　二〇一
アルマゲドンの戰　一四
アルスタ(ウルスタ)　五二二、五五九、六四一
アレキシオス一世　一九〇
アレクサンドル大王　四〇一
アレクサンドリア　四二、四五、四六、六四、八五、八六、二九八、五六〇
アレクサンドル一世(ロシヤ)　四三五、四三七、四四四、四五一
アレクサンドル二世　四七一、五七九
アレクサンドル三世　五五二―五五三
アレクザンドル六世(法皇)　二三八

イ　の　部

イエーズス　耶蘇　九六―九八
イエーナ・アウエルシタトの戰　四一六
イエーメン　フエリックス・アラビアを見よ
イエルマック　三〇三、三五二
イオニヤ　二一、二三、二四
イオニヤ哲學者　二一、三一
イオニヤ叛亂　二四
イオニヤ七島　四三一、五三六
イングランド　一二四、一四八、二一六、二三八―二四〇、二八九―二九二
イギリス憲法上衝突　三〇九―
イギリス議會　三二七―三三六
イギリスの選擧改正　四四六―四五〇、七〇〇―七〇四
イギリス通商植民事業　三七一―三七二
イギリス思想　三七六―三八一
イギリス經濟思想　三八九―三九四
イギリス産業革命　三八六
イギリスとナポレオン　四一〇―四一一
イギリスの民主的改革　六一四―六一八
イギリスの改造　六九八、七〇四
イグナチウス・ロヨラ　二八一
イグナチエフ　五四一―
イサベラ(カスチラ女王)　二三一
イシス　アイシス　九五
イシドール法令集　一五六、一六
イスパニア　一七四、二五二、二五七
イスパニア王國創立　二三〇
イスパニアのブルボン家　四二四―四二五
イスパニア植民事業　三七一
イスパニア相續役　三四二―三四四
イスメイル(ケヂーヴ)　五五九
イスラム　一七二―一七三、一七五、汎イスラムを見よ
イソクラテス　三九―四〇
イッソスの戰　四一
イタリア　三三五―三三八、ルネーサンスを見よ、四九六、五一六―五三〇、六九〇
イタリア戰役　三五三、三九九―
イタリアとナポレオン　四一〇―四一四
伊土戰役　六四八―六五〇
イブン・カルヅン　一七九
イブン・ハウカル　一七九

イブン・バツータ　一七九
イブン・マスディ　一七九
イブシランヂ　四四三
イプセン　六〇九
イーブル戰　六六一
イマム　一七八
イムペリウム　六〇
イムペラトール　六〇、六八、六九、七〇、七一、七三、七六
イムピーリアリズム　帝國主義を見よ
インヴィンシブル、アルマーダ　無敵艦隊を見よ
イングランド銀行　三七三
印象派　六〇九
インヂアナ州　五六八
インテリゲンチャ（ロシアの智識階級）　三五五、六八五
印度　四八—五〇、四九三、五五七
インノケント三世　一九五
イレーネ　一四〇

ウの部

ヴァヂカノ會議　五三六—五三七
ヴァヂカノ囚人　五三〇—五三七
ヴァンダル　一一一
ヴァンダイク　三五五
ヴァロア・オルレアン家　二三〇、二八八、二九三
ヴアルラ（ラウレンチウス）　二四三、二六八
ウイクリッフ　二〇八、二二五
ウイクトリヤ女王　四五〇、五五七
ウイッテ（ロシヤ）　六八六
ウイッテンベルグ　二五三、二六四
ウイッテルスバッハ家　二九三
ウイーン會議　四二七—四三三
ヴインケルマン　三五一、四七五
ウインスロプ　三二五
ウインデルバンド　六一一
ウイラフランカ　五一七
ウイリアム（ノルマンディ公）　二三八
ウイリアム（寡默）　二八七
ヴイルアルドアン　一九七
ウイリアム・ド・ノガレ　二〇七
ウイルヘルム・テル　二三四
ウイルヘルム一世（老帝）　五三〇、五三三
ウイルヘルム二世　五五三、五六七、六二二、六八一、六九六
ウイリアム三世（ウイリアム・オブ・オレンヂ）　三三一—三三三、三四一
ウイルソン　六三一、六六七、六七〇—六七一、六七三—六七四、七二〇
ウイルソン十四個條　六七〇—六七一、六七三—六七四
ウエストファリアの平和　二七七、二九七
ウエストファリア列國會議　二八七
ヴエネズエラ　五七一
ヴエネチヤ　ヴエニス　一九一、一九六、二二三、四二三、四二九、四三〇、五一七、五一九、五三七
ウエントウオース　ストラトフォード伯を見よ
ウエッブ夫人　六〇二
ヴエラスケス　二五四
ヴエルダン　二九八、六六五
ヴエルサイユ　三四四、四〇四、四〇五、五三二、六七二
ヴエルサイユ條約（一九一九）　六七五—六八一
ウエルタ　六三一
ウオーバン（フランスの將軍）　三三八、三八九
ウオリス（博物學者）　五〇一—五〇二
ウオルムスの宗教上協調　一六一
ウオルムス帝國會議　二七〇
ヴオルテール　三八二—三八四
ヴオルフ（フリードリヒ・アウグスト）　四七五
ウオルストンクラフト（メーリ）　五九七
ウムベルト　五七九
ウルバノ二世（法皇）　一九〇
ウルスター　アルスタを見よ

エの部（エ）

エウクリド　四七
エウリピデス　一八
エッカルト　二六〇
エーゲア文明　一九—二〇、二一
エック　二六五
エジプト　四、二二、四五、八六、四三〇、五五八—五六〇
エスキロス　一八
エッダ　一二六、一三三
エヂスン　五七〇
エドワード三世　二三九
エドワード七世　六三二、六三七、六四六
エドワード　黒太子　二三九
エーナ　イエーナを見よ
エピキュリヤ學派　四六
エピクテーツス　九二
エピルス　六三
エフエソス　五一、九九
エブロ河　一四〇
エーベルト（ドイツ大統領）　六九六、六九七
エホーバ　七〇

エマルスン　五〇九
エミール　一七七
エンヴェル・ベー（パシャー）　六〇六
エンゲルス　五八五
エムス電報　五三一
圓顱黨　ラウンドヘッド　三一九
エラスムス　二五五、二五六
エラトステネス　四七
エリキシール　一八〇
エリザベス（イングランド女王）　二八九―二九一、三一〇―三二一
エリザベス（オーストリア皇后）　五七九
エリトレア海　四九―五〇
エルマック　イエルマックを見よ
エルザス　三四〇―三四一
エルザス・ロートリンゲン　四一七、四三〇、五三〇、五三三、六七八
エルザレム　一〇一、一八七、一八九、六一五、六六六
エルザレム王國　一九〇
エーレンタール　六四五

オの部（ヲ）

オイケン　六二一
オウエン　五七七、五七八
オックスフォード大學　二一八
オクタヴィアヌス（シーザル）　七二、七四、七五
オクロクラシ　衆愚政治　五四、五六、五七
オーコンネル　四四九
オスチア港　六六
オーストリア家　ハプスブルグ家を見よ
オーストリア　三四五―三四六
オーストリア・ハンガリヤ　四五六―四五八
オーストリアとイタリア　四五〇、四五七―四五八
オスナブリュック市　二九七
オスマンリ・トルコ　一七四、一七七―一七八、二三三、二四一、二六一、二七五
オットー一世（大帝）　一五一―一五三
オットー三世　一五四、一八二
オットー（ルイセ）　五九八
オムヴルマン　五六〇
オムマヤ家　一七四
オランダ　三三五―三三四、三三七―三三三、三七五
オランダの獨立　二八七、二九三
オランダ侵略戰（ルイ十四世の）　三四〇
オリンポス　九〇
オルレアン家　四五三、四五九―四六二
オルネー　五七四
オルフェウス（宗教家、詩人）　二五
オルミュッツ屈辱　四六九
オレゴン　四三七、五一一
オレンヂ家　二八四、三三〇―三三二
オレンヂ國　五六五

カの部

ガイウス（羅馬法律家）　八一
回教　イスラムを見よ
カイザー　シーザル　六一、六二三
カイロ　一七四
カヴァリーア黨　三一八
ガウス及びウェーベル　四九〇
カウンター・レフォルメーション　二七八
カヴール　五一七―五一九
カエタン（カーヂナル）　二六四
革命　清教　三三〇―三三二
光榮革命　三三一―三三三
米國獨立革命　三九五―四〇三
フランス革命　四〇三―四一一
七月革命　四五〇―四五三
一八四八年革命　四五三、四七三
二月革命　四五四
三月革命　四六五―四六六
青年トルコ革命　六四六
ロシア革命　六八五―六九三
ドイツ革命　六八四、六九八
合衆國　三九六―四〇三、五〇七―五二四、五六六―五七三、六六七―六六八、七一〇―七一三
カスチラ　二二一
カタラウヌム（シャーロン）　一一四
カタリン（メヂチ）　二八九
カタリン二世　三五八―三五九
カチリナ　七一
カテーダ・ソーシャリズム　數理社會主義を見よ
カデット（ロシア）　六八七
カトコフ（ロシア新聞記者）　五四五
カトー　老カトー　六七、小カトー七一
加特力教會　一〇六、一一一―一一三、法皇を見よ、一六八、二五八、二七九―二八一、五三五
加特力不能命　三二八
カノッサ事件　一五七、一五八
カヒトル　六一
カップ（ドイツ）　六九八
カペー家　二三九

カボ・ヴェルデ　綠岬　五〇三
カボデストリャス　四四五
ガン　ゲント　二一五
韓國併合　六三〇
カンサス及びネブラスカ　五二一、五二三
カンタベリ物語　二四一
ガンダラ　佛教美術　五〇
カント　五五一
監督教會　英國教會　二九二
カンニング(ヂョージ)　四五七、四三九、四四五
カンポ・フォルミオ平和　四一二
カメルーン　六四九
カモエンス　二五四
カラカラ　八五
ガリチヤ　六六一
ガリレオ　二五〇、三〇六
ガリバルヂ　四六八、五一九
カリフォルニヤ　四九一、五二一、五七一
カルヴィン　二七七—二七八
カルヴィン派　二七八、二九八
　ネーデルランドのカルヴィン派　ギューを見よ
　フランスのカルヴィン派　ユグノーを見よ
　スコットランドのカルヴィン派　プレスビテリアンを見よ
　イングランドのカルヴィン派　清教派を見よ
カターレル派　二〇二
ガルトン(優生學者)　五〇〇
カルディア人　一八〇
カール大帝　シャーレマン　一五六、一五八
カール五世(カルロス一世)　二六九—二七九
カール(オーストリア大公後カール六世)　五四二—五四五
カール七世　六九六
カールスタット　二六五
カルソン(サー・エドワード)　六四一
カルソン(卿)　六六九
カルタゴ　二八、六二
カルツーム　五六〇
カルネギー(アンドリュー)　五七〇、六〇五
カルノー　五七九
カルボナリ　五六
カール・マルテル　一五六、一四五—一四六
カロライナ　五一二
カロリング家　一五六

キの部

騎士風　二〇八
キスメット　一八四
ギゾー　四六〇—四六一、三八四
キチナ(將軍)　六六四
キニック派　サイニック派　三九、九一
キプロス　サイプラス　二一、五四八、五四九
皇帝派(ギベリン)と法皇派(ゲルフ)　一五九、一六〇、二一四、三二五
ギベルティ　二四五
喜望峰發見　三〇二
ギボン　九〇
禁止決議　六五七
近世における百年戦役　三〇八
近代大都市　四九四—四九五
近東問題　六四一—
ギユー　二八七
舊教徒解放　四四八—四四九
救世主(基督)　九六
キュナード汽船會社　六一六
キューバ　五七二
キュベーレ(大母神)　九三
キューリ夫人　六一〇
教會改革　二五八—二九八、ドイツ二六〇—、スウィス二七六、二七六、二七七—二七八
教會改革の先驅　二〇二、二〇八、二五八—
兇器時代　四〇七
教壇社會主義　カテーダ・ソーシアリズム　五九一—
虛無黨(ナイヒリスト　ニヒリスト)　五七九
希臘古典(八—五五、世界的文明五六—、六六、八一、六一—、一六五—、四四〇—、五〇八、六六六、六八五
希臘・スラヴ　一六四
希臘美術　五六—五九
希臘の獨立　四四〇—四四六
キリスト教　五〇—五一、九〇—、一〇八、加特力、法皇を見よ
キール運河　六一四、六五八、六八〇

クの部

偶像破壞　アイコノクラスト　一五六、一四〇、一六九—一七〇
グスターフ・アドルフ　二九六
クチュク・カイナルヂィ條約　三五五
ク・テル・アマラ　六六六
グーテンベルグ(ヨハーン)　二五一
グノスチック派　一七一
君主神權主義　三二一
君主崇拜　四二、四五—、九二—
グワム島　五七二
グライフスワルド大學　三五三

グラックス兄弟　六七
クラシクス　古典を見よ
クラシシズム　古典主義を見よ
グラッドストン　五四六
グラナダ王國　二三一
グランド將軍　五一五
クリーヴランド　五七一
クリステネス　二四
クリスチャン九世　六三五
クリミヤ役　四七〇-四七一
グリム兄弟　二六、四七八
クリューゲル　五六五
クリューニ　一五六、一八六
クルツーア・カムプ　文化鬪爭を見よ
クレマンソー　六七五
クレオパトラ　四四、七三
グレー(サー・エドワード、外相)　六五九
グレゴリ一世　一三三
グレゴリ七世　一五七
グレンヴィル內閣　五九八
クレルモン會議　一九〇
クロアート人　スラヴを見よ
クローヴィス　一五五
グローチウス(フゴー)　五六三-五六五
グロート(歷史家)　四四八
クロポトキン(クラポトキン)　五八〇
クロムウェル　三一九、三二〇-三二五

ケの部

景教　ネストリウスを見よ
啓蒙文學(フランスの)　五八一
ゲイ・リュサック　四八八
ゲクレン　デュ・ゲクレンを見よ
ケーザレア市　九七
ケースメント(サー・ロージャ)　六四二
ゲーテ　五五一、四三六、四七六-四七七
ケトレー(統計學者)　四九八
ケーニグスグレッツ　サドヴァの戰　五三七、五三九、五三一
ケーネー(フランソワ)　五九二-五九五
ケプレル　三八六
ケープ・コロニ　六六四-六六六
ゲント　ガン　二二三
現代　モダーン　六一七
現代派(加特力敎會)　五〇五

拳匪　五六八
權利請願　三二四
ケルソン　一六八
ゲルベルツス　ジルヴェステル二世を見よ
ゲルマニ　三、八、一二、一〇九
ゲルマニと羅馬帝國との關係　一一三
ゲルマニ文明の史料と研究　一一五
ゲルマニの土地及び人民　一一七
ゲルマニの思想　一一三
ゲルマニ風の社會の獨立　一三七
ゲルマニ風社會の發展　一四二
ケルンの大伽藍　二一八
ケレンスキ　六九〇、六九五
ケーロネーア戰　四〇、四五

コの部

航海律(ナヴィゲーション・アクト)　三〇八、三三三、三七〇、三九〇、三九二、四五〇
黃禍　六六七
合同組織(資本)　トラスト　六九六
光榮革命(グロリアス・レヴォリューション)　三三三、三八〇、四〇七、四五一
後期印象派(表現派)　六〇九
黑太子　エドワードを見よ
國際主義　五六四、六〇五
國際法　五六四
國際聯盟　四五七、六七五-六七七、七一一-七一三
國際勞働協約　六七一-六七八
コサック　五五三、五六六
コシュスコ　三九八
ゴシック式　二一七
コッスート　四六七
古典(クラシクス)　二一五
古典主義(クラシシズム)　九一-一一三、三八三-三八四、四一九-四二二、四七五
ゴート　西ゴート　一一一
東ゴート　一二四、一二七
コニャック同盟　二七五
コブデン(リチャード)　四五〇
コペルニクス　二五三、二五四-二五六
コンゴー　六四九
コンスタンチヌス(大帝)　七七、一〇四
コンスタンチノープル　一六七、一六九、一八九、一九六、六四六、六八三
コンスタンチノープル印象記　一九三-一九四
コンスタンチノープル征服記　一九七
コンスタンチノープル陷落　二三三
コンスタンチンの寄進

イシドール法令集及びラウレンチウス・ヴァラを見よ
コント(哲學者) 五八八
コムネナ家 一九〇、一九二
コンサル 執權 六九、七〇、四二三
コンラド二世 一五四
コーメス カウント(伯) 一四七
コラー(チェッヒ詩人) 五四五
コライス(希臘の名士、學者) 四四一
コラ・ディ・リエンチ 二三九
コーラン 一七三、一七五、一八四
コルチャック 七二三
ゴルチャコフ 五四八
ゴルツ(フォン・デル) 六二六
コルテズ 三〇三
コルドヴァ 一七四
ゴルドン(才登) 五六〇
コルネーユ 三四四
コルベール 三八一
コルベール主義 三七一—三七二
コルフー コルキラ 四三一
コレイシュ族 一七〇
コレッジョ(畫家) 二四九—二五〇
コロンブス 三〇二

サの部

サヴォイ及びニス 五二九
ザヴィエー(フランシス) 二八八
サヴォナロラ 二五九—二六〇
サクサ・ルブラの戰 一〇五
サクソンの敎化 一三七
サクソン家 一三一
サクソン諸侯の反亂 一五七—一五九
サドヴァ ケーニグスグレーツ 五二七、五二九、五三一
ザマ 六四
サフレヂェット 婦人參政權論者 六三三、七〇一
サン・ヴィターレ院 一六八
産業革命(英國) 三七六
三國干渉(日本) 五六七
三國協商 六三四
三國同盟 五五〇—五五四
三位一體(トリニティ) 一〇三、一〇五、一一一
三十年戰役 二九五
ザンジバル 一七九
サン・シモン 四六一—四六二、五七七

サン・ステファノ條約 五四七
サン・セルマン條約(一九一九) 六八一—六八二
サンチャーゴ 五三二
サンディカリズム 六九五
山東問題 六三三、六六三—六六四、六七九—六八〇、七一五
サン・フランシスコ 六二六
殘餘議會(ランプ・パーラメント) 三三一、三三五
サン・レーモ會議 六八四、七一四
サモア島 五五五
サラセン 一六五、一七〇
サラセンの學藝 一七八
サラセンの文明の意義 一八一
サラディン 一九五、六二五
サラミス 二八
サリック族 一四四
サリック家 一五五
サリック法典 一二六、一二九
サルディニア王國 四四一、四五六、四六五、五一七、五二九
サレルノ 一五九、一八一
サロナ スパラートー 一六八

シの部

シーア派 一七四
シェクスピア 二五四、三二二
ジェフリ(ゴットフリード) 一九一
ジェームソン 六二二
ジェンナー 四八八
シェリー 四八三
シェリング 四七九
シッキストス四世(法皇) 二四五
シーザリオン(シーザルの子) 七二
シーザル(ジュリアス) 六〇、七〇、七一、七三
シーザルのガリア戰記 一一五
シーザル・ジュピター崇拜 九五
シーザル・ポープ主義 一六七
シーザル・ボルジャ 二三八
自然法(羅馬法) 八一
自然法 三六五
自然尊重說(フィジオクラット) 三九二—三九五
シセロ 六八、七一、八二
七賢人 二一、二三、三一
七愛國者(イギリスの) 三三三
七月革命 四五〇—四五五
七十人の書(セプチュアジンタ) 四七

七年戰役 四四八
七週戰役 五三九
七月戰役 五三九
シチリア 二八、三三、三一、四八、一八八、三四四、五一九
支那 三三、五〇、一七九、一八三、二八三、三九三、四九〇、五六一—五六八、六六三—六六四、六六八、七一五
ジブラルタル 三〇三、三四四
シベリア 四五二、四九六(滿鐵) 五五六、五五七
新プラトーン派 九三、一〇三
新カント派 六一一
新理想主義 一四、六〇八
人生主義 ヒューマニズム 七、二三六、二三九、二四五、二五一、二六〇
新人生主義 五五一、四七五
人口論 五七〇
人身保護法 ハーベアス・コルプス・アクト 三三八—三三九
神聖羅馬帝國 一四三、一五三、四一六
神聖同盟 四〇四、四五三、四五七
神曲 二三七、二三八
紳士協約 六二八、六三〇
親密なる協商 アンタント・コルザアール 五五五—五五四
シン・フェーン 五〇六、六四一
下關條約 五六七
シャイデマン 六九八
社會主義 五〇六—
社會民主黨(ドイツ) 五八七、六〇七、六九三
シャトーブリヤン 四二一—四二三、四七六
ジャン・ダーク 二三〇
シャンポイヨン 四八二
ジャメイカ 三三四
シャーロン 一一四
シャルンホルスト(將軍) 四三五
宗教上保留 二九二
宗風改革運動(中古) 一五六
十月勅令 六八五
十月黨 六八五
十字軍 一八六—
衆愚政治 オクロクランを見よ
自由放任主義 レセー・フェール 三九三—三九四、四五〇、四九〇—四九一
ジュピター ユピテルを見よ
シュマルカルデン同盟 二〇五
シュマルカルデン戰役 二七六
シュモルラ 三九一
シュワーベン(アレマンニ) 一一四
シュワーベン家 スタウフェンを見よ
シュワルツェンベルグ公 四六七—四六九

シュライエルマッヘル 四三六
ジュリア家(羅馬皇帝) 八三
ジュリオ二世(法皇) 二四五
シュレーゲル兄弟 四二一
シュレスウィヒ・ホルスタイン 二九五、四一五—四六六、四六九、五二〇—五二八、六七九
女子參政權問題 三九七
薔薇戰役 二三〇
ジョン(イングランド王) 二一六
ジョッフル 六一一
ジョーレス(ジャン) 五九四
ジョルジ一世(ギリシャ王) 五〇六
ジョルジ三世(イギリス王) 三八六、三九六
ジョルザ・サン(佛女流小說家) 四六三、五九七
シーリイ(英歷史家) 三〇八
ジルヴェステル二世(法皇) 一八二
シルラー 三五一、四二六
シレジヤ 三四六、三四八、六七九

スの部

スウィス聯邦 二二三—二二四
スウェズ運河 五五八—五五九
スカンザナヴィヤ 五〇六
スキピオ 六四
スコット(ウォルター) 四八五
スコットランド立法上聯合 三三四
スコラ派 煩瑣哲學を見よ
スタウフェン家(スワビア) 一五五
スタントン夫人(ケデ) 五九八
スタンレー 五六二
スタンブーロフ(ブルガリアのビスマルク) 五五〇
スーダン 五六〇
スタイン シタイン 四三五—四三六
スタイン・ハルデンベルグ改革 三九四、四三五—四三六
スチュワート王朝 三一〇—三三六
ステール夫人 四〇六、四一九、四二一—四二三、四七六、五九七
ストア派 四六、八一、九一
ストウ(ビーチャ・米國女流小說家) 五一三
ストウラウス(ダヴイド) 五〇二—五〇五
ストラスブルグ 二五二、三四〇、四三七
ストラッフォード伯 ウェントウォース 三一五、三一七、三二八
スパイエル 一五八
スパルタ 二八一
スパルタカス團 六九四、六九六
スピノーザ 三五四

スペンサー（社會學者）　四八七、五〇三
スミス（アダム）　三九一—三九四
スンナ派　一七四
スエトニウス　八三
スラヴ　一六四、一六八、汎スラヴを見よ
スルタン　サルタン　一七八
スルラ　七〇、七四
スローヴェン　スラヴを見よ

セの部

清教派　ピュリタン　三〇八、三九三、三一一、三一三
青年歐洲　四三五—四三六
青年トルコ　六四四—六四六
セヴァストポール　四七一
世界主義　六〇三
世界政策　六三一—
世界大博覽會　四九五
セザンヌ　六〇九
ゼスイタ教團　二八一—二八三、三〇五、三〇六、三九五、四三二、四五五、五三五、五三九、五四〇
セダン　五三三
ゼネヴァ協約　六一四、六〇七
セネカ　九二
セネカ・フォールス決議　五九八
セノア　一九一、二一三
セパレチスト（分離派、英國の）　三二三
セバストポール、ケルソンを見よ
セバストポールの圍　戰役（クリミア）を見よ
セプチュアジンタ、七十人の書を見よ
セフェルソン（トーマス）　四〇一
セミチックの神人思想　一〇〇
セームス一世（イギリス王）　三二一
セームス二世　三三〇—三三三
セームス六世（一世）　三一〇
セームスン　三六五
戰役ペルシャ戰役　三一—
　ペロポネサス戰役　三〇—三一
　ポエニ戰役　六三、六四
　十字軍戰役　一八六—
　百年戰役　二二四
　イタリヤ戰役　二三二、二六九
　シュマルカルデン戰役　二六六
　ユグノー戰役　二六八
　三十年戰役　二九五
　ルイ十四世戰役　三四〇—三四四
　ファルツ相續戰役　三四一
　イスパニア相續戰役　三四二—三四四
　オーストリア相續戰役　三四八
　シレジヤ戰役　三四八
　北方戰役　三五四
　七年戰役　三四八
　米國獨立戰役　三九九—四〇一
　革命及びナポレオン戰役　四〇六—四二七
　希臘獨立戰役　四四三—四四五
　クリミヤ戰役　四七〇—四七一
　伊太利戰役　五一七—五一八
　南北戰役　五二一—五二二
　シュレスウィヒ戰役　四九五—五二五
　普墺戰役　五二七
　普佛戰役　五三一—五三三
　露土戰役　五四七
　日清戰役　五七七
　米西戰役　五九三
　南亞戰役　五六五
　日露戰役　六二九
　バルカン戰役　六五〇、六五一
　世界戰役　六五三—六七七
世界戰役　六五三—七一七、その損害七〇六—七〇八
聖アウグスチヌス　一〇七、一一一、一一五
聖アンセロ城　一五九
聖セローム　一〇七
聖ドミニクス　二〇三
聖トーマス　二〇〇
聖パウロ　九八—九九
聖バルソロミューの虐殺　二七〇
聖フランシス　二〇三
聖ベネディクチヌス　一四三
聖ボニファチウス　一四七
聖マルコ寺院　一六八
聖ヨハンネス・クリソストム　一〇九
聖ルイ　ルイ九世を見よ
選擧改正（イギリス）　四四九—四五〇、五〇〇—五〇四
選擧公（クールフュルスト、エレクトル）　二三一、二四六
滑航艇戰　六六五、六六七、七〇九
專制主義　三五二—三五六
セラエヴォ　六五七
セラーヒス・エト・イーシス　九二
セルヴァンテス　二三四
セルヂュク・トルコ　一七七、一八八
セルビア　四四四、四五七、スラヴを見よ、六五〇、六五九、六六三、六六八、六七二

セレウコス家　四五一
セローム　聖セロームを見よ

ソの部

ソウィエット(會)　勞兵會　六〇九─六九三
ソクラテス　一八、三三─三五
ソフォクレス　一八、三八四
ソフィースト　三三一─三三
ソム戰　六六五、六七〇
ソリスベリ卿　五六五、五一一
ソルフェリノ戰　五一七、五一八
ソルボンヌ大學　二八一
ソワソン　一三五

タの部

ダ・ヴィンチ(レオナルドー)　二四六
大諫奏　グレート・レモンスランセズ　三一八
大憲章　マグナ・カルタ　二一六
タキツス　タシツスのゲルマニア風土記　一二五、一二七─一三一、一三四─一三五
托鉢巡教團　二〇三
タッソー　二五〇
タフト　六三七、六三八
ダニューブ州　五五七
ダマスクス　一七四、六一四
ダンテ　八、二三七、二三八、二三九
タンネンベルグ戰(一九一四)　六六一
ダンギャン公　四三三
ダヌンチヨ　六八五、七〇九
ダルブケルケ(アルフォンソ)　五〇三
タルボト(寫眞技師)　五〇〇
ダルウィン　五〇一─五〇三
タルソス　九九
ターレス　三一
タレーラン　四二八、四五三

チの部

ヂアズ(ポルフィリヨ)　六五一
チェック人　スラヴを見よ　二九五
チェック・スロヴァック　六六八─六六九、六八三
チェムバー・オウ・レユニオンス　三四〇─三四一
チェンバレーン(ジョーセフ)　六一八、六三四、五六五
ヂェール　四五一─四五二、四五九─四六五、四六四、五三三、五三三
ヂオクレチアヌス　七七、一〇四
ヂスレーリ　ビコンスフィールド卿　五四六、五四八、五五七

チャド・カムベアドール　一八七
ヂベリウス　七六
ヂベル河　六一
青島　六六〇─六六四
帖木兒　一七九
ヂンブクツー　一七九
チャールス一世(イングランド王)　三二二
チャールス二世(カルロス二世・イスパニア)　三三九、三四三
チャールス二世　イングランド王　三二六─三三一
チャールス八世(フランス王)　二三三、二五九
チャールス十世(フランス王)　四五〇─四五一
チャールス勇膽公(ブルゲンド)　二八六
チャールス十二世(スウェーデン王)　三五四
チュードル家　二三〇
チュニス　一九八、五五一
ヂュナニッツ　六六二
チュルゴー　三九四、四〇三
十字軍　一八六─二〇〇、二〇三
重商主義　マルカンヂリズム　三〇七、三六九─三七六、三八九
長期議會(ロングパーラメント)　三一一、三三六
長老會議(セネヴァの)　プレスビテリ　二一八
チョーサー　八、二四〇─二四一
ヂルジット平和　四一九
ヂルヒッツ　六一四

ツの部

ツァール　ザール　六一
ツヴィングリ　二六二
ツキディデス　スシディデス　一八、二八
ヅンキルク　三二四、三三七
ツール・ポワチェーの戰　一三六
ツール　二九八

テの部

ディアスポラ　離散を見よ
帝國主義　イムヒリアリズム
アレクサンドルのイムヒリアリズム　四三
羅馬　イムヒリアリズム　六一、七四、八八
神聖羅馬帝國　一四二、一四四
アングロ・サキソン　イムヒリアリズム　五五六─五五七、六一八
ロシア　イムヒリアリズム　五四五、五五五
ドイツ　イムヒリアリズム　五一三、六二一
米國　イムヒリアリズム　五七五
ディクタートル　七一

ディドロー(百科學者)　五八九
デーヴィ(ハンフリ)　四八八
デーヴィス(ジェッフェルスン)　五二一
テオドシウス　一〇五、一二七
テキサス　五二一、五七一
デスポット　三二八
テスト・アクト　信仰審査律　三一八、三二九
ディチアン　二四八
ヂッツェル(ドミニコ教團僧)　二六四
デニキン　七一五
デーン　ノルマンを見よ
デンマルク　五〇六、シュレスウイヒ・ホルスタインを見よ
デモクラシ　二四一、三七四一
デモステネス　四〇、四三
デュレル　二五四
デルカッセ　六二〇、六二一、六二四、六四六
デルフィ　二六—二八
デルブリュック(ハンス)　六四五
デュ・ゲクレン　二二九

ト の 部

ドイツ聯邦　四五一、四五八、四六六、四六八—四六九
ドイツとナポレオン　四一四—四一八
ドイツ帝國　中古ドイツ帝國一五三、最近ドイツ帝國五三一、六二一
ドイツ植民地　五六三—五六五、六一四、六七七—六八〇
統一黨　ユニオニスト　六四四
ドーヴァー秘密條約　三二七
同盟怠業(サボタージ)　五九五
同盟罷業　五九五
十日物語(デカメロン)　二四〇
獨立黨　インデペンデント(英國內亂)　三一九
東方策(ウィリアム二世の)　六一四
トスカネリ　三〇〇
ドナテロ　二四四
トーマス　聖トーマスを見よ
トーマス・モーア　モーアを見よ
トーマス・アクィノ　二〇五
ドミニカン派　二〇二
ドミニクス　聖ドミニクスを見よ
トリースト　六八二
トライチケ　六一五
トラキア　スレース　二〇、二五
トラスト　合同組織を見よ
トラファルガーの戰　四一五
トランスヴァール　四九二、五六四—五六五
トーリ黨　三二七
トリポリ　六四八、六五〇
トリーヤ(トレヴェス)　五八三
トルコ　一七七—一七八、一八九、二三三、二七五、二九〇、カタリン二世のトルコ戰　三五五、四四三—四四六、四五九、四七〇—四七一、四四三—五四九、六四四—六六三、六八二
トルストイ　五八〇、六〇五
弗の君(ドルラプリンス)　三七〇
奴隷賣買　三七五
ドレーフェス　六二三
ドレーク(フランシス)　二九〇
トレント宗教會議　二八一
トロツキ　六六八、六九一、六九三

ナ の 部

ナイメーゲン平和　三四〇
ナイヒリスト(ニヒリスト)　虛無黨を見よ
ナイル(ニール)　二一
ナヴァリノ戰　四四五
ナポリ　二二六、五一九
ナポレオン(ナポレオンボナパルト、皇帝一世)　四〇九—四二七、四六〇、四七七—四七八
ナポレオンと文藝　四一八—四二三
ナポレオン三世　五一四—五一五、五一六—五一九、五二九—五三一、五三八
南海の泡　サウス・シー・バッブル　三七五
南北戰役　五〇七—五一四
南洋(ドイツ領)　六七九
ナントの勅令　二九二

ニ の 部

ニウ・ラナルク　五七八
ニケーア宗教會議　一〇五
二國協商　五五一—五五四
ニコラス一世　四四五、四七〇
ニコラス二世　四七〇—四七一、五〇六、六五九、六八七—六九〇
ニコラウス五世(法皇)　二五五
ニコポリス　二四一
ニーチェ　六一〇
ニス　ニッザ　五一九
日英同盟　五六八、六一八—
日露戰役　六一九
ニヒリスト　ナイヒリスト　虛無黨を見よ
日本　二一—二二、二三、二九、四二、二八二、三〇五、三〇七、三七一、四九三—四九四、四九五、五三五、五六六—五六八、六二五—、六六七—六六四、六七三、六七九、七一〇、七一三—七一五
ニーブール　四八一

ニュー•イングランド植民　五一五、三九一
ニュートン　三七九
ニュルンベルグ　二六二

ヌ の 部

ヌミヂア　六五

ネ の 部

ネオプラトニズム　新プラトン派を見よ
ネッカー　ネッケル　四〇五、四〇四
ネストリウス　一七〇、三〇一
ネースビイの戰　三一九
ネーデルランド　二八五—二九二、三四三、三四六
ネーデルランド侵略戰(ルイ十四世の)　三一九—三四〇
ネーデルランド王國　四三〇—四三一、四五三
ネポチズム　閥族策　二三七、三三八
ネロ　八三

ノ の 部

ノヴァリス　四七八
ノスケ　六九八
ノーベル(アルフレッド)賞金　六〇五—六〇六
ノルマン　一二四、一八八
ノルマンのイングランド征服　一四八、三二八
ノルマンの南伊太利征服　一五九、一八八
フランスのノルマン　一四七、一九〇、三二八
ノルマンディ公國　一四七、三二八—三二九

ハ の 部

ハイデルベルグ大學　二五二
拜火教　一七一
ハインリッヒ　ヘンリを見よ
バイロン　四四一、四四四、四八五
パウロ　聖パウロを見よ
バッキンガム公　三一四
ハックスレー　五〇二
バグダード　一七四、一七七、六一五、六六六
バグダード鐵道　六一五、六一三
バクーニン　五七九、五八〇、六八五
バックル　四九八
ハックルート　三〇六
バスツール　五〇四
バーゼル平和　四一五
ハーデンベルグ　四二六
バーネル　六四〇
ハノーヴァ家　五三三、二四六、五二七
バビロニヤ　四
バビロニヤ幽囚(法皇の)　二〇六、二三六
ハプスブルグ家　二三三、二三一
　オーストリアハプスブルグ家　二八四—二八五
　イスパニアハプスブルグ家　二三三、二八四—二八五
ハムデン(ジョン)　三一六
ハンガリ　一五一、四六六、四六七、五〇六、五一八、六八二
ハンガリア十字軍　一九五
パンカルスト夫人　六〇二
バンクロフト(米國歷史家)　五〇九
萬國電信聯合　六〇五
萬國郵便聯合　六〇五
萬國平和協會　六〇五
萬國平和會議　六〇五—六〇七
萬民法　ユス•ゲンチウム　八〇、三六四
汎イスラム主義　六一九、六二九
汎スラヴィズム　五四五—五四六、四五
汎日耳曼主義　六一三
煩瑣哲學　スコラ哲學　二〇二、二六二
ハンザ都市同盟　二一四、二三二
バーンス(ジョン)　五九四、六三五
パンテオン　九四
ハンニバル　六五
ハンブルグ　二一四、五九二
ハンブルグ•アメリカ汽船會社　六一六
布哇　五七二
バワリア　二九四、四一六
パラチヌス　六一
パリー大學　二一八
ハリファ　一七五—
バルカン問題　五五五、四四〇—四九六、四五九、五四一—、六四一—
バルカン戰役　六五〇、六五一
バルセロナ　二一五
バルフォア　六二八
バルボア　三〇二
パレスチナ　九六—九八
パレストリナ(音樂家)　三五〇

ヒ の 部

ヒオ九世　四五六、五六八、五五四—、五四三
飛行界　二四六、六六三、七〇九
ビコンスフールド卿　ヂスレーリを見よ

ピサ　二三一
ビザンツ文明　一六四—
ビザンツ式美術　一六八
ビザンツの競馬　一六九
ビザンツのルネーサンス　一七〇
ビザンツと十字軍　一九二
ピザルロ　五〇三
ピシストラトス　二四
ヒスパニア　六三、イスパニヤを見よ
ビスマルク　五二一—五三三、五三八—五四二、五四四、五四八—五四九、五五一、五六二、五六三、五八八—
ピーター一世(大帝)　三五一—三五四
ピーター三世　三五四
ヒンデンブルグ　六六一、六六五、六七〇、六九八
ピット(老ピット、チャタム卿)　三七六、四〇〇
ピット(少ピット)　四一〇
ピチヤ(デルフィの司)　二六
ヒッパルコス(數學者)　四七
ピピン(短小王)　一三六
ヒッポ・レギウス　一一三
ヒメラの戰　二八
百科學者　三八三、三八八—三八九
百年戰爭　二二四、二二九—二三〇
ヒューマニズム　人生主義を見よ
ヒューリタン　清教派を見よ
ピラミッドの戰　四三〇
ヒルデブランド　グレゴリ七世を見よ
ヒルデブランド(畫家)　六〇九
ヒルルス　六二

フの部

ファショダ事件　六六〇、六七〇
ファリチウス　六四
ファチマ家　一七四
ファリサイ　分離派を見よ
ファルツ　二九四、五三三
ファルツ相續戰　三三三、三四一
ファルンハーゲン(ラエル)　五九七
フィジオクラット　自然尊重派を見よ
フィッグ派　三二七
フィディアス　一八
フィヒテ　四二六、四七八、四七九
フィンランド　四三)
フィリッヒン　五〇五、六七三
フィリップ(マケドニア王)　五九
フィリップ二世(オウギュスト)　一九五、二一六、二二九
フィリップ二世(イスパニヤ王)　二七九、二八〇、二九〇、三三八
フィリップ四世　フランス王　二〇七
フィリップ四世(イスパニヤ王)　三三九
ブーヴィヌの戰　二一六
フェルヂナンド(アラゴン王)　二三三
フェルヂナンド一世(ドイツ皇帝)　二九三
フェルヂナンド二世　二九五
フェルヂナンド(ブルガリヤの君主)　六五〇、六四四
フェルヂナンド(墺國皇儲)　六六五、六六七
フェキヤ人　ポエニを見よ
フェニヤ陰謀　シン・フェーンを見よ
フェヌロン　三六七
フェリ(ジュール)　五九二—五九三
フェリックス・アラビア　一六八
フォスタット　一七六
フォーセット夫人　五九八、六〇三
フォル・ポムメルン　二九八
フォートルム(羅馬の)　六一、七九、八二
ブカレスト條約(一九一三)　六五一
ブカレスト條約(一九一七)　六六九・六八一
福音　九三、九八
ファゲル家　三六四
婦人政治(法皇の婦人政治)　一三三
婦人問題　五九七
フス(ヨハーン)　二三二、二六七
フス派　フス戰役　二五九、二六七、二九五
プゼミスル　六六一
プテオリ港　六六
プトレマイオス二世(プトレミ)　六四
プトレミ家　四五一
普佛戰役　五二八—五三三
文化鬪爭　クルツーア・カムプ　五五八—五六二
ブンセン及びキルヒホフ　四九八
フンヌ民族(匈奴)　一一三
フンボールト(ウィルヘルム)　四三五
フンボールト(アレクザンダ・フォン)　四八八、五〇〇—五〇一
分離派(ファリサイ)　セペレヂストを見よ　九六、九八
ブラウン及びオルコック(飛行家)　七〇九
プラキシテレス　五五
プラテア　二八
プラトー　一八、五五、一八四、二四二
プラン・カルヒュ　三〇一
佛郎機　フランキ　一四七

フランクフルト　五二八
フランクフルト皇帝選擧會　二六五－二六六
フランクフルト國民議會　四六六、四六八
フランクフルト君主會議　五三三、五八九
フランクリン　三八三－三八四、三九九
フランク　一一四
フランク王國　一三四－一四一
フランコニア家（サリック家）　一五三
フランツ・ヨーゼフ（オーストリヤ皇帝）　四六七、六五五、六八一
フランシス　聖フランシスを見よ
フランシスカン派　二〇一
フランシス一世　二六九
フランス　一三〇、一九〇、二〇四、二二六、二三八－二四〇、二七五、二八八－二九二、五三六、五五一－五五四
フランス大革命　四〇五－四〇九
フランス第三共和國　五三三
ブーランゼー　五五三
プランタジェネット家　二二六、二二九
ブランデンブルク・プロシア　二九七
ブランデンブルグ　三四七
フランドル　二一五
フーリエー　四六三、五七七
フリーセン　一三七
ブリタニヤ　七九、一三五、三三五、三三四－三三五
フリードリッヒ　フレデリックを見よ
フリードリッヒ・ヴィルヘルム　フレデリック・ウィリアムを見よ
プリニウス　八六
プリンツェップス　七六
プール人　五八四、六三三
ブルガリア　五四四、五四六－五五二
ブルガリア獨立　六四四、六六二
ブルガリア人　スラヴを見よ
ブルクハルト　二五五
ブルグンド　一二四、一二八、一五六
ブルグンド公家　二八六
ブルシロフ（將軍）　六九〇
ブルージュ　二二三
ブルジュワ（市民）　五一七
フルダ　一五七
ブルーツス　七二
フルトン　四八八
ブルードン　四六二、五七九
ブルネレスコ　ブルネレスキ　二四五
ブルノー　二五〇、二〇六
ブルボン家　二九二、三五七－三五九

ブルボン（イスパニア）　三四五
ブレヴナ　三四七
プレストンの戰　三一九
ブレスト・リトウスク平和　六六九、六八一、六九三
プレスビテリアン　二七八、二九二、三一七、三一九
フレデリック（サクソニア選擧公）　二六四
フレデリック一世（ドイツ皇帝バルバロサ）　一五四、一九五
フレデリック二世（プロシヤの大王）　三四五－三四八
フレデリック三世（ブランデンブルグ攬伯プロシャ王
　として一世）　三四七
フレデリック七世（デンマルク王）　四六五、五三三
フレデリック・ウィリアム（プロシヤの大選擧公）　二九七、三四七
フレデリック・ウィリアム一世（プロシヤ王）　三四七－三四八
フレデリック・ウィリアム四世　四六八
プレートン（ショルザ・ゼミストス）　二四三
ブレンターノ（經濟學者）　五九一
ブレーメン　五九二
ブレリオ（飛行家）　七〇九
プロスキシネーシス　匍伏叩頭の禮を見よ
プロシヤ　三四七－三五〇、四一六、四二九－四二七、四三〇－四三一、四六五、四六八、五一八、五三〇－
　五三二　ドイツを見よ
プロシヤ對オーストリア　五二〇－五二八
プロタゴラス　五二、五三
プロチノス　一〇三
プロテスタント　二七五
プロンビエール會見　五一七
プロレタリア　貧民階級　五一七
フロレンス　二二五、二三六、二三七－二三八、五一九、メヂチを見よ
フューメ　六八二－六八三

への部

ペイヌ（トーマス）　四〇〇
ベートーフェン　六二一
平和主義　平和殿（ヘーグの）　六〇三、六〇五
ヘーゲル　四八三、四九八、五八四
ベーコン（ロージャ）　一八二、二〇五、四〇〇
ベーコン（フランシス）　二五四、三一五、三三六、三七八
ベッサラビア　四一〇
ヘッセ　五三七　ヘッセ軍隊　三六八
ベッチ（イギリス提督）　六六五
ペティ（ウィリアム、英國學者）　三九三
ペテルブルグ　ペトログラード　五五四、六八七－六八九
ベートマン・ホルウェヒ　六四九、六九五
ペトラルカ　二三九、二四〇

ペートル・ダイユ(カンブレーの監督) 三〇〇
ベネディクチヌス、聖ベネディクチヌスを見よ
ベネディクチン修道院 一三〇一
ベーベル 五八八
ベンザム(ゼレミー) 四四七、四八六—四八七
ベンジャミン(テュデラの) 一九五
ヘンデルソン 五九四、六六九
ヘンリ(パトリック) 三九七—三九八
ヘンリ「航海」公 一九九、三〇三
ヘンリ・ダーンレー 二八九
ヘンリ三世(ドイツ皇帝) 一五四、一五七
ヘンリ四世(ドイツ皇帝) 一五七
ヘンリ四世(ブルボン家) 二九二、二九五
ヘラクリトス 三一、三五
ペリクレス 一八、三三
ベル(グラムハム) 五七〇
ベルガモン 四六
ベルギー 四六五、六六〇、六七一
ベルグソン 六二一
ヘルゴランド(ヘリゴランド) 四三〇、五六四、六八〇
ベルツェリウス(化學者) 四九八
ペルシャ 三六、三六一—三七
ペルシャ戰役 二五—
ペルシャ教 一七一
ペルンハルザ 六四五
ペルペル族 一七五
ヘルムホルツ 四九八
伯林會議 五四八
伯林勅令 四三三—四三四
ヘレニズム 四五—六四、四七九
ヘレネドム 四五
ヘロデ大王 六六、九七
ヘロドートス 一八
ペロポンネソス同盟 二二
ペロポンネソス戰役 三〇—三二

ホ ノ 部

法皇 一三一—一三三、一三八—一四二、一五五—一六二、二四五、二八三—二八四、五〇三、五三〇—五四二、
キリスト教、加特力、十字軍、教會改革をも見よ
ポアンカレ(大統領) 六五九
ポアンカレ(數學家) 六二〇
ボワチーエーの戰 一三六
ボインの戰 三四一
包圍政策 六三五

封建制度 一四四
法律綱領(羅馬法) インスチチュチオネス 八〇
ボエニ(フェニキア人) 六三
ボエニ戰役 六三、六四
ボカチオ 二四〇
ボスニア・ヘルツェゴヴィナ 五四四、五四六、五四八
ボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合 六四四、六五七
ボッチチェリ 二四四
ボーナ・ロー 六九九
ボニファチウス 聖ボニファチウスを見よ
ボニファチオ八世(法皇) 二〇七
匍伏叩頭の禮(プロスキシネーシス) 四一、七八
北方戰役 三五三—三五四
ボップ(梵語學者) 四八二
ホッブス 三六五—三六六
ホーヘンツォルレルン プロシヤを見よ 三四三、五三二、六三一
ホーヘンローエ公(カーザナル) 五四一
ホーマー(ホメーロス) 二〇、四七五
ホムベルナ城 二八一
ホムペイウス 七〇
ホメーロス ホーマーを見よ
ホラチウス ホレース 七三
ポーランド 四三九—四四〇、四五四、五〇六、五二二、五五八、六七八—六七九
ポーランドの分割 三五五—三五九
ポーランド人 スラヴを見よ
ポリグノートス 一八
ポリビオス 六六、六八
ボリングブローク 三五七
ポリニャック 四五一—四五三
ボルセヴィキ 過激派 六六九、六八六—
ボルドウィン(フランドル伯) 一九七
ポルトガルの獨立 二九七
ホルバイン父子 三三四
ポルタヴァの戰 三五四
ボルト・リコ 五七二
ボロニヤ大學 三一八

マ の 部

マルストン・ムーアの戰 三二九
マインツ 一一七
マキアヴェリ 二三八、二四九
マキシミリヤン(オーストリヤ大公、メキシコ皇帝) 五五五
マキシミリヤン一世(ドイツ皇帝) 二二四
マッキンレー 六八〇

マック・アダム 四八九
マグナ・カルタ 大憲章を見よ
マケドニヤ 五八一、六四四
マッケンゼン 六六二
マサチュセッツ 五二五
マザレン(カーヂナル) 三五七
マッジニ 四五六、五二九
マジャール人 二四、ハンガリヤを見よ
マセンタの戰 五一七
マゼラン 三三五
マーザー 五六〇
マチルダ(トスカナ伯爵夫人) 一五八
マデロ 六三一
摩尼教 一七一、二〇二
マニラ 五七三
マネー(畫家) 六〇九
マーネス マニハイウス 一七一
マネトー 四七
マンチェスタ派 四五〇、四九五
マンモス谷 三三
マンション・ハウス演說 六三七、六四八
マリウス 七〇、七四
マリヤ及びその崇拜 一〇〇、二〇四、五二四
マリヤ・テレサ 三四八、三七〇
マルクス(カール) 四七二、五八二―五八七、六八六、六九五
マルコニ 六二〇
マルコ・ポーロ 三〇三
マルサス主義(人口論) 四九六―四九七
マルシャン少佐 五六〇―五六一
マルセーユ マッシリヤ 二一、三三三、四二九、五五八
マルヌ 六六一、六七〇
マルカンチリズム 重商主義を見よ

ミの部

ミカエル大公(ロシヤ) 六八九
ミケランジェロ 三四七
無國家主義 無政府主義を見よ
ミシシッピ會社 三七四
ミスーリ妥協 五二〇
ミソロンギ 四四四
ミツキエヴィッチ(ポーランド詩人) 五三八
ミトラ崇拜 九三
民法(羅馬法) 八〇
民法全集(羅馬法) 八一

ミュンスタ市 二九七
ミラノ 五一五、二二六
ミラノの勅令 一〇五
ミラボー 四〇六
ミリユコフ 六八七、六九〇
ミル(ジェームス) 四四八、四八七
ミル(ジョン・スチュワート) 四八七、六〇三
ミルナ 六九九
ミルトン 三三五、三七七
ミレトス市 二四

ムの部

ムジック ロシヤの農民 六九一―六九二
無政府主義 アナルキズム 五七八―五八〇、六八五
ムセウム(アレクサンドリアの) 六四
無敵(必勝)艦隊 インヴィンシブル・アルマーダ 二九一、三一七
ムリリヨ 二五四
ムール(モール)人 一七五

メの部

明治天皇 五六六
メッカ 一七三
メガステネス 四八―四九
メキシコ 五二一、五二四、五二五
メキシコ問題 六三一
メヂチ家 二四三、コシモ二四三―ロレンツォ二四四、レオ十世二四六
メヂナ 一七三、一七六
メッツ 二九八、五三三―五三五
メディーヴァル 中古 三一、一〇九―
メッテルニヒ 四二八、四三五、四五五、四六五
メートル法採用同盟 六〇五
メナンドロス(メナンダ) 八六
免罪符 インダルゼンス 二六一、二六五
メンデル メンデリズム 五一四
メランヒトン 二五三、二六五
メーリ「加特力」 二八九
メーリ・スチュワート 二八九、二九一
メルカトール 三〇六
メロヴィング家 一五五

モの部

モーア(トーマス) 二五〇―二五四
蒙古 二〇〇、三三三
モスコー大公 三三三

モダーン　現代を見よ
モハメッド　一四〇、一四一、一四三
モハメット五世　六四六
モムゼン　九〇
モンテスキュー　三八四、四〇一
モンロー主義　四三七―四三九、五七一―五七二、六三三、六六八
モリエール　三四四
モルガン　五七〇
モルトケ　五三三
モロッコ事件　六二一、六二四、六三〇、六三八、六四三、六四六、六四九

ヤの部（ワ）

耶蘇會　ゼスイタ派を見よ
ヤーン（體育の祖）　四三六、四三五
ワイマール國民議會　六七四、六九七
ワォシントン（ジョージ）　四〇二
ワグネルの歌劇「ニーベルンゲン」　一三四
ワーグナ（經濟學者）　五九一
ヴスコ・デ・ガマ　三〇二
ワーテルロー　四二七
ワット（ゼームス）　三七六
ワリアーク　ノルマンを見よ
ワルレンスタイン　三九五―
ワルデンセル派　三〇三
ワルトブルグ城　三〇七
ワルトブルグ祭　四三五
ワルハラ（ゲルマニ神話）　一三四

ユの部

唯物主義　四八四―五〇四
ユグノー　三七八
ユグルタ　九五
ユーゴ・スラーヴ　六八二―六八三
ユスチニアヌス大帝　八二、一六八
猶太及び猶太人　三三、九五
猶太教　九四―、一七一
ユートピヤ　無何有郷　三五三―三五四
ユートピヤ社會主義　五七七―五七八
ユトレヒト聯合　三八七
ユトレヒト平和　三四三―三四四
ユートランド戰　六六三
ユーデニッチ　七一三
ユヒテル　ジュピター　六一

ヨの部

ヨーゼフ二世（皇帝）　三九〇
叟那　ヨーナ　四九
ヨハナ（女法皇）　一三三
ヨハネ十二世（法皇）　一三五
ヨハンネス・クリソストム　聖ヨハンネス・クリソストムを見よ

ラの部

ライエル（チャールス）　五〇一
ライスワイク平和　三四一―三四三
ライプチッヒ大學　二五一
ライプチッヒ討論　二六六
ラヴェンナ　一五〇、一六〇
ラヴォワジエー　四八七―四八八
ラウジッツ　二九六
ラウレンチウス・ヴァルラ　ヴァルラを見よ
ラッサール（フェルヂナンド）　五八七―五八九
ラシーヌ　三四四
ラスプーチン（怪僧）　六八八
ラテン民族　六一
ラテン帝國（コンスタンチノープルの）　一九七
ラファイエット　四〇〇、四〇五、四五三
ラファエル　二四六―二四七
ラブラース　四八八
ラブレー（フランス文學者）　二五四
ラホーグ海戰　三三八、三四一
ランケ（レオポルド・フォン）　一一六、四八一
ランシング　六三五
ランスダウン　六二一、六三七、六三八
ランヅクネヒト隊　二二四
ランプ・パーラメント　殘餘議會を見よ
ランプレヒト（カール）　一一七

リの部

リヴィングストン　五六三
リエージ　リュッヂヒ　六六一
リカルドー　四八
リガス（希臘詩人）　四一三、四四一
リッケルト　六一二
離散　ディアスポラ　一〇一
リシュリュウ（カーヂナル）　三三七
リスト（フリードリッヒ）　五六〇―五九一
リチャード一世（イングランド王）　一九五

索引

ルネサンス　復興時代
ルポルタージュ　報道文学
ルンペン
ルンペン人　スラムを見よ
ルンペンプロレタリア　ロープンプロレタリアを見よ
ルンペンプロレタリア（ロープ）　ロープンプロレタリアを見よ
ルンペンプロレタリア
ルンペンプロレタリア文学
ルンペンプロレタリアート　ロープンプロレタリアを見よ
ルンペンプロレタリアート文学　ロープンプロレタリア文学を見よ
ルンペンプロレタリアの文学
ルンペンプロレタリアの文学運動
ルンペンプロレタリアの文学組織
ルンペンプロレタリアの文学組織運動
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（五十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（六十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（七十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（八十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（九十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百二十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百三十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百四十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百五十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百六十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百七十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百八十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（百九十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百二十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百三十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百四十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百五十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百六十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百七十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百八十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（二百九十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百二十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百三十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百四十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百五十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百六十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百七十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百八十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（三百九十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百二十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百三十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百四十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百五十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十五）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十六）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十七）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十八）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百六十九）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七十）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七十一）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七十二）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七十三）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程の概観（四百七十四）
ルンペンプロレタリアの文学組織運動の発展過程

15544

大正九年七月一日印刷
大正九年七月五日發行
大正十四年四月十日第四刷發行

版權所有

著者　京都市岡崎北御所町　坂口昌
發行者　東京市神田區南神保町十六　岩波茂雄
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二　鷲見九市

定價五圓五拾錢

發行所　東京市神田區南神保町十六　岩波書店
電話九段一二八〇番
振替東京二六二四〇番

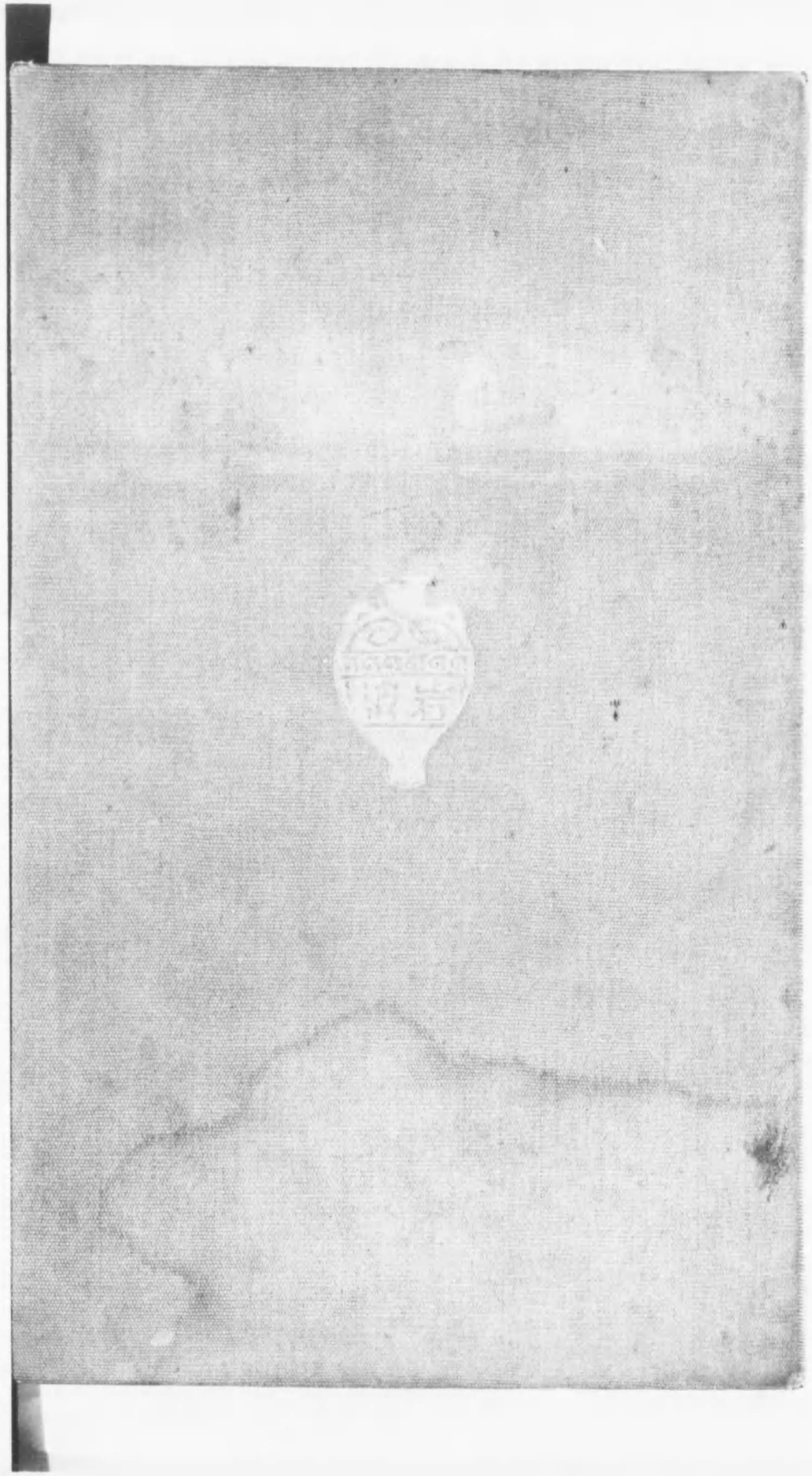
印刷所　秀英舎第一工場

9100
6

索引

機觀世界史潮
ロムバード街　三二
ロムバードと法皇　一三六
ロムバルド都市同盟　二一四（四五）
ロムバルド・ヴェネチヤ　四四
ロー（ジョン）　三二
ローン（プロシヤ將軍）　三六―三七、三九、三九九
ローヤル・ソサイエティ　王立學會　二〇八、二一五
ロラードの亂　四九七
ローラン夫人
ロレンツォ・デ・メヂチ　メヂチ家を見よ

衆議院
2. 3. 14.
圖書館之印

7100-b

終